

蔣山万寿寺跡

旧万寿寺跡第6～10次調査

(第1分冊)

都市計画道路庄の原佐野線（元町工区）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

大分県立埋蔵文化財センター

序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県土木建築部の依頼を受けて実施した都市計画道路庄の原佐野線建設に伴う^{まこさんまんじゅじあと}蔣山万寿寺跡の発掘調査報告書です。

「蔣山万寿寺」は、徳治元年（1306）に豊後国守護大友貞親^{さだちか}が筑前国博多の承天寺^{じょうてんじ}住持^{じゅうじ}であった直翁智侃^{じきおうちかん}を開山に招いて建立した禅宗寺院です。万寿寺は中世の豊後府内で最大規模の敷地を有し、室町時代には十刹に列せられるような、西日本を代表する禅宗寺院のひとつでした。

調査地は国指定史跡「大友氏遺跡」を構成する旧万寿寺跡の境内に該当します。発掘調査の結果、寺院の主要伽藍となるような大規模な建物跡や基壇などは確認できませんでしたが、寺域内の区画に関連する溝や柱穴列などの遺構が発見されました。さらに、大量の瓦や「万寿寺」・「蔣山」・「寮」の刻書土器、「蔣山観音殿」の墨書土器などの出土は、発掘調査地点に大規模な中世寺院が存在したことを考古学的に証明する資料となっています。

また、調査で確認された溝や柱穴列など、寺院の構造に関連する重要な遺構については、道路工法を変更することにより、現地に保存することができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成31年3月29日

大分県立埋蔵文化財センター

所 長 江 田 豊

例 言

1. 本書は平成23～27年度に実施した大分県大分市大字大分に所在する蔭山万寿寺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都市計画道路庄の原佐野線（元町工区）建設に伴い、大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所及び大分土木事務所の依頼を受けて大分県教育庁埋蔵文化財センターが実施した。
3. 周知の埋蔵文化財包蔵地としての名称は「蔭山万寿寺跡」であるが、調査区の呼称及び調査次数の整合を図るため、大分市教育委員会が使用する「旧万寿寺跡」を採用し、平成23年度調査を第6次調査として開始した。発掘調査期間及び調査担当者は以下のとおりである。
 - ・旧万寿寺跡第6次調査 平成23年6月12日～平成24年1月12日（横澤 慈・吉田 寛）
 - ・旧万寿寺跡第7次調査 平成25年6月3日～平成26年1月10日（吉田 寛）
 - ・旧万寿寺跡第8・9次調査 平成26年5月12日～平成27年2月9日（吉田 寛・宮内克己）
 - ・旧万寿寺跡第10次調査 平成27年6月10日～平成28年3月2日（吉田 寛・宮内克己・坂本嘉弘）
4. 発掘調査の実施にあたり、発掘作業及び記録作成、現場管理等を支援業務として民間調査組織に委託した。発掘調査における実測図の作成及び写真撮影は上記調査員の指示のもと下記の支援業務受託者が行った。
 - ・旧万寿寺跡第6次調査 株式会社九州文化財研究所（越知睦和・稲富陽子・尾ノ上尚平・小田貴志）
 - ・旧万寿寺跡第7～10次調査 株式会社木崎工業（奥村義貴・羽田野裕之・石川哲也・宮吉正明・岩尾美保子・斎藤正彰・柴田 剛・倉増美智代・後藤 恵）
5. 出土品の洗浄、注記、接合、実測、遺物写真撮影、トレース等の整理作業は平成26～29年度に株式会社九州文化財総合研究所に委託した。また、重要資料の写真撮影を平成30年度に写測エンジニアリング株式会社大分営業所に委託した。遺構・遺物図版の作成は各調査担当者が行った。
6. 出土遺物及び調査記録は大分県立埋蔵文化財センター（大分市牧緑町1番61号）で保管している。
7. 本書で使用する方位は座標北で、座標値は日本測地系の数値である。
8. 本書で使用する遺構略号は下記のとおりである。
SB（礎石建物・掘立柱建物）、SK（土坑）、SD（溝）、SE（井戸）、ST（墓）、SP（柱穴）、SA（柵列）、SX（遺物集中ブロック及び性格不明遺構）
9. 本書で使用する中世遺構の時期区分は下記文献に準拠し、以下のとおりとする。
I期（14世紀前半）／II期（14世紀中頃～末）／III期（14世紀末～15世紀前半）／IV期（15世紀中頃～後半）／V期（16世紀前半）／VI期（16世紀後半）／VII期（16世紀末葉）
参考文献：大友館研究会編2017『大友館と府内の研究―「大友家年中作法日記」を読む』、東京堂出版
9. 本書の執筆は第1章・第3章を横澤、第4章・第5章・第7章を吉田、第6章を宮内、第9章を吉田・横澤が行った。第2章は坂本の原稿を基に横澤が補筆修正を行った。また、第8章は稗田優生氏（大分県立歴史博物館）に執筆を依頼した。編集は吉田・横澤が行った。

目 次

(第1分冊)

序文 例言 目次

第1章 調査に至る経緯と経過 (横澤慈)	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 旧万寿寺跡推定域の変更の経緯	
第3節 発掘調査・報告書作成の経過	
第4節 調査組織の構成	
第2章 遺跡の立地と環境 (坂本嘉弘・横澤慈)	13
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 旧万寿寺跡第6次調査 (横澤慈)	15
第1節 調査の経過と概要	
第2節 調査区の遺構と層序	
第3節 近世以降の遺構と遺物	
第4節 中世面上層の遺構	
第5節 中世面下層の遺構	
第4章 旧万寿寺跡第7次調査 (吉田寛)	389
第1節 調査の概要	
第2節 遺構と遺物	

(第2分冊)

第5章 旧万寿寺跡第8次調査 (吉田寛)	
第1節 調査の概要	
第2節 遺構と遺物	
第6章 旧万寿寺跡第9次調査 (宮内克己)	
第1節 調査の概要	
第2節 遺構と遺物	
第7章 旧万寿寺跡第10次調査 (吉田寛)	
第1節 調査の概要	
第2節 遺構と遺物	
第8章 理化学分析・保存処理	
第1節 旧万寿寺跡第7次調査出土一括出土銭の保存処理 (稗田優生)	
第9章 総括 (吉田寛・横澤慈)	

遺物一覧表

(第3分冊)

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1-1図	庄の原佐野線と大分市幹線道路網	1	第3-55図	06-SK141 出土遺物実測図 (1/3)	52
第1-2図	国指定史跡大友氏遺跡と庄の原佐野線の位置	2	第3-56図	06-SK145 実測図 (1/30)	52
第1-3図	旧万寿寺跡第6～10次調査区位置 (S=1/2,500)	3	第3-57図	06-SK173 実測図 (1/30)	52
第1-4図	旧万寿寺跡発掘調査状況	5	第3-58図	06-SK173 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	53
第2-1図	蔭山万寿寺跡・中世大友府内町跡と周辺の遺跡	14	第3-59図	06-SK198 実測図 (1/30)	54
第3-1図	旧万寿寺跡第6次調査の位置 (1/15,000)	15	第3-60図	06-SK198 出土遺物実測図 (1/3)	54
第3-2図	旧万寿寺跡第6次調査近世面遺構配置図 (1/250)	16	第3-61図	06-SK199 実測図 (1/30)	54
第3-3図	旧万寿寺跡第6次調査中世面遺構配置図 (1/250)	18	第3-62図	06-SK199 出土遺物実測図 (1/3)	55
第3-4図	旧万寿寺跡第6次調査遺構配置図 (上層 1/250)	19	第3-63図	06-SK200 実測図 (1/40)	55
第3-5図	旧万寿寺跡第6次調査遺構配置図 (下層 1/250)	20	第3-64図	06-SK200 出土遺物実測図 (1/3)	55
第3-6図	旧万寿寺跡第6次調査区土層断面図 (1区南壁 1/50)	25	第3-65図	06-SK202 実測図 (1/60)	56
第3-7図	旧万寿寺跡第6次調査区土層断面図 (1区東壁 1/50)	26	第3-66図	06-SK202 出土遺物実測図 (1/3)	56
第3-8図	旧万寿寺跡第6次調査区土層断面図 (2区北壁 1/50)	27	第3-67図	06-SK208 実測図 (1/40)	57
第3-9図	旧万寿寺跡第6次調査区土層断面図 (2区東壁 1/50)	28	第3-68図	06-SK208 出土遺物実測図① (1/3・1/1)	57
第3-10図	06-SK194 (攪乱) 出土遺物実測図 (1/3)	29	第3-69図	06-SK208 出土遺物実測図② (1/3)	58
第3-11図	06-SD001～010 近世耕作溝群実測図 (1/100)	29	第3-70図	06-SK209 実測図 (1/40)	59
第3-12図	06-SD012～024 実測図 (1/100)	30	第3-71図	06-SK209 出土遺物実測図① (1/3・1/1)	60
第3-13図	06-SD014 出土遺物実測図 (1/1)	30	第3-72図	06-SK209 出土遺物実測図② (1/4)	61
第3-14図	06-SX021 実測図 (1/30)	31	第3-73図	06-SK217 実測図 (1/30)	62
第3-15図	06-SX021 出土遺物実測図 (1/3)	31	第3-74図	06-SK217 出土遺物実測図 (1/3)	62
第3-16図	06-SX025 実測図 (1/30)	31	第3-75図	06-SK219 実測図 (1/30)	62
第3-17図	06-SX025 出土遺物実測図 (1/3)	32	第3-76図	06-SK219 出土遺物実測図 (1/3)	62
第3-18図	06-SX026 実測図 (1/30)	33	第3-77図	06-SK220・260 実測図 (1/30)	63
第3-19図	06-SX026 出土遺物実測図 (1/3)	34	第3-78図	06-SK220 出土遺物実測図 (1/3)	64
第3-20図	06-SB01 実測図 (1/50)	35	第3-79図	06-SK260 出土遺物実測図 (1/3)	64
第3-21図	06-SX037・SX092 実測図 (1/40)	36	第3-80図	06-SK226 実測図 (1/30)	65
第3-22図	06-SX092 出土遺物実測図 (1/3)	36	第3-81図	06-SK226 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	66
第3-23図	06-SK029 実測図 (1/30)	36	第3-82図	06-SK228 実測図 (1/30)	67
第3-24図	06-SK029 出土遺物実測図① (1/3)	37	第3-83図	06-SK228 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	67
第3-25図	06-SK029 出土遺物実測図② (1/3)	38	第3-84図	06-SK235 実測図 (1/40)	68
第3-26図	06-SK035 実測図 (1/30)	39	第3-85図	06-SK235 出土遺物実測図 (1/3)	68
第3-27図	06-SK035 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	40	第3-86図	06-SK236 実測図 (1/30)	69
第3-28図	06-SK036 実測図 (1/30)	40	第3-87図	06-SK236 出土遺物実測図 (1/3)	69
第3-29図	06-SK039 実測図 (1/30)	41	第3-88図	06-SK243 実測図 (1/30)	69
第3-30図	06-SK039 出土遺物実測図 (1/3)	41	第3-89図	06-SK241 実測図 (1/30)	70
第3-31図	06-SK043 実測図 (1/30)	41	第3-90図	06-SK241 出土遺物実測図 (1/3)	70
第3-32図	06-SK048 実測図 (1/30)	42	第3-91図	06-SK248 実測図 (1/30)	70
第3-33図	06-SK054 実測図 (1/30)	42	第3-92図	06-SK248 出土遺物実測図① (1/3)	71
第3-34図	06-SK054 出土遺物実測図 (1/3)	42	第3-93図	06-SK248 出土遺物実測図① (1/3)	72
第3-35図	06-SK061 実測図 (1/30)	43	第3-94図	06-SK248 出土遺物実測図① (1/3)	73
第3-36図	06-SK061 出土遺物実測図 (1/3)	43	第3-95図	06-SK249 実測図 (1/30)	74
第3-37図	06-SK075 実測図 (1/20)	43	第3-96図	06-SK249 出土遺物実測図① (1/3)	75
第3-38図	06-SK075 出土遺物実測図 (1/3)	43	第3-97図	06-SK249 出土遺物実測図② (1/4)	75
第3-39図	06-SK076 実測図 (1/30)	44	第3-98図	06-SK252 実測図 (1/30)	76
第3-40図	06-SK076 出土遺物実測図 (1/3)	44	第3-99図	06-SK252 出土遺物実測図 (1/3)	76
第3-41図	06-SK086 実測図 (1/30)	44	第3-100図	06-SK253 実測図 (1/40)	77
第3-42図	06-SK086 出土遺物実測図 (1/3)	45	第3-101図	06-SK253 出土遺物実測図 (1/3)	77
第3-43図	06-SK087 実測図 (1/30)	45	第3-102図	06-SK258 実測図 (1/30)	78
第3-44図	06-SK089 実測図 (1/30)	46	第3-103図	06-SK259 実測図 (1/30)	78
第3-45図	06-SK089 出土遺物実測図 (1/3)	46	第3-104図	06-SK259 出土遺物実測図 (1/3)	78
第3-46図	06-SK110 実測図 (1/30)	47	第3-105図	06-SK264・SK265・SK266 実測図 (1/30)	79
第3-47図	06-SK110 出土遺物実測図 (1/3)	47	第3-106図	06-SK264 出土遺物実測図 (1/3)	79
第3-48図	06-SK126 実測図 (1/30)	47	第3-107図	06-SK267 実測図 (1/40)	80
第3-49図	06-SK126 出土遺物実測図 (1/3)	48	第3-108図	06-SK267 出土遺物実測図 (1/3・1/2)	80
第3-50図	06-SK133 実測図 (1/30)	49	第3-109図	06-SK268 実測図 (1/30)	81
第3-51図	06-SK133 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	49	第3-110図	06-SK268 出土遺物実測図① (1/3・1/2)	82
第3-52図	06-SK140 実測図 (1/30)	50	第3-111図	06-SK268 出土遺物実測図② (1/4)	83
第3-53図	06-SK141・SK142 実測図 (1/40)	51	第3-112図	06-SK269 実測図 (1/30)	83
第3-54図	06-SK141・SK142 土層断面図 (1/30)	51	第3-113図	06-SK269 出土遺物実測図① (1/3)	84

第 3 - 114 图	06-SK269 出土遺物実測図② (1/1)	85	第 3 - 175 图	06-SX100 出土遺物実測図⑥ (1/3)	126
第 3 - 115 图	06-SK274 実測図 (1/30)	85	第 3 - 176 图	06-SX100 出土遺物実測図⑦ (1/3)	127
第 3 - 116 图	06-SK281 実測図 (1/30)	85	第 3 - 177 图	06-SX237 実測図 (1/5)	128
第 3 - 117 图	06-SK281 出土遺物実測図 (1/3)	86	第 3 - 178 图	06-SX237 出土遺物実測図 (1/1)	129
第 3 - 118 图	06-SK299 実測図 (1/30)	86	第 3 - 179 图	06-SX287 実測図 (1/30)	130
第 3 - 119 图	06-SK324 実測図 (1/30)	87	第 3 - 180 图	06-SX287 出土遺物実測図 (1/3)	131
第 3 - 120 图	06-SK324 出土遺物実測図 (1/3)	87	第 3 - 181 图	06-SX291 実測図 (1/30)	132
第 3 - 121 图	06-SD053 実測図 (1/30)	88	第 3 - 182 图	06-SX291 出土遺物実測図 (1/3)	133
第 3 - 122 图	06-SD058 実測図 (1/40)	88	第 3 - 183 图	06-SX309 実測図 (1/30)	134
第 3 - 123 图	06-SD071・072 実測図 (1/40)	89	第 3 - 184 图	06-SX309 出土遺物実測図① (1/3)	135
第 3 - 124 图	06-SD072 出土遺物実測図 (1/3)	89	第 3 - 185 图	06-SX309 出土遺物実測図② (1/3)	136
第 3 - 125 图	06-SD101 実測図 (1/30)	90	第 3 - 186 图	06-SX309 出土遺物実測図③ (1/3)	137
第 3 - 126 图	06-SD117 実測図 (1/30)	90	第 3 - 187 图	06-SX310 実測図 (1/30)	138
第 3 - 127 图	06-SD117 出土遺物実測図 (1/3)	90	第 3 - 188 图	06-SX310 出土遺物実測図① (1/3)	139
第 3 - 128 图	06-SD193 実測図 (1/30)	91	第 3 - 189 图	06-SX310 出土遺物実測図② (1/3)	140
第 3 - 129 图	06-SD195 実測図 (1/30)	91	第 3 - 190 图	06-SX310 出土遺物実測図③ (1/3・1/1)	141
第 3 - 130 图	06-SD195 出土遺物実測図 (1/3)	91	第 3 - 191 图	06-柱穴遺構実測図 (1/30)	142
第 3 - 131 图	06-SD215 実測図 (1/30)	92	第 3 - 192 图	06-柱穴遺構出土遺物実測図 (1/3)	142
第 3 - 132 图	06-SD215 出土遺物実測図 (1/3)	92	第 3 - 193 图	06-SB02 実測図 (1/40)	143
第 3 - 133 图	06-SD231 実測図 (1/30)	92	第 3 - 194 图	06-SA01 実測図 (1/30)	143
第 3 - 134 图	06-SD302 実測図 (1/60)	93	第 3 - 195 图	06-SK097 実測図 (1/80)	144
第 3 - 135 图	06-SD302A 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	94	第 3 - 196 图	06-SK097 出土遺物実測図① (1/3)	145
第 3 - 136 图	06-SD302B 出土遺物実測図① (1/3)	95	第 3 - 197 图	06-SK097 出土遺物実測図② (1/3)	146
第 3 - 137 图	06-SD302B 出土遺物実測図② (1/3)	96	第 3 - 198 图	06-SK097 出土遺物実測図③ (1/3)	147
第 3 - 138 图	06-SD302B 出土遺物実測図③ (1/3)	97	第 3 - 199 图	06-SK097 出土遺物実測図④ (1/3)	148
第 3 - 139 图	06-SD302B 出土遺物実測図④ (1/3)	98	第 3 - 200 图	06-SK097 出土遺物実測図⑤ (1/3)	149
第 3 - 140 图	06-SD302B 出土遺物実測図⑤ (1/3)	99	第 3 - 201 图	06-SK097 出土遺物実測図⑥ (1/3・1/1)	150
第 3 - 141 图	06-SD302B 出土遺物実測図⑥ (1/3)	100	第 3 - 202 图	06-SK097 出土遺物実測図⑦ (1/3)	151
第 3 - 142 图	06-SD302B 出土遺物実測図⑦ (1/3・1/1)	101	第 3 - 203 图	06-SK097 出土遺物実測図⑧ (1/3)	152
第 3 - 143 图	06-SD302B 出土遺物実測図⑧ (1/2・1/3・1/4)	102	第 3 - 204 图	06-SK097 出土遺物実測図⑨ (1/3)	153
第 3 - 144 图	06-SD302 (A・B 一括) 出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)	103	第 3 - 205 图	06-SK097 出土遺物実測図⑩ (1/4)	154
第 3 - 145 图	06-SE271 実測図 (1/40)	104	第 3 - 206 图	06-SK097 出土遺物実測図⑪ (1/4)	155
第 3 - 146 图	06-SE271 出土遺物実測図① (1/3)	105	第 3 - 207 图	06-SK097 出土遺物実測図⑫ (1/4)	156
第 3 - 147 图	06-SE271 出土遺物実測図② (1/3・1/1・1/2)	106	第 3 - 208 图	06-SK097 出土遺物実測図⑬ (1/4)	157
第 3 - 148 图	06-ST094 実測図 (1/30)	107	第 3 - 209 图	06-SK097 出土遺物実測図⑭ (1/4)	158
第 3 - 149 图	06-ST094 出土遺物実測図 (1/3)	107	第 3 - 210 图	06-SK097 出土遺物実測図⑮ (1/4)	159
第 3 - 150 图	06-SX031 実測図 (1/30)	108	第 3 - 211 图	06-SK097 出土遺物実測図⑯ (1/4)	160
第 3 - 151 图	06-SX032 実測図 (1/30)	108	第 3 - 212 图	06-SK097 出土遺物実測図⑰ (1/4)	161
第 3 - 152 图	06-SX032 出土遺物実測図 (1/4)	109	第 3 - 213 图	06-SK097 出土遺物実測図⑱ (1/4)	162
第 3 - 153 图	06-SX033 実測図 (1/30)	110	第 3 - 214 图	06-SK097 出土遺物実測図⑲ (1/4)	163
第 3 - 154 图	06-SX033 出土遺物実測図 (1/3)	110	第 3 - 215 图	06-SK097 出土遺物実測図⑳ (1/4)	164
第 3 - 155 图	06-SX049 実測図 (1/30)	111	第 3 - 216 图	06-SK097 出土遺物実測図㉑ (1/4)	165
第 3 - 156 图	06-SX049 出土遺物実測図 (1/3・1/1)	112	第 3 - 217 图	06-SK097 出土遺物実測図㉒ (1/4)	166
第 3 - 157 图	06-SX082 実測図 (1/30)	113	第 3 - 218 图	06-SK097 出土遺物実測図㉓ (1/4)	167
第 3 - 158 图	06-SX082 出土遺物実測図 (1/3)	113	第 3 - 219 图	06-SK097 出土遺物実測図㉔ (1/4)	168
第 3 - 159 图	06-SX083 実測図 (1/30)	114	第 3 - 220 图	06-SK097 出土遺物実測図㉕ (1/4)	169
第 3 - 160 图	06-SX083 出土遺物実測図 (1/3)	114	第 3 - 221 图	06-SK097 出土遺物実測図㉖ (1/4)	170
第 3 - 161 图	06-SX084 実測図 (1/30)	115	第 3 - 222 图	06-SK097 出土遺物実測図㉗ (1/4)	171
第 3 - 162 图	06-SX084 出土遺物実測図① (1/3)	115	第 3 - 223 图	06-SK097 出土遺物実測図㉘ (1/4)	172
第 3 - 163 图	06-SX084 出土遺物実測図② (1/4)	116	第 3 - 224 图	06-SK097 出土遺物実測図㉙ (1/4)	173
第 3 - 164 图	06-SX084 出土遺物実測図③ (1/4)	117	第 3 - 225 图	06-SK097 出土遺物実測図㉚ (1/4)	174
第 3 - 165 图	06-SX095 実測図 (1/40)	118	第 3 - 226 图	06-SK097 出土遺物実測図㉛ (1/4)	175
第 3 - 166 图	06-SX095 出土遺物実測図 (1/3)	118	第 3 - 227 图	06-SK097 出土遺物実測図㉜ (1/4)	176
第 3 - 167 图	06-SX096 実測図 (1/30)	119	第 3 - 228 图	06-SK097 出土遺物実測図㉝ (1/4)	177
第 3 - 168 图	06-SX096 出土遺物実測図 (1/3)	119	第 3 - 229 图	06-SK097 出土遺物実測図㉞ (1/4)	178
第 3 - 169 图	06-SX100 実測図 (1/80)	120	第 3 - 230 图	06-SK097 出土遺物実測図㉟ (1/4)	179
第 3 - 170 图	06-SX100 出土遺物実測図① (1/3)	121	第 3 - 231 图	06-SK097 出土遺物実測図㊱ (1/4)	180
第 3 - 171 图	06-SX100 出土遺物実測図② (1/3)	122	第 3 - 232 图	06-SK097 下層出土遺物実測図① (1/3)	182
第 3 - 172 图	06-SX100 出土遺物実測図③ (1/3)	123	第 3 - 233 图	06-SK097 下層出土遺物実測図② (1/3)	183
第 3 - 173 图	06-SX100 出土遺物実測図④ (1/4)	124	第 3 - 234 图	06-SK097 下層出土遺物実測図③ (1/3)	184
第 3 - 174 图	06-SX100 出土遺物実測図⑤ (1/3)	125	第 3 - 235 图	06-SK097 下層出土遺物実測図④ (1/3)	185
			第 3 - 236 图	06-SK097 下層出土遺物実測図⑤ (1/4)	186

第3-237图	06-SK097 下層出土遺物実測図⑥ (1/4)	187	第3-299图	06-SK313 実測図 (1/30)	242
第3-238图	06-SK097 下層出土遺物実測図⑦ (1/4)	188	第3-300图	06-SK313 出土遺物実測図① (1/3)	243
第3-239图	06-SK097 下層出土遺物実測図⑧ (1/4)	189	第3-301图	06-SK313 出土遺物実測図② (1/5)	244
第3-240图	06-SK097 下層出土遺物実測図⑨ (1/4)	190	第3-302图	06-SK313 出土遺物実測図③ (1/4)	245
第3-241图	06-SK097 下層出土遺物実測図⑩ (1/4)	191	第3-303图	06-SK313 出土遺物実測図④ (1/3·1/1)	246
第3-242图	06-SK097 下層出土遺物実測図⑪ (1/4)	192	第3-304图	06-SK314 実測図 (1/30)	246
第3-243图	06-SK097 下層出土遺物実測図⑫ (1/4)	193	第3-305图	06-SK317 実測図 (1/30)	247
第3-244图	06-SK097 下層出土遺物実測図⑬ (1/4)	194	第3-306图	06-SK317 出土遺物実測図 (1/1)	247
第3-245图	06-SK097 下層出土遺物実測図⑭ (1/4)	195	第3-307图	06-SK323 実測図 (1/30)	248
第3-246图	06-SK097 下層出土遺物実測図⑮ (1/4)	196	第3-308图	06-SK323 出土遺物実測図 (1/1)	248
第3-247图	06-SK097 下層出土遺物実測図⑯ (1/4)	197	第3-309图	06-SK326 実測図 (1/30)	248
第3-248图	06-SK120 実測図 (1/30)	197	第3-310图	06-SK326 出土遺物実測図 (1/1)	249
第3-249图	06-SK120 出土遺物実測図 (1/3)	197	第3-311图	06-SK328 実測図 (1/30)	249
第3-250图	06-SK129 実測図 (1/40)	198	第3-312图	06-SK329 実測図 (1/30)	250
第3-251图	06-SK129 出土遺物実測図 (1/3·1/1)	199	第3-313图	06-SK333 実測図 (1/30)	250
第3-252图	06-SK131 実測図 (1/120)	201	第3-314图	06-SK335 実測図 (1/30)	251
第3-253图	06-SK131 南北土層断面図 (1/50)	202	第3-315图	06-SK335 出土遺物実測図① (1/3)	252
第3-254图	06-SK131 東西土層断面図 (1/50)	203	第3-316图	06-SK335 出土遺物実測図② (1/3)	253
第3-255图	06-SK131 石材等出土状況 (1/50)	204	第3-317图	06-SD090 実測図 (1/100·1/50)	254
第3-256图	06-SK131 出土遺物実測図① (1/3)	205	第3-318图	06-SD090 出土遺物実測図① (1/3)	255
第3-257图	06-SK131 出土遺物実測図② (1/3)	206	第3-319图	06-SD090 出土遺物実測図② (1/3·1/1)	256
第3-258图	06-SK131 出土遺物実測図③ (1/3)	207	第3-320图	06-SD093 実測図 (1/80)	257
第3-259图	06-SK131 出土遺物実測図④ (1/3)	208	第3-321图	06-SD093 出土遺物実測図 (1/200)	258
第3-260图	06-SK131 出土遺物実測図⑤ (1/3)	209	第3-322图	06-SD093 出土遺物実測図① (1/3)	259
第3-261图	06-SK131 出土遺物実測図⑥ (1/3)	210	第3-323图	06-SD093 出土遺物実測図② (1/3)	260
第3-262图	06-SK131 出土遺物実測図⑦ (1/3)	211	第3-324图	06-SD106 実測図 (1/60)	261
第3-263图	06-SK131 出土遺物実測図⑧ (1/3)	212	第3-325图	06-SD106 出土遺物実測図 (1/3)	261
第3-264图	06-SK131 出土遺物実測図⑨ (1/3)	213	第3-326图	06-SD130 実測図 (1/30)	262
第3-265图	06-SK131 出土遺物実測図⑩ (1/3)	214	第3-327图	06-SD130 出土遺物実測図 (1/3)	263
第3-266图	06-SK131 出土遺物実測図⑪ (1/3)	215	第3-328图	06-SD165 実測図 (1/80)	264
第3-267图	06-SK131 出土遺物実測図⑫ (1/3)	216	第3-329图	06-SD165 出土遺物実測図 (1/3)	265
第3-268图	06-SK131 出土遺物実測図⑬ (1/3)	217	第3-330图	06-SD184 実測図 (1/50)	266
第3-269图	06-SK131 出土遺物実測図⑭ (1/3)	218	第3-331图	06-SD184 出土遺物実測図 (1/3)	267
第3-270图	06-SK131 出土遺物実測図⑮ (1/3)	219	第3-332图	06-SD221 実測図 (1/120)	268
第3-271图	06-SK131 出土遺物実測図⑯ (1/3)	220	第3-333图	06-SD221 瓦等出土状況 (1/20)	269
第3-272图	06-SK131 出土遺物実測図⑰ (1/3·1/4·1/2)	221	第3-334图	06-SD221 出土遺物実測図① (1/3)	270
第3-273图	06-SK131 出土遺物実測図⑱ (1/1)	222	第3-335图	06-SD221 出土遺物実測図② (1/3)	271
第3-274图	06-SK131 出土遺物実測図⑲ (1/3)	223	第3-336图	06-SD221 出土遺物実測図③ (1/3)	272
第3-275图	06-SK131 出土遺物実測図⑳ (1/3)	224	第3-337图	06-SD221 出土遺物実測図④ (1/4)	273
第3-276图	06-SK131 出土遺物実測図㉑ (1/3)	225	第3-338图	06-SD221 出土遺物実測図⑤ (1/3)	274
第3-277图	06-SK131 出土遺物実測図㉒ (1/4)	226	第3-339图	06-SD221 出土遺物実測図⑥ (1/3)	275
第3-278图	06-SK131 出土遺物実測図㉓ (1/4)	227	第3-340图	06-SD221 出土遺物実測図⑦ (1/3)	276
第3-279图	06-SK131 出土遺物実測図㉔ (1/4)	228	第3-341图	06-SD221 出土遺物実測図⑧ (1/3)	277
第3-280图	06-SK131 出土遺物実測図㉕ (1/4)	229	第3-342图	06-SD221 出土遺物実測図⑨ (1/3)	278
第3-281图	06-SK131 出土遺物実測図㉖ (1/4)	230	第3-343图	06-SD221 出土遺物実測図⑩ (1/3)	279
第3-282图	06-SK131 出土遺物実測図㉗ (1/3)	231	第3-344图	06-SD221 出土遺物実測図⑪ (1/3)	280
第3-283图	06-SK131 下層出土遺物実測図① (1/3·1/2)	232	第3-345图	06-SD221 出土遺物実測図⑫ (1/3)	281
第3-284图	06-SK131 下層出土遺物実測図② (1/3)	233	第3-346图	06-SD221 出土遺物実測図⑬ (1/3)	282
第3-285图	06-SK147 実測図 (1/30)	234	第3-347图	06-SD221 出土遺物実測図⑭ (1/3)	283
第3-286图	06-SK164 実測図 (1/30)	234	第3-348图	06-SD221 出土遺物実測図⑮ (1/3)	284
第3-287图	06-SK166 実測図 (1/60)	235	第3-349图	06-SD221 出土遺物実測図⑯ (1/3)	285
第3-288图	06-SK166 出土遺物実測図 (1/3)	235	第3-350图	06-SD221 出土遺物実測図⑰ (1/3)	286
第3-289图	06-SK185 実測図 (1/30)	236	第3-351图	06-SD221 出土遺物実測図⑱ (1/3)	287
第3-290图	06-SK185 出土遺物実測図 (1/3)	236	第3-352图	06-SD221 出土遺物実測図⑲ (1/3)	288
第3-291图	06-SK272 実測図 (1/30)	237	第3-353图	06-SD221 出土遺物実測図⑳ (1/3)	289
第3-292图	06-SK272 出土遺物実測図 (1/3)	237	第3-354图	06-SD221 出土遺物実測図㉑ (1/3)	290
第3-293图	06-SK273 実測図 (1/30)	238	第3-355图	06-SD221 出土遺物実測図㉒ (1/3)	291
第3-294图	06-SK273 出土遺物実測図 (1/3)	239	第3-356图	06-SD221 出土遺物実測図㉓ (1/3)	292
第3-295图	06-SK303 実測図 (1/30)	240	第3-357图	06-SD221 出土遺物実測図㉔ (1/3)	294
第3-296图	06-SK303 出土遺物実測図 (1/3)	240	第3-358图	06-SD221 出土遺物実測図㉕ (1/3)	295
第3-297图	06-SK306 実測図 (1/30)	240	第3-359图	06-SD221 出土遺物実測図㉖ (1/3)	296
第3-298图	06-SK311 実測図 (1/30)	241	第3-360图	06-SD221 出土遺物実測図㉗ (1/4)	297

第3-361図	06-SD221 出土遺物実測図⑳ (1/3)	298	第3-423図	06-4層出土遺物実測図② (1/3・1/4)	354
第3-362図	06-SD221 出土遺物実測図㉑ (1/3)	299	第3-424図	06-4層出土遺物実測図③ (1/3)	355
第3-363図	06-SD221 出土遺物実測図㉒ (1/4)	300	第3-425図	06-4層出土遺物実測図④ (1/3)	356
第3-364図	06-SD221 出土遺物実測図㉓ (1/4)	301	第3-426図	06-4層出土遺物実測図⑤ (1/3)	357
第3-365図	06-SD221 出土遺物実測図㉔ (1/4)	302	第3-427図	06-4層出土遺物実測図⑥ (1/3)	358
第3-366図	06-SD221 出土遺物実測図㉕ (1/4)	303	第3-428図	06-4層出土遺物実測図⑦ (1/3)	359
第3-367図	06-SD221 出土遺物実測図㉖ (1/4)	304	第3-429図	06-4層出土遺物実測図⑧ (1/3)	360
第3-368図	06-SD221 出土遺物実測図㉗ (1/4)	305	第3-430図	06-4層出土遺物実測図⑨ (1/3)	361
第3-369図	06-SD221 出土遺物実測図㉘ (1/4)	306	第3-431図	06-4層出土遺物実測図⑩ (1/2・1/1)	362
第3-370図	06-SD221 出土遺物実測図㉙ (1/4)	307	第3-432図	06-4層出土遺物実測図⑪ (1/1)	363
第3-371図	06-SD221 出土遺物実測図㉚ (1/4)	308	第3-433図	06-4'層出土遺物実測図① (1/3)	364
第3-372図	06-SD221 出土遺物実測図㉛ (1/4)	309	第3-434図	06-4'層出土遺物実測図② (1/3)	365
第3-373図	06-SD221 出土遺物実測図㉜ (1/4)	310	第3-435図	06-4'層出土遺物実測図③ (1/3)	366
第3-374図	06-SD221 出土遺物実測図㉝ (1/4)	311	第3-436図	06-4'層出土遺物実測図④ (1/3)	367
第3-375図	06-SD221 出土遺物実測図㉞ (1/4)	312	第3-437図	06-4'層出土遺物実測図⑤ (1/3)	368
第3-376図	06-SD221 出土遺物実測図㉟ (1/4)	313	第3-438図	06-4'層出土遺物実測図⑥ (1/3)	369
第3-377図	06-SD221 出土遺物実測図㊱ (1/4)	314	第3-439図	06-4'層出土遺物実測図⑦ (1/3)	370
第3-378図	06-SD221 出土遺物実測図㊲ (1/3)	315	第3-440図	06-4'層出土遺物実測図⑧ (1/4)	371
第3-379図	06-SD221 出土遺物実測図㊳ (1/2)	316	第3-441図	06-4'層出土遺物実測図⑨ (1/4)	372
第3-380図	06-SD221 出土遺物実測図㊴ (1/1)	317	第3-442図	06-4'層出土遺物実測図⑩ (1/4)	373
第3-381図	06-SD221 下層出土遺物実測図 (1/3)	318	第3-443図	06-4'層出土遺物実測図⑪ (1/4)	374
第3-382図	06-SD282 実測図 (1/50)	319	第3-444図	06-4'層出土遺物実測図⑫ (1/4)	375
第3-383図	06-SD282 出土遺物実測図 (1/3)	320	第3-445図	06-4'層出土遺物実測図⑬ (1/4)	376
第3-384図	06-SD288 実測図 (1/50)	321	第3-446図	06-4'層出土遺物実測図⑭ (1/4)	377
第3-385図	06-SD288 出土遺物実測図① (1/3)	322	第3-447図	06-4'層出土遺物実測図⑮ (1/4)	378
第3-386図	06-SD288 出土遺物実測図② (1/3)	323	第3-448図	06-4'層出土遺物実測図⑯ (1/4)	379
第3-387図	06-SD288 出土遺物実測図③ (1/3)	324	第3-449図	06-4'層出土遺物実測図⑰ (1/3)	380
第3-388図	06-SD288 出土遺物実測図④ (1/3)	325	第3-450図	06-4'層出土遺物実測図⑱ (1/3・1/1)	381
第3-389図	06-SD288 出土遺物実測図⑤ (1/1)	326	第3-451図	06-4'層出土遺物実測図⑲ (1/1)	382
第3-390図	06-SD288 出土遺物実測図⑥ (1/1)	327	第3-452図	06-5層出土遺物実測図① (1/3・1/2)	383
第3-391図	06-SD345 実測図 (1/50)	328	第3-453図	06-5層出土遺物実測図② (1/4)	384
第3-392図	06-SD345 出土遺物実測図① (1/3)	329	第3-454図	06-調査区出土遺物実測図① (1/3)	385
第3-393図	06-SD345 出土遺物実測図② (1/3)	330	第3-455図	06-調査区出土遺物実測図② (1/3・1/2・1/1)	386
第3-394図	06-SE167 実測図 (1/40)	331	第3-456図	06-調査区出土遺物実測図③ (1/4)	387
第3-395図	06-SE167 出土遺物実測図 (1/3)	331	第3-457図	06-調査区出土遺物実測図④ (1/4)	388
第3-396図	06-SE283 実測図 (1/40)	332	第4-1図	旧万寿寺跡第7次調査の位置 (1/5,000)	389
第3-397図	06-SE283 出土遺物実測図 (1/3)	333	第4-2図	旧万寿寺跡第7次調査遺構配置図 (1/200)	391
第3-398図	06-SE312 実測図 (1/50)	334	第4-3図	攪乱の位置と旧調査区との関係 (1/300)	392
第3-399図	06-SE312 出土遺物実測図① (1/3・1/1)	335	第4-4図	旧万寿寺跡第7次調査土層 (1/80)	393
第3-400図	06-SE312 出土遺物実測図② (1/3)	336	第4-5図	07-SD070・07-SD090 実測図 (1/80、土層図は1/30)	395
第3-401図	06-SE322 実測図 (1/50)	337	第4-6図	07-SD070 出土遺物実測図 (1/3、1/4)	396
第3-402図	06-SE322 出土遺物実測図 (1/3)	338	第4-7図	07-SD090 出土遺物実測図① (1/3)	397
第3-403図	06-SE330 実測図 (1/50)	339	第4-8図	07-SD090 出土遺物実測図② (1/4、1/3)	398
第3-404図	06-SE330 出土遺物実測図 (1/3)	340	第4-9図	07-SD073 出土遺物実測図 (1/3、1/4)	399
第3-405図	06-ST045 実測図 (1/30)	341	第4-10図	07-SD288 実測図 (1/80、1/40)	400
第3-406図	06-ST045 出土遺物実測図 (1/3)	341	第4-11図	07-SD288 土層実測図 (1/40)	401
第3-407図	06-ST143 実測図 (1/30)	341	第4-12図	07-SD288 出土遺物実測図① (1/3)	403
第3-408図	06-ST143 出土遺物実測図 (1/3)	342	第4-13図	07-SD288 出土遺物実測図② (1/3)	404
第3-409図	06-ST144 実測図 (1/30)	342	第4-14図	07-SD288 出土遺物実測図③ (1/3)	405
第3-410図	06-ST144 出土遺物実測図 (1/3)	342	第4-15図	07-SD288 出土遺物実測図④ (1/3)	406
第3-411図	06-ST159 実測図 (1/30)	343	第4-16図	07-SD288 出土遺物実測図⑤ (1/3、1/4)	407
第3-412図	06-SX134 実測図 (1/30)	344	第4-17図	07-SD288 出土遺物実測図⑥ (1/3、1/1)	408
第3-413図	06-SX134 出土遺物実測図① (1/3)	345	第4-18図	07-SD288 出土遺物実測図⑦ (1/1)	409
第3-414図	06-SX134 出土遺物実測図② (1/4)	346	第4-19図	07-SD288 出土遺物実測図⑧ (1/1)	410
第3-415図	06-SX134 出土遺物実測図③ (1/4)	347	第4-20図	07-SD288 出土遺物実測図⑨ (1/1)	411
第3-416図	06-SX300 実測図 (1/5)	348	第4-21図	07-SD288 出土遺物実測図⑩ (1/1)	412
第3-417図	06-SX300 出土遺物実測図 (1/1)	348	第4-22図	07-SK001 実測図 (1/40)	413
第3-418図	06-柱穴遺構実測図 (1/30)	349	第4-23図	07-SK001 出土遺物実測図① (1/3)	414
第3-419図	06-柱穴遺構出土遺物実測図 (1/3)	349	第4-24図	07-SK001 出土遺物実測図② (1/4、1/8)	415
第3-420図	06-1～3層出土遺物実測図① (1/3・1/1)	351	第4-25図	07-SK002 実測図 (1/40)	416
第3-421図	06-1～3層出土遺物実測図② (1/3・1/2・1/1)	352	第4-26図	07-SK002 出土遺物実測図 (1/3、1/4、1/8)	417
第3-422図	06-4層出土遺物実測図① (1/3)	353	第4-27図	07-SK003 実測図 (1/40)	418

第4-28図	07-SK003 出土遺物実測図 (1/3、1/4) ……………	419
第4-29図	07-SK004a 実測図 (1/40) ……………	420
第4-30図	07-SK004 出土遺物実測図 (1/3、1/4、1/8) ……………	421
第4-31図	07-SK005 実測図 (1/40) ……………	422
第4-32図	07-SK005 出土遺物実測図 (1/3、1/4、1/8) ……………	422
第4-33図	07-SK006 実測図 (1/40) ……………	423
第4-34図	07-SK006 出土遺物実測図 (1/3、1/4、1/8) ……………	424
第4-35図	07-SK010 実測図 (1/40) ……………	425
第4-36図	07-SK010 出土遺物実測図 (1/3) ……………	425
第4-37図	07-SK022 実測図 (1/40) ……………	425
第4-38図	07-SK022 出土遺物実測図 (1/3、1/4) ……………	426
第4-39図	07-SK024 実測図 (1/40) ……………	426
第4-40図	07-SK024 出土遺物実測図 (1/3、1/4) ……………	427
第4-41図	07-SK034 実測図 (1/40) ……………	428
第4-42図	07-SK034 出土遺物実測図 (1/3) ……………	428
第4-43図	07-SK039 実測図 (1/40) ……………	428
第4-44図	07-SK039 出土遺物実測図 (1/3、1/4) ……………	429
第4-45図	07-SK042 実測図 (1/40) ……………	430
第4-46図	07-SK042 出土遺物実測図 (1/3、1/4) ……………	430
第4-47図	07-SK053 出土遺物実測図 (1/4) ……………	431
第4-48図	07-SK056 実測図 (1/40) ……………	431
第4-49図	07-SK056 出土遺物実測図 (1/3、1/4) ……………	432
第4-50図	07-SK062 実測図 (1/30) ……………	433
第4-51図	07-SK062 出土遺物実測図 (1/3) ……………	433
第4-52図	07-SK064 実測図 (1/40) ……………	434
第4-53図	07-SK064 出土遺物実測図① (1/3) ……………	435
第4-54図	07-SK064 出土遺物実測図② (1/3) ……………	436
第4-55図	07-SK064 出土遺物実測図③ (1/3) ……………	437
第4-56図	07-SK064 出土遺物実測図④ (1/3) ……………	438
第4-57図	07-SK064 出土遺物実測図⑤ (1/3、1/1) ……………	439
第4-58図	07-SK115 実測図 (1/40) ……………	439
第4-59図	07-SK115 出土遺物実測図 (1/3) ……………	440
第4-60図	07-SE086 実測図 (1/50) ……………	441
第4-61図	07-SE086 出土遺物実測図 (1/3) ……………	441
第4-62図	07-SE087 実測図 (1/50) ……………	442
第4-63図	07-SE087 出土遺物実測図 (1/3、1/1) ……………	443
第4-64図	07-S008 出土遺物実測図 (1/3) ……………	444
第4-65図	07-SE107 実測図 (1/50) ……………	445
第4-66図	07-SE107 出土遺物実測図 (1/3) ……………	445
第4-67図	07-SE1002 実測図 (1/50) ……………	446
第4-68図	07-SE1002 出土遺物実測図 (1/3) ……………	446
第4-69図	07-ST004b 実測図 (1/30) ……………	447
第4-70図	07-ST004b 出土遺物実測図 (1/3) ……………	447
第4-71図	07-ST020 実測図 (1/30) ……………	448
第4-72図	07-ST020 出土遺物実測図 (1/3) ……………	449
第4-73図	07-ST035 実測図 (1/30) ……………	450
第4-74図	07-ST035 出土遺物実測図 (1/3) ……………	450
第4-75図	07-ST045 実測図 (1/30) ……………	451
第4-76図	07-ST045 出土遺物実測図 (1/3、1/1) ……………	451
第4-77図	07-ST051 実測図 (1/30) ……………	452
第4-78図	07-ST051 出土遺物実測図 (1/3) ……………	452
第4-79図	07-ST076 実測図 (1/30) ……………	453
第4-80図	07-ST076 出土遺物実測図 (1/3) ……………	453
第4-81図	07-ST078 実測図 (1/30) ……………	454
第4-82図	07-ST078 出土遺物実測図 (1/3) ……………	454
第4-83図	07-ST080 実測図 (1/30) ……………	455
第4-84図	07-ST081 実測図 (1/30) ……………	455
第4-85図	07-ST081 出土遺物実測図 (1/3) ……………	455
第4-86図	07-ST082 実測図 (1/30) ……………	456
第4-87図	07-ST082 出土遺物実測図① (1/3) ……………	457
第4-88図	07-ST082 出土遺物実測図② (1/3) ……………	458
第4-89図	07-ST082 出土遺物実測図③ (1/3) ……………	459
第4-90図	07-ST083 実測図 (1/30) ……………	460
第4-91図	07-ST083 出土遺物実測図① (1/3) ……………	460
第4-92図	07-ST083 出土遺物実測図② (1/3) ……………	461
第4-93図	07-ST083 出土遺物実測図③ (1/3) ……………	461
第4-94図	07-ST084 a・07-ST084b 実測図 (1/30) ……………	462
第4-95図	07-ST084 a 出土遺物実測図 (1/3) ……………	462
第4-96図	07-ST084b 出土遺物実測図 (1/3) ……………	463
第4-97図	07-ST092 実測図 (1/30) ……………	464
第4-98図	07-ST092 出土遺物実測図 (1/3、1/1) ……………	464
第4-99図	07-ST108 実測図 (1/30) ……………	465
第4-100図	07-ST108 出土遺物実測図 (1/3) ……………	465
第4-101図	07-ST110 実測図 (1/30) ……………	466
第4-102図	07-ST110 出土遺物実測図① (1/3) ……………	467
第4-103図	07-ST110 出土遺物実測図② (1/3) ……………	468
第4-104図	07-ST110 出土遺物実測図③ (1/3) ……………	469
第4-105図	07-ST110 出土遺物実測図④ (1/3) ……………	470
第4-106図	07-ST110 出土遺物実測図⑤ (1/3) ……………	471
第4-107図	07-ST120 実測図 (1/30) ……………	472
第4-108図	07-ST120 出土遺物実測図① (1/3) ……………	473
第4-109図	07-ST120 出土遺物実測図② (1/3) ……………	474
第4-110図	07-ST120 出土遺物実測図③ (1/3) ……………	475
第4-111図	07-ST125 実測図 (1/30) ……………	476
第4-112図	07-ST125 出土遺物実測図 (1/3) ……………	476
第4-113図	07-ST126 実測図 (1/30) ……………	477
第4-114図	07-SX068 実測図 (1/30) ……………	478
第4-115図	07-SX068 出土遺物実測図 (1/1) ……………	478
第4-116図	07-SX100 実測図 (1/10) ……………	479
第4-117図	07-SX100 出土遺物実測図① (錢塊1・1/3) ……………	480
第4-118図	07-SX100 出土遺物実測図② (錢塊1・1/2) ……………	481
第4-119図	07-SX100 出土遺物実測図③ (錢塊2・1/3) ……………	482
第4-120図	07-SX100 出土遺物実測図④ (錢塊2・1/2) ……………	483
第4-121図	07-SX100 出土遺物実測図⑤ (錢塊1のA面、1/1) ……………	484
第4-122図	07-SX100 出土遺物実測図⑥ (錢塊1のB面、1/1) ……………	485
第4-123図	07-SX100 出土遺物実測図⑦ (錢塊2のA面、1/1) ……………	486
第4-124図	07-SX100 出土遺物実測図⑧ (錢塊2のB面、1/1) ……………	487
第4-125図	07-SX100 出土遺物実測図⑦ (1/1) ……………	488
第4-126図	07-SX121 実測図 (1/30) ……………	489
第4-127図	07-SX121 出土遺物実測図 (1/3) ……………	489
第4-128図	07-SX095 出土遺物実測図 (1/3) ……………	490
第4-129図	包含層・整地層出土遺物実測図① (1/3) ……………	491
第4-130図	包含層・整地層出土遺物実測図② (1/3、1/1) ……………	492

表目次

第1-1表	旧万寿寺跡第6～10次調査一覧 ……………	3
第1-2表	中世大友府内町跡調査一覧① ……………	6
第1-3表	中世大友府内町跡調査一覧② ……………	7
第1-4表	中世大友府内町跡調査一覧③ ……………	8
第1-5表	旧万寿寺跡調査一覧 ……………	8
第3-1表	旧万寿寺跡第6次調査遺構一覧表① ……………	21
第3-2表	旧万寿寺跡第6次調査遺構一覧表② ……………	22
第3-3表	旧万寿寺跡第6次調査遺構一覧表③ ……………	23
第4-1表	旧万寿寺跡第7次調査主要遺構一覧表 ……………	390

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

地域高規格道路
広域ネットワークを担う重要幹線

都市計画道路庄の原佐野線は、大分市庄の原の大分自動車道大分インターチェンジから、元町、下郡、明野を経て市東部の佐野に至る地域高規格道路である。この庄の原佐野線は大分市内を通る主要幹線道路である国道10号や国道210号等、放射状幹線道路網を補完する東西連携道路となるとともに、東九州自動車道等と大分市都心部を結ぶ広域ネットワークを担う重要幹線として位置付けられ、その整備により都市活動の活性化と、国道10号等大分市内幹線道路の慢性的な交通渋滞の緩和を図るものである（第1-1図）。庄の原から大分市六坊南町間については、国道10号への接続を平面交差として平成20年9月に暫定的に供用を開始している。

国指定史跡
大友氏遺跡

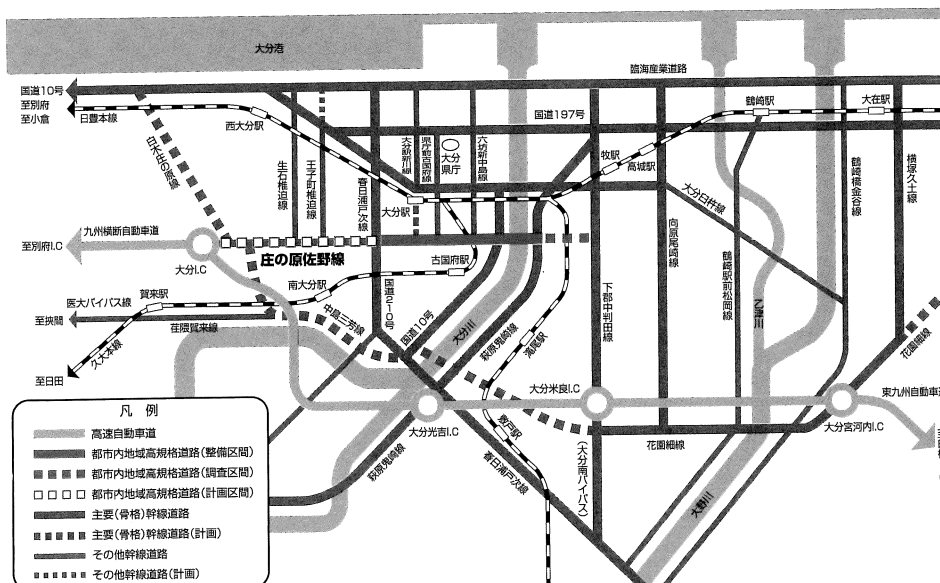
今回、調査対象となったのは、大分市六坊南町から大分川を渡った大分市大字下郡の市道萩原鬼崎線に接続する1.2kmである。元町工区は平成29年3月の供用開始の予定で、平成21年3月に整備区間の指定を受け、平成22年9月に事業認可を取得した。大分川右岸の下郡地内では試掘調査の結果、埋蔵文化財は確認されなかったが、大分川右岸の元町交差点～大分川間は周知の埋蔵文化財包蔵地である蔭山万寿寺跡、そして国指定史跡大友氏遺跡の一部を構成する旧万寿寺跡の旧境内地に該当することから、その取扱いが問題となり、国土交通省や文化庁、県土木建築部（建設政策課、都市計画課—平成27年度から都市まちづくり課、大分駅周辺総合整備事務所、大分土木事務所）、県教育委員会（教育庁文化課、埋蔵文化財センター）、大分市及び大分市教育委員会等関係機関の間で路線の位置や構造、調査の期間や方法について繰返し協議がなされた。その結果、JR久大本線の高架線の制約等により路線位置の変更は困難であること、また、国道10号との接続は、平面交差では想定交通量から供用速度毎時60kmを担保できないため立体交差とすること、国道10号から大分川架橋間は史跡としての一体的な空間を確保するために工法を盛土から橋梁に変更し、橋脚の位置は発掘調査の結果を踏まえて検討すること、等を確認した。また、発掘調査に際しては、橋脚等構造物設置場所の遺構は記録保存とし、橋脚間で遺構の保存が可能な部分については、遺構検出面までの掘り下げとし、遺構の発掘は時期や構造、性格を把握するための必要最低限に止め、可能な限り遺跡の保存に努めることとした。また、本調査終了後も橋脚等の工事施工時には随時立会調査を実施し、工事により保護すべき遺構に影響が生じていないかの確認を行った。

史跡としての一体的な空間を確保

遺跡の保存

橋梁への工法変更

こうした協議を踏まえ、元町工区は発掘調査結果を受けて橋梁への工法変更を行ったため、平成28年3月に事業変更の認可を受け、当初予定から10ヶ月延長した平成30年1月14日に開通し、供用を開始した。



第1-1図 庄の原佐野線と大分市幹線道路網（大分県土木建築部作成パンフレットから引用）

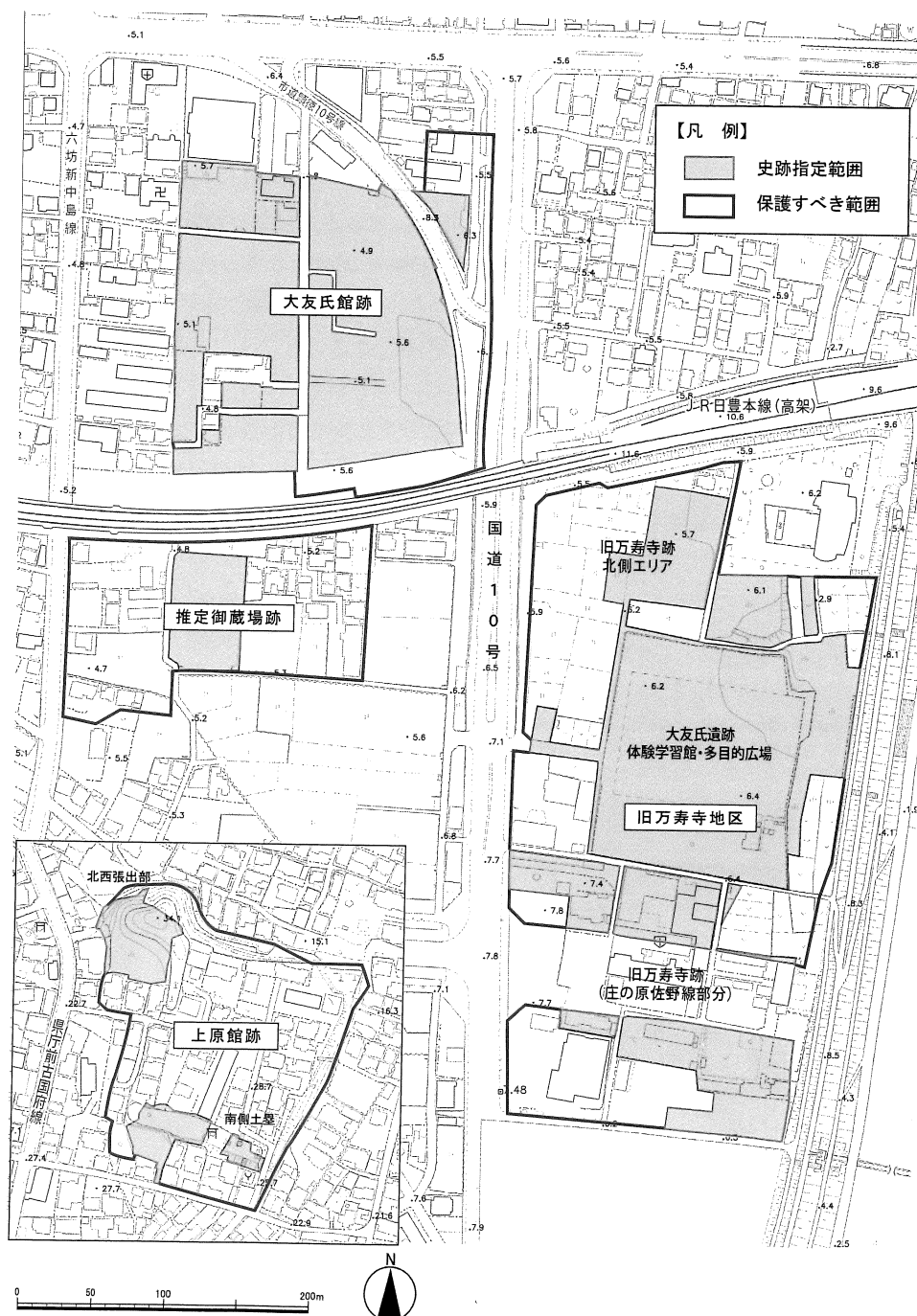
第2節 旧万寿寺跡推定域の変更の経緯

臨濟宗寺院
十刹のひとつ

万寿寺は徳治元年（1306）に大友氏5第貞親が博多承天寺の直翁智侃を開山に迎え開いた臨濟宗寺院で、山号は蔣山である。万寿寺は建武4年（1337）以来、十刹のひとつに列せられる屈指の禪宗寺院であったが、記録によれば15～16世紀の間に数度の火災に遭い、天正14年（1586）の島津氏の府内侵攻により、伽藍の主要堂塔は灰燼に帰したとされている。現在の万寿寺は大分市金池町に所在するが、これは寛永8年（1631）に再興されたものである。

寛永8年
（1631）
に再興

万寿寺旧境内については、江戸時代に戦国時代の府内の町割りを描いた「府内古図」と呼ぶ数枚の絵図と、現在の地割や明治時代の地籍図等を基にした町割りの比定が行われ、昭和63年刊行の『大分市史』の付図にそれが示された。この時点では、万寿寺旧境内の推定南限は、庄の原佐野線予定地の北側までであり、庄の原佐野線のルートも、『大分市史』での検討を踏まえて設定された周知の埋蔵文化財包蔵地としての「蔣山万寿寺跡」を避けて計画されたものであった。



第1-2図 国指定史跡大友氏遺跡と庄の原佐野線の位置
(大分市教育委員会2015『史跡大友氏遺跡整備基本計画(第1期)』から引用)

万寿寺の範囲が南に拡大

国指定史跡に指定

庄の原佐野線が万寿寺跡を横断

しかし、平成12年から始まった国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査では、万寿寺旧境内の推定西限部分を南北方向に長く発掘調査を実施した結果、万寿寺に関する考古学的な知見を加えることになった。この一連の発掘調査により、万寿寺の西側を区画する堀を確認することになったが、万寿寺の推定南限に近い場所を発掘した中世大友府内町跡第34次調査では、この西側の堀が東へ屈曲せずさらに南に延びる状況が確認され、万寿寺の範囲が南に拡大することが事実となった。また、中世大友府内町跡第30次調査では、版築状の積土をもつ東西方向の道路遺構を確認し、これが府内古図に描かれた万寿寺南側の東西道路と考えられている。この道路から南側では廃棄土坑をはじめとした夥しい遺構が確認される町屋の様相を呈している。したがって、万寿寺の南限は30次調査の東西道路の北側と推定される。この東西道路とその南の町屋の状況は中世大友府内町跡第97次調査でも確認されており、上記の蓋然性が高いことが裏付けられている。

こうした成果も受け、平成17年3月には万寿寺境内の一部が国指定史跡に指定され、国指定史跡大友氏館跡とあわせて指定名称が大友氏遺跡に変更となった。旧万寿寺地区ではその後も庄の原佐野線部分を除いて条件が整った箇所から順次追加指定がなされている。こうした経緯により、当初は万寿寺跡と避けて計画された庄の原佐野線が、発掘調査の進展によって万寿寺の寺域が拡大することが判明し、結果として庄の原佐野線が万寿寺跡を横断する形となったのである。

第3節 発掘調査・報告書作成の経過

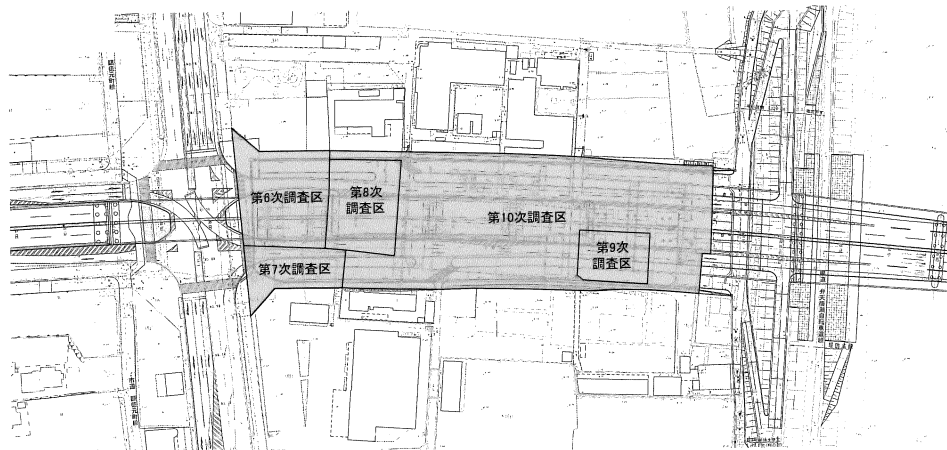
元町工区の発掘調査は、大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受け、平成23年度から用地条件の整った箇所から順次実施した。平成27年度は県の組織改正により大分駅周辺総合整備事務所が廃止され、事業を引き継いだ大分土木事務所からの依頼を受けて実施した。

旧万寿寺跡については、大分市教育委員会が史跡大友氏遺跡旧万寿寺地区の確認調査として第5次調査までを実施しており、同一遺跡における調査次数の統一を図るため平成23年度の本調査を第6次、以下平成25年度を第7次、平成26年度を第8・9次、平成27年度は第10次調査とし、4箇年で計5次の発掘調査を行った。この間、発掘調査指導者会を組織し、学識者の指導・助言を受けて

調査次数の統一
発掘調査指導者会

第1-1表 旧万寿寺跡第6～10次調査一覧

調査次数	調査面積	調査期間	調査指導者会	現地説明会	法定手続等（文化財保護法）		
					本調査施行通知 (法99条第1項)	埋蔵文化財発見通知 (法100条第2項)	本調査 終了報告
旧万寿寺跡第6次調査	1,411㎡	H23.6.12～H24.1.12	①H23.8.5 ②H23.11.30	H23.12.4	H23.5.30	H24.1.16 1,160箱	H24.1.16
旧万寿寺跡第7次調査	632㎡	H25.6.3～H26.1.10	①H25.9.20 ②H25.12.25	H25.10.5	H25.5.21	H26.1.16 133箱	H26.1.14
旧万寿寺跡第8・9次調査	1,666㎡	H26.5.12～H27.2.9	①H26.9.30～10.1 ②H26.12.5	H26.10.4	H26.5.1	H27.2.12 1,023箱	H27.2.12
旧万寿寺跡第10次調査	7,097.4㎡	H27.6.10～H28.3.2	①H27.9.28～29 ②H28.1.18	H27.12.26	H27.6.5	H28.3.1 1,300箱	H28.3.3



第1-3図 旧万寿寺跡第6～10次調査区位置 (S=1/2,500)

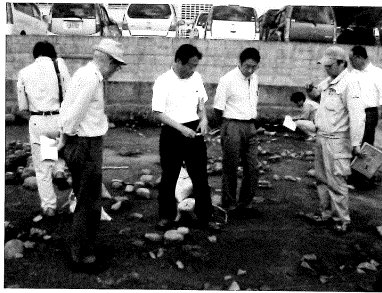


写真1-1 現査指導者会
(平成23年8月5日)



写真1-2 現地説明会
(平成27年12月26日)

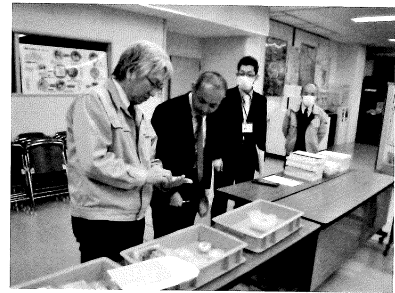


写真1-3 出土品の文化庁指導
(平成27年度)

調査を実施するとともに、大分県と大分市で調査成果の共通認識を図った。平成23～27年度の調査期間・面積等は第1-1表のとおりである。

各調査では重機での表土除去、人力掘削（包含層掘削・遺構検出・遺構発掘）、記録写真撮影、遺構実測、空中写真撮影、実測原図のデジタルトレース図作成、現場管理及び労務管理等は支援業務として一括して民間調査組織に委託した。その一方で調査区の設定や層序確認、遺構の認定、遺構埋土や調査区土層の分層等は埋蔵文化財センター調査員が行い、遺構の性格や遺跡全体の関係を把握しながら受託業者に作業指示を与え、調査員が常駐して全体を指揮監督する体制をとった。支援業務委託における作業班は1班につき調査技師・調査助手各1名、作業員20名を基本とした。

旧国土座標
(日本測地系)

発掘調査の実施にあたっては、これまでの中世大友府内町跡・旧万寿寺跡における発掘調査の座標グリッドとの統一を図るため、旧国土座標（日本測地系）に基づく10m方眼のグリッドを設定した。各グリッドには西からアルファベット、北からアラビア数字を付し、両者を組み合わせてグリッドの呼称とした。

現地説明会

これら発掘調査の期間中、調査成果を県民に公開するため現地説明会を開催した（第1-1表、写真1-2）。国指定史跡大友氏遺跡を構成する旧万寿寺跡の発掘調査とあって県民の関心も高く、現地説明会には多くの参加者があった。特に平成27年度の現地説明会は県土木建築部との共催で新大分川架橋建設工事の公開も併せて行うなど、文化財調査と道路事業とが連携した取組みとなった。

文化財調査
と道路事業
とが連携した
取組

整理作業

平成23年度から実施した発掘調査の出土品や調査記録類の整理作業は、大分県教育庁埋蔵文化財センターにおいて平成26年度から着手した。平成29年4月1日には県教育委員会の組織改正により教育庁埋蔵文化財センターが県立埋蔵文化財センターとなり、引き続き県立埋蔵文化財センターにおいて整理作業・報告書作成を実施した。

整理作業は年度ごとに旧万寿寺跡を含む当該年度整理実施事業を一括して「埋蔵文化財センターが実施する埋蔵文化財発掘調査に係る整理作業委託」として発注した。業務は基本作業と資料作成業務からなり、埋蔵文化財センター整理作業棟を作業場所として実施した。委託内容は出土遺物の水洗、出土地点の注記、遺物接合・復元、遺物実測・拓本採取、遺物観察基礎データ作成、遺物実測原図のトレース、遺物写真撮影、及び遺物の分けや収納等諸作業である。作業工程ごとに調査担当者が完了確認を行い、作業精度の確保に努めた。また、平成30年度には旧万寿寺跡第6～10次調査出土品のうち、特に重要なものの写真撮影を委託した。

報告書作成

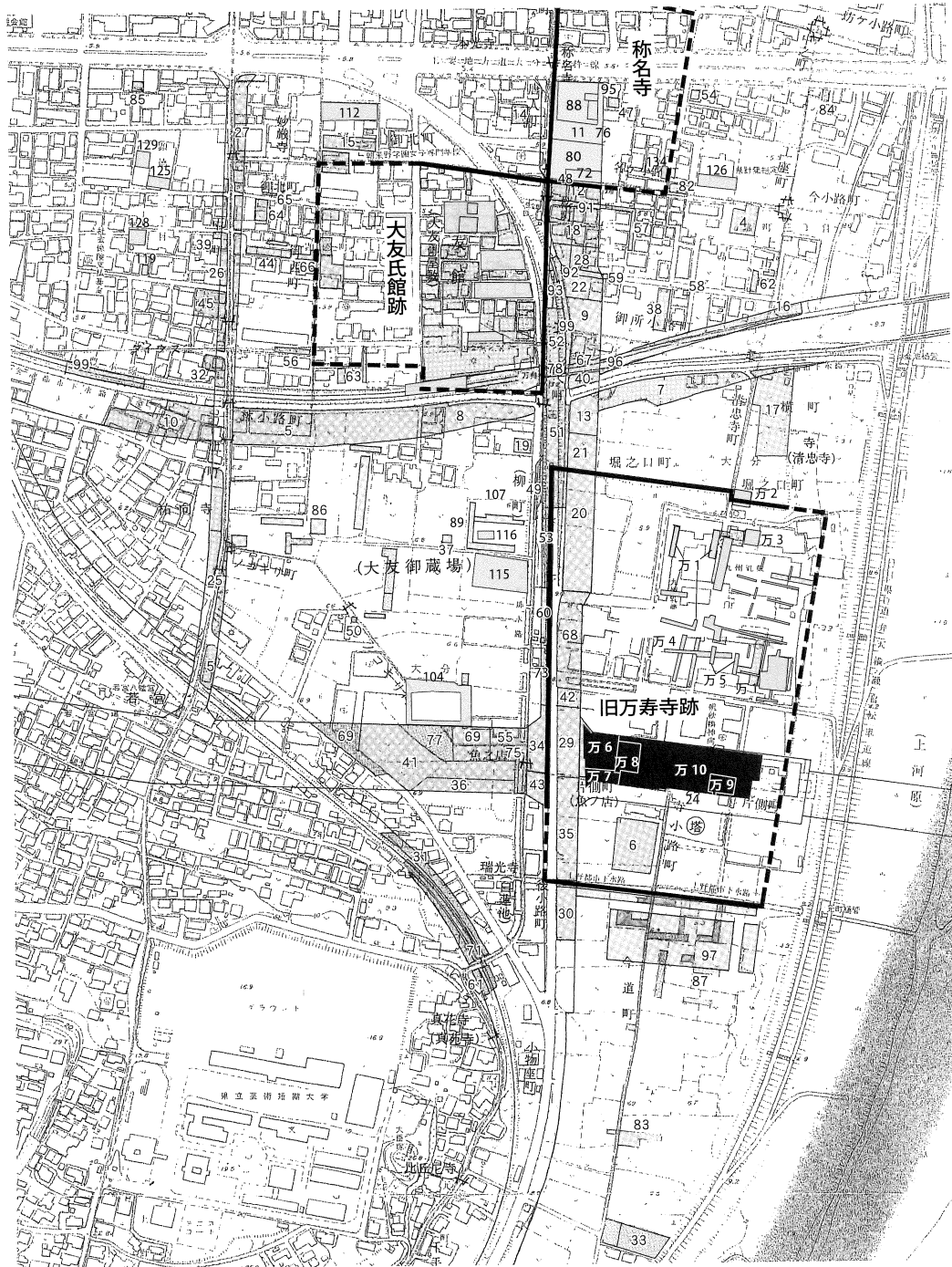
報告書作成にかかる遺構・遺物実測図版作成作業や原稿執筆、編集作業は調査担当者が整理作業と並行して行い、平成31年1月に原稿を入稿し、3度の校正を経て本書を刊行した。平成31年3月末には本書を刊行し、これを以て本事業を完了した。

第4節 調査組織の構成

調査組織

平成23～30年度の調査組織については以下のとおりである（役職は調査当時）。

- 調査主体 大分県教育委員会
- 調査指導者 河原純之（川村学園女子大学教授） ※平成23年度まで
 後藤宗俊（別府大学名誉教授）
 小野正敏（大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事）
 坂井秀弥（奈良大学文学部教授）
 玉井哲雄（元国立歴史民俗博物館教授） ※平成25年度から



第1-4図 旧万寿寺跡発掘調査状況

第1章 調査に至る経緯と経過

第1-2表 中世大友府内町跡調査一覧①

アミは旧万寿寺内の調査

調査次数	調査機関	調査年度	調査面積	事業名	調査場所	報告書名	報告書刊行	調査内容
府内町跡1次	大分市教委	平成8・9年度	620.0	区画整理移転事業	横小路町	大友府内7	平成16年3月	幅約10mの道路
府内町跡2次	大分市教委	平成8・9年度	200.0	区画整理移転事業	横小路町	大友府内7	平成16年3月	
府内町跡3次	大分市教委	平成9年度	160.0	区画整理移転事業	横小路町	大友府内3	平成15年3月	10基の備前焼の甕蔵
府内町跡4次	大分市教委	平成10年度	330.0	マンション建設	上市町	大友府内4	平成14年3月	名ヶ小路の街路の一部
府内町跡5次	大分県教委	平成11～13年度	4200.0	JR日豊・豊肥線高架	御蔵場	豊後府内1	平成17年3月	御蔵場の土塁
府内町跡6次	大分市教委	平成11年度	1600.0	J A 葬祭場	寺小路町・万寿寺			万寿寺の南限の堀？
府内町跡7次	大分県教委	平成12・13年度	2000.0	JR日豊・豊肥線高架	清忠寺町	豊後府内3	平成18年3月	第1南北街路・屋敷墓
府内町跡8次	大分県教委	平成12年度	2000.0	JR日豊・豊肥線高架	柳町・館の南側	豊後府内1	平成17年3月	15世紀の溝・土塁
府内町跡9次	大分県教委	平成12・13年度	970.0	国道10号拡幅	御所小路町	豊後府内4-3	平成17年3月	御所小路の街路
府内町跡10次	大分県教委	平成13・14年度	2000.0	JR日豊・豊肥線高架	上町・祐向寺	豊後府内6	平成19年3月	キリシタン墓
府内町跡11次	大分県教委	平成13年度	700.0	国道10号拡幅	称名寺			称名寺の西側の堀
府内町跡12次	大分県教委	平成13年度	700.0	国道10号拡幅	大友館・桜町・名ヶ小路町	豊後府内4-1	平成18年3月	大友館の東北隅・礎石建物
府内町跡13次	大分県教委	平成13年度	800.0	国道10号拡幅	御内町	豊後府内3	平成17年3月	ヴェロニカメダイ出土
府内町跡14次	大分市教委	平成13年度	104.0	マンション建設	唐人町	大友府内6	平成15年3月	井戸
府内町跡15次	大分市教委	平成13年度	472.0	スーパー建設	御北町	大友府内3	平成22年3月	
府内町跡16次	大分県教委	平成13年度	500.0	JR日豊・豊肥線高架	上市町	豊後府内3	平成18年3月	短冊形地割の町屋
府内町跡17次	大分市教委	平成14年度	1697.0	ポンプ場建設	横町・清忠寺	大友府内10	平成19年3月	横町の街路・鍛冶屋跡
府内町跡18次西	大分県教委	平成13年度	450.0	国道10号拡幅	大友館・街路	豊後府内4-2	平成18年3月	大友館と第2南北街路
府内町跡18次東	大分県教委	平成14年度	700.0	国道10号拡幅	桜町	豊後府内4-2	平成18年3月	大友館の東側の町屋
府内町跡19次	大分市教委	平成13年度	106.0	国庫補助 範囲確認	柳町？			陶製井筒の井戸
府内町跡20次	大分県教委	平成14年度	2100.0	国道10号拡幅	万寿寺	豊後府内7	平成19年3月	礎石建物・北境の堀
府内町跡21次	大分県教委	平成14年度	700.0	国道10号拡幅	堀之口町	豊後府内2	平成17年3月	府内型メダイ出土
府内町跡22次	大分県教委	平成14年度	600.0	国道10号拡幅	桜町・御所小路町	豊後府内4-3	平成18年3月	第2南北街路
府内町跡23次	大分市教委	平成14年度	1623.0	国庫補助 範囲確認	万寿寺			
府内町跡24次	大分市教委	平成14年度	58.0	国庫補助 範囲確認	万寿寺・寺小路町			万寿寺の塔の確認
府内町跡25次	大分市教委	平成15年度	58.0	市道拡幅	ノコギリ町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡25次2	大分市教委	平成15年度	271.0	市道拡幅	祐向寺	大友府内8	平成18年3月	16世紀代の掘立柱建物群
府内町跡25次3	大分市教委	平成15年度	18.0	市道拡幅	上町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡25次4	大分市教委	平成15年度	8.0	市道拡幅	上町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡25次5	大分市教委	平成16年度	270.0	市道拡幅	町外	大友府内9	平成19年3月	16世紀後半の道路状遺構
府内町跡25次6	大分市教委	平成16年度	300.0	市道拡幅	上町	大友府内8	平成18年3月	
府内町跡25次7	大分市教委	平成16年度	110.0	市道拡幅	上町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡25次8	大分市教委	平成17年度	75.0	市道拡幅	上町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡25次9	大分市教委	平成17年度	27.0	市道拡幅	上町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡25次10	大分市教委	平成18年度	125.0	市道拡幅	上町	大友府内12	平成20年3月	
府内町跡26次	大分市教委	平成15年度	230.0	市道拡幅	中町・デウス堂付近	大友府内8	平成18年3月	
府内町跡26次2	大分市教委	平成17年度	150.0	市道拡幅	中町・デウス堂付近	大友府内12	平成20年3月	
府内町跡26次3	大分市教委	平成18年度	350.0	市道拡幅	中町・デウス堂付近	大友府内12	平成20年3月	
府内町跡27次1	大分市教委	平成16年度	200.0	市道拡幅	妙厳寺	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡27次2	大分市教委	平成17年度	40.0	市道拡幅	中町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡27次3	大分市教委	平成17年度	105.0	市道拡幅	中町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡27次4	大分市教委	平成17年度	32.0	市道拡幅	中町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡27次5	大分市教委	平成17年度	19.0	市道拡幅	中町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡27次6	大分市教委	平成17年度	8.0	市道拡幅	中町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡27次7	大分市教委	平成17年度	41.0	市道拡幅	中町	大友府内9	平成19年3月	
府内町跡27次8	大分市教委	平成18年度	220.0	市道拡幅	中町	大友府内12	平成20年3月	
府内町跡27次9	大分市教委	平成18年度	81.0	市道拡幅	中町	大友府内12	平成20年3月	
府内町跡28次	大分県教委	平成15年度	480.0	国道10号拡幅	桜町	豊後府内4-2	平成18年3月	大友館の東側の町屋
府内町跡29次	大分県教委	平成15年度	1000.0	国道10号拡幅	万寿寺	豊後府内12	平成21年3月	万寿寺内の区画溝
府内町跡30次	大分県教委	平成15年度	700.0	国道10号拡幅	後小路町	豊後府内14	平成22年3月	14世紀代の町屋
府内町跡31次	大分県教委	平成15年度	500.0	JR久大線高架	瑞光寺	豊後府内5	平成17年3月	蔀池跡
府内町跡32次	大分市教委	平成15年度	237.0	個人・市道拡幅	中町・デウス堂付近	大友府内8	平成18年3月	
府内町跡33次	大分市教委	平成15年度	880.0	国庫補助 範囲確認	府内の南限付近			15・16世紀後半の大溝
府内町跡33-2次	大分市教委	平成16年度	450.0	個人住宅	府内の南限付近			
府内町跡34次	大分県教委	平成15年度	700.0	国道10号拡幅	柳町	豊後府内8	平成20年3月	万寿寺西側境の堀・礎石建物
府内町跡35次	大分県教委	平成15年度	500.0	国道10号拡幅	後小路町・万寿寺	豊後府内12	平成21年3月	井戸・瓦多数
府内町跡36次	大分県教委	平成15年度	850.0	庄原佐野線	魚ノ店・ノコギリ町	豊後府内9	平成20年3月	町屋跡・井戸
府内町跡37次	大分市教委	平成15年度	37.0	アパート建設	御蔵場			
府内町跡38次	大分市教委	平成15年度	210.0	アパート建設	御所小路町			推定御所小路跡・南北大溝
府内町跡39次	大分市教委	平成15年度	15.0	アパート建設	中町	大友府内12	平成20年3月	
府内町跡40次	大分県教委	平成16年度	170.0	JR日豊・豊肥線高架	御内町	豊後府内10	平成20年3月	溝
府内町跡41次	大分県教委	平成16年度	3400.0	庄原佐野線	魚ノ店・ノコギリ町	豊後府内16-1	平成22年3月	御蔵場の周辺の街路と町屋
府内町跡42次	大分県教委	平成16年度	150.0	国道10号拡幅	万寿寺	豊後府内12	平成21年3月	万壽寺跡
府内町跡43次	大分県教委	平成16年度	400.0	国道10号拡幅	万寿寺	豊後府内8	平成20年3月	萬壽寺西側境の堀・礎石建物
府内町跡44次	大分市教委	平成16年度	100.0	アパート建設	御西町			大友館西側の確認
府内町跡44-2次	大分市教委	平成16年度	20.0	アパート建設	御西町			大友館西側の確認
府内町跡45次	大分市教委	平成16年度	250.0	アパート建設	中町・コレジオ堂付近	大友府内12	平成20年3月	
府内町跡46次	大分市教委	平成16年度	90.0	駐車場建設	万寿寺			
府内町跡47次	大分市教委	平成16年度	35.0	店舗建設	称名寺			
府内町跡48次	大分県教委	平成16年度	70.0	工業用水管	妙ヶ小路	豊後府内4-1	平成18年3月	名ヶ小路
府内町跡49次	大分県教委	平成16年度	40.0	工業用水管	柳町・街路	豊後府内15	平成22年3月	
府内町跡50次	大分市教委	平成16年度	1.0	個人住宅 浄化槽	ノコギリ町・街路			御蔵場の西側の街路と側溝
府内町跡51次	大分県教委	平成17年度	2500.0	国道10号拡幅	第2南北街路・御内町	豊後府内15	平成22年3月	万壽寺西北隅・大友館東南隅
府内町跡52次	大分県教委	平成17年度	600.0	国道10号拡幅	第2南北街路・大友氏館	豊後府内15	平成22年3月	第2南北街路・大友館の東部

第1-3表 中世大友府内町跡調査一覧②

アミは旧万寿寺内の調査

調査次数	調査機関	調査年度	調査面積	事業名	調査場所	報告書名	報告書刊行	調査内容
府内町跡53次	大分市教委	平成17年度	192.0	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀	大友府内13	平成21年3月	
府内町跡54次	大分市教委	平成17年度	7.0	浄化槽	称名寺の東			
府内町跡55次	大分県教委	平成17年度	320.0	庄原佐野線	御蔵場	豊後府内9	平成20年3月	地下蔵?
府内町跡56次	大分市教委	平成17年度	76.0	国庫補助 範囲確認	御西町			
府内町跡57次	大分市教委	平成17年度	190.0	市下水道	名ヶ小路町	大友府内13	平成21年3月	
府内町跡58次	大分市教委	平成17年度	210.0	アパート建設	御所小路町			
府内町跡59次	大分市教委	平成17年度	9.0	市下水道	桜町	大友府内13	平成21年3月	
府内町跡60次	大分市教委	平成17年度	156.0	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀	大友府内13	平成21年3月	
府内町跡61次	大分県教委	平成17年度	240.0	JR久大線高架	瑞光寺	豊後府内11	平成20年3月	
府内町跡62次	大分市教委	平成17年度	48.0	確認調査	第1南北街路			街路跡
府内町跡63次	大分市教委	平成18年度	90.0	確認調査	御西町			
府内町跡64次	大分市教委	平成18年度	153.0	アパート建設	御西町			
府内町跡65次	大分市教委	平成18年度	9.0	確認調査	御西町			
府内町跡66次	大分市教委	平成17・18年度	48.0	確認調査	御西町・大友館			
府内町跡67次	大分県教委	平成18年度	100.0	国道10号拡幅	桜町・御所小路町	豊後府内15	平成22年3月	
府内町跡68次	大分県教委	平成18年度	400.0	国道10号拡幅	万寿寺	豊後府内12	平成21年3月	
府内町跡69次	大分県教委	平成18年度	1741.0	庄原佐野線	御蔵場・魚ノ店・ノコギリ町	豊後府内16-2	平成22年3月	街路跡・井戸・町屋
府内町跡70次	大分市教委	平成18年度	30.0	市下水道工事	来迎寺			
府内町跡71次	大分県教委	平成18年度	450.0	JR久大線高架	瑞光寺	豊後府内71	平成21年3月	
府内町跡72次	大分県教委	平成18年度	300.0	国道10号拡幅	称名寺			名ヶ小路・称名寺堀
府内町跡73次	大分市教委	平成18年度	329.0	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀	大友府内13	平成21年3月	
府内町跡74次	大分市教委	平成18年度	395.0	民間共同住宅建築	大雄院の北側	大友府内11	平成19年3月	
府内町跡75次	大分市教委	平成18年度	870.0	庄原佐野線	御蔵場・魚ノ店	豊後府内16-3	平成22年3月	第2南北街路・一括埋納
府内町跡76次	大分県教委	平成18年度	100.0	国道10号拡幅	称名寺			
府内町跡77次	大分県教委	平成19年度	1050.0	庄原佐野線	御蔵場・ノコギリ町	豊後府内16-4	平成22年3月	街路跡
府内町跡78次	大分県教委	平成19年度	45.0	国道10号拡幅	第2南北街路	豊後府内15	平成22年3月	
府内町跡79次	大分県教委	平成19年度	55.0	国道10号拡幅	第2南北街路	豊後府内15	平成22年3月	
府内町跡80次	大分県教委	平成19年度	670.0	国道10号拡幅	称名寺			第2南北街路・称名寺跡
府内町跡81次	大分市教委	平成19年度	400.0	民間共同住宅建築	中之町付近	大友府内14	平成21年3月	溝状遺構・井戸
府内町跡82次	大分市教委	平成20年度	61.0	個人住宅(確認)	名ヶ小路町			街路跡
府内町跡83次	大分市教委	平成20年度	533.0	民間(店舗建設)	今道町	大友府内15	平成22年3月	第1南北街路跡
府内町跡83次2	大分市教委	平成20年度	25.0	民間(店舗建設)	今道町	大友府内15	平成22年3月	第1南北街路跡の東側町屋
府内町跡84次	大分市教委	平成20年度	36.0	民間(病院関連)	中之町	大友府内16	平成22年3月	
府内町跡85次	大分市教委	平成21年度	38.0	民間(店舗建設)	中町	市埋文調査概報2010	平成22年12月	奈良~平安・近世遺構
府内町跡86次1	大分市教委	平成21年度	80.0	国庫補助(範囲確認)	御蔵場	国費概報2009・2010	平成23年3月	土坑・街路・東西溝
府内町跡86次2	大分市教委	平成21年度	100.0	国庫補助(範囲確認)	御蔵場			柱穴遺構
府内町跡86次3	大分市教委	平成21年度	280.0	国庫補助(範囲確認)	ノコギリ町			井戸・廃棄土坑
府内町跡86次4	大分市教委	平成21年度	120.0	国庫補助(範囲確認)	ノコギリ町			井戸・掘立柱建物
府内町跡86次5	大分市教委	平成21年度	75.0	国庫補助(範囲確認)	ノコギリ町			井戸
府内町跡86次6	大分市教委	平成21年度	900.0	国庫補助(範囲確認)	御蔵場			溝・柱穴内礎石建物
府内町跡86次7	大分市教委	平成21年度	300.0	国庫補助(範囲確認)	御蔵場			柱穴遺構
府内町跡86次8	大分市教委	平成21年度	75.0	国庫補助(範囲確認)	ノコギリ町			
府内町跡87次	大分市教委	平成21年度	1604.0	移転地確認(10号拡幅)	万寿寺南端	大友府内17	平成23年3月	万寿寺塔跡?確認
府内町跡88次	大分県教委	平成22年度	2028.0	国道10号拡幅	称名寺・第2南北街路	豊後府内17	平成25年3月	称名寺の堀・第3南北街路
府内町跡89次1	大分市教委	平成22年度	206.0	国庫補助(範囲確認)	御蔵場	国費概報2009・2010	平成23年3月	井戸・土坑・南北溝・東西溝・掘立柱建物
府内町跡89次2	大分市教委	平成22年度	215.0	国庫補助(範囲確認)	御蔵場			
府内町跡89次3	大分市教委	平成22年度	137.0	国庫補助(範囲確認)	御蔵場			
府内町跡89次4	大分市教委	平成22年度	70.0	国庫補助(範囲確認)	御蔵場			
府内町跡89次5	大分市教委	平成22年度	108.0	国庫補助(範囲確認)	御蔵場			
府内町跡89次6	大分市教委	平成22年度	200.0	国庫補助(範囲確認)	御蔵場			
府内町跡90次	大分市教委	平成22年度	46.0	民間開発	ニシウ町・辻之町	市埋文調査概報2010	平成22年12月	16世紀代の溝・土坑・集石
府内町跡91次	大分県教委	平成22年度	240.0	国道10号拡幅	桜町・第2南北街路	豊後府内18	平成25年3月	西端は大友館跡
府内町跡92次	大分県教委	平成22年度	400.0	国道10号拡幅	桜町・第2南北街路	豊後府内18	平成25年3月	西端は大友館跡
府内町跡93次	大分県教委	平成24年度	86.0	国道10号拡幅	桜町・第2南北街路	豊後府内18	平成25年3月	西端は大友館跡
府内町跡94次	大分市教委	平成22年度	69.0	個人住宅(確認調査)	横小路町	市埋文調査概報2011	平成23年12月	井戸・土坑
府内町跡95次	大分県教委	平成23年度	182.4	国道10号拡幅	称名寺	豊後府内19	平成25年3月	
府内町跡96次	大分県教委	平成24年度	927.0	JR日豊・豊肥線高架側道	御所小路町・御内町	豊後府内18	平成27年3月	街路・溝・土坑
府内町跡97次	大分市教委	平成24年度	5800.0	病院建設	寺小路町・片側町	大友府内22	平成28年3月	街路・井戸・土坑・礎石建物・掘立柱建物
府内町跡98次	大分市教委	平成23年度	119.0	民間開発	長国寺町・横小路町	市埋文調査概報2012	平成24年3月	土坑・南北溝
府内町跡99次	大分県教委	平成24年度	385.0	JR日豊・豊肥線高架側道	ダイウス堂南	豊後府内19	平成27年3月	礎石建物・溝
府内町跡100次	大分市教委	平成24年度	40.0	民間開発	南小路町	市埋文調査概報2013	平成25年3月	礎石建物
府内町跡101次	大分市教委	平成25年度	762.0	民間開発	寺小路町・片側町	大友府内22	平成28年3月	大分川側に傾斜する落ち
府内町跡102次	大分市教委	平成25年度	18.5	民間開発	穴打町	市埋文調査概報2014	平成26年3月	近世府内城土塁・井戸
府内町跡103次	大分市教委	平成25年度	434.0	市道中島錦町線	真宗寺付近	大友府内18	平成26年3月	掘立柱建物・井戸・石組土坑

第1章 調査に至る経緯と経過

第1-4表 中世大友府内町跡調査一覧③

アミは旧万寿寺内の調査

調査次数	調査機関	調査年度	調査面積	事業名	調査場所	報告書名	報告書刊行	調査内容
府内町跡104次	大分市教委	平成25年度	856.7	民間開発	魚之店	大友府内19	平成26年3月	街路・土坑・石組土坑
府内町跡105次	大分市教委	平成26年度	1927.2	市道中島錦町線	今在家町・辻之町	大友府内25	平成29年2月	街路・土坑・石組土坑
府内町跡106次	大分市教委	平成26年度	509.6	市道中島錦町線	今在家町	大友府内25	平成29年2月	街路・掘立柱建物・土坑・銭貨埋納
府内町跡107次	大分市教委	平成26年度	74.2	民間開発	柳町	大友府内20	平成27年3月	井戸・廃棄土坑
府内町跡108次	大分市教委	平成26年度	546.9	民間開発	下町	大友府内21	平成27年3月	掘立柱建物・土坑・溝
府内町跡109次	大分市教委	平成26年度	350.0	市道中島錦町線	南小路町	大友府内25	平成29年2月	街路・井戸・土坑
府内町跡110次	大分市教委	平成26年度	8.3	民間開発	ノコギリ町	市埋文調査概報2015	平成28年3月	溝
府内町跡111次	大分市教委	平成27年度	1034.9	市道中島錦町線	小笠原町	大友府内27	平成30年3月	街路・掘立柱建物・土坑・井戸
府内町跡112次	大分市教委	平成27年度	522.4	民間開発	御北町	大友府内23	平成28年3月	掘立柱建物・土坑・溝
府内町跡113次	大分市教委	平成27年度	234.2	民間開発	下町	大友府内24	平成28年3月	柱穴列・土坑・井戸・溝
府内町跡114次	大分市教委	平成27年度	539.2	市道中島錦町線	南小路町	大友府内27	平成30年3月	街路・土坑・溝
府内町跡115次	大分市教委	平成27年度	336.3	民間開発	柳町	市埋文調査概報2016	平成29年2月	廃棄土坑
府内町跡116次	大分市教委	平成27年度	30.8	民間開発	柳町	市埋文調査概報2016	平成29年2月	廃棄土坑
府内町跡117次-1区	大分市教委	平成27～28年度	1112.2	市道中島錦町線	稲荷町・称名寺	大友府内27	平成30年3月	第2南北街路・溝・石積み遺構
府内町跡117次-2区	大分市教委	平成27～28年度	766.6	市道中島錦町線	稲荷町・横小路町	大友府内27	平成30年3月	第2南北街路と横小路の交差点
府内町跡118次	大分市教委	平成27年度	10.0	個人住宅(確認調査)	御北町(大友館西側)	市埋文調査概報2016	平成29年2月	大友館西側外郭溝
府内町跡119次	大分市教委	平成26年度	21.5	市道中島錦町線	コレジオ推定地南側	市埋文調査概報2015	平成28年3月	南北溝・柱穴列
府内町跡120次-1区	大分市教委	平成28年度	357.3	市道中島錦町線	小笠原町	大友府内27	平成30年3月	第2南北街路・掘立柱建物・かわらけ廃棄土坑
府内町跡120次-2区	大分市教委	平成28年度	178.1	市道中島錦町線	南小路町	大友府内27	平成30年3月	第3南北街路・礎石建物
府内町跡120次-3区	大分市教委	平成28年度	623.3	市道中島錦町線	南小路町	大友府内27	平成30年3月	第4南北街路・礎石建物・石積み
府内町跡121次	大分市教委	平成28年度	428.6	市道中島錦町線	今在家町	大友府内27	平成30年3月	井戸・廃棄土坑・土取り跡
府内町跡122次	大分市教委	平成28年度	375.0	市道中島錦町線	稲荷町・横小路町	大友府内27	平成30年3月	街路状遺構
府内町跡123次	大分市教委	平成29年度	164.3	市道中島錦町線	今在家町	大友府内27	平成30年3月	井戸・廃棄土坑
府内町跡124次	大分市教委	平成28年度	14.0	民間開発	柳町・推定御蔵場跡	市埋文調査概報2017	平成30年3月	溝状遺構
府内町跡125次	大分市教委	平成28年度	21.7	民間開発	コレジオ推定地	大友府内29	平成30年3月	東西溝
府内町跡126次	大分市教委	平成29年度	493.1	民間開発	名ヶ小路町	大友府内28	平成30年3月	掘立柱建物・廃棄土坑・井戸
府内町跡127次	大分市教委	平成28年度	264.5	民間開発	下町	大友府内26	平成30年3月	街路状遺構・井戸
府内町跡128次	大分市教委	平成29年度	15.0	民間開発	コレジオ推定地	市埋文調査概報2018	平成31年3月	溝状遺構
府内町跡129次	大分市教委	平成29年度	155.3	民間開発	コレジオ推定地周辺	大友府内29	平成30年3月	溝状遺構・土坑
府内町跡130次	大分市教委	平成29年度	252.0	公共工事	古川町	大友府内30	平成30年3月	掘立柱建物・廃棄土坑
府内町跡131次	大分市教委	平成29年度	642.3	民間開発	まち城外(下河原)	大友府内31	平成30年3月	近世の整地と土坑
府内町跡132次	大分市教委	平成29年度	205.2	民間開発	下町			南北溝・柱穴列
府内町跡133次	大分市教委	平成29年度	6.7	民間開発	今在家町			街路状遺構
府内町跡134次	大分市教委	平成29年度	13.4	民間開発	名ヶ小路町			石列・溝
府内町跡135次	大分市教委	平成29年度	40.0	民間開発	南小路町			大型土坑・溝
府内町跡136次	大分市教委	平成30年度	14.6	民間開発	南小路町			街路状遺構・土坑・溝

第1-5表 旧万寿寺跡調査一覧

※アミは本書所収調査

調査次数	調査機関	調査年度	調査面積(m ²)	事業名	調査場所	報告書名	報告書刊行	調査内容
旧万寿寺跡1次	大分市教委	平成17年	388.0	国庫補助(範囲確認)				瓦溜め・溝・大型土坑
旧万寿寺跡2次	大分市教委	平成18年	270.0	国庫補助(範囲確認)	堀之口町			街路状遺構・堀
旧万寿寺跡3次	大分市教委	平成18年	365.0	国庫補助(範囲確認)				掘立柱建物・井戸
旧万寿寺跡4次	大分市教委	平成19年	240.0	国庫補助(範囲確認)				大規模整地跡・連続土坑
旧万寿寺跡5次	大分市教委	平成20年	185.0	国庫補助(範囲確認)				大規模整地跡・溝
旧万寿寺跡6次	大分県教委	平成23年	1411.0	庄の原佐野線	万寿寺西部	本書(第1分冊)	平成31年3月	瓦溜め・溝・鬼瓦
旧万寿寺跡7次	大分県教委	平成25年	670.0	庄の原佐野線	万寿寺西部	本書(第1分冊)	平成31年3月	墓・銭貨一括埋納遺構
旧万寿寺跡8次	大分県教委	平成26年	1040.0	庄の原佐野線	万寿寺西部	本書(第2分冊)	平成31年3月	礎石が廃棄された溝
旧万寿寺跡9次	大分県教委	平成26年	493.0	庄の原佐野線	万寿寺西部	本書(第2分冊)	平成31年3月	古代の溝
旧万寿寺跡10次	大分県教委	平成27年	6604.5	庄の原佐野線	万寿寺中央南側	本書(第2分冊)	平成31年3月	瓦溜め・区画溝・井戸・柱穴列

調査指導

佐藤正知(文化庁文化財部記念物課史跡部門主任文化財調査官)

榎垣田佳男(文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門主任文化財調査官)

近江俊秀(文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門文化財調査官)

原田昌幸(文化庁文化財第一課考古資料部門主任文化財調査官)

横須賀倫達（文化庁文化財第一課考古資料部門文化財調査官）

保存協議・調整 大分県教育庁文化課

若杉正幸（大分県教育庁文化課長） ※平成23年度
 佐藤英一（同） ※平成25年度
 山口博文（同） ※平成26年度
 野尻明敬（同） ※平成27年度
 佐藤晃洋（同） ※平成28・29年度、29年度教育庁参事監兼務
 阿部辰也（同） ※平成30年度
 小林昭彦（大分県教育庁文化課文化財班参事（総括）） ※平成23年度
 野尻明敬（同） ※平成25・26年度
 三重野誠（同） ※平成27～30年度、27年度課長補佐（総括）
 後藤晃一（大分県教育庁文化課文化財班副主幹） ※平成23年度
 横澤 慈（同 主任） ※平成25・26年度
 越智淳平（同 主査） ※平成27～29年度、平成27・28年度は同班主任
 山路康弘（同 副主幹） ※平成30年度

調査機関 大分県教育庁埋蔵文化財センター（平成23～28年度）

大分県立埋蔵文化財センター（平成29・30年度）

平成23年度（旧万寿寺跡第6次調査）

調査責任者 山口博文（大分県教育庁埋蔵文化財センター所長）
 坂本嘉弘（同 次長）
 調査事務 春山義光（同 管理予算班課長補佐（総括））
 徳脇仁志（同 副主幹）
 福田 文（同 主査）
 調査担当 後藤一重（同 大型事業班課長補佐（総括））
 横澤 慈（同 主任・調査担当）
 吉田 寛（同 資料管理班主幹・調査担当）

発掘調査支援業務委託

平成25年度（旧万寿寺跡第7次調査）

調査責任者 宮内克己（大分県教育庁埋蔵文化財センター所長）
 小林昭彦（同 次長兼一般事業班参事（総括））
 調査事務 春山義光（同 管理予算班課長補佐（総括））
 椎原由美（同 副主幹）
 山村光広（同 主査）
 調査担当 後藤一重（同 大型事業班参事（総括））
 吉田 寛（同 大型事業班主幹・調査担当）

平成26年度（旧万寿寺跡第8・9次調査及び整理作業）

調査責任者 松村洋一（大分県教育庁埋蔵文化財センター所長）
 後藤一重（同 次長兼県事業班参事（総括））

第1章 調査に至る経緯と経過

調査事務	藤田幸三 (同	管理予算班主幹 (総括))
	椎原由美 (同	副主幹)
	山村光広 (同	主査)
調査担当	吉田 寛 (同	受託事業班主幹・調査担当)
	宮内克己 (同	県事業班嘱託・調査担当)
	江田 豊 (同	資料管理班課長補佐 (総括)・整理作業総括)
	綿貫俊一 (同	主幹・整理作業委託監理)

平成27年度 (旧万寿寺跡第10次調査及び整理作業)

調査責任者	後藤一重 (大分県教育庁埋蔵文化財センター所長)		
	小柳和宏 (同	次長兼受託事業班参事 (総括) 兼県事業班参事 (総括))
調査事務	藤田幸三 (同	管理予算班主幹 (総括)) ※平成27年4月まで
	安藤正廣 (同	管理予算班主幹 (総括)) ※平成27年5月から
	椎原由美 (同	副主幹)
	田上 剛 (同	主査)
調査担当	吉田 寛 (同	受託事業班課長補佐・調査担当)
	宮内克己 (同	県事業班嘱託・調査担当)
	坂本嘉弘 (同	受託事業班嘱託)
	江田 豊 (同	資料管理班課長補佐 (総括)・整理作業総括)
	綿貫俊一 (同	主幹・整理作業委託監理)
	横澤 慈 (同	県事業班主査・整理作業担当)

平成28年度 (整理作業)

調査責任者	後藤一重 (大分県教育庁埋蔵文化財センター所長)		
	小柳和宏 (同	次長兼県事業班参事 (総括))
調査事務	安藤正廣 (同	管理予算班主幹 (総括))
	田上 剛 (同	主査)
	志賀恵子 (同	主査)
調査担当	吉田 寛 (同	受託事業班課長補佐・整理担当)
	横澤 慈 (同	県事業班主査・整理担当)
	宮内克己 (同	県事業班嘱託・整理担当)
	坂本嘉弘 (同	受託事業班嘱託・整理担当)
	江田 豊 (同	資料管理班参事 (総括)・整理作業総括)
	綿貫俊一 (同	資料管理班課長補佐・整理作業委託監理)

平成29年度 (整理作業)

調査責任者	阿部辰也 (大分県立埋蔵文化財センター所長)		
	江田 豊 (同	副所長兼調査第一課長)
調査事務	神田 繁 (同	総務課長)
	石丸一輝 (同	総務課副主幹)
	堺井裕史 (同	同 主事)
調査担当	吉田 寛 (同	調査第二課課長補佐・整理担当)

横澤 慈 (同	調査第一課主査・整理担当)
宮内克己 (同	同 嘱託)
坂本嘉弘 (同	調査第二課嘱託)
松本康弘 (同	企画普及課長・整理作業総括)
小林昭彦 (同	企画普及課専門員・整理作業委託監理)

平成30年度 (報告書作成)

調査責任者 江田 豊 (大分県立埋蔵文化財センター所長)

調査事務	森次正浩 (同	総務課長)
	石丸一輝 (同	総務課副主幹) ※平成30年9月まで
	岡本佳子 (同	主査) ※教育庁教育改革・企画課併任、10月から
	堺井裕史 (同	主事)
調査担当	友岡信彦 (同	参事兼調査第一課長)
	吉田 寛 (同	調査第二課長・報告書作成担当)
	横澤 慈 (同	調査第一課主査・報告書作成担当)
	宮内克己 (同	嘱託・報告書作成担当)
	坂本嘉弘 (同	調査第二課嘱託)

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

大分はその名称が示すように、平野を丘陵や河川が分断した地形をしており、各所に小規模な平野が展開する。この中で、大分川の左岸から西側にかけて広がる小地域は、中世以降今日に至るまで、豊後国・大分県の政治経済の中心地となっている。この地域は東側を大分川が北流し、北側には別府湾が広がり、南側は高崎山系から東に延びる標高約40～30mの上野丘陵が横たわり、西側は高崎山（628m）へと続く標高80mから100mの起伏の激しい丘陵に囲まれている。

蒋山万寿寺跡

大分川沿いに形成された自然堤防上

今回調査を行った蒋山万寿寺跡及び、史跡大友氏遺跡を構成する大友氏館跡、そしてその周囲に展開する中世都市遺跡である中世大友府内町跡（以下、中世都市府内とする。）は、東部の大分川沿いに形成された自然堤防上に位置する。府内古図に描かれている範囲は、北は現在に比べ西側に大きく曲がっている河口部から、南は上野丘陵の先端部と大分川が接する部分にあたる。現在の標高は河口に近い北部で約4m、上流の南部地域で約6mである。

中世都市府内の北と東側は別府湾と大分川に限られるが、遺跡の南西部から西側は、試掘調査の結果や旧地形の観察から、低湿地の広がり確認できる。この低湿地は上野丘陵の裾を巡り、北の別府湾方向に伸び、府内古図に描かれる舟入に続いている。

中世都市府内が立地する自然堤防では、中世遺構検出面の下部に厚い砂層の堆積が確認できる。下部砂層からは縄文時代晩期から古墳時代前期の遺物が、上部からは8世紀頃の遺物が出土しており、この間に2～3m程度堆積し形成されたものと考えられる。

第2節 歴史的環境

大分君恵尺・稚臣古宮古墳羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡

龍王畑遺跡

国司館の可能性

岩屋寺石仏元町石仏

「勝津留島四至」

「高国府」

大友頼泰

大分川沿いに河原市

万寿寺16世紀中頃から後半に最盛期

大分川左岸地域化が豊後のなかでも政治的に特別な地域として注目されるのは7世紀後半以降である。その代表的な遺跡として、壬申の乱（672年）で大海人皇子（天武天皇）側について活躍した大分君恵尺・稚臣の墓と想定される国指定史跡古宮古墳が挙げられる。また上野丘陵の南側に位置する羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡からは、7世紀後半～8世紀初頭の大型掘立柱建物や総柱の倉庫群が確認されており、「評」段階の遺構と想定されている。

その後設置された豊後国府については、羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡の東側に「古国府」の地名が残るものの、政庁本体は未だ不明である。しかし、上野丘陵東端部で調査された龍王畑遺跡では9世紀から10世紀前半にかけての庇をもつ掘立柱建物や築地堀跡、道路状遺構が検出され、その配置から、国司館の可能性が指摘されている。この遺跡の東北部、上野遺跡群では8～9世紀にかけての版築基壇をもつ瓦葺の礎石建物が建てられている。さらに、この丘陵の東端部の南側崖面に岩屋寺石仏、東側崖面に元町石仏が刻まれており、平安時代後期の藤原様式の作風とされる。

11～13世紀代の状況は考古学的には不明な点が多いが、文献からの推量が可能である。「宇佐神領大鏡」には天喜元年（1053）、康平2年（1059）、承保4年（1077）に「勝津留島四至」の名称が登場する。その範囲は上野丘陵東部から北に広がる沖積地にあたり、16世紀に大友館が置かれる場所が含まれる。その中で天喜元年の申文に西の限りとして「高国府」の地名が登場する。13世紀中頃に守護職として大友頼泰が豊後国に下向した際、「高（隆）国府」の割譲を強引に求めており、「高国府」「勝津留島」については守護所の場所と関わる重要な問題となっている。さらに、この申文の中に「東限北廻り、ニ方市河」とあり、すでに大分川沿いに河原市があり、府内古図に描かれた「府内」の初元的な位置づけがなされている。

14世紀代に入り、徳治元年（1306）に万寿寺が建立されると、この地域での本格的な町づくりが開始される。中世大友府内町跡の発掘調査で確認される遺構はこの時期からで、以降16世紀中頃か

ら後半に最盛期を迎え、17世紀初頭に府内城下町に移転するまで継続する。

この時期の遺跡は、府内周辺でも多く確認されている。大分川の右岸にある下郡遺跡群や津守・片島地区でも16世紀の方形館や方形区割りをもつ遺構が確認されている。独立性の強い守岡丘陵には山城的存在である守岡遺跡が位置する。一方、上野丘陵には土塁と堀を廻らす上原館があり、その南の古国府地区には町口遺跡ある。西方の高崎山城は大友氏の詰城として知られている。

16世紀後半に隆盛を極めた大友氏も、天正6年(1578)に日向国耳川の合戦で島津氏に大敗を喫すると次第にその勢力を失い、天正14年(1586)には島津氏が府内に侵攻する。この時中世都市府内は灰燼に帰したとされ、中世大友府内町跡の発掘調査でもこの時に形成されたと考えられる厚い焼土層が各地で確認できる。万寿寺は16世紀にはすでに衰退していたようであるが、この時に堂舎を残らず失ったとされる。その後大友氏は豊後一国を安堵されるが、文禄2年(1593)に朝鮮出兵の際の失態を咎められ、豊後を除国される。豊後は蔵入地として豊臣系大名により分割支配されることとなり、府内には福原直高が入封する。福原氏は慶長2年(1597)から新たに府内城の築城を開始し、これに伴い中世以来の町も移転したことで中世都市府内は終焉を迎える。その後、江戸幕府が開かれると、府内には竹中重利、日根野吉明を経て松平忠昭が入り、以後、大給松平氏が治めて幕末に至る。現在の万寿寺は大分市金池町に所在するが、これは寛永年間に再興されたものである。

上原館
高崎山城
島津氏が府内に侵攻
豊臣系大名により分割支配
府内城の築城
大給松平氏
寛永年間に再興



- | | | | |
|---------------|----------------|--------------|-------------------|
| 1 蔭山万寿寺跡 | 11 上野遺跡群 | 21 大道遺跡群 | 31 大分川河川敷4遺跡 |
| 2 大友館跡 | 12 上野館跡 | 22 大道条里跡 | 32 牧六分遺跡 |
| 3 大友氏遺跡(国史跡) | 13 大臣塚古墳 | 23 東田室遺跡 | 33 牧遺跡 |
| 4 中世大友府内町跡 | 14 竜王畑遺跡 | 24 末広遺跡 | 34 下郡遺跡群 |
| 5 府内城跡(県・市史跡) | 15 岩屋寺石仏(県史跡) | 25 古国府遺跡群 | 35 羽田遺跡 |
| 6 府内城・城下町 | 16 大分元町石仏(国史跡) | 26 羽屋園遺跡 | 36 滝尾百穴横穴古墳群(市史跡) |
| 7 金池南遺跡 | 17 伽藍石仏(市史跡) | 27 金剛宝戒寺跡 | 37 岩屋遺跡 |
| 8 上野町遺跡 | 18 南太平寺横穴墓群 | 28 岩屋寺遺跡 | 38 津守遺跡 |
| 9 若宮八幡宮遺跡 | 19 岩屋寺横穴墓群 | 29 大分川河川敷1遺跡 | |
| 10 飯盛塚古墳 | 20 東大道遺跡 | 30 大分川河川敷3遺跡 | |

第2-1図 蔭山万寿寺跡・中世大友府内町跡と周辺の遺跡

第3章 旧万寿寺跡第6次調査

第1節 調査の経過と概要

都市計画道路
庄の原佐野線

1,411㎡

元町工区

立体交差構造

本調査の依頼

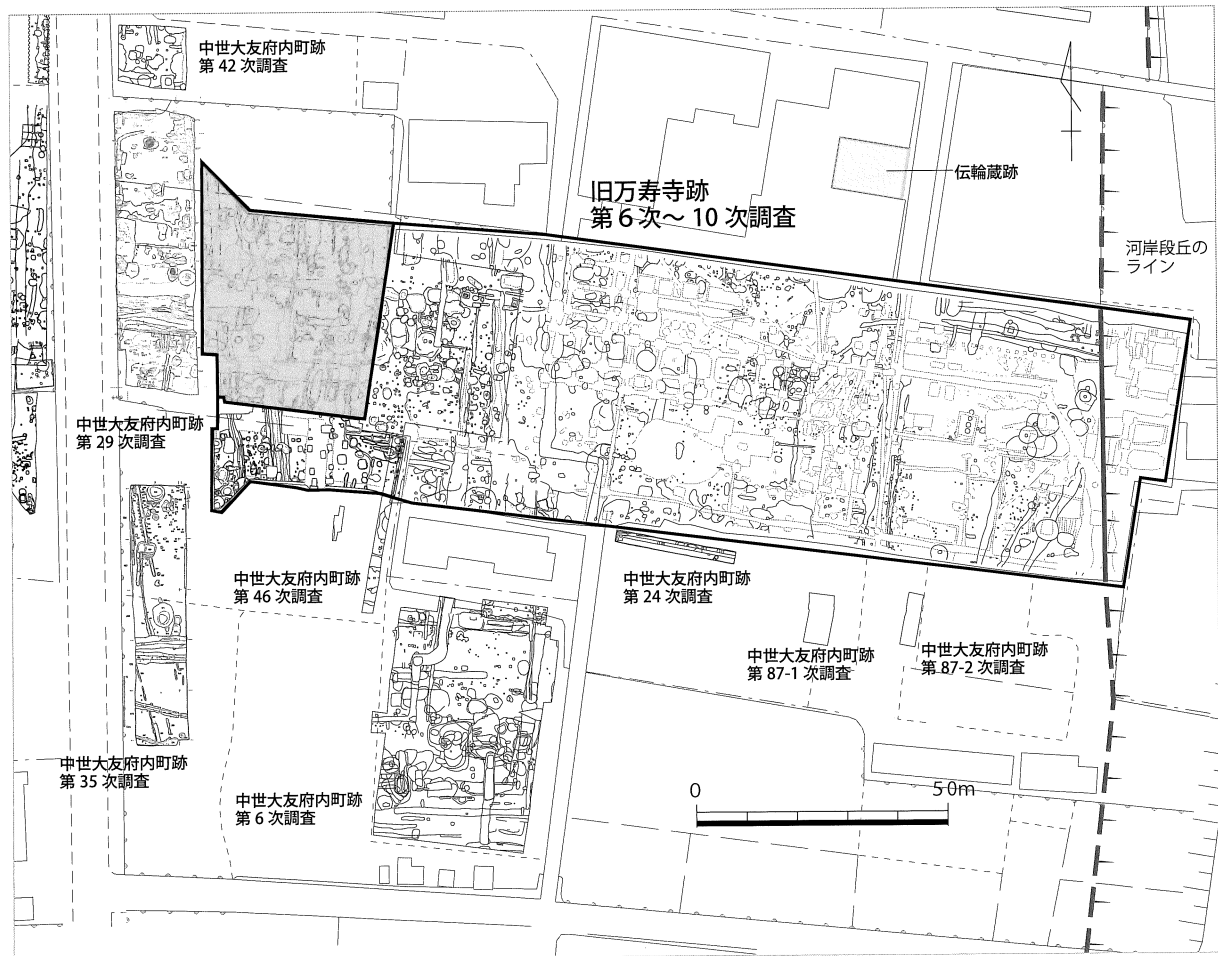
文化財保護法
第99条第1項

発掘調査の施
行を通知

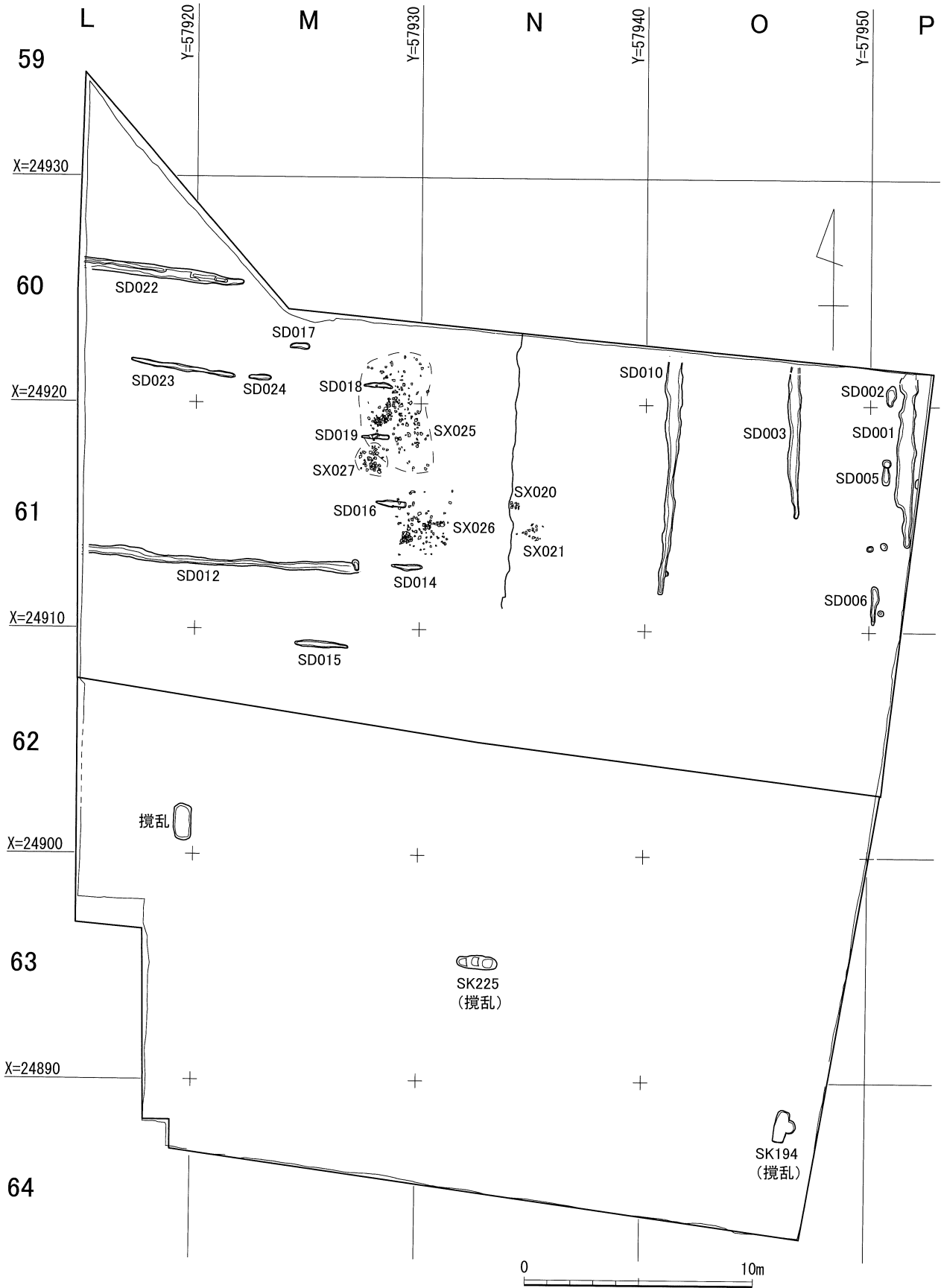
都市計画道路庄の原佐野線（元町工区）に伴う旧万寿寺跡第6次発掘調査は、大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受けて大分県教育庁埋蔵文化財センターが実施した。調査地点は大分市大字大分4301-1で、発掘調査面積は1,411㎡である。都市計画道路庄の原佐野線のうち、起点となる大分市庄の原から国道10号に接続する大分市六坊南町間は平成20年9月に供用を開始している。元町工区はこの国道10号から大分川を渡って対岸の下郡に接続する全長1.2kmの区間で、旧万寿寺跡第6次調査は、この元町工区の起点となる国道10号に接続する地点である（第3-1図）。国道10号との接続は立体交差構造となることから、当該調査区は橋台等構造物の設置が避けられず、従って基本的には調査区全体を完全に掘り上げることとし、記録によって遺跡の保存を図るという方針で調査に着手した。

本調査の依頼は平成23年2月17日付で大分駅周辺総合整備事務所長から県教育庁文化課長あて提出され、関係機関等との協議を経て平成23年2月23日付で本調査依頼の受諾と実施計画、所要経費見積を回答した。平成23年5月30日には県教育庁文化課へ文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査の施行を通知するとともに、大分市教育委員会及び大分中央警察署へ発掘調査の実施の通知と調査への協力を依頼した。

発掘調査の実施にあたり、第1章で述べたように機械掘削・人力掘削・記録作成・現場管理及び



第3-1図 旧万寿寺跡第6次調査の位置 (1/15,000)



第3-2図 旧万寿寺跡第6次調査近世面遺構配置図 (1/250)

労務管理等の業務は支援業務として民間調査組織に一括して委託することとし、平成23年5月27日に入札を執行した。支援業務では調査面積及び調査期間から作業班を2班編成とし、調査体制は業務を受託した株式会社九州文化財研究所の調査技師2名（越知睦和・稲富陽子）、同調査助手2名（尾ノ上尚平・小田貴志）、発掘作業員1日40名を基本とし、2名の埋蔵文化財センター調査員の指揮監督のもとに調査を遂行した。

現地での発掘作業は平成23年6月15日から着手した。排土置き場を確保するため調査区を1区と2区に分け、まずは重機を使用して2区の表土除去を行った。6月24日から作業員を投入しての人力掘削を開始し、包含層掘削及び遺構検出・遺構発掘作業を行った。空中写真撮影は8月4日と9月27日に実施し、9月30日に2区全体の実測作業を終了した。10月3日からは2区の埋戻しと、反転して1区の表土除去を行い、10月7日から1区の人力掘削を開始した。10月25日と12月6日に空中写真撮影を行い、12月9日に人力掘削を完了、12月12日に1区の実測作業を終了した。この間、12月4日に発掘調査成果を一般に公開する現地説明会を開催し、約200人の参加者があった。また、大分市内中学生及び県立高校の職業体験や大分大学インターンシップ、小学校・中学校教諭初任者研修の一環として体験発掘の受入を行った。また、県立芸術文化短期大学及び県立爽風高校の授業の一環として現場見学があった。埋戻しは12月13日から行い、12月15日に一旦埋戻しを完了した。12月19日に大分駅周辺総合整備事務所と埋蔵文化財センターの間で埋戻し状況の確認と協議を行い、事業側からの依頼により調査地内の埋戻し土の整形作業を平成24年1月11・12日に実施した。その完了をもって本調査を終了した。

現地説明会を開催

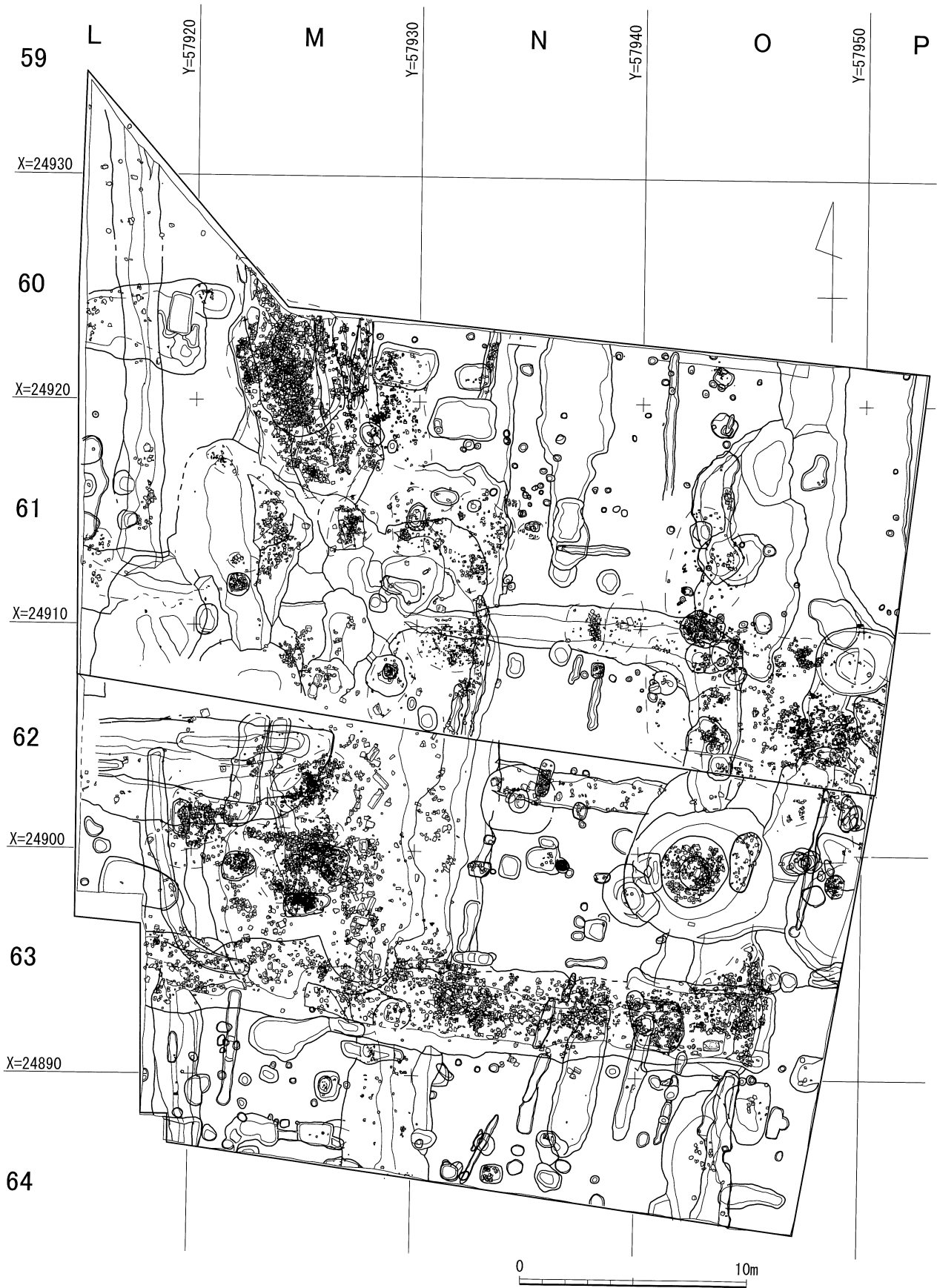
体験発掘の受入

発掘調査の終了を通知
埋蔵文化財発見通知を提出

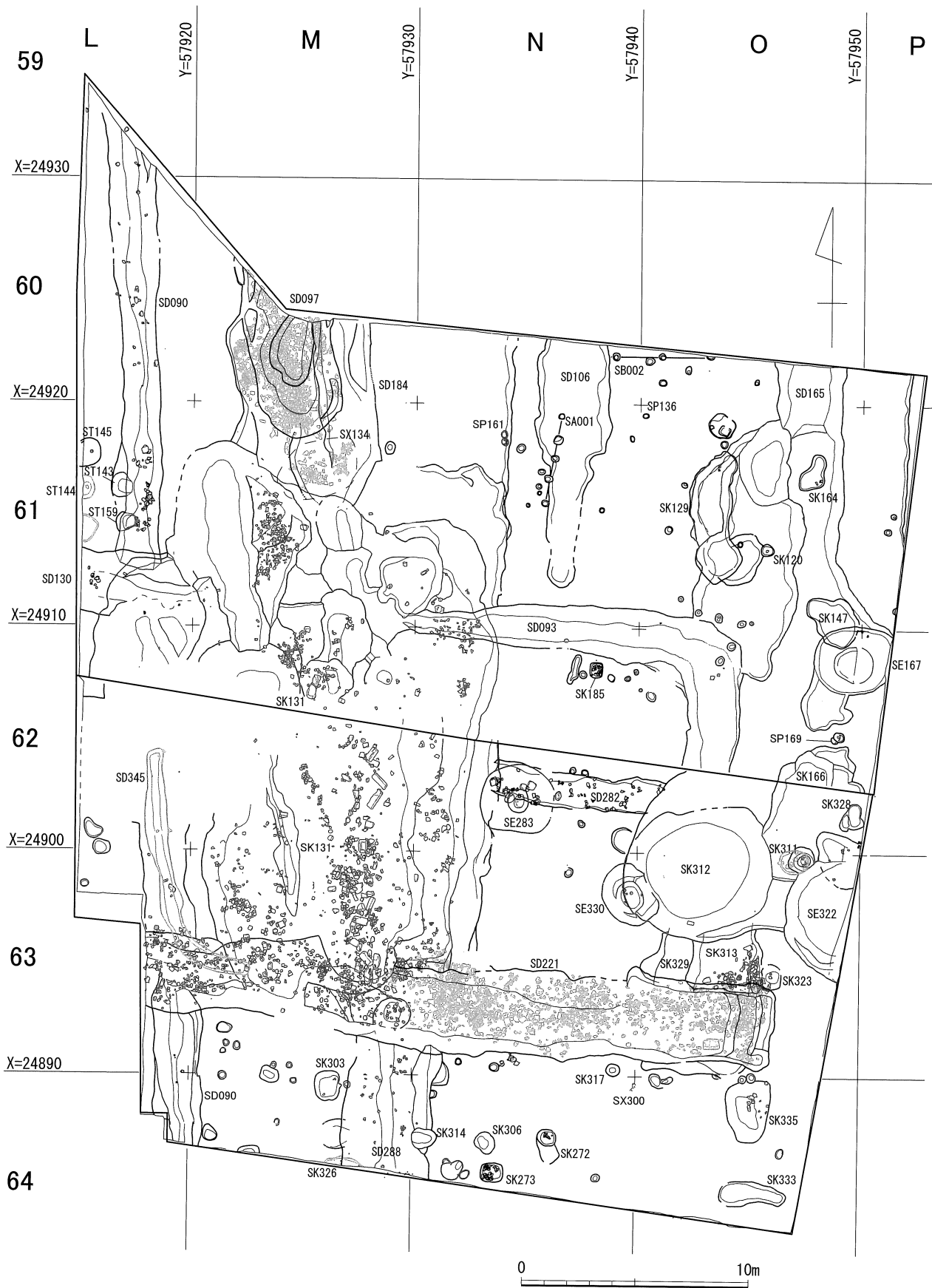
本調査終了をうけ、平成24年1月16日付けで県教育庁文化課へ発掘調査の終了を通知するとともに、大分中央警察署長あて埋蔵文化財発見通知を提出した。平成24年2月24日には支援業務委託の受託者から業務報告書及び調査記録等調査成果品の提出を受け、完了検査をもって支援業務委託を完了した。

上記調査期間中、県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所、大分市教育委員会、大分市元町自治会から多大な御協力を頂いた。また、第1章に示す関係者以外に以下の方々の来訪があり、調査への教示・助言を頂いた（所属は調査当時）。

塔鼻光司・坪根伸也・高島 豊・池邊千太郎・塩地潤一・五十川雄也・長 直信（大分市教育委員会）、浦井直幸（中津市教育委員会）、栗田勝弘・高橋信武・田中裕介（大分県教育庁埋蔵文化財センター）、高橋 徹・綿貫俊一（大分県立歴史博物館）、鹿毛敏夫（国立新居浜高等専門学校）、堂込秀人（鹿児島県埋蔵文化財センター）、藤木 聡（宮崎県立西都原考古博物館）、木村幾多郎、植島隆二（大分市立城南中学校）、甲斐寿義（大分市立城東中学校）



第3-3図 旧万寿寺跡第6次調査中世面遺構配置図 (1/250)



第3-5図 旧万寿寺跡第6次調査遺構配置図(下層 1/250)

第3-1表 旧万寿寺跡第6次調査遺構一覧表①

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置		遺構の時期	特記事項	掲載頁
06-SD001	S-001	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SD002	S-002	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SD003	S-003	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SD005	S-005	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SD006	S-006	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SD010	S-010	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SD012	S-012	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SD013	S-013	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SD014	S-014	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SD015	S-015	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SD016	S-016	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SD017	S-017	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SD018	S-018	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SD019	S-019	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SX021	S-021	遺物集中	2区	N61	近世初頭?		31
06-SD022	S-022	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SD023	S-023	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SD024	S-024	溝	2区		近世以降	耕作痕	28
06-SX025	S-025	遺物集中	2区	M60・N60・M61・N61	近世初頭?		32
06-SX026	S-026	遺物集中	2区	M61・N61	近世初頭?		33
06-SK029	S-029	土坑	2区	M61	Ⅶ期(16世紀末葉)	火災処理土坑	38
06-SX031	S-031	集石	2区	N62	Ⅵ期(16世紀後葉)以降		115
06-SX032	S-032	遺物集中	2区	N61・N62	Ⅲ期(14世紀末～15世紀前半)以降	完形の平瓦2点	115
06-SX033	S-033	遺物集中	2区	O61	Ⅴ期(16世紀前半)以降		115
06-SK035	S-035	土坑	2区	L60・M60	Ⅶ期(16世紀末葉)		39
06-SK036	S-036	土坑	2区	O60	不明		41
06-SX037	S-037	礎石状石材	2区	N61	Ⅴ期(16世紀前半)?		36
06-SK039	S-039	土坑	2区	M61・M62	Ⅵ期(16世紀後葉)以降		41
06-SK043	S-043	土坑	2区	M62	Ⅵ期(16世紀後葉)以降	凝灰岩と石英の玉砂利	41
06-ST045	S-045	土坑墓	2区	L61	Ⅱ期(14世紀中頃～末)		339
06-SK048	S-048	土坑	2区	M61・N61	Ⅶ期(16世紀末葉)か		42
06-SX049	S-049	遺物集中	2区	N61	Ⅵ期(16世紀後葉)以降		118
06-SP051	S-051	ピット	2区	N61			141
06-SD053	S-053	溝	2区	N60	Ⅳ～Ⅴ期(15世紀中頃～16世紀前半)		89
06-SK054	S-054	土坑	2区	N60	Ⅳ期(15世紀中頃～後半)	大内系白色土師器皿	43
06-SD058	S-058	溝	2区	O60・O61	不明		89
06-SP060	S-060	ピット	2区	N61			141
06-SK061	S-061	土坑	2区	N61	Ⅱ～Ⅲ期(14世紀中頃～15世紀前半)		45
06-SP069	S-069	ピット	2区	N61			140
06-SD071	S-071	溝	2区	N62	Ⅵ期(16世紀後葉)以降		90
06-SD072	S-072		2区	N61・N62	Ⅵ期(16世紀後葉)以降		90
06-SK075	S-075	土坑	2区	O61	Ⅳ期(15世紀中頃～後半)		46
06-SK076	S-076	土坑	2区	O61	Ⅲ～Ⅳ期(14世紀末～15世紀後半)		47
06-SX082	S-082	集石	2区	N61・N62	Ⅲ期(14世紀末～15世紀前半)以降		119
06-SX083	S-083	遺物集中	2区	M61	Ⅳ～Ⅴ期(15世紀中頃～16世紀前半)		119
06-SX084	S-084	遺物集中	2区	M61	Ⅵ期(16世紀後葉)		124
06-SK086	S-086	土坑	2区	N60・N61	Ⅳ～Ⅴ期(15世紀中頃～16世紀前半)		48
06-SK087	S-087	土坑	2区	M60・N60	Ⅳ～Ⅴ期(15世紀中頃～16世紀前半)		49
06-SK089	S-089	土坑	2区	L60・M60	Ⅰ～Ⅱ期(14世紀)	土師器鍋	49
06-SD090	S-090	溝	1・2区	L59～L・M64	Ⅲ期(14世紀末～15世紀前半)	07-SD090に続く	253
06-SX092	S-092	礎石状石材	2区	N62	Ⅴ期(16世紀前半)?		36
06-SD093	S-093	溝	2区	M61・62～O61・62	Ⅲ期(14世紀末～15世紀前半)	06-SD130と同一か?	258
06-ST094	S-094	土坑墓	2区	L60	Ⅵ期(16世紀後葉)	伸展葬の土坑墓	113
06-SX095	S-095	集石	2区	M60・M61	Ⅴ期(16世紀前半)以降		127
06-SX096	S-096	集石	2区	M60	Ⅳ～Ⅴ期(15世紀中頃～16世紀前半)		128
06-SK097	S-097	土坑	2区	M60・M61	Ⅳ期(15世紀中頃～後半)	瓦の廃棄土坑、被熱した瓦を含む	150
06-SX100	S-100	遺物集中	1・2区	O62・P62	Ⅶ期(16世紀末葉)	瓦溜り、鬼瓦・壁土等出土	128

第3章 旧万寿寺跡第6次調査

第3-2表 旧万寿寺跡第6次調査遺構一覧表②

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置		遺構の時期	特記事項	掲載頁
06-SD101	S-101	溝	2区	N61	Ⅱ～Ⅲ期 (14世紀中頃～15世紀前半)		91
06-SD106	S-106	溝	2区	N60・N61	I～Ⅱ期 (14世紀)		260
06-SK110	S-110	土坑	2区	O61・O62	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半)		50
06-SD117	S-117	溝	2区	M60・M61	Ⅳ～Ⅴ期 (15世紀中頃～16世紀前半)		92
06-SK120	S-120	土坑	2区	O61	不明		197
06-SB002	S-122	掘立柱建物	2区	O60	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半) 以前		143
06-SK126	S-126	土坑	2区	O61・O62	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半)		50
06-SA001	S-127	柵列	2区	N61	I～Ⅱ期 (14世紀) ?		145
06-SA001	S-128	柵列	2区	N61	I～Ⅱ期 (14世紀) ?		145
06-SK129	S-129	土坑	2区	O61	Ⅱ期 (14世紀中頃～末)		199
06-SD130	S-130	溝	2区	L61	Ⅲ期 (14世紀末～15世紀前半)	06-SD093と同一か?	263
06-SK131	S-131	土坑	1・2区	L・M61～M・N63	Ⅴ期 (16世紀前半)	大型廃棄土坑、凝灰岩切石多数	200
06-SK133	S-133	土坑	2区	M61	Ⅵ期 (16世紀後葉) 以降		52
06-SX134	S-134	遺物集中	2区	M61	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半)		342
06-SP136	S-136	下層ピット	2区	O61			343
06-SA001	S-139	柵列	2区	N61	I～Ⅱ期 (14世紀) ?		145
06-SK140	S-140	土坑	2区	O62・P62	Ⅵ期 (16世紀後葉)		53
06-SK141	S-141	土坑	2区	O62	Ⅶ期 (16世紀末葉)		54
06-SK142	S-142		2区	O62	Ⅶ期 (16世紀末葉)		54
06-ST143	S-143	土坑墓?	2区	L61	I～Ⅱ期 (14世紀)		340
06-ST144	S-144	土坑墓?	2区	L61	I～Ⅱ期 (14世紀)	奈良火鉢	341
06-SK145	S-145	土坑	2区	N62			55
06-SK147	S-147	土坑	1区	O61・O62	Ⅵ期 (15世紀中頃～後半以降)		234
06-SA001	S-148	ピット	2区	N61	I～Ⅱ期 (14世紀) ?		145
06-SP152	S-152	ピット	2区	N61			343
06-SB002	S-153	掘立柱建物	2区	N60	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半) 以前		143
06-ST159	S-159	土坑墓?	2区	L61	I～Ⅱ期 (14世紀)		341
06-SP161	S-161	下層ピット	2区	N61			343
06-SB002	S-162	掘立柱建物	2区	O60	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半) 以前		143
06-SK164	S-164	土坑	2区	O61	Ⅲ期 (14世紀末～15世紀前半) 以降		235
06-SD165	S-165	溝	2区	O60・O61・P61	I期 (14世紀前半)		265
06-SK166	S-166	土坑	1・2区	O62・O63	Ⅲ期 (14世紀末～15世紀前半) 以前		236
06-SE167	S-167	井戸	2区	O62・P62	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半) 以前?		325
06-SP169	S-169	下層ピット	2区	O62			343
06-SA001	S-171	柵列	2区	N61	I～Ⅱ期 (14世紀) ?		145
06-SK173	S-173	土坑	2区	O62	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半)		55
06-SD184	S-184	溝状遺構	2区	M60・M61	Ⅲ期 (15世紀前半)		267
06-SK185	S-185	土坑	2区	N62	Ⅵ期 (16世紀後葉)		236
06-SD193	S-193	溝	1区	O62・O63	近世以降	耕作痕か	94
06-SK194	S-194	電柱攪乱	1区	O64	近現代	電柱攪乱	26
06-SD195	S-195	溝	1区	N63	近世以降	耕作痕か	94
06-SK198	S-198	土坑	1区	O62	Ⅶ期 (16世紀末葉)		61
06-SK199	S-199	土坑	1区	O63	Ⅶ期 (16世紀末葉)		61
06-SK200	S-200	土坑	1区	O63・O64	Ⅱ期 (14世紀中頃～末)		63
06-SK202	S-202	土坑	1区	O64	Ⅱ期 (14世紀中頃～末)		63
06-SK208	S-208	土坑	1区	N・O63～N・O64	近世以降	耕作痕か	65
06-SK209	S-209	土坑	1区	N63・N64	近世以降	耕作痕か	65
06-SD215	S-215	溝	1区	N64	近世以降	耕作痕か	98
06-SD216	S-216	溝	1区	N64	近世以降	耕作痕か	98
06-SK217	S-217	土坑	1区	N64	不明		67
06-SP218	S-218	ピット	1区	N64			141
06-SK219	S-219	土坑	1区	N63	不明	刻書のある土製硯	67
06-SK220	S-220	土坑	1区	N63・O63	Ⅳ～Ⅴ期 (15世紀中頃～16世紀前半)		68
06-SD221	S-221	溝	1区	L63～O63	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半)	大内系白色土師器皿	267
06-SK226	S-226	土坑	1区	M64	Ⅳ期 (15世紀中頃～後半) 以降		69
06-SK228	S-228	土坑	1区	M64	I期 (14世紀前半)		70
06-SP230	S-230	上層ピット	1区	M64			141

第3-3表 旧万寿寺跡第6次調査遺構一覧表③

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置		遺構の時期	特記事項	掲載頁
			1区	M63・M64			
06-SD231	S-231	溝	1区	M63・M64	V期(15世紀中頃～後半)以降		102
06-SK235	S-235	土坑	1区	M64	II期(14世紀中頃～末)以降		72
06-SK236	S-236	土坑	1区	O62・O63	IV期(15世紀中頃～後半)		74
06-SX237	S-237	銭貨集中	1区	L63	IV期(15世紀中頃～後半)以降	銭貨13点の集中	131
06-SK239	S-239	土坑	1区	N62	III期(14世紀末～15世紀前半)以降		74
06-SP240	S-240	ピット	1区	N63			141
06-SK241	S-241	土坑	1区	N63	VI期(16世紀後葉)	祭祀土坑	75
06-SK248	S-248	土坑	1区	M63	VII期(16世紀末葉)	火災処理土坑	76
06-SK249	S-249	土坑	1区	M62・M63	VII期(16世紀末葉)	火災処理土坑	78
06-SK252	S-252	土坑	1区	O62・N63・O63	V期(16世紀前半)以降		80
06-SK253	S-253	土坑	1区	M63	V期(16世紀前半)以降		80
06-SP256	S-256	ピット	1区	M63			141
06-SK258	S-258	土坑	1区	L64・M64	III期(14世紀末～15世紀前半)以降		80
06-SK259	S-259	土坑	1区	L64・M64	III期(14世紀末～15世紀前半)以降		81
06-SK260	S-260	土坑	1区	N63・O63	IV～V期(15世紀中頃～16世紀前半)		68
06-SK264	S-264	土坑	1区	N63	IV期(15世紀中頃～後半)以降か?		81
06-SK265	S-265	土坑	1区	N62	IV期(15世紀中頃～後半)以降か?		81
06-SK266	S-266	土坑	1区	N62・N63	IV期(15世紀中頃～後半)以降か?		81
06-SK267	S-267	土坑	1区	M62	VII期(16世紀末葉)		81
06-SK268	S-268	土坑	1区	M63	VII期(16世紀末葉)	火災処理土坑	84
06-SK269	S-269	土坑	1区	M63	IV期(15世紀中頃～後半)		86
06-SE271	S-271	井戸	1区	O62・O63	IV期(15世紀中頃～後半)以降		111
06-SK272	S-272	土坑	1区	N64	I期(14世紀前半)		236
06-SK273	S-273	土坑	1区	N64	I～II期(14世紀前半～末)		237
06-SK274	S-274	土坑	1区	N62	III期(14世紀末～15世紀前半)以降		86
06-SK281	S-281	土坑	1区	M62	VII期(16世紀末葉)		87
06-SD282	S-282	溝	1区	N62・O62	I～II期(14世紀)		297
06-SE283	S-283	井戸	1区	N62	古代?		327
06-SP286	S-286	上層ピット	1区	O63			141
06-SX287	S-287	遺物集中	1区	L・M62～L・M63	VII期(16世紀末葉)	防長系足鐙	132
06-SD288	S-288	溝	1区	M・N63～M・N64	III期(14世紀末～15世紀前半)	07-SD288に続く	317
06-SX291	S-291	遺物集中	1区	M62・M63	VII期(16世紀末葉)	火災処理遺構	134
06-SK299	S-299	土坑	1区	O63	V期(16世紀前半)以降		87
06-SX300	S-300	銭貨集中	1区	N64	-	銭貨5点の集中	343
06-SD302A	S-302A	溝	1区	L62・M62	VI～VII期(16世紀後葉～末)		102
06-SD302B	S-302B	溝	1区	L62・M62	VI期(16世紀後葉)		102
06-SK303	S-303	土坑	1区	M63・M64	IV期(15世紀中頃～後半)以前	古代の遺構か?	238
06-SK306	S-306	土坑	1区	N64	不明		238
06-SX309	S-309	遺物集中	1区	L62・M62	VI～VII期(16世紀後葉～末葉)		137
06-SX310	S-310	遺物集中	1区	M62	VI～VII期(16世紀後葉～末葉)	京都系土師器の多量廃棄	138
06-SK311	S-311	土坑	1区	O62・O63	IV期(15世紀中頃～後半)以降		240
06-SE312	S-312	井戸	1区	N・O62～N・O63	IV期(15世紀中頃～後半)		327
06-SK313	S-313	土坑	1区	O63	III期(14世紀末～15世紀前半)	鬼瓦	241
06-SK314	S-314	土坑	1区	N64	III期(14世紀末～15世紀前半)以前		242
06-SK317	S-317	土坑	1区	N63	I～IV期(14～15世紀)		243
06-SE322	S-322	井戸	1区	O62・O63	IV期(15世紀中頃～後半)	土坑と重複	330
06-SK323	S-323	土坑	1区	O63	III～IV期(14世紀末～15世紀後半)		247
06-SK324	S-324	土坑	1区	L63	III期(14世紀末～15世紀前半)以降		88
06-SK326	S-326	土坑	1区	M64	II期(14世紀中頃～末)以前		247
06-SK328	S-328	土坑	1区	O62・P62	III～VI期(14世紀末～16世紀後半)		248
06-SK329	S-329	土坑	1区	O63	II期(14世紀中頃～末)		248
06-SE330	S-330	井戸	1区	N63・O63	古代(9世紀後半～10世紀前半)	古代の一括資料	333
06-SK333	S-333	土坑	1区	O64	I期(14世紀前半)以前		249
06-SK335	S-335	土坑	1区	O64	古代(9世紀)	緑釉陶器、黒色土器、製塩土器	251
06-SP338	S-338	柱穴	1区	O63	古代か		343
06-SD345	S-345	溝	1区	L62・L63・M63	III期(14世紀末～15世紀前半)		320
06-SB001	-	礎石建物	2区	L60・M60	VI～VII期(16世紀後葉～末)	「万寿寺西之屋敷」に関係?	35

第2節 調査区の遺構と層序

第3-2～3-5図は旧万寿寺跡第6次調査の遺構配置図である。遺構は大きく近世以降のものと中世のものに分けられる。中世の遺構は後述する第4層を除去した時点で検出できたものと、その下部の4'層や5層を掘り下げる過程で確認したもの、地山面で検出したものがあり、そのすべてを示したものが第3-3図である。包含層の掘り下げ中に確認できるものもあるためすべてを同一の面として捉えることは難しいが、ここでは遺構の前後関係や出土遺物から想定される年代を基に、便宜上、中世面の上層遺構（第3-4図）と下層遺構（第3-5図）に大別して報告する。また、調査区には旧国土座標（日本測地系）に基づく10m方眼の調査グリッドを設定した。このグリッドは中世大友府内町跡で共通して設定しているもので、旧万寿寺跡第6次調査区におけるグリッドは東西方向にL～Pのアルファベット、南北方向に59～64のアラビア数字を配し、両者を組み合わせてグリッドの呼称とした。

旧国土座標
(日本測地系)

次に旧万寿寺跡第6次調査の層序を第3-6～3-9図に示す。

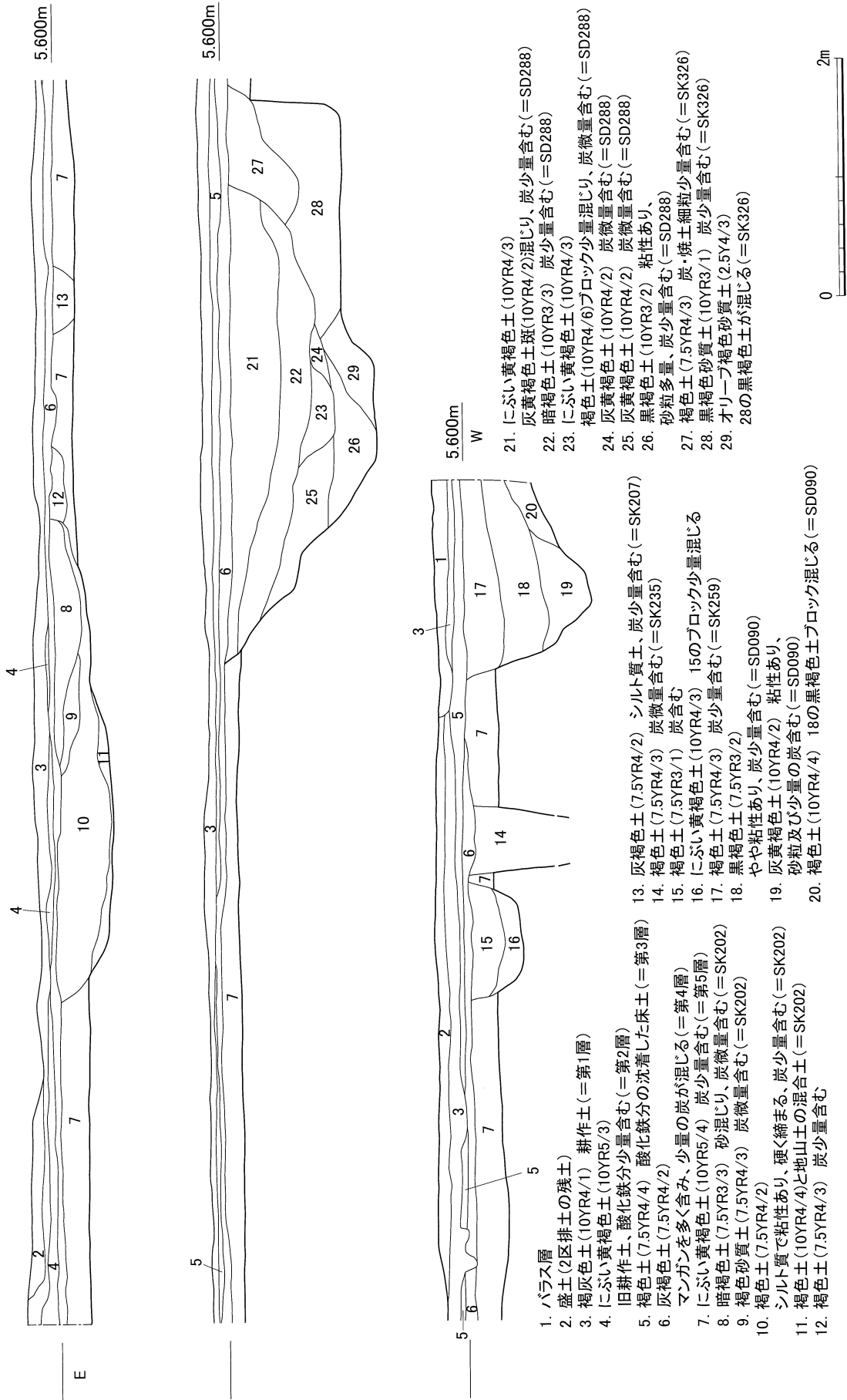
第1層は褐灰色の耕作土で、上部は耕起されて脆い。第2層はにぶい黄褐色の旧耕作土で、少量の酸化鉄分を含む。第3層は褐色の床土層である。酸化鉄分の沈着が著しく、全体に硬く締まる。近世の遺物を包含し、この層の下面で近世以降の耕作溝等の遺構を検出した。第4層は灰褐色土で、マンガンを多く含み、少量の炭が混じる。中世～近世初頭の遺物を包含する。層厚は10～20cmである。また、調査区の西側では下部にマンガンを多く含む暗褐色土が認められる。灰褐色土と同質であり、漸位的に色調が変化するため4層として扱った。第4'層は調査区西半部を中心に、最大で約60cmと比較的厚く堆積する。暗褐色の砂質土で炭を含む。中世の遺物を多く含む整地層である。第5層はにぶい黄褐色土で、少量の炭を含む。層厚は10cm程度で薄く、古代から中世の遺物を包含するが、その量は多くはない。中世の遺構がいくつも重複して掘り込まれる場所では堆積が失われほとんど見られない。基盤層は硬く締まる褐色砂質土である。部分的に第5層との間にシルト質の褐色土の堆積が認められるが、基盤への漸位層と考えられる。中世の遺構は第4層の下面から基盤層上面の間で検出される。

近世以降の
耕作溝
中世～近世
初頭の遺物
を包含

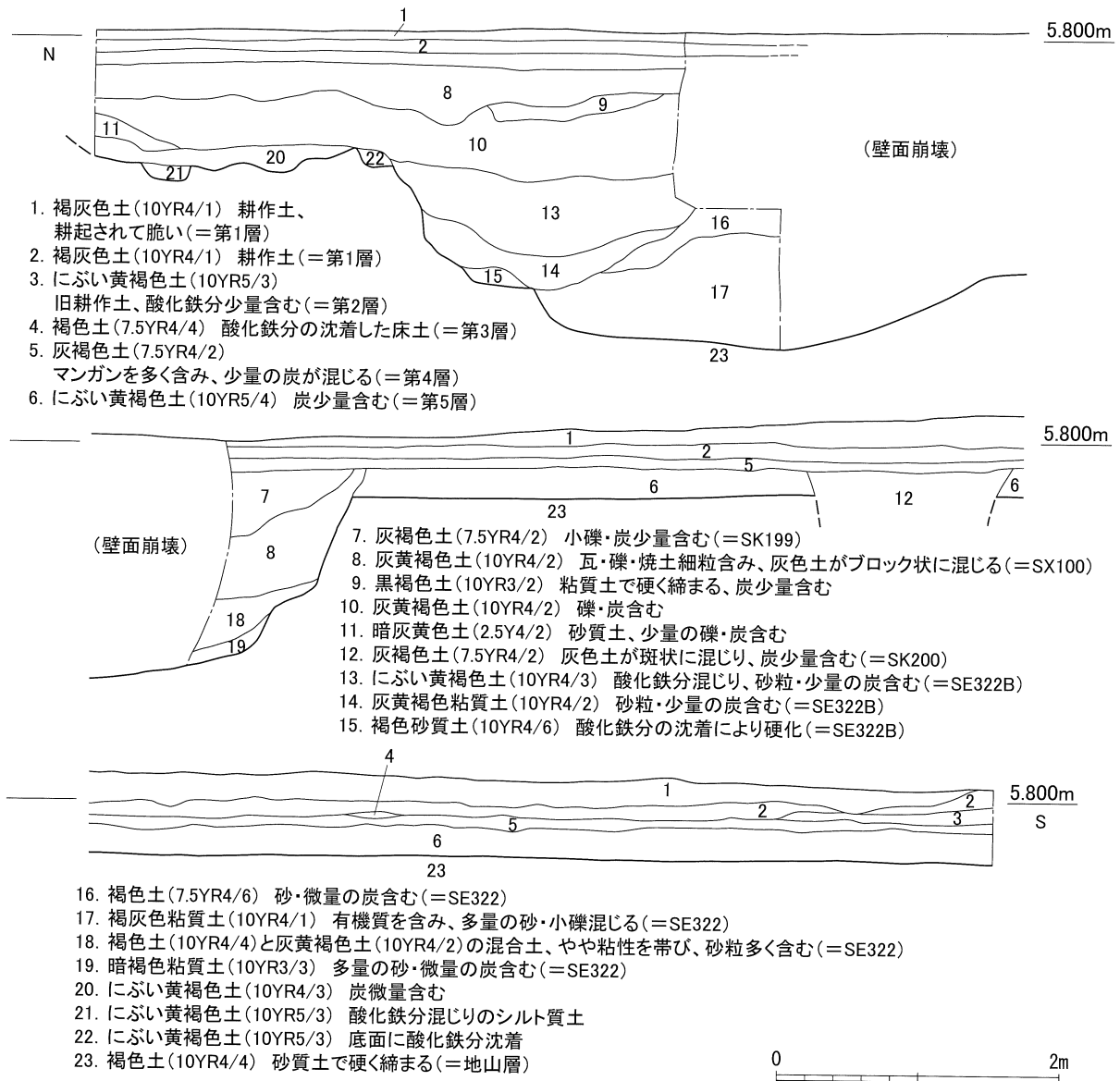
整地層

古代から中世
の遺物を包含

以上が基本となる層序である。東西方向では調査区の東部、N60グリッドの中央付近からO60グリッドの中央付近まで、南北方向ではN60・O60グリッドからN64・O64グリッドまでは比較的基盤が安定し、土層の堆積も薄い。対して調査区の西側、M60・N60グリッドからM63・N63グリッド、O61グリッド東半からO63グリッドにかけては複雑な堆積が認められる。これはこの範囲に大型の土坑06-SK097や06-SK131、溝状遺構、井戸などが複雑に掘り込まれるため地盤が不安定であることと無関係ではなく、これら遺構の埋没後にできた窪地を整地するために、遺物や礫とともに土を入れて埋めたためと考えられる。これらの場所で遺物集中ブロックが多くみられるのはそのためである。



第3-6図 旧万寿寺跡第6次調査区土層断面図(1区南壁 1/50)



第3-7図 旧万寿寺跡第6次調査区土層断面図(1区東壁 1/50)

第3節 近世以降の遺構と遺物

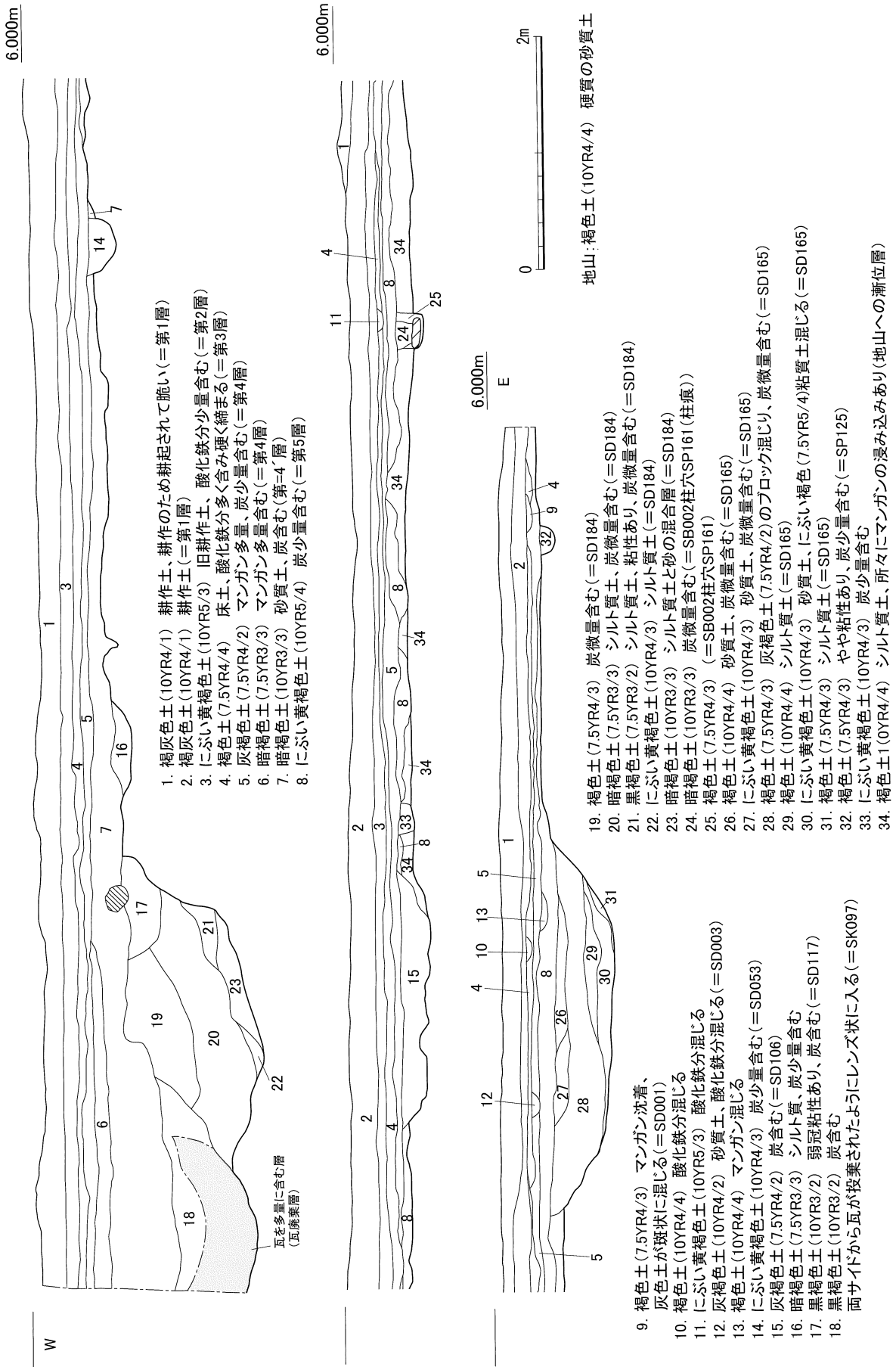
近世以降の耕作溝
 小規模な遺物集中ブロック
 近世初頭の遺物を含む

旧万寿寺跡第6次調査で最初に確認される遺構は、第4層の上面で検出された近世以降の耕作溝と考えられるものである。また、一部で小規模な遺物集中ブロックが確認された。第4層は唐津や初期伊万里など近世初頭の遺物を含むことから、これら遺構は確実に近世以降のものであるが、遺構の詳細な年代は明らかにできない。また、電柱に伴う攪乱も3基確認された。ここから出土した遺物についてもここで扱う。

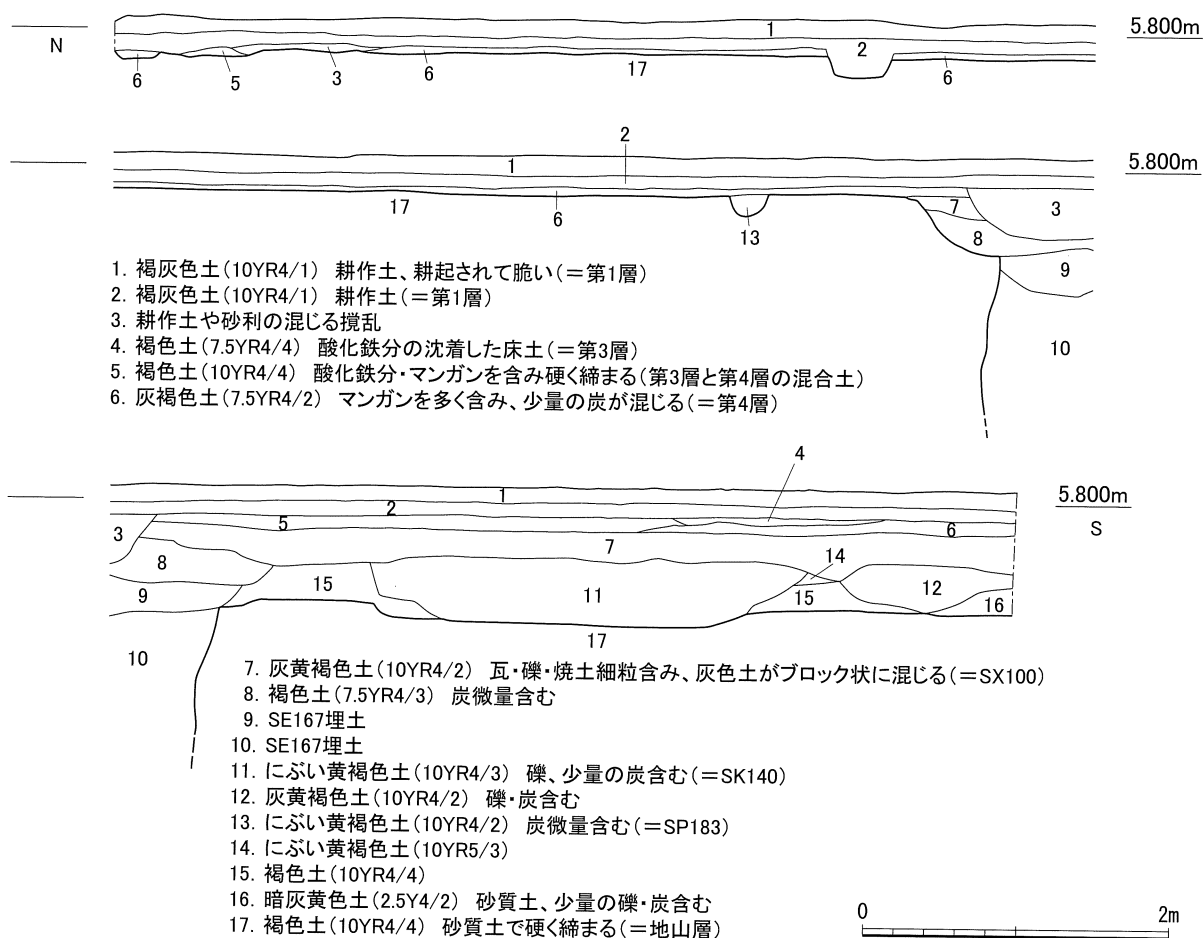
06-SK194 (攪乱) 出土遺物 (第3-10図)

06-SK194は1区のO64グリッドで検出した電柱の攪乱で、古代から中世の遺物が出土した。1は底部に高台の付く土師器碗である。内外面は横位の粗いミガキを施す。2は内面を燻して黒色に仕上げた黒色土器A類碗である。内外面ともに粗いミガキが認められる。これらは古代の遺物である。3は東播系須恵器甕の肩部付近の破片である。外面には方向を変えて付けられた綾杉文ふうのタタキ目がみられる。

東播系須恵器甕



第3-8図 旧万寿寺跡第6次調査区土層断面図(2区北隣 1/50)



第3-9図 旧万寿寺跡第6次調査区土層断面図(2区東壁 1/50)

06-SD001 ~ 010 (第3-11図)

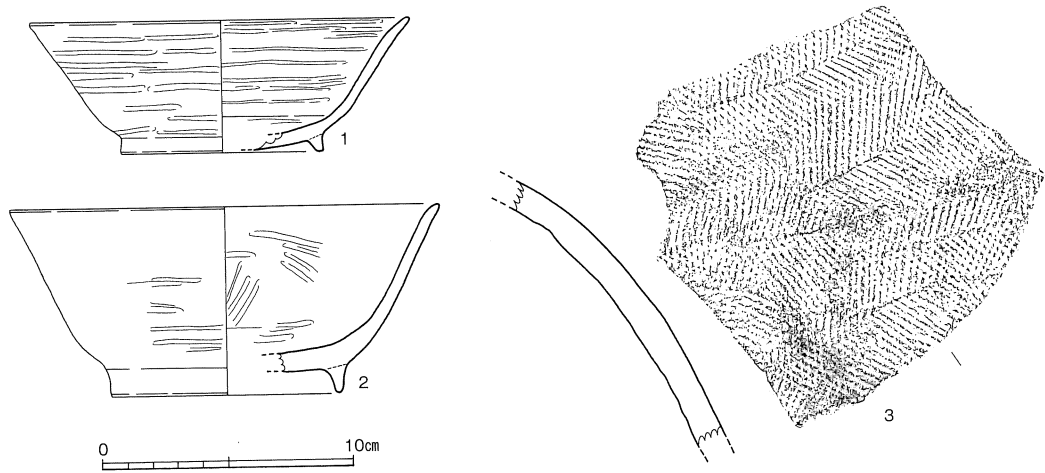
耕作溝群

2区のN60・61からP60・61グリッドで検出した耕作溝群である。いずれも南北方向に延びるので、残りの良いSD001・SD003・SD010は北側調査区外に続く。これらの溝で長さ約7~11m、幅約0.6~0.8mを測る。深さはいずれも5~10cm程度と浅い。埋土はSD001が灰色土の斑状に混じる褐色土(7.5YR4/3)、SD002はマンガン細粒を含む灰褐色砂質土(7.5YR4/2)、SD003・SD005・SD006・SD010は酸化鉄分の混じる灰黄褐色砂質土(10YR4/2)で、SD006は微量の炭を含む。遺物の出土はほとんどなく、図示できるものはない。

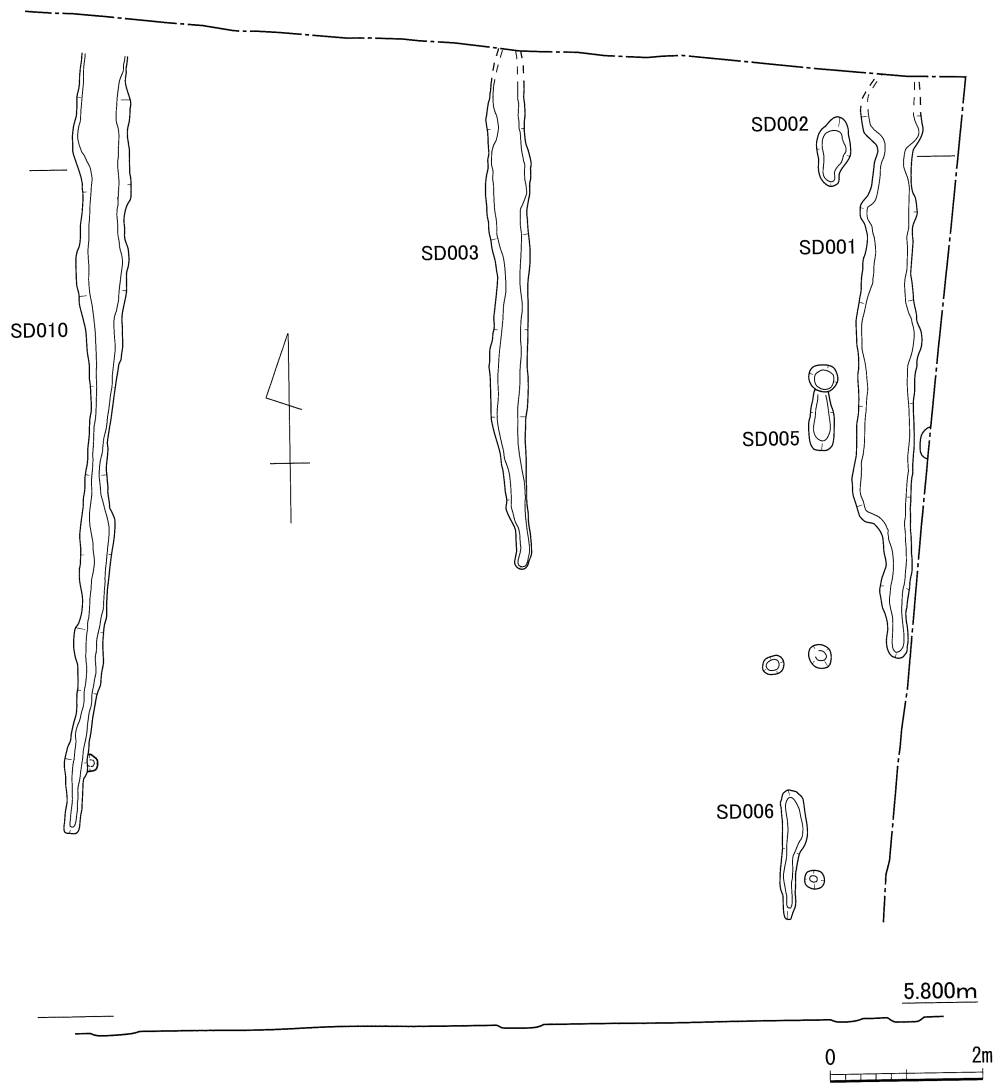
06-SD012 ~ SD024 (第3-12図)

耕作溝群

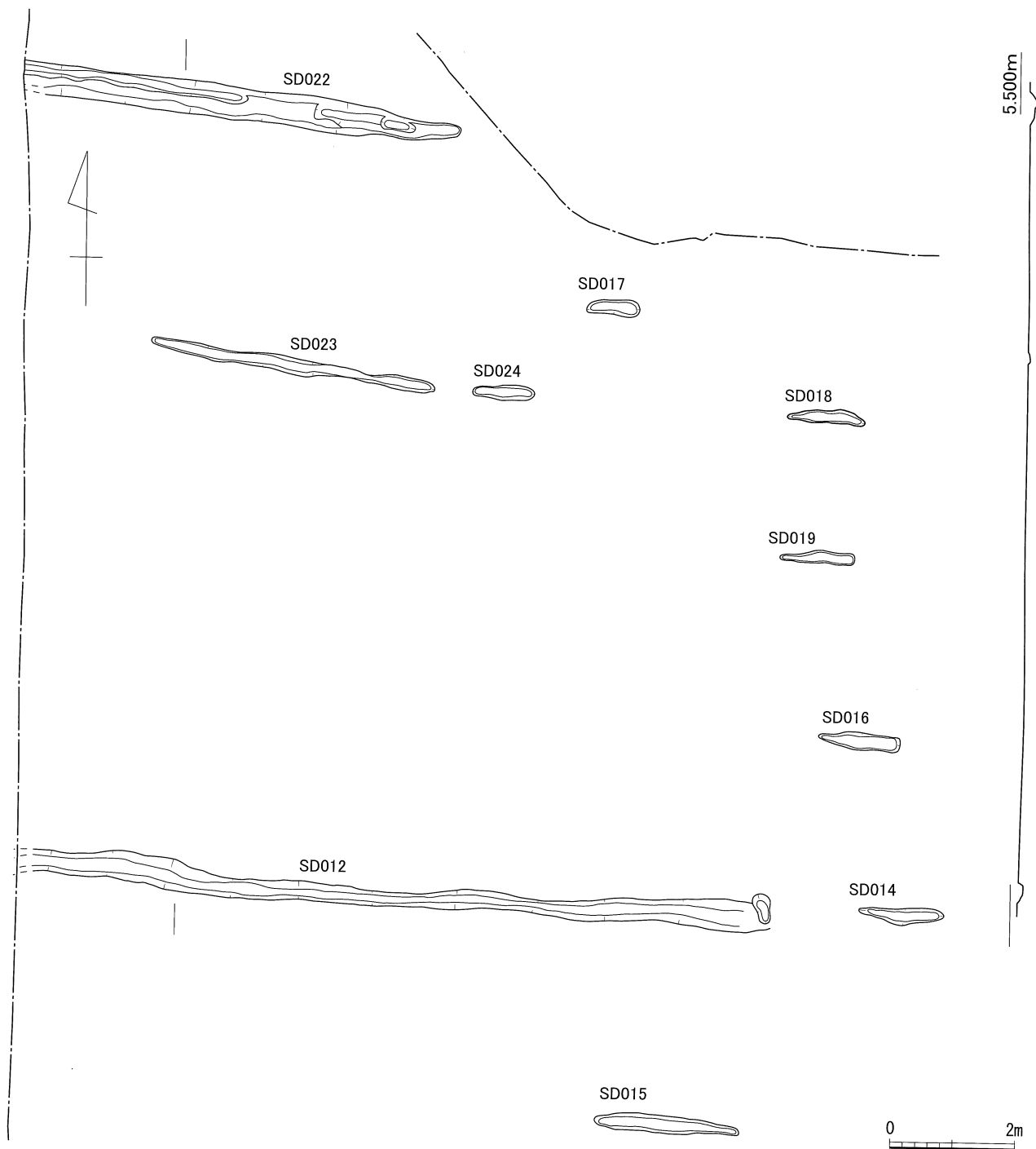
2区のL60グリッドからM62グリッドにかけて検出した耕作溝群である。前述のSD001~SD010が南北方向であるのに対し、SD012~SD024は東西方向をとる。両者間で南北方向に段状の落ち込みが見られ、これを境として方向を異にしている可能性もある。SD012・SD022は残りがよく、西側調査区外に続く。長さはSD012が12.6m以上、SD022は7.4m以上、幅は約0.3~0.6mを測る。SD022は北半部が一段深くなっており、溝が重複していた可能性もある。SD014~SD019・SD024は削平のためか長さ約0.9~2.4m、幅約0.2~0.3mと小規模である。SD023は長さ約4.7mで、幅は約0.15~0.2mと狭い。深さはいずれも数cm~10cm程度と浅いが、SD022は上記のためか約0.15mと他に比べやや深い。埋土はSD012が焼土細粒及び炭を含む暗褐色土(7.5YR3/3)、SD014



第3-10図 06-SK194 (攪乱) 出土遺物実測図 (1/3)

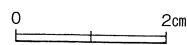


第3-11図 06-SD001 ~ 010近世耕作溝群実測図 (1/100)



第3-12図 06-SD012～024実測図 (1/100)

～SD019は酸化鉄分を含む灰黄褐色砂質土 (10YR4/2)、SD022はマンガン細粒及び少量の炭を含む灰褐色土 (7.5YR4/2)、SD023・SD024はやや砂質の褐灰色土 (7.5YR4/1) で、SD023は酸化鉄分及びマンガン細粒を含む。遺物の出土は極めて少なく、SD014から銭貨の小破片が出土した以外は図示できるものがない。



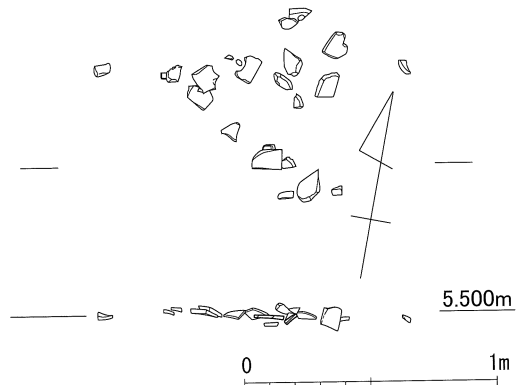
第3-13図 06-SD014出土遺物実測図 (1/1)

06-SD014出土遺物 (第3-13図)

1は銭貨の破片で、下部に配された行書体の「通」字が判読できる。銭種は不明である。

06-SX021 (第3-14図)

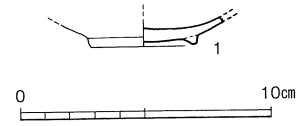
遺物集中箇所
2区のN60グリッドで検出した礫及び瓦等の遺物集中箇所である。遺物等の分布範囲は東西約1.28m、南北約0.78mで、検出高は約5.5mを測る。こうした遺物集中としては最上部で確認できる遺構で、遺構を構成する遺物はこれより下位で確認される同種の遺構よりも小振りである。こうした点から、近世以降の耕作に際して耕起された遺物等をまとめたものとも考えられる。



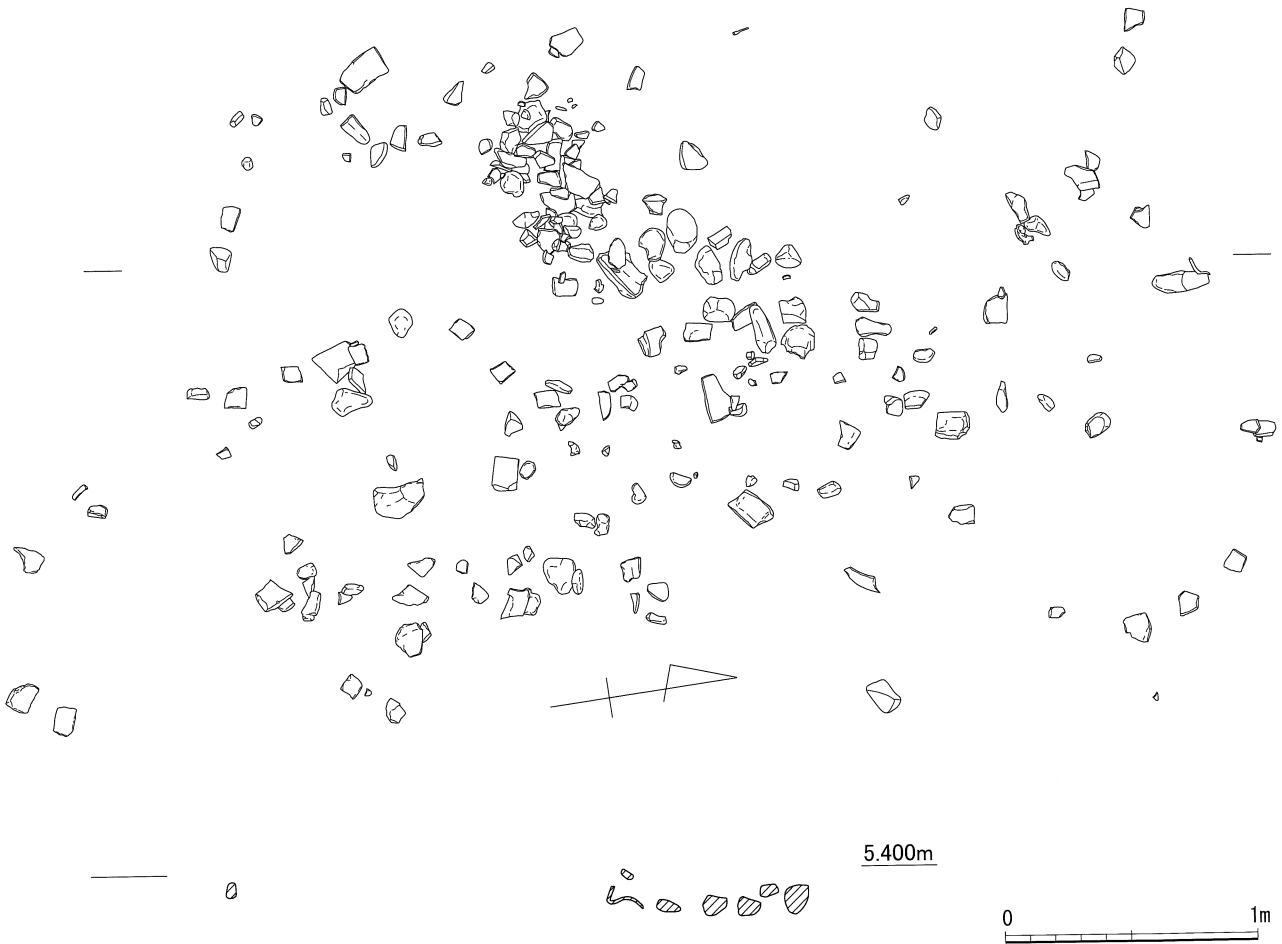
第3-14図 06-SX021実測図 (1/30)

06-SX021出土遺物 (第3-15図)

1は底面に高台を貼り付けた土師器椀である。高台の断面形状は逆台形状を呈する。



第3-15図 06-SX021出土遺物実測図 (1/3)

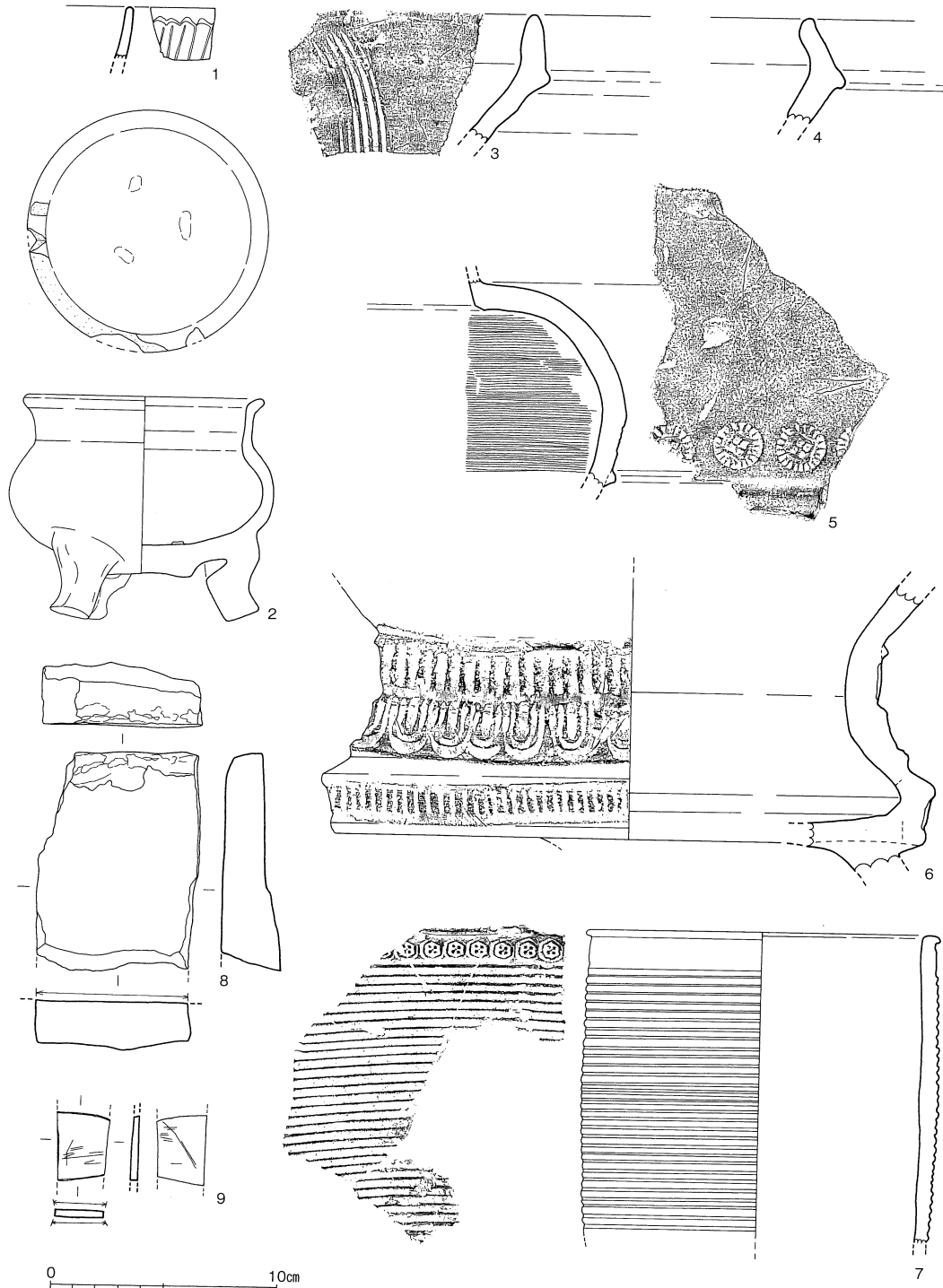


第3-16図 06-SX025実測図 (1/30)

06-SX025 (第3-16図)

遺物集中ブ
ロック

2区のM60・N60・M61・N61グリッドで検出した礫及び瓦・土器類等の遺物集中ブロックである。遺物や礫は東西約2.75m、南北約5.0mの範囲で分布し、検出高は約5.4～5.5mである。一部では遺物が密集する状況が見られた。遺物は中世の瓦や陶磁器、土器類、石製品等が出土しており、中にはSX025より下位にあるSK087やSK131、SD302との遺構間接合が認められるものもあった。こうした状況から、下部の遺構に包含された遺物が後世に掘り起こされて形成された遺構と判断される。遺構の年代は近世初頭の遺物を含む第4層の上位で検出されることから、近世初頭以降に形成されたものと判断する。



第3-17図 06-SX025出土遺物実測図 (1/3)

06-SX025出土遺物 (第3-17図)

細線描蓮弁文

1・2は青磁である。1は碗の細片で、外面に細線描蓮弁文を施す。2は香炉で、SX025の他にSK087・SK131・SD302Bから出土した破片との接合が確認できる。丸く膨らむ胴部から頸部が短く立ち、口縁部は外反する。底部には3つの脚を貼り付ける。見込みには3箇所が目痕が認められる。3・4は備前焼の摺鉢で、口縁部が上方に延び端部は丸くおさめる。5～7は瓦質土器である。5は釜又は風炉で、胴部に凸帯を配し、その上位にスタンプ文を施す。6は華瓶で、底部上位に蓮弁文を配する。底部には脚が付く。7は火鉢で、外面に多条の沈線、口縁下に六角形のスタンプ文を施す。8・9は砥石である。

06-SX026 (第3-18図)

遺物集中ブロック

2区のM61・N61グリッドで検出された、礫や瓦・土器類等の遺物集中ブロックである。遺物等の分布範囲は東西約2.8m、南北約3.3mで、検出高は約5.4～5.45mを測る。遺物は青磁、土師器、瓦質土器、瓦等中世のものが出土したが、SX025と同様に第4層の上部で検出できることから、近世初頭以降の遺構と判断される。

06-SX026出土遺物 (第3-19図)

細線描蓮弁文

1・2は青磁碗である。1は外面に細線描蓮弁文を施す。3～7は瓦質土器である。3は風炉で、上部が連弧状となる風門をもつ。外面は全体に粗いミガキを施す。4～6は火鉢である。4・5は口縁下の凸帯間に菊花文スタンプを施す。6のスタンプ文は花形文である。7は脚部で外面に3条の線刻を施す。8は

焼土塊

焼土塊である。高熱により何らかのものが溶着したものであるが、原形を留めていない。万寿寺の火災により生じたものである。9は塼である。10は軒平瓦で、瓦当中央に配された蓮華文が残る。

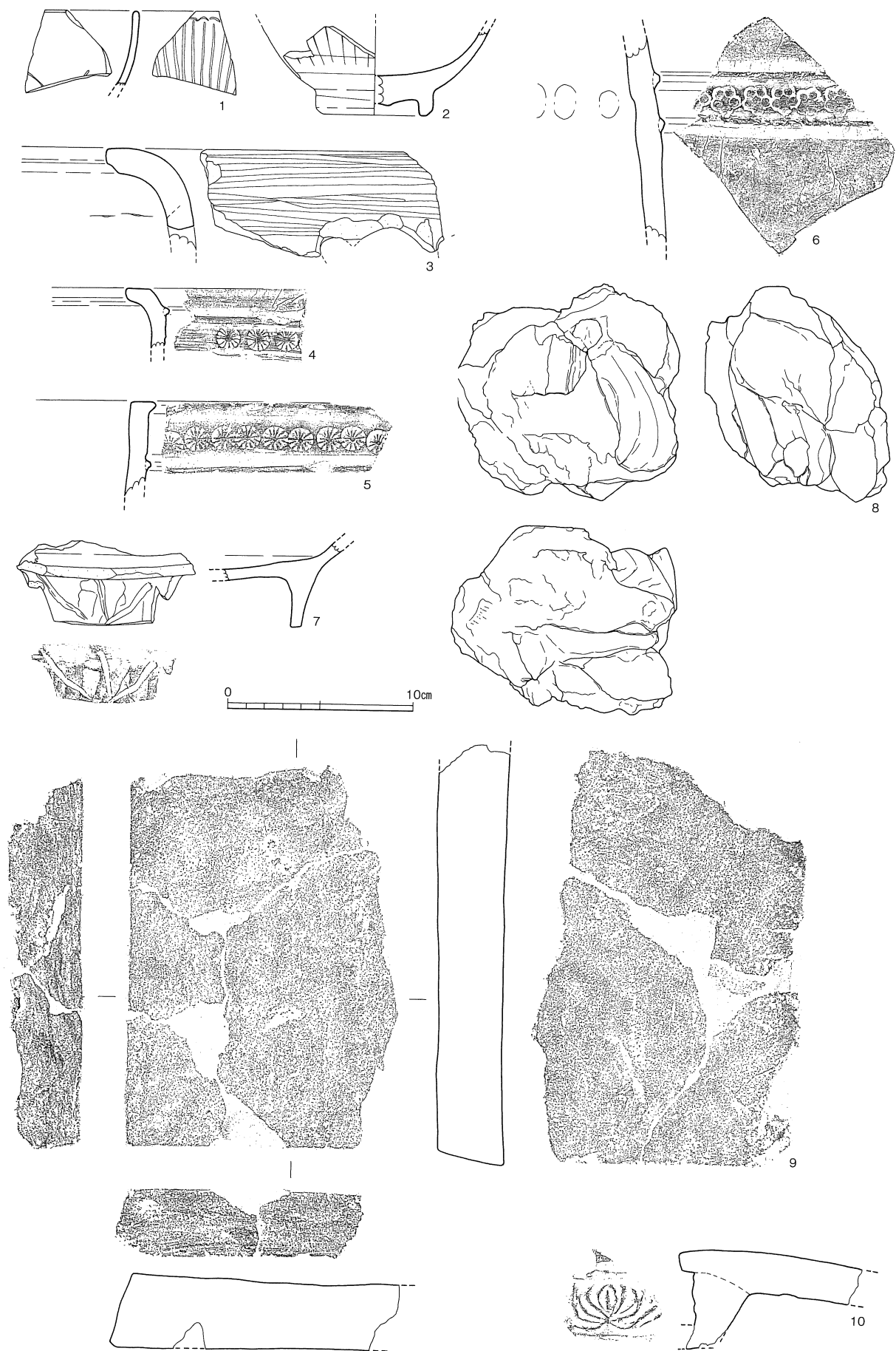
万寿寺の火災

瓦当は顎貼付技法により作り出す。

顎貼付技法



第3-18図 06-SX026実測図 (1/30)



第3-19図 06-SX026出土遺物実測図(1/3)

第4節 中世面上層の遺構

中世の遺構は第4層を除去した時点で検出できたものと、その下部の4'層や5層を掘り下げる過程で確認したもの、地山面で検出したものがある(第3-4図)。包含層の掘り下げ中に確認できるものもあるためすべてを同一の面として捉えることは難しいが、ここでは遺構の前後関係や出土遺物から想定される年代を基に、便宜上、中世面上層と下層に大別して報告する。

中世遺構の上層で検出したものとして、礎石建物および礎石の可能性のある石材、土坑、溝、井戸、墓、遺物集中ブロックがある。以下、遺構ごとに報告する。

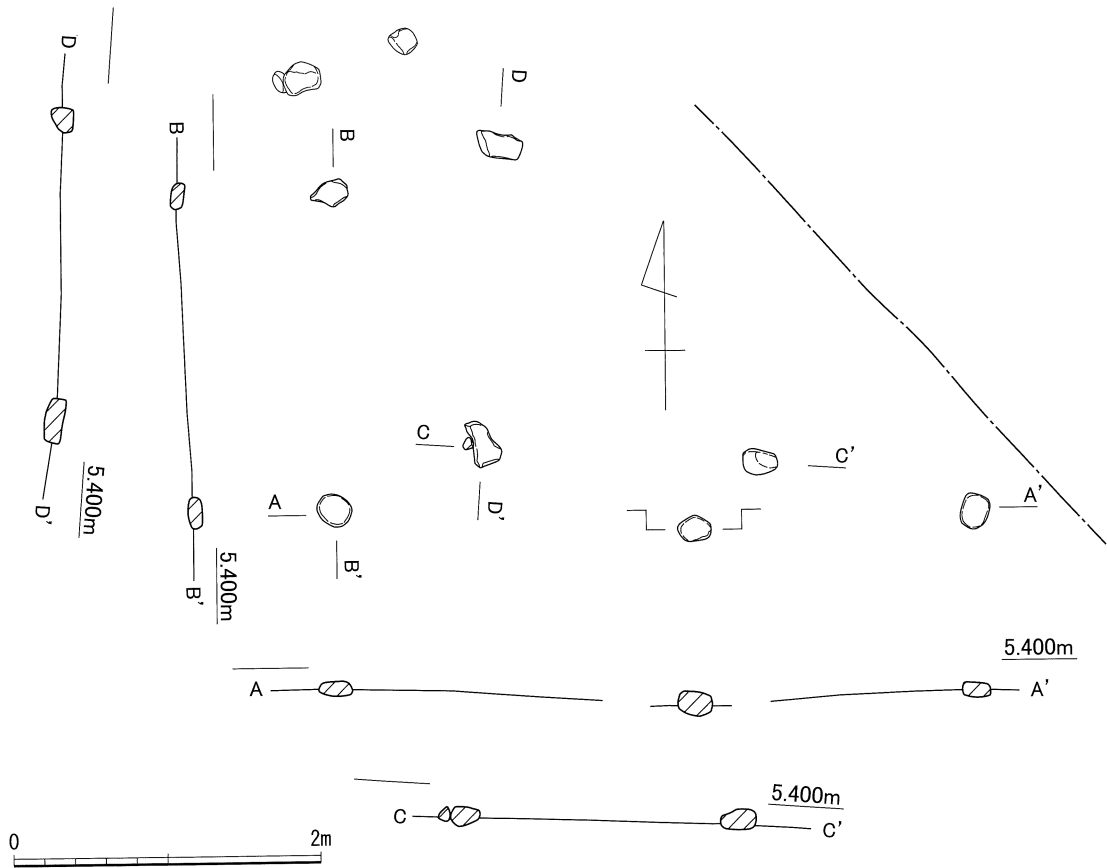
1. 礎石建物

06-SB001 (第3-20図)

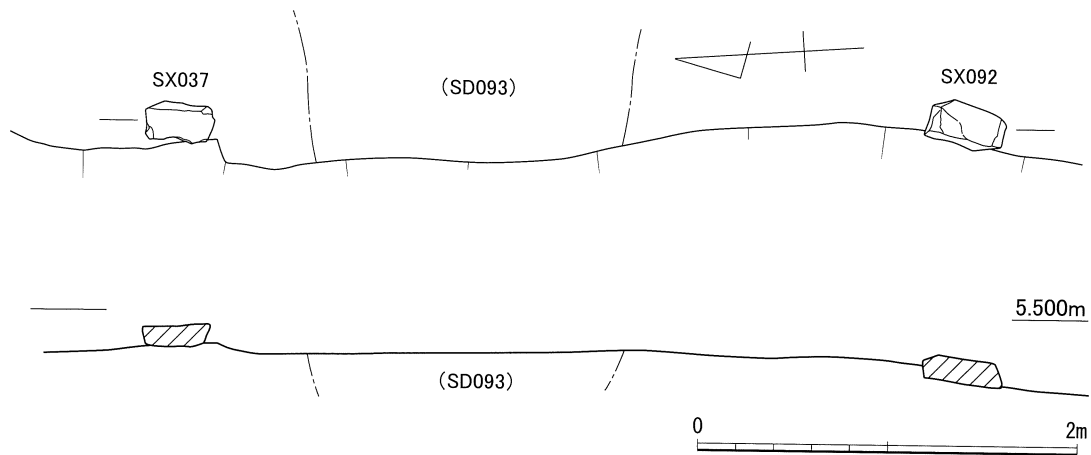
礎石建物

2区の北東部、L60・M60グリッドで礎石状の平坦面を持つ、25～30cm大の石材7点が同じようなレベルで検出されたもので、礎石建物の可能性がある。礎石の並びとしては2つあり、外側のものは東西2間×南北1間分、内側のものは東西・南北方向とも1間分を確認できるが、調査区範囲が狭く全体の規模は明らかにできない。建物2棟の重複か、あるいは両側に底を持つ構造が考えられるが、後者の場合は礎石の位置が揃わないこと、軸線が一致しないことから前者の可能性が高い。従って、外側のものをSB001A、内側のものをSB001Bとして区別する。

SB001Aの礎石間の距離は、南北が約2.1m、東西方向は真ん中の礎石の位置が軸線から少し南にずれるが、西から約2.4m、1.9mを測る。南北を基軸とした場合の軸線はほぼ真北にとる。SB001Bでは、南北約2m、東西約1.8mである。南北を基軸とした場合の軸線はN-4°-E、東西方向ではN-94°-Eとなり、SB001Aよりもやや東に振れる。検出高さ約5.15～5.25mである。SB001A・Bともに遺物の出土はなく、遺構の時期は明らかにできない。ただし、15世紀代に比定される溝SD090



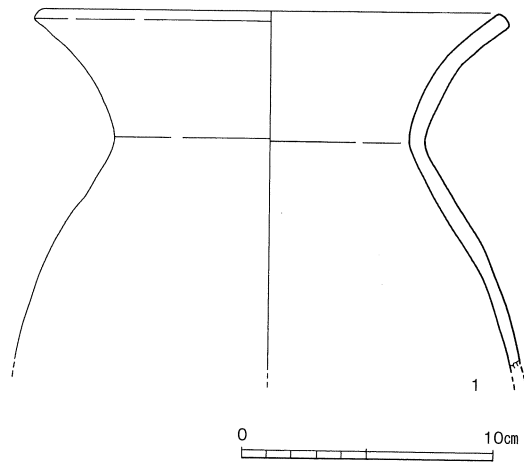
第3-20図 06-SB01実測図 (1/50)



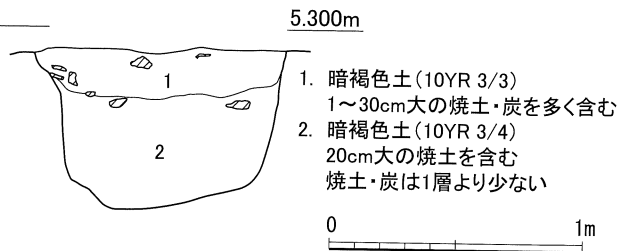
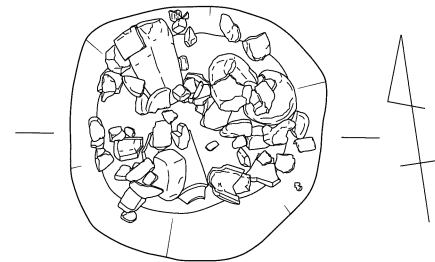
第3-21図 06-SX037・SX092実測図 (1/40)

埋没後に構築されていること、中世遺構面の上部付近で検出したこと、そして国道10号を挟んだ反対側の調査区である中世大友府内町跡第34・43次調査区から、万寿寺西限の堀を埋め立てた後に建てられた複数の礎石建物を確認⁽¹⁾していることを勘案すると、これと関連する建物である可能性が考えられよう。中世大友府内町跡第34・43次調査の礎石建物は上記の状況から、天正9年(1581)の万寿寺炎上後に柴田礼能のもとで開発された「万寿寺築地之内并西之屋敷」との関連で捉えられている⁽²⁾。それと関連する施設であれば、この建物は「万寿寺築地之内并西之屋敷」の範囲を考える上でも重要である。以上の点から、Ⅶ期(16世紀末葉)に位置付ける。

「万寿寺築地之内并西之屋敷」



第3-22図 06-SX092出土遺物実測図 (1/3)



5.300m

1. 暗褐色土(10YR 3/3)
1~30cm大の焼土・炭を多く含む
2. 暗褐色土(10YR 3/4)
20cm大の焼土を含む
焼土・炭は1層より少ない

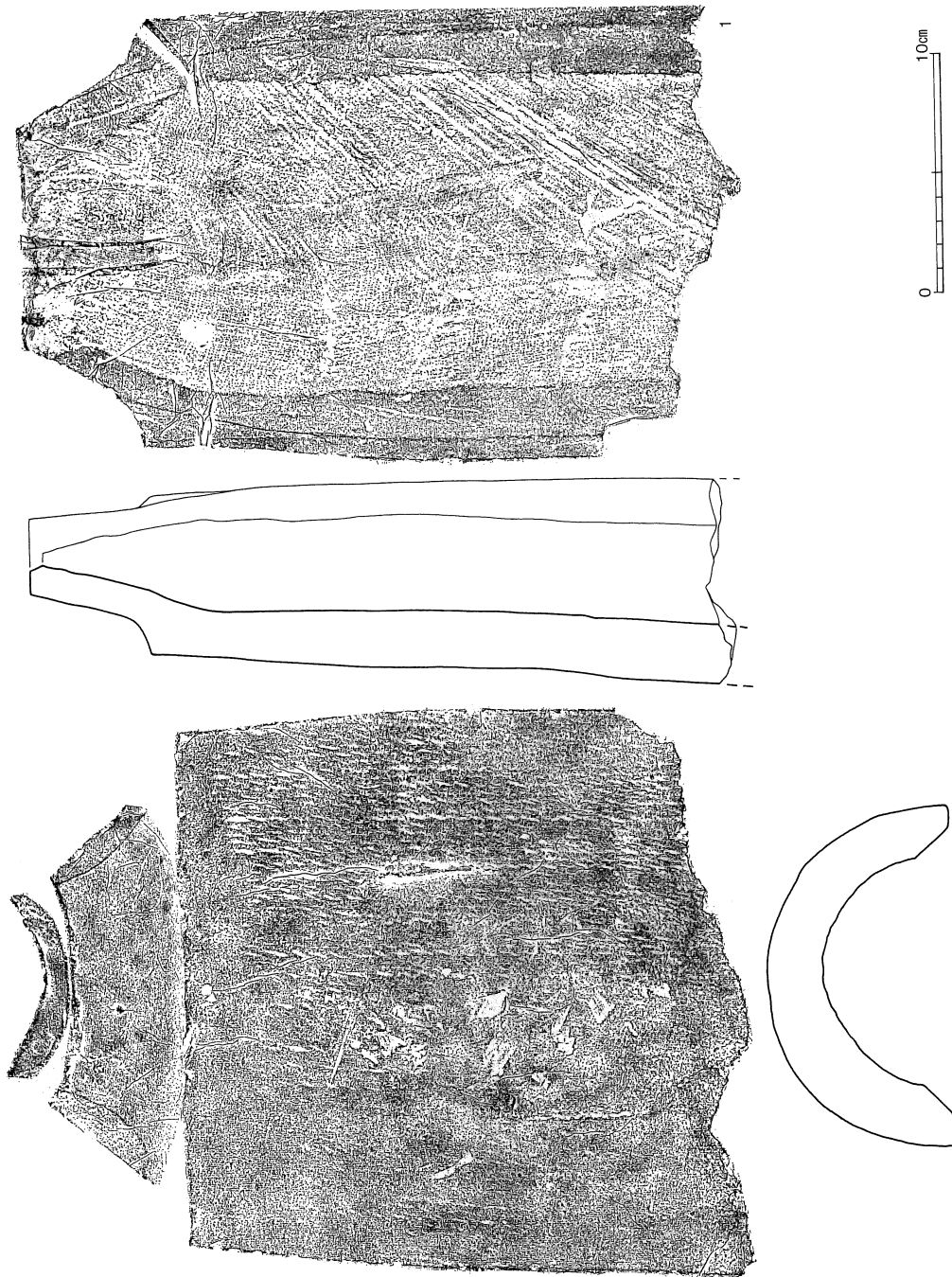
0 1m

第3-23図 06-SK029実測図 (1/30)

06-SX037・SX092 (第3-21図)

2区のN60~N62グリッド中央付近で確認された段状の落ち込み際に検出された2点の礎石状石材である。SX037はN61グリッド、SX092はN62グリッドで検出した。石材はともに溶結凝灰岩で、直方体状に整形されている。SX037は長辺0.47m、短辺0.20m、厚さ0.12m、検出標高は5.43mを測る。SX092は長辺0.42m、短辺

註(1) 坂本嘉弘・友岡信彦2008『豊後府内8』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第23集、大分県教育庁埋蔵文化財センター
 註(2) 坂本嘉弘2008「総括」『豊後府内8』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第23集、大分県教育庁埋蔵文化財センター



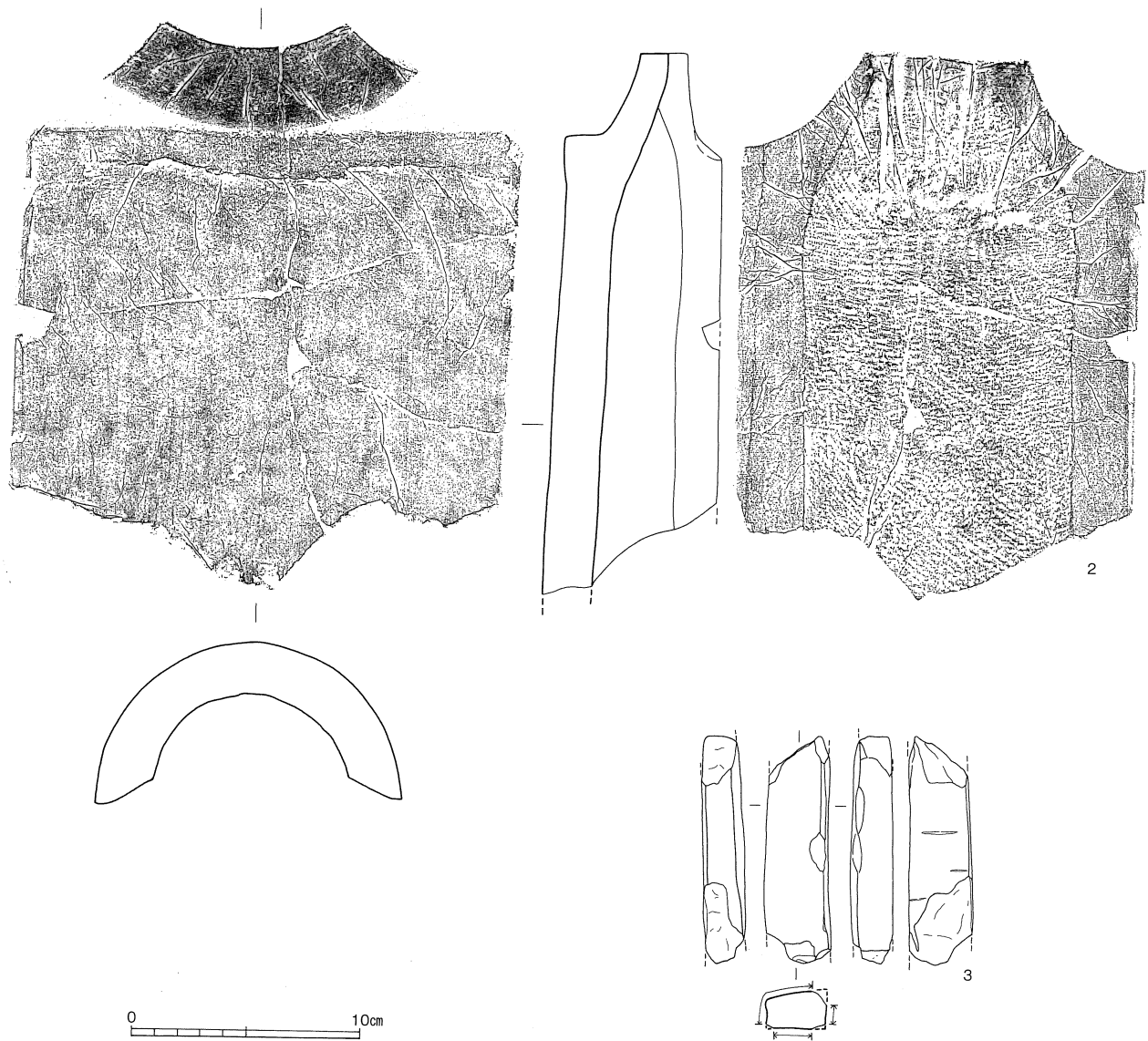
第3-24図 06-SK029出土遺物実測図① (1/3)

石材が東側
から投棄

区画溝

別の建物を構
成する可能性
16世紀前半に
廃絶した建物
の可能性

0.22m、厚さ0.17m、検出標高5.31mを測る。両者の間は中心間で約4.20mであり、両者が同一の建物であればもう1石あるべきだが確認できなかった。また、これより東側でも礎石状石材は認められなかった。後述するSK131ではこうした溶結凝灰岩を直方体状に加工した石材が東側から投棄されたような状態で出土しており、これらが建物であればこの時に廃絶し部材が一斉に廃棄された可能性がある。ただし、SK131で出土した石材はSX037やSX092より一回り大きいものが目立つ。あるいは両者の間にはなんらかの区画溝と思われるSD093が位置しており、これと関連するなら両者は別の建物を構成する可能性もある。時期比定のできる遺物の出土がないため詳細は不明だが、使用された石材が溶結凝灰岩であることを重視すると上記のSK131との関連が十分に考えられ、V期（16世紀前半）に廃絶した建物の可能性を考えたい。



第3-25図 06-SK029出土遺物実測図② (1/3)

06-SX092出土遺物 (第3-22図)

1はSX092検出作業時に出土した弥生土器壺である。

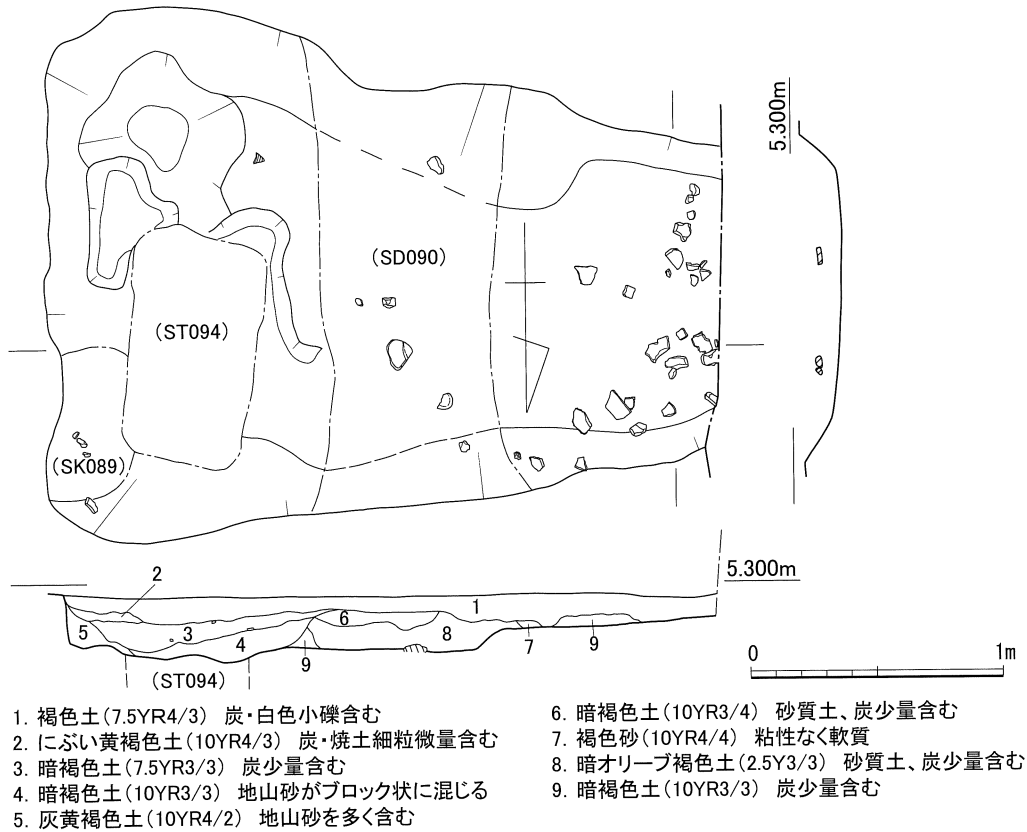
2. 土坑

06-SK029 (第3-23図)

焼土や炭の
濃密な分布

被熱により
赤変
火災処理土坑

2区のM61グリッドで検出した土坑である。検出面で焼土や炭の濃密な分布が認められたため、周囲との土壌の違いは明瞭である。平面形状は隅丸方形から略円形を呈し、長辺・短辺とも1.0m、深さ0.53mを測る。埋土は焼土・炭を含む暗褐色土で、焼土・炭の混入度合いや焼土塊の大きさから2層に分層できる。上層は焼土・炭とも多量に含み、焼土塊も30cm程度の大振りのもを含むのに対し、下層では焼土・炭とも上層より少なく、焼土塊も20cm程度とやや小振りとなる。遺物は瓦を中心に出土しており、瓦には被熱により赤変したのも認められる。遺構の性格としては火災で生じた瓦礫を処分した廃棄土坑、すなわち火災処理土坑である。遺構の時期を特定できる遺物に乏しいが、16世紀前半の大型土坑SK131の埋没後に構築されることから、VI期 (16世紀後半) 以降



第3-26図 06-SK035実測図(1/30)

鳥津氏の府内侵攻

であることは確実である。こうした焼土を多量に含む土坑は中世大友府内町跡にあつては天正14年の鳥津氏の府内侵攻に伴う火災処理土坑と捉えられるが、レベルとしては中世の最上面で検出した遺構であり、このSK029もその可能性が高い。従つて、Ⅶ期(16世紀末葉)に位置づけたい。

06-SK029出土遺物(第3-24・3-25図)

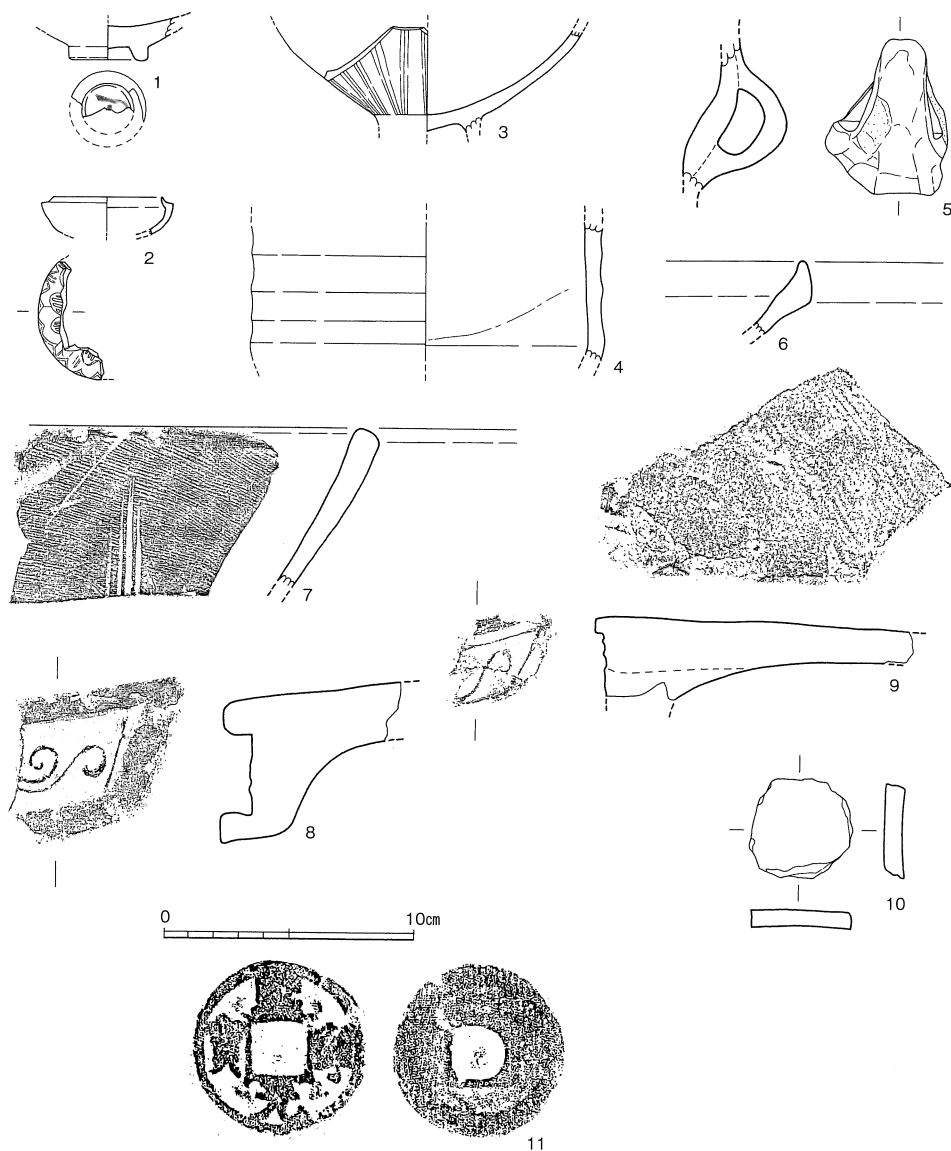
二次焼成

第3-24図1・第3-25図2は丸瓦である。どちらも凹面には布目痕とコビキ痕が認められる。1の凸面には縄目タタキ痕が残り、凸面玉縁部から凹面にかけて二次焼成により赤変している。3は砥石である。

06-SK035(第3-26図)

土坑墓ST094

2区のL60・M60グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形気味で、東端部に比べ西側の幅が狭い。西側が調査区外に続くため全体の規模は明らかにできないが、検出範囲で東西5.33m以上、南北は東端部で4.25m、西側で2.40m、深さ約0.4mを測る。遺構規模から、西接する中世大友府内町跡第29次調査の土坑SK083と同一遺構である可能性がある。埋土は9層に分層でき、下層は数度の掘り返しを読み取ることができる。最初に土坑中央に掘り込み(第6・8層)があり、次いで東西両側に最初の掘り込みを切る土層(1~5/7~9)が認められる。最終的には全体に最上層の褐色土が被覆している。遺物は土坑の西側で比較的まとまって出土している。この土坑を完掘した時点で、東端部側底面で長方形の掘り込みを持つ土坑墓ST094を検出した。両者の関係はまずST094が構築され、それをSK035が切っている。土層観察結果もその所見を裏付ける。また、北東端部は土坑SK089を切っている。遺構の年代は、16世紀後葉のST094を切ることから、Ⅶ期(16世紀末葉)に位置づけられる。

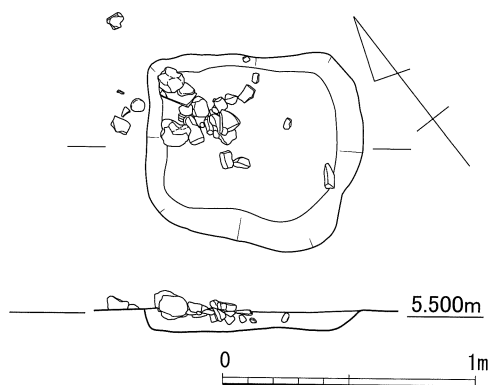


第3-27図 06-SK035出土遺物実測図(1/3・1/1)

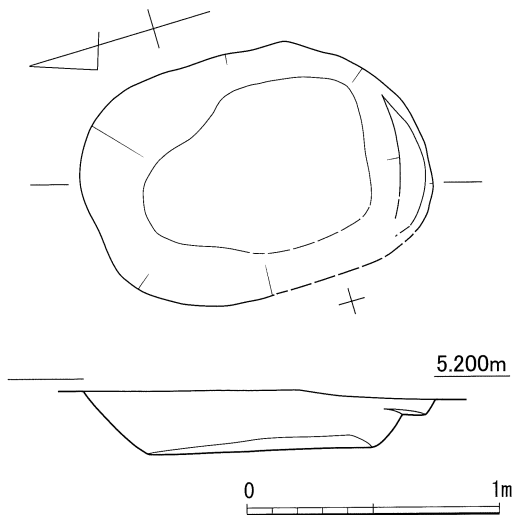
06-SK035出土遺物(第3-27図)

高台内に朱墨による文字

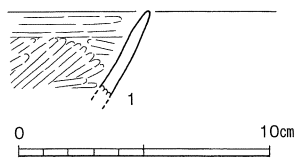
1・2は白磁である。1は碗で、高台内に朱墨による文字が残るが判読できない。2は合子の身で、外面には花卉状の型押し文がみられる。3・4は青磁である。3は碗で、外面に粗い蓮弁文を施す。4は筒形の香炉であろう。5は土師器の把手付甕で古代のもの。6は東播系須恵器の捏鉢である。7は瓦質土器の摺鉢で、内面に摺目を施す。8・9は軒平瓦で、瓦当に唐草文を配する。10は加工円盤で、瓦質土器火鉢の破片の周縁を研磨して円形に仕上げている。11は北宋の熙寧元寶(1068年初鑄)である。



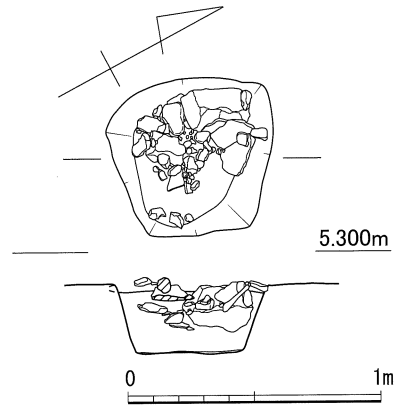
第3-28図 06-SK036実測図(1/30)



第3-29図 06-SK039実測図(1/30)



第3-30図 06-SK039出土遺物実測図(1/3)



第3-31図 06-SK043実測図(1/30)

06-SK036 (第3-28図)

2区のO60グリッドで検出した浅い掘り込みの土坑である。平面形状は隅丸方形を呈し、長辺0.88m、短辺0.78m、深さ0.10mを測る。埋土は暗褐色砂質土(10YR3/3)の単一層で、酸化鉄分及び微量の炭を含む。土坑の北端部から礫や遺物がまとまって出土した。遺構の年代を特定できる遺物の出土はなく、時期は不明である。

SK039 (第3-29図)

2区のM61・M62グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形で、長辺1.41m、短辺0.97m、深さ0.25mを測る。土坑の南側にはテラス状の段がつく。埋土は灰褐色土(7.5YR4/2)の単一層で、マンガン細粒及び微量の炭を含む。遺物は古代の土器等が出土したが量は少ない。遺構の時期を特定できる遺物がないが、16世紀前葉のSK131埋没後に構築された遺構であることから、VI期(16世紀後葉)以降に帰属することは確実である。埋土が第4層に近似することから、近世初頭まで下る可能性も考えられる。

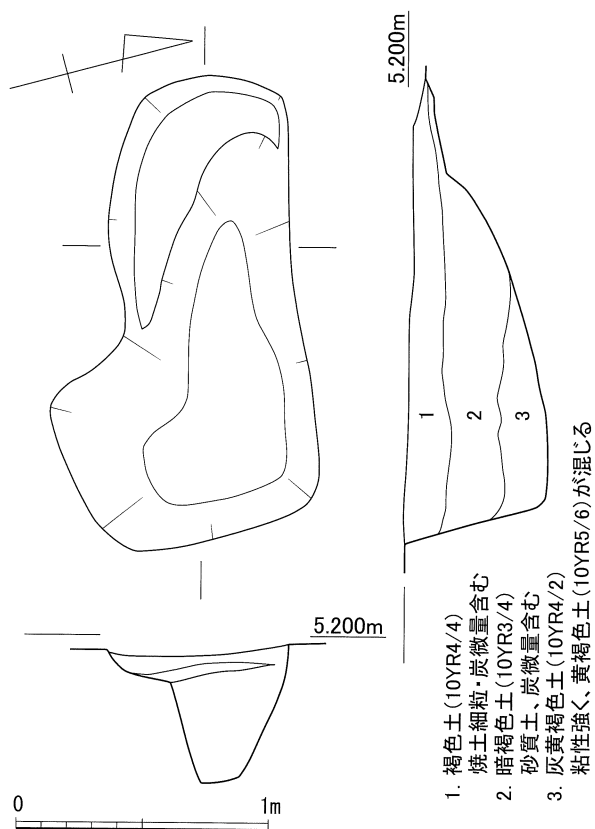
06-SK039出土遺物 (第3-30図)

1は内面を黒色に仕上げた黒色土器A類碗で、内面にはミガキを密に施す。

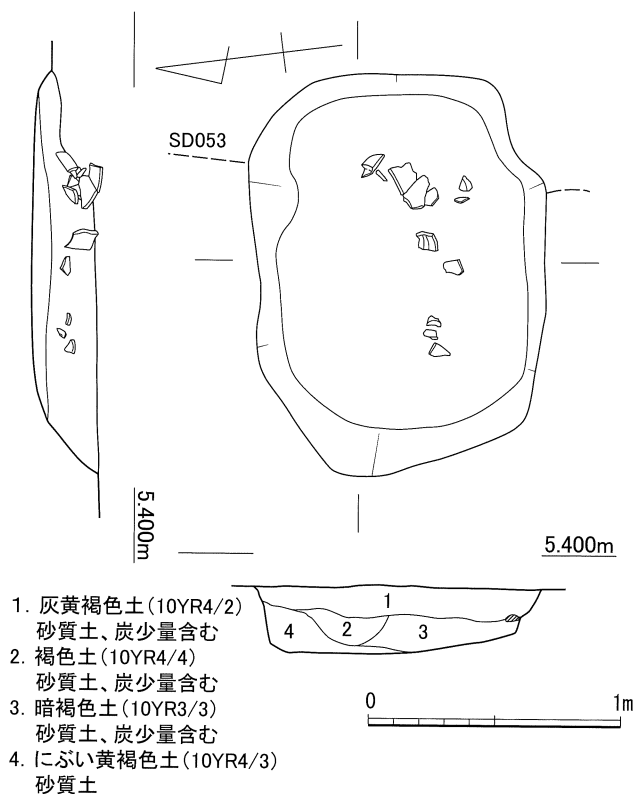
06-SK043 (第3-31図)

2区のM62グリッドで検出した土坑である。平面形状はやや東辺が広い隅丸方形を呈し、長辺0.63m、短辺0.62m、深さ0.27mを測る。埋土は砂質のにぶい黄褐色土(10YR4/3)で、にぶい黄褐色土のブロックと少量の炭が混じる。土坑内からは多量の凝灰岩片と石英質の玉砂利が出土したが、土器等の遺物はほとんど含まない。不要な凝灰岩片を処分した廃棄土坑と考えられる。遺構の

多量の凝灰岩片と石英質の玉砂利



第3-32図 06-SK048実測図(1/30)



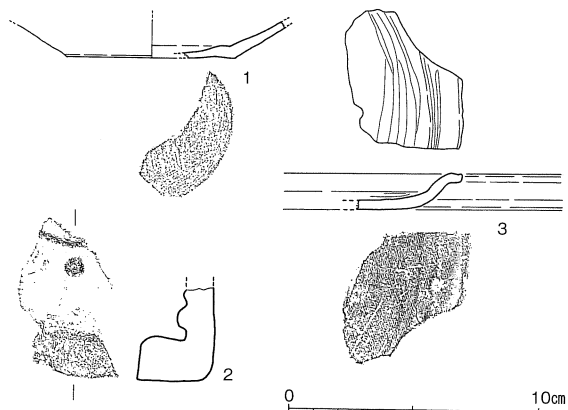
第3-33図 06-SK054実測図(1/30)

詳細な年代は明らかにできないが、16世紀前葉の土坑SK131埋没後に構築された遺構であることから、VI期(16世紀後葉)以降に帰属することは確実である。

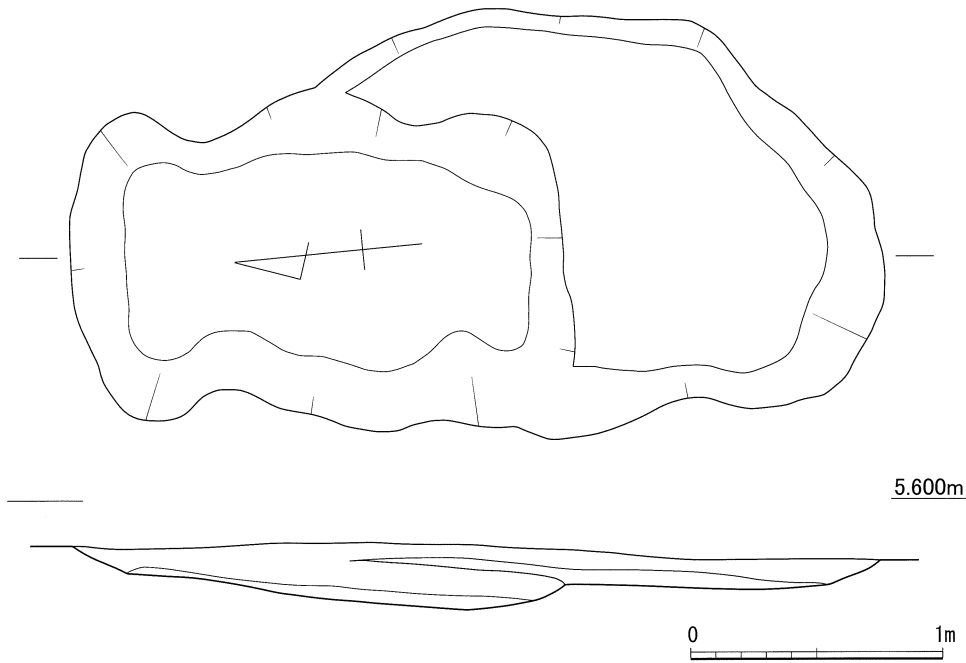
06-SK048 (第3-32図)

2区のM61・N61区で検出した土坑である。平面形状は不整形で、長辺1.80m、短辺1.04m、深さ0.54mを測る。土坑西側の掘り込みは浅いが、中心から東部にかけては一段深く掘り込んでいる。

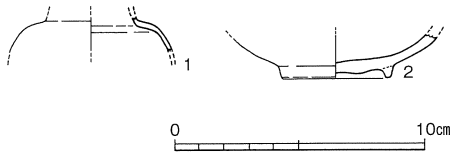
埋土は3層に分層でき、2・3層が土坑の深い部分の埋土、1層が浅い部分の埋土にそれぞれ対応する。1層には焼土の細粒や微量の炭を含む。図示できるような遺物の出土がなく、遺構の詳細な年代は明らかにできないが、16世紀前葉の土坑SK131埋没後に構築された遺構であることから、VI期(16世紀後葉)以降に帰属することは確実である。埋土に焼土を含むことから、島津氏の府内侵攻に伴う火災との関連も想定でき、VII期(16世紀末葉)の可能性を考えたい。



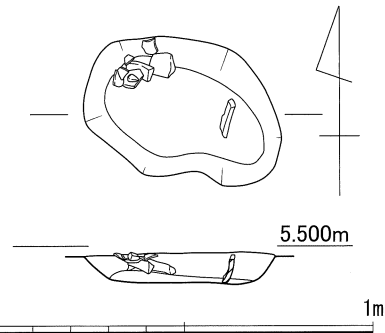
第3-34図 06-SK054出土遺物実測図(1/3)



第3-35図 06-SK061実測図 (1/30)



第3-36図 06-SK061出土遺物実測図 (1/3)

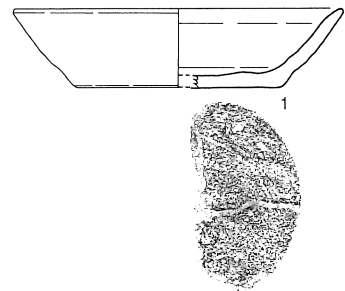


第3-37図 06-SK075実測図 (1/20)

06-SK054 (第3-33図)

2区のN60グリッドで検出した土坑である。平面形状はやや丸みのある長方形で、東端部はSD053に上部を切られている。遺構の規模は長辺1.50m、短辺1.28m、深さ0.26mを測る。埋土は砂質土で4層に分層できる。1層は灰黄褐色土で土坑全体を被覆する。2層は褐色土、3層は暗褐色土、4層はにぶい黄褐色土で、2・3層は少量の炭を含む。遺物は土坑の中位から上位にかけて散発的に出土した。大内系白色土師器皿が出土しており、IV期（15世紀中頃～15世紀後葉）に比定する。

大内系白色土師器皿

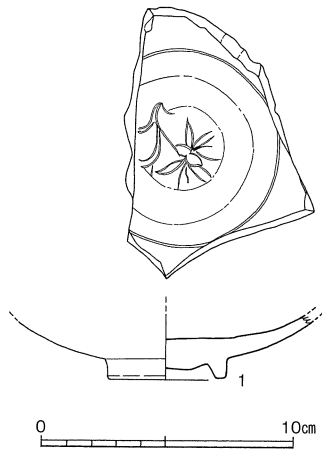


第3-38図 06-SK075出土遺物実測図 (1/3)

06-SK054出土遺物 (第3-34図)

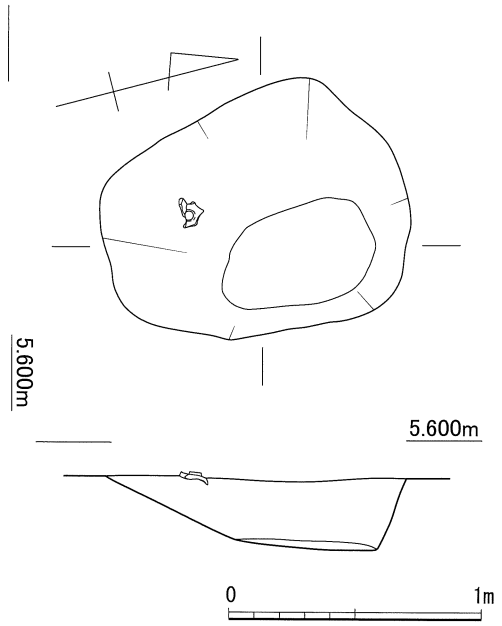
1は白色胎土で薄手の特徴的な土師器皿で、底面に回転糸切り痕が残る。この手の皿は山口県の大内氏館跡から出土している。2は軒丸瓦の細片で、珠文と巴文の尾部が確認できる。3は土師器坏で、内面に粗いヘラミガキを施す。器形・調整から古代のものである。

大内氏館跡から出土

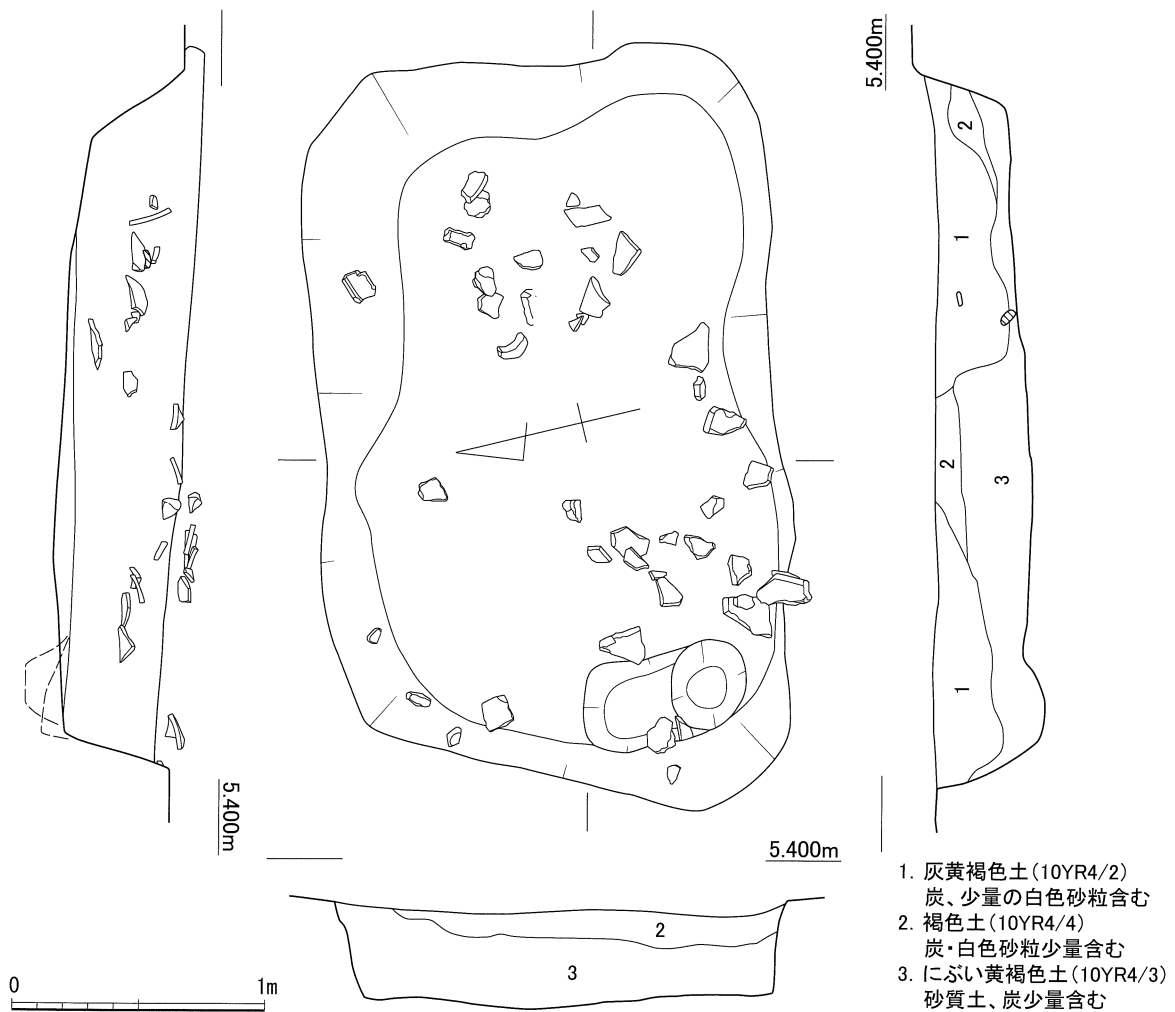


第3-40図 06-SK076出土遺物実測図 (1/3)

1. 灰褐色砂質土 (7.5YR4/2)
2. 褐色砂質土 (7.5YR4/6)
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
若干粘性あり

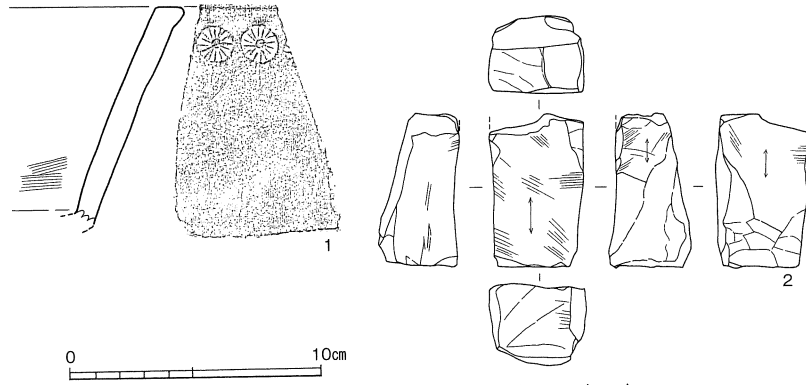


第3-39図 06-SK076実測図 (1/30)



第3-41図 06-SK086実測図 (1/30)

1. 灰黄褐色土 (10YR4/2)
炭、少量の白色砂粒含む
2. 褐色土 (10YR4/4)
炭・白色砂粒少量含む
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
砂質土、炭少量含む

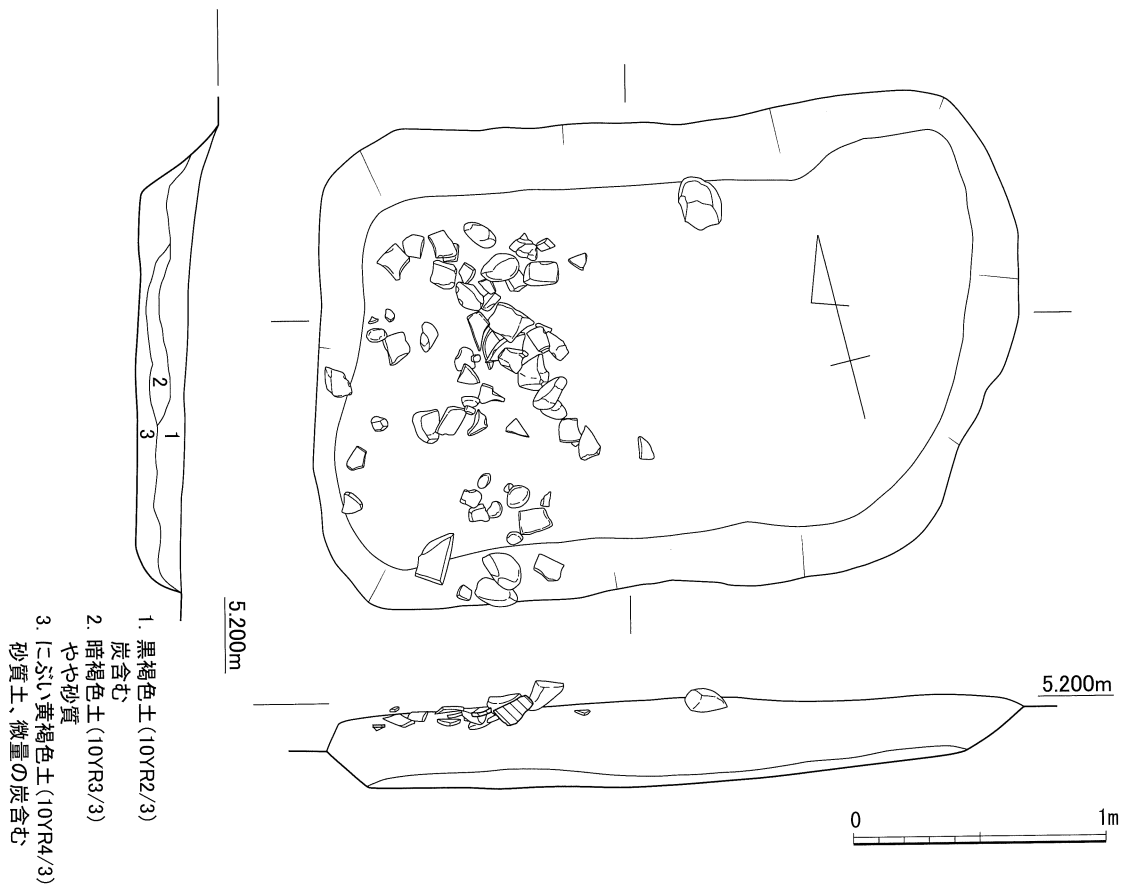


第3-42図 06-SK086出土遺物実測図(1/3)

06-SK061 (第3-35図)

2区のN61グリッドで検出した土坑である。平面形状は丸みのある長形状で、東部が丸く膨らむ。遺構の規模は長辺3.24m、短辺1.68m、深さ0.26mを測る。埋土はやや砂質の暗褐色土(10YR3/3)で、少量の炭を含む。内部は南半部が皿状の浅い掘り込みで、北半部は一段深く掘り込む。完掘した時点で南半部の底面で溝06-SD101を検出した。また、溝06-SD106とも切り合い関係があり、これらを整理するとSD106→SD101→SK061の順に構築されている。遺構の年代を決定する遺物に乏しいが、吉備系土師器碗の出土からまず14世紀前半が考えられる。先述の遺構の切り合い関係も考慮すると、SD106からも14世紀代の土師器小皿が出土しており、それよりは後出することになる。詳細時期不明のSD101の時間幅も考慮すると、14世紀前半よりは下ったⅡ期(14世紀中頃～末葉)ないしはⅢ期(14世紀末～15世紀前半)と考えたい。

吉備系土師器碗



第3-43図 06-SK087実測図(1/30)

06-SK061出土遺物 (第3-36図)

茶入

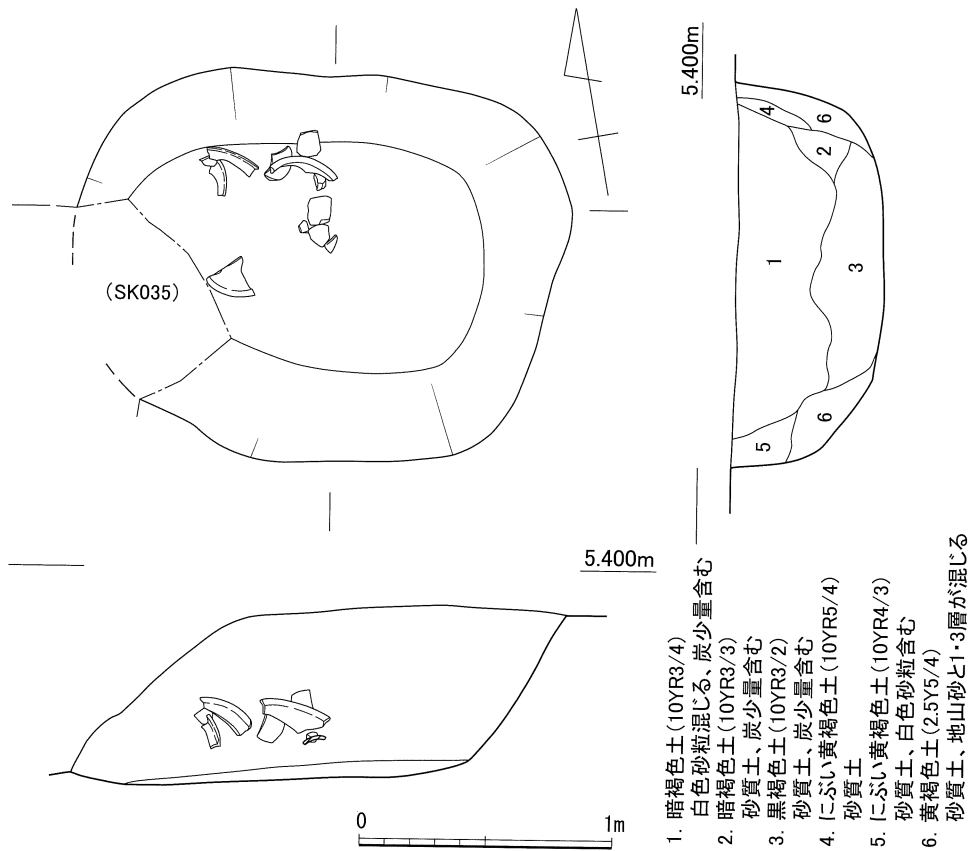
1は施釉陶器の茶入である。2は貼付高台を持つ吉備系土師器の椀で、高台は低い。

06-SK075 (第3-37図)

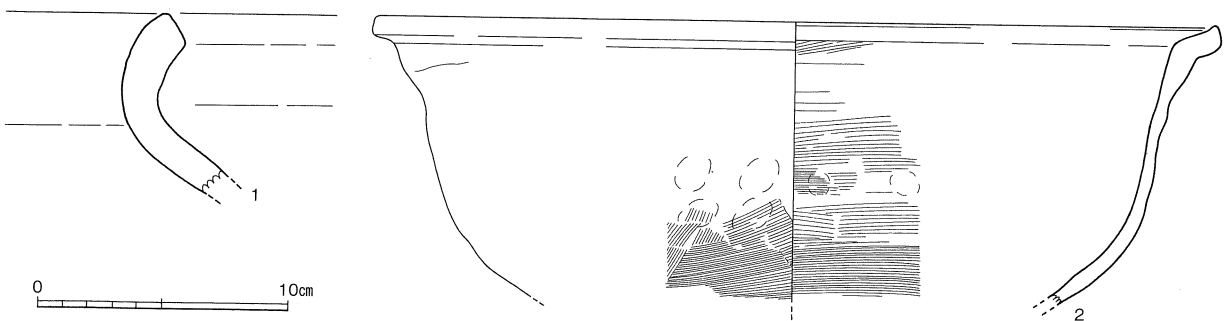
2区のO61グリッドで検出した小規模な土坑である。平面形状はやや歪な楕円形状で、長辺0.60m、短辺0.38m、深さ0.09mを測る。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)の砂質土で、微量の炭を含む。遺物や礫は土坑の北西部でややまとまって出土している。15世紀後葉に比定される土師器環が出土しており、本遺構の年代はIV期(15世紀中頃～後半)に位置づける。

06-SK075出土遺物 (第3-38図)

1は土師器環で、底部から口縁部が直線的に開く。底面には回転糸切り痕が残る。



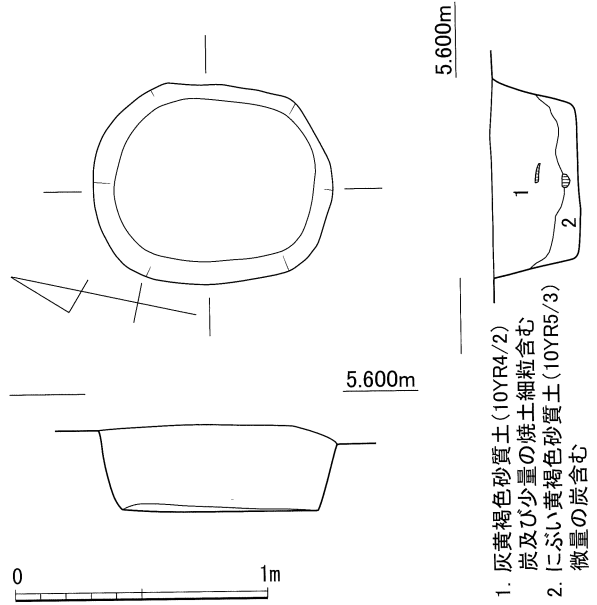
第3-44図 06-SK089実測図(1/30)



第3-45図 06-SK089出土遺物実測図(1/3)

06-SK076 (第3-39図)

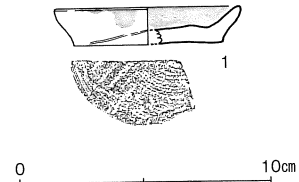
2区のO61グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形状を呈し、長辺1.23m、短辺0.98m、深さ0.29mを測る。内部の掘り込みは北辺・東辺は急であるのに対し、南辺・西辺の角度は緩やかである。埋土は3層に分層でき、2・3層に対して1層が掘り込む状況が読み取れることから、掘り返しがあったと推定される。遺物は遺構検出面付近で15世紀代に比定される青磁碗の底部片が出土している。この点から、本遺構の年代はⅢ期(14世紀末～15世紀前半)以降に位置づけられるが、青磁碗の出土位置が遺構上部であるため、これが遺構の正確な年代を反映しているとは考えにくい。従って少し幅を持たせてⅢ期～Ⅳ期(15世紀中頃～15世紀後半)と考えたい。



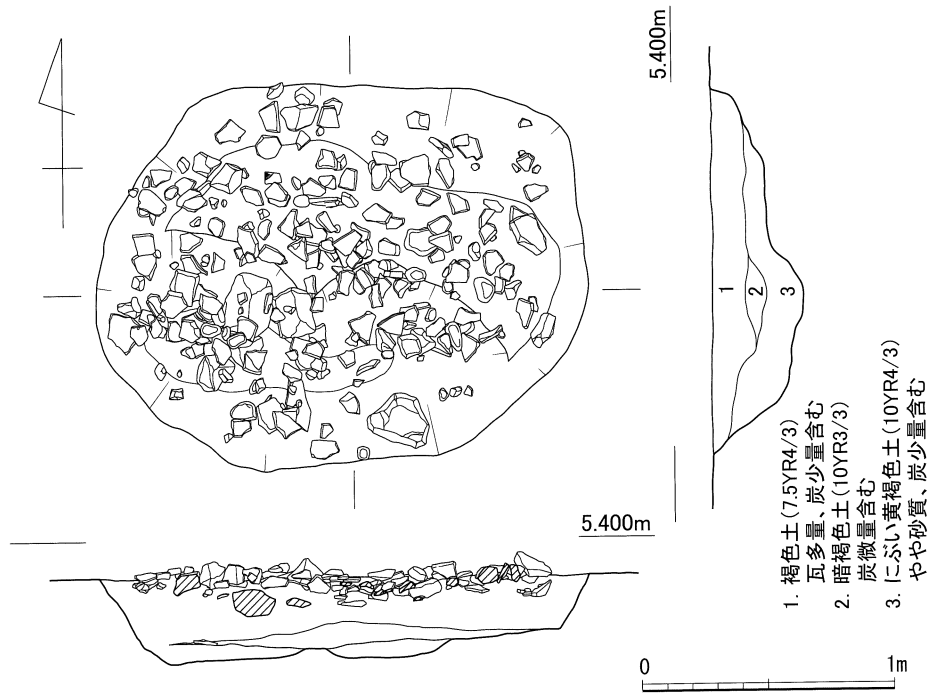
第3-46図 06-SK110実測図(1/30)

06-SK076出土遺物(第3-40図)

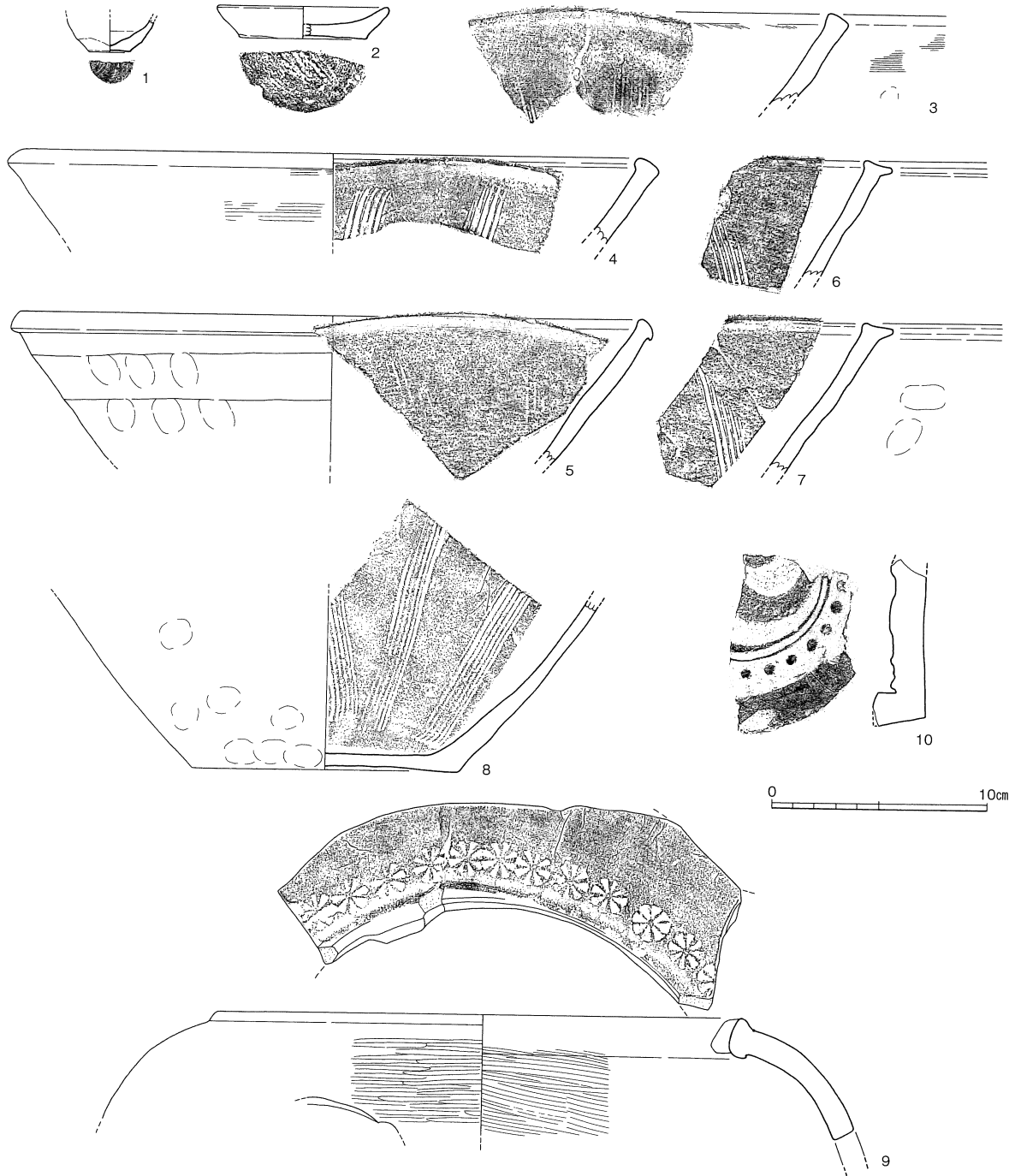
1は青磁碗である。見込み部は蛇の目状の釉剥ぎを施し、中央に草花文を配する。



第3-47図 06-SK110出土遺物実測図(1/3)



第3-48図 06-SK126実測図(1/30)



第3-49図 06-SK126出土遺物実測図 (1/3)

06-SK086 (第3-41図)

2区のN60・N61グリッドで検出した土坑である。溝06-SD053と切り合い関係にあり、06-SK086が06-SD053を切っている。土坑の平面形状は隅丸長方形で、長辺3.05m、短辺1.89m、深さは最大で0.53mを測る。埋土は3層に分層でき、1層は土坑の東西両側に分かれて認められる。遺物や礫が土坑の中心部を挟んで東西両側である程度のまとまりをもって出土しており、1層はこれら礫や遺物の廃棄に伴う掘り込みと考えられる。土坑の底面はほぼ平坦であるが、南西端部で2基の掘り込みが見られる。遺構の性格は廃棄土坑と考えられる。遺構の年代を推定できる遺物に乏しいが、遺構の切り合い関係から推定すると、SK086に切られる溝SD053はIV期(15世紀中頃～15世紀後葉)

廃棄土坑

の土坑SK054を切ることから、SK054→SD053→SK086の順となり、少なくともIV期以降であることは間違いない。従ってIV期～V期（16世紀前半）に位置づける。

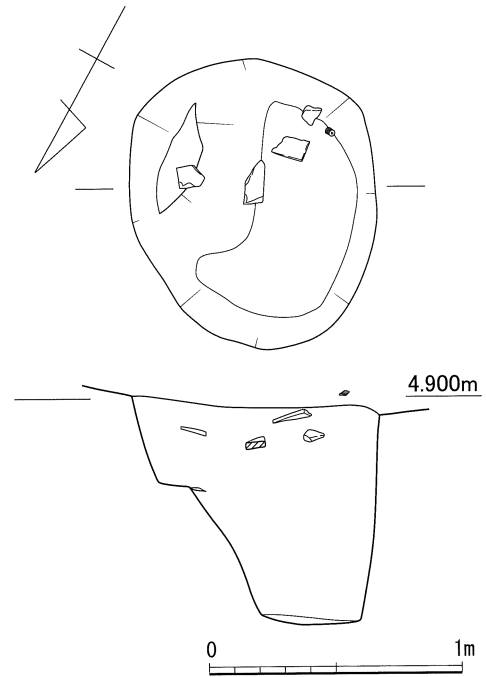
06-SK086出土遺物（第3-42図）

1は瓦質土器の火鉢で、口縁下に菊花状のスタンプ文を施す。2は砥石で、6面全てにおいて使用の擦痕が認められる。

06-SK087（第3-43図）

2区のM60・N60グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形で、長辺2.78m、短辺1.88m、深さ約0.3mを測る。埋土は3層に分層でき、1層は炭を含む黒褐色土、2層はやや砂質の暗褐色土、3層は砂質のにおい黄褐色土で微量の炭を含む。掘り込みは皿状を呈し、壁面の立ち上がりは緩やかである。遺物や礫は土坑西半部の検出面近くでまとまって出土しており、廃棄土坑と考えられる。遺構の年代を推定できる遺物がないが、同じく廃棄土坑であるSK086とは遺構の規模や形態が似ており、ほぼ同時期に形成されたものではないかと考えられる。以上の点からIV期～V期（15世紀中頃～16世紀前半）に位置づける。

廃棄土坑



第3-50図 06-SK133実測図(1/30)

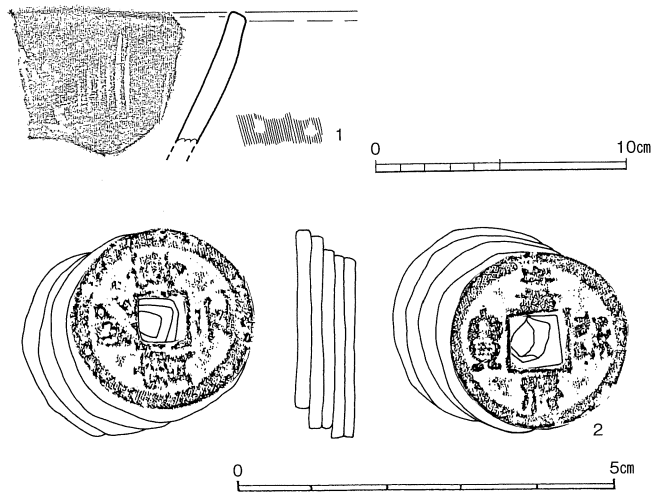
06-SK089（第3-44図）

2区のL60・M60グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形から楕円形状を呈し、西側の一端を06-SK035に切られている。遺構の規模は長辺1.93m、短辺1.54m、深さ0.68mを測る。

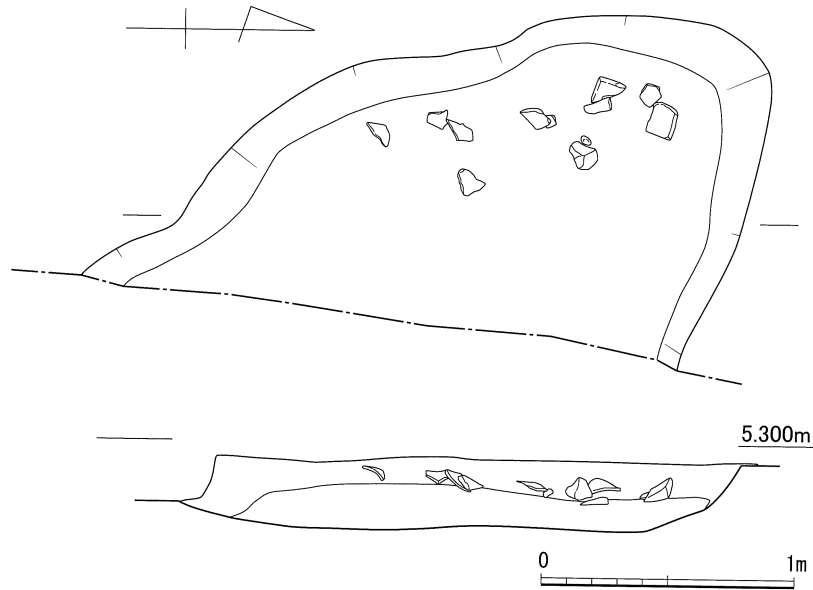
土層は6層に分層でき、4～6層の堆積後に1～3層が大きく掘り込む状況が窺える。土坑の底面は平坦で、両端ともに底部からの立ち上がりは丸みをもつ。特筆すべき点として、土坑の中位から下位にかけて

土師器鍋1
個体分が出
土

土師器鍋1個体分が出土している。遺構の年代比定が難しいが、伴出した備前焼の口縁部が玉縁状にならない13世紀頃のものである。土師器鍋の形態も14世紀代に収まるものと考えられ、I～II期（14世紀前半～末）と判断したい。



第3-51図 06-SK133出土遺物実測図(1/3・1/1)



第3-52図 06-SK140実測図 (1/30)

06-SK089出土遺物 (第3-45図)

1は備前焼甕である。外反する口縁の立ち上がりは短く、端部は丸くおさめる。2は土師器の鍋である。口縁は外反し、端部は上方に短く摘み出す。

06-SK110 (第3-46図)

2区のO61・62グリッドで検出した土坑である。平面形状は方形気味の楕円形で、長辺0.97m、短辺0.78m、深さ0.35mを測る。埋土は2層に分層でき、上層は炭及び少量の焼土細粒を含む灰黄褐色砂質土、下層は微量の炭を含むにぶい黄褐色砂質土である。遺物は土師器小皿等が出土したが、量は少ない。遺構の年代は出土した土師器小皿が小型化している点から、IV期(15世紀中頃～後半)に位置付ける。

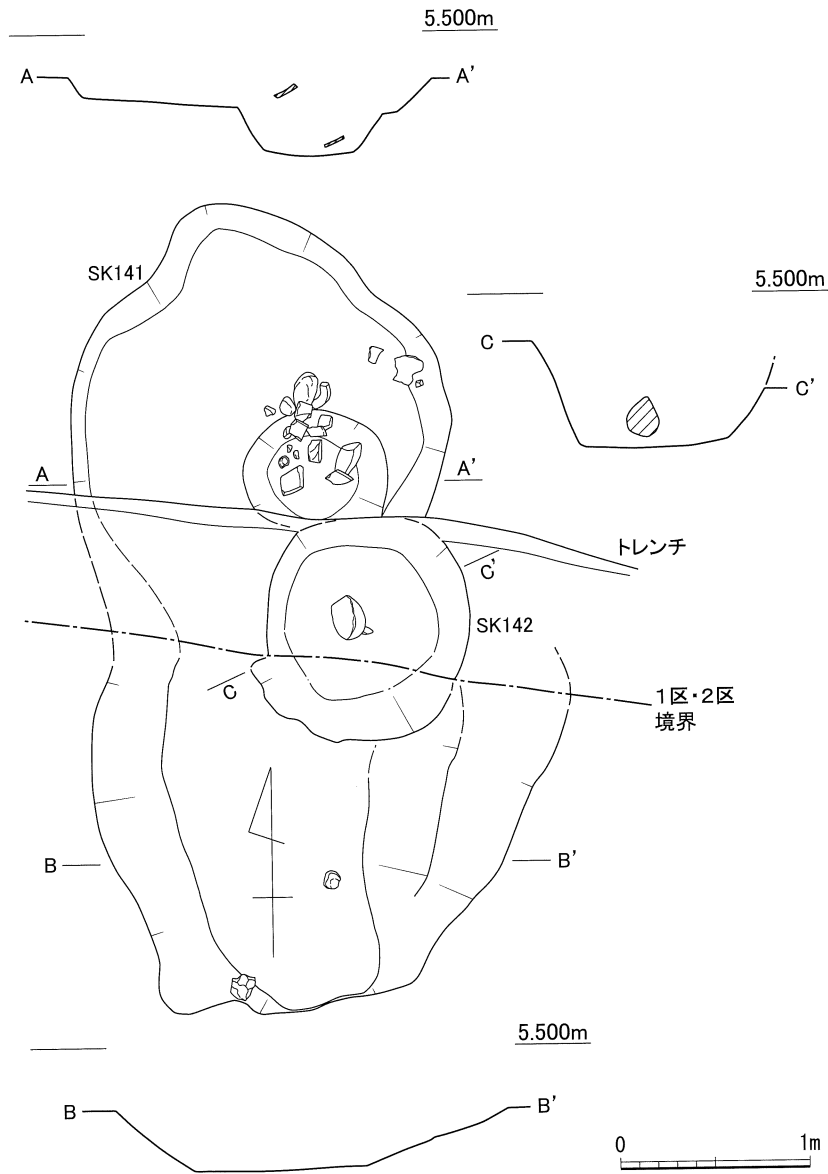
06-SK110出土遺物 (第3-47図)

1は土師器小皿である。底部から外に短く開く器形で、口径は7.4cmと小型化している。底面には回転糸切り痕が残る。内外面とも煤が付着しており、灯明皿として使用されたものである。

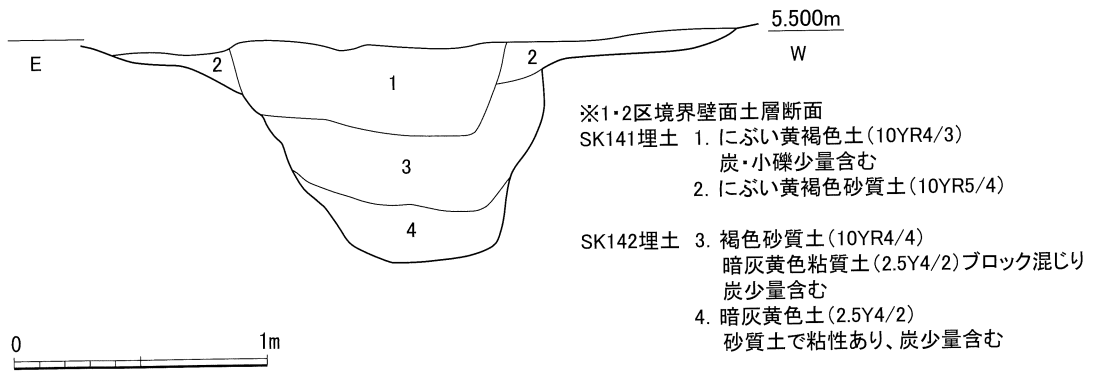
06-SK126 (第3-48図)

2区O61・62グリッドで検出した土坑である。溝SD093と重複関係にあり、SK126がSD093を切っている。平面形状は楕円形状で、長辺1.97m、短辺1.53m、深さ0.34mを測る。埋土は3層に分層できるが、大きくは上層の褐色土と、下層のにぶい黄褐色土に分けられる。上層からは礫とともに多量の瓦や遺物が出土しており、廃棄土坑と考えられる。底面は南側が一段深く掘り込まれる。遺構の年代を把握できる遺物に乏しいが、溝SD093を切っていること、そして16世紀前半にまで下る遺物が見られないことから、IV期(15世紀中頃～15世紀後半)に位置付ける。

廃棄土坑



第3-53図 06-SK141・SK142実測図 (1/40)

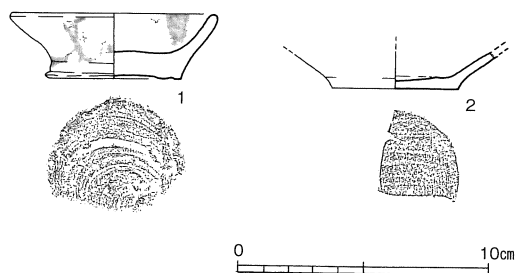


第3-54図 06-SK141・SK142土層断面図 (1/30)

06-SK126出土遺物 (第3-49図)

茶入

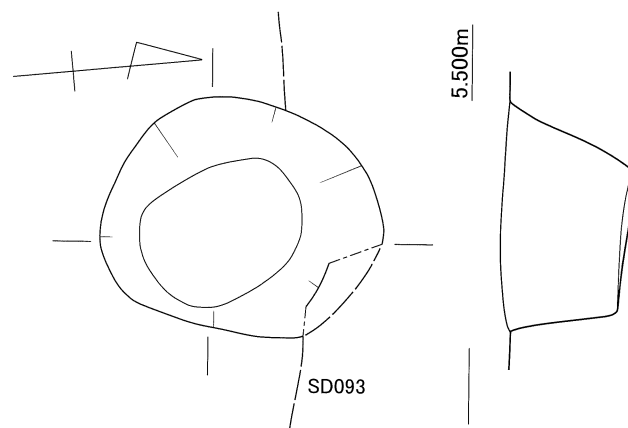
1は中国産の施釉陶器で、茶入の底部である。底面には回転糸切り痕が残る。2は土師器の小皿である。3～8は瓦質土器の摺鉢である。口縁部形状にはバリエーションがあり、端部が内側に張り出すもの(3・4)、下端部が張り出し玉縁状となるもの(5)、外側に大きく延びるもの(6・7)に分けられる。8は底部で、内面に7条1単位の摺目を施す。9は瓦質土器の風炉で、口縁下にスタンプ文を施す。10は軒丸瓦で、中央に左巻きの巴文を配し、周囲に珠文を施す。



第3-55図 06-SK141出土遺物実測図(1/3)

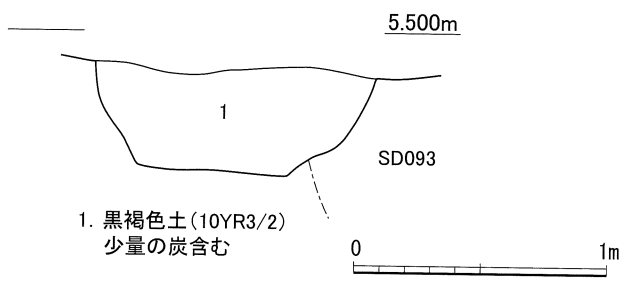
風炉

2区のM61グリッドで検出した土坑である。平面形状は卵形を呈し、長辺1.15m、短辺1.02m、深さ0.86mを測る。内部の掘り込みは西側がほぼ直であるのに対し、東側はやや角度が緩く、ステップ状の段が付く。遺物は土坑の上位から散在して出土しており、検出面付近からは5点が固着した銅銭が出土した。遺構の時期を示す遺物に乏しいが、16世紀前半の土坑06-SK131の埋没後に構築された遺構であることから、VI期(16世紀後葉)以降に位置付けられる。



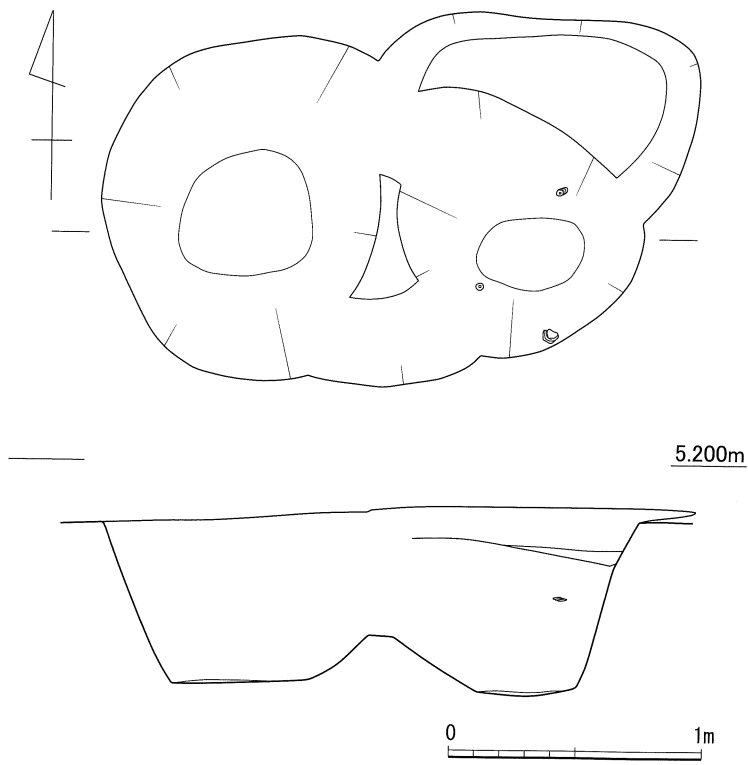
06-SK133 (第3-50図)

2区のM61グリッドで検出した土坑である。平面形状は卵形を呈し、長辺1.15m、短辺1.02m、深さ0.86mを測る。内部の掘り込みは西側がほぼ直であるのに対し、東側はやや角度が緩く、ステップ状の段が付く。遺物は土坑の上位から散在して出土しており、検出面付近からは5点が固着した銅銭が出土した。遺構の時期を示す遺物に乏しいが、16世紀前半の土坑06-SK131の埋没後に構築された遺構であることから、VI期(16世紀後葉)以降に位置付けられる。



第3-56図 06-SK145実測図(1/30)

遺物は土坑の上位から散在して出土しており、検出面付近からは5点が固着した銅銭が出土した。遺構の時期を示す遺物に乏しいが、16世紀前半の土坑06-SK131の埋没後に構築された遺構であることから、VI期(16世紀後葉)以降に位置付けられる。



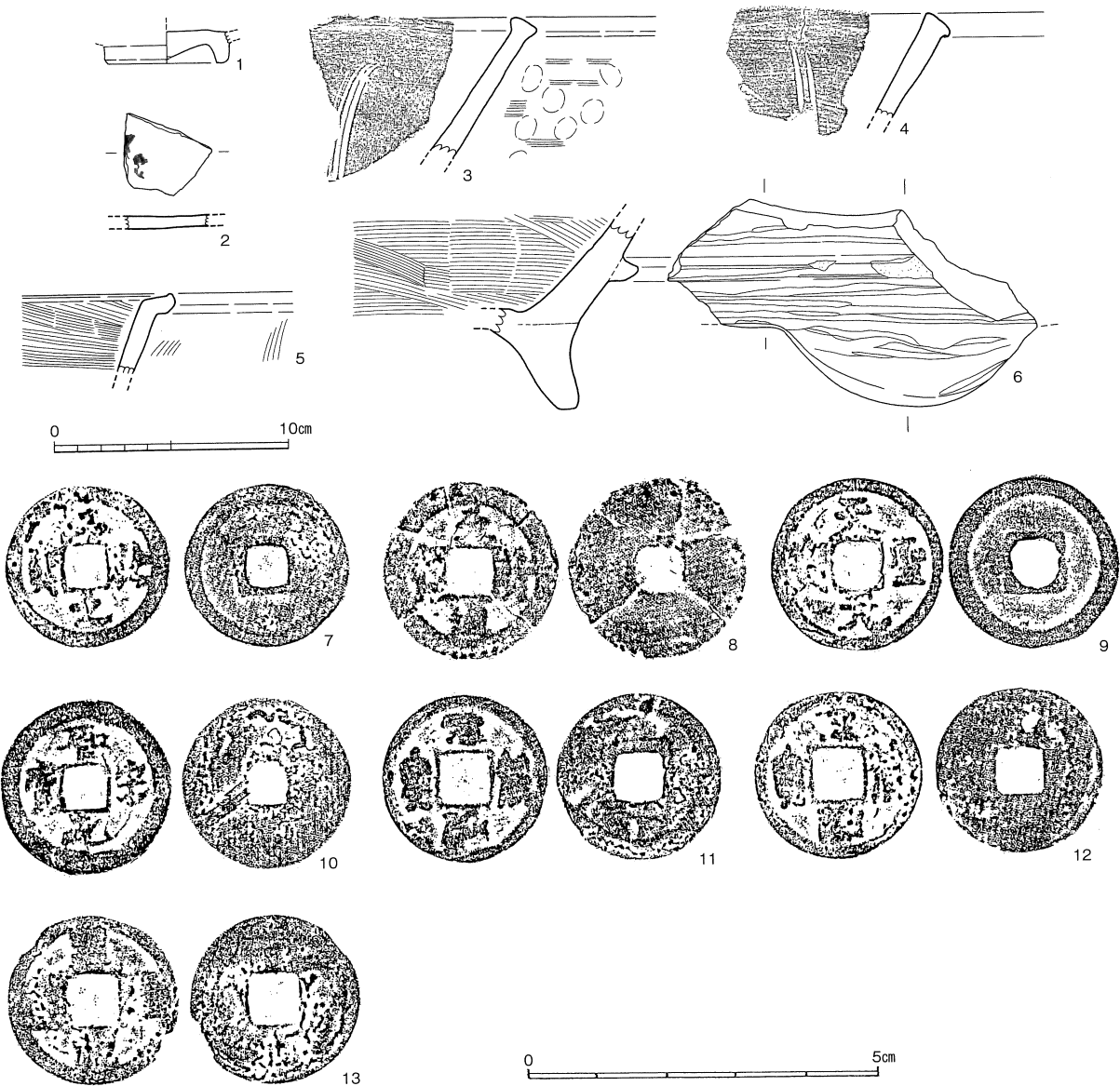
第3-57図 06-SK173実測図(1/30)

06-SK133出土遺物 (第3-51図)

1は瓦質土器摺鉢である。内面に6条1単位の摺目が残るが、下部は使用により磨滅している。
2は銅銭5枚が錆着したもので、両端2点の銭種が判明する。いずれも北宋銭で、ひとつは熙寧元寶 (1068年初鑄)、もうひとつは嘉祐通寶 (1056年初鑄) である。

06-SK140 (第3-52図)

2区のO62・P62グリッドで検出した土坑である。06-SX100の堆積層を除去した段階で確認したもので、東側が調査区外に続くため全体の形状及び規模は明らかにできないが、検出範囲で東西1.35m以上、南北2.40m、深さ0.28mを測る。埋土はにぶい黄褐色土 (10YR4/3) で、礫及び少量の炭を含む。掘り込みは皿状を呈し、底面からの立ち上がりは丸みをもつ。遺物や礫は土坑の中位から上位にかけてまばらに出土したが、図示できるものはない。06-SX100より下位に位置し、かつ土坑内部から京都系土師器の細片が出土していることから、VI期 (16世紀後半) に位置付ける。



第3-58図 06-SK173出土遺物実測図 (1/3・1/1)

06-SK141・SK142 (第3-53・3-54図)

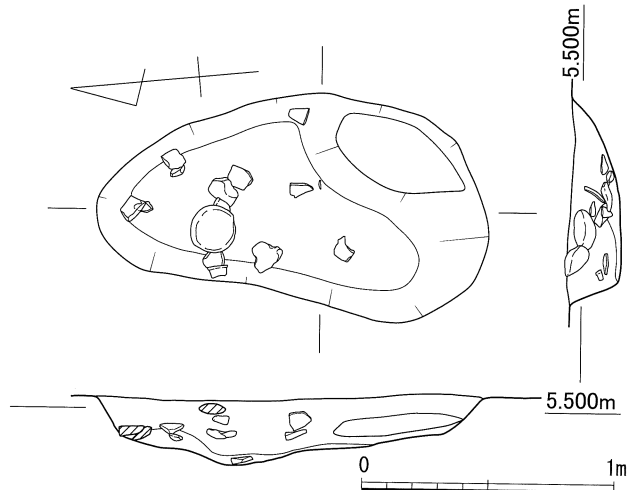
1区と2区の境目、O62グリッドで検出した2基の重複した土坑である。第3-54図に示す土層断面に示すとおり、06-SK141がSK142を切っている。また、SK141は16世紀後半の瓦溜り06-SX100や溝06-SD093を切っていることが分かる。

SK141は南北に細長く伸び、長辺4.30m、短辺2.02m、深さ0.41mを測る。1区では東側壁面の傾斜がなだらかで、上端の掘り込みプランがやや東に広がる様子が見られたが、先に調査をした2区南端部では当該箇所土層観察用のトレンチを設けたため、その続きは押さえられない。また、土坑の南端は井戸SE312と重複するため、終端部は不明瞭であった。埋土は2層あり、ともににおい黄褐色砂質土で、中央部を礫や炭を含む土層が土坑状に掘り込んでいる。土坑の掘り込みは皿状を呈する。

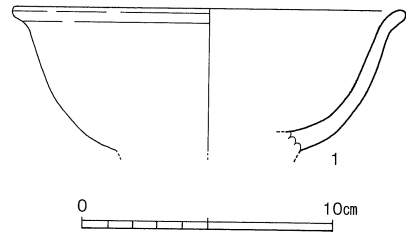
底面には1箇所略円形の土坑の掘り込みが確認でき、これが先の土層断面と対応するものである。遺物や礫はこの土坑周辺からまとまって出土した。

SK142は略円形を呈し、直径1.23m、深さ0.57mを測る。埋土は2層に分層でき、上層は暗灰黄色土が混じった褐色土、下層は暗灰黄色砂質土で粘性を帯びる。土坑の中央から25cm程度の大きさの礫が出土した。

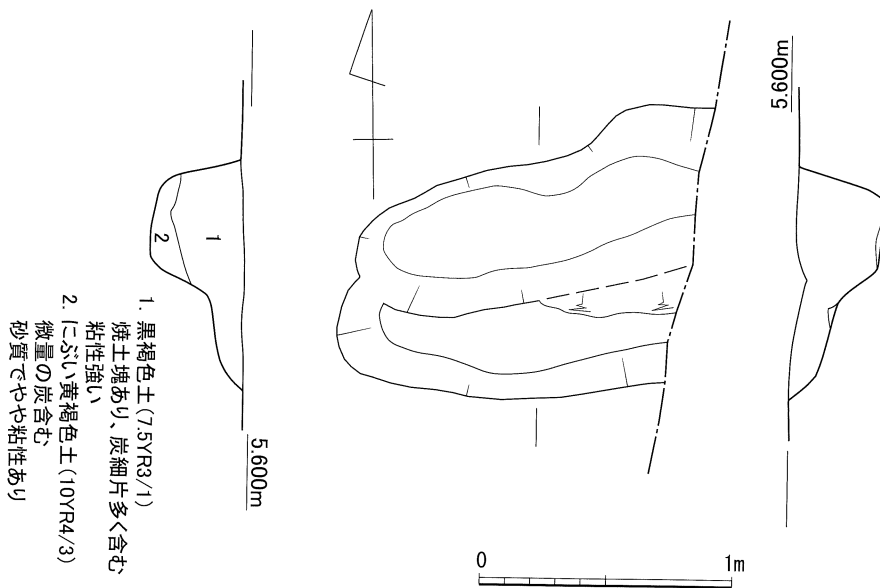
土坑の規模の割に、これら2基の土坑からの遺物の出土は少ない。遺構の年代は、SK141は



第3-59図 06-SK198実測図 (1/30)

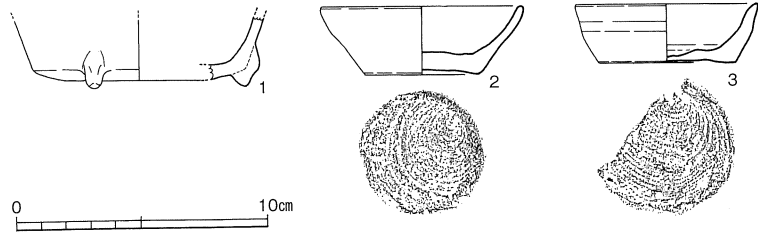


第3-60図 06-SK198出土遺物実測図 (1/3)



第3-61図 06-SK199実測図 (1/30)

SX100を切ることから
VII期（16世紀末葉）、
SK141に切られる
SK142はVI期（16世紀
後半）～VII期（16世紀
末葉）と判断する。



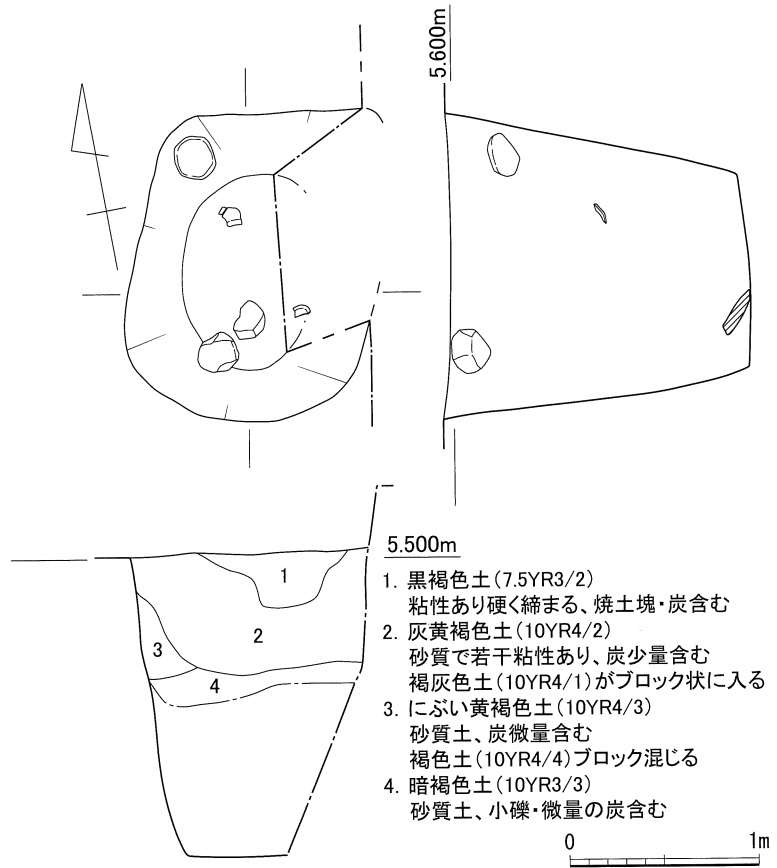
第3-62図 06-SK199出土遺物実測図(1/3)

06-SK141出土遺物
(第3-55図)

1・2は在地の土師器である。1は小型の
坏で、内外面に煤が付
着することから灯明皿
と判る。2は皿で口縁
部を欠失する。

06-SK145 (第3-
56図)

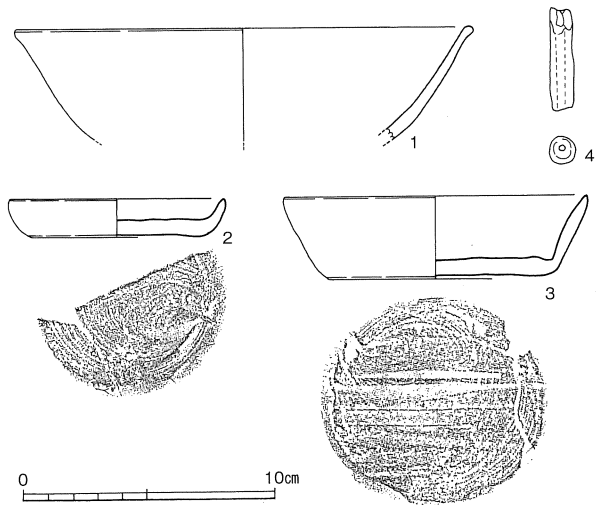
2区のN62グリッド
で検出した土坑であ
る。SD093と重複す
るが、SK145がSD093を
切っている。平面形状
は楕円形で、長辺1.13
m、短辺0.92m、深さ
0.51mを測る。埋土は
黒褐色土で、少量の炭
を含む。図示できるよ
うな遺物は出土してい
ないため詳細な時期は



- 1. 黒褐色土(7.5YR3/2)
粘性あり硬く締まる、焼土塊・炭含む
- 2. 灰黄褐色土(10YR4/2)
砂質で若干粘性あり、炭少量含む
褐灰色土(10YR4/1)がブロック状に入る
- 3. にぶい黄褐色土(10YR4/3)
砂質土、炭微量含む
褐色土(10YR4/4)ブロック混じる
- 4. 暗褐色土(10YR3/3)
砂質土、小礫・微量の炭含む

第3-63図 06-SK200実測図(1/40)

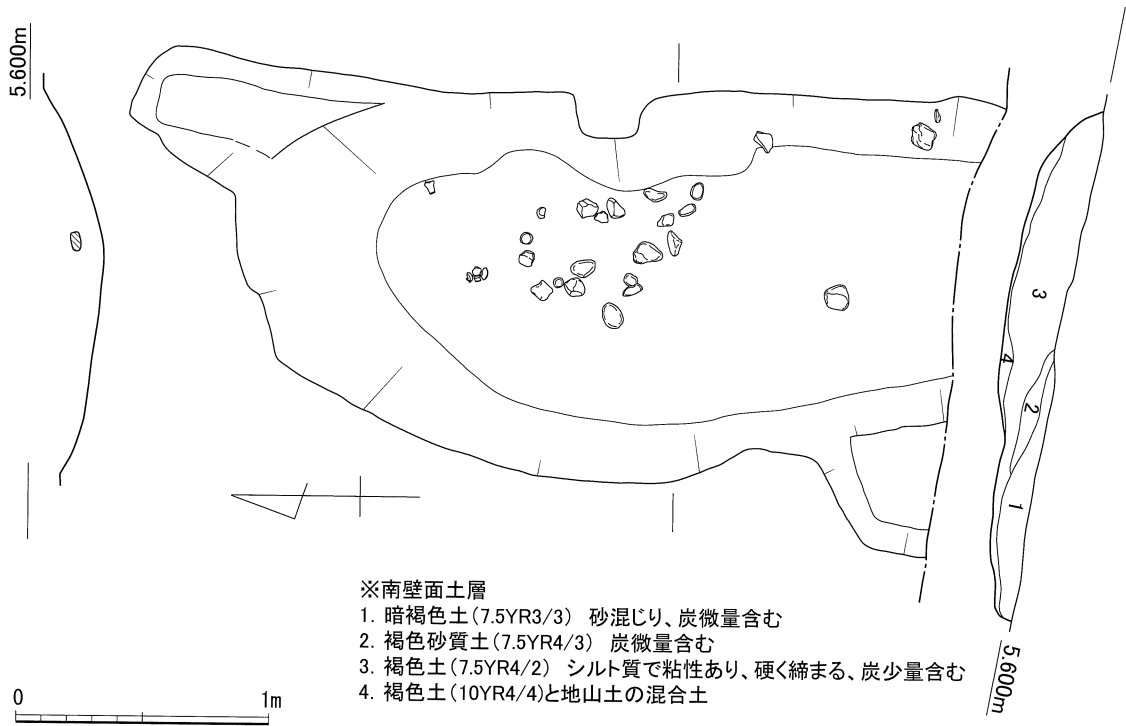
明らかにできないが、SD093を切ることから少なくともIV期以降の遺構である。



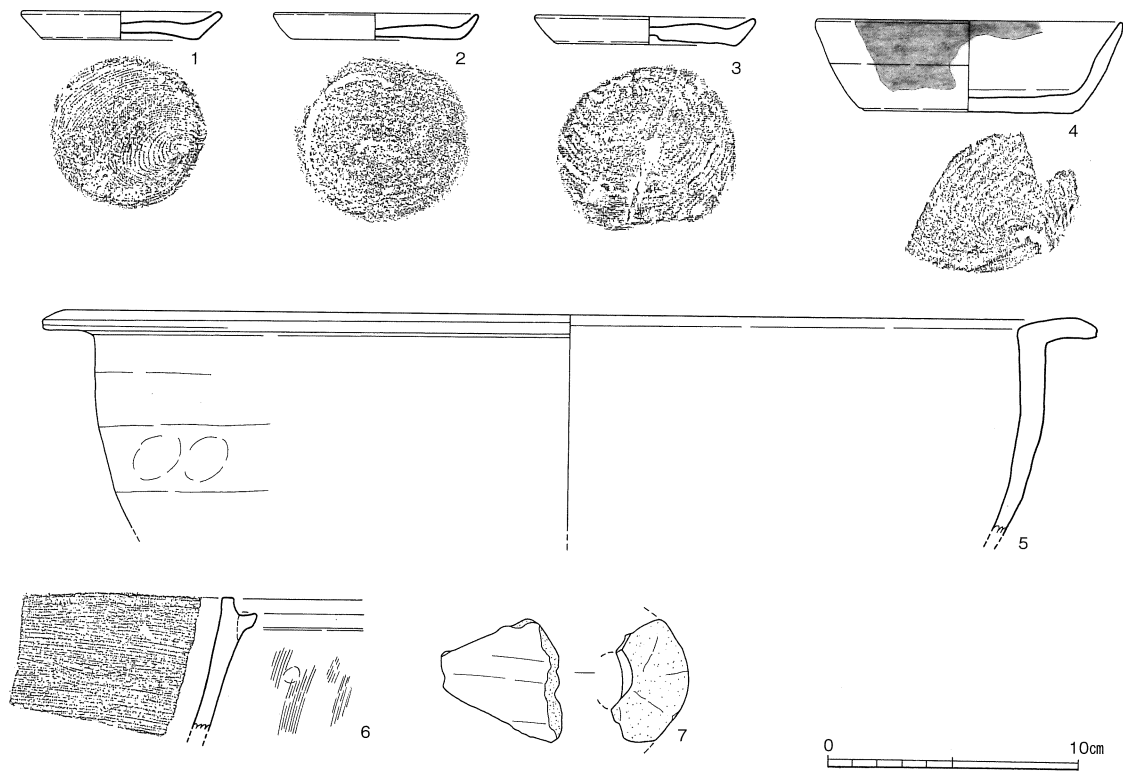
第3-64図 06-SK200出土遺物実測図(1/3)

06-SK173 (第3-57図)

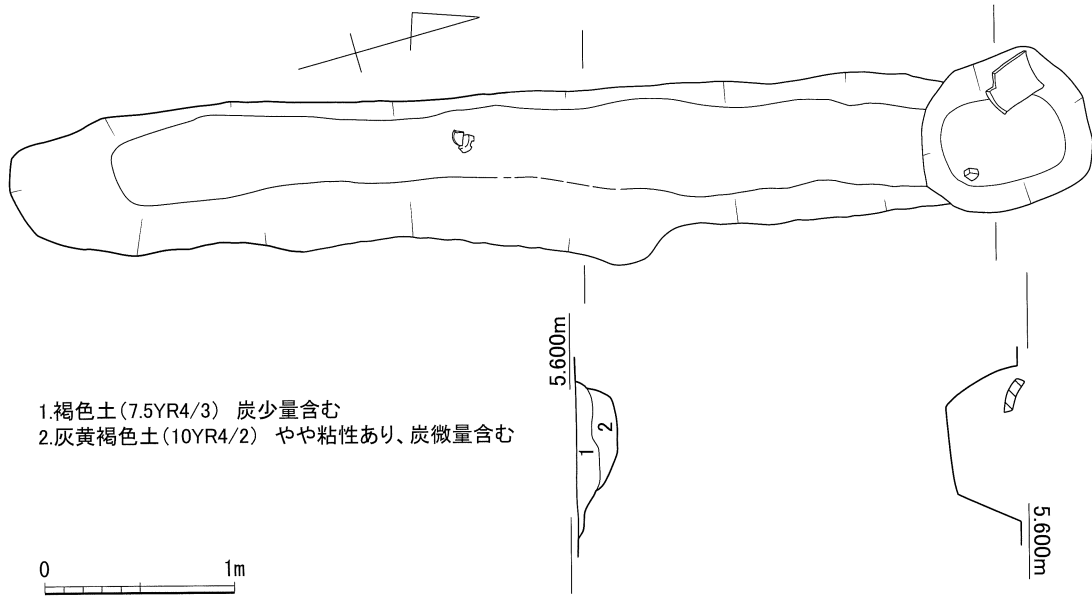
2区のO62グリッドで検出した土坑である。06-SD093と重複するが、SK173がSD093を切っている。また、この土坑のやや上位にSK126がある。従って、SD093→SK173→SK126の構築順に整理できる。平面形状は不整形で、かつ土坑内部は中央部底面がやや



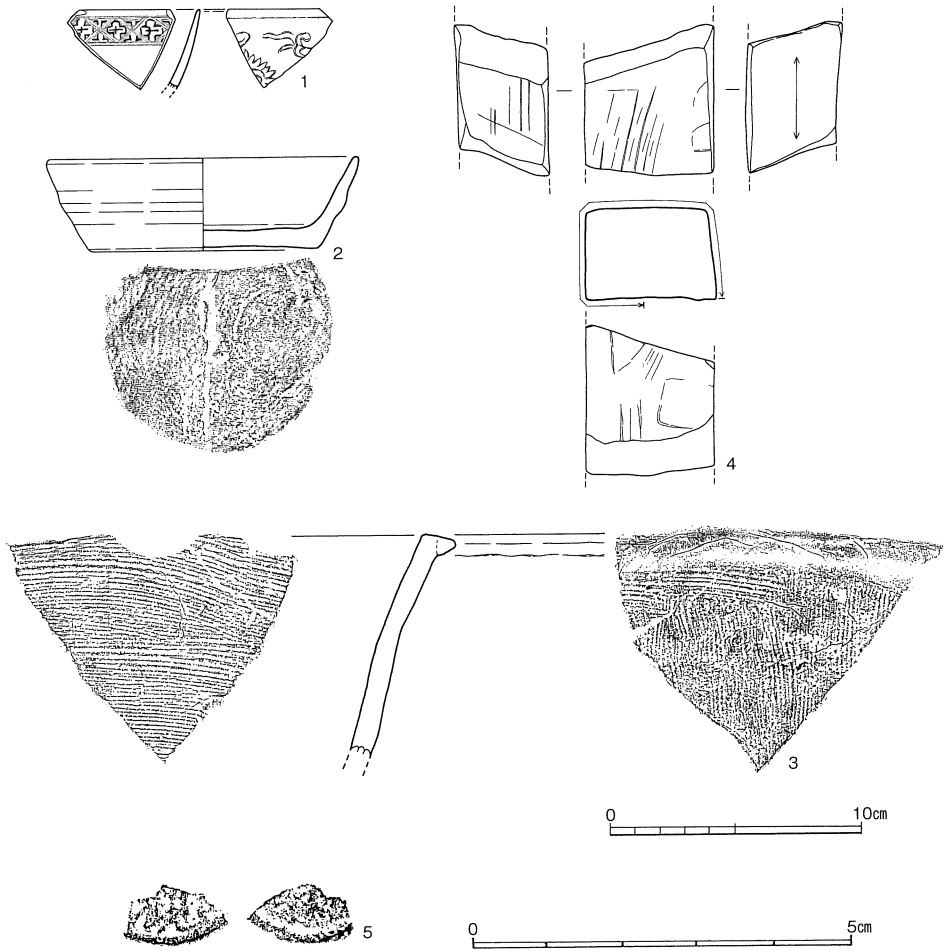
第3-65図 06-SK202実測図 (1/60)



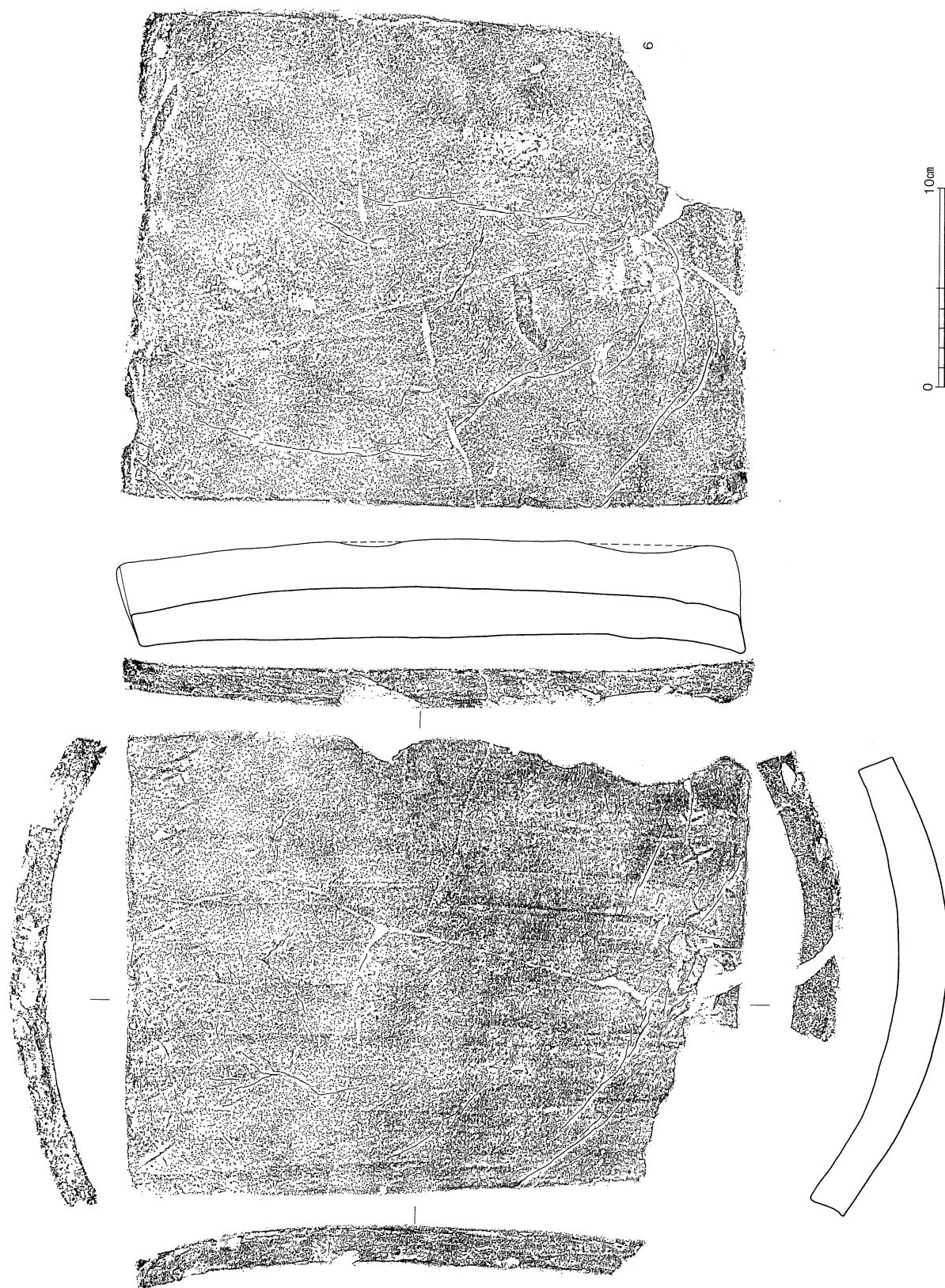
第3-66図 06-SK202出土遺物実測図 (1/3)



第3-67図 06-SK208実測図(1/40)



第3-68図 06-SK208出土遺物実測図①(1/3・1/1)



第3-69図 06-SK208出土遺物実測図② (1/3)

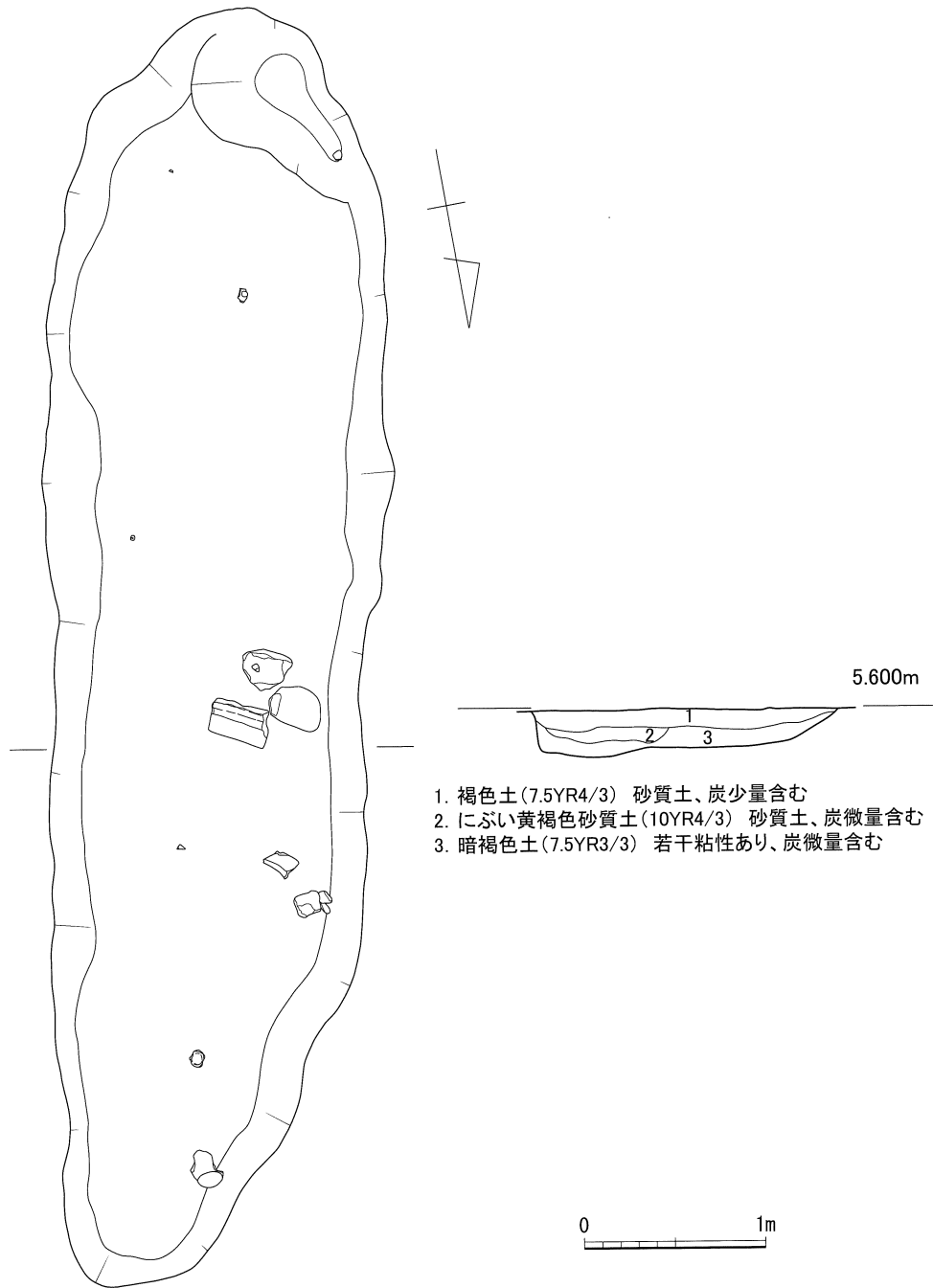
高く、東西両側に深く掘り込むことから、本来は2～3基の土坑が重複していたと考えられる。遺構の規模は長辺2.16m、短辺1.35m、深さは東部で0.75m、西部で0.65mを測る。東側の土坑は北半部にテラス状の段が付く。埋土はやや砂質で炭を含む黒褐色土(10YR3/2)の単一層で、土層から遺構の切り合いを確認できなかった。遺物は青磁、土師器、瓦質土器、銭貨等があり、特に銭貨の出土が目立つ。銭貨は東側土坑の中位から上位にかけて複数点が出土した。遺構の年代はSD093より新しいIV期(15世紀中頃から後半)に位置付ける。

銭貨の出土

06-SK173出土遺物(第3-58図)

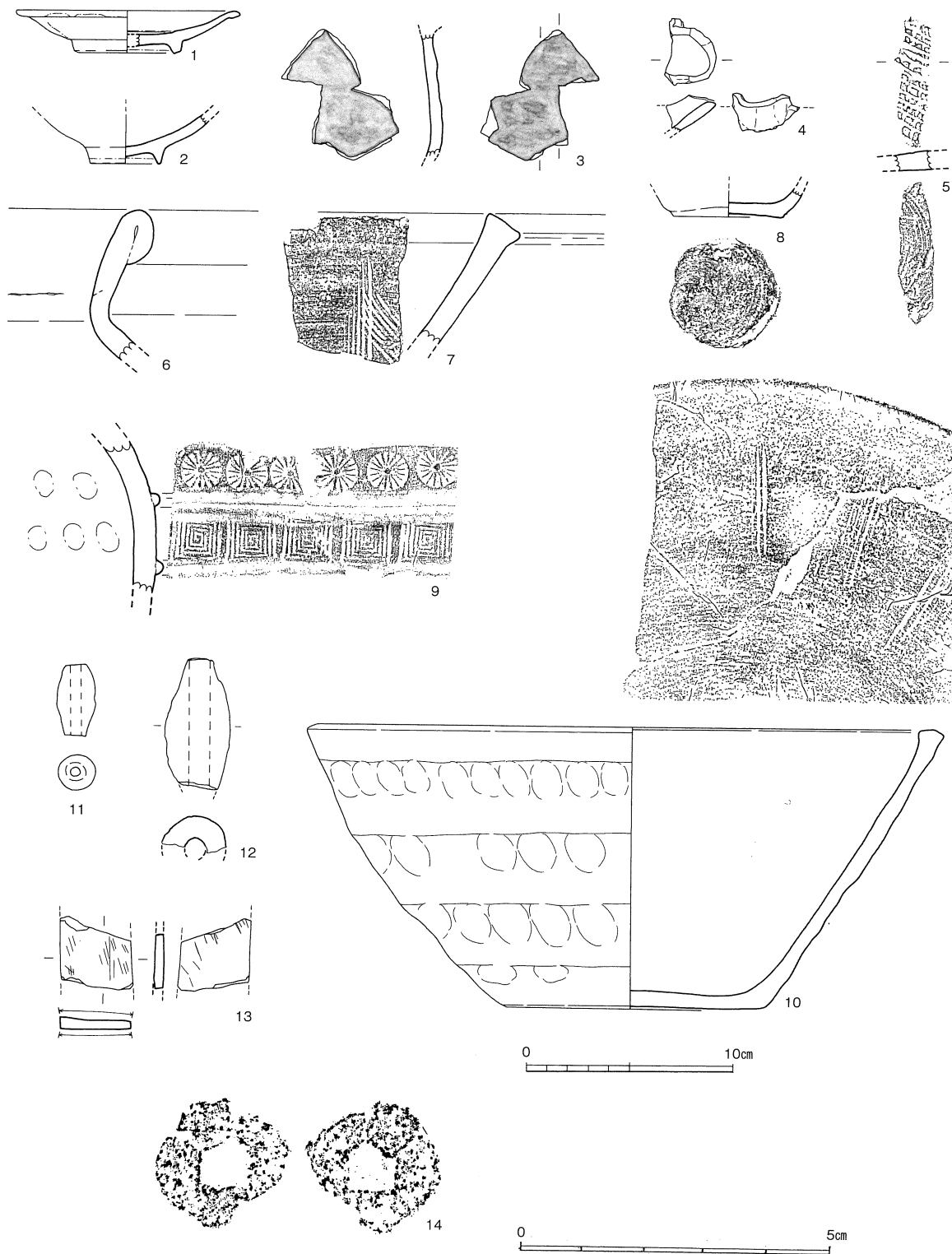
墨書と思われる痕跡

1は青磁碗の底部である。2は土師器坏の底部で、見込みに墨書と思われる痕跡が認められるが、文字は判読できない。3～6は瓦質土器で、3・4は摺鉢、5は鍋、6は脚付きの火鉢又は風



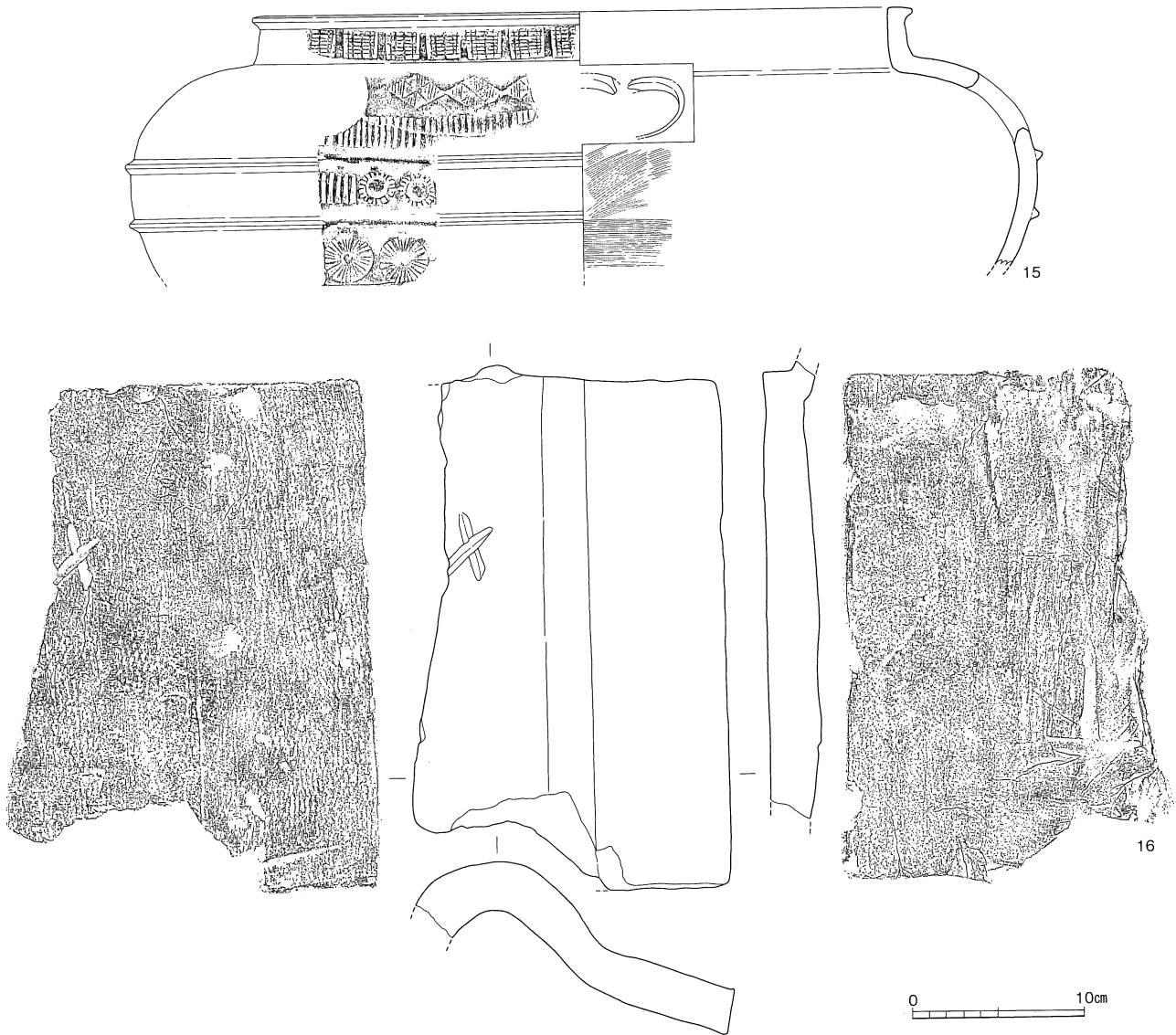
- 1. 褐色土(7.5YR4/3) 砂質土、炭少量含む
- 2. にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3) 砂質土、炭微量含む
- 3. 暗褐色土(7.5YR3/3) 若干粘性あり、炭微量含む

第3-70図 06-SK209実測図(1/40)



第3-71図 06-SK209出土遺物実測図① (1/3・1/1)

炉の底部である。7～13は銭貨で、4点の銭種が判読できる。7は北宋の淳化元寶(990年初鑄)、8は北宋の天禧通寶(1017年初鑄)、9は北宋の天聖元寶(1023年初鑄)、10は北宋の聖宋元寶(1101年初鑄)である。11は元□通寶と判読でき、可能性としては北宋の元豐通寶(1078年初鑄)か元祐通寶(1086年初鑄)のいずれかであろう。12・13は銭文が磨滅や錆により不鮮明で判読できず、銭種は不明である。



第3-72図 06-SK209出土遺物実測図②(1/4)

06-SK198 (第3-59図)

1区のO62グリッドで検出した土坑である。平面形状はやや歪な卵形を呈し、長辺1.57m、短辺0.83m、深さ0.26mを測る。埋土は炭を含む黒褐色土(7.5YR3/2)で、粘性は強い。内部の掘り込みは東側が緩やかであるのに対し、西側壁面はやや角度が立つ。土坑の南東側には段が付く。遺物や礫は土坑の北半部、遺構の深い部分からややまとまって出土しているが、図示できるものは少ない。遺構の年代は06-SX100を切ることからⅦ期(16世紀末葉)である。

06-SK198出土遺物(第3-60図)

1は青磁碗である。内外面とも無文で、口縁部は外反する。15世紀代のものである。

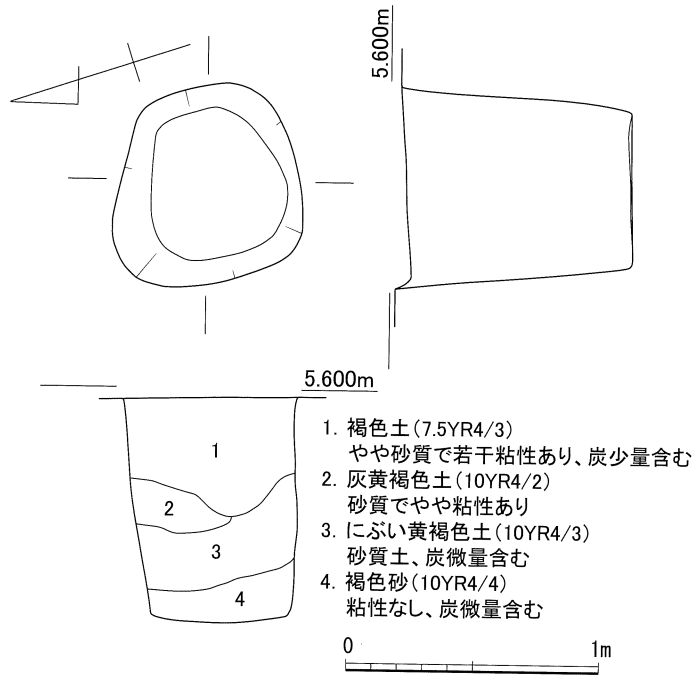
06-SK199(第3-61図)

1区のO63グリッドで検出した土坑である。東側が調査区外に続くため全体の形状及び規模は明らかにできないが、検出した範囲で東西1.34m以上、南北1.10m、深さ0.35mを測る。埋土は2層

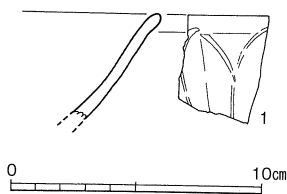
に分層でき、上層は粘性の強い黒褐色土、下層は砂質でやや粘性の強いにぶい黄褐色土である。内部は二段掘りになっており、南側にテラス状の段が付く。遺物は青磁や15世紀後半の土師器小坏等が出土したが、06-SX100を切ることからⅦ期(16世紀末葉)に位置付ける。

06-SK199出土遺物 (第3-62図)

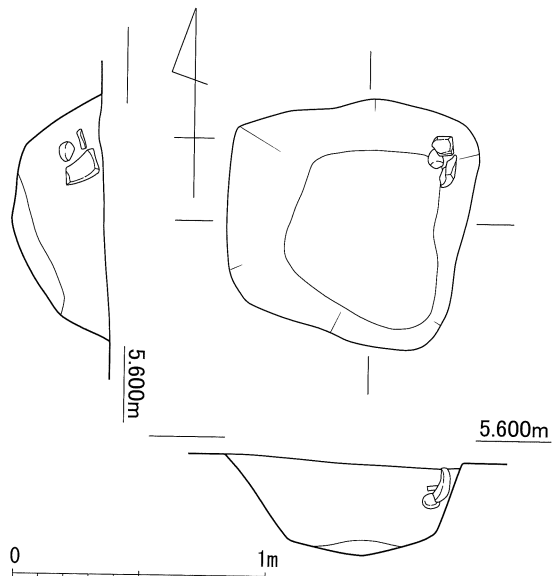
1は青磁香炉で、底部に3足の短い脚が付く。2・3は在地形の土師器小型坏である。2は口縁部が直線的に開き、逆台形状の器形を呈する。3は口縁部の下位で軽く屈曲し、口縁部は外反気味におさめる。いずれも底面に回転糸切り痕が認められる。



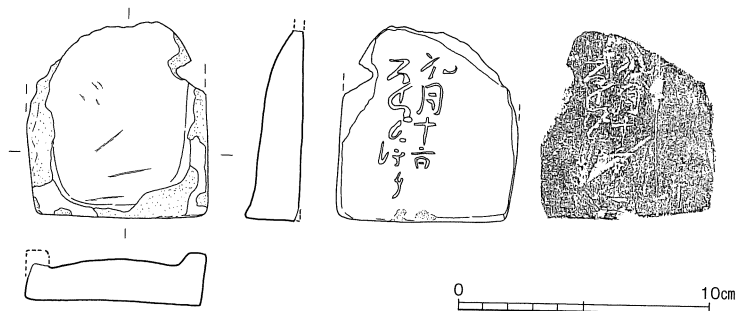
第3-73図 06-SK217実測図 (1/30)



第3-74図 06-SK217出土遺物実測図 (1/3)



第3-75図 06-SK219実測図 (1/30)



第3-76図 06-SK219出土遺物実測図 (1/3)

06-SK200 (第3-63図)

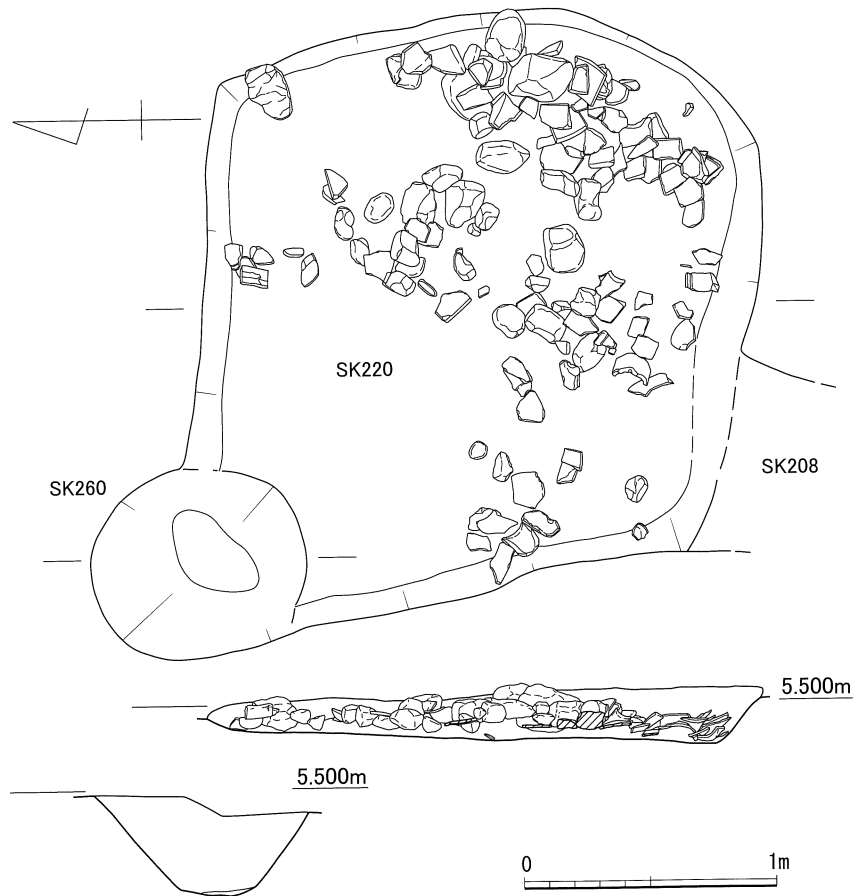
1区のO63・O64グリッドで検出した、5層上面から掘り込む土坑ある。平面形状は隅丸方形で、東側は調査区外に続く。長辺1.63m、短辺1.28m以上、深さ1.60mを測る。土坑底面は平坦で、底面から壁面が直に立ち上がる。埋土は4層に分層でき、いずれも炭を含む他、1層には焼土細粒も混じる。土坑からは数点の礫が散発的に出土した他、遺物は白磁や土師器、土錘等が出土した。14世紀代の土師器が出土しており、遺構の年代はⅡ期(14世紀中頃～14世紀末)と推定する。

06-SK200出土遺物(第3-64図)

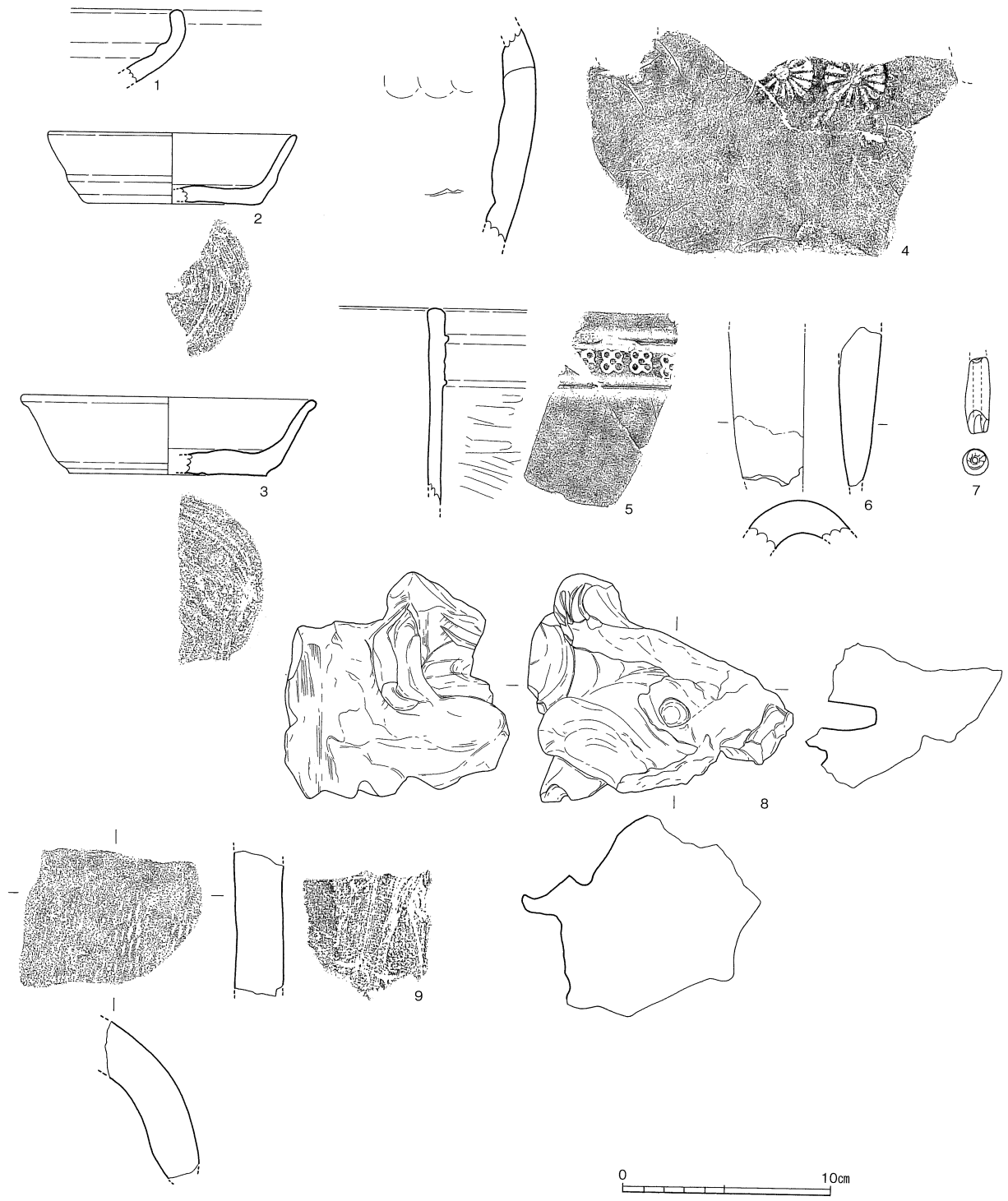
1は白磁碗である。内外面とも無文で、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。2は在地の土師器小皿である。口縁部の立ち上がりは短く、内湾気味におさめる。3は在地の土師器坏である。口縁部は直線的に開き、口縁下部の器壁は厚みを持つ。4は土師質焼成の管状土錘である。

06-SK202 (第3-65図)

1区の南東端、O63・O64グリッドで検出した土坑である。最初に第5層上面で検出した時点では細長い溝状の形状であったが、掘り下げるうちに遺構が広がる事が分かったため、最終的には幅が倍近くに拡大した。南側が調査区外に続くために全体の規模は明らかにできないが、検出した範囲で東西3.65m、南北6.70m以上、深さ0.48mを測る。埋土は4層に分層できる。遺物は土師器が出土しており、遺構の年代はⅡ期(14世紀中頃～14世紀末)に比定する。



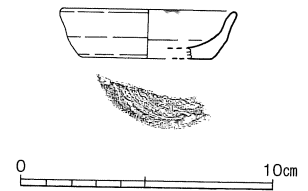
第3-77図 06-SK220・260実測図(1/30)



第3-78図 06-SK220出土遺物実測図 (1/3)

06-SK202出土遺物 (第3-66図)

1~3は在地の土師器小皿である。いずれも器高は低く、口縁部は短く外に開く。4は在地の土師器坏で、底部から口縁部にかけて直線的に開き、器壁は胴部中位に厚みをもつ。内外面とも煤の付着が認められる。5は土師器の鍋である。胴部は丸く、口縁部は大きく外に折れる。6は土師器鍋で、口縁下に鏝部を貼り付ける。7は鞆羽口の破片である。



第3-79図 06-SK260出土遺物実測図 (1/3)

06-SK208 (第3-67図)

1区のN63・64、O63・64グリッドで検出した土坑である。形状は細長い溝状を呈し、北端部には小さい土坑状の掘り込みを伴う。長さ5.74m、幅0.95m、深さ約0.2mを測る。遺構の北側は06-SK220、06-SD221と重複しており、SK208がこれらの遺構を切っている。埋土は2層に分層でき、上層は少量の炭を含む褐色土、下層は微量の炭を含む灰黄褐色土で、やや粘性を帯びる。遺物は青花や土師器、瓦、石製品、銭貨片等が出土した。この周囲では同様の土坑や短い溝状遺構が複数確認 (SK208・SK209、SD195・SD196・SD197・SD203・SD204・SD214が該当) されており、一様に耕作土に由来すると思われる灰色～にぶい黄褐色系の埋土を持っている。同様の遺構は旧万寿寺跡第6次調査区と西接する中世大友府内町跡第29次調査区でも確認されており、ここでは連続する溝状遺構群として道路状遺構の下部構造としての波板状圧痕の可能性も指摘されている⁽³⁾。報告では埋土の状況が不明だが、旧万寿寺跡第6次調査区では他に道路状遺構とすべきものはなく、SK208等遺構群も土壌が硬化したような状況が見られないなど、道路とは考え難い。1区の中世遺構面の最上部で検出され、かつ耕作土に似た埋土をもつ状況から勘案すると、むしろ近世以降の耕作に伴う遺構の可能性が考えられる。

中世大友府内町跡第29次調査区
波板状圧痕

近世以降の耕作に伴う遺構の可能性

06-SK208出土遺物 (第3-68・3-69図)

1は景德鎮窯の青花碗である。器壁は薄く、内面口縁下に四方禳文、外面には細線彫りの文様を施す。2は在地の土師器坏で、底面に回転糸切り痕が残る。3は土師器の鍋で、口縁外端部は玉縁状に肥厚する。内外面ともハケ調整を密に施す。4は砥石である。5は銭貨の細片で、観の字が判読できる。北宋の大観通寶 (1107年初鑄) であろうか。6はほぼ完形の平瓦である。凹面の両端近くに連続する「×」状の文様が認められる。

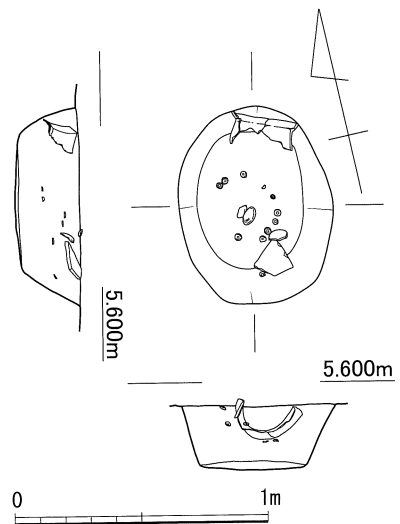
連続する「×」状の文様

06-SK209 (第3-70図)

1区のN63・N64グリッドで検出した土坑である。平面形状は幅広の溝状を呈し、長さ7.12m、幅1.96m、深さ0.25m前後を測る。埋土は3層に分層でき、1層は褐色砂質土、2層はにぶい黄褐色砂質土、3層は若干粘性を帯びる暗褐色土である。遺物は陶磁器、土師器、瓦質土器、瓦、土製品、石製品、銭貨等が出土した。中世の遺物が出土するが、06-SK208同様に近世以降の耕作に伴う遺構の可能性もある。

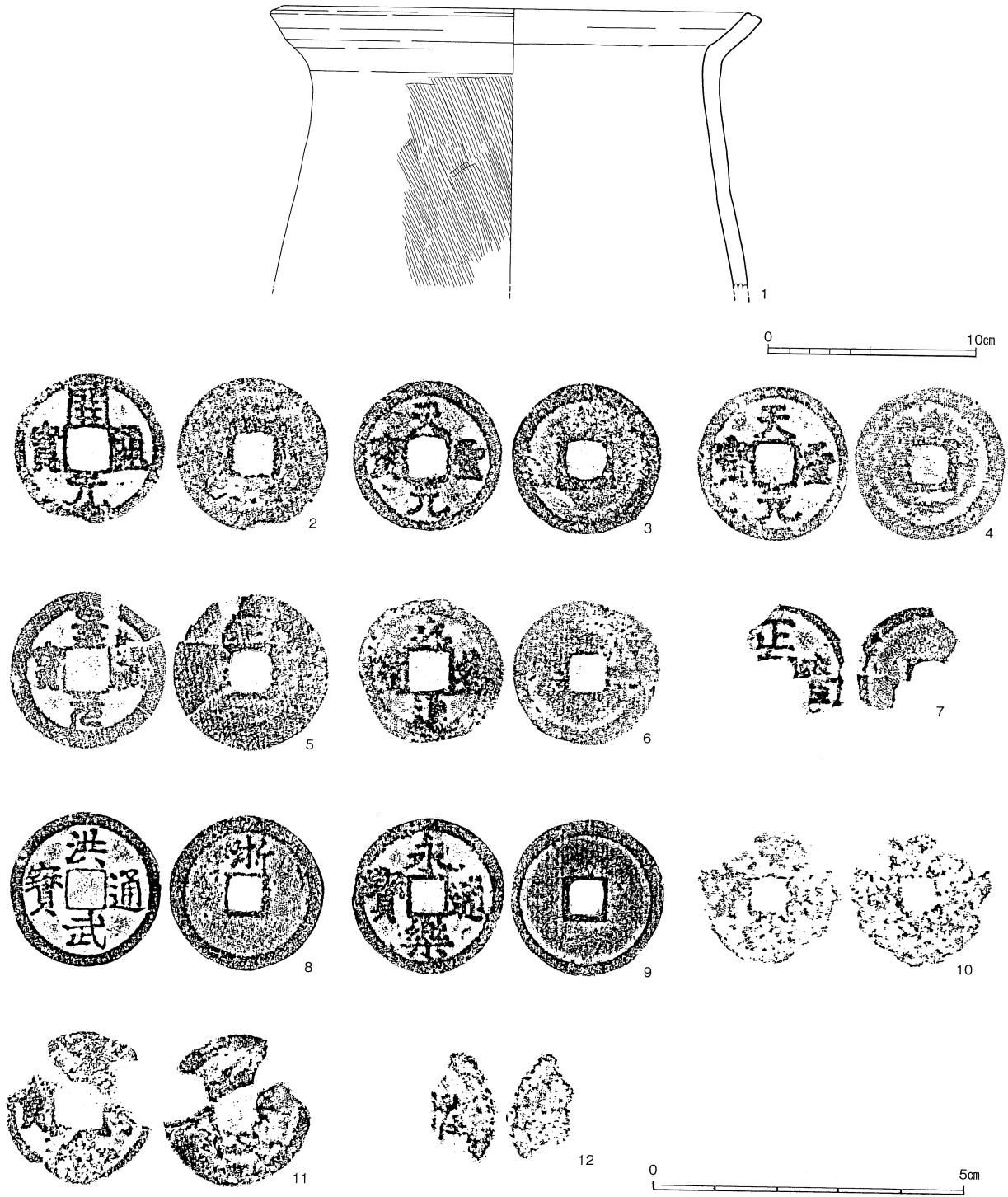
06-SK209出土遺物 (第3-71・3-72図)

1は白磁皿である。口縁部は外反し、見込み及び外面の口縁下からほぼ全面を釉剥ぎする。2は無文の青磁碗である。3は磁窰窯の盤であろう。内外面ともに緑色の釉薬を施す。4は瀬戸窯の片口鉢で、片口部の破片である。5は瀬戸美濃窯の卸皿である。6は備前焼の甕で、口縁部を折り返して玉縁状につくる。7は備前焼の摺鉢で、口縁部の断面形状は三角形状を呈し、内面の摺目末端部が交差する。8は在地の土師器坏で、底面に回転糸切り痕が残る。9は瓦質土器で、凸帯間に方形スタンプ文、凸帯区画の上位に



第3-80図 06-SK226実測図 (1/30)

註(3) 道路状遺構に比定する根拠として、溝状遺構が規則的に並ぶこと、そしてその端部が揃っているような状況が認められることが挙げられている。後藤晃一2009「中世大友府内町跡第29次調査区」【豊後府内12】大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第41集、大分県教育庁埋蔵文化財センター



第3-81図 06-SK226出土遺物実測図 (1/3・1/1)

菊花文のスタンプを施す。10は瓦質土器の摺鉢で、口縁部は丸く肥厚する。外面には整形の指頭圧痕が顕著に残る。内面には摺目を施すが、使用により磨滅している。11・12は土師質焼成の管状土錘である。13は砥石で、上下両面に擦痕が残る。14は銭貨であるが、銭種は不明である。15は瓦質土器の風炉である。肩部には上部が連弧状となる風文を配する。スタンプ文は多様で、口縁下に方形枠内に格子目状文、肩部には菱形文と連子状文、胴部凸帯間には中心が突出する菊花文と連子状文、凸帯下に菊花文を施す。16は雁振瓦である。凹面には布目痕、凸面には縄目タタキが認められ、凸面に「×」字状の線刻がみられる。

06-SK217 (第3-73図)

1区のN64グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形を呈し、東西・南北ともに0.77m、深さ0.95mを測る。内部の壁はほぼ直に掘り込まれ、底面は平坦である。埋土は4層に細分でき、上位堆積層は粘性を帯びるのに対し下部堆積層は粘性に乏しい。内部から青磁碗の小破片が出土したが、遺物の出土量は少ない。そのため遺構の年代推定は困難である。

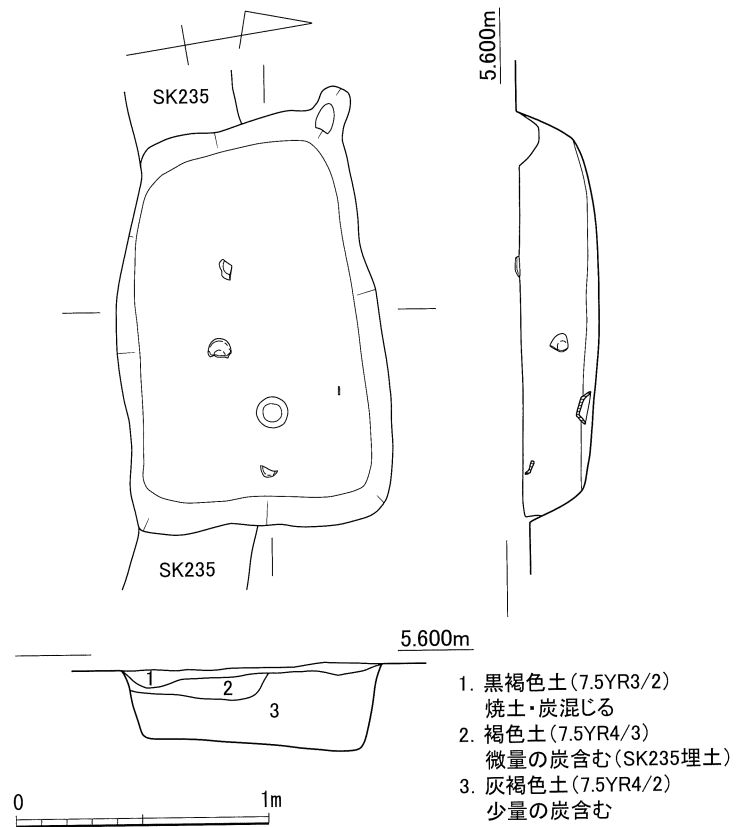
06-SK217出土遺物 (第3-74図)

1は青磁碗である。外面に鎬蓮弁文を施す。

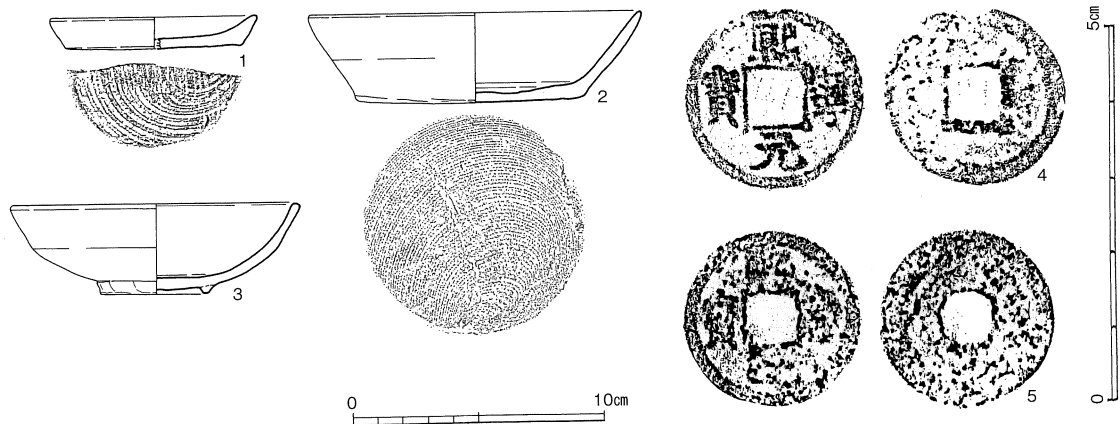
06-SK219 (第3-75図)

1区のN63グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形を呈し、東西・南北とも0.98m、深さ0.37mを測る。埋土は砂礫混じりの褐色土(7.5YR4/3)で、少量のマンガン細粒と微量の炭を含み、粘性は弱い。内部の掘り込みは丸みをもち、底面も中央がやや窪む。遺物は土坑の北東端付近で固まって出土した。特筆されるものとして底面に刻書を持つ土製硯が出土している。中世の遺構ではあるが、遺構の詳細な年代を示す遺物に乏しく時期は明らかにできない。

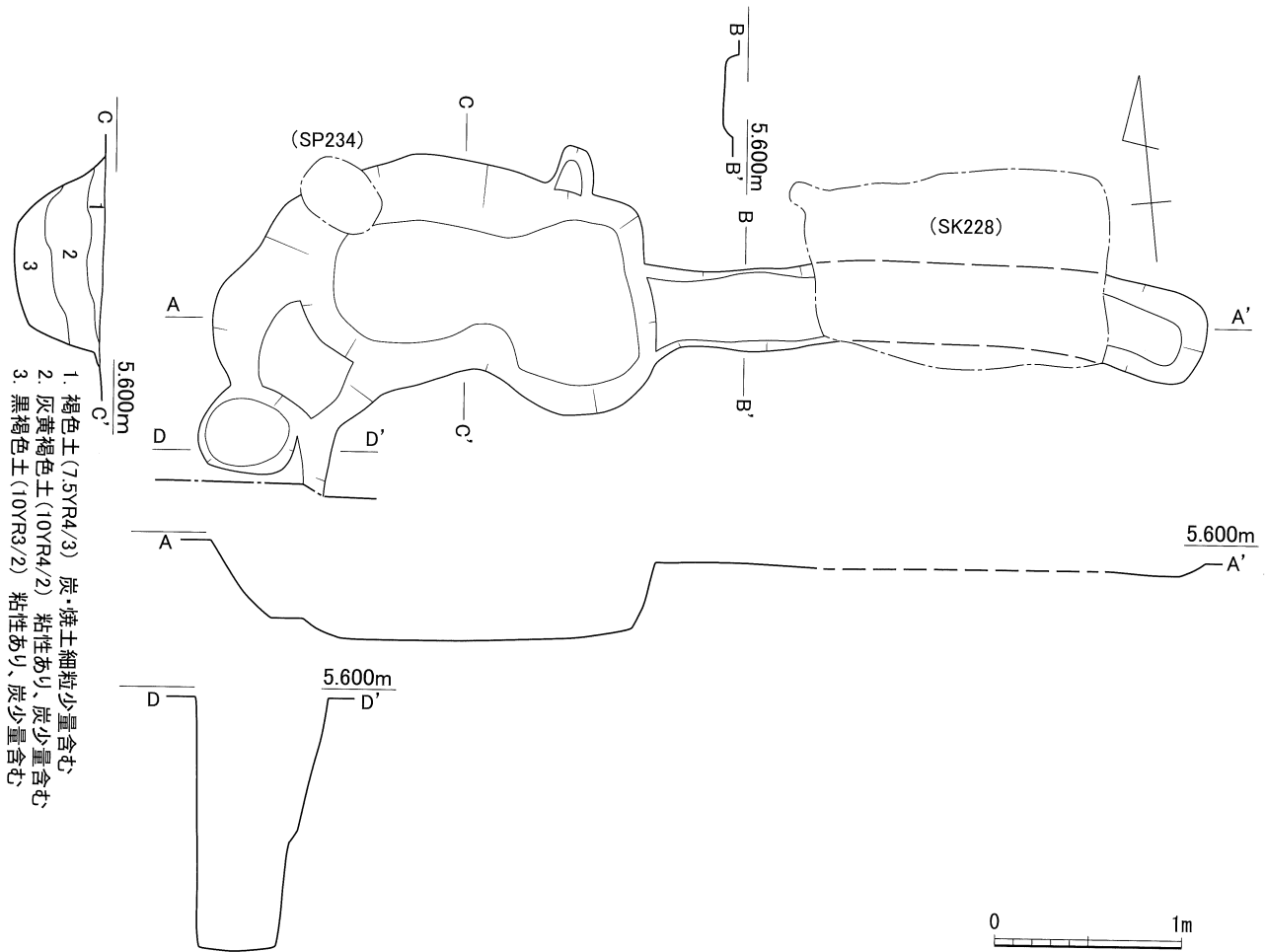
底面に刻書を持つ土製硯



第3-82図 06-SK228実測図 (1/30)



第3-83図 06-SK228出土遺物実測図 (1/3・1/1)

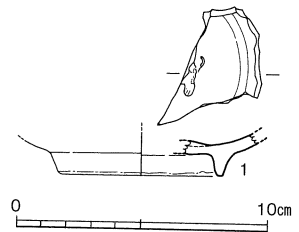


第3-84図 06-SK235実測図 (1/40)

06-SK219出土遺物 (第3-76図)

「九月十二日」の刻字

1は土製硯である。全体の3分の2が残るが、「海」部分から上端部を欠失する。底面には2行にわたる刻字があり、1行目は「九月十二日」の刻字が判読できるが、2行目は崩れた字のため判読できない⁽⁴⁾。人名の可能性もあるが、詳細は不明である。



第3-85図 06-SK235出土遺物実測図 (1/3)

06-SK220・SK260 (第3-77図)

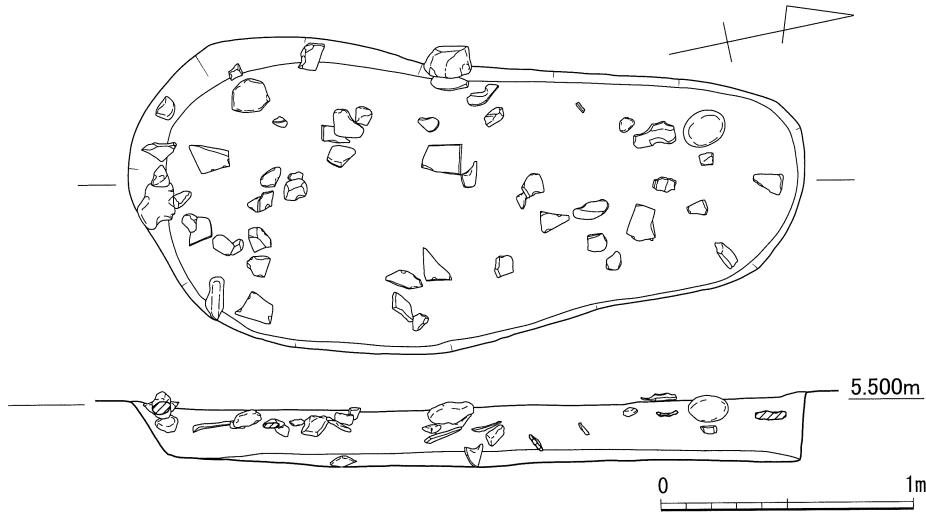
1区のM63・N63グリッドで検出した土坑である。SK220はSD221を切って構築しており、南西側は06-SK208に切られている。またSK260はSK220の北西端部に位置する小規模な土坑で、SK220を切っている。古い方から構築順を整理すると、SD221→SK220→SK260→SK208となる。

SK220は隅丸形状の平面形状をした土坑で、長辺2.32m、短辺2.23m、深さ0.23mを測る。埋土は褐色土(7.5YR4/3)で、白色砂粒と少量の炭を含む単一層である。内部の掘り込みは皿状を呈し、多量の遺物や礫が出土したが、北西部からの出土は少ない。遺構の性格は廃棄土坑と考えられる。

SK260の平面形状は略円形で、長径0.85m、短径0.76m、深さ0.38mを測る。埋土はにぶい黄褐色土(10YR4/3)で、少量の炭を含む。

これら遺構の年代はIV期に埋没したと考えられる溝D221を切ることからIV～V期(15世紀後半～16世紀前半)の間に位置付けられる。

註(4) 刻字の判読には櫻井成昭氏(調査当時大分県立歴史博物館、現大分県立先哲史料館)の御協力を得、種々御教示いただいた。



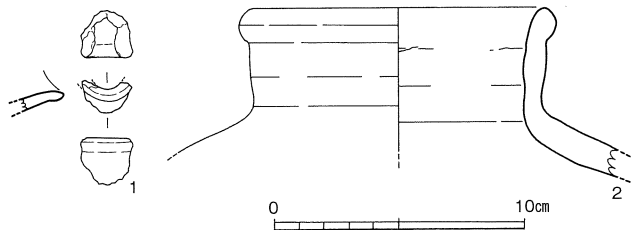
第3-86図 06-SK236実測図 (1/30)

06-SK220出土遺物(第3-78図)

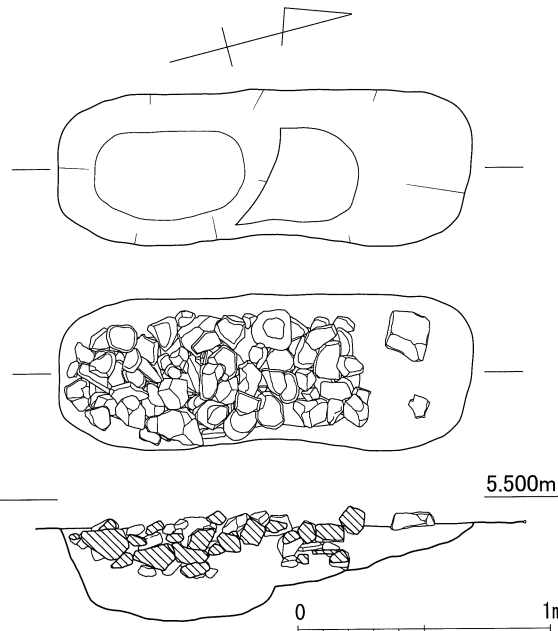
1は備前焼の鉢である。口縁部は内湾し、端部は丸くおさめる。2・3は在地の土師器坏で、底面に回転糸切り痕が残る。3は口縁部が外反し、端部は丸い。4・5は瓦質土器である。4は風炉で、肩部に風門を配し、菊花状のスタンプ文を施す。5は深鉢形の火鉢で、口縁下の凸帯間にサイコロの5の目状のスタンプ文を施す。6は鞆羽口で、先端部は被熱している。7は土師質焼成の管状土錘である。8は鬼瓦で、顔の左上半部の破片である。眉と左目、耳、鼻、口唇上部が表現されている。9は丸瓦で、内面に布目痕と九州型の吊紐痕、凸面に縄目タタキ痕が残る。

鬼瓦

九州型の吊紐痕



第3-87図 06-SK236出土遺物実測図 (1/3)



第3-88図 06-SK243実測図 (1/30)

06-SK260出土遺物(第3-79図)

1は在地の土師器小坏である。口縁部にわずかに煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと判断される。底面には回転糸切り痕が残る。

06-SK226(第3-80図)

1区のM64グリッドで検出した土坑である。平面形状は略楕円形を呈し、長径0.79m、短径0.62m、深さ0.25mを測る。埋土は褐色土(7.5YR4/3)で、少量の炭を含む。遺物は土坑の北端部で口縁部の約2分の1が残る古代の土師器甕と、土坑中央付近を中心に11点の銭貨が出土した。銭貨には明の永楽通寶を含むことから、IV期(15世紀中頃~後半)以降の遺構と判断する。

11点の銭貨が出土

06-SK226出土遺物 (第3-81図)

1は土師器甕である。胴部がやや膨らむ下膨れ形の器形と思われ、頸部から口縁部は外に開く。外面に斜位のハケ目調整を施す。いわゆる企救型甕で、8世紀代に比定されよう。2～12は銭貨である。1は唐の開元通寶(621年初鑄)である。3～6は北宋銭で、3・4は天聖元寶(1023年初鑄)、5は景祐元寶(1034年初鑄)、6は元寶通寶(1078年初鑄)である。7は2字を欠くが「正盛」が判読でき、金の正盛元寶(1157年初鑄)と判断できる。8は明の洪武通寶(1368年初鑄)である。背面上部に「浙」字があることから、浙江省杭州で鑄造されたものと判る。9は明の永樂通寶(1408年初鑄)である。10・11は「寶」字以外は判読できない。12は1字だけが残るが、銭文が不鮮明で銭種は不明である。

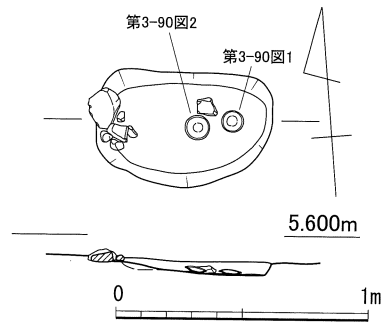
企救型甕

金の正盛元寶
洪武通寶
浙江省杭州
で鑄造

06-SK228 (第3-82図)

1区のM64グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形で、長辺1.55m、短辺1.06m、深さ0.32mを測る。溝状の土坑06-SK235と重複するが、土層断面からSD235がSK228を切っていることが確認できる。埋土は灰褐色土で、少量の炭を含む。遺物は土坑の検出面近くから土師器小皿が、中位から吉備系土師器椀、底面から逆位の状態で土師器坏が出土した。遺構の年代は吉備系土師器椀の出土からI期(14世紀前半)に位置づける。

吉備系土師器椀

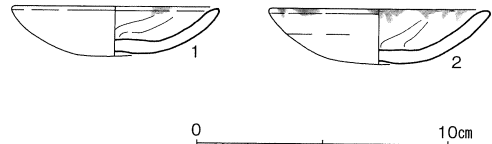


第3-89図 06-SK241実測図(1/30)

06-SK228出土遺物 (第3-83図)

1は在地の土師器小皿である。口縁部は短く、底面には回転糸切り痕が残る。2は在地の土師器坏で、口縁部は直線的に外に開き、底面には回転糸切り痕が残る。3は高台付きの吉備系土師器椀である。4・5は銭貨で、いずれも北宋の熙寧元寶(1068年初鑄)である。

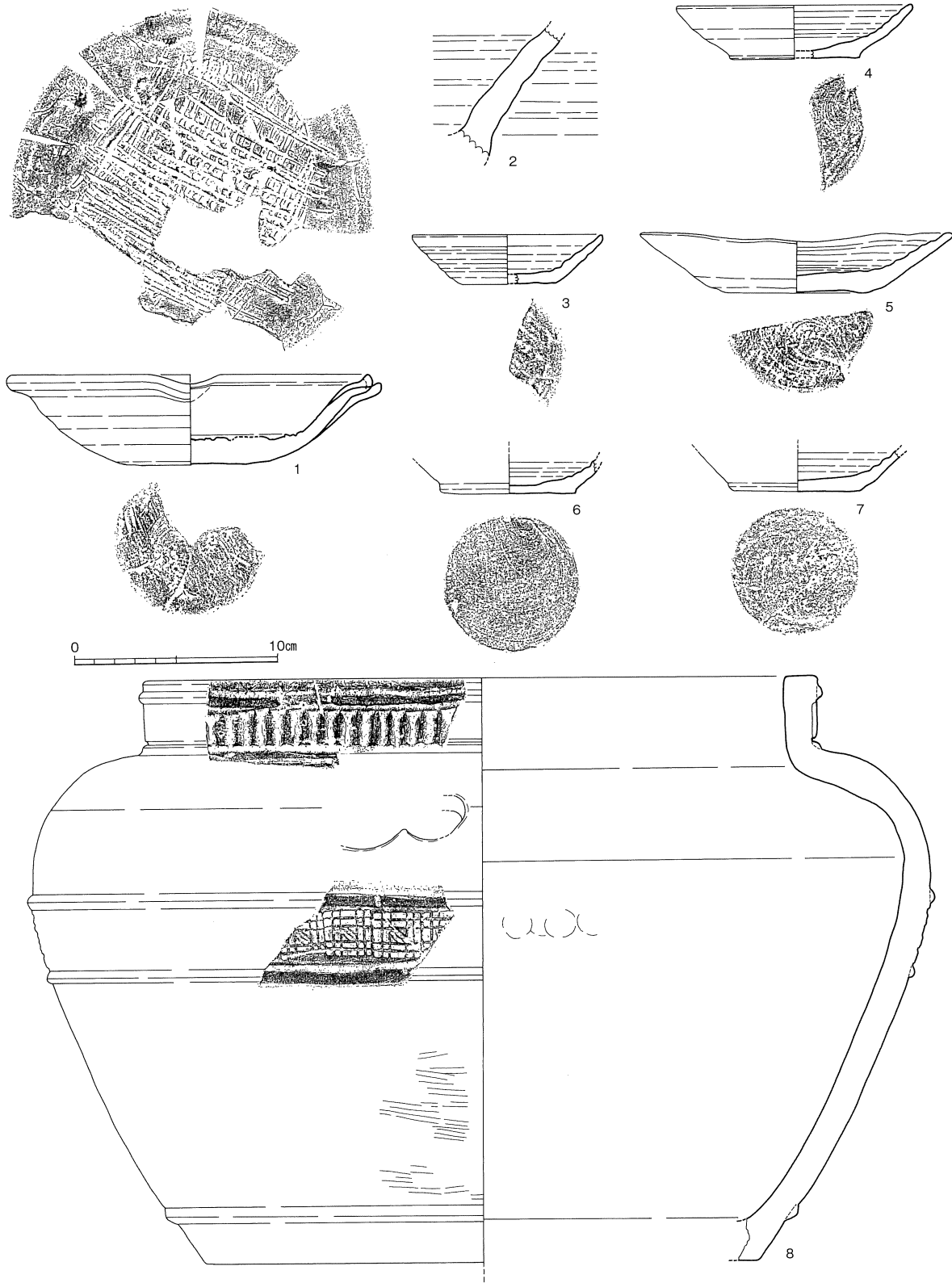
吉備系土師器椀



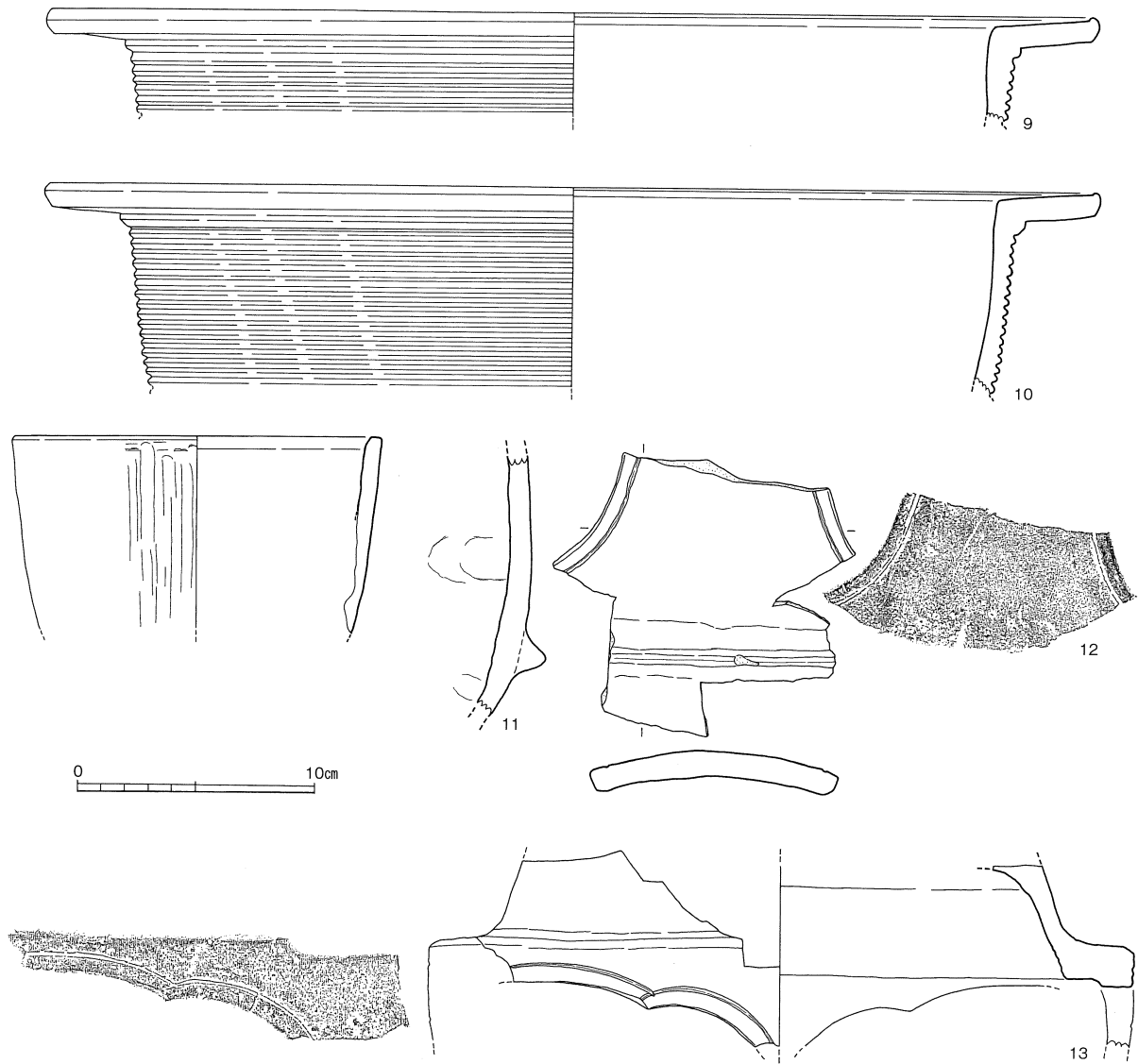
第3-90図 06-SK241出土遺物実測図(1/3)



第3-91図 06-SK248実測図(1/30)



第3-92図 06-SK248出土遺物実測図① (1/3)



第3-93図 06-SK248出土遺物実測図① (1/3)

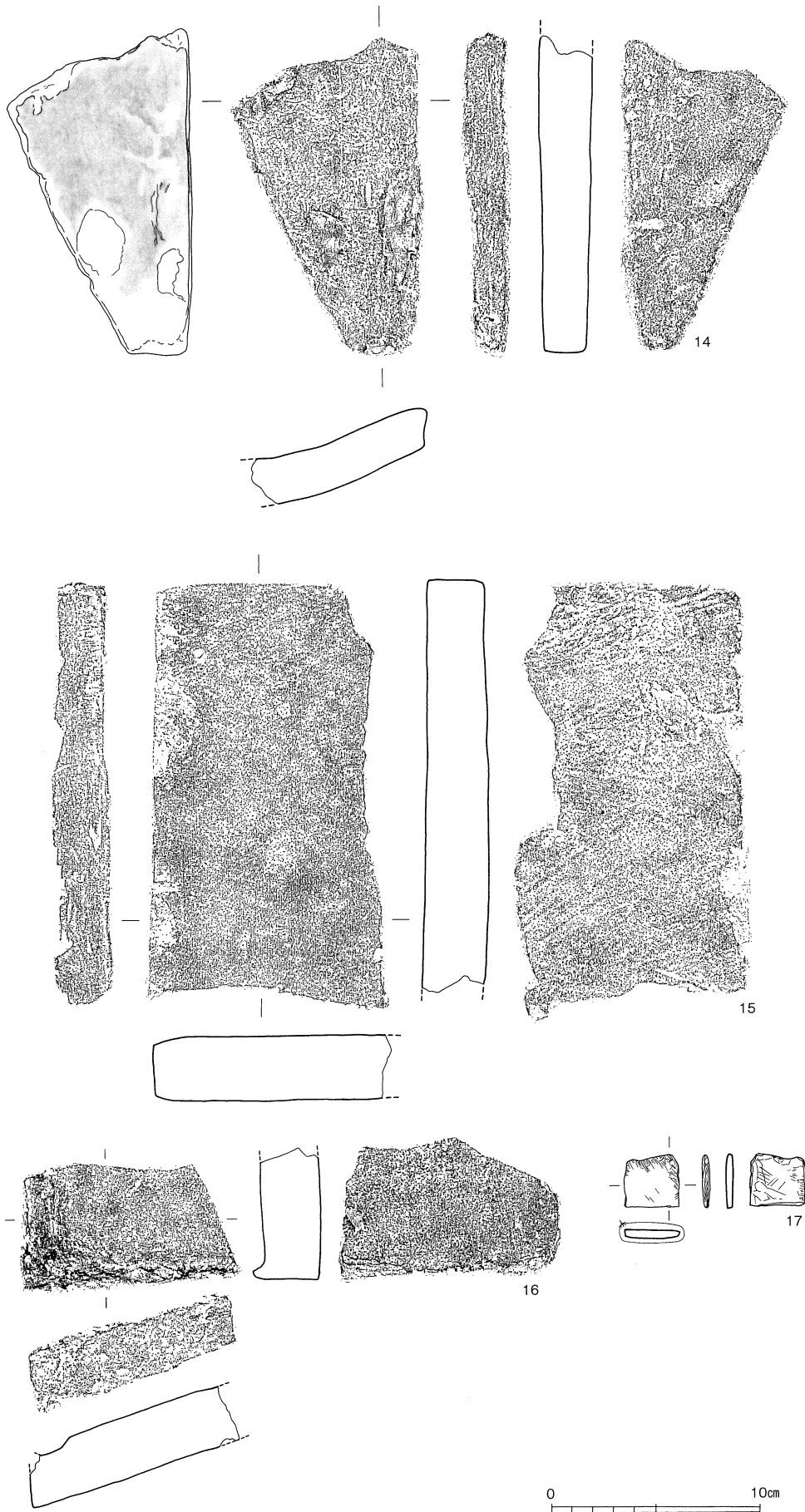
06-SK235 (第3-84図)

1区のM64グリッドで検出した土坑である。平面形状は不整形で、西半部の土坑状の部分と東半部の溝状の部分からなる。そのため溝と2基の土坑が重複したと思われるが、その区別ができなかった。土坑状部分では北辺の一部は06-SP234に切られ、溝状部分の東半部は土坑06-SK228を切っている。長辺5.39m、短辺1.22m、溝状部分では幅0.40～0.50mを測る。深さは一様ではなく、溝状部分では約0.1mと浅いのに対し、土坑部分ではC-C'断面で約0.5m、D-D'断面では1.38mと深い。埋土は3層に分層され、上層では焼土を含む。遺構の規模に対し遺物の出土は少なく、年代を推定できる遺物に乏しい。しかし切り合いからSK228よりは後出することは確実で、Ⅱ期(14世紀中頃から後半)以降としかいえない。

06-SK235出土遺物 (第3-85図)

双魚文

1は青磁碗である。見込みに魚形の型押し文があり、対向する魚をあしらった双魚文を施したと思われる。



第3-94図 06-SK248出土遺物実測図①(1/3)

06-SK236 (第3-86図)

廃棄土坑

1区のO62・O63グリッドで検出した土坑である。平面形状は長楕円形を呈し、長辺2.70m、短辺1.23m、深さ0.28mを測る。埋土は灰褐色土(7.5YR4/2)の単一層で、灰色味が強い砂質土である。土坑底面はほぼ平坦で、掘り込みは南辺が緩やかであるのに対し、北辺の掘り込み角度は急で、壁がほぼ直に立ち上がる。土坑のほぼ全域から礫や瓦、土器類が散在して出土しており、廃棄土坑と考えられる。15世紀代に比定される備前焼壺が出土しているが、Ⅳ期(15世紀中頃～後半)と考えられる井戸SE312の埋没後に構築された遺構であること、確実にⅤ期(16世紀前半)に位置づけられる遺物が認められないことから、Ⅳ期でもSE312埋没後すぐに構築されたものと考えたい。

06-SK236出土遺物 (第3-87図)

1は瀬戸美濃窯の片口鉢で、片口部の破片である。2は備前焼の壺で、口縁部は玉縁状に肥厚する。

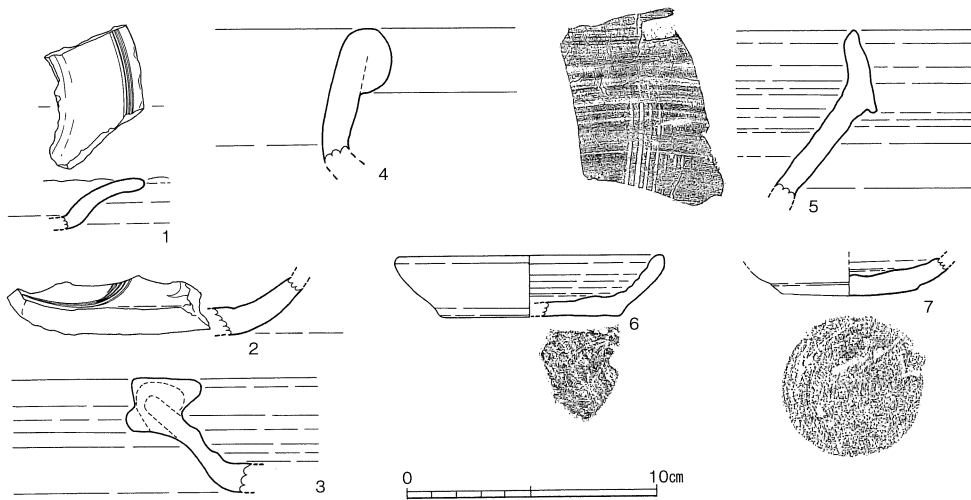
06-SK239 (第3-88図)

廃棄土坑

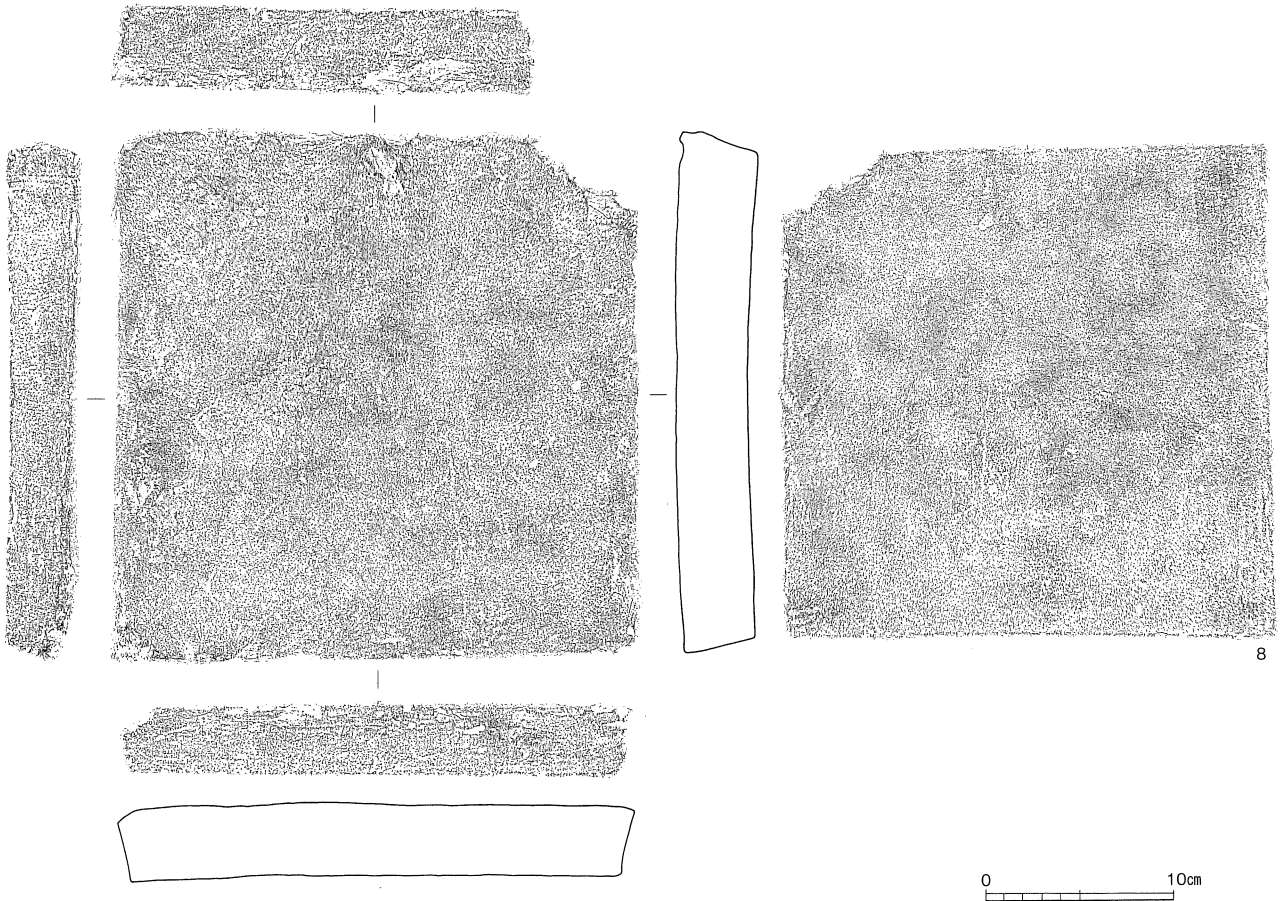
1区のN62グリッドで検出した土坑である。平面形状は南北に長い楕円形状を呈し、長辺1.65m、短辺0.61m、深さ0.37mを測る。土坑内の北半部は浅い皿状の掘り込みを呈し、南半部は一段深く掘り込んでいる。埋土は灰褐色砂質土(7.5YR5/2)で、少量の炭を含む。土坑の検出面から中位にかけて多量の礫が出土しており、廃棄土坑と考えられる。図示できる遺物の出土がなく、詳細な時期は明らかにできないが、14世紀代の溝06-SD282よりは新しい。Ⅲ期(14世紀末～15世紀前半)以降と考えられる。



第3-95図 06-SK249実測図(1/30)



第3-96図 06-SK249出土遺物実測図① (1/3)



第3-97図 06-SK249出土遺物実測図② (1/4)

06-SK241 (第3-89図)

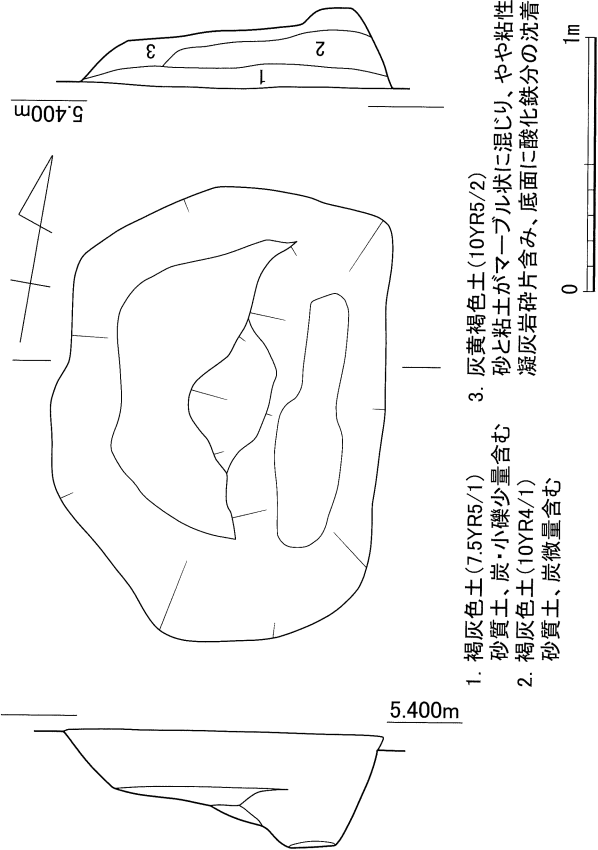
1区のN63グリッドで検出した土坑である。平面形状は丸みを持つ隅丸長方形から楕円形状で、長辺0.70m、短辺0.46m、深さ0.06mを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)で、微量の炭を含む。土坑の西端部から礫がまとまって出土した他、土坑の東半部では2点の完形の京都系土師器皿が底面に正位置で並べられた状態で出土しており、何らかの祭祀行為が行われたものと考えられる。遺構の年代は京都系土師器皿の出土からVI期(16世紀後半)である。

正位置で並べられた状態で出土祭祀行為

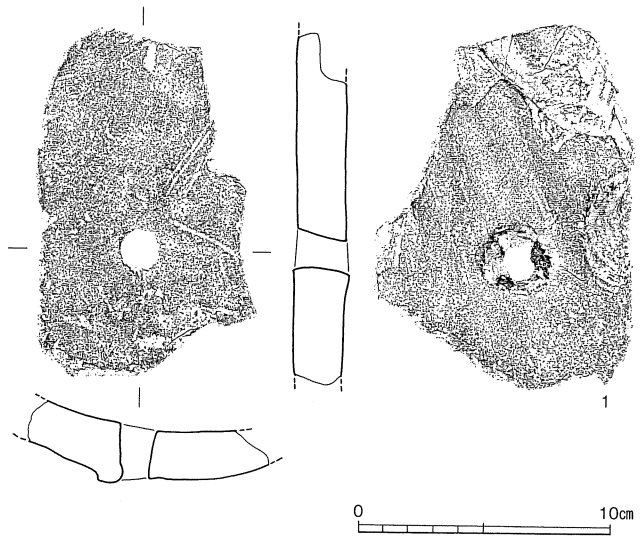
06-SK241出土遺物(第3-90図)

完形の京都系土師器皿

1・2は土坑底部に並べられた状態で出土した完形の京都系土師器皿である。いずれも底部から口縁部にかけて丸く立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。2点とも端部には煤の付着が認められる。



第3-98図 06-SK252実測図 (1/30)



第3-99図 06-SK252出土遺物実測図 (1/3)

06-SK248 (第3-91図)

火災処理土坑

白漆喰の建物が存在

1区のM63グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形を呈するが、東辺がやや張り出す。長辺2.10m、短辺1.05m、深さ0.31mを測る。埋土は黒褐色土(7.5YR3/2)で、焼土・炭を含み、やや粘性を帯びる。内部からは多量の礫とともに瓦や土器類、壁土、焼土塊等が出土しており、火災処理土坑と考えられる。壁土の中には表面に白色の漆喰面を持つものがあり、白漆喰の建物が存在したことがわかる。遺物はV期(16世紀前半)に特徴的な在地のロクロ目土師器皿が出土しているが、この土坑の下位でVI期(16世紀後半)の06-SX291を確認していることから、VI期以降の遺構である。焼土を含むことから天正14年(1586)の島津氏の府内侵攻に伴う火災処理土坑の可能性もあり、VII期(16世紀末葉)に位置づける。

島津氏の府内侵攻に伴う火災処理土坑

06-SK248出土遺物(第3-92図~第3-94図)

コンテナ容器

二次焼成による変色

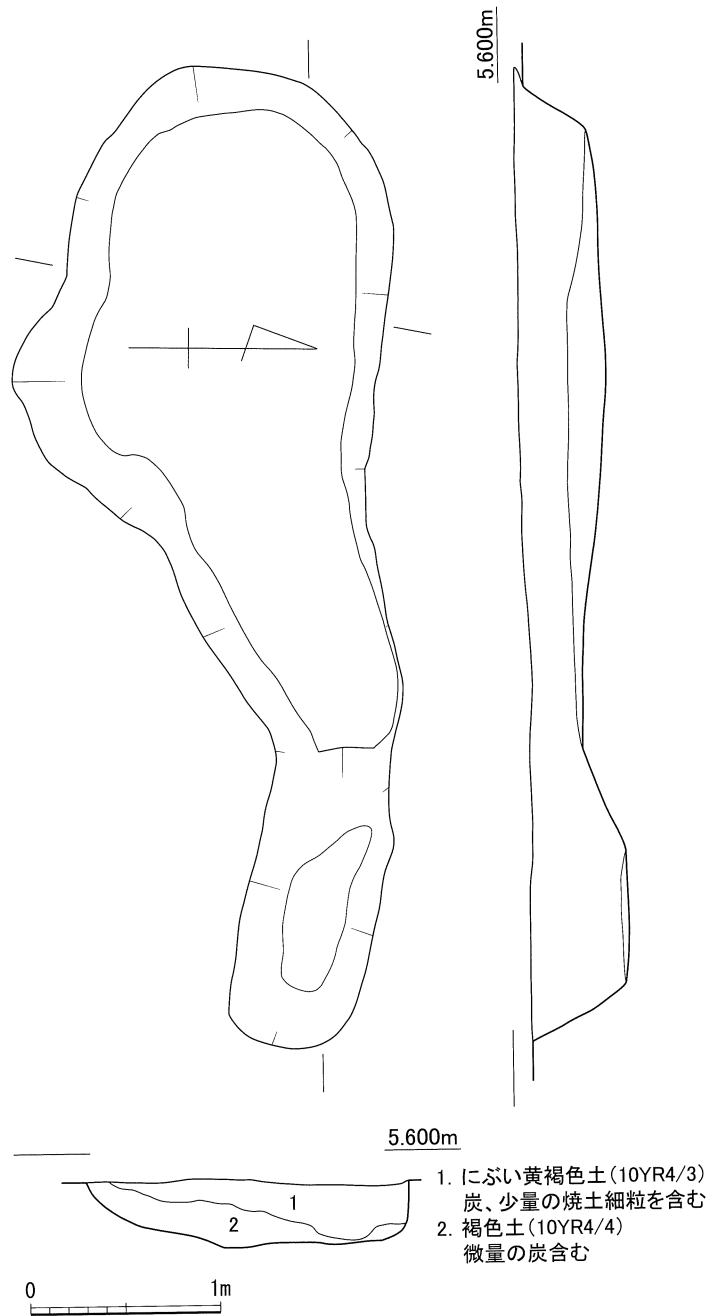
1は瀬戸美濃窯の卸皿である。口縁部の一端が片口となるもので、見込みには格子目状の卸目を密に施し、底面には回転糸切り痕が残る。

SK248の他、SK131上層及び包含層出土の破片と接合が認められた。2は施釉陶器の壺で、底部付近の破片である。内外面とも成形・調整による器面の凹凸が顕著に残る。06-SK249・06-SX291から同一個体片が出土している。産地不明だが中国南部産の可能性が考えられ、コンテナ容器として用いられたものであろう。3~7は内面にロクロ成形による多条の沈線が特徴的な在地の皿である。いずれも底面に回転糸切り痕が残る。4と7には二次焼成による変色が認められる。8は瓦質

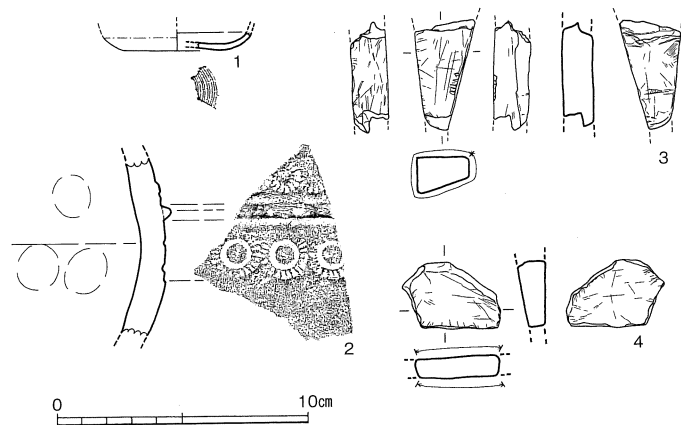
半隆起線状の横走線文

土器の風炉である。肩部が張った甕形の器形を呈し、肩部には下部が連弧状となる風文を配する。口縁から頸部の凸帯間には連子状文、胴部凸帯間には方形のスタンプ文を施す。9・10は瓦質土器の火鉢で、同一個体の可能性が高い。口縁部が大きく外に折れ、胴部外面には多条の半隆起線状の横走線文を施す。9は06-SK268・06-SX291出土の破片と、10は06-SK249出土の破片とそれぞれ接合する。11は瓦質土器の鉢であろうか。外面に粗い縦位のミガキを施す。12・13は同一個体の瓦質土器であるが器種不明のもの。12は山形口縁となる破片で頂部を欠失する。口縁に沿って1条の細沈線を施し、口縁の山形基部近くに横位の凸帯を貼り付ける。13は脚付きの底部で、底部から脚部が段状に開く。脚部は連弧状を呈し、口縁部同様に端部に沿って1条の細沈線を施す。器形から花瓶の可能性も考えられるが、類例を知らない。14～16は瓦類である。14は赤彩を施した平瓦で、凹面に赤彩が認められる。15は埴、16は雁振瓦である。17は薄手の砥石で、3面に擦痕が認められる。

赤彩を施した平瓦



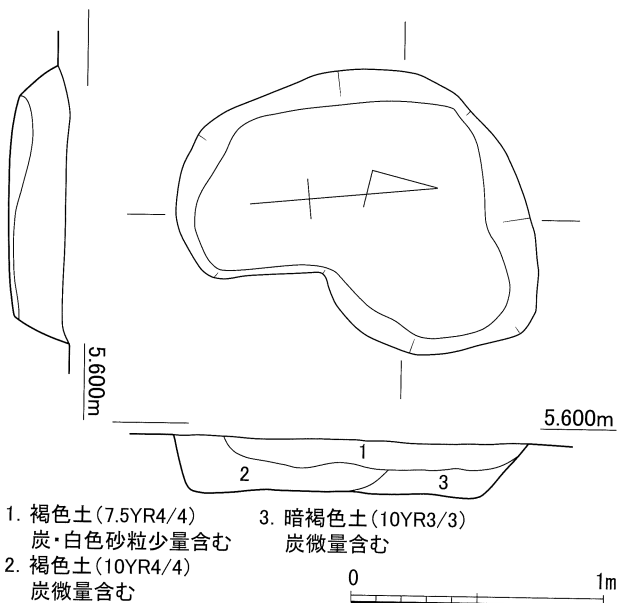
第3-100図 06-SK253実測図 (1/40)



第3-101図 06-SK253出土遺物実測図 (1/3)

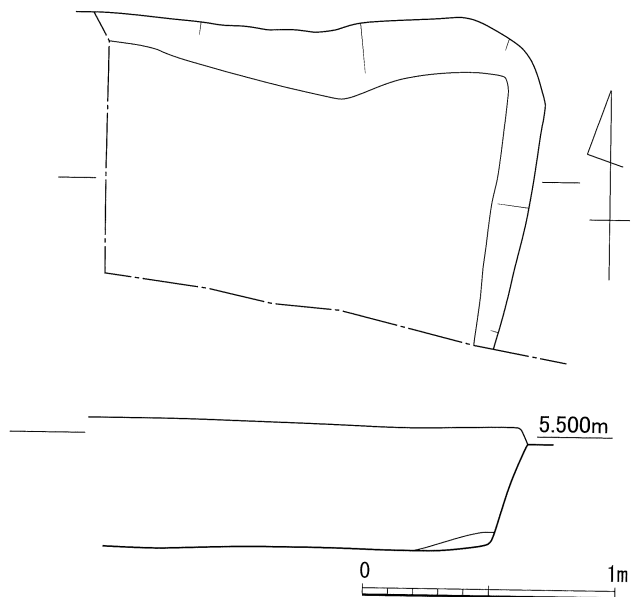
06-SK249 (第3-95図)

1区のM62・M63グリッドで検出した土坑で、先述の06-SK248とは近接している。平面形状は各頂点が丸みを持つ三角形形状を呈し、長辺2.39m、短辺1.48m、深さ0.38mを測る。埋土はやや粘性のある黒褐色土(7.5YR3/2)で、焼土・炭を含む。内部からは多量の礫とともに瓦や土器類、焼土塊等が出土しており、火災処理土坑と考えられる。06-SK248とは埋土が同じで、出土遺物も接合関係が認められることから、両者は同じ火災に伴う廃棄土坑の可能性が高い。従って遺構の時期は06-SK248と同じⅦ期(16世紀末葉)に位置づける。

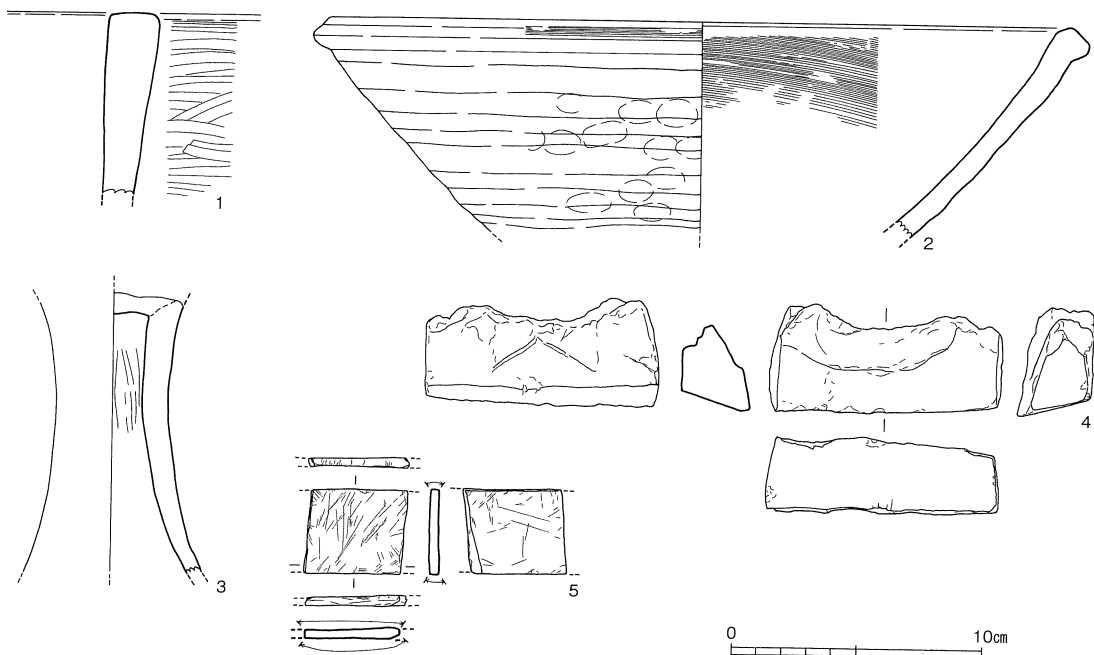


- 1. 褐色土(7.5YR4/4)
炭・白色砂粒少量含む
- 2. 褐色土(10YR4/4)
炭微量含む
- 3. 暗褐色土(10YR3/3)
炭微量含む

第3-102図 06-SK258実測図(1/30)



第3-103図 06-SK259実測図(1/30)

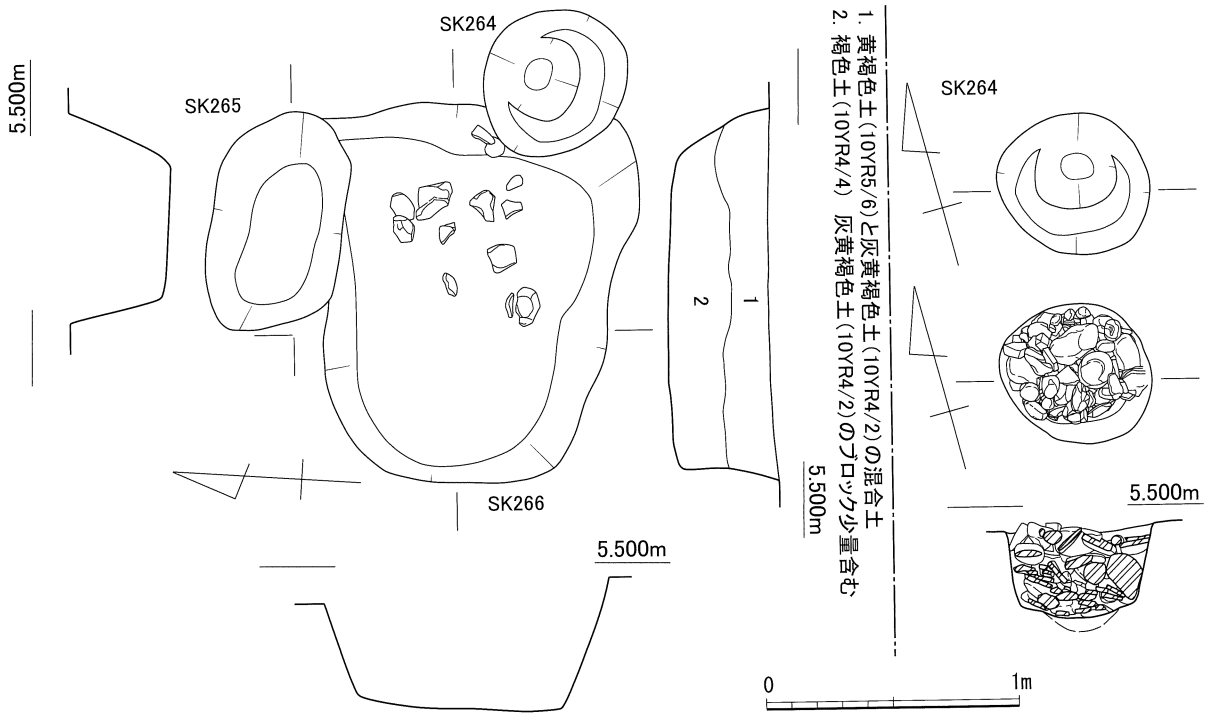


第3-104図 06-SK259出土遺物実測図(1/3)

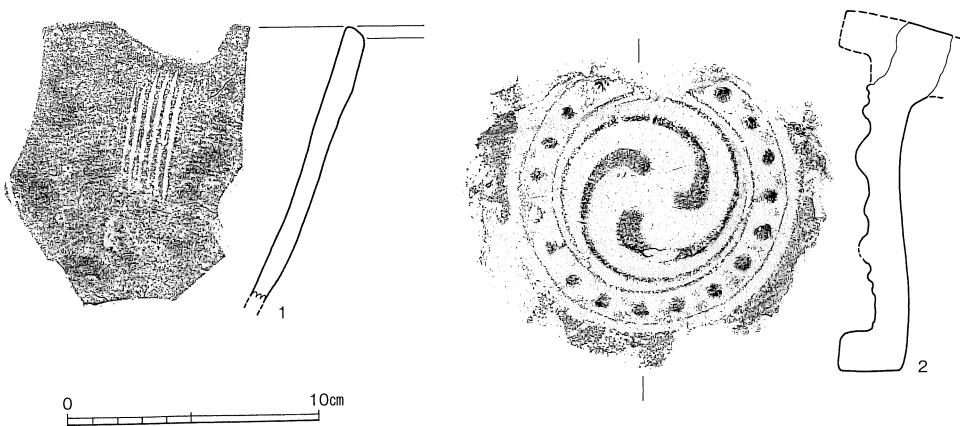
06-SK249出土遺物 (第3-96・3-97図)

中国南部産の
コンテナ容器

1は青磁の稜花皿である。2は青磁碗で、内面に刷毛目文を施す。3は施釉陶器の壺で、口縁部は内外面ともに肥厚させ、口縁端部は平坦な面をもつ。外面には凹線が顕著にみられる。06-SK248と06-SX291から同一個体と考えられる破片が出土しており、中国南部産のコンテナ容器と考えられる。4は備前焼の甕で、口縁部を折り返して玉縁状に作る。5は備前焼の摺鉢で、内傾する口縁部が上方にのびる。6・7は在地の土師器皿で、内面にロクロ整形による多条の沈線がみられる。いずれも底面には回転糸切り痕が残る。8は磚で、一端をわずかに欠くがほぼ完形である。



第3-105図 06-SK264・SK265・SK266実測図 (1/30)



第3-106図 06-SK264出土遺物実測図 (1/3)

06-SK252 (第3-98図)

1区のO62・N63・O63グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形から楕円形状を呈し、長辺1.80m、短辺1.33m、深さ0.45mを測る。埋土は3層に分層でき、1層は炭・小礫を含む褐灰色砂質土、2層は微量の炭を含む褐灰色土、3層は砂と粘土がマーブル状に混じる灰黄褐色土である。土坑の底面はほぼ平坦で、東側にかけて一段深く掘り込んでいる。遺物は瓦の他に図示できるものがないが、IV期(15世紀中頃～後半)に比定される06-SE312の埋没後に構築された遺構であることから、V期(16世紀前半)以降と判断する。

06-SK252出土遺物 (第3-99図)

1は平瓦である。凹面上部から凸面側に向けて穿つ釘穴をもつ。

06-SK253 (第3-100図)

1区のM63グリッドで検出した土坑である。06-SD221と06-SD288と重複するが、06-SK253がこれらの遺構を切っている。平面形状は不整形で、東端部は土坑状に一段深く掘り込まれる。遺構の規模は長辺5.23m、短辺1.96m、深さ0.53mを測る。埋土は2層で、上層は炭及び少量の焼土細粒を含むいぶい黄褐色土、下層は微量の炭を含む褐色土である。遺物の出土は少なく、年代比定の決め手を欠くが、IV期(15世紀中頃から後半)に比定される06-SD221を切ることから、V期(16世紀前半)以降に位置づける。

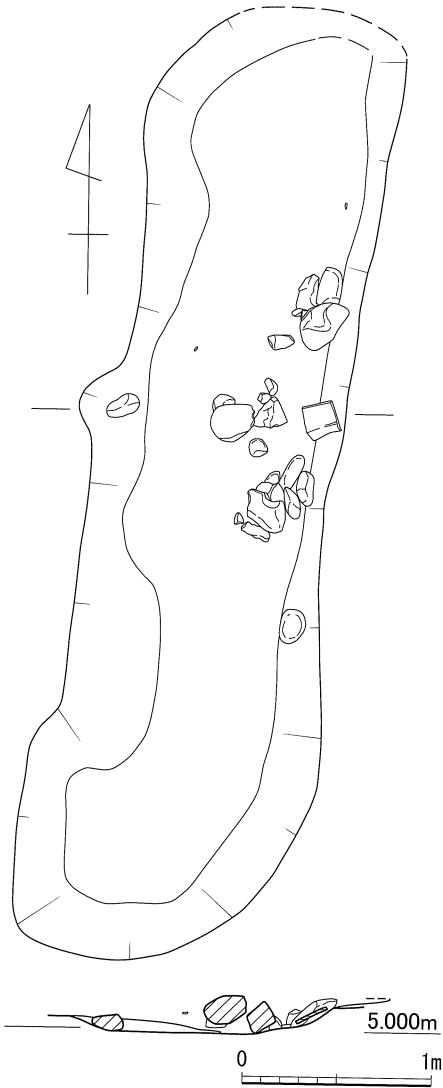
06-SK253出土遺物 (第3-101図)

陶器茶入

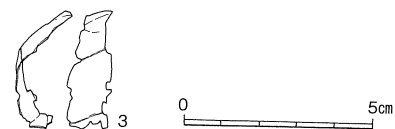
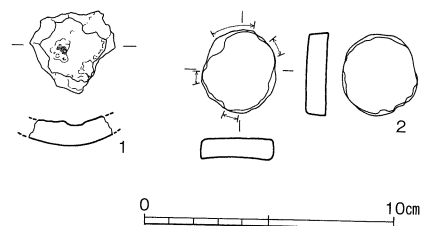
1は陶器茶入の底部である。平底で同部の立ち上がりは丸い。底面には回転糸切り痕が残る。2は瓦質土器の火鉢又は風炉で、凸帯の上下にスタンプ文を施す。3・4は砥石である。

06-SK258 (第3-102図)

1区のL64・M64グリッドで検出した土坑である。長辺1.51m、短辺1.12m、深さ0.23mを測る。埋土は炭を含む褐色土ないし暗褐色土で、色調及び土質から3層に分層できる。1層には白色砂粒が混じる。図示できる遺物の出土がなく遺構の詳細な時期は明らかにできないが、06-SD090の埋没後に構築された遺構であることから、III期(14世紀末～15世紀前半)以降のものである。



第3-107図 06-SK267実測図(1/40)



第3-108図 06-SK267出土遺物実測図(1/3・1/2)

06-SK259 (第3-103図)

1区の南西端、L64・M64グリッドで検出した土坑である。西側及び南側が調査区外に続くため全体の形状や規模は明らかにできないが、検出範囲では北東端部が丸みを持つ形状を呈する。遺構の規模は東西1.60m以上、南北1.30m以上、深さ0.35mを測る。06-SD090とは重複しており、06-SK259が06-SD090を切っている。06-SD090を切ることからⅢ期(14世紀末～15世紀前半)以降に位置づけられる。

06-SK259出土遺物(第3-104図)

赤間石

赤間硯の未成品

1・2は瓦質土器である。1は火鉢で、外面に粗いミガキを施す。2は捏鉢で、内面は横位のハケ調整、外面には成形時の指頭圧痕が残る。3は土師器の高坏脚部で、脚部が高い形状から古代のものであろう。4・5は石製品である。4は輝緑凝灰岩、いわゆる赤間石を素材とし、側辺の3辺に鋸挽きによる切断痕が見られる。赤間硯の未成品である。5は砥石である。

06-SK264・06-SK265・06-SK266(第3-105図)

廃棄土坑

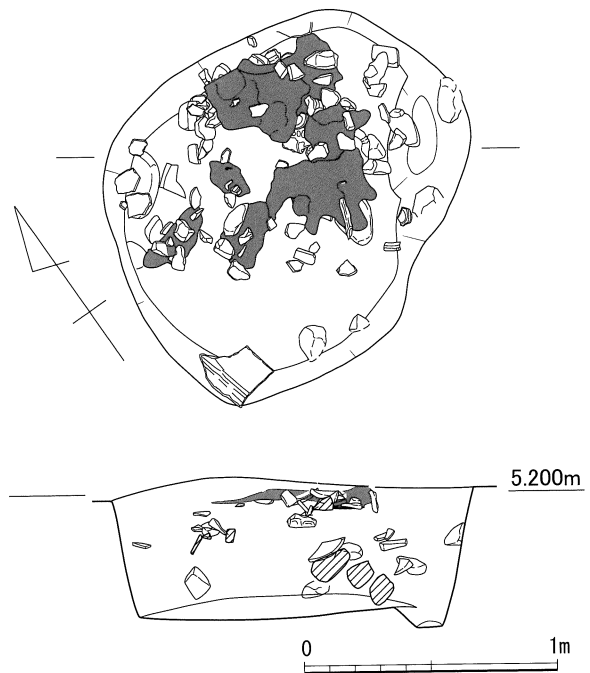
1区のN62・N63グリッドで検出した3基の土坑で、06-SK266を06-SK264・06-SK265が切っている。06-SK264は円形の小さな土坑で、長辺0.62m、短辺0.56m、深さ0.43mを測る。埋土は暗褐色砂質土(10YR3/3)で、少量の炭を含む。内部には多量の礫や瓦等を充填しており、廃棄土坑と考えられる。06-SK265は楕円形の土坑で、長辺0.90m、短辺0.50m、深さ0.43mを測る。埋土は灰褐色土(7.5YR4/2)で、微量の炭を含む。06-SK266は隅丸方形形状の土坑で、長辺1.50m、短辺1.12m、深さ0.51mを測る。埋土は2層あり、主に下層から礫や遺物が出土している。これら遺構の年代を示す遺物に乏しいが、Ⅳ期(15世紀中頃から後半)以降であろうか。

06-SK264出土遺物(第3-106)

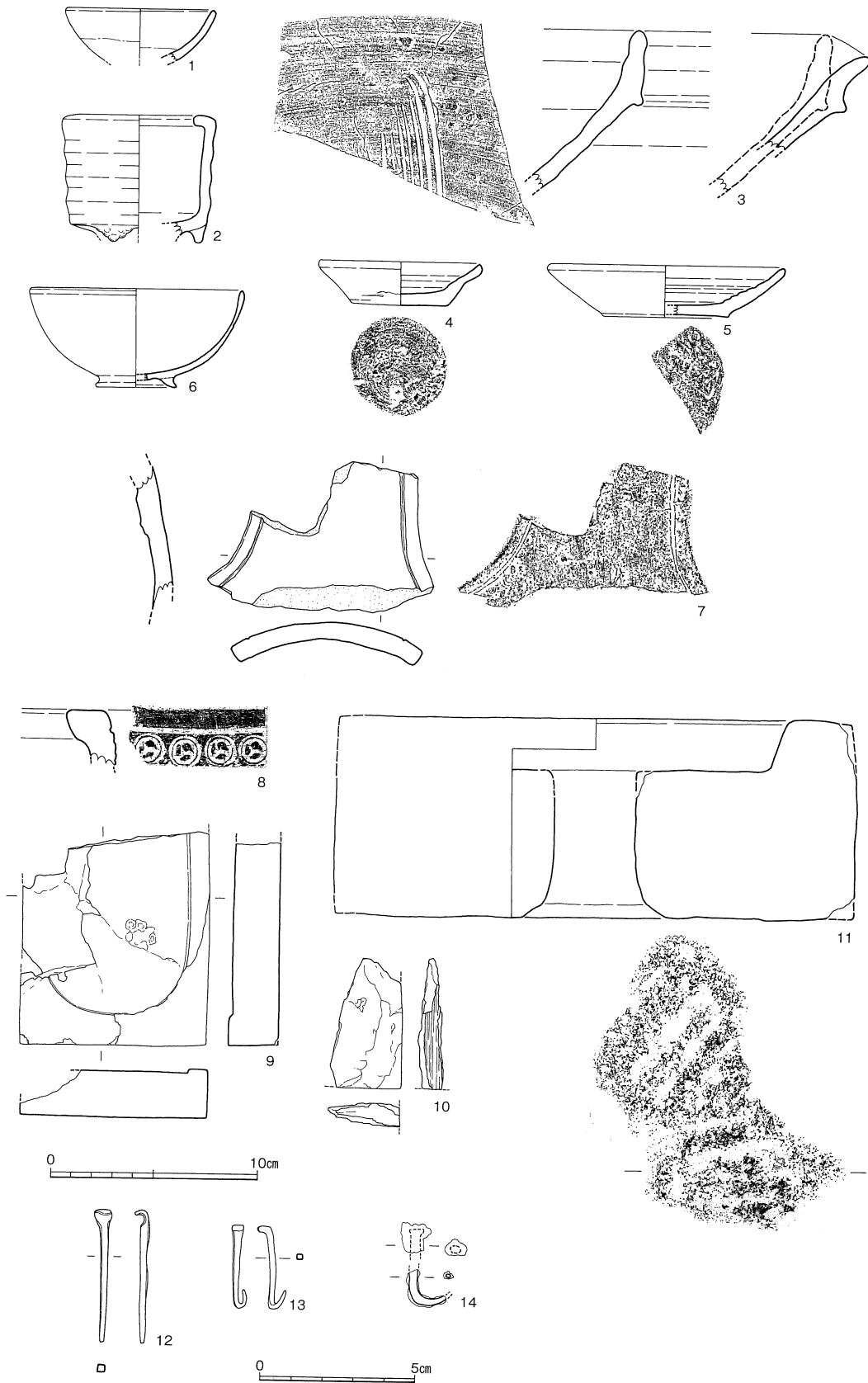
1は瓦質土器の摺鉢である。内面には6条1単位の摺目を施すが、下部は使用により摩滅している。2は軒丸瓦である。瓦当中心に右巻きの巴文と、その周囲に珠文を施す。

06-SK267(第3-107図)

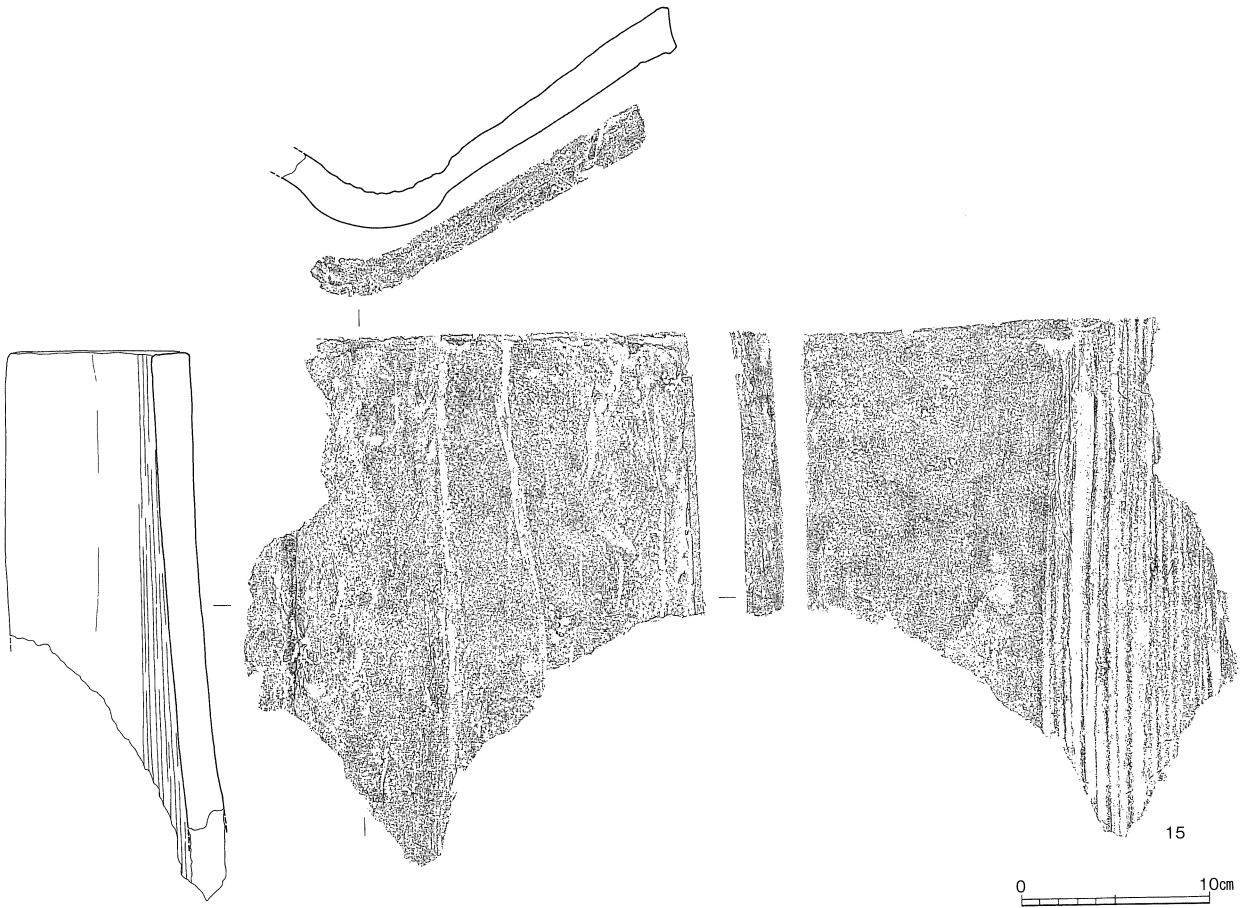
1区のM62グリッドで検出した土坑である。位置的には溝06-SD302と重複するが、検出面では直接の切り合い関係にはなく、それよりも上位に位置している。形状は南北に細長い溝状を呈し、北端部は2区との境界にかかるため全体を確認できていないが、2区で確認されないためほぼ境界線上で収束すると思われる。長辺5.02m以上、短辺1.53m、深さ0.26mを測る。埋土は黒褐色土(7.5YR3/2)で、少量の炭を含む。遺構の年代を示す遺物に乏しいが、06-SD302埋没後に構築された遺構であることから、Ⅶ期(16世紀末)に位置づける。



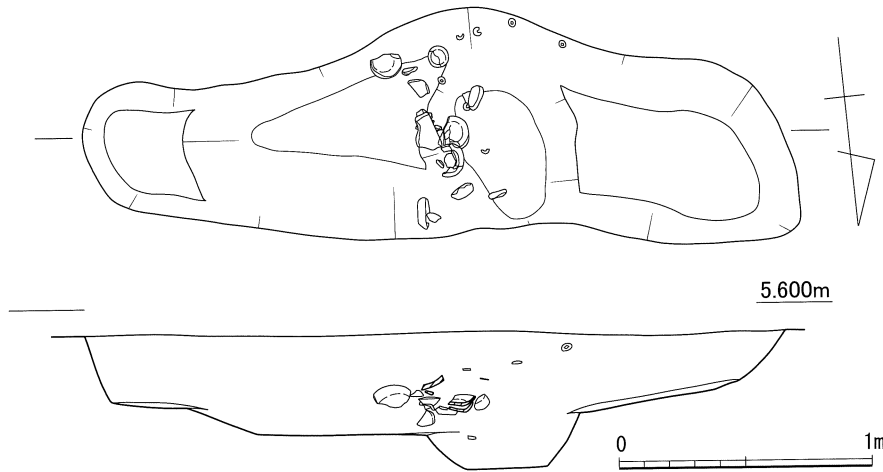
第3-109図 06-SK268実測図(1/30)



第3-110図 06-SK268出土遺物実測図①(1/3・1/2)



第3-111図 06-SK268出土遺物実測図② (1/4)



第3-112図 06-SK269実測図 (1/30)

06-SK267出土遺物 (第3-108図)

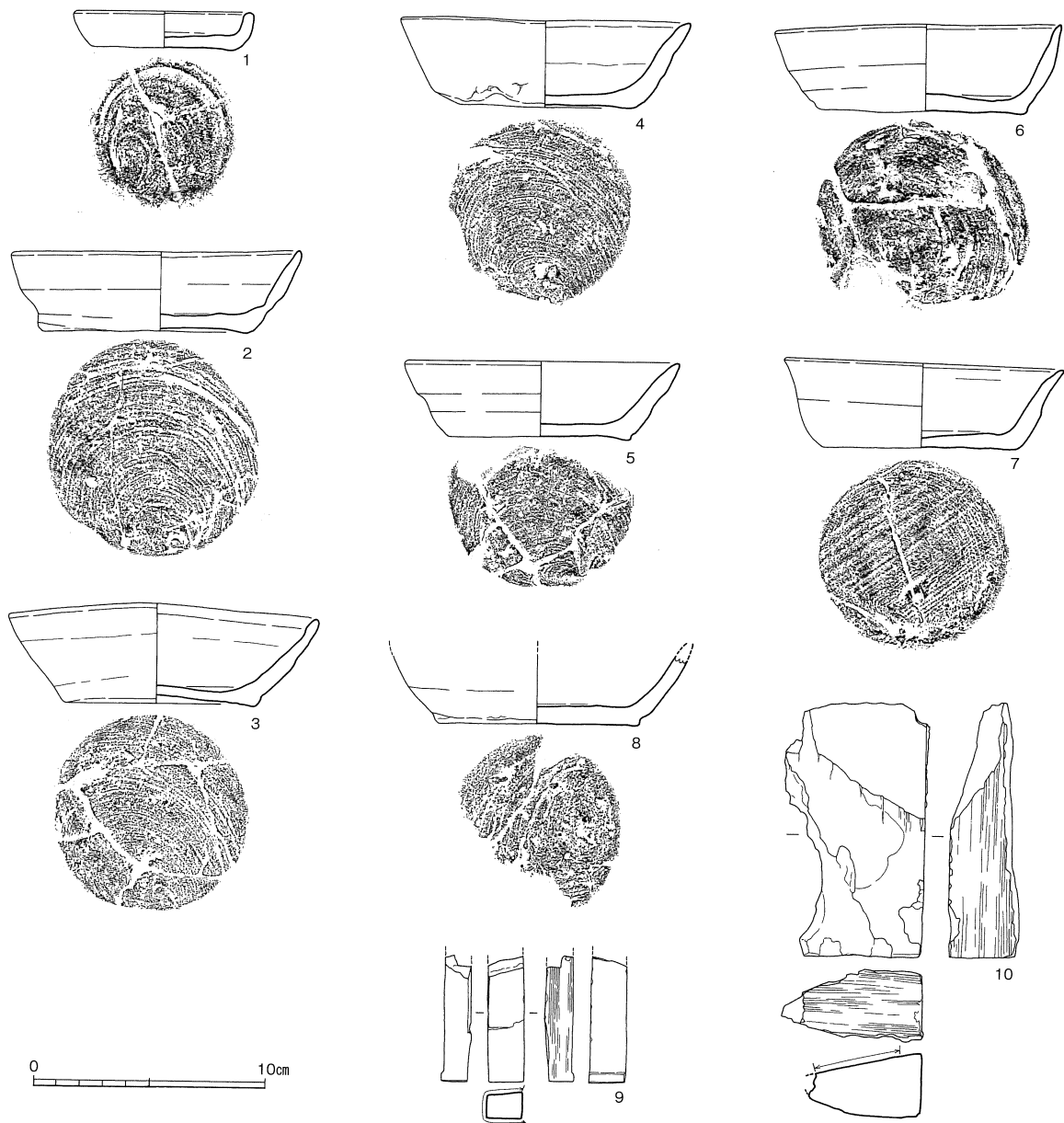
埴塙

1は埴塙の底部である。内面に金属を溶解した付着物がみられる。2は瓦質土器の破片の周囲を研磨した加工円盤である。3は銅製品で、薄い板状の銅を素材とする。

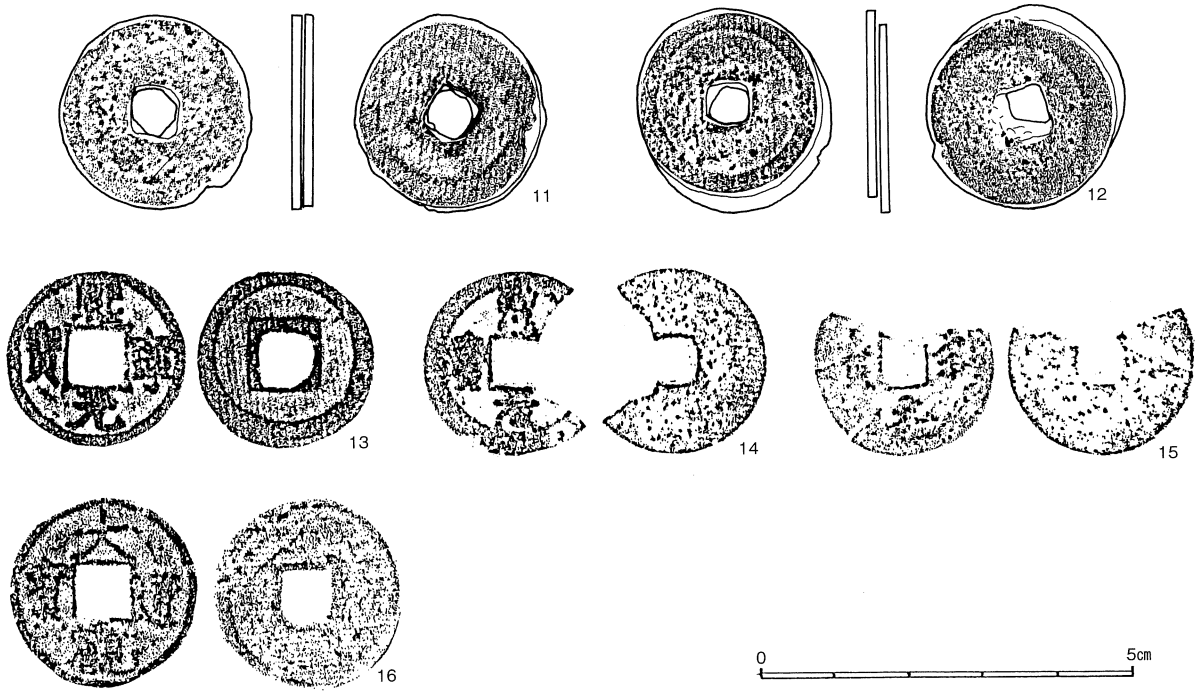
06-SK268 (第3-109図)

1区のM63グリッドで検出した土坑である。06-SK248・06-SK249と近接し、その距離は約1.8～2.0mの位置にある。平面形状はやや歪な卵形を呈し、長辺1.62m、短辺1.33m、深さ0.56mを測る。遺構の東端部は一部が深く掘り込まれる。埋土は灰褐色土(7.5YR4/2)で、焼土及び炭を含む。特に焼土は検出面から遺構上位にかけて濃密な分布が認められた。礫の他、陶磁器や土器類、瓦、石製品、金属製品、表面に漆喰を施した壁土等が出土した。また、遺物には二次焼成を受けたものも見受けられる。そのため、本遺構は火災処理土坑と判断される。出土遺物には06-SK248と接合関係があるものも認められることから、本土坑の時期は06-SK248・06-SK249と同時期と考えられる。従って、Ⅶ期(16世紀末葉)に位置付ける。

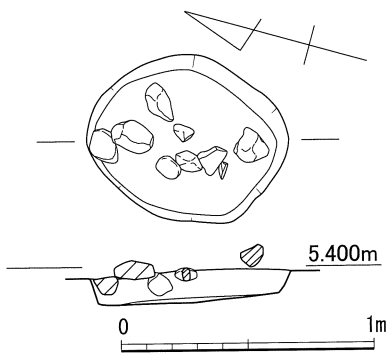
漆喰を施した壁土
火災処理土坑



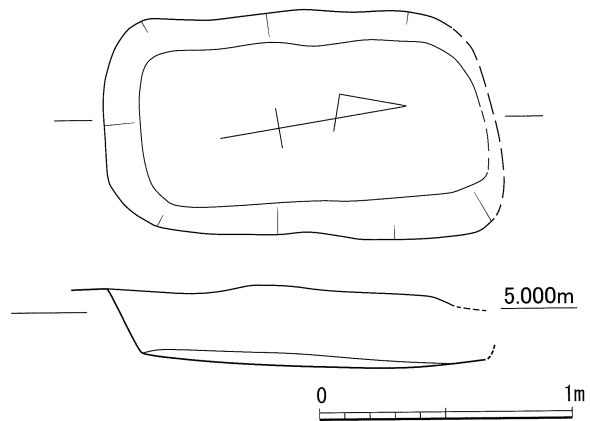
第3-113図 06-SK269出土遺物実測図①(1/3)



第3-114図 06-SK269出土遺物実測図② (1/1)



第3-115図 06-SK274実測図 (1/30)



第3-116図 06-SK281実測図 (1/30)

06-SK268出土遺物 (第3-110・3-111図)

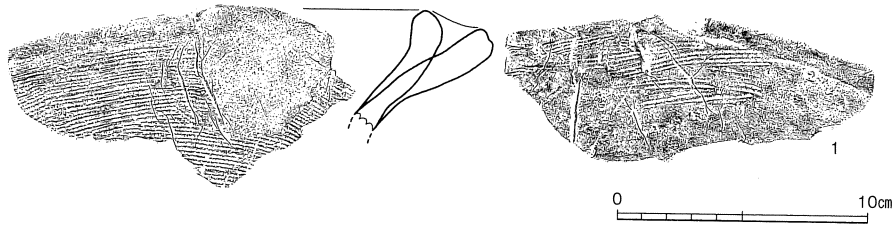
1は白磁の小碗である。外面胴部下半と見込みは露胎となる。2は青磁香炉で、底部には3つの短い脚が付く。3は備前焼摺鉢である。口縁部は断面三角形状を呈し、端部が上方にのびる。4・5は在地の土師器皿で、内面にロクロ整形による多条の沈線が巡る。4は二次焼成を受けている。6は在地の瓦質土器で、高台付きの椀である。器面全体をケズリで調整する。一部に黒色に燻した痕跡が残るが、二次焼成により全体が赤変している。7は器種不明の瓦質土器で、06-SK248から同一個体と思われる破片が出土している。8は瓦質土器の火鉢で、口縁部の沈線下にスタンプ文を施す。9は赤間石製の硯で、「海」部を欠く。10も赤間石で、硯の製品ないし未成品の破片であろう。11は凝灰岩製の茶臼上臼である。表面及び破損面にかけて被熱した痕跡が見られる。下面には摺目を施すが、分画数は明らかにできない。12～14は鉄製品である。12は斧で、匙状となる上端部を折り曲げる。13は釣針状を呈するもので、吊手金具であろう。14は鉄釘である。15は雁振瓦で、二次焼成により全体的に赤変している。

二次焼成により全体が赤変

赤間石製の硯

斧

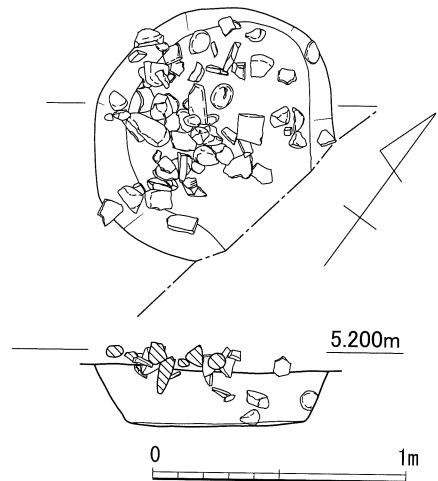
吊手金具



第3-117図 06-SK281出土遺物実測図 (1/3)

06-SK269 (第3-112図)

1区のM63グリッドで検出した土坑である。06-SD288と重複しており、06-SK269が06-SD288を切っている。平面形状は東西に細長い溝状を呈し、長辺2.86m、短辺0.87m、深さ0.57mを測る。埋土は褐色土(10YR4/4)で、少量の炭を含む。土坑の中央が一段深く掘り込まれ、その部分を中心に在地の土師器坏や銭貨等がまとまって出土した。出土地点が一段深い点と、出土している土器が06-SD288と差がないことから、これらの遺物は本来06-SD288に由来する可能性もある。遺構の年代は06-SD288より後出するⅣ期(15世紀中頃から後半)に比定する。



第3-118図 06-SK299実測図 (1/30)

06-SK269出土遺物 (第3-113・3-114図)

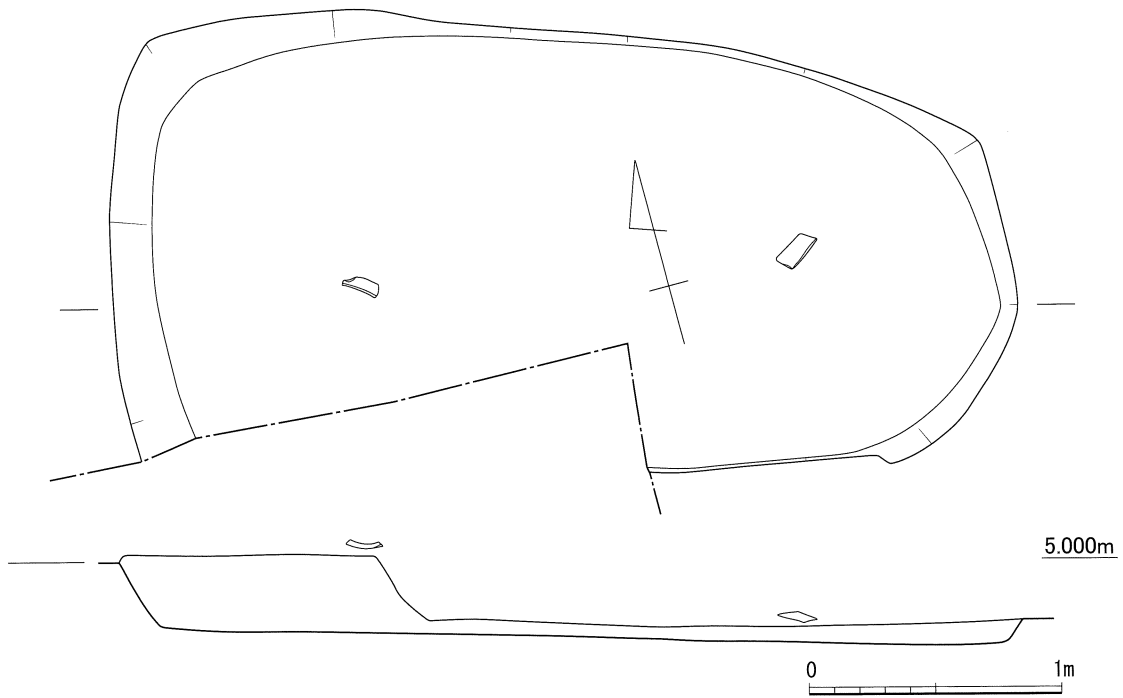
1～8は在地の土師器である。1は小皿で、底部から口縁部が丸みを持って短く立ち上がる。2～8は坏で、口縁部のやや下方の器壁が膨らむⅡ期(14世紀中頃～末)のもの(2・6)や、口縁部が外反し、端部が先尖り気味になるⅢ期(14世紀末から15世紀前半)のもの(7)がある。いずれも底面には回転糸切り痕が残る。9・10は石製品である。9は赤間硯であるが、硯の破片を砥石に転用したものと思われ、3面を平滑に研磨し、1面には鋸挽きの擦痕が残る。10は硯の未成品と思われるものである。石材は黒色の頁岩質で、対馬産の可能性がある。2辺に鋸挽きの擦痕が残り、上面は平滑である。11～16は銭貨である。11・12は2枚が錆着するが、いずれも正面側が接着するため銭種は明らかにできない。13～16は北宋銭である。13・14は熙寧元寶(1068年初鑄)、15は上部を欠くが聖宋元寶(1101年初鑄)、16は大観通寶(1107年初鑄)である。

硯の破片を
砥石に転用

対馬産の可
能性

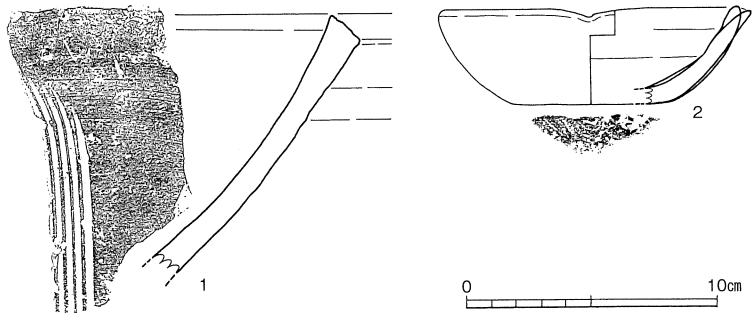
06-SK274 (第3-115図)

1区のN62グリッドで検出した土坑である。溝06-SD282と重複しており、06-SK274が06-SD282を切っている。平面形状は楕円形を呈し、長径0.80m、短径0.65m、深さ0.13mを測る。埋土は褐色土(10YR4/4)で、微量の炭を含む。土坑内からは10～20cm大の9点の礫が出土しており、廃棄土坑と考えられる。図示できるような遺物の出土がなく、遺構の詳細な年代は明らかにできないが、溝06-SD282を切ることから、Ⅲ期以降の遺構である。



第3-119図 06-SK324実測図 (1/30)

06-SK281 (第3-116図)
1区のM62グリッドで検出した土坑で、土坑06-SK267と近接している。06-SK267と同様に溝06-SD302より上位で検出している。北端部は2区との



第3-120図 06-SK281出土遺物実測図 (1/3)

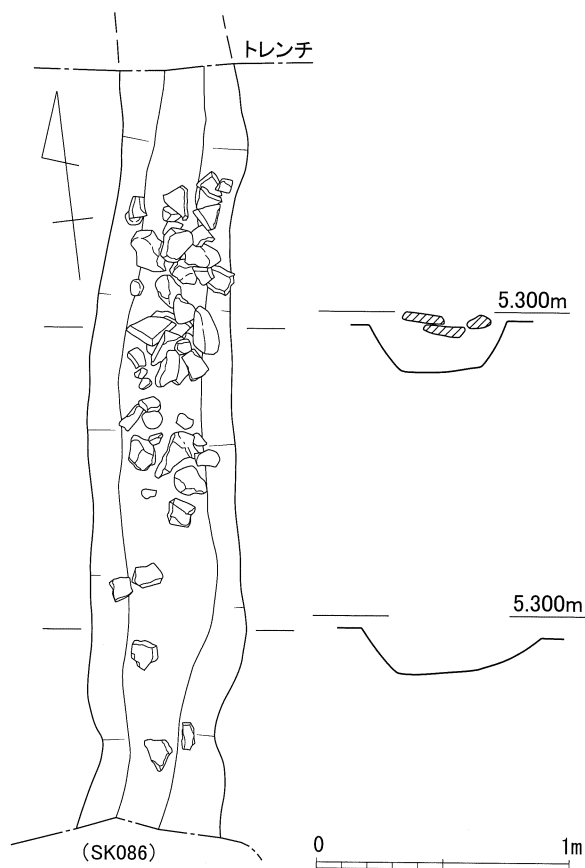
境界上に位置するため全体を確認できていないが、2区では確認されないためほぼ境界線上で収束すると思われる。平面形状は隅丸長方形で、長辺1.50m以上、短辺0.90m、深さ0.33mを測る。埋土は灰褐色土 (7.5YR4/2) で、微量の炭を含み、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) のブロックが混じる。遺構の年代を示す遺物に乏しいが、06-SD302埋没後に構築された遺構であることから、Ⅶ期 (16世紀末) に位置づける。

06-SK281出土遺物 (第3-117図)

1は瓦質土器の摺鉢である。口縁の一端が片口となり、内外面ともに横位のハケ目調整を施す。

06-SK299 (第3-118図)

1区のO63グリッドで検出した土坑である。東端部は調査区東壁沿いに設定した土層確認用のサブトレンチにより失われる。平面形状は円形で、長径1.06m、短径0.84m以上、深さ0.21mを測る。埋土はにぶい黄褐色土 (10YR4/3) で、焼土細粒及び微量の炭を含む。土坑からは多量の礫が出土しており、廃棄土坑と考えられる。図示できる遺物の出土がなく、遺構の詳細な年代は明らかにで



第3-121図 06-SD053実測図 (1/30)

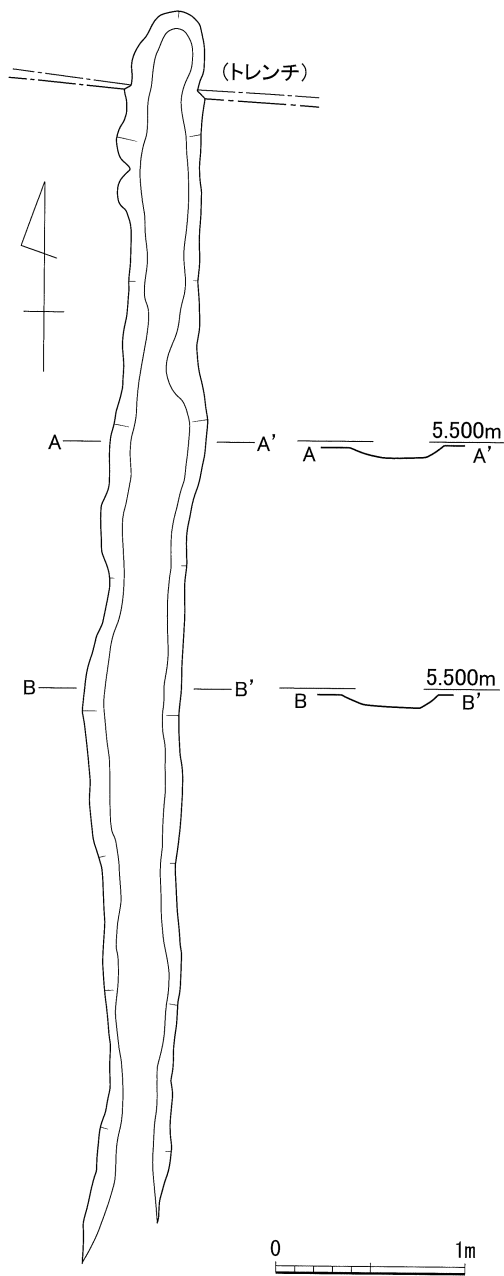
きないが、同じ場所に井戸06-SE322があり、それよりも上位に位置することから、V期（16世紀前半）以降であることは間違いない。焼土を含むことから、VII期（16世紀末）まで下る可能性もある。

06-SK324（第3-119図）

1区のL63グリッドで検出した土坑である。南西端部が調査区外に続くが、平面形状は隅丸長方形を呈し、長辺3.61m、短辺1.71m以上、深さ0.30mを測る東半部は溝06-SD090と重複するためプランの見極めが難しく、本来の検出面よりもかなり掘り下げてようやく確定できたため、本来の規模はもう少し大きい。両者の重複関係は、06-SK324が06-SD090を切っている。遺物の出土は少ないが、遺構検出面から中世Ⅲ期に編年される備前焼摺鉢が出土している。遺構の年代は06-SD090より新しい、Ⅲ期（14世紀末～15世紀前半）以降に比定される。

06-SK324出土遺物（第3-120図）

1は備前焼の摺鉢である。口縁部の形状から中世Ⅲa期に編年されるもので、14世紀後半に位置づけられる。2は在地の土師器坏である。口縁部の一端に片口を持つもので、底部から体部の立ち上がりは丸みを持つ。底面には回転糸切り痕が残る。

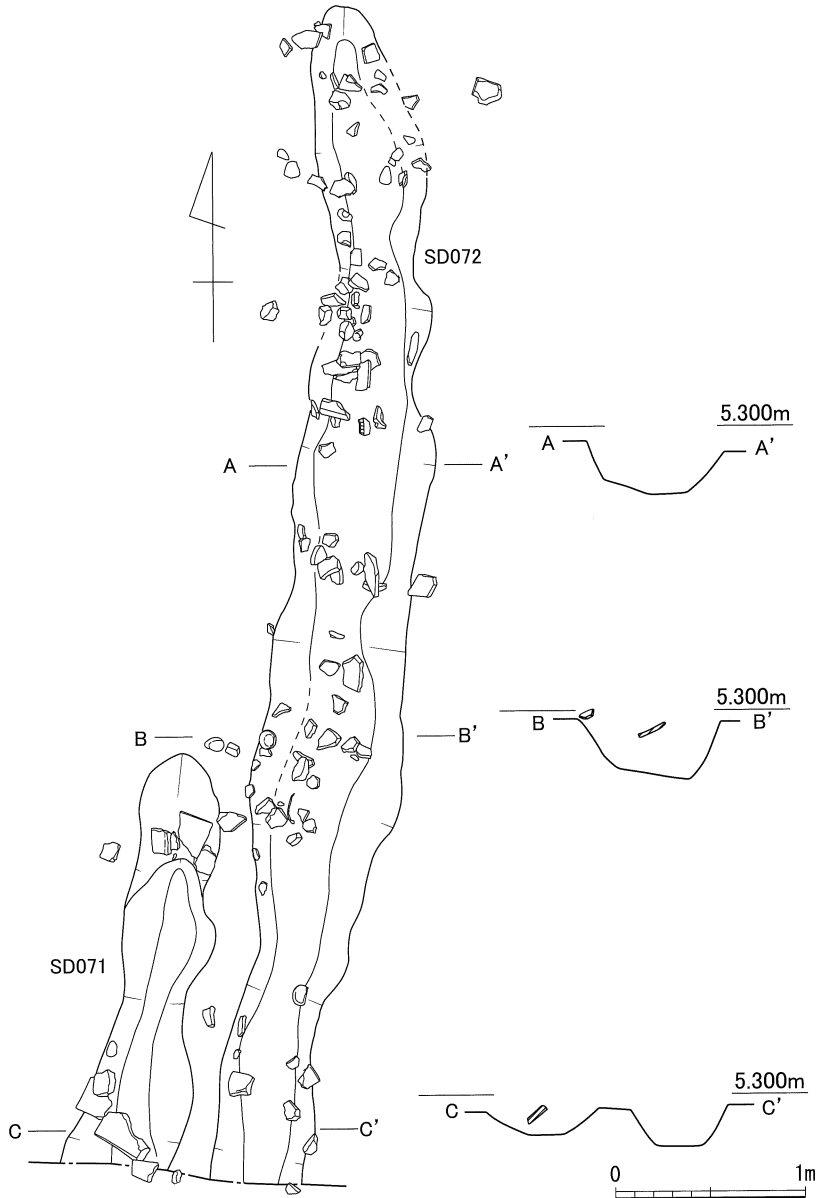


第3-122図 06-SD058実測図 (1/40)

3. 溝

06-SD053 (第3-121図)

2区のN60グリッドで検出した溝である。06-SK054・06-SK086と重複しており、06-SK054を切って、南端部は06-SK086に切られている。また、北側は調査区外に続くため、全体の規模は明らかにできない。検出範囲で長さ3.06m以上、幅0.45～0.61m、深さ0.20mを測る。埋土はにぶい黄褐色土(10YR4/3)で、少量の炭を含む。溝内部から1箇所

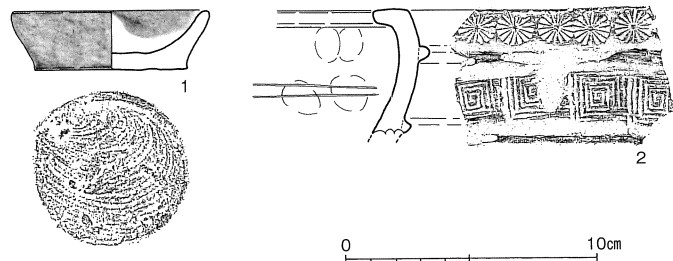


第3-123図 06-SD071・072実測図(1/40)

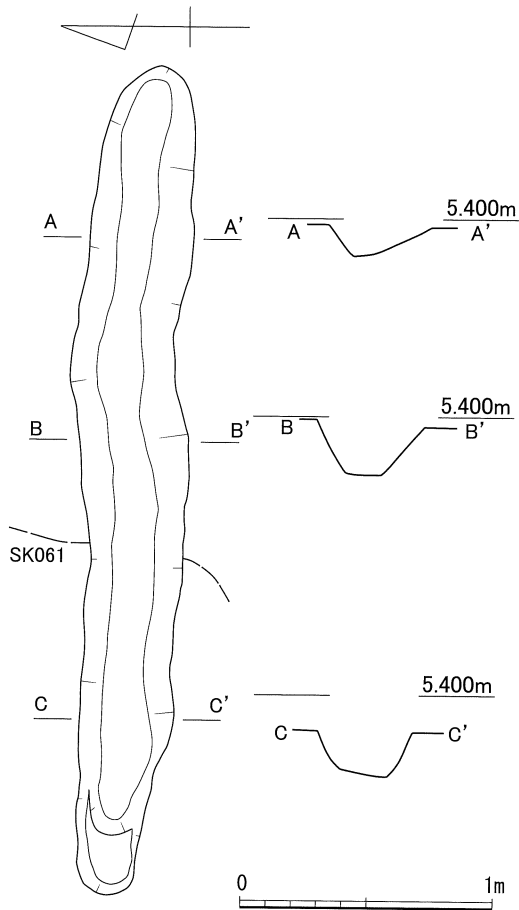
溝内部から1箇所で礫の集中箇所が認められる。図示できる遺物がなく遺構の詳細な年代は明かにできないが、IV期(15世紀中頃～後半)の土坑06-SK054よりは新しく、06-SK086を含めて確実にV期(16世紀前半)に位置づけられる遺物が出土していないことから、IV期～V期の中で押さえておく。

06-SD058 (第3-122図)

2区のO60・O61グリッドの第5層上面で検出した溝である。南端部の収束箇所は削平のためか不明瞭であるが、長さ6.66m、幅0.32～0.52m、深さ0.05mを測る。埋土はやや砂質の灰褐色土(7.5YR4/2)で、酸化鉄分が混じり、少量の炭を

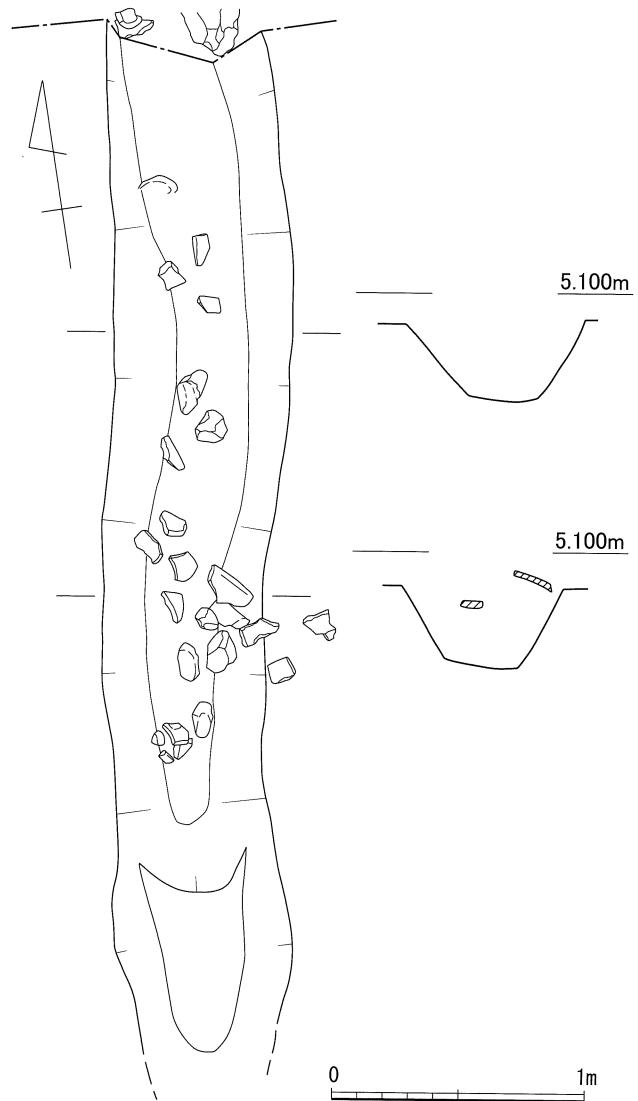


第3-124図 06-SD072出土遺物実測図(1/3)



第3-125図 06-SD101実測図 (1/30)

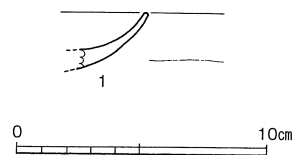
含む。図示できる遺物の出土がなく遺構の年代は明かにできない。



第3-126図 06-SD117実測図 (1/30)

06-SD071・06-SD072 (第3-123図)

2区のN61・N62グリッドで検出した溝である。いずれも南北方向に延びるもので、2条が近接して、平行するように存在する。どちらも南端部は1区との境に位置しており終端部を確認できていないが、1区で検出できなかったことからほぼ1区との境界で収束するものと思われる。位置的には06-SK131と重複するが、どちらも06-SK131の埋土を切り込んでいる。



第3-127図 06-SD117出土遺物実測図 (1/3)

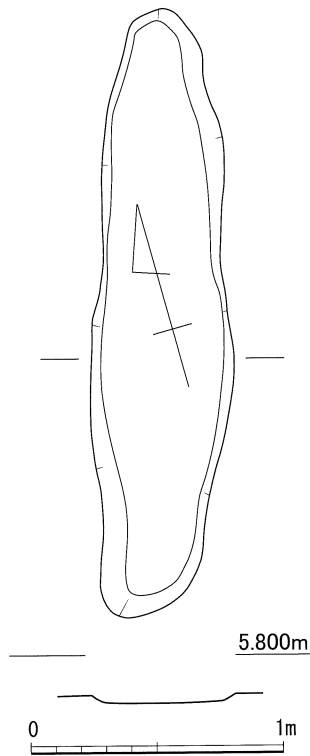
06-SD071は短い溝で、長さ2.21m以上、幅0.33～0.53m、深さ0.15mを測る。埋土は灰黄褐色土(10YR4/2)で、少量の炭を含む。溝の南北両端部付近から礫や遺物が出土している。06-SD072は06-SD071のすぐ東に位置する溝で、長さ6.24m以上、短辺0.42～0.81m、深さ0.30mを測る。埋土は黒褐色砂質土(7.5YR3/2)で、灰色土と炭が混じる。06-SD071と同様に溝の各所で遺物や礫がまとまって出土する部分が認められた。これら遺構の詳細な年代は不明だが、V期(16世紀前半)の遺構06-SK131に切り込むことからVI期(16世紀後半)以降に位置づけられる。

06-SD072出土遺物 (第3-124図)

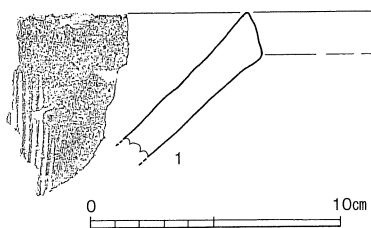
1は在地の土師器小皿である。外面及び内面の口縁部から胴部上位にかけて煤の付着が認められる。2は瓦質土器の火鉢で、外面口縁下に菊花状、凸帯間に雷文状のスタンプ文を施す。

06-SD101 (第3-125図)

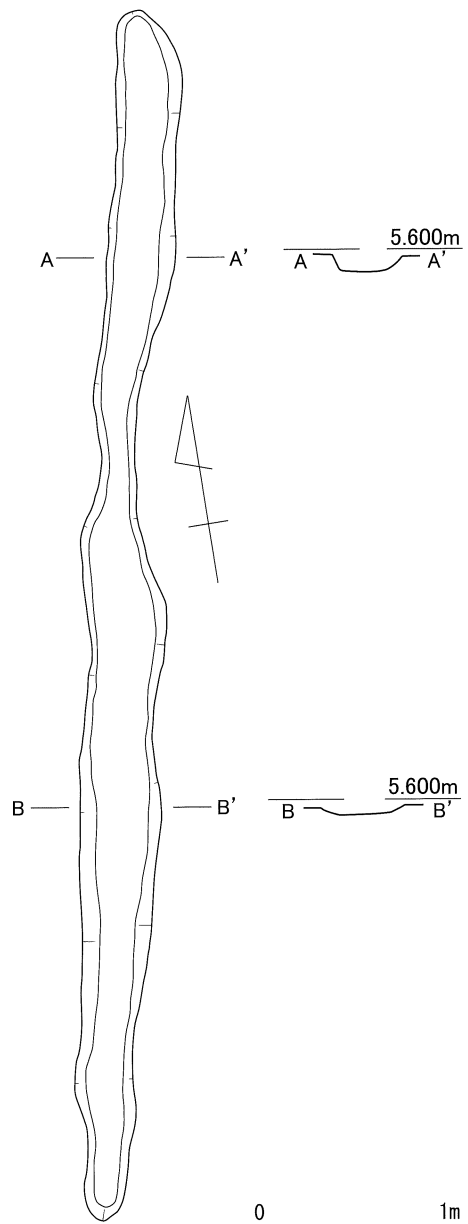
2区のN61グリッドで検出した溝である。東西方向に延びるもので、西半部は土坑06-SK061完掘後の底面で検出した。溝の規模は長さ3.29m、幅0.23～0.43m、深さ0.20mを測る。埋土は灰褐色土(7.5YR4/2)で、微量の炭を含む。遺物の出土は少なく、遺構の年代を明かにできるものはない。しかし、重複する06-SK061は溝06-SD106も切ることから、06-SD101は06-SD106と06-SK061の間に位置づけることが可能である。06-SD106からは14世紀代の土師器小皿が、06-SK061からは吉備系土師器椀がそれぞれ出土しており、遺構の前後関係から06-SK061はⅡ～Ⅲ期(14世紀中頃から15世紀前半)、06-SD106はⅠ～Ⅱ期(14世紀前半～14世紀末)と考えられる。06-SD101はⅡ～Ⅲ期で、Ⅱ期に近い時期を考えたい。



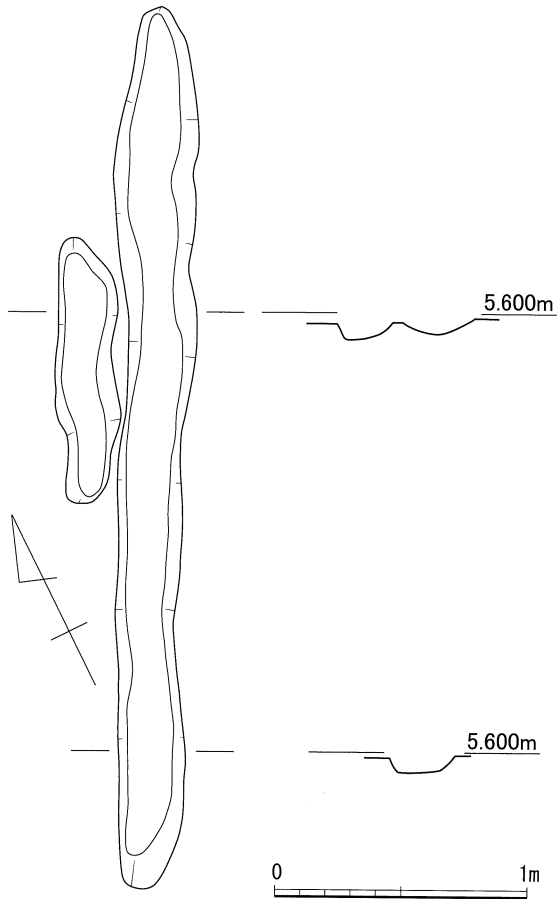
第3-129図 06-SD195実測図(1/30)



第3-130図 06-SD195出土遺物実測図(1/3)



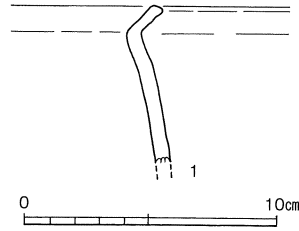
第3-128図 06-SD193実測図(1/30)



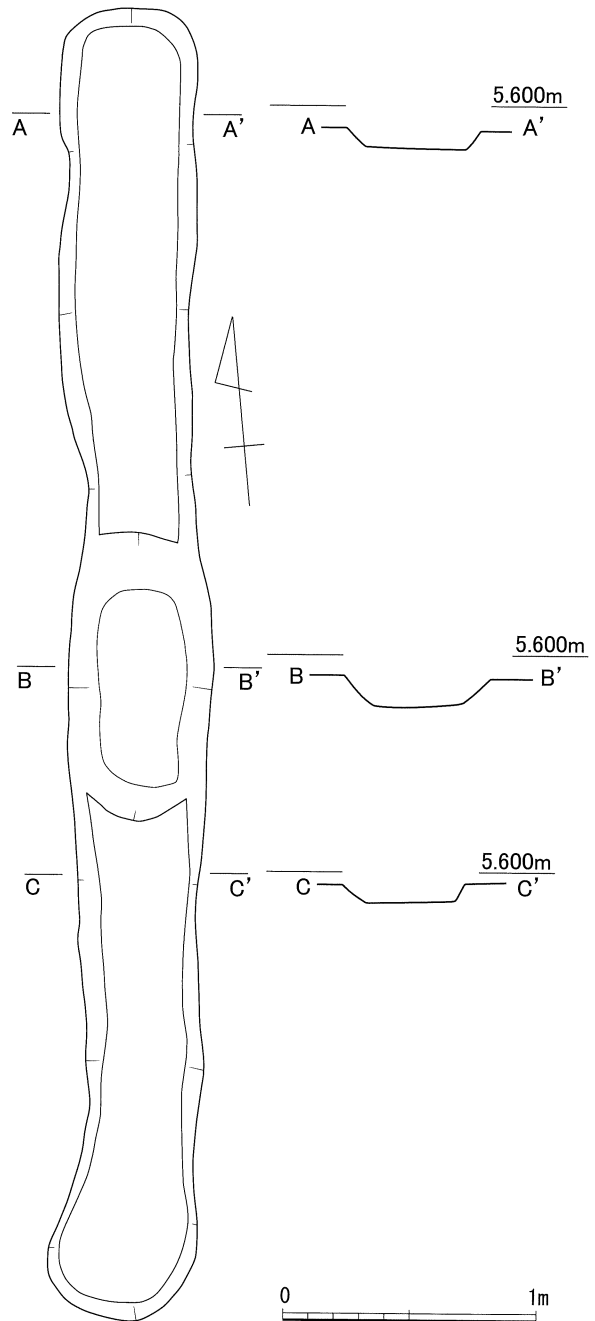
第3-131図 06-SD215実測図 (1/30)

06-SD117 (第3-126図)

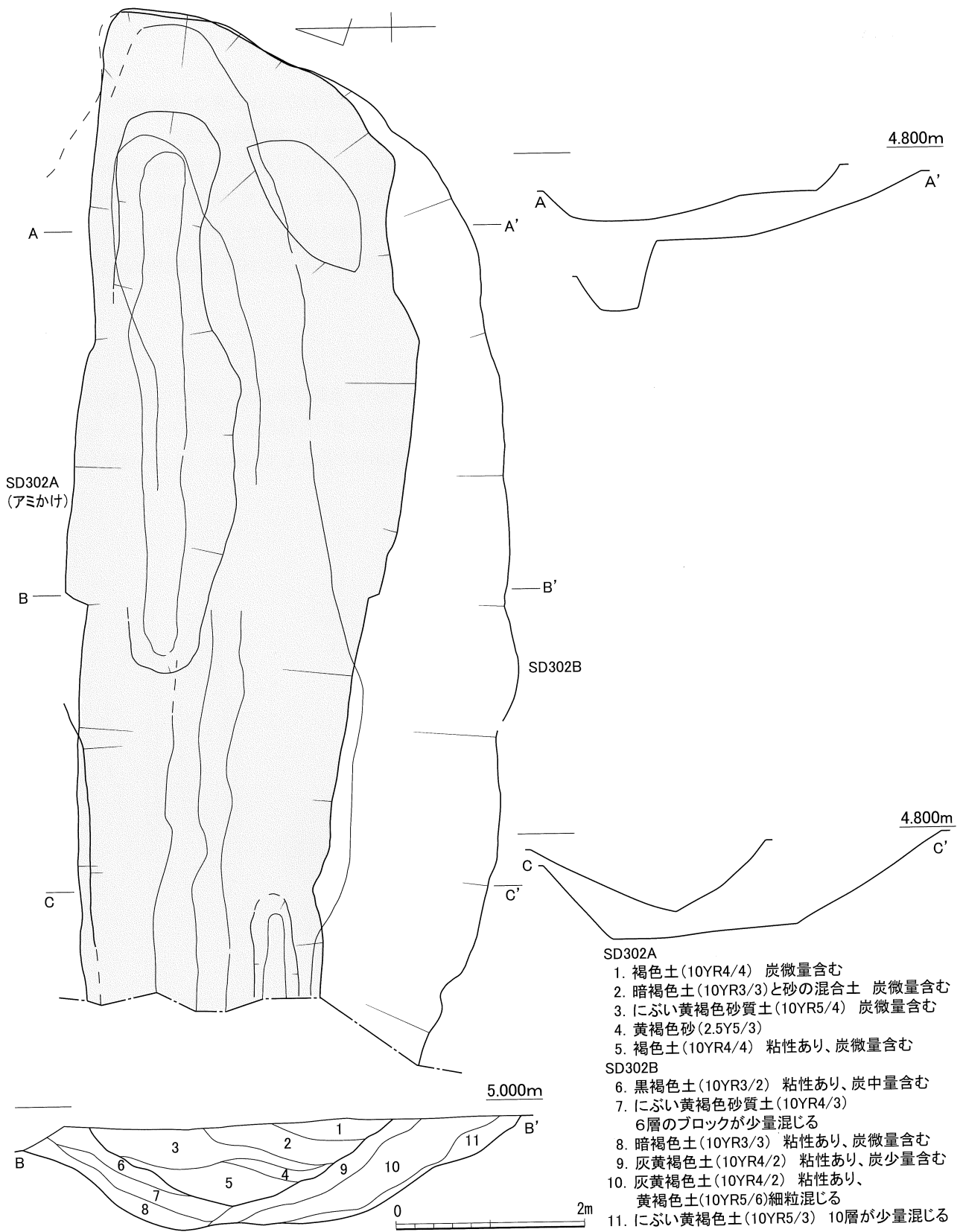
2区のM60・M61グリッドで検出した溝である。瓦等の廃棄土坑である06-SK097を切っており、またこの溝の下部で溝06-SD184を確認している。06-SD117の北側は調査区外に続き、南端部は削平のためか終端部が不明瞭であった。遺構の規模は検出した範囲で長さ410m以上、幅0.55～0.72m、深さ0.52mを測る。埋土は黒褐色土(10YR3/2)で、炭を含み、若干粘性を帯びる。溝内からは礫や遺物が比較的まとまって出土しているが、図示できるものは少ない。遺構の時期は06-SK097がIV期(15世紀中頃～後半)に位置づけられることから、それよりも新しいIV期の後半からV期(15世紀末頃～16世紀前半)である。



第3-132図 06-SD215出土遺物実測図 (1/3)



第3-133図 06-SD231実測図 (1/30)



第3-134図 06-SD302実測図 (1/60)

06-SD117出土遺物 (第3-127図)

1は白磁皿である。外面の体部下半は露胎となる。

06-SD193 (第3-128)

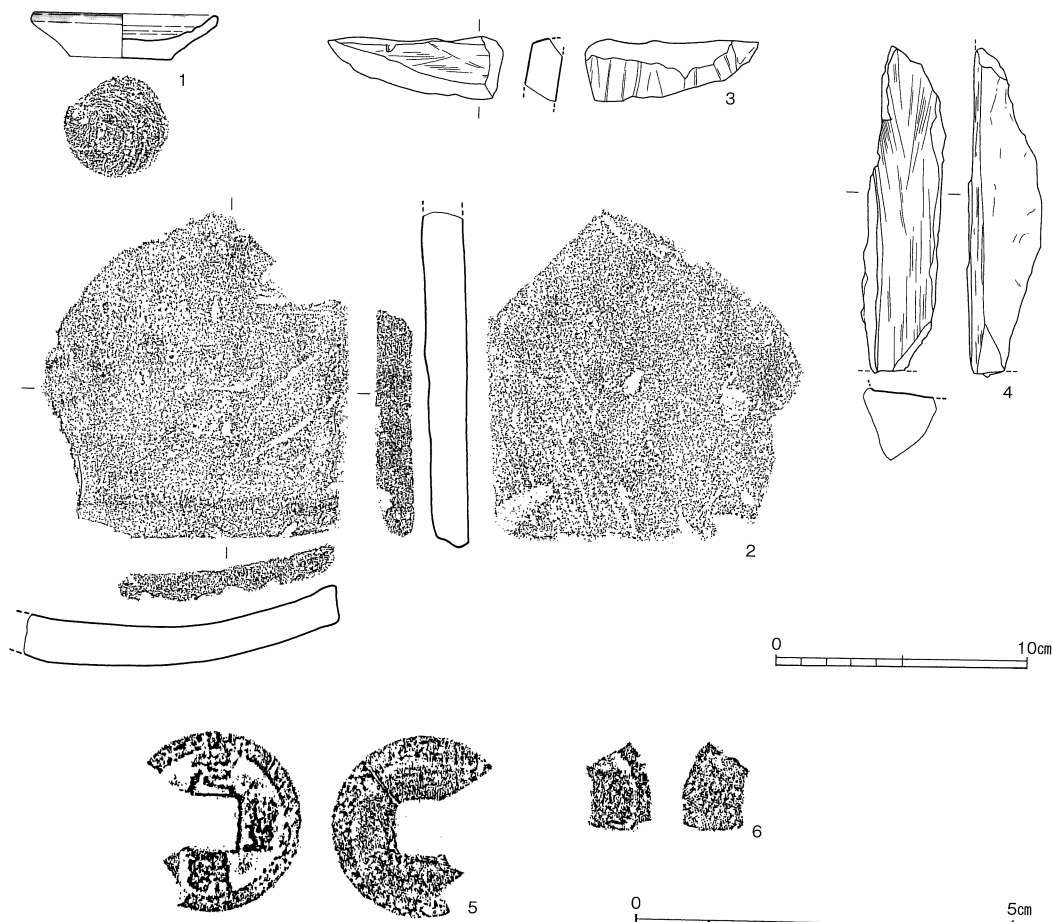
1区のO62・O63グリッドで検出した溝である。南北方向にのびるが、溝の主軸はN-10.6° -Eで、真北からやや東に触れる。溝の中央付近がやや細く括れており、規模は長さ6.41m、幅0.17～0.43m、深さ0.09mを測る。埋土はやや砂質のにおい黄褐色土(10YR5/3)で、酸化鉄分を含む。図示できるような遺物の出土はないが、中世面の最上面で検出でき、かつ埋土が耕作土に近似することから、近世以降の耕作に伴う溝である可能性が高い。同様に近世以降と考えられる土坑06-SK208や06-SK209、溝06-SD195・06-SD196・06-SD197・06-SD203・06-SD214等と主軸方向がほぼ一致することもその証左となろう。

近世以降の
耕作に伴う
溝

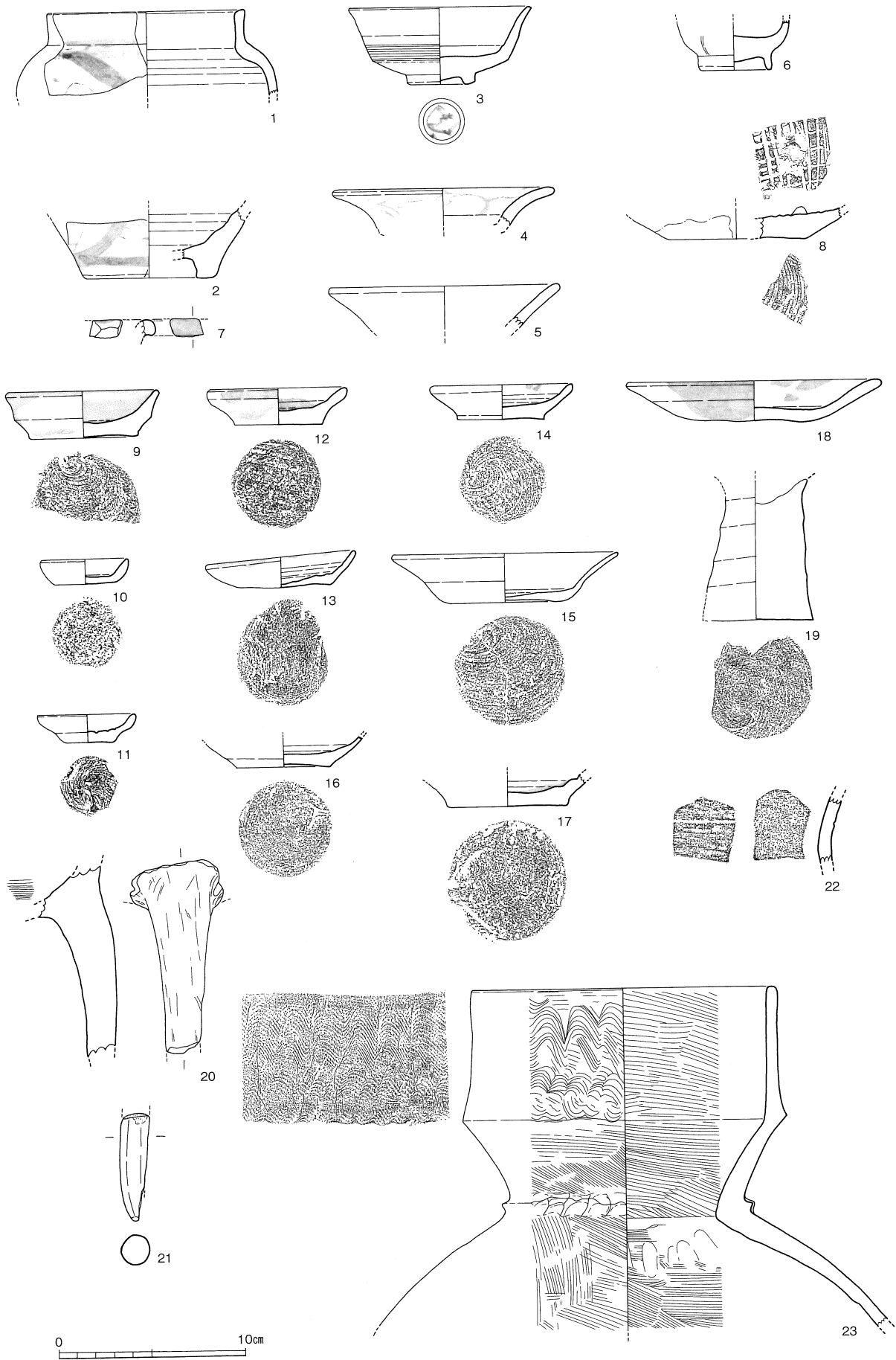
06-SD195 (第3-129図)

1区のN63グリッドで検出した小型の溝状遺構である。主軸はN-18.5° -Eでやや東に触れるもので、長さ2.42m、幅0.53m、深さ約0.05mを測る。埋土はにおい黄褐色土(10YR5/4)で、酸化鉄分を含み全体に硬く締まる。遺物は14世紀後半の備前焼摺鉢が出土しているが、埋土の状況から近世以降の耕作溝と考えられる。

近世以降の
耕作溝



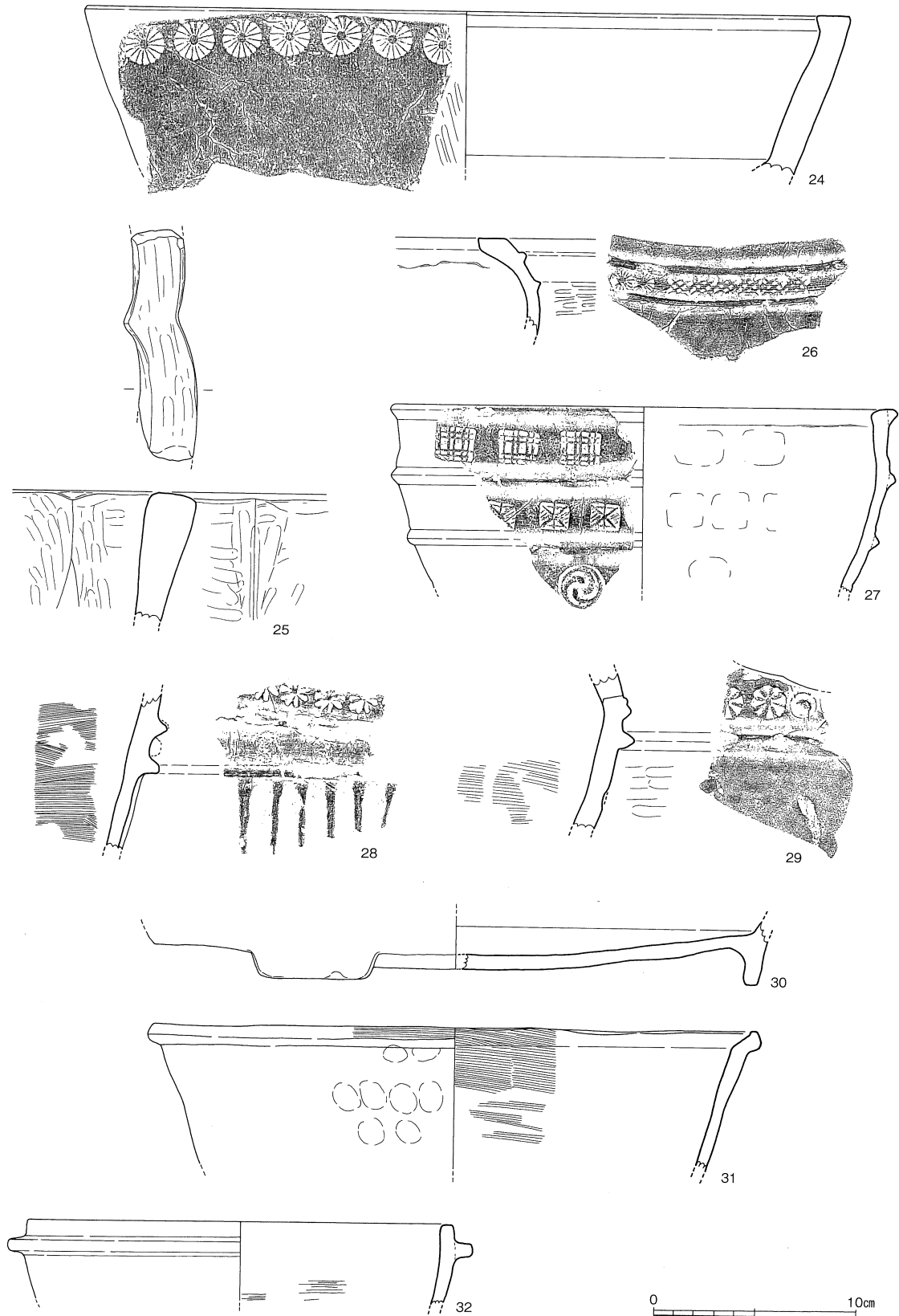
第3-135図 06-SD302A出土遺物実測図 (1/3・1/1)



第3-136图 06-SD302B出土遺物実測図① (1/3)

06-SD195出土遺物 (第3-130図)

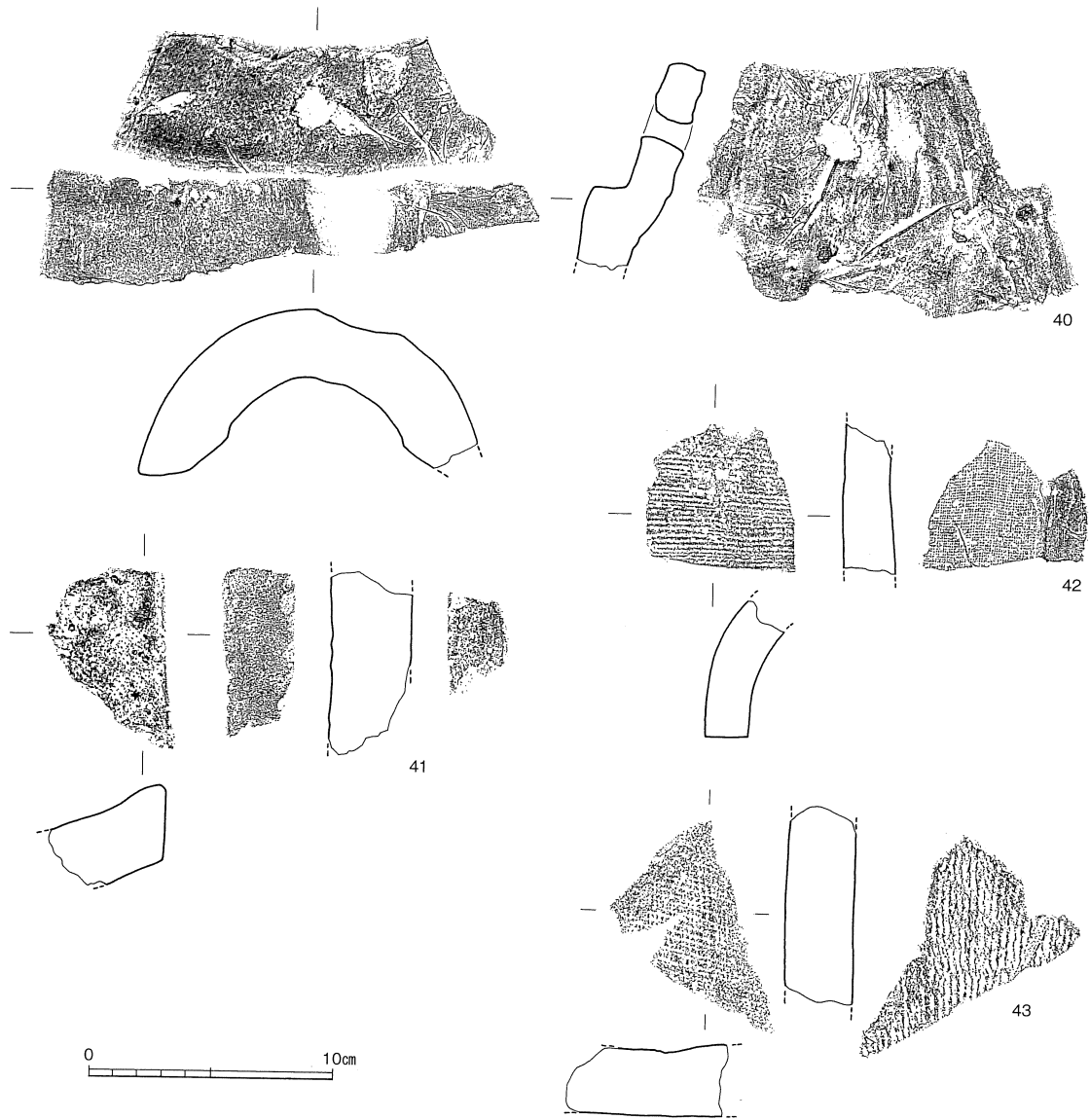
1は備前焼の摺鉢である。口縁部の形状から中世Ⅲa期に編年されるもので、14世紀後半に位置づけられる。



第3-137図 06-SD302B出土遺物実測図② (1/3)



第3-138図 06-SD302B出土遺物実測図③ (1/3)



第3-139図 06-SD302B出土遺物実測図④ (1/3)

06-SD215 (第3-131図)

近世以降の
耕作溝

1区のN64グリッドで検出した溝である。北東から南西方向にかけてのびるもので、規模は長さ3.51m、幅0.22～0.32m、深さ0.06m、主軸の角度はN-27°-Eを測る。埋土はやや砂質のにぶい褐色土(7.5YR5/3)で、灰色土が混じる。遺物は土師器甕が出土しているが、埋土の状況等から近世以降の耕作溝と考えられる。なお、1区における近世耕作遺構については、この06-SD215が先述の06-SD193や06-SD195・06-SD197・06-SD203・06-SD214、06-SD208・06-SK209に対して主軸が東に振れること、そして06-SD215と主軸角に近い06-SD196が06-SD214を切っていることから、少なくとも2時期の耕作遺構が存在すると考えられる。

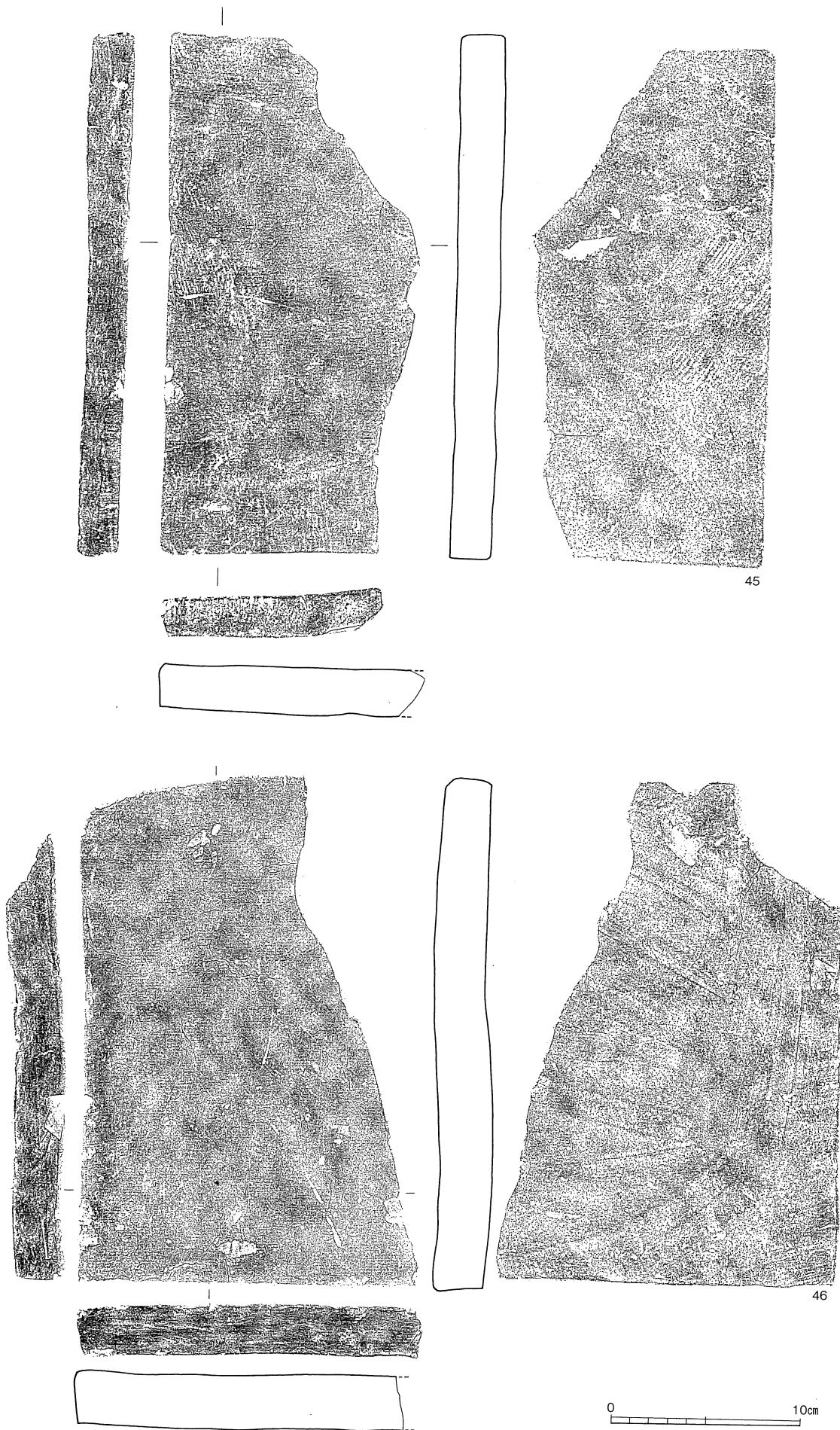
2時期の耕作
遺構が存在

06-SD215出土遺物 (第3-132図)

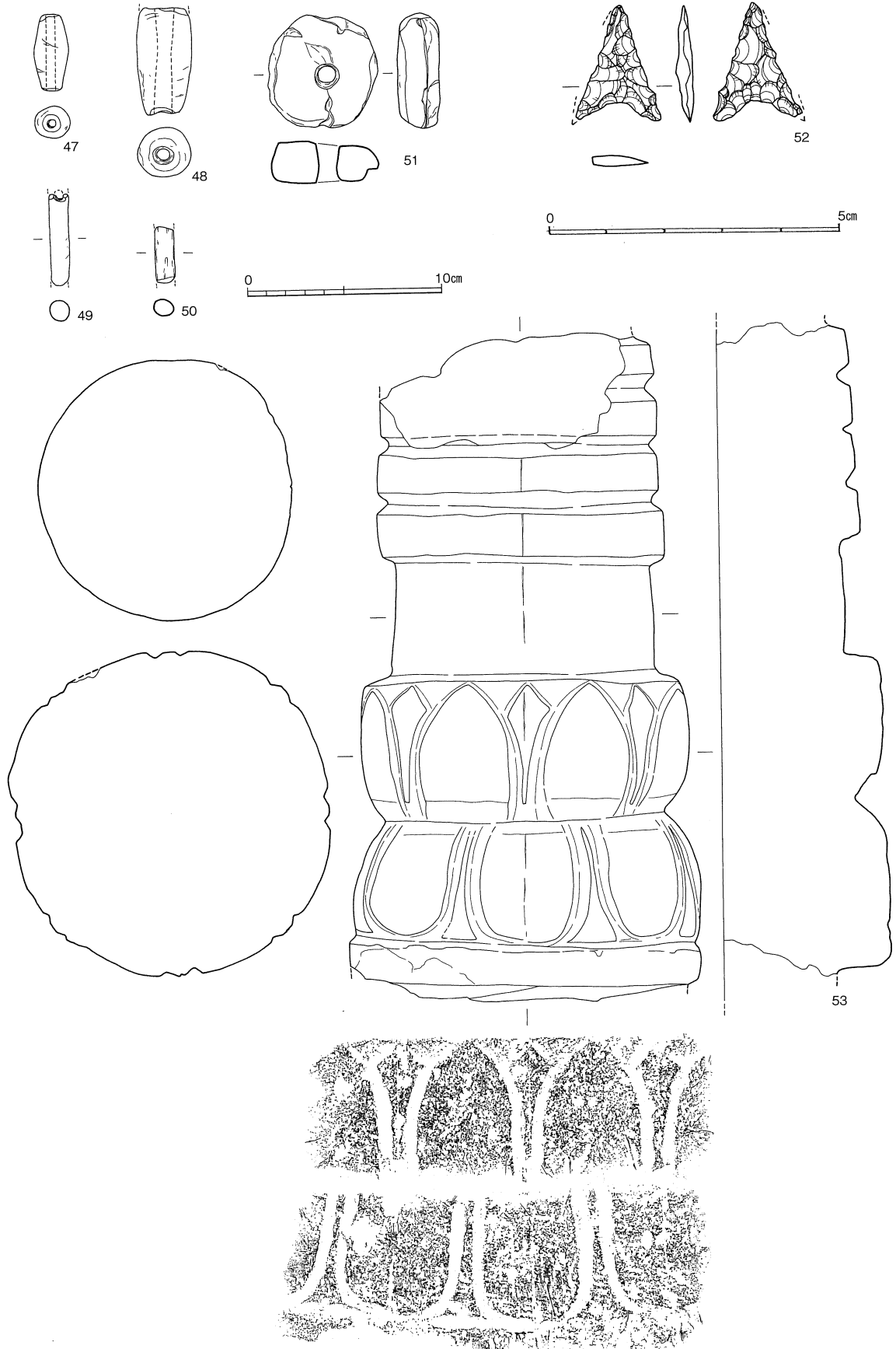
1は土師器甕である。胴部の張りは弱く下膨れの器形を呈すると思われるもので、古代のものである。細片のため口径の復元はできない。



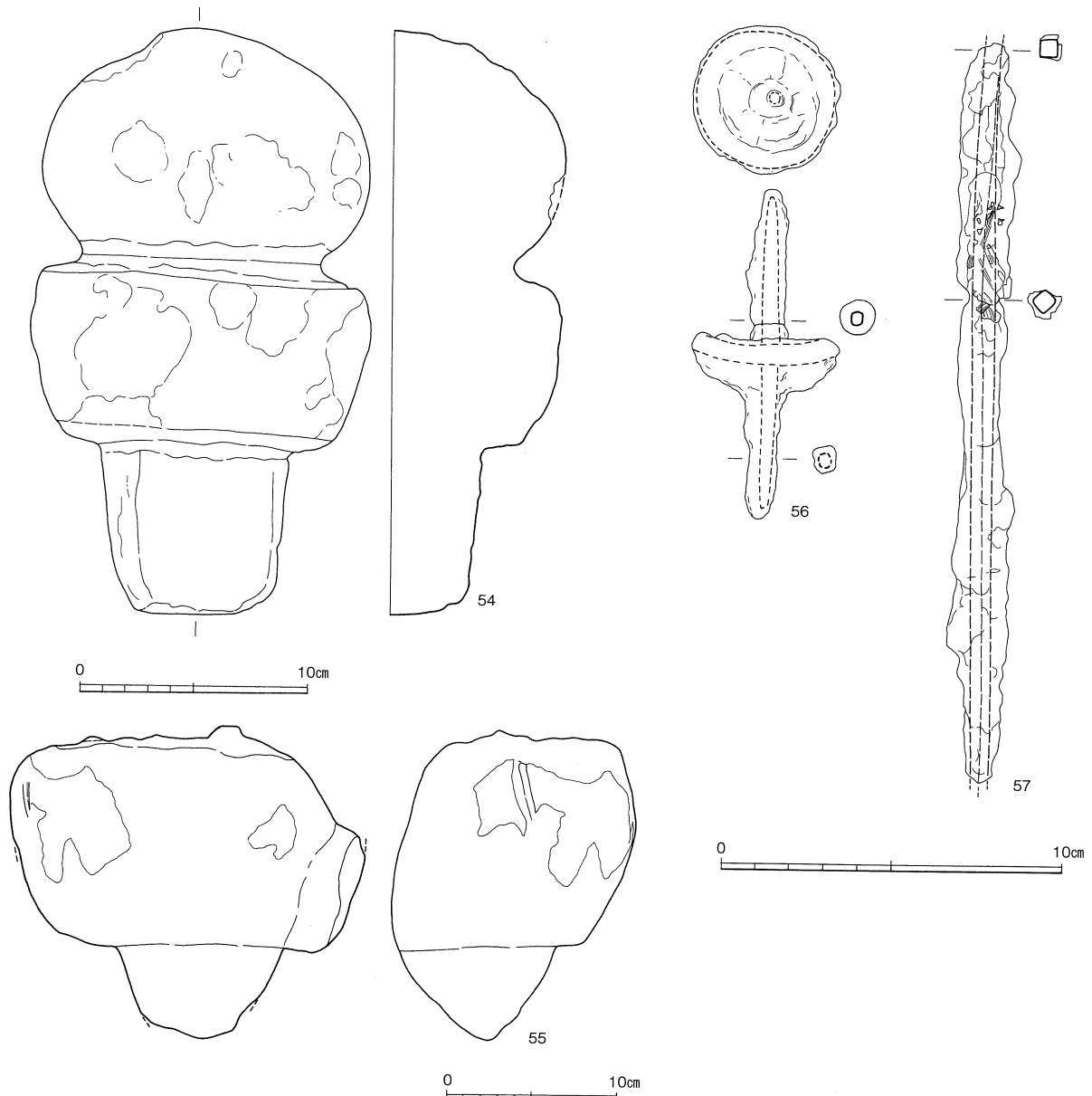
第3-140図 06-SD302B出土遺物実測図⑤ (1/3)



第3-141図 06-SD302B出土遺物実測図⑥ (1/3)



第3-142図 06-SD302B出土遺物実測図⑦ (1/3・1/1)



第3-143図 06-SD302B出土遺物実測図⑧ (1/2・1/3・1/4)

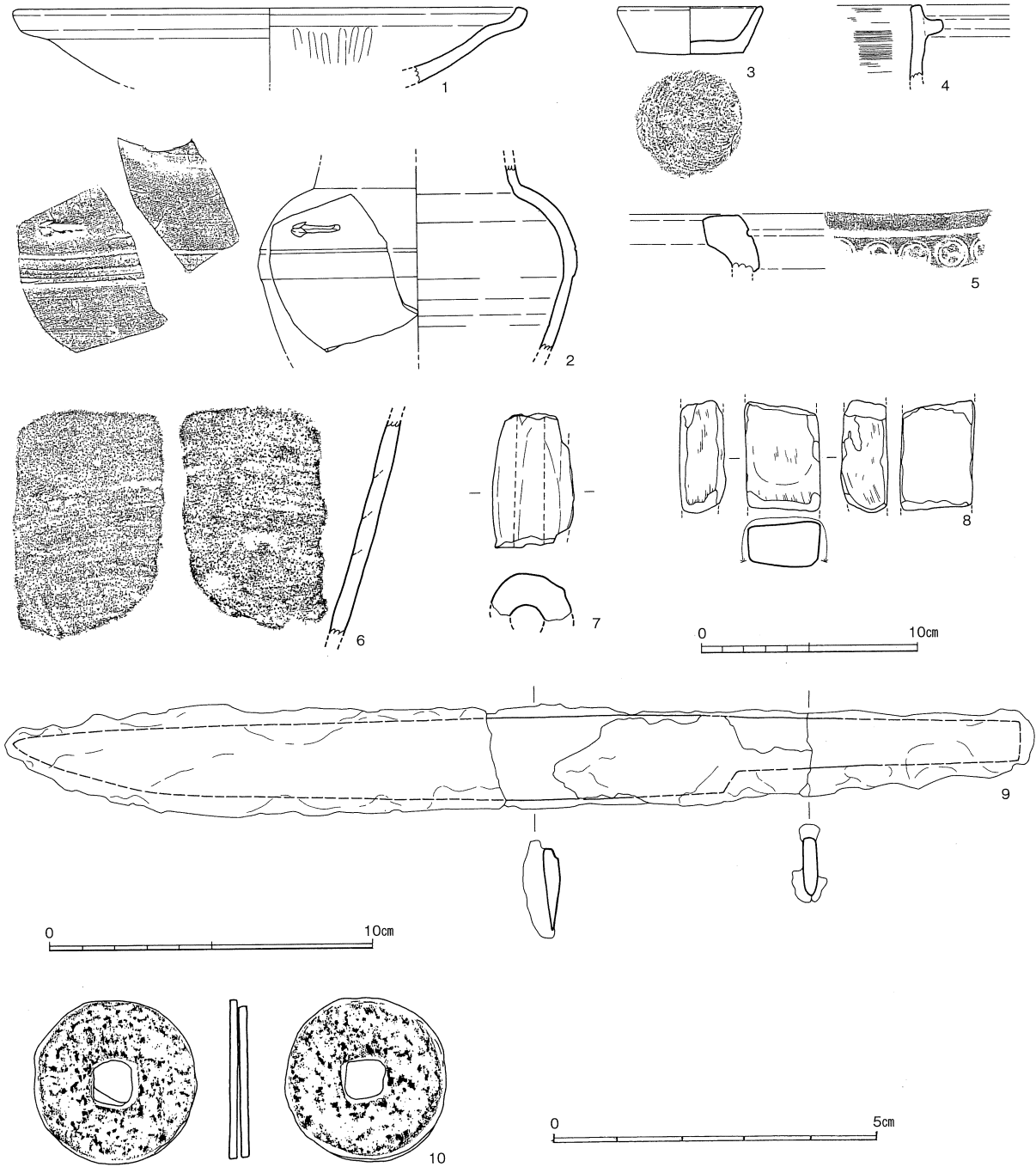
06-SD231 (第3-133図)

1区のM63・M64グリッドで検出した溝である。南北方向に延びるもので、溝の北端部では06-SD221を切っている。遺構の規模は長さ5.21m、幅0.42～0.58m、深さは最大で0.12mを測る。溝の北半部と南半部は深さが約0.07～0.08mであるのに対し、溝の中央部分はやや深く掘り込んでいる。埋土はやや砂質の褐色土(7.5YR4/3)で、微量の炭を含む。遺構の時期を示す遺物の出土はないが、V期(15世紀中頃から後半)の溝06-SD221を切ることから、それ以降のものである。

06-SD302 (第3-134図)

1区のL62・M62グリッドで検出した溝で、西側は調査区外に続く。西接する中世大友府内町跡第29次調査区の溝SD041・SD050・SD051・SD055と同一の遺構である。中世大友府内町跡第29次調査ではこれら4条の溝が複雑に切り合った状況が認められ⁽⁵⁾、今調査区の06-SD302では06-SD302Aと06-SD302Bの2つの溝の切り合いとして把握することができた。両者の切り合いは土層断面図に

註(5) 後藤晃一2009「中世大友府内町跡第29次調査区」『豊後府内12』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第41集、大分県教育庁埋蔵文化財センター



第3-144図 06-SD302 (A・B一括) 出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

遺物の含有量の差

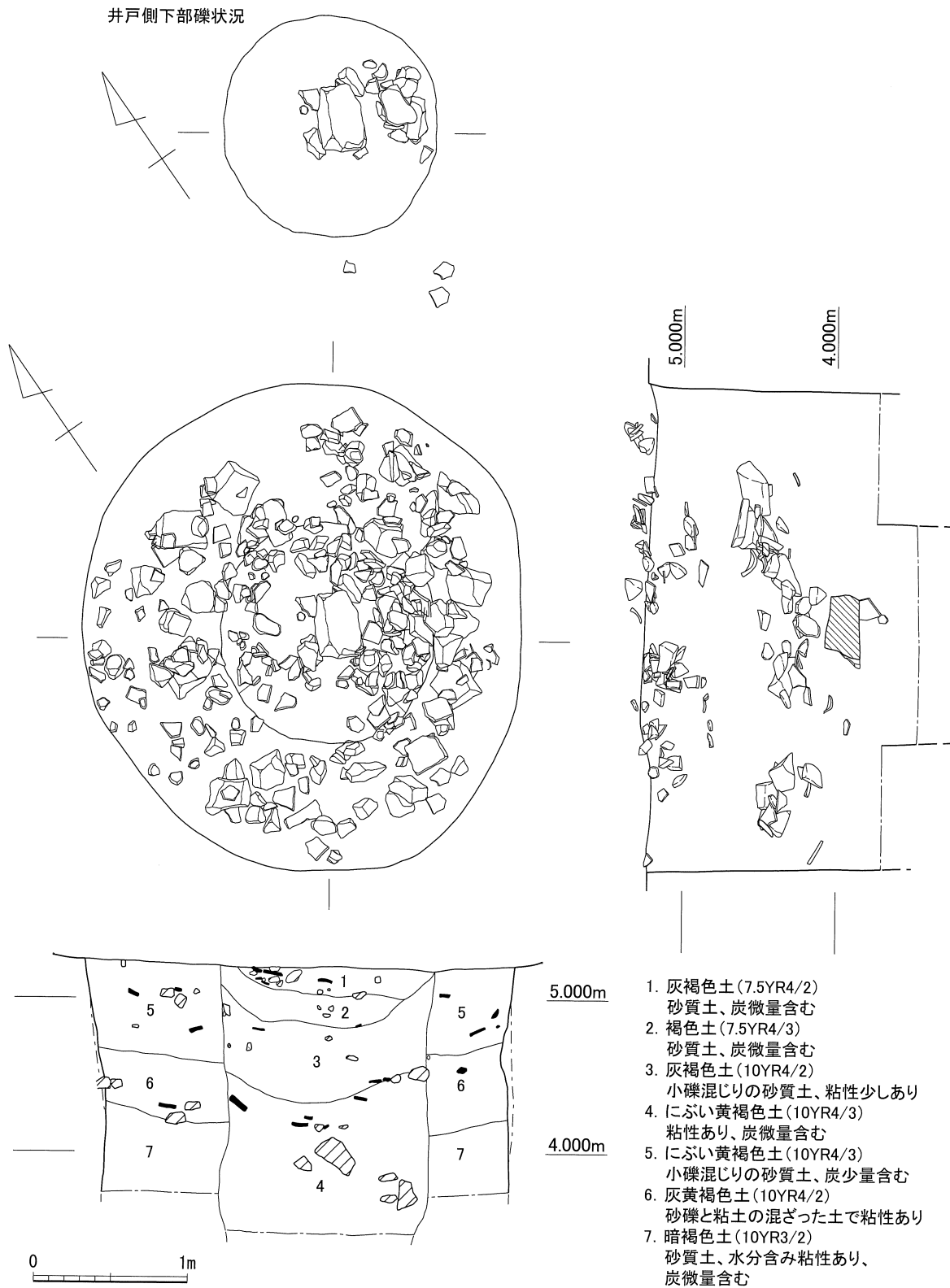
も示すとおり土色及び土質の違いと、遺物の含有量の差から区別が可能である。06-SD302Aからは遺物がほとんど出土しないのに対し、06-SD302Bからは多量の遺物が出土している。

06-SD302Aは褐色から黄褐色を呈する埋土からなり、06-SD302Bを切って構築する。長さ5.30m以上、幅1.25～1.72m、深さ約0.4～0.5mを測る。一方、06-SD302Bは暗褐色から黒褐色系の埋土が主体で、長さ5.20m以上、幅は北辺の一端が2区との境界にかかるため全体を確認できないが2.40m以上、深さ約0.7mを測る。遺構の時期は中世大友府内町跡第29次調査では出土する遺物が15世紀後葉と16世紀末葉の大きく2時期に分けられることから、SD041・SD050が15世紀後葉、SD051・SD055を16世紀末葉に位置付けているが、06-SD302Aからは16世紀前半の在地の土師器皿

京都系土師器が出土

が、06-SD302Bからは15世紀代の在地土師器坏とともに16世紀後半の京都系土師器が出土してい

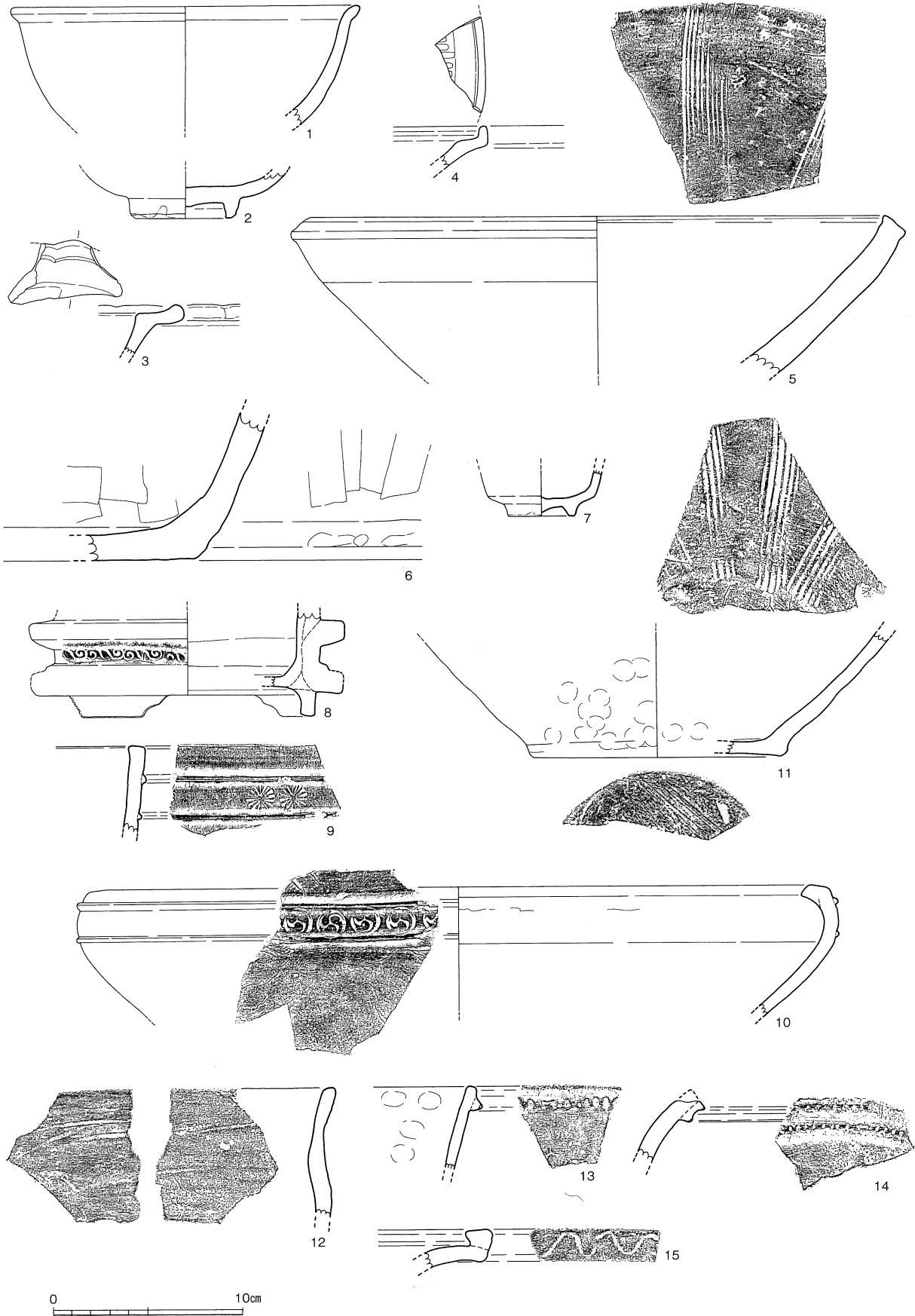
第3章 旧万寿寺跡第6次調査



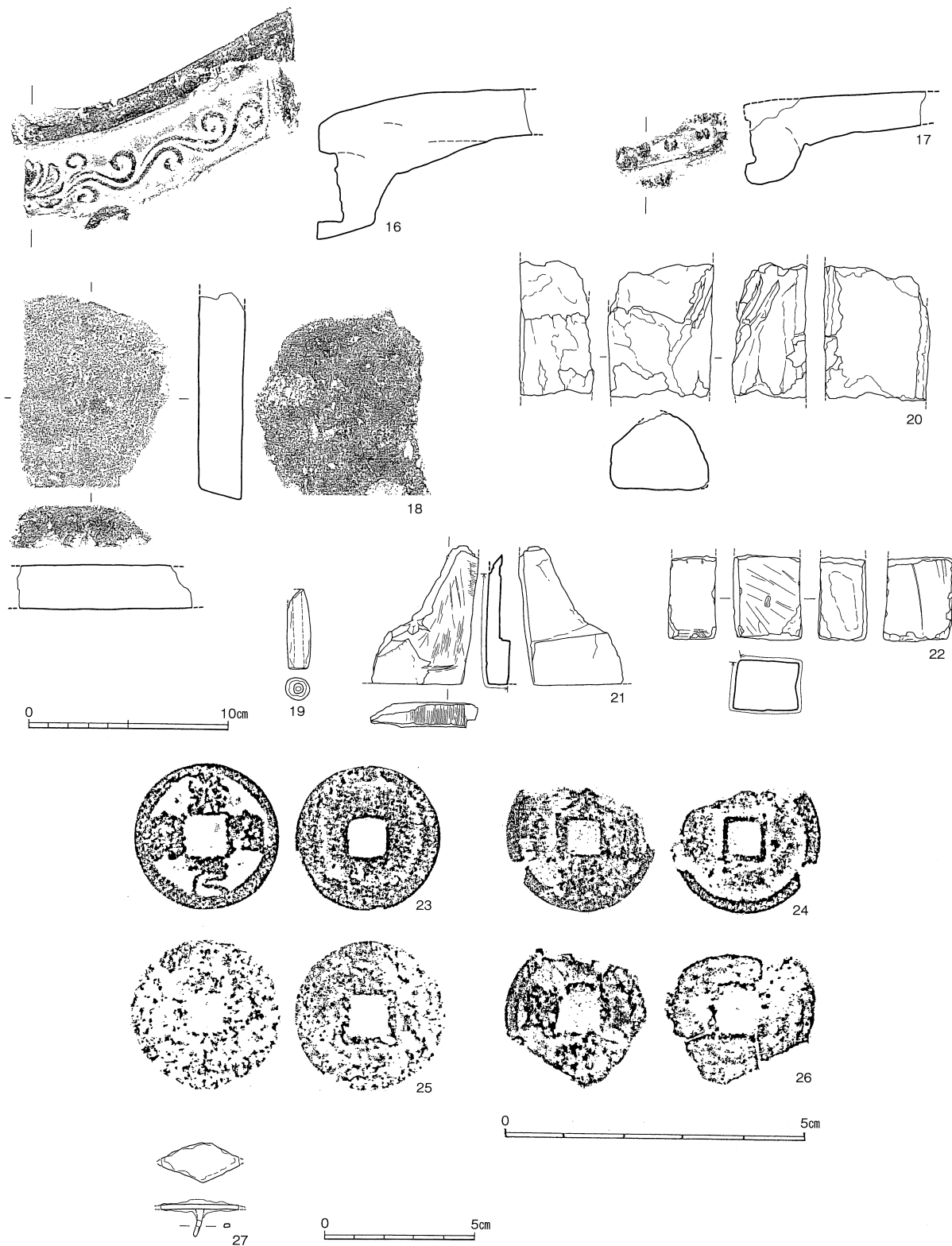
第3-145図 06-SE271実測図(1/40)

万寿寺内における何らかの区画施設

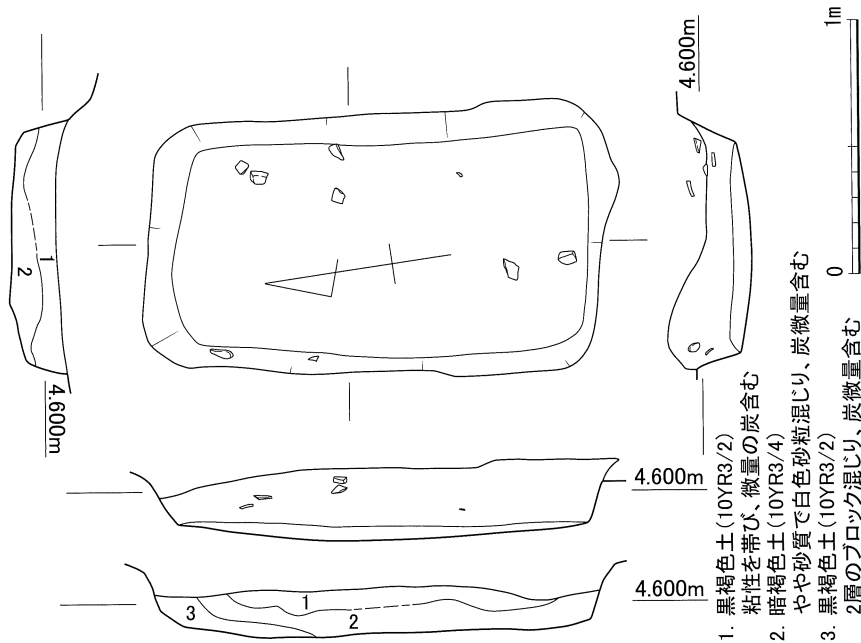
る。そのため06-SD302BはⅥ期(16世紀後葉)、SD302AはⅥ～Ⅶ期(16世紀後葉～末葉)に位置付けられる。遺構の機能は溝の規模からすると、万寿寺内における何らかの区画施設である可能性が高く、どちらも東端部の位置が同じであることから、時期の違いによる空間利用のあり方に差はないものと考えられる。



第3-146図 06-SE271出土遺物実測図① (1/3)



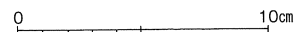
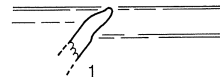
第3-147図 06-SE271出土遺物実測図② (1/3・1/1・1/2)



第3-148図 06-ST094実測図 (1/30)

06-SD302A出土遺物 (第3-135図)

1は内面にロクロ成形による多条の沈線が特徴的な在地の土師器皿で、口縁部に煤が付着することから灯明皿として使用されたものである。底面には回転糸切り痕が残る。2は平瓦である。3は滑石製の石鍋の破片である。4は赤間石の破片で、側辺に鋸挽きによる擦痕が残る。硯の加工に伴うものであろう。5・6は銭貨である。5は北宋の元豊通寶 (1078年初鑄)、6は小破片で銭文も磨滅により判読できない。



第3-149図 06-ST094出土遺物実測図 (1/3)

06-SD302B出土遺物 (第3-136～3-143図)

1・2は磁州窯産の鉄絵壺で、同一個体と考えられる。3は白磁の小坏で、高台内に墨書及び朱墨書による「関」の字が判読できる。4・5は青磁皿で、4は内外面ともに細線描きによる文様を施す。6は青磁の小碗であろうか。7は磁窰窯産の盤で、口縁部を折り返す。内外面には緑色の釉薬を施す。8は瀬戸美濃窯の卸皿で、見込みに格子目状の卸目、底面には回転糸切り痕が残る。9は在地の土師器坏である。胴部の中位で屈曲する器形で、内外面には煤が付着する。10～12は土師器小皿で、11は内面にロクロ成形による沈線が残る。13～17は内面にロクロ成形による多条の沈線が特徴的な皿である。15は薄手で、底部からの立ち上がり部分にだけ沈線が認められる。18は京都系土師器皿で、内外面に煤が付着する。19は土師器の燭台である。坏部を欠くが脚部は高く延び、底面には回転糸切り痕が残る。20・21は土師器の脚付き鍋である。22は縄文土器で、外面に横位の粗い条痕を施す。23は土師器の複合口縁壺である。口縁部外面には2段の櫛描波状文を施し、頸部凸帯は上下から指頭による刻みを加える。古墳時代初頭頃の所産である。

磁州窯産の鉄絵壺「関」の字

土師器の燭台

24～32は瓦質土器である。24は浅鉢形の火鉢で、外面口縁下に菊花状スタンプ文を施す。25は口縁部が輪花状になる火鉢である。内外面ともにヘラミガキを密に施す。26・27は火鉢で、26は凸帯間に菊花と斜格子状のスタンプ文、27は口縁下に方形枠内に格子目文、凸帯間に方形枠内に「米」字状、凸帯下に三つ巴文のスタンプ文を施す。28・29は風炉で、29は凸帯上に風文を穿つ。30は火鉢の底部で、方形の短い脚が付く。31は鍋、32は口縁下に鋳が付く羽釜である。

33～46は瓦である。33～35は軒丸瓦で、いずれも瓦当の中心に右巻きの巴文を配し、その周囲に珠文を施す。36～39は軒平瓦である。瓦当部の作出技法は36が顎貼付技法であるのに対し、38は粘土を下方に折り曲げ、凹面側に粘土を充填する折り曲げ技法と思われる⁽⁶⁾。39は側辺を斜めに切断した切隅瓦である。40は丸瓦の玉縁部で、円形の釘穴を穿つ。41は平瓦の細片であるが、二次焼成により全体に焼け膨れが見られる。42・43は古代の瓦である。42は丸瓦で、42は凸面に掻き篋状工具による調整痕、凹面に布目痕が残る。43は丸瓦で、凹面に布目痕、凸面に縄目タタキの痕跡が残る。44は雁振瓦、45・46は塼である。

47～50は土錘で、47・48は管状土錘、49・50は両端に穿孔をもつ棒状土錘である。51～55は石製品である。51は軽石製の有孔円盤で、中心に円形の穿孔を加える。52は姫島産黒曜石を素材とする凹基式打製石鏃である。53は宝塔ないし宝篋印塔の相輪で、基部には蓮弁を刻む反花と請花を配する。中軸線上には割付の線刻が残る。54・55は組合せ式五輪塔の空風輪である。55は風輪にわざわざ線刻が見られることから、蓮弁を刻むものと思われる。56・57は鉄製品で、56は紡錘車ないしは燭台とされるもの、57は鉄釘である。

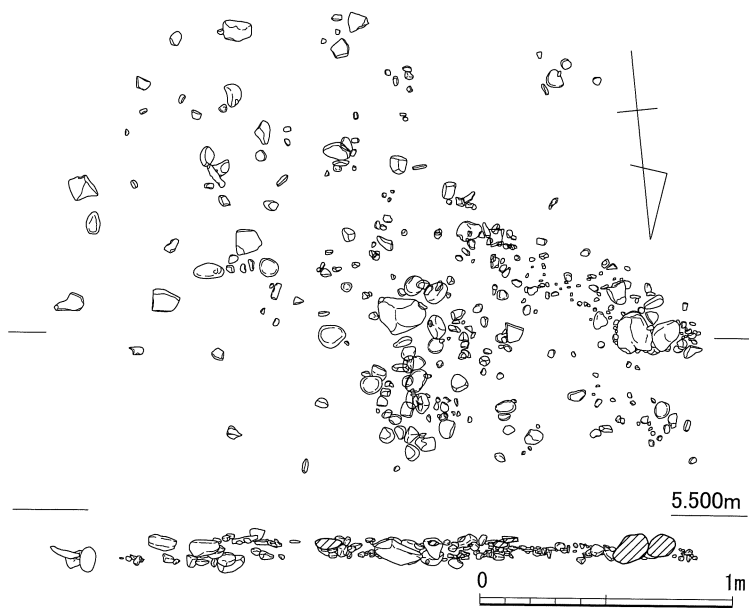
宝塔ないし宝篋印塔の相輪
組合せ式五輪塔

06-SD302出土遺物 (第3-144図)

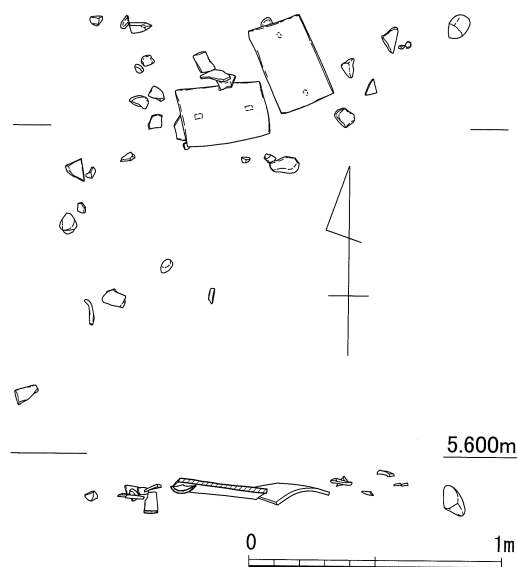
第3-144図に示すものは06-SD302A・Bの切り合いを確認するために設定したトレンチから出土したものなど、両者を区別せずに06-SD302一括として取り上げたものである。1は青磁の盤で、内面にスリット状の削ぎ文を施す。2は産地不明の焼締陶器壺である。肩部には沈線と削り出しにより幅広の段を持つ。3は在地の土師器小皿で、底面に回転糸切り痕が残る。4は瓦質土器の羽釜で、外面口縁下に鏝を貼り付ける。5は瓦質土器の火鉢で、外面の口縁下に1条の沈線とスタンプ文を施す。6は内外面に粗い条痕を施す縄文土器の深鉢で、全体に磨滅している。7は土師質焼成の管状土錘、8は砥石、9は鉄刀である。10は銅銭2枚が錆着するが、銭種は明らかにできない。

産地不明の
焼締陶器壺

鉄刀

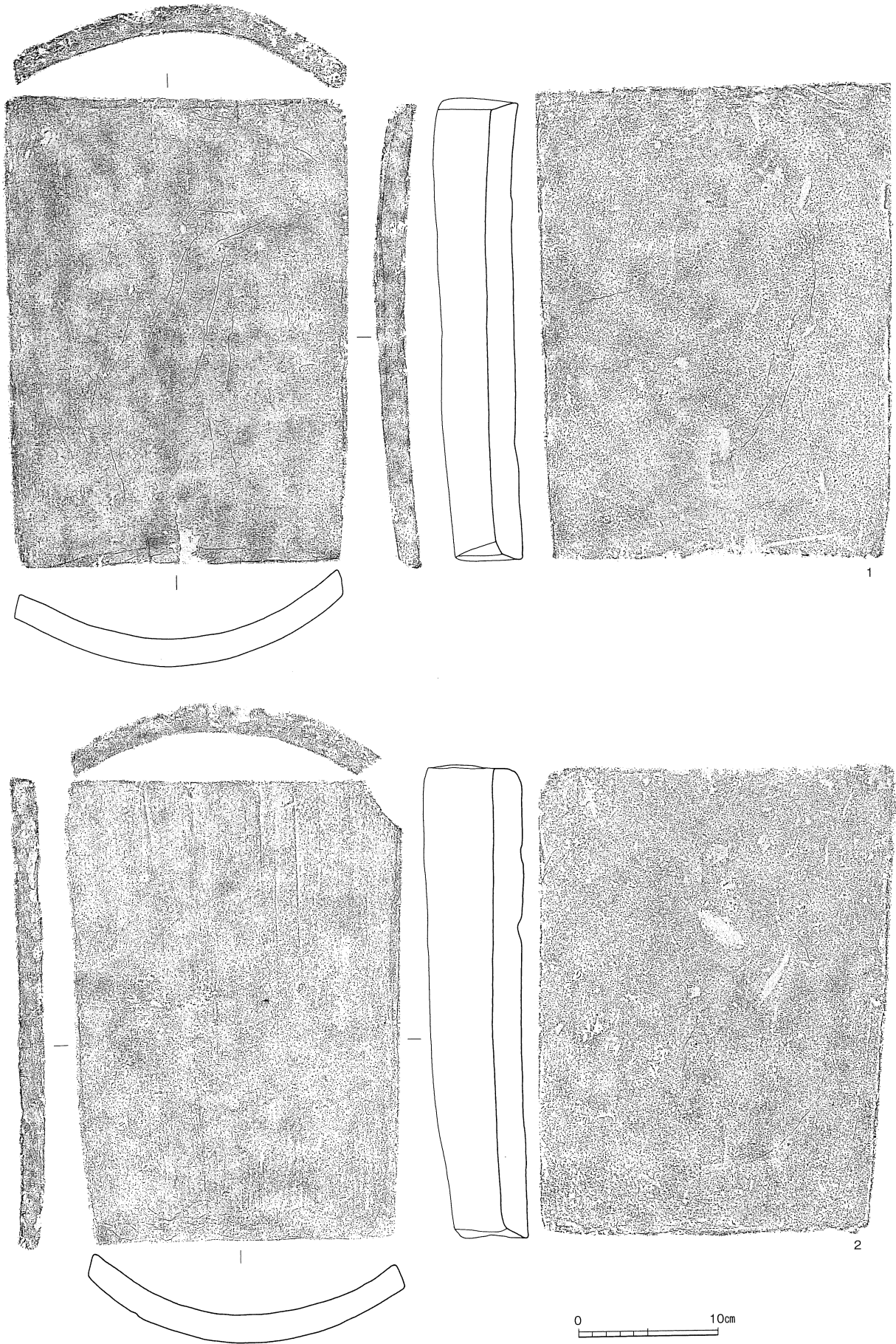


第3-150図 06-SX031実測図 (1/30)



第3-151図 06-SX032実測図 (1/30)

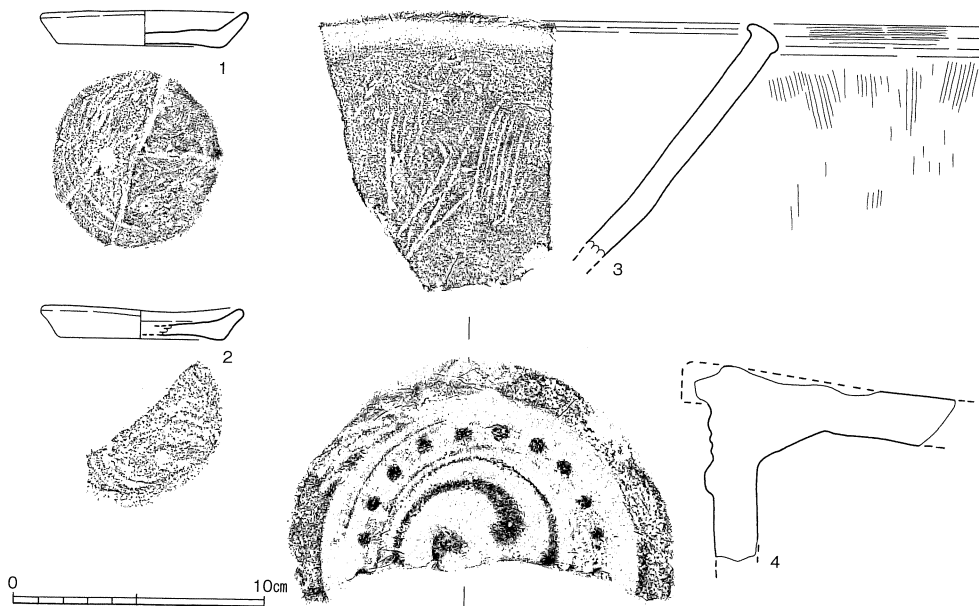
註(6) 瓦当部の技法は以下の文献による。
山崎信二2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊、奈良国立文化財研究所



第3-152図 06-SX032出土遺物実測図(1/4)



第3-153図 06-SX033実測図 (1/30)



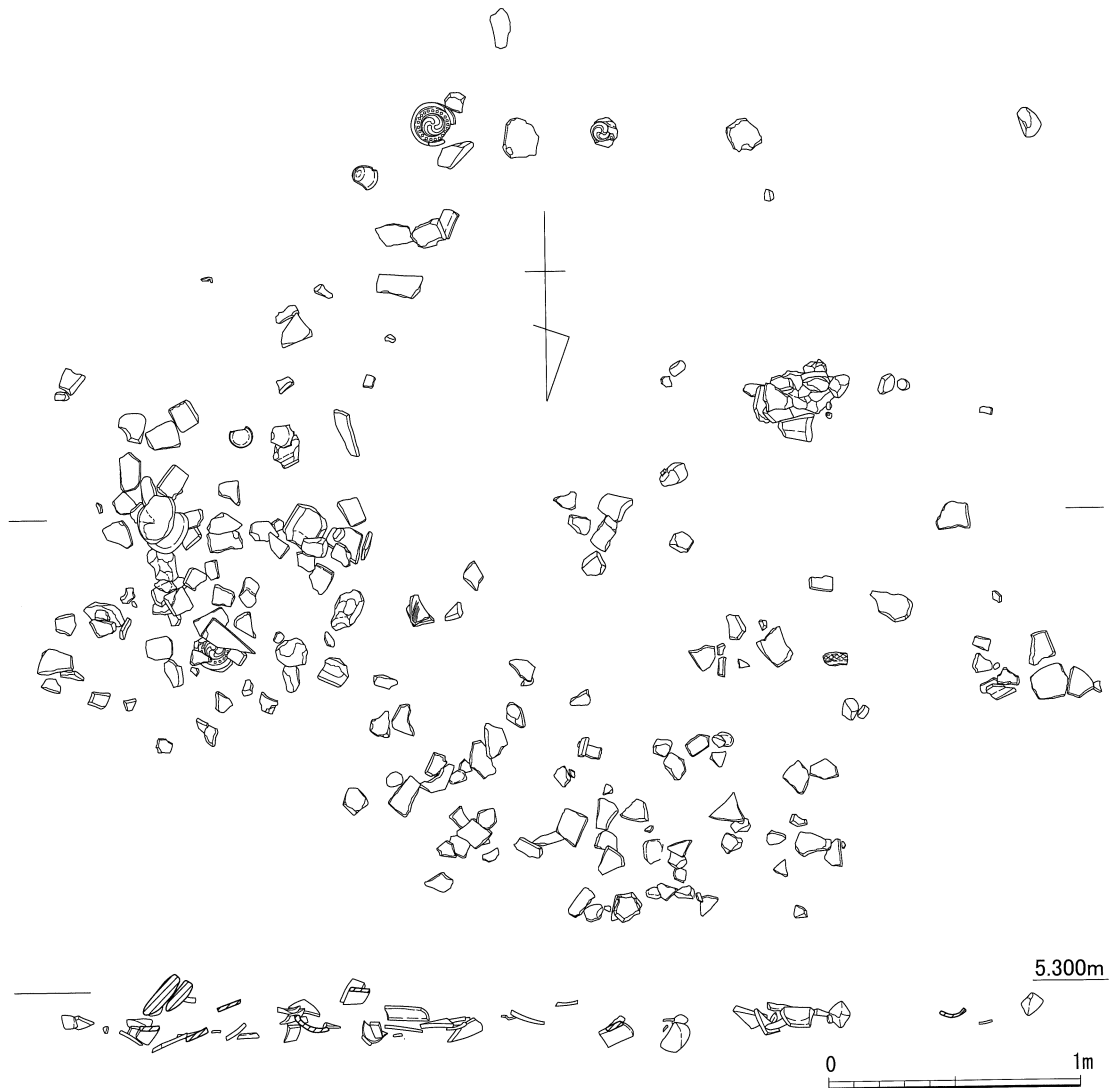
第3-154図 06-SX033出土遺物実測図 (1/3)

4. 井戸

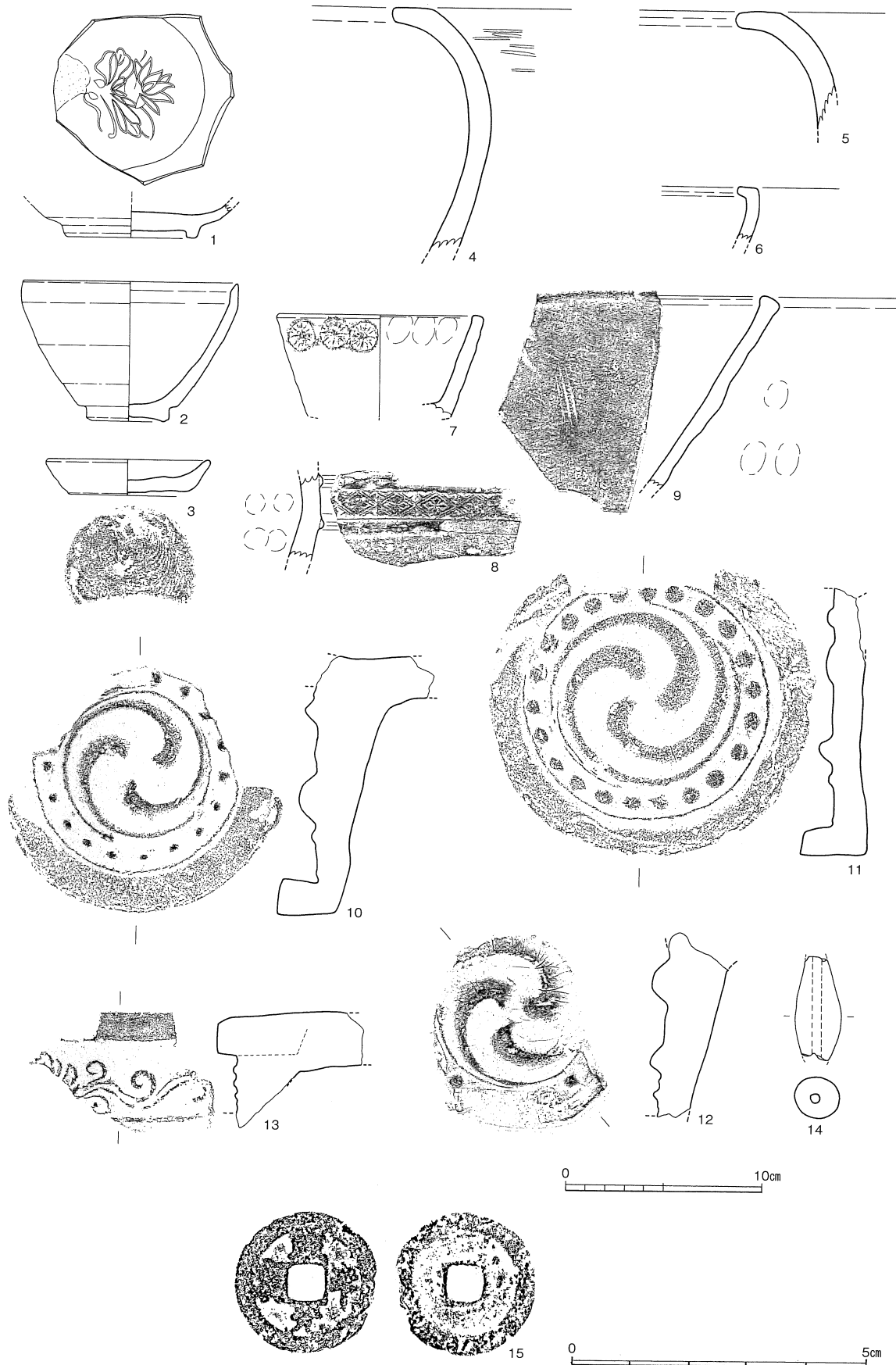
06-SE271 (第3-145図)

1区のO62・O63グリッドで検出した井戸である。平面形状は円形で、検出面での規模は東西2.89m、南北3.18mを測る。このSE271の周囲に一回り大きい井戸SE312の掘り込みが確認できるが、SE271はSE312埋没後に掘られたものである。SE271の掘形のほぼ中央には東西1.38m、南北1.43mの円形の井筒の掘り込みプランが確認できる。井筒内からは、標高約4mで0.4m×0.3m大の大振りの石材が出土しており、井戸を封じた際の痕跡であろう。井戸内部は約1.8m掘り下げたが、周囲の土壌が軟弱で崩壊の危険があったことから掘削を中断せざるを得ず、井戸の底は確認できていない。井戸内からは瓦や土器の他、加工した凝灰岩の碎片が多数出土している。中世大友府内町跡では、阿蘇溶結凝灰岩の切石を1段に6枚組み合わせ、それを数段積み上げて井戸側とするものがいくらか見られる。SE271でも井戸側は抜き取られているが、これらの凝灰岩碎片が凝灰岩の井戸側を抜き取った際に、不要な石材を破碎して井戸に廃棄した可能性も考えられる。こうした凝灰岩を井戸側とした井戸は16世紀後半に特徴的に認められるものである。

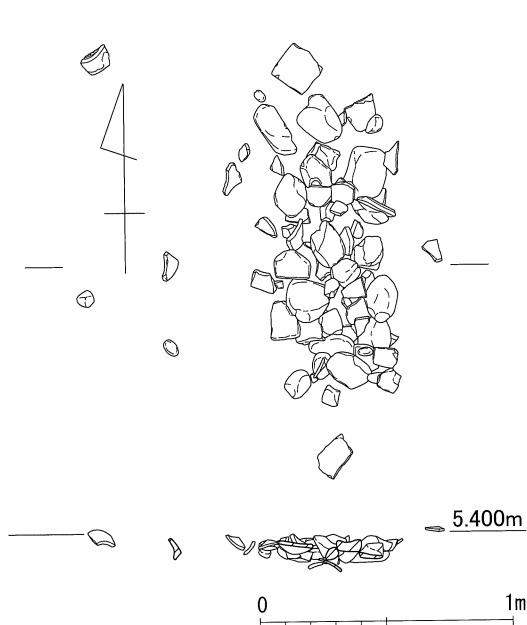
SE271の出土遺物には万寿寺創建期に位置づけられる14世紀前半の瓦がある一方、1408年初鑄の



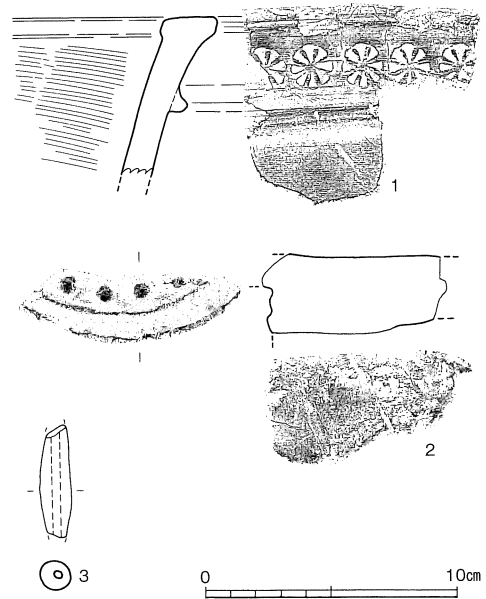
第3-155図 06-SX049実測図 (1/30)



第3-156図 06-SX049出土遺物実測図 (1/3・1/1)



第3-157図 06-SX082実測図 (1/30)



第3-158図 06-SX082出土遺物実測図 (1/3)

永楽通寶や15世紀代の青磁碗等年代幅があり、時期比定は難しい。先述のSE312が15世紀後半に比定されることから、15世紀後半以降であることは確実である。双頭蕨手流雲文をもつ瓦質土器を重視すれば16世紀後半に位置づけられようが、当該期に普遍的に出土する京都系土師器やロクロ目土師器皿が認められないことから、積極的に16世紀代に比定することは躊躇する。ここでは15世紀後半以降としておく。

06-SE271出土遺物 (第3-146・3-147図)

1・2は青磁碗である。1は内外面ともに無文で、口縁部は外反する。3・4は青磁の盤である。3は口縁部が輪花形となる。5は備前焼の摺鉢で、内面に10条1単位の摺目を施す。6は焼締陶器の甕の底部片で、内外面とも板状工具によるナデ調整を施す。7は施釉陶器の香炉であろう。8～11は瓦質土器である。8は香炉の底部で、外面に2条の分厚い凸帯を配し、その間に双頭蕨手文を施す。底面には3箇所脚が付く。9は深鉢形、10は浅鉢形の火鉢で、ともに凸帯区画内にスタンプ文を施す。11は摺鉢で、内面下半の摺目は使用により磨滅している。12は縄文土器の深鉢で、内外面に粗い条痕を施す。13・14は弥生土器で、口縁部に刻み目凸帯を施す下城式の甕である。15は弥生土器の複合口縁壺で、外面に波状文を施す。16・17は軒平瓦である。16は瓦当面に蓮華唐草文を施し、瓦当部の成形は額貼付技法による。17は連珠文を施す。18は磚である。19は鬼瓦の一部と思われるもので、断面形状は背面側が平坦であるのに対し腹面側は丸みをもつ。顔部の背面側に取り付ける把手と思われる。20は土師質焼成の管状土錘である。21は硯の破片、22は砥石である。23～26は銭貨で、23は北宋の熙寧元寶 (1068年初鑄)、24は明の永楽通寶 (1408年初鑄) である。25は鑄のため銭文が判読できない。26は「寶」字以外は判読できず、ともに銭種は不明である。27は銅製の飾り金具で、頭部は菱形、釘部断面は方形を呈する。

双頭蕨手文

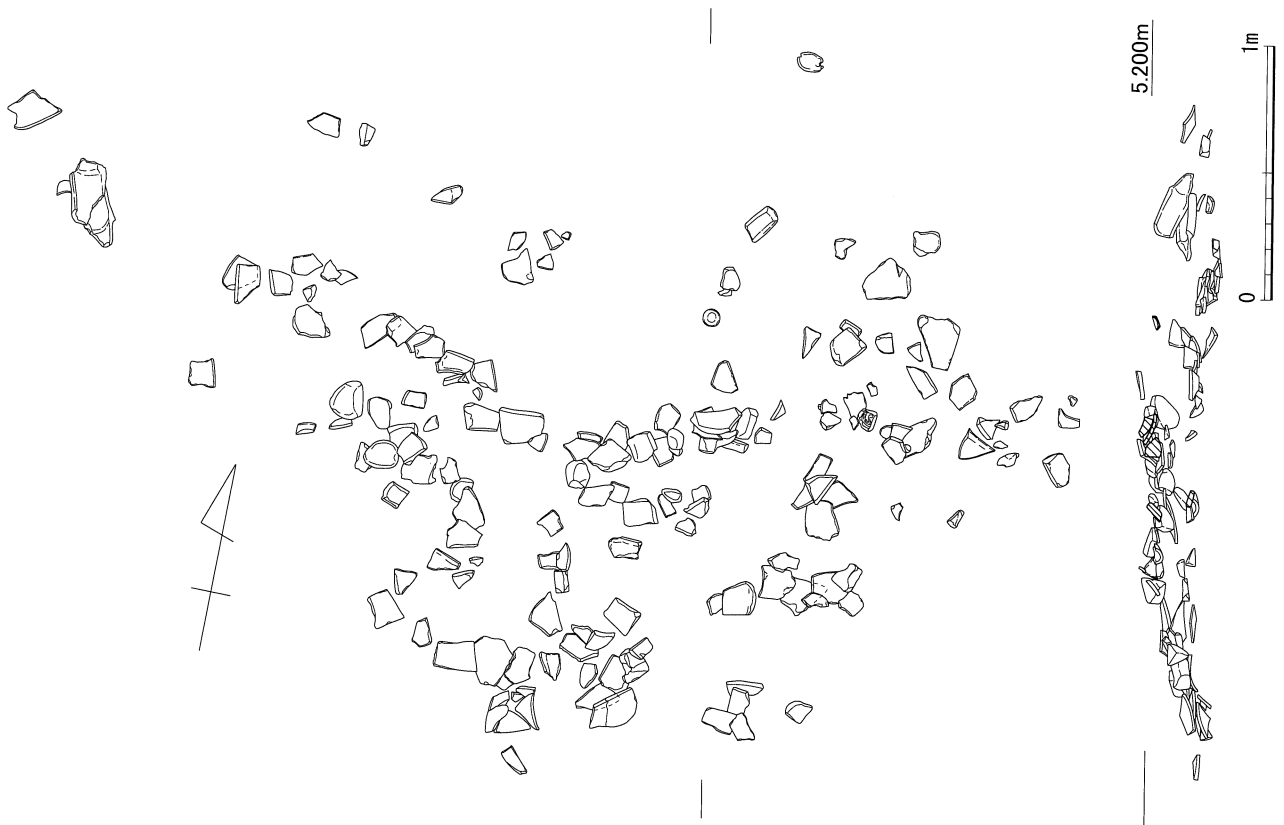
蓮華唐草文
鬼瓦

永楽通寶

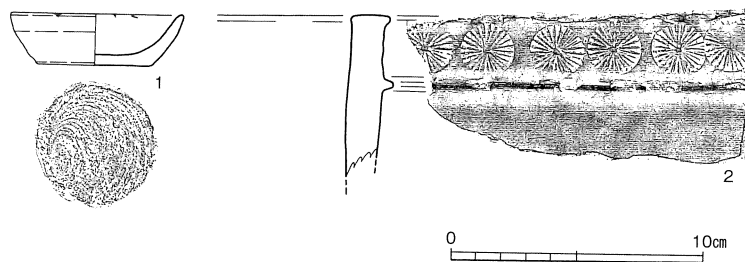
5. 土坑墓

06-ST094 (第3-148図)

2区のL60グリッドで検出した土坑墓と考えられる遺構である。06-SK035完掘後の底面で長方形のプランを確認したもので、上部は06-SK035によって大きく切られている。平面形状は隅丸長方



第3-159図 06-SX083実測図 (1/30)



第3-160図 06-SX083出土遺物実測図 (1/3)

形で、長辺1.84m、短辺1.08m、深さ0.19mを測る。埋土は黒褐色土ないし暗褐色土で、3層に分層できる。遺物の出土は少なく、京都系土師器や、銅銭、鉄釘も出土したがいずれも細片である。遺構の時期は検出面ではあるが京都系土師器が出土したことから、VI期（16世紀後半）に位置付ける。本遺構を土坑墓とする推定が正しいとした場合、遺構の規模からすると中世後期に一般的な横臥屈葬ないし仰臥屈葬ではなく、伸展葬の可能性が高い。こうした伸展葬の墓は、中世大友府内町跡第10次調査のII区北調査区で確認されたイエズス会府内教会付属墓地で確認されている⁽⁷⁾。そして、その中の伸展葬墓である4号墓ST150や8号墓ST149等と遺構の規模も近い。そして明確な副葬品がない点も共通する。以上の点から、キリシタン墓の可能性⁽⁸⁾がある遺構である。

伸展葬の可能性
イエズス会
府内教会付
属墓地

キリシタン
墓の可能性

06-ST094出土遺物（第3-149図）

1は京都系土師器皿である。検出面付近から出土した細片であり、06-SK035からの混入の可能性も完全には排除できないが、本遺構の年代を比定できる唯一の資料である。

註(7) 田中裕介・後藤晃一2007『豊後府内6』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第15集、大分県教育庁埋蔵文化財センター
 註(8) キリシタン墓については田中裕介氏（別府大学教授）から御教示を得た。

6. 集石・遺物集中ブロック

06-SX031 (第3-150図)

石英質の玉砂利

2区のN62グリッドで検出した集石遺構である。10～20cm大の礫が散在する中に、数cmの石英質の玉砂利が比較的高い密度で分布している。分布範囲は長辺約2.60m、短辺約1.60mで、検出高は約5.40～5.45mである。周囲を精査したが、掘り込みは確認できない。遺構の時期を示す遺物の出土はないが、V期(16世紀前半)の土坑06-SK131埋没後の遺構であることから、VI期(16世紀後葉)以降に位置付けられる。

06-SX032 (第3-151図)

2点の完形の平瓦

2区のN61・N62グリッドで検出した遺物集中ブロックである。2点の完形の平瓦を中心に、長辺2.36m、短辺約1.0mの範囲に礫や遺物がまとまって出土している。周囲に掘り込みは確認できない。遺構の詳細な年代は明らかにできないが、溝06-SD093埋没後の遺構であるためⅢ期(14世紀末～15世紀前半)以降に位置付けられる。

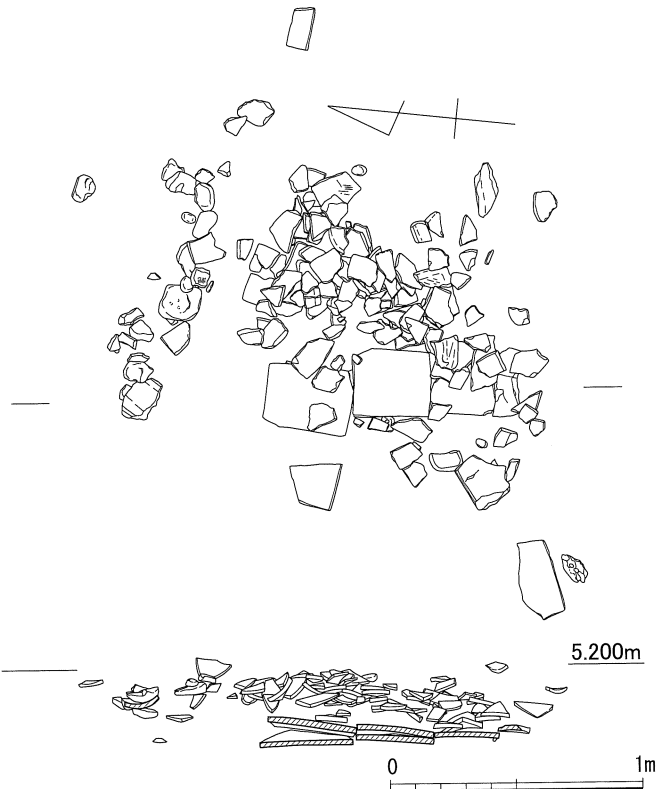
06-SX032出土遺物 (第3-152図)

1・2は平瓦である。完形で、いずれも凸面の2箇所に成形台の痕跡と思われる長形状の小突起が見られる。

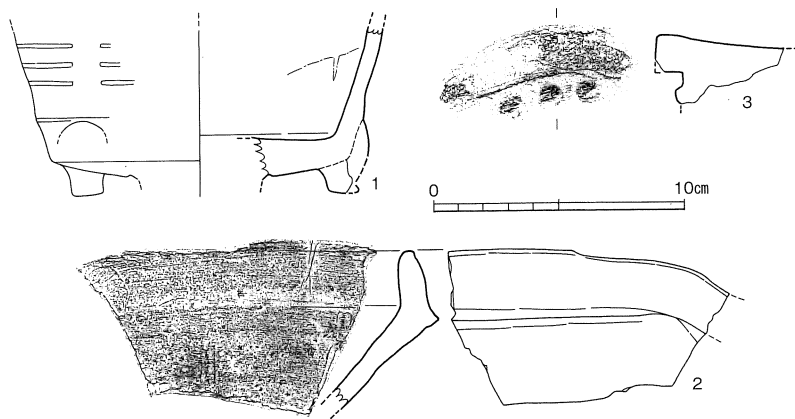
06-SX033 (第3-153図)

2区のO61グリッドで検出した遺物集中ブロックである。東西3.44m、南北4.00mの範囲に礫や瓦等の遺物が散漫に分布しており、検出標高は約5.50～5.60mを測る。周囲に掘り込みは確認できない。遺物は14世紀代の土師器小皿

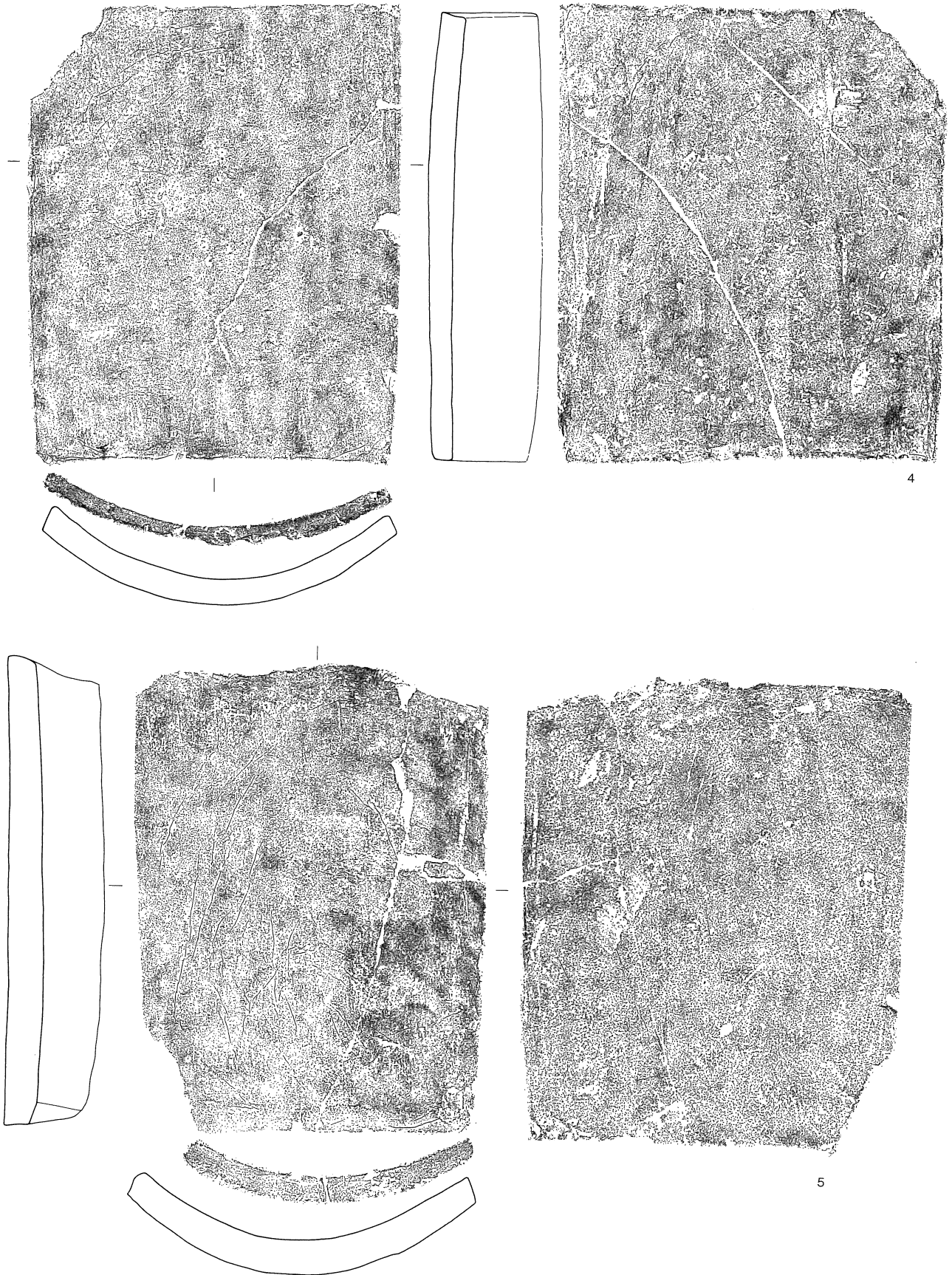
が出土しているが、Ⅳ期(15世紀中頃～15世紀後半)に比定される土坑06-SK126より上位に位置することから、Ⅴ期(16世紀前半)以降の遺構である。



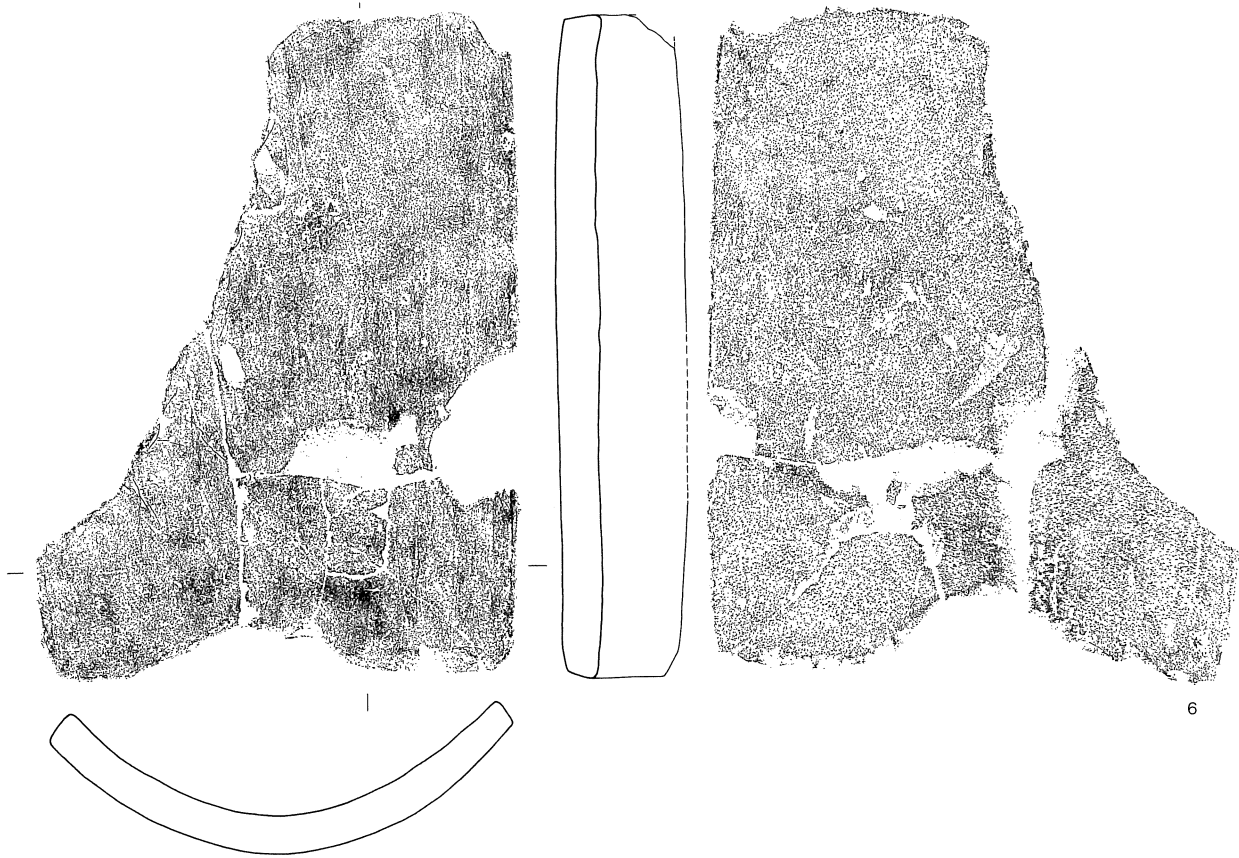
第3-161図 06-SX084実測図(1/30)



第3-162図 06-SX084出土遺物実測図①(1/3)



第3-163図 06-SX084出土遺物実測図② (1/4)



0 10cm

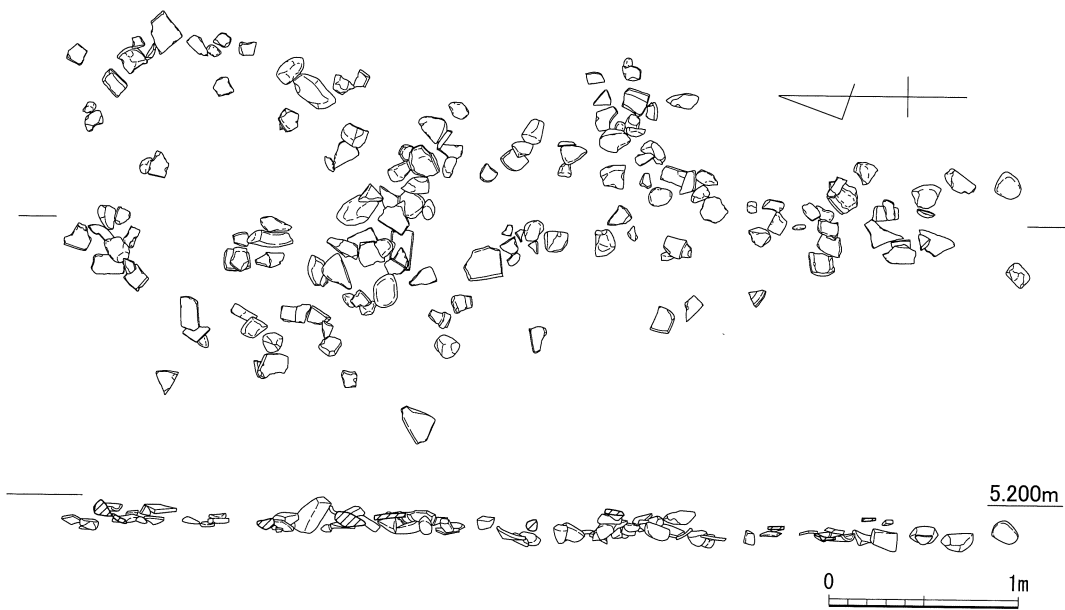
第3-164図 06-SX084出土遺物実測図③(1/4)

06-SX033出土遺物 (第3-154図)

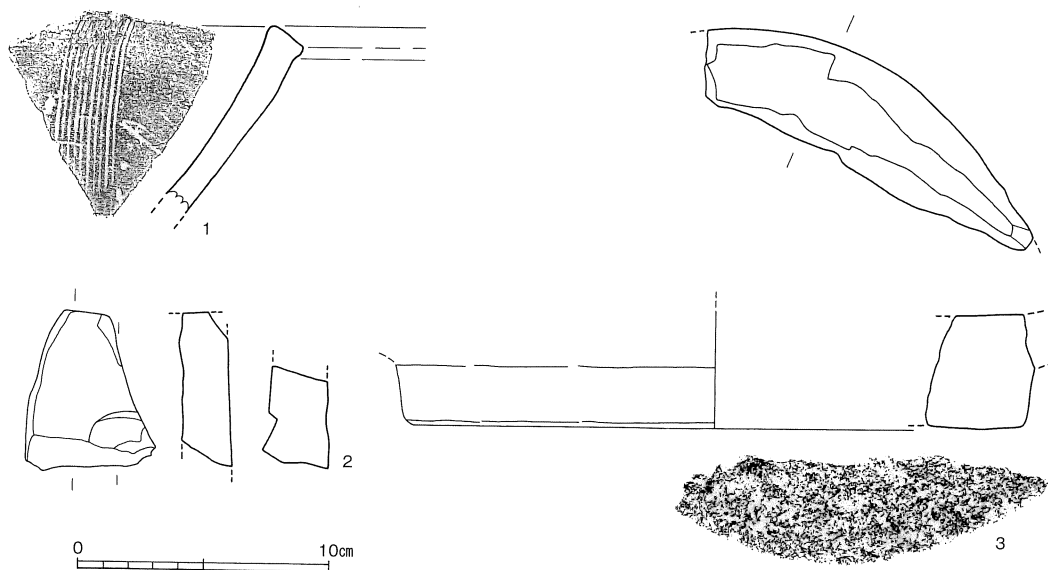
1・2は土師器小皿である。底部から口縁部が短く外に開く器形で、底面には回転糸切り痕が残る。3は瓦質土器の摺鉢である。内面に6条1単位の摺目を施すが、使用により摩滅している。4は軒丸瓦である。瓦当の中央に右巻きの巴文と、その周囲に珠文を施す。

06-SX049 (第3-155図)

2区のN61グリッドで検出した遺物集中ブロックである。東西3.60m、南北4.24mの範囲に礫や瓦、土器・陶磁器類がまとまって出土しており、検出標高は東側で約5.40m、西側では約5.20mを測り、東側から西側にかけて傾斜するような堆積を示す。周囲を精査したが、掘り込みは確認できない。V期(16世紀前半)の土坑06-SK131埋没後の遺構であり、VI期(16世紀後半)以降に比定される。



第3-165図 06-SX095実測図(1/40)



第3-166図 06-SX095出土遺物実測図(1/3)

06-SX049出土遺物（第3-156図）

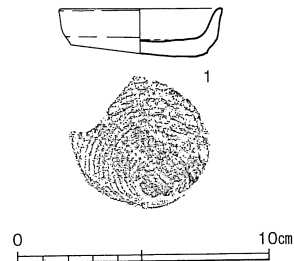
中国産天目碗

1は青磁碗で、見込みに印花文を施す。2は中国産天目碗である。口縁部は短く上方に折れ、端部は先尖り気味におさめる。3は土師器小皿で、底面に回転糸切り痕が残る。4～9は瓦質土器である。4～6は火鉢で、外面は無文である。7は小型の鉢で、口縁直下に菊花状スタンプ文を施す。8は火鉢の胴部で、凸帯間に菱形のスタンプ文を施す。9は摺鉢で、内面は使用により摩滅が著しい。



第3-167図 06-SX096実測図 (1/30)

摺目がわずかに確認できる。10～12は軒丸瓦で、瓦当中央に右巻きの巴文と、その周囲に珠文を配する。13は蓮華唐草文を施す軒平瓦で、瓦当の貼付は顎貼付技法である。14は土師質焼成の管状土錘で、中位が膨らむ。15は北宋の咸平元寶（998年初鑄）である。



第3-168図 06-SX096出土遺物実測図 (1/3)

06-SX082（第3-157図）

2区のN61・N62グリッド、06-SX032の西側で検出した集石である。東西0.70m、南北1.46mの範囲に礫や瓦等が密集しており、その周囲に数点の礫等が点在する。検出標高は約5.40mを測る。周囲に掘り込みは確認できない。遺構の年代を示す遺物に乏しいが、溝06-SD093埋没後の遺構であるためⅢ期（14世紀末～15世紀前半）以降に位置付けられる。

06-SX082出土遺物（第3-158図）

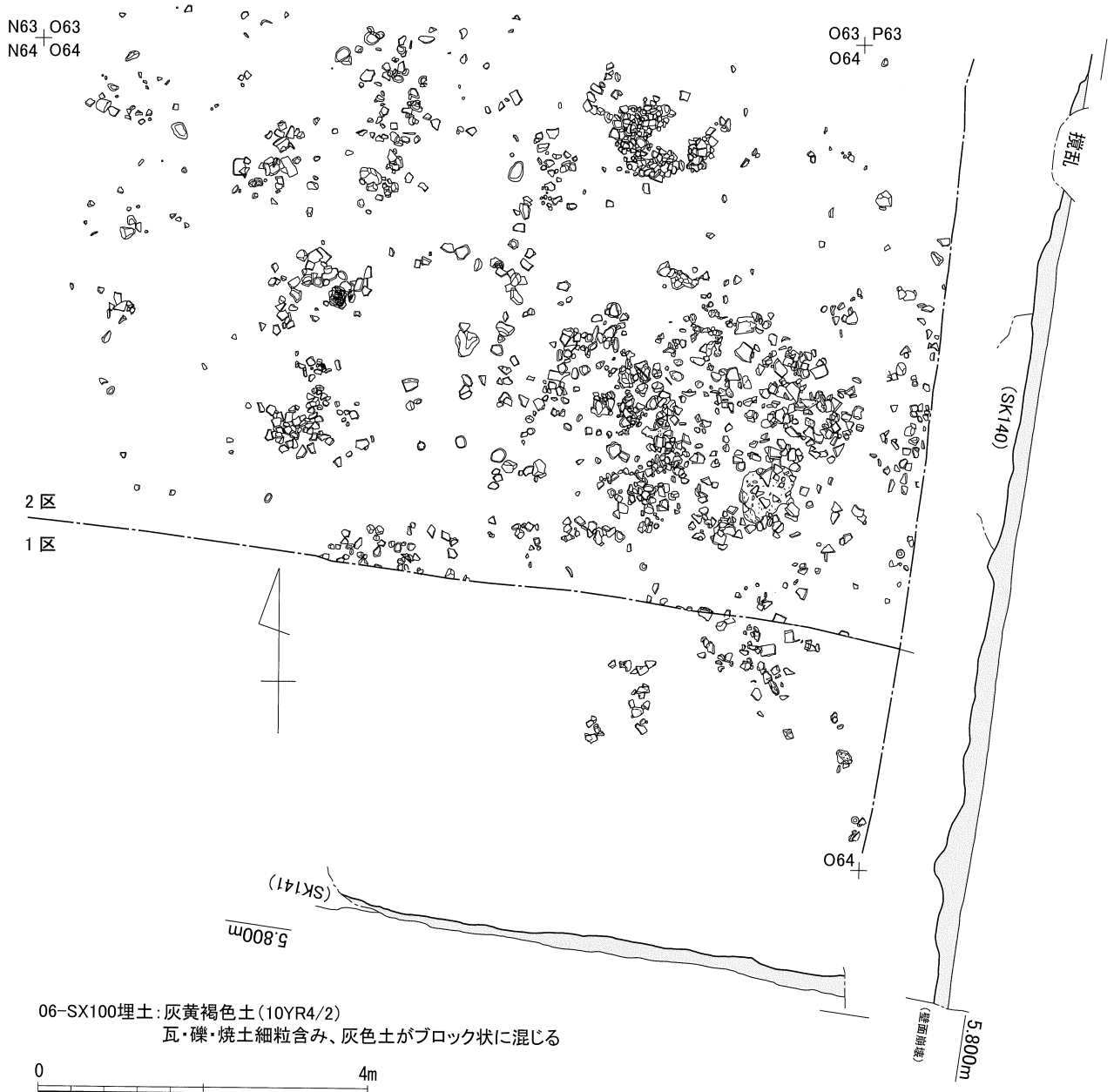
1は瓦質土器の焜炉であろう。口縁部は外に開き、端部は肥厚する。外面には菊花文のスタンプを施す。2は軒丸瓦で、珠文がわずかに確認できる。3は土師質焼成の管状土錘である。

06-SX083（第3-159図）

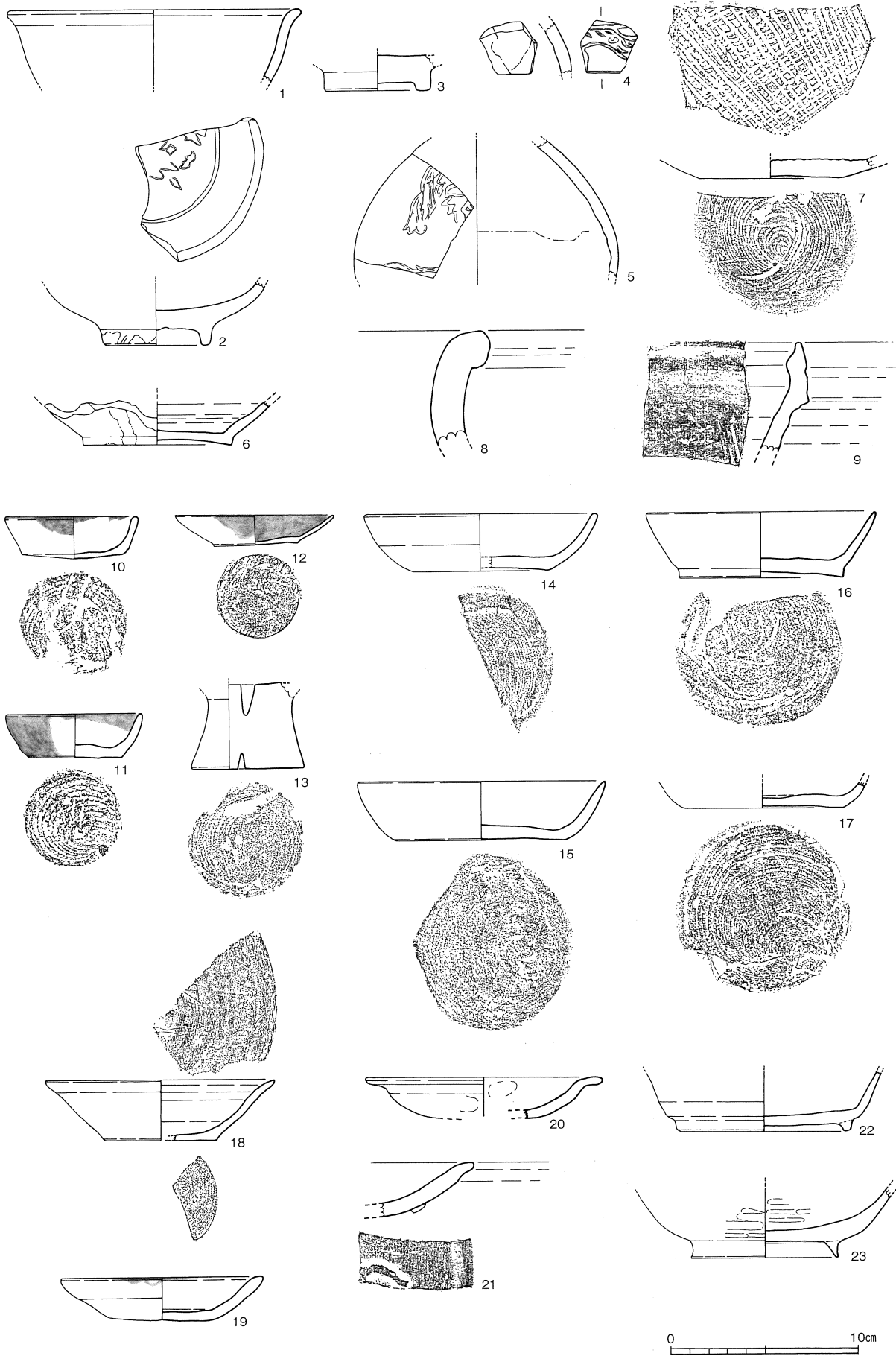
2区のM61グリッドで検出した遺物集中ブロックで、06-SK097に近接した位置にある。東西約4.30m、南北約2.90mの範囲に礫や瓦、土器等がややまとまって出土している。遺物等の検出高は約5.00～5.20mで、北から南にかけてやや傾斜して堆積する。周囲を精査したが、掘り込みは確認できない。図示できる遺物に乏しいが、06-SK097埋没後に形成された遺構であり、Ⅳ～Ⅴ期（15世紀中頃～16世紀前半）に位置づける。

06-SX083出土遺物（第3-160図）

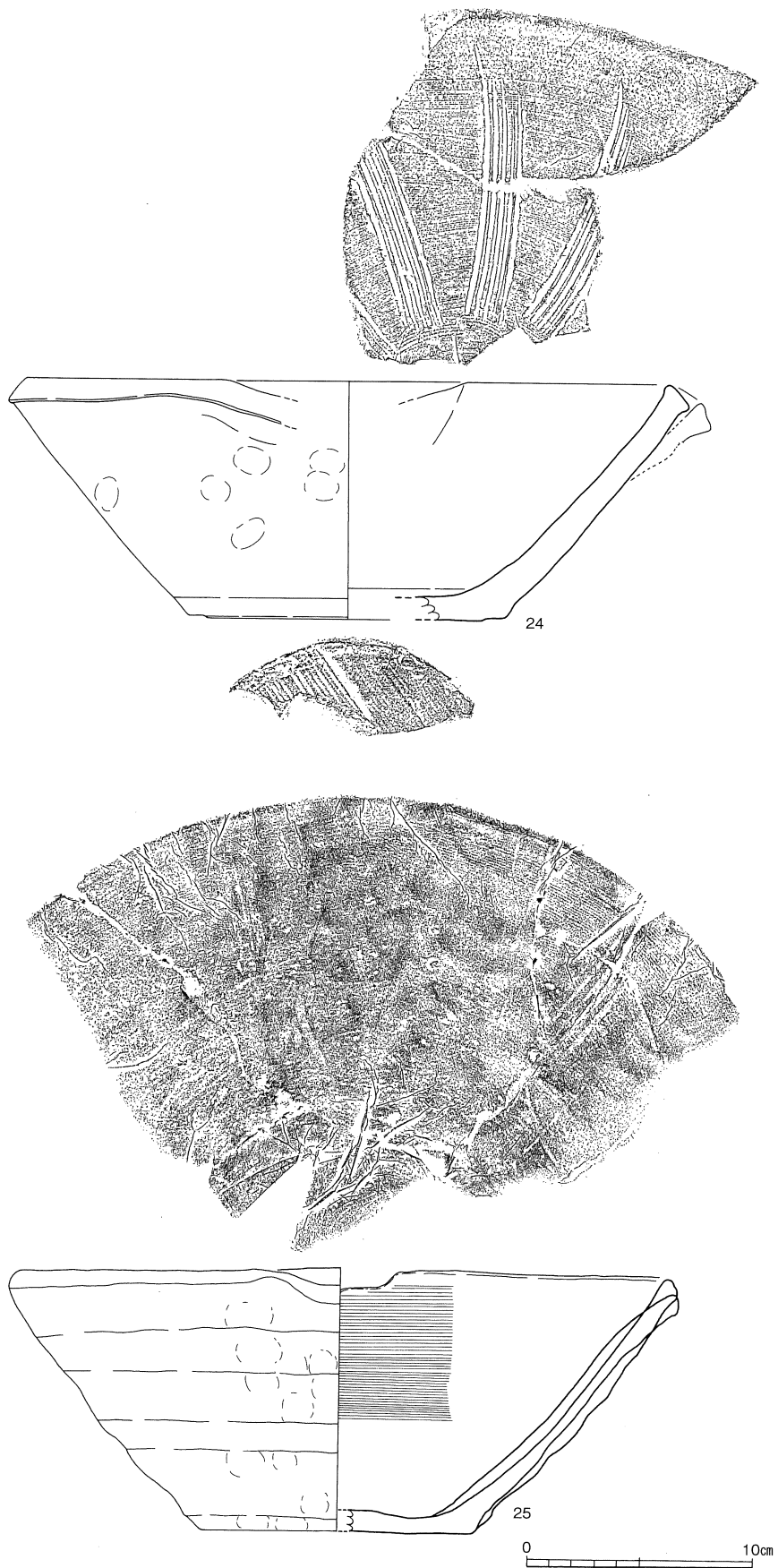
1は土師器小皿である。器形から15世紀後葉に位置づけられよう。2は瓦質土器の火鉢で、外面凸帯間に菊花スタンプ文を施す。



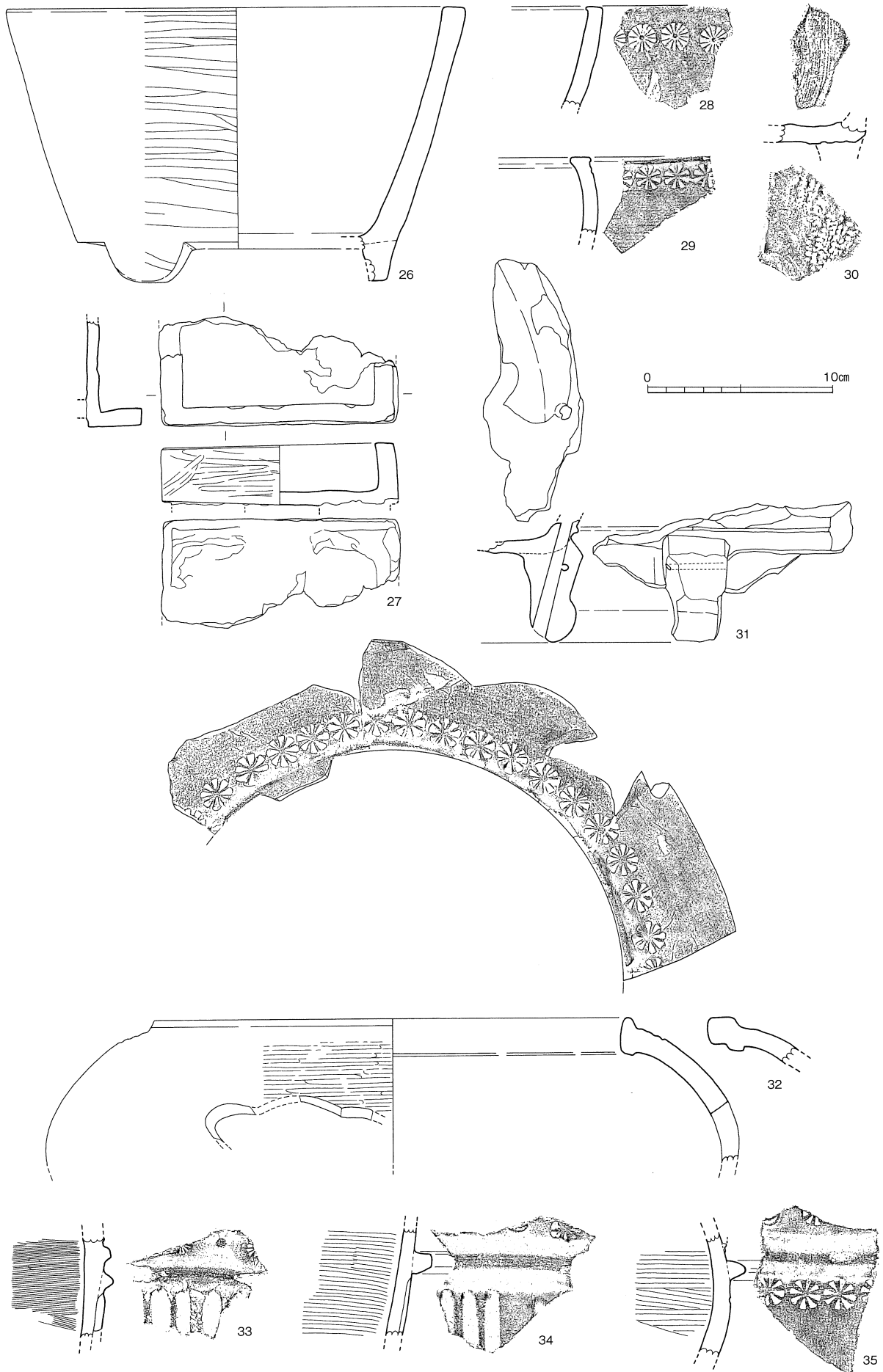
第3-169図 O6-SX100実測図 (1/80)



第3-170図 06-SX100出土遺物実測図① (1/3)



第3-171図 06-SX100出土遺物実測図② (1/3)



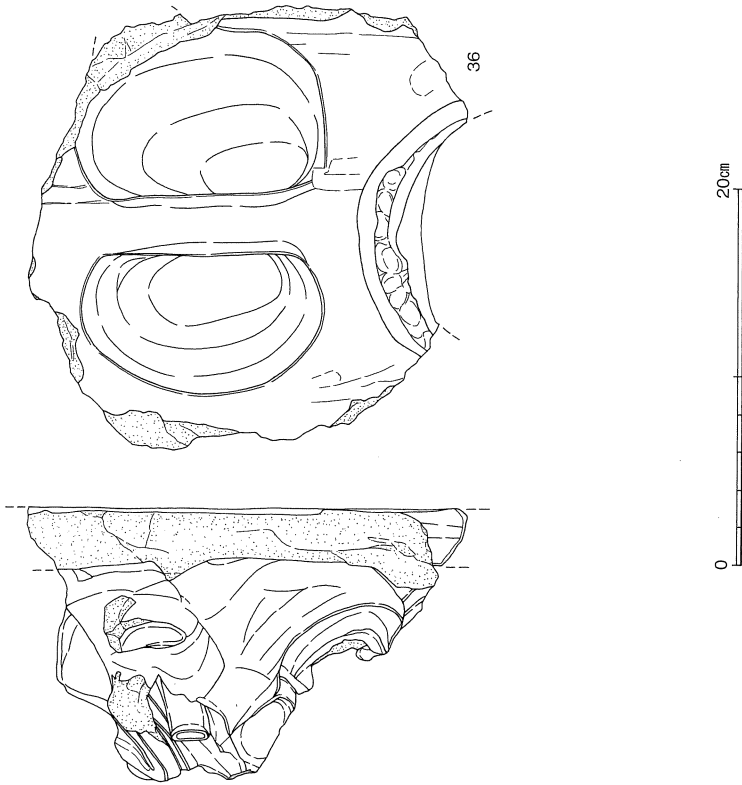
第3-172図 06-SX100出土遺物実測図③ (1/3)

06-SX084 (第3-161図)

2区のM61グリッドで検出した遺物集中ブロックである。東西約2.40m、南北約2.00mの範囲で瓦や礫が集中して出土した。周囲を精査したが、掘り込みは確認できない。特に西側ではほぼ完形ないし大破片の平瓦3点が凸面を上にして並べられた状態で出土し、さらにその下からも平瓦の大破片2点が重ねられたような状態で出土した。その他、15世紀後半の備前焼摺鉢や青磁等が出土している。06-SK131埋没後の遺構であることから、VI期(16世紀後葉)に位置づける。

平瓦3点

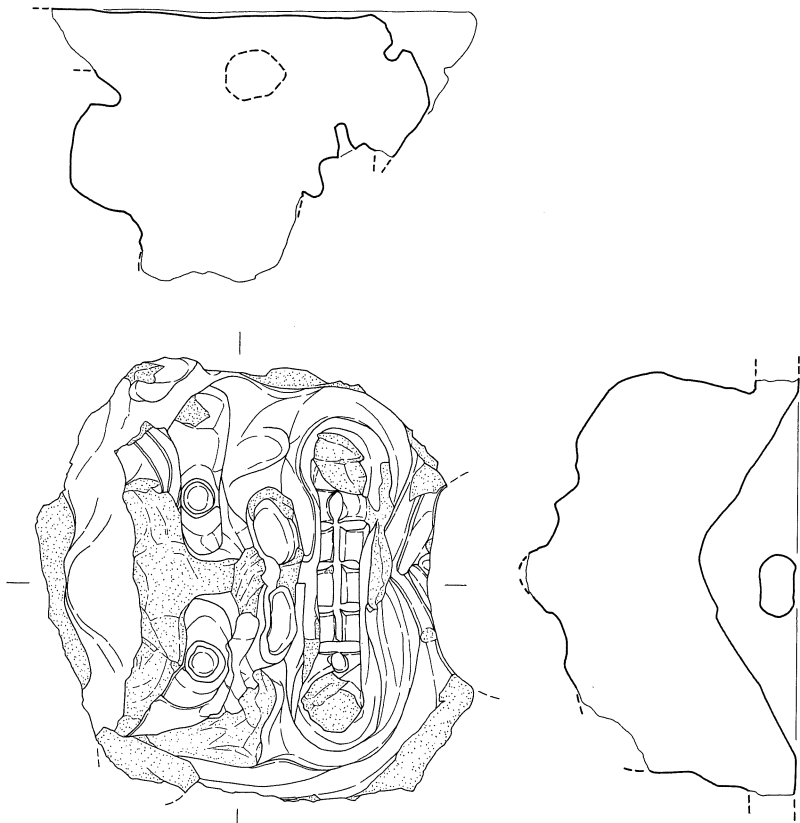
並べられた状態で出土



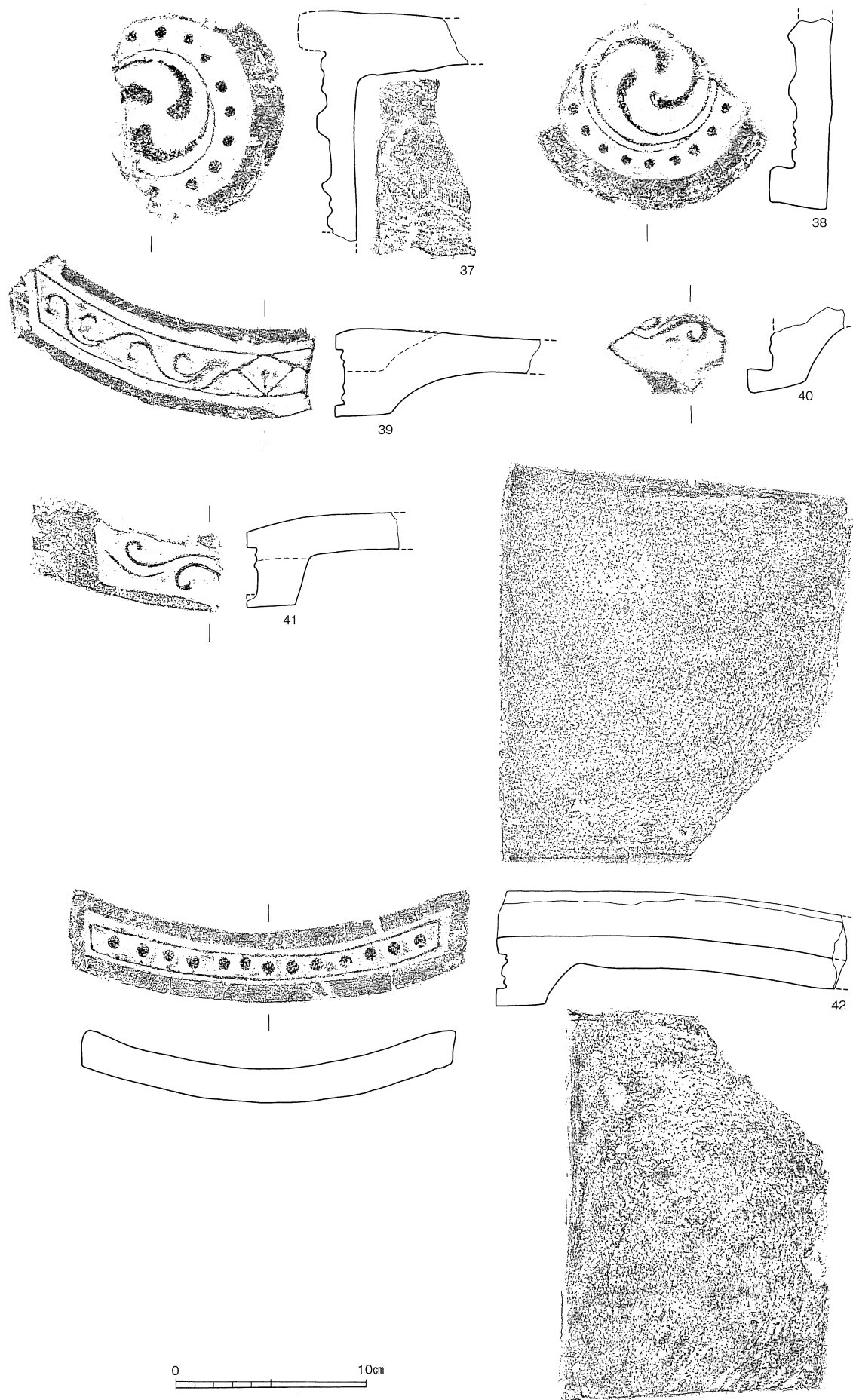
06-SX084出土遺物 (第3-162~3-164図)

1は青磁香炉である。底面には短い脚が付く。2は備前焼の摺鉢である。口縁部が上方に長くのびる形状から、15世紀後半に比定できる。3は軒丸瓦で、珠文を施す。4~7は平瓦である。6・7は凸面の2箇所成形台の痕跡と思われる長形状の小突起が認められる。

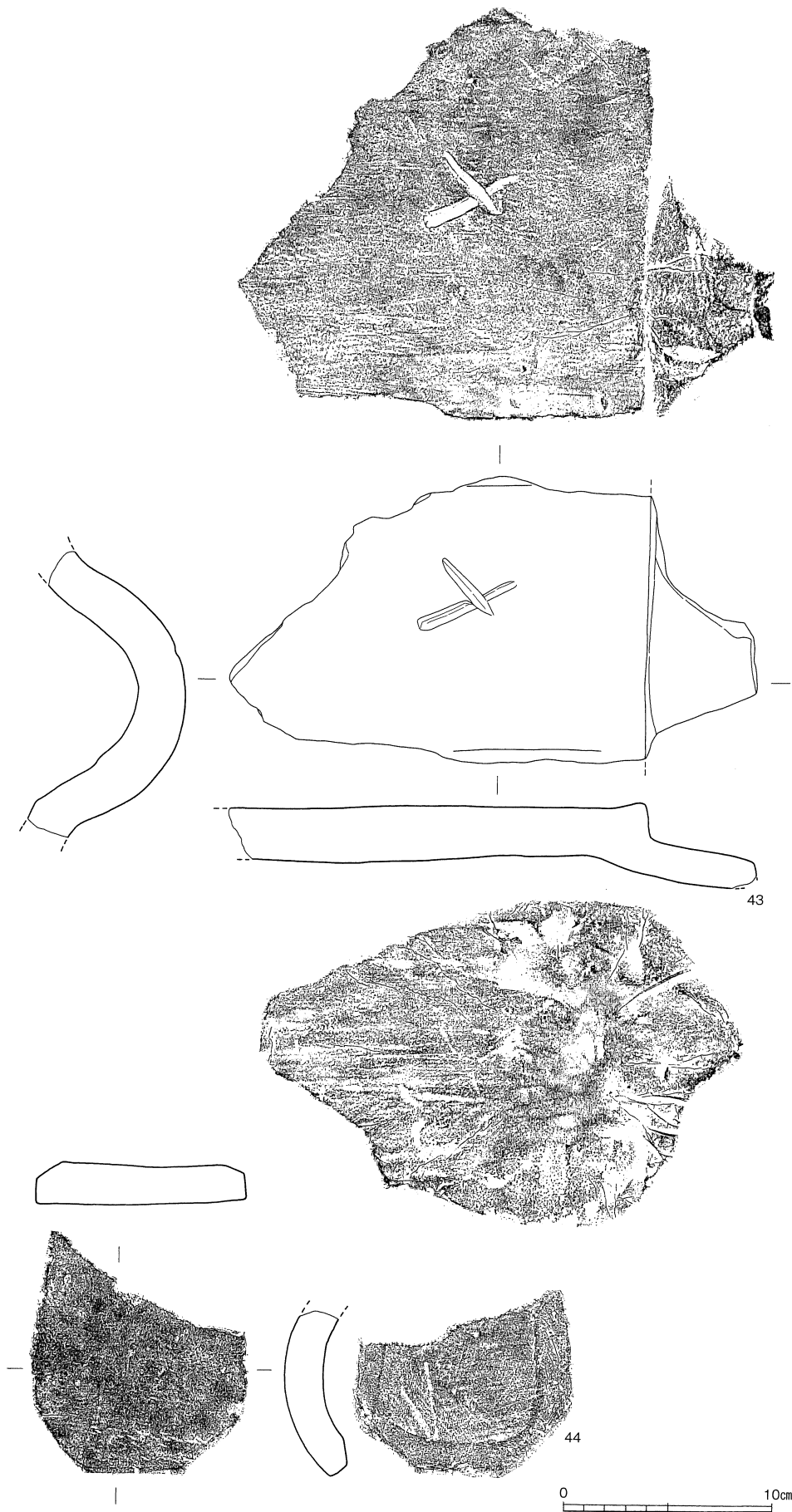
成形台の痕跡



第3-173図 06-SX100出土遺物実測図④ (1/4)



第3-174図 06-SX100出土遺物実測図⑤ (1/3)



第3-175図 06-SX100出土遺物実測図⑥ (1/3)



第3-176図 06-SX100出土遺物実測図⑦ (1/3)

06-SX095 (第3-165図)

1区のM60・M61グリッドで検出した礫・遺物集中ブロックで、土坑06-SK097に近接し、06-SD117の上位に位置している。東西約2.30m、南北約4.10mの細長い範囲に礫や瓦等がまとまって出土している。検出高は約5.15～5.20mを測る。周囲を精査したが、掘り込みは確認できない。図示できる遺物に乏しいが、Ⅳ期（15世紀中頃～後半）の土坑06-SK097、Ⅳ～Ⅴ期（15世紀中頃～16世紀前半）の溝06-SD117より新しいⅤ期（16世紀前半）以降に位置づけられる。

06-SX095出土遺物 (第3-166図)

1は備前焼摺鉢である。口縁部が矩形を呈するもので、中世3a期（14世紀末）に位置づけられる。2は硯である。3は茶臼の下臼で、臼部と受部を欠く。

06-SX096 (第3-167図)

2区のM60グリッドで検出した礫及び瓦等の集中ブロックである。06-SK097と重複する位置にあるが、06-SK096の方が上位に位置しており、06-SK097埋没後の遺構と分かる。礫等の分布範囲は長辺約1.90m、短辺1.15mで、検出高は約5.15mを測る。周囲に掘り込みは確認できない。遺構の時期を示す遺物に乏しいが、06-SK097より新しいことから、IV～V期(15世紀中頃～16世紀前半)に位置づける。

06-SX096出土遺物 (第3-168図)

1は土師器小皿である。口径が6.4cmと小振りであり、15世紀後半のものと考えられる。

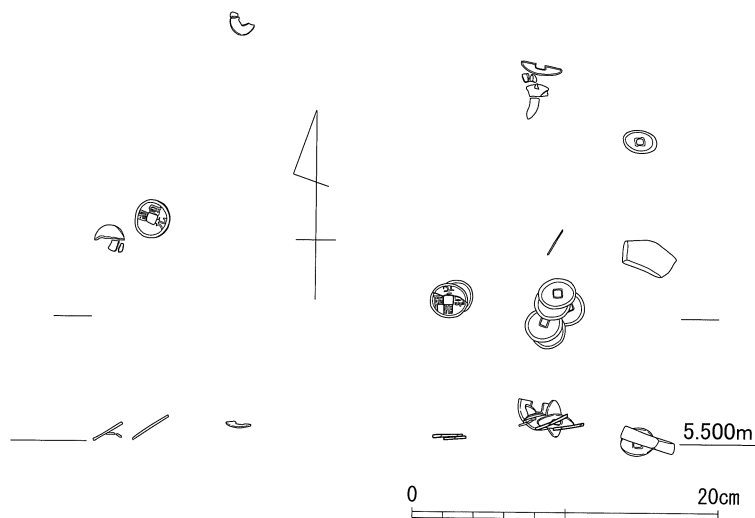
06-SX100 (第3-169図)

062・P62グリッドで検出した瓦溜りで、1区と2区にまたがって分布する。特に2区での遺物等の分布が顕著であるのに対し、1区の出土は比較的散漫である。分布範囲は東西約10.50m以上、南北約9.50mで、東側は調査区外に続く。土層断面図に示すように、4層の下に位置し、灰色土がブロック状に混じる灰黄褐色土(10YR4/2)中に多量の瓦や土器、礫が混ざり込んでいる。この場所には溝06-SD093や井戸06-SE167、土坑06-SK166等比較的大型の遺構が掘られており、こうした遺構が埋没した後にできた窪地に土や不要な瓦礫を入れて整地したものと考えられる。遺物は瓦や土器類が出土した他、特筆すべきものとして鬼瓦の出土が挙げられる。また、焼土や炭とともに壁土のまとまった出土が見られる(第3分冊図版25)。壁土はスサを混入し、全体に厚みがあることから土蔵等に使用された可能性があり、色調も灰色がかっていることから蒸し焼き状態にあったとの指摘もある⁽⁹⁾。遺構の年代はⅦ期(16世紀末葉)に比定する。

鬼瓦の出土
壁土のまと
まった出土
土蔵等に使用
された可能性

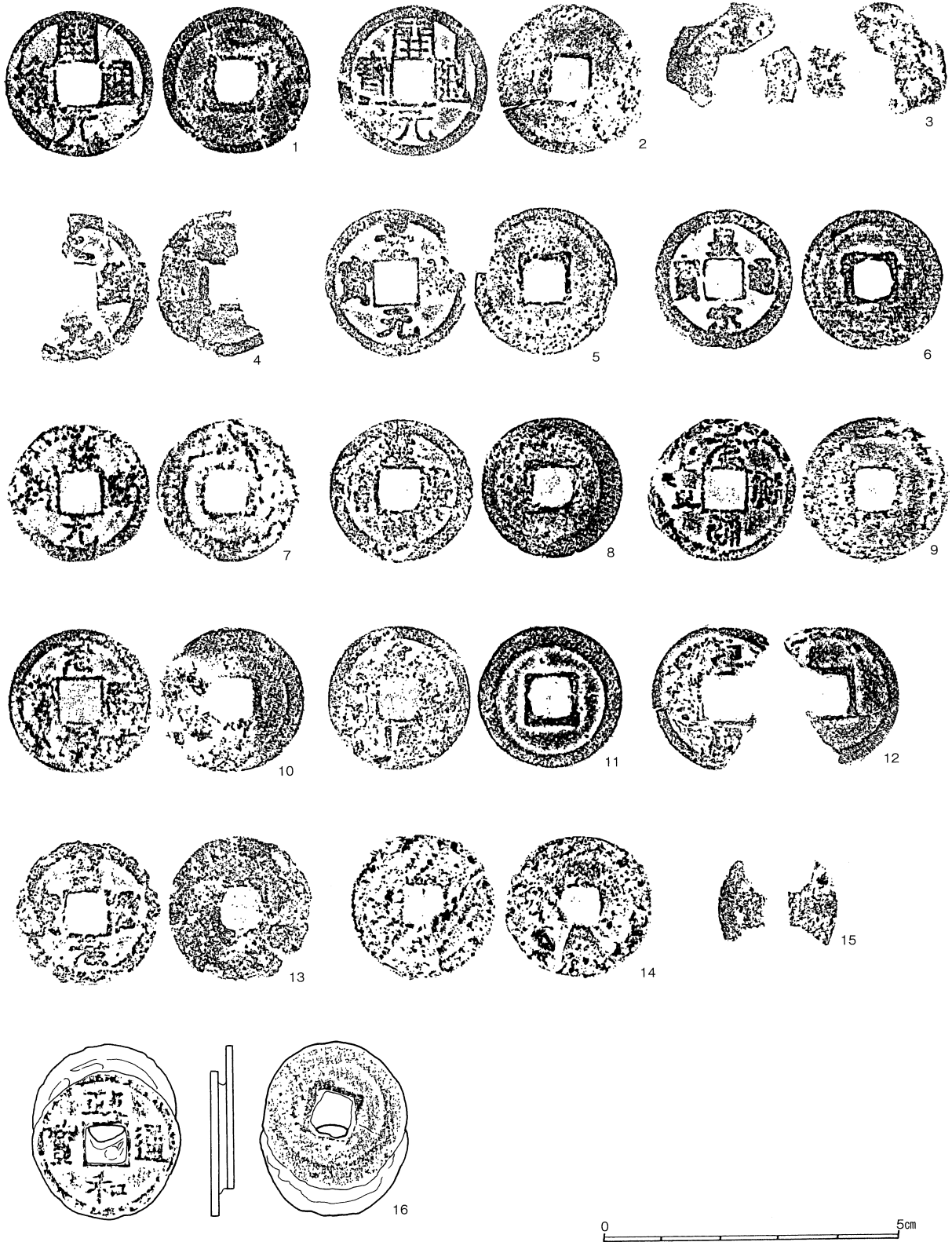
06-SX100出土遺物 (第3-170～第3-176図)

1～3は青磁碗である。1は内外面とも無文で、口縁部が外反する。2は見込みに印花文を施す。4・5は青磁の瓶で、同一個体と考えられる。胴部内面は露胎で、外面肩部には竜のような陰刻文を施す。6は産地不明焼締陶器の鉢である。7は瀬戸美濃窯の卸皿で、見込みには格子状の卸目、底面には回転糸切り痕がみられる。8は備前焼の甕で、口縁部を折り返して玉縁状につくる。9は



第3-177図 06-SX237実測図(1/5)

註(9) 壁土については平成23年8月5日に開催した調査指導者会で各調査指導者から教示を得た。



第3-178図 06-SX237出土遺物実測図(1/1)

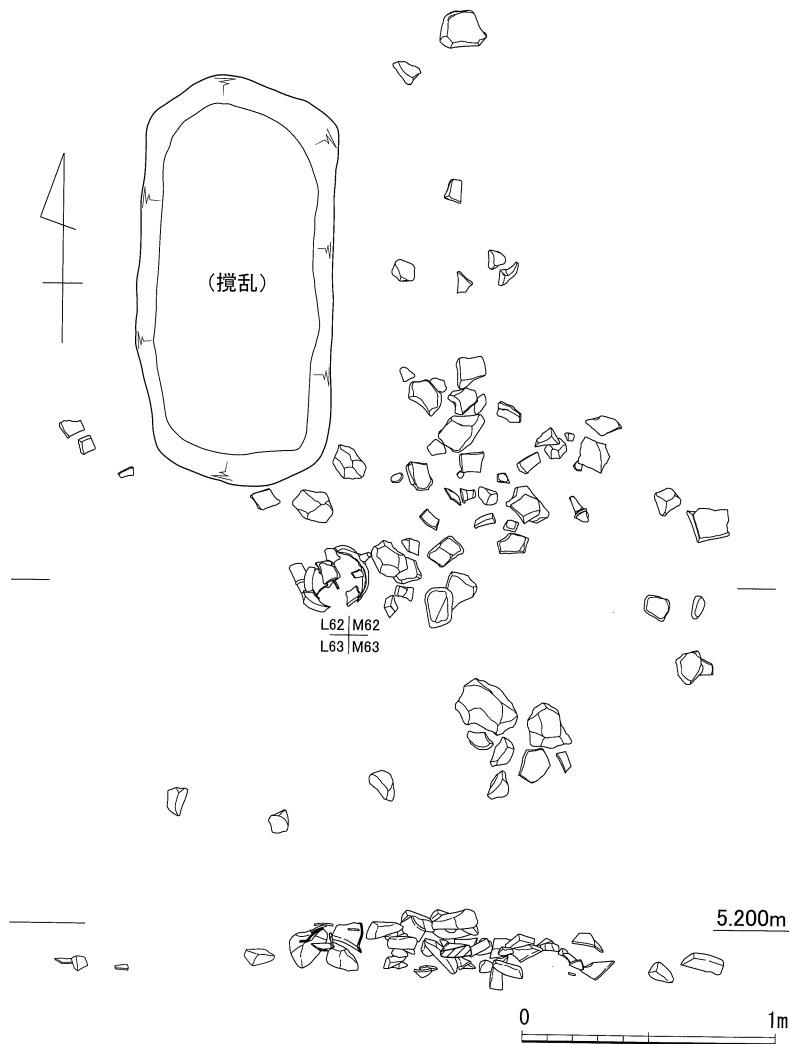
大内系土師器小皿

京都系土師器皿

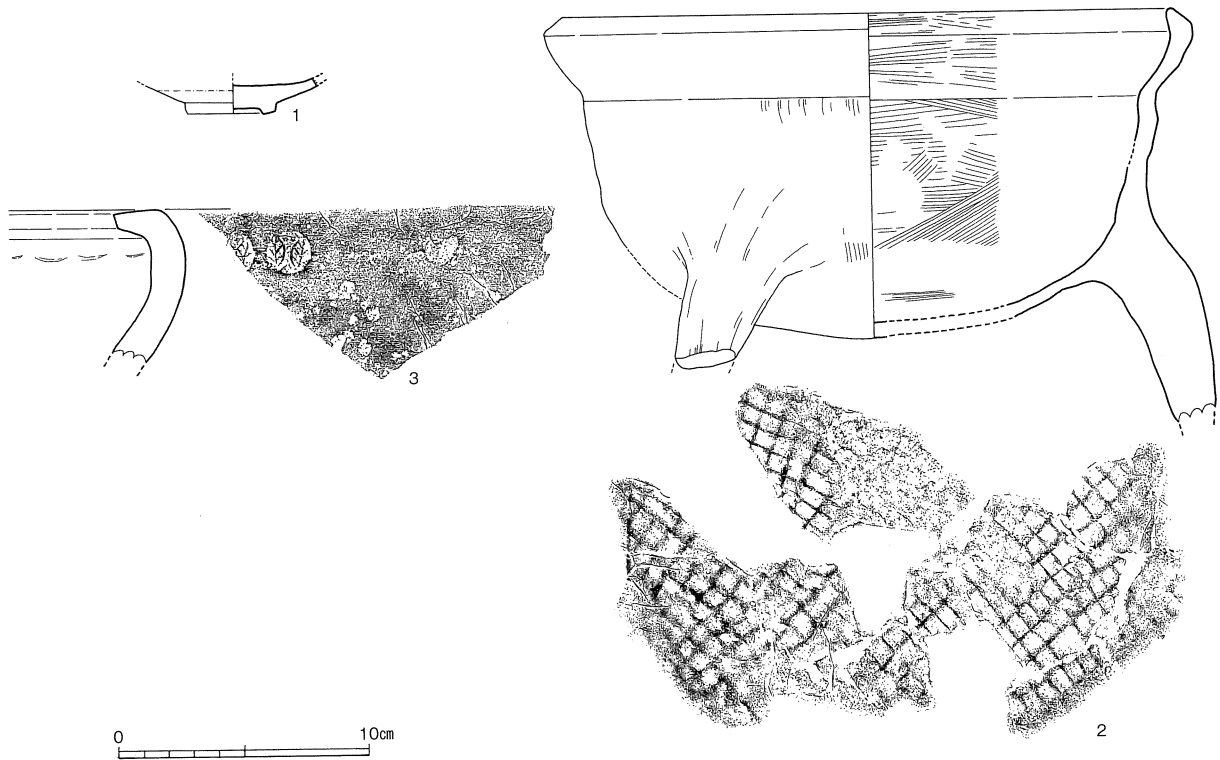
鬼瓦

備前焼の摺鉢である。口縁部は「く」字状を呈し、口縁部内面にも段がつく形状から16世紀後葉に位置づけられる。10・11は在地の土師器小皿で、内外面ともに煤が付着する。12は白色胎土で薄手が特徴の大内系土師器小皿で、内面はほぼ全面に煤が付着する。13は土師器の燭台で、見込みと底面にそれぞれ穿孔が認められる。14～17は在地の土師器坏で、いずれも底面に回転糸切り痕が残る。18はロクロ整形による多条の沈線が特徴的な土師器皿であるが、器高が深く坏状を呈する。19～21は京都系土師器皿である。21は底面に紐状の粘土が付着する。22は須恵器の高台付き坏、23は内外面にヘラミガキを施す高台付きの椀で、どちらも古代の遺物である。24～35は瓦質土器である。24・25は摺鉢で、25は使用により内面の摺目の摩滅が著しい。26～31は火鉢である。27は方形の火鉢で、底面には脚の貼り付け痕がみられる。30は底面の脚部接合部に櫛歯状工具による刺突を施す。31は脚部で、脚部を縦断・横断する穿孔が認められる。32～35は風炉である。31は口縁が内湾し、肩部に上部が連弧状となる風文を配する。06-SK173から出土の破片と接合が認められる。33・34は凸帯上位にスタンプ文、凸帯下に連子文を施す。35は凸帯の上下にスタンプ文を施す。

36は鬼瓦である。眉・目・耳・鼻・口を立体的に造形し、顔面には部分的に赤彩を施した痕跡が残る。両目は穿孔を加えて中空状となり、眉は線刻で表現する。口には格子状の刻みを施して上下の歯を表現し、両端部には牙と思われる粘土材を充填する。頭部は背面側を削り把手を接合する。



第3-179図 06-SX287実測図 (1/30)



第3-180図 06-SX287出土遺物実測図(1/3)

37・38は軒丸瓦で、瓦当中央に右巻きの巴文と、その周囲に珠文を施す。巴文の尾部はそれぞれが繋がり圏線状となる。39～42は軒平瓦である。39は扇形の中心飾りの横に唐草文を施し、周囲には区画線を配する。41は唐草文の末端が途切れている。42は区画線内に連珠文を施す。珠文数は13である。43は雁振瓦で、上部に「×」状の線刻を施す。凹面には布目痕、凸面には縄目タタキが残る。44は面戸瓦である。

「×」状の
線刻
面戸瓦

45～47は土製品である。45は土錘で、側面周囲に溝を持つ。46は加工円盤で、ハケ目をもつ土師器の破片の周囲を磨き円形に成形する。47は有孔円板で穿孔の周囲に沈線を施し、背面にも1条の沈線がみられる。48～54は石製品で、48～50は砥石である。51は赤間石で、側面に鋸挽きの擦痕が残る。硯加工に伴う廃材であろう。52は軽石で、上面をフラットに切断している。上面に擦痕がみられ、平滑になっていることから砥石であろう。53は略円形の扁平な結晶片岩である。54は白色がかかった凝灰岩で、上部に凹みをもつ。

赤間石
軽石

06-SX237 (第3-177図)

銭貨集中ブ
ロック

1区のL63グリッドで検出した銭貨集中ブロックである。東西0.38m、南北0.50mの範囲に17点の銭貨がまとまりをもって出土したため、遺構として扱った。検出高は5.50m～5.53mである。銭貨は北宋銭が主体で、唐の開元通寶も含む。遺構の直接の年代は明かにできないが、IV期(15世紀中頃から後半)の溝06-SD221の埋没後の遺構であることから、IV期以降に位置づけられる。

06-SX237出土遺物(第3-178図)

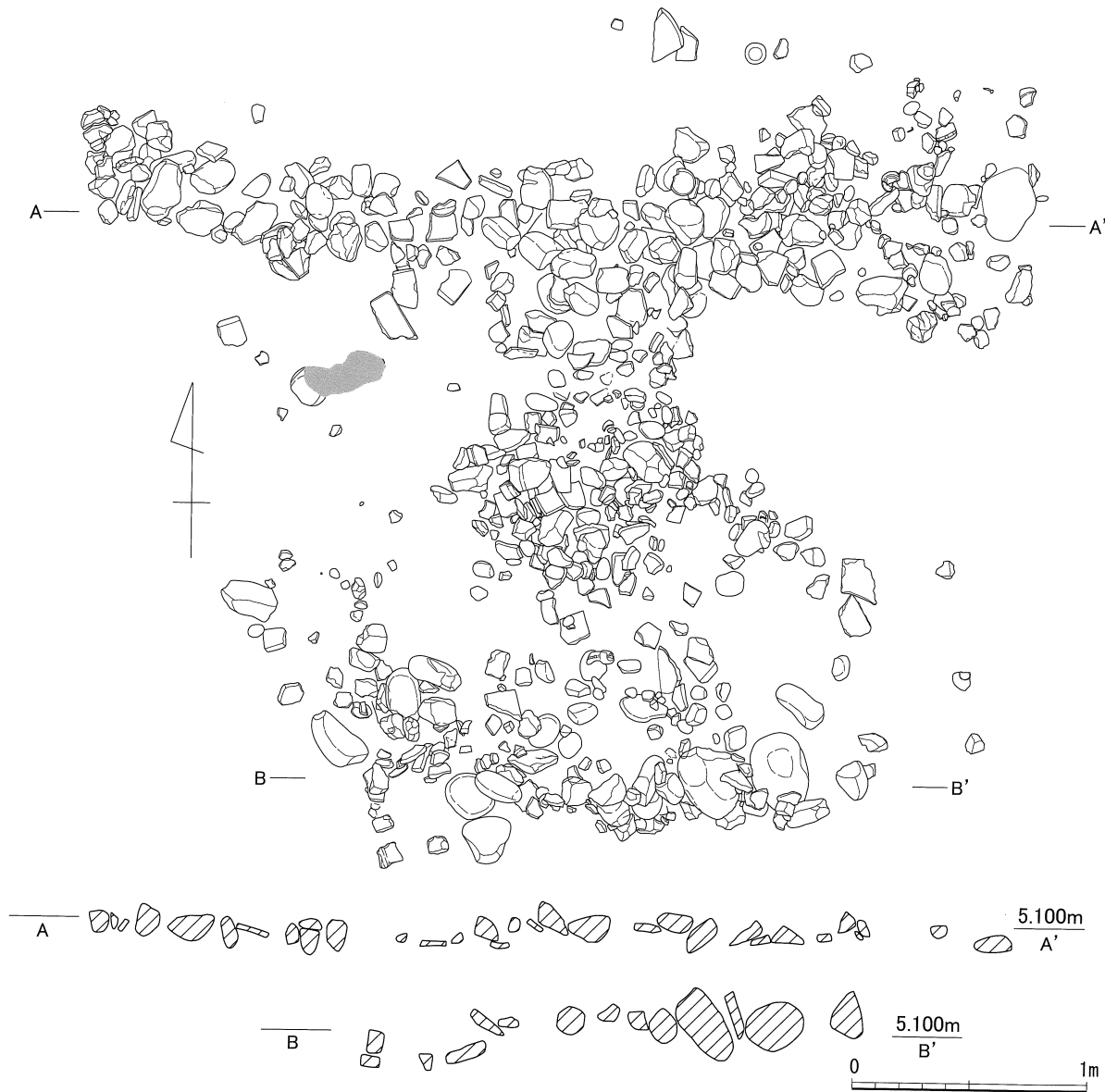
1・2は唐の開元通寶(621年初鑄)である。3～11は北宋銭で、3は銭文が不鮮明だが淳化元寶(990年初鑄)と判読できる。4は約半分を欠くが天聖元寶(1023年初鑄)と判断される。5は景祐元寶(1034年初鑄)、6は皇宋通寶(1038年初鑄)、7は熙寧元寶(1068年初鑄)、8は元豊通

寶(1078年初鑄)、9～11は元祐通寶(1086年初鑄)である。12は1字を欠くが元□通寶と判読でき、元豊通寶か元祐通寶のどちらかである可能性が高い。13は□□元寶と読めるが2字が不鮮明で錢種を明らかにできない。14は鏽のため錢種は不明である。15は小片で「寶」字以外を欠く。16は2点が固着したもので、1点は北宋の政和通寶(1111年初鑄)である。

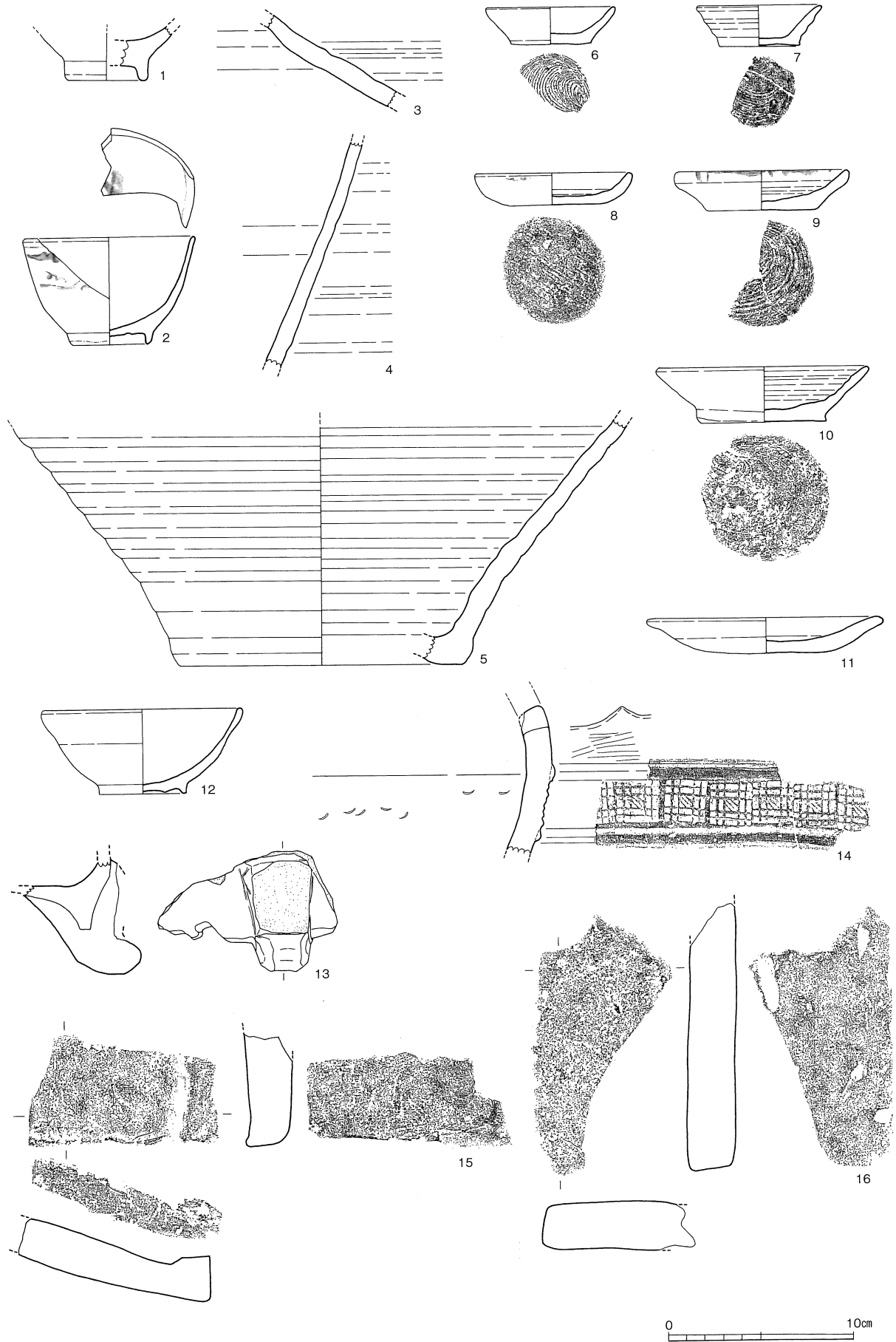
06-SX287 (第3-179図)

土師器の足鍋が伏せた状態で出土

1区のL62・L63・M62・M63グリッドで検出した遺物集中ブロックである。位置的には一部が06-SX309と重複するが、06-SX309よりも上位で検出している。東西約3.55m、南北約4.35mの範囲から磔や遺物がまとまって分布し、グリッド杭の北側からは土師器の足鍋が伏せた状態で出土した。遺構周囲を精査したが、掘り込みは確認できない。遺構の年代は06-SX309より新しく、Ⅶ期(16世紀末葉)に位置づける。



第3-181図 06-SX291実測図(1/30)



第3-182図 06-SX291出土遺物実測図(1/3)

06-SX287出土遺物 (第3-180図)

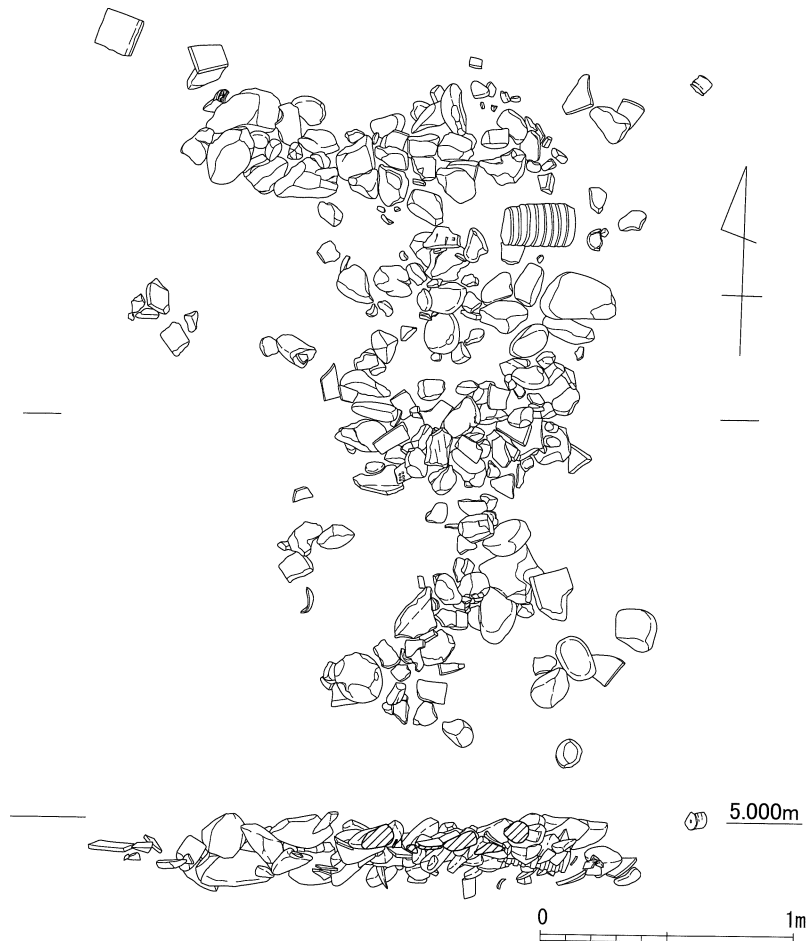
防長系脚付鍋 1は白磁皿であり。2は土師器の土鍋で、胴部に3つの脚がつく防長系脚付鍋である。内外面ともハケ調整を施し、底面にはタタキ目が残る。3は瓦質土器の火鉢で、口縁部下にスタンプ文を施す。

06-SX291 (第3-181図)

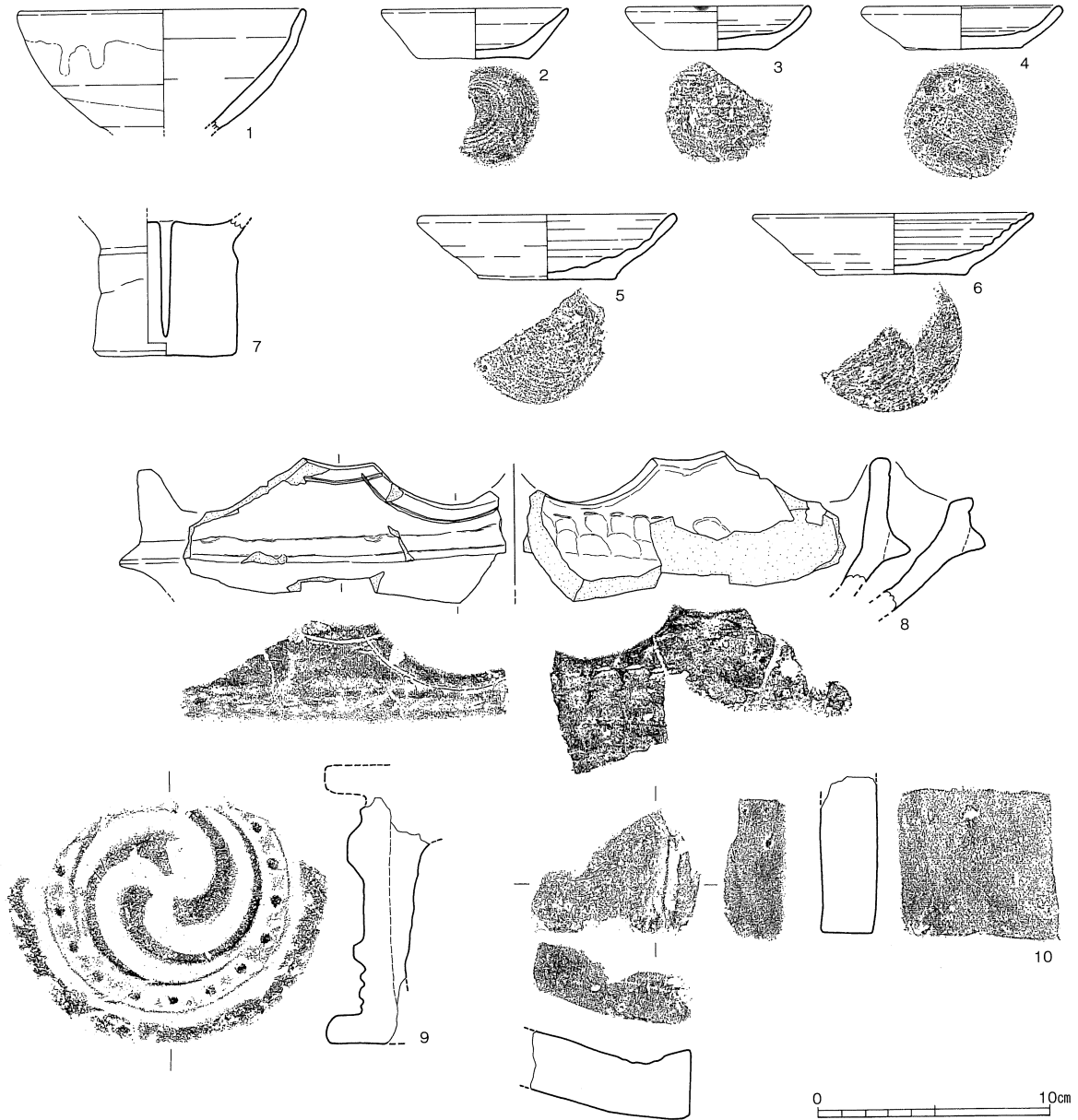
漆喰面を持つ壁土
炭化した粉

火災処理に伴う遺構

1区のM62・M63グリッドで検出した集石である。土坑06-SK249と一部重複する位置にあるが、06-SK249完掘後に検出している。東西4.14m、南北3.69mの範囲に礫や遺物が集中しており、特に北側は東西方向に礫が密集している。中央部はやや括れ、南側は少し東西に開く形状を呈する。中央部ではやや小振りの礫が多い。周囲を精査したが、掘り込みは確認できなかった。南西端部を中心に壁土がまとまって出土しており、その中には白色の漆喰面を持つ壁土のものもある。また、二次焼成を受けた遺物や炭化物が多く、中には炭化した粉の出土も認められた(第3分冊図版26)。加えて、遺物には06-SK248や06-SK249、06-SK131と接合関係が認められるものもある。06-SK248・06-SK249は火災処理土坑と考えられるもので、本遺構もそれらと同じ火災処理に伴う遺構の可能性が高い。大型の廃棄土坑06-SK131の窪地を埋めるためにまず不要な瓦礫を廃棄し、その後に06-SK249が構築されたものと考えられる。以上の点からⅦ期(16世紀末葉)に位置づける。



第3-183図 06-SX309実測図(1/30)



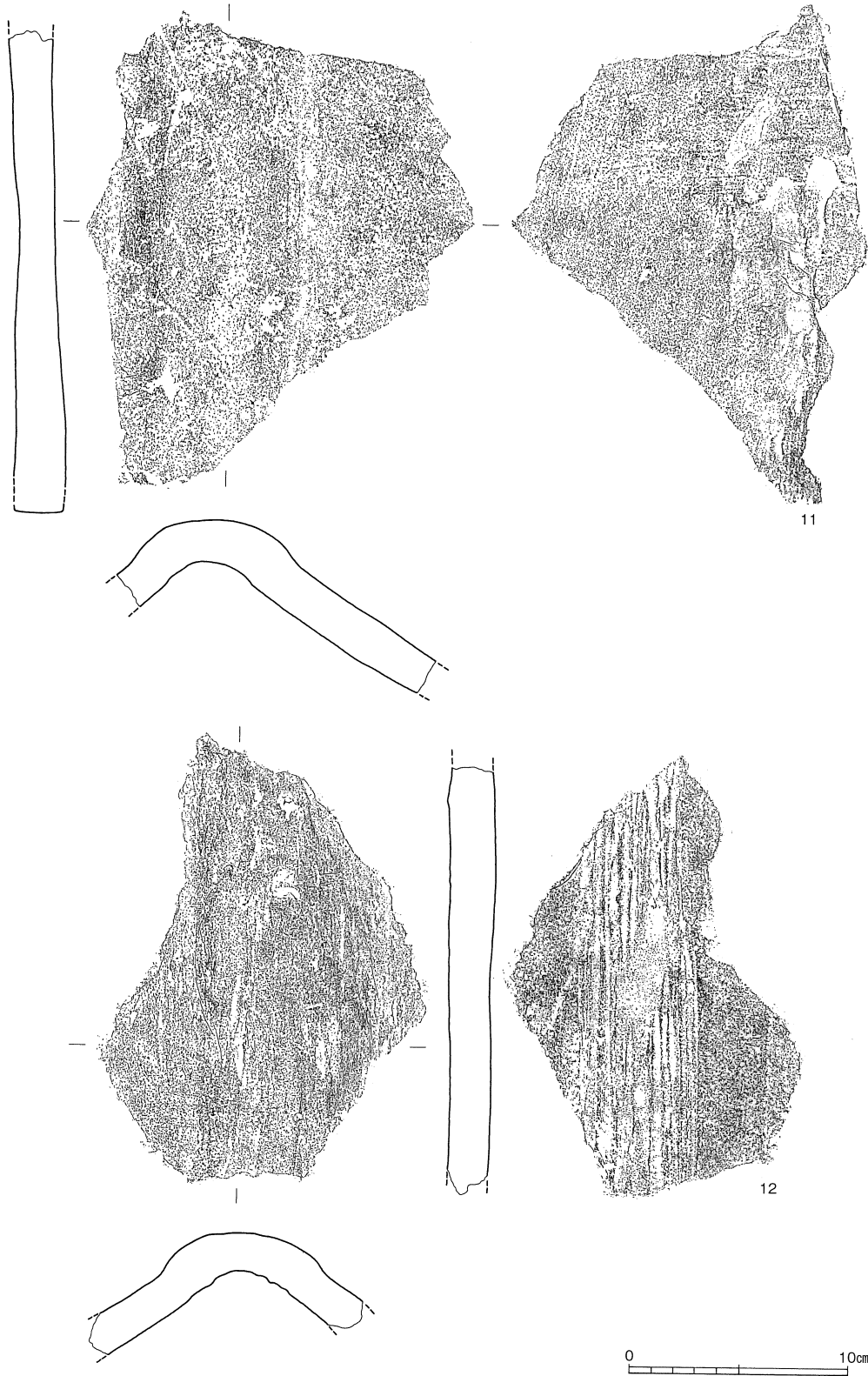
第3-184図 06-SX309出土遺物実測図①(1/3)

06-SX291出土遺物 (第3-182図)

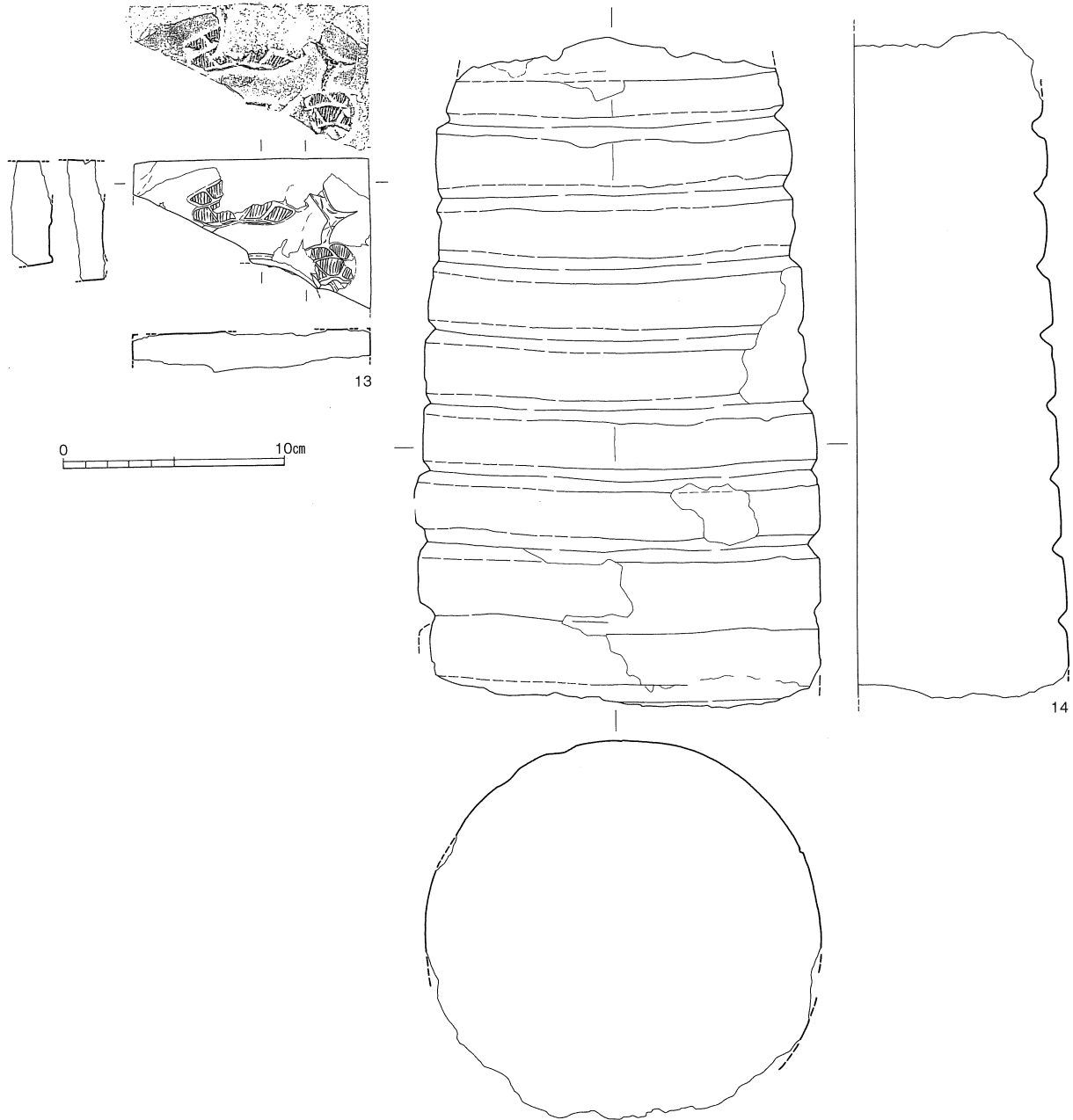
漳州窯の青花碗
コンテナ容器

二次焼成

1は青磁碗、2は漳州窯の青花碗である。3～5は産地不明の施釉陶器壺で、同一個体と考えられる。中国南部産でコンテナ容器として使用されたものであろう。4は06-SK248と06-SD221、5は06-SK248・06-SK249・06-SK131出土の破片とそれぞれ接合する。6・7は土師器小皿で、7は外面にロクロ整形による段が巡る。7は全体に二次焼成を受けている。8は黄白色を呈する土師器皿、9・10は内面にロクロ整形による多条の沈線をもつ土師器皿である。11は京都系土師器皿で、器壁は厚い。12は瓦質土器の椀である。13は瓦質土器の火鉢の底部で、脚部の先端は強く外反する。14は瓦質土器の風炉で、凸帯内にスタンプ文を施す。06-SK131出土の破片と接合関係が認められる。15は雁振瓦で、二次焼成を受けている。16は埴で、二次焼成を受け、全体に摩滅している。



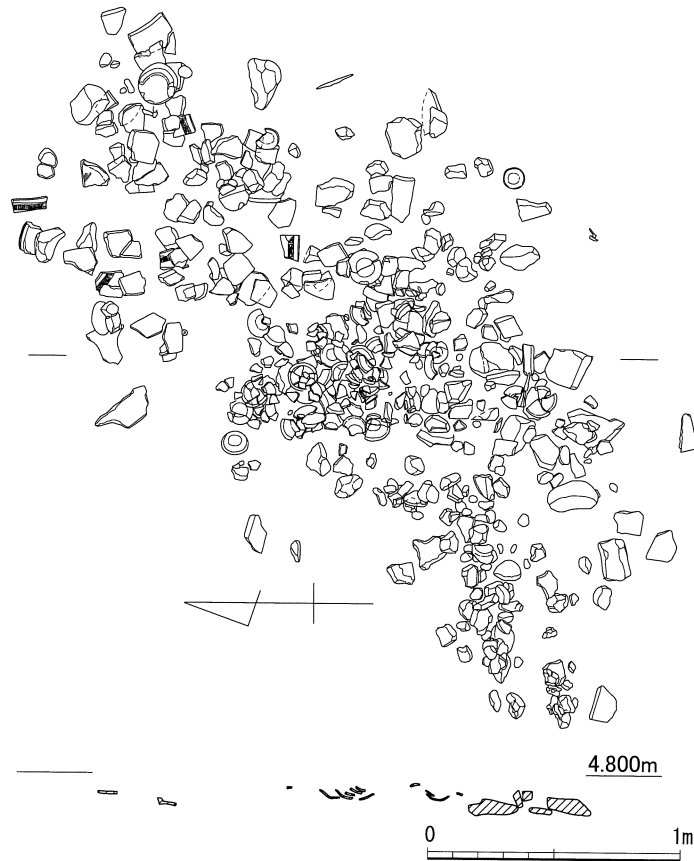
第3-185図 06-SX309出土遺物実測図② (1/3)



第3-186図 06-SX309出土遺物実測図③ (1/3)

06-SX309 (第3-183図)

石塔部材
 1区のL62・M62グリッドで検出した集石である。溝06-SD302Bと重複するが、06-SD302B埋没後に形成された遺構である、また、この上位には06-SX287が位置している。東西2.46m、南北約3.0mの範囲に礫や瓦・土器・石塔部材等の遺物が密集して出土した。その周囲を精査したがm掘り込みは確認できなかった。16世紀前半の土師器皿が比較的出土しているが、VI期（16世紀後半）の溝06-SD302Bより新しい遺構であることから、VI期～VII期（16世紀後葉～末葉）に位置づける。



第3-187図 06-SX310実測図 (1/30)

06-SX309出土遺物 (第3-184～3-186図)

中国産の天目碗

1は中国産の天目碗である。全体に二次焼成を受け、黒くくすんでいる。2～6は在地の土師器皿で、3～6は内面にロク口整形による多条の沈線が巡る。4・6は二次焼成を受け、5は全体が煤けて黒変する。7は土師器の燭台で、見込みに芯棒を入れるための穴を穿つ。8は瓦質土器であるが器種不明である。波状口縁を呈し、口縁に沿って1条の細沈線を施す。頸部には凸帯を貼り付ける。頸部内面には成形の指頭圧痕が見られ、その上に爪痕が残る。同様のものが06-SK248と06-SK268から出土している。9は軒丸瓦で、瓦当中央に右巻きの巴文とその周囲に珠文を施す。

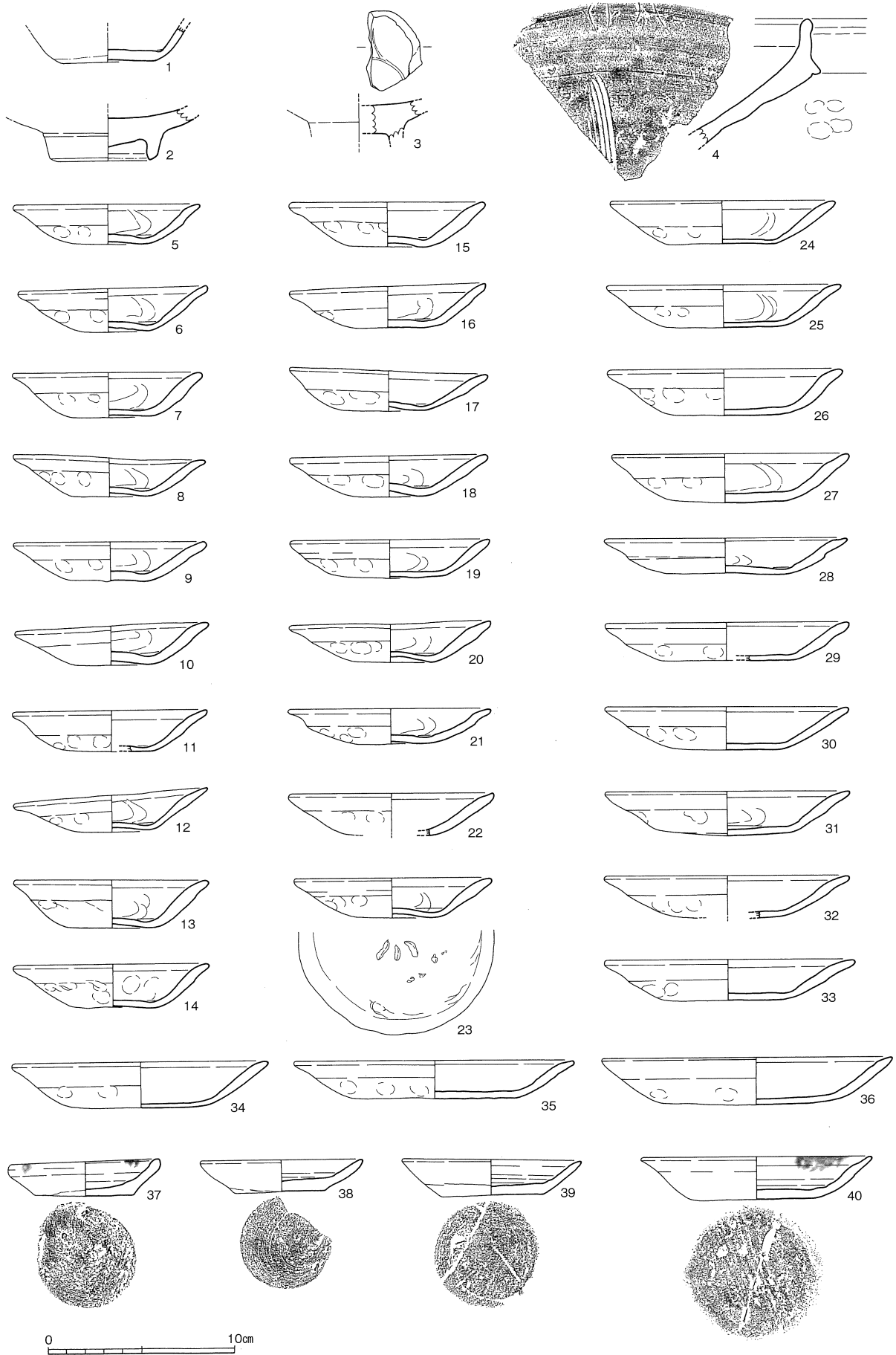
赤間石製の硯松樹文

10～12は雁振瓦で、10は二次焼成を受ける。13は赤間石製の硯で、上端部に松樹文を陽刻する。14は凝灰岩製の石塔部材で、宝塔ないし宝篋印塔の相輪である。

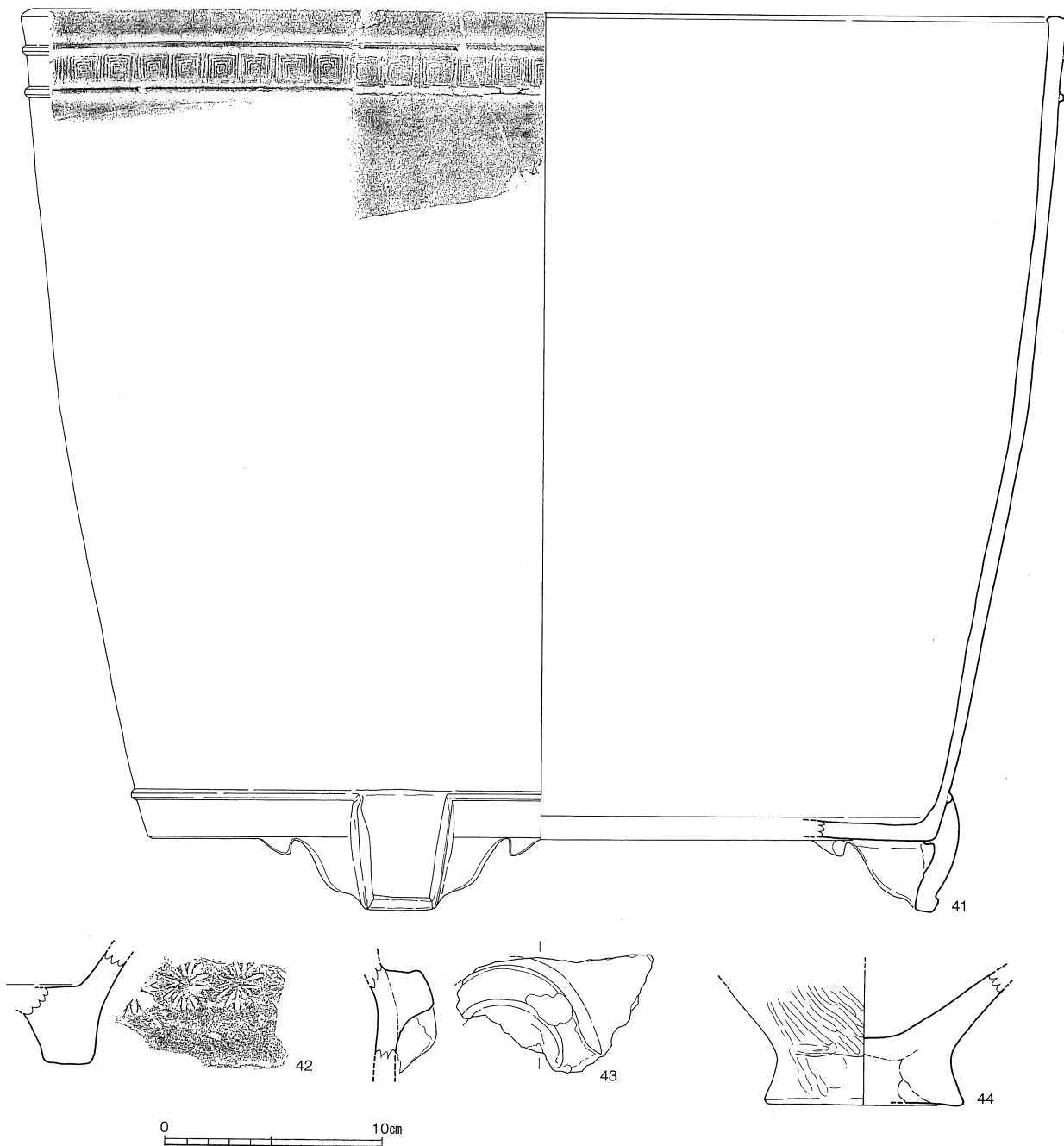
06-SX310 (第3-187図)

京都系土師器皿の一括廃棄

1区のM62グリッドで検出した集石及び遺物集中ブロックである。遺物等の分布範囲は東西2.84m、南北2.71mで、検出高は4.85mである。周囲を精査したが、掘り込みは確認できない。06-SD302の終端部にほぼ重なるが、それよりも上位に位置する。本遺構の最大の特徴は、中央付近で京都系土師器皿の一括廃棄が認められる点である。出土する京都系土師器皿は薄手で1期に編年されるものが主体を占める。また、瓦質土器や瓦、銭貨等も出土している。遺構の年代はⅥ～Ⅶ期(16世紀後葉～末葉)である。



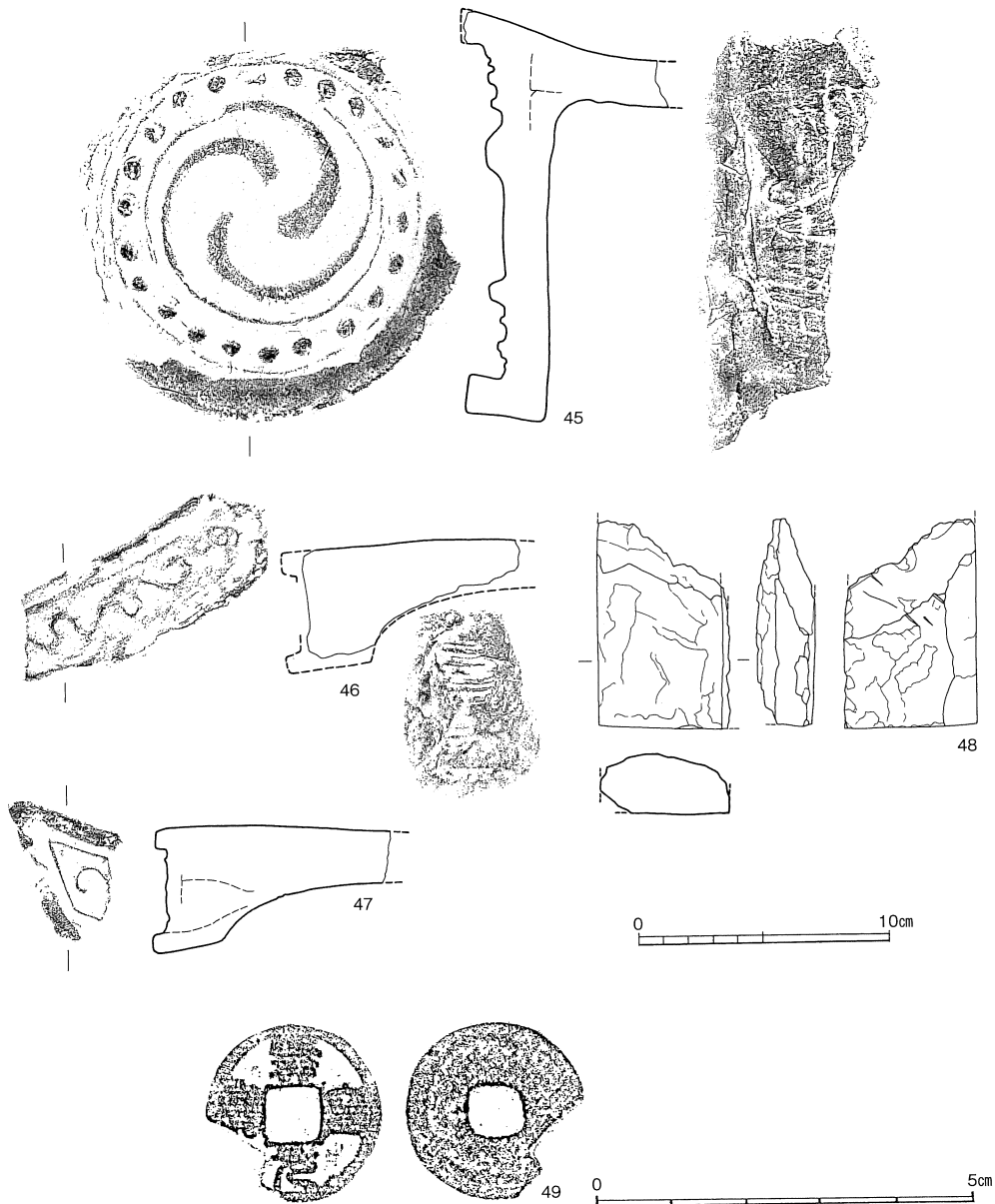
第3-188図 06-SX310出土遺物実測図①(1/3)



第3-189図 06-SX310出土遺物実測図② (1/3)

06-SX310出土遺物 (第3-188 ~ 3-190図)

1は白磁皿の底部である。2・3は青磁碗の底部で、3は見込に印花文を施す。4は備前焼摺鉢で、口縁部は上方に長く延びる。5～36は京都系土師器皿である。23は底面に整形時の指頭痕が残る。34～36は口径の大きい一群で、口径13～16cmを測る。37～40は内面にロクロ整形による多条の沈線が巡る土師器皿である。38・40は淡黄白色の胎土で、ロクロ目が少ないことから最終段階のものと考えられる。41は瓦質土器の深鉢形火鉢で、口縁下の凸帯間にスタンプ文を施し、底部には脚が付く。42は瓦質土器火鉢の底部で、外面に菊花状スタンプ文を施す。43は器種不明の土師器ないし瓦質土器で、外面には把手と思われる弧状の突起を持つ。44は弥生土器の壺の底部である。45は軒丸瓦で、瓦当面の圏線内に右巻きの巴文と珠文を配する。46・47は瓦当面に唐草文を施



第3-190図 06-SX310出土遺物実測図③ (1/3・1/1)

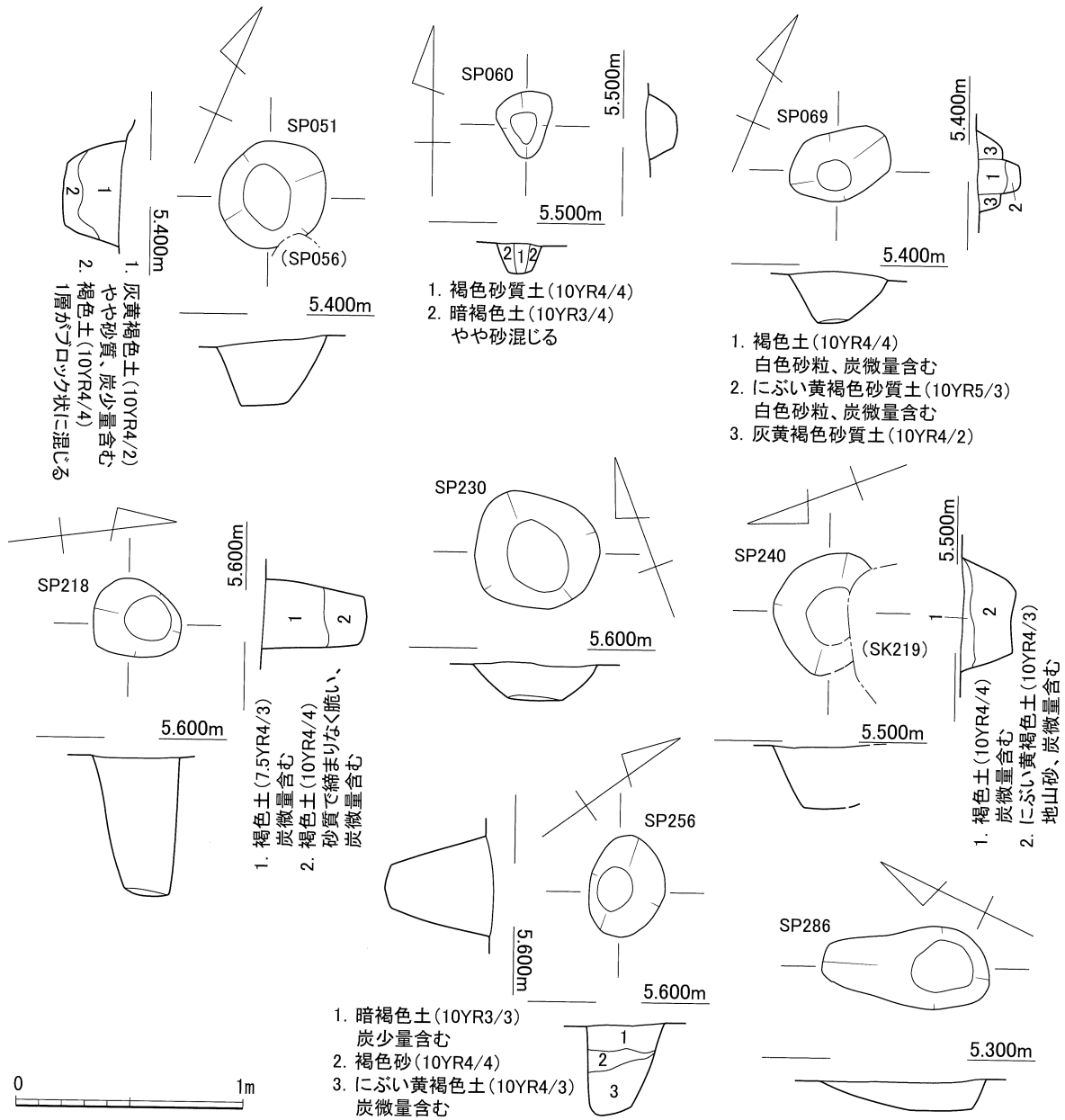
す軒平瓦で、46は摩滅が著しい。48は赤間石で硯の未成品であろう。49は北宋の熙寧元寶（1068年初鑄）である。

7. 柱穴遺構

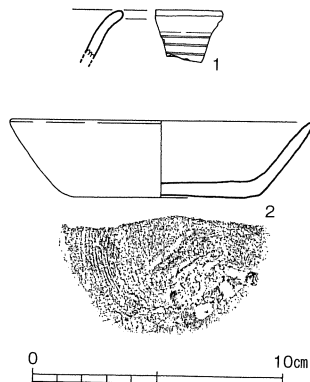
柱穴遺構のうち、図示した遺物が出土したもの、埋土が複数層に分層できるものを中心に第3-191図に掲載した。

柱穴遺構出土遺物（第3-192図）

1は1区の06-SP230から出土した青磁碗の細片である。2は1区の06-SP286から出土した土師器坏で、底面に回転糸切り痕が残る。



第3-191図 06-柱穴遺構実測図 (1/30)



第3-192図 06-柱穴遺構出土遺物実測図 (1/3)

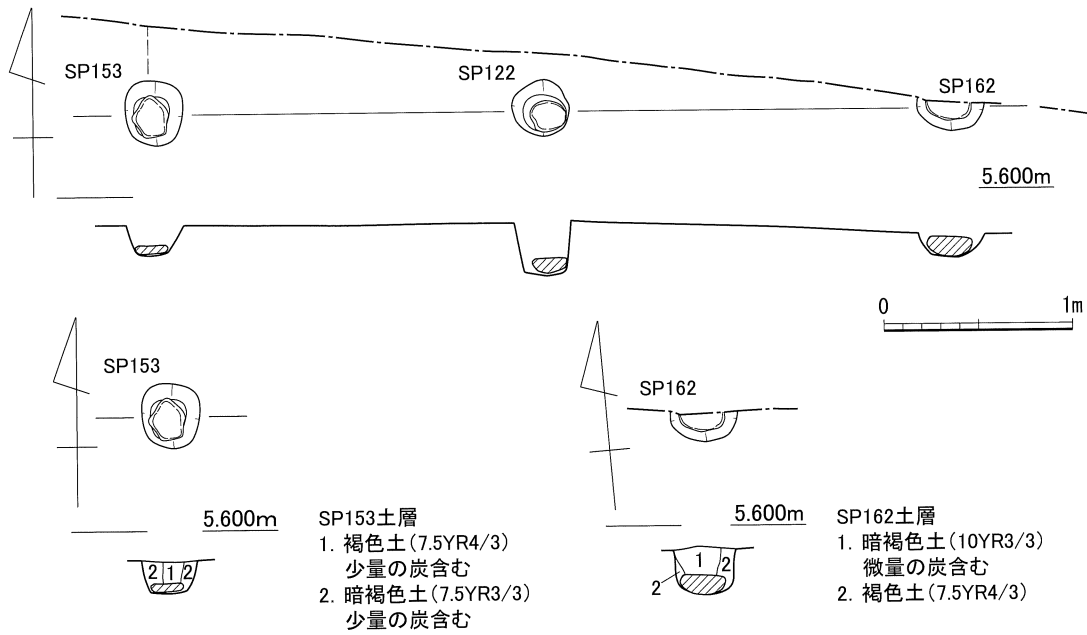
第5節 中世面下層の遺構

中世遺構面の下面としたものは、主に第4層及び5層を除去した後、地山砂層上面で検出した遺構で、遺構の切り合い関係等から主に14～15世紀代に位置づけられるものを扱う。遺構としては掘立柱建物、柵列、土坑、溝、井戸、土坑墓、遺物集中ブロック、柱穴がある。土坑には瓦の一括廃棄土坑や大型の廃棄土坑、溝には区画性の強いものがあり、夥しい量の遺物が出土している。また、土坑墓は主に2区のL61グリッドで密集して構築されている。

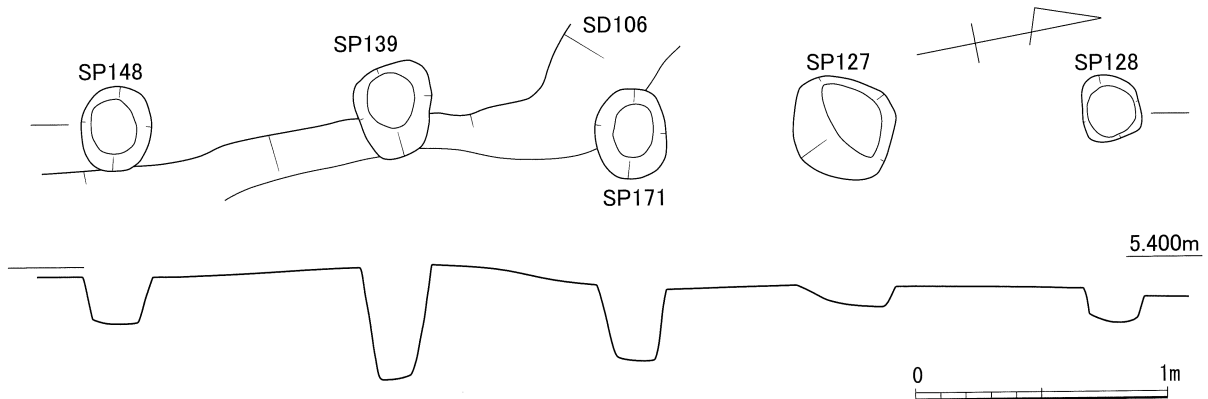
1. 掘立柱建物

06-SB002 (第3-193図)

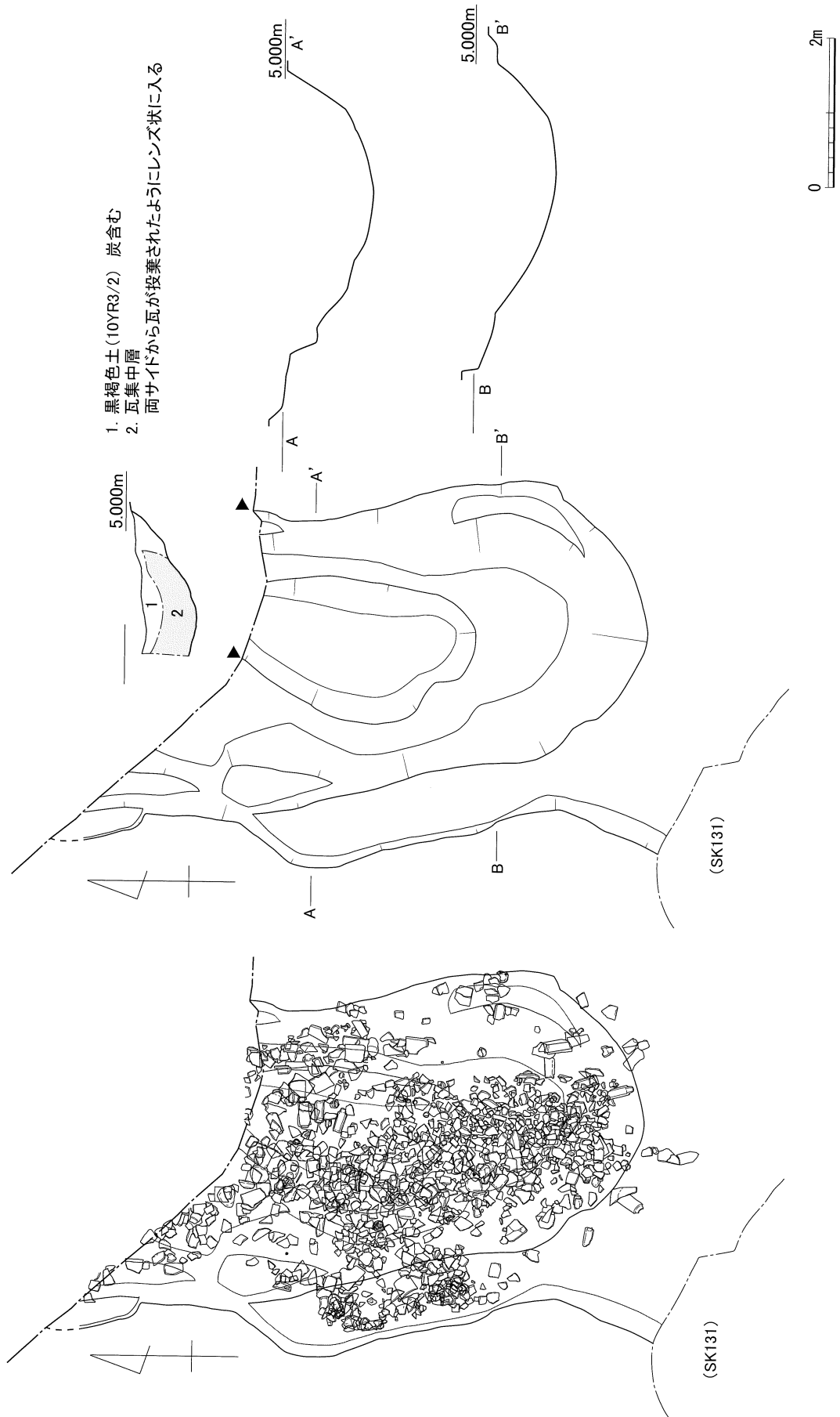
掘立柱建物 2区の北端、N60・O60グリッドで検出した掘立柱建物で、建物を構成する柱穴は06-SP122・
礎盤石 06-SP153・06-SP162である。各柱穴とも内部に礎盤石を据えている。南辺の一部を検出しただけで、大部分は調査区外に続くため全体の規模は明らかにできない。柱穴間の距離は2.12mを測り、
7尺
7尺と考えられる。この軸線はN-89.5°-Eで、南北軸はほぼ真北にとる。出土遺物がほとんどなく
詳細な時期は明らかにできないが、第5層の下で検出された遺構である。第5層は遺物が少ない
が、V期(16世紀前半)以降の遺物が見られない。従ってそれ以前の遺構と考えられる。



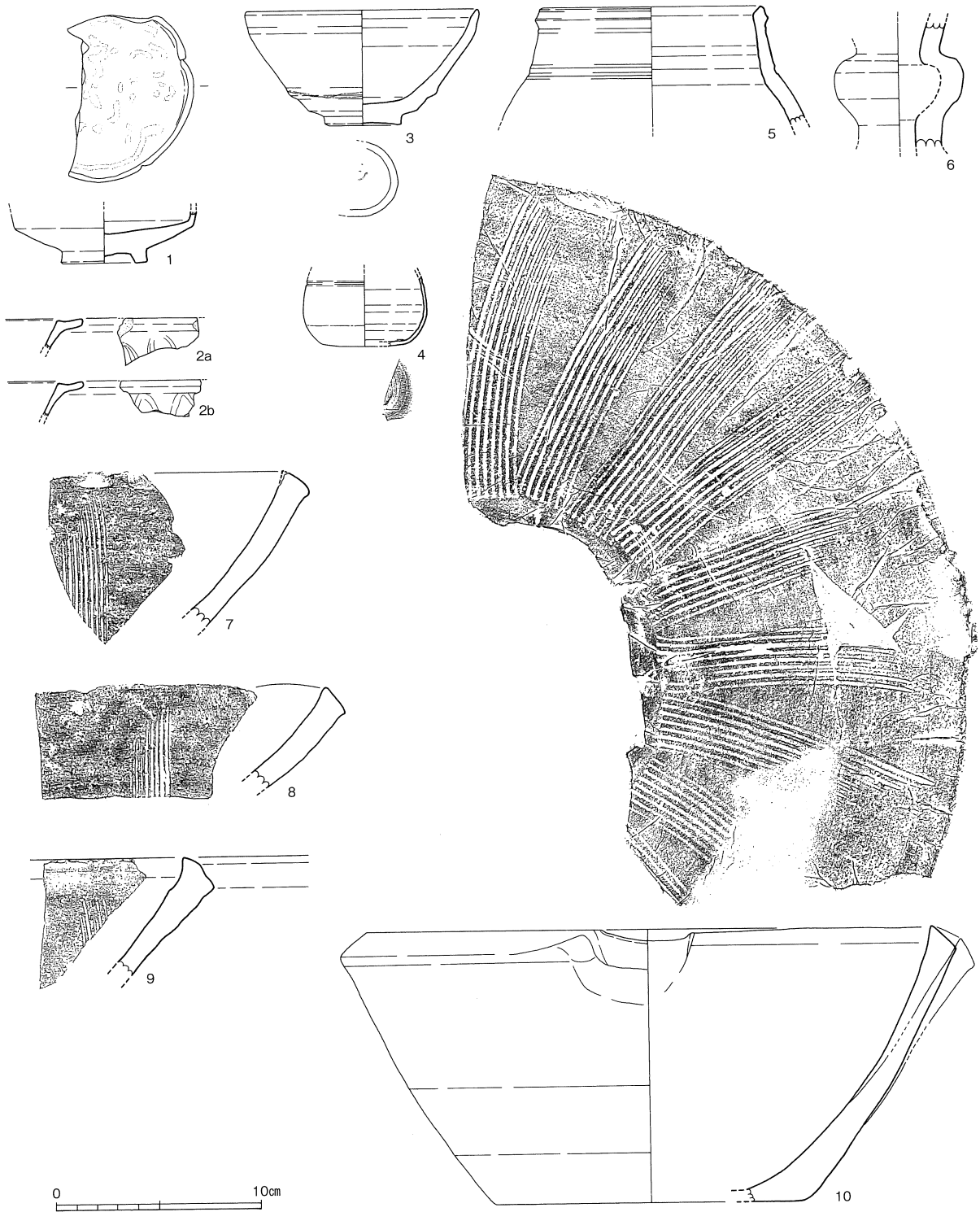
第3-193図 06-SB002実測図 (1/40)



第3-194図 06-SA01実測図 (1/30)



第3-195図 06-SK097実測図(1/80)



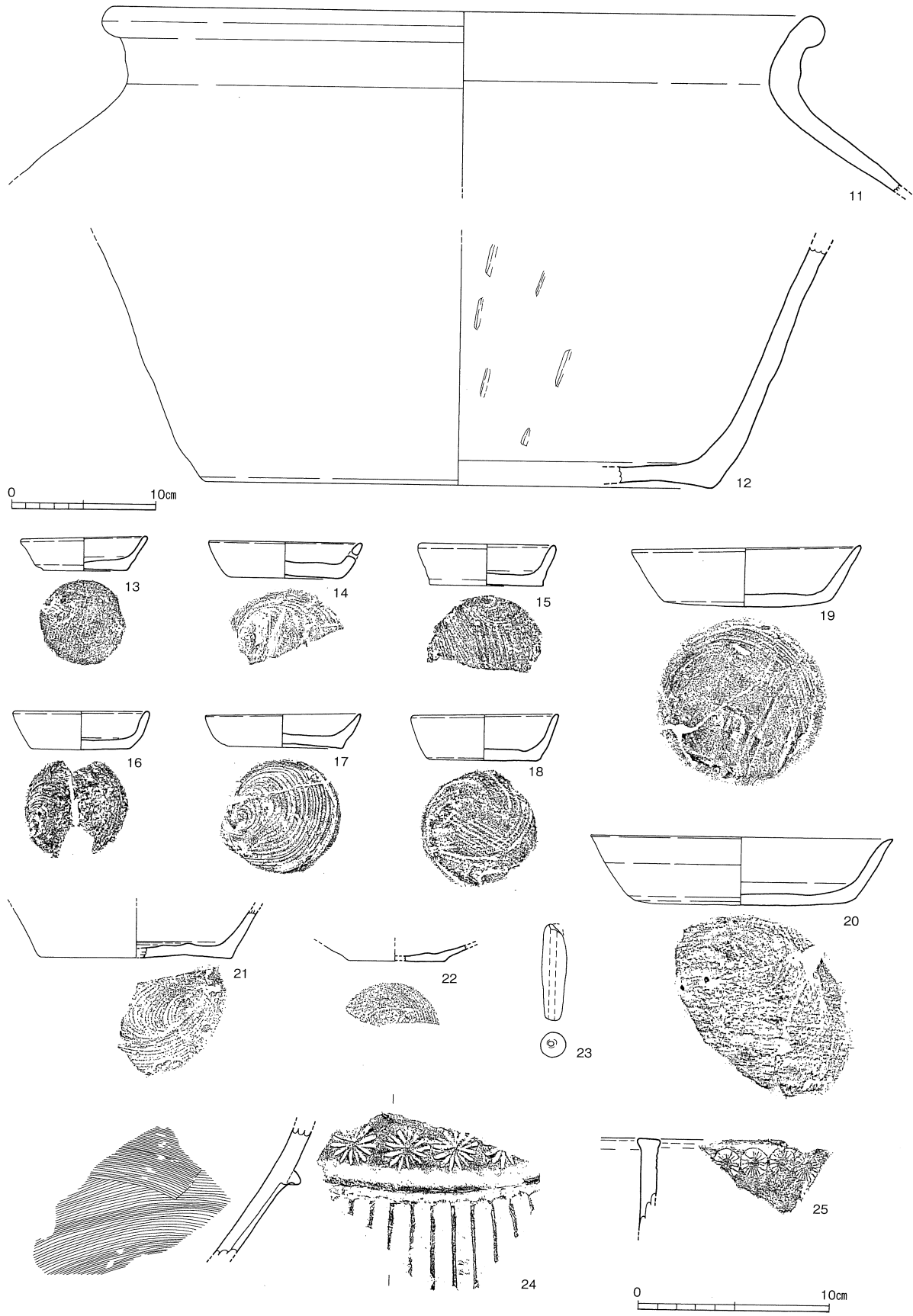
第3-196図 06-SK097出土遺物実測図①(1/3)

2. 柵列

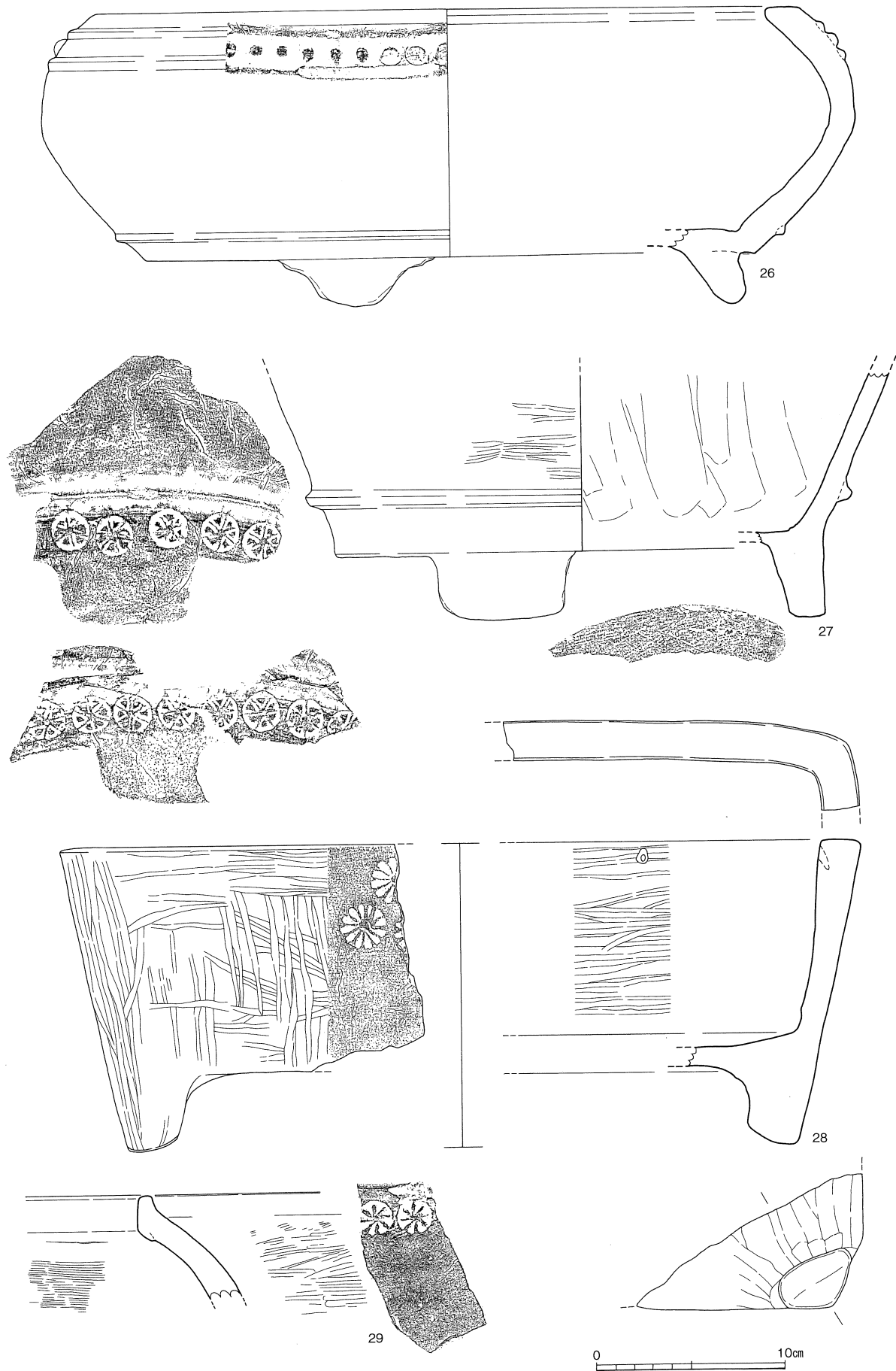
06-SA001 (第3-194図)

柵列

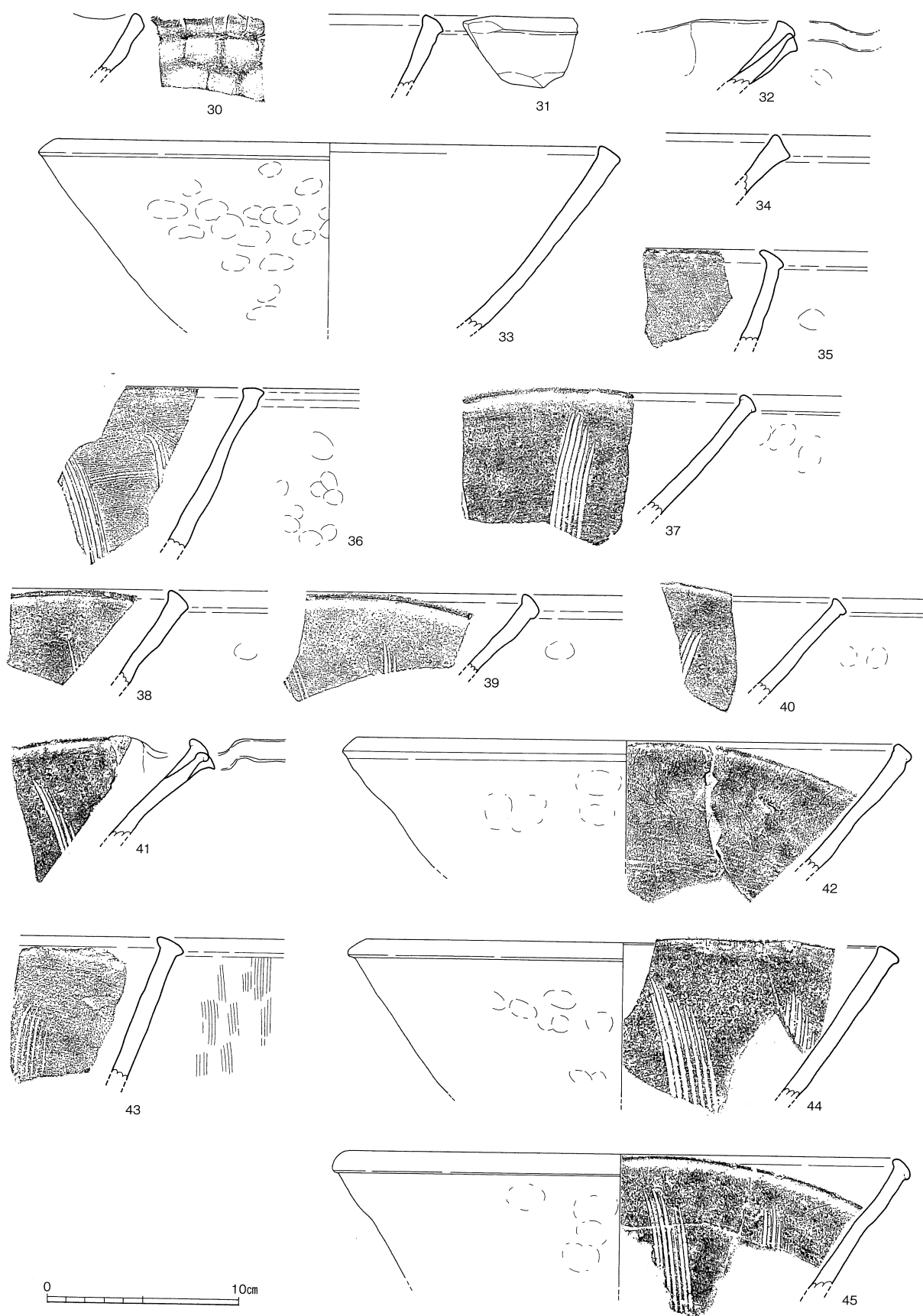
2区のN61グリッドで検出したもので、5基の柱穴の並びがあることから柵列としたものである。構成する柱穴は06-SP127・06-SP128・06-SP139・06-SP148・06-SP171で、いずれも溝06-SD106に切られている。柱穴間の距離は約0.9～1.1mを測り、軸線はN-11°-Eで東に振れる。遺物の出土がなく詳細な時期は明らかにできないが、06-SD106からは14世紀代の土師器が出土しており、I～II期(14世紀前半～末)の遺構の可能性はある。



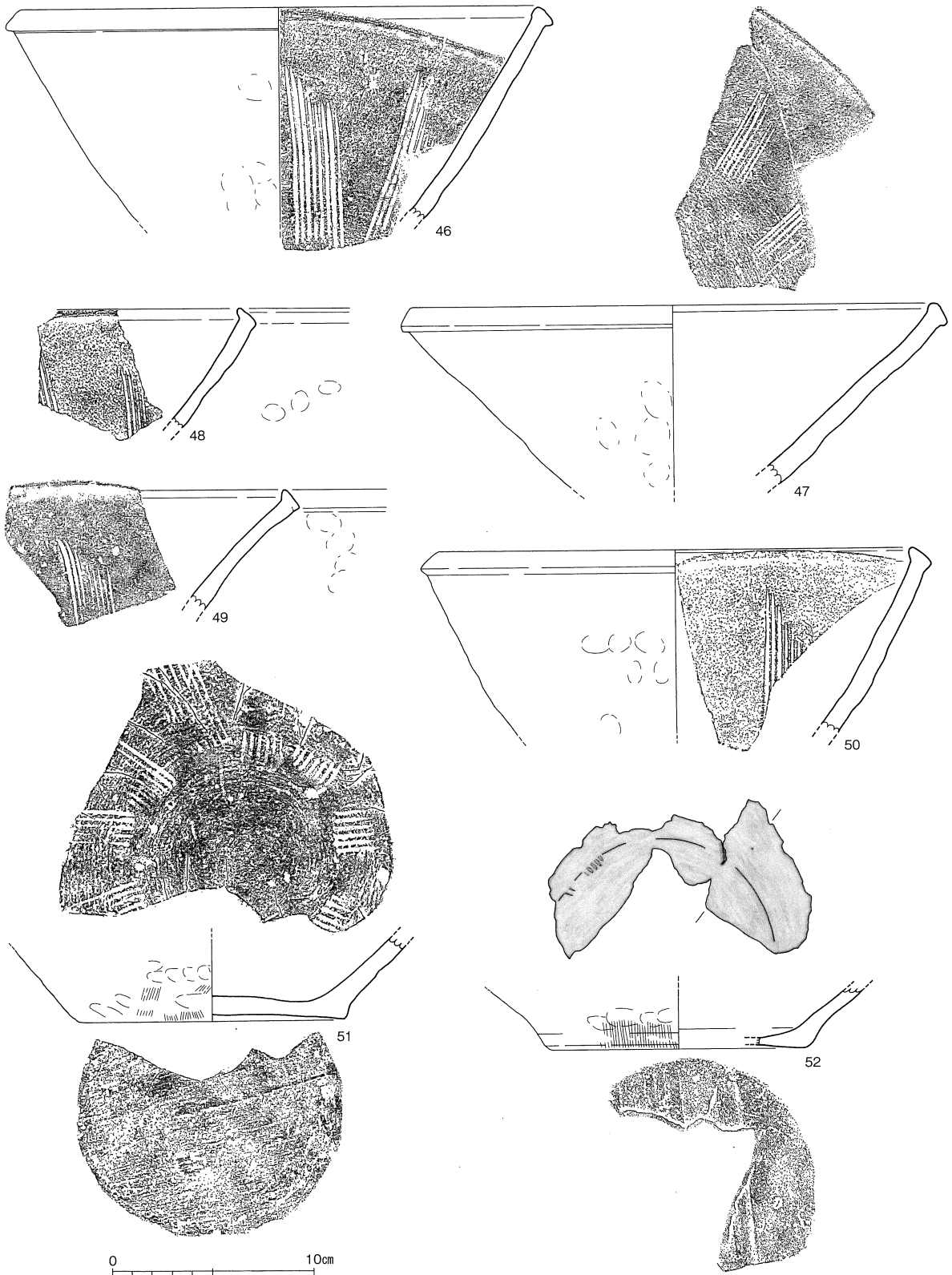
第3-197图 06-SK097出土遺物実測図② (1/3)



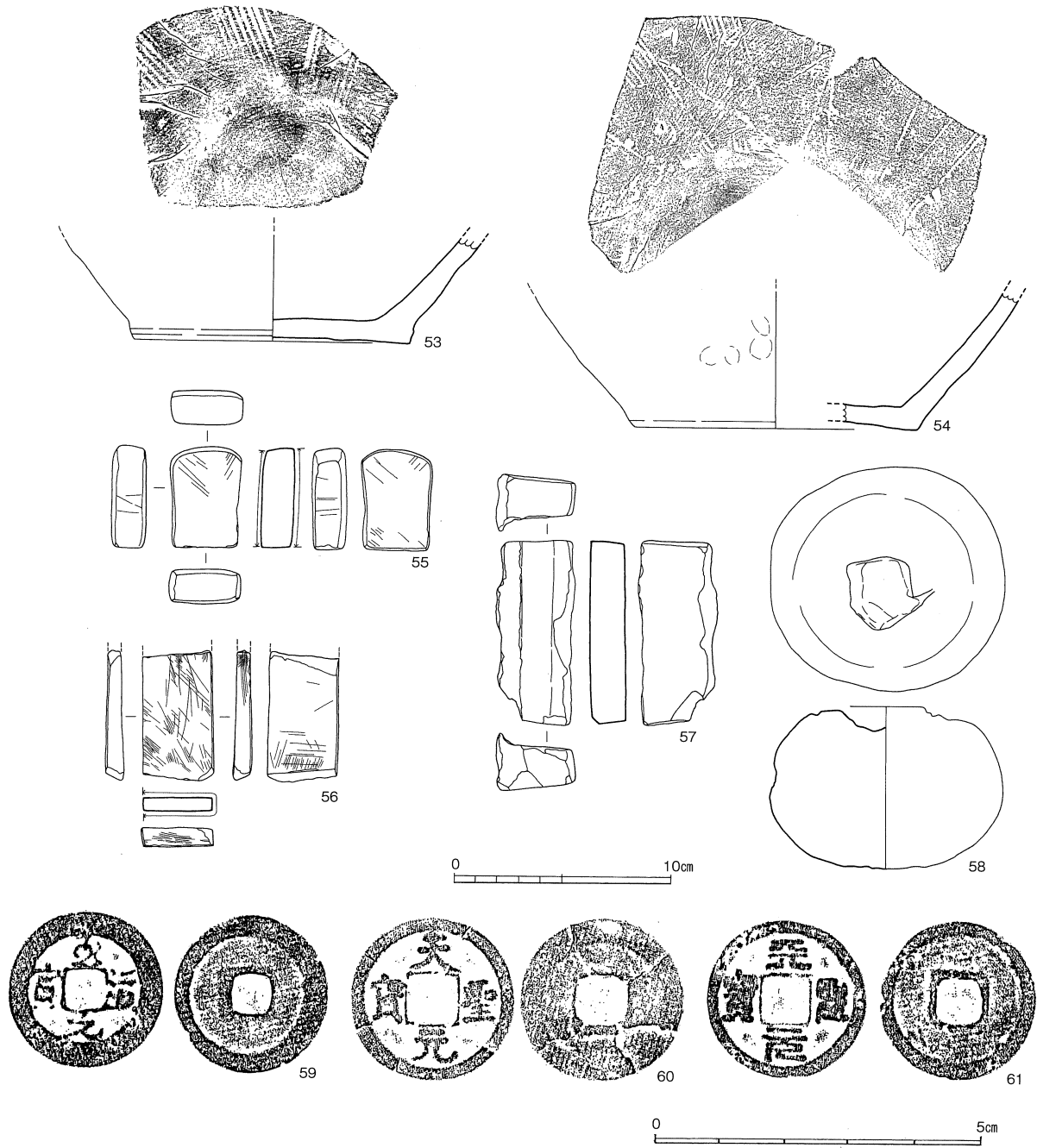
第3-198図 06-SK097出土遺物実測図③ (1/3)



第3-199図 06-SK097出土遺物実測図④(1/3)



第3-200図 06-SK097出土遺物実測図⑤ (1/3)



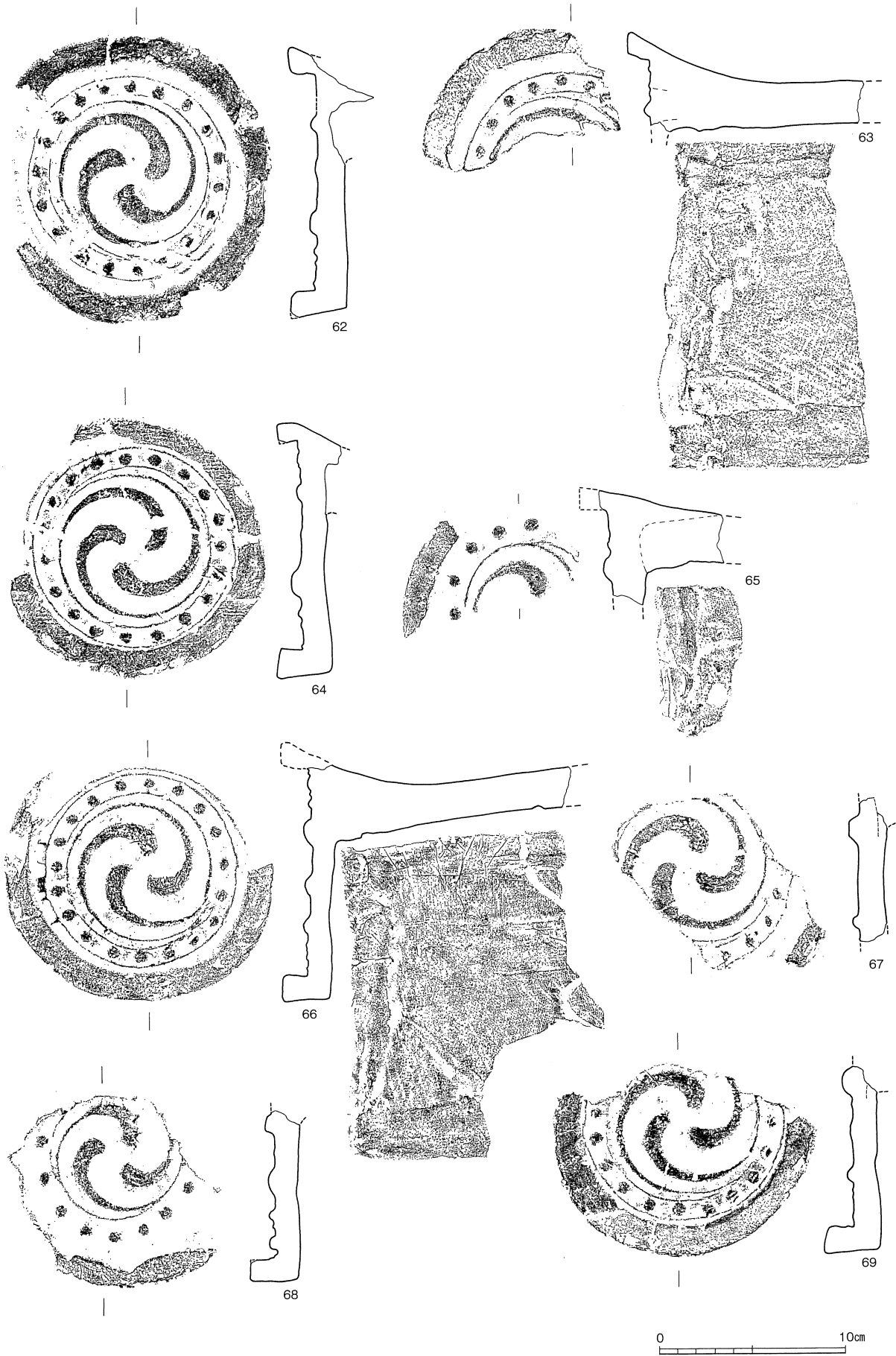
第3-201図 06-SK097出土遺物実測図⑥ (1/3・1/1)

3. 土坑

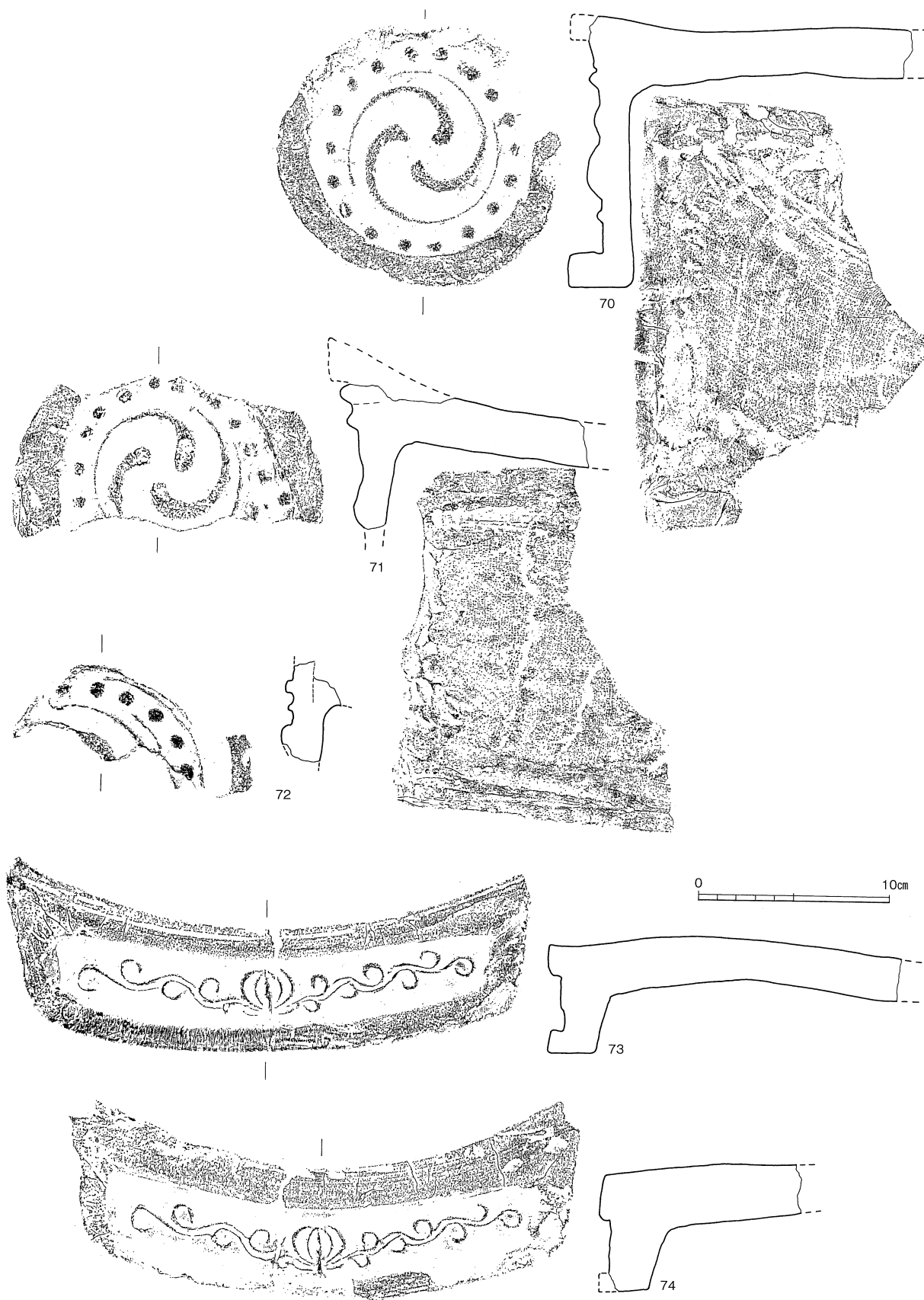
06-SK097 (第3-195図)

2区のM60・M61グリッドで検出した土坑である。北側が調査区外に続くため全体の規模は明らかにできないが、長辺約9.2m以上、短辺約4.7m、深さ約1.5mを測る。溝06-SD117と重複しており、06-SK097が06-SD117を切っている。本遺構の最大の特徴は瓦が大量に出土している点で、土坑の中位から下位にかけてレンズ状に堆積している。中には被熱で赤変した瓦も含むことから、火災により不要となった瓦礫を処分した火災処理土坑と考えられる。瓦の他に陶磁器や土師器、瓦質土器、石製品、銭貨があり、中には枢府系白磁碗や中国産天目碗、茶入、古瀬戸華瓶等、稀少な遺物も含む。遺構の年代はIV期（15世紀中頃～後半）に位置づける。

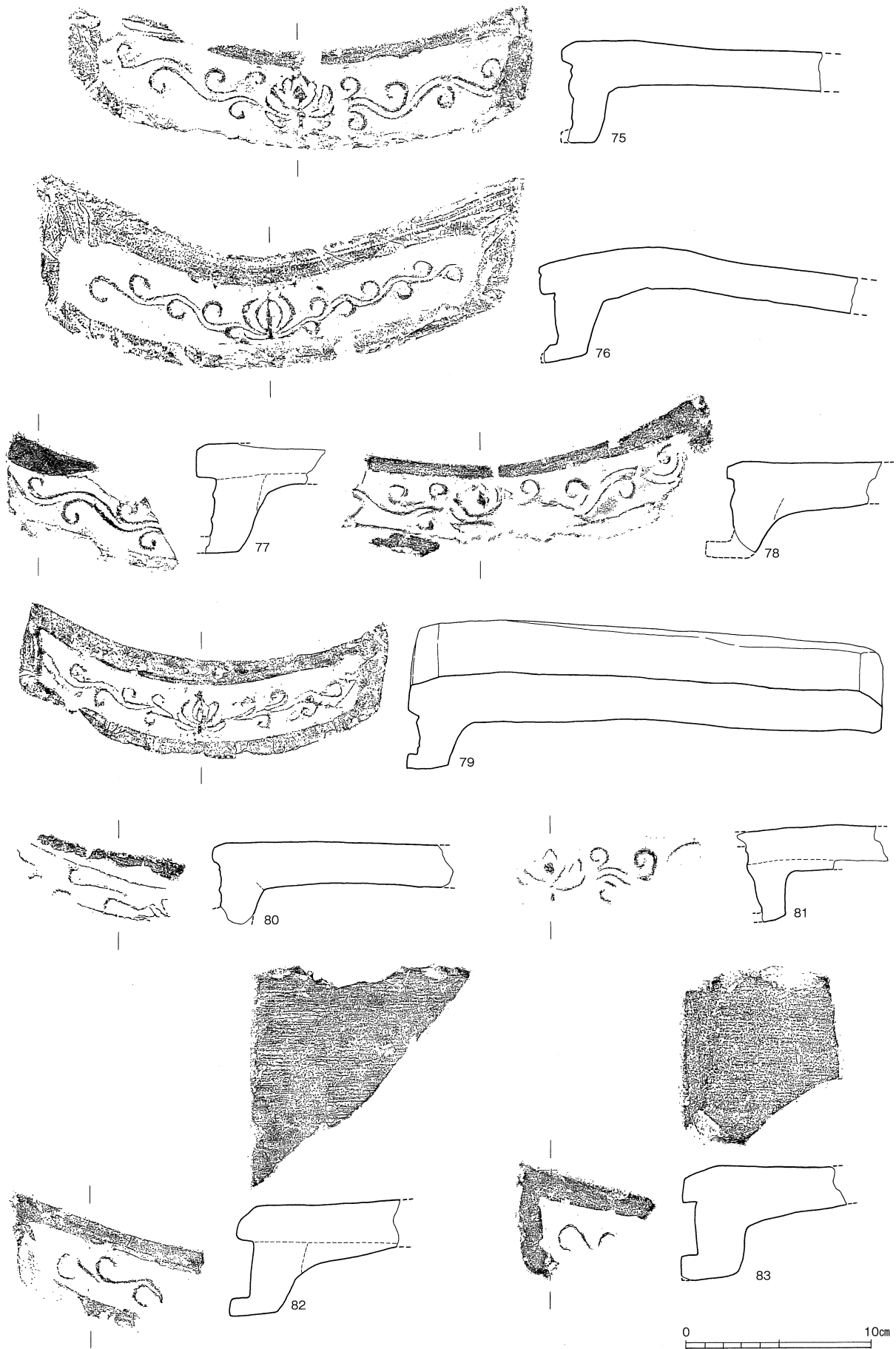
瓦が大量に出土
被熱で赤変した瓦
火災処理土坑



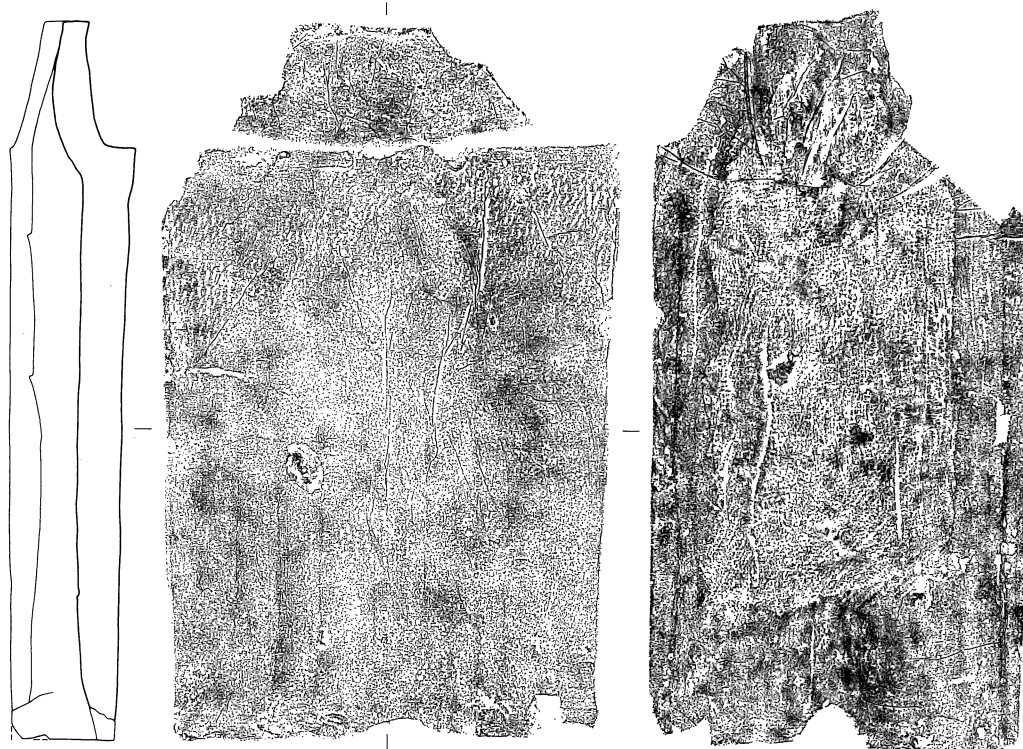
第3-202図 06-SK097出土遺物実測図⑦(1/3)



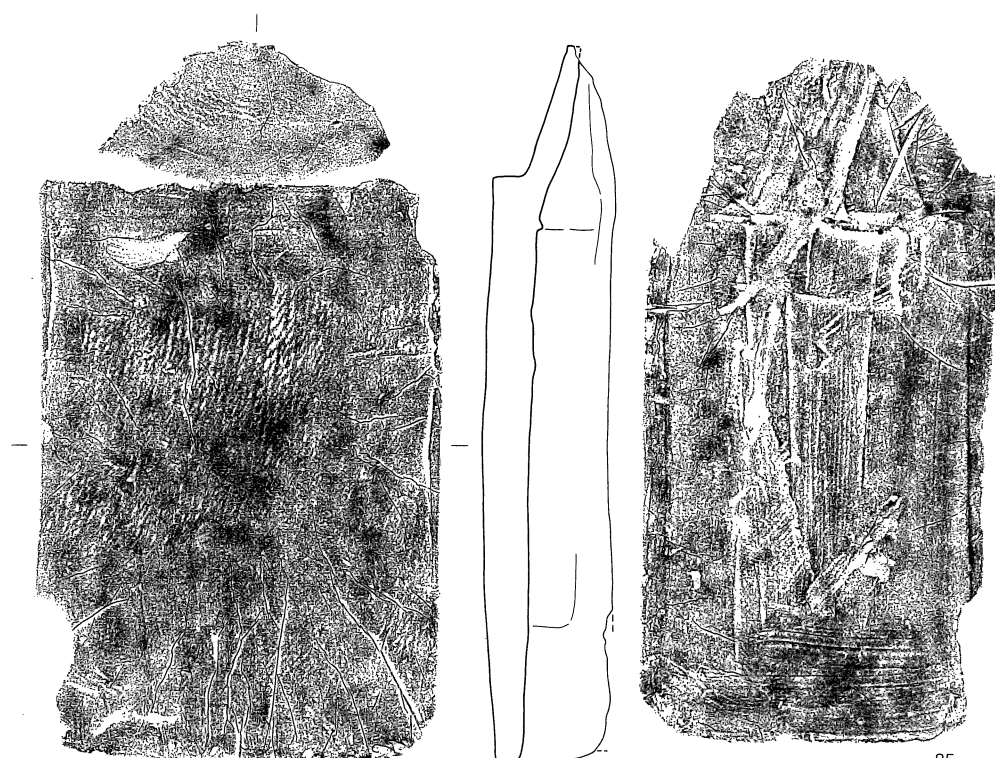
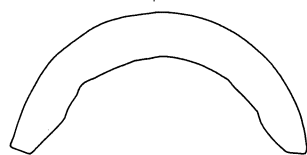
第3-203図 06-SK097出土遺物実測図⑧ (1/3)



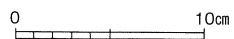
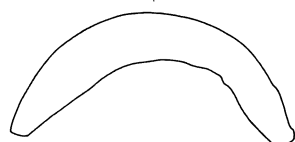
第3-204図 06-SK097出土遺物実測図⑨ (1/3)



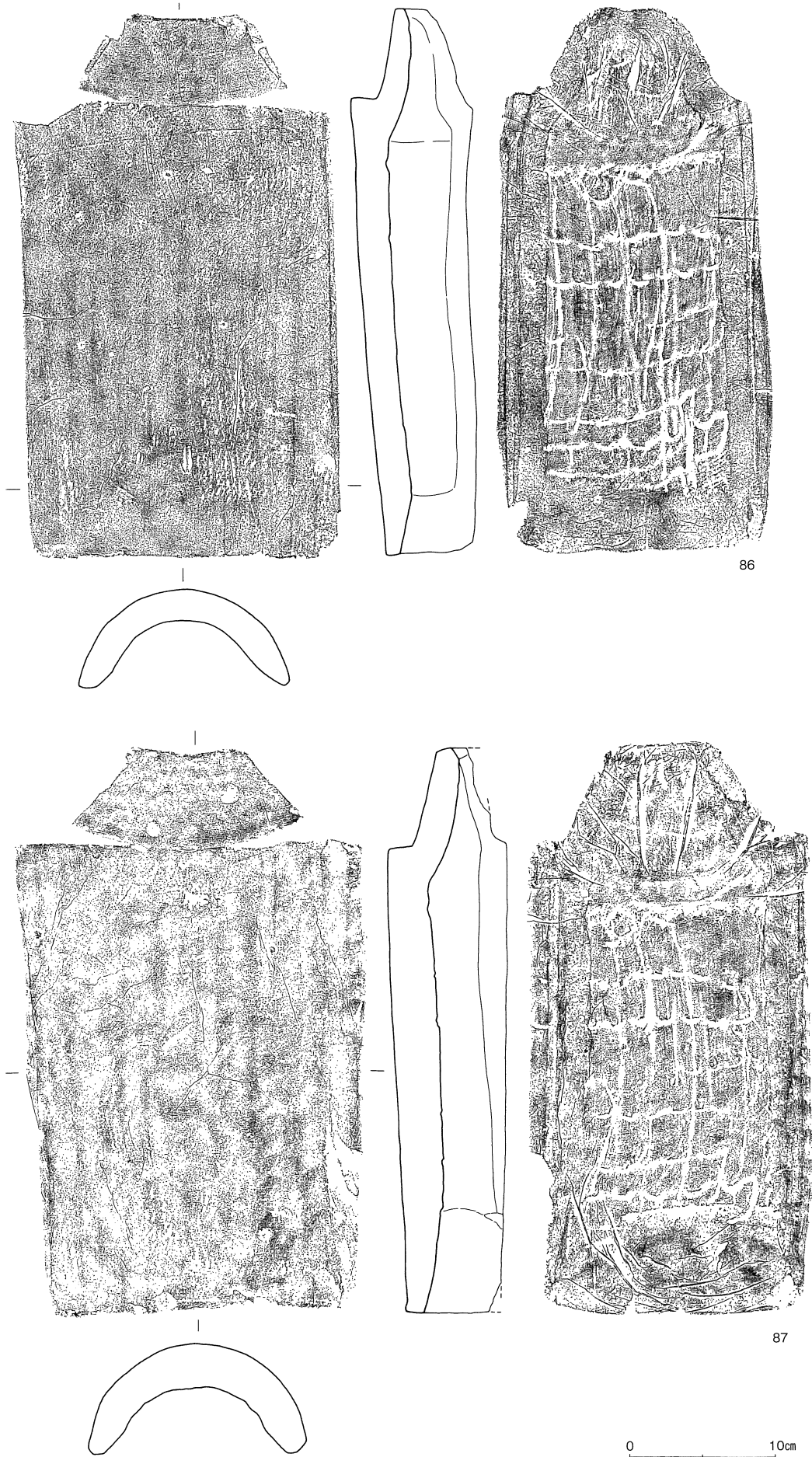
84



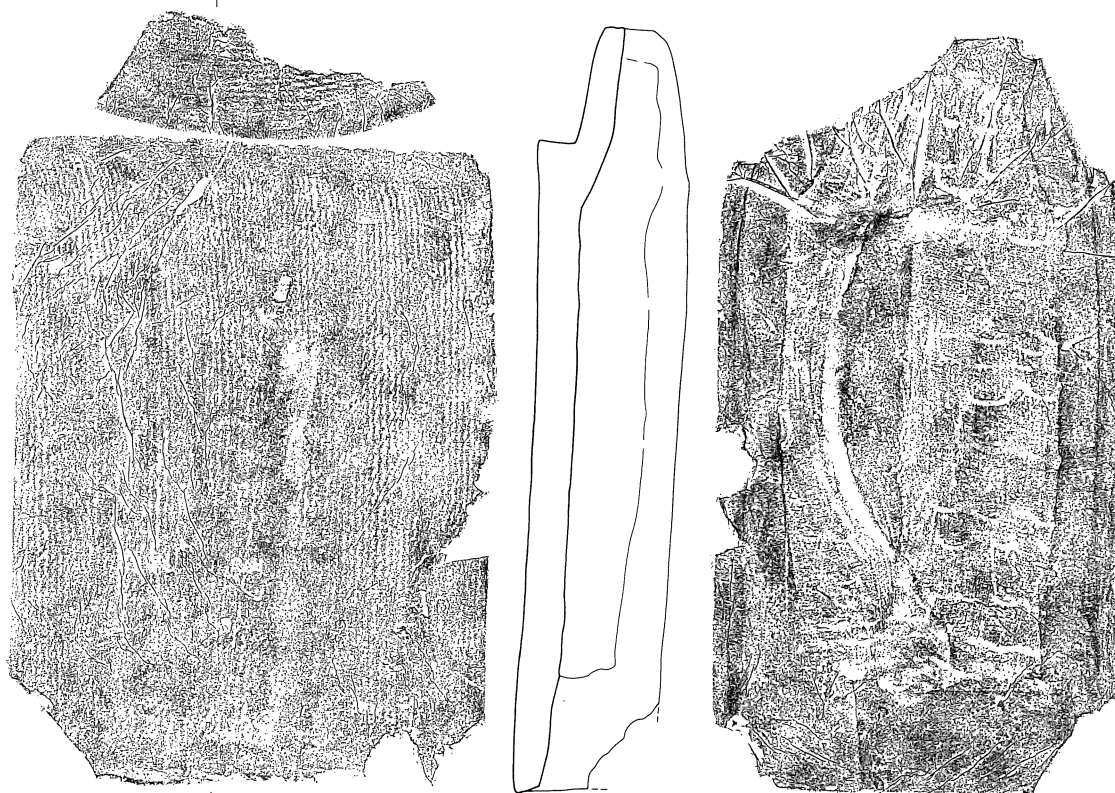
85



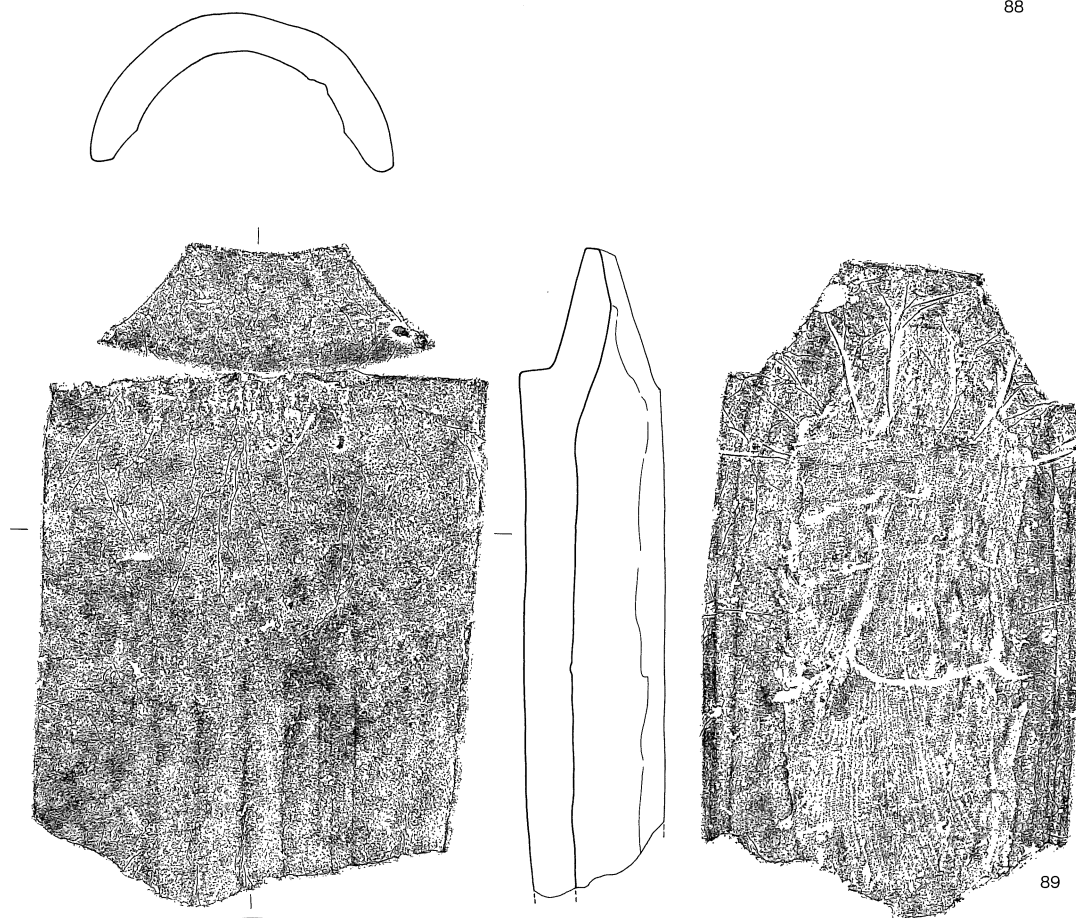
第3-205図 06-SK097出土遺物実測図⑩ (1/4)



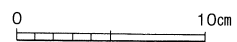
第3-206図 06-SK097出土遺物実測図①(1/4)



88



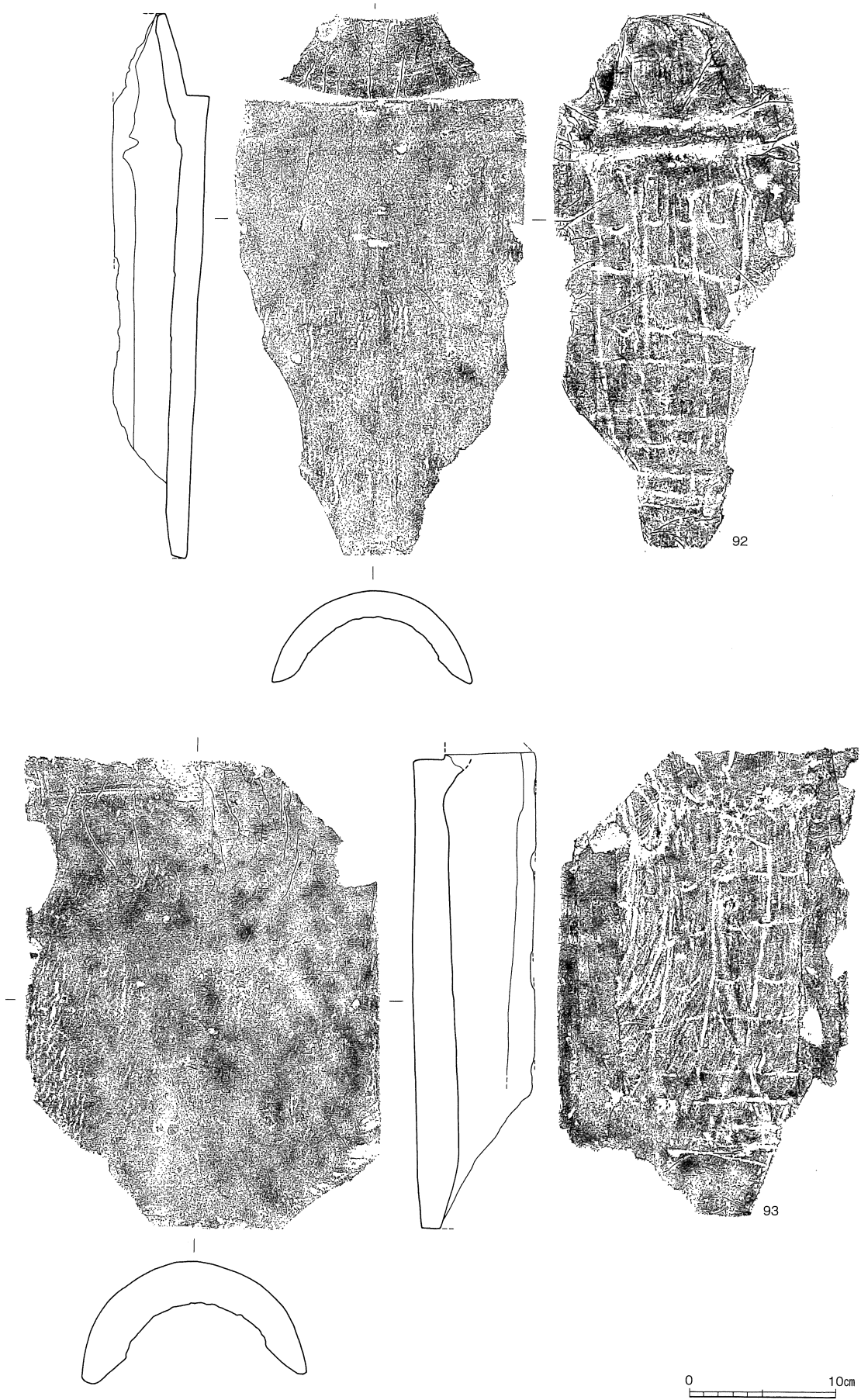
89



第3-207図 06-SK097出土遺物実測図⑫ (1/4)



第3-208図 06-SK097出土遺物実測図⑬ (1/4)



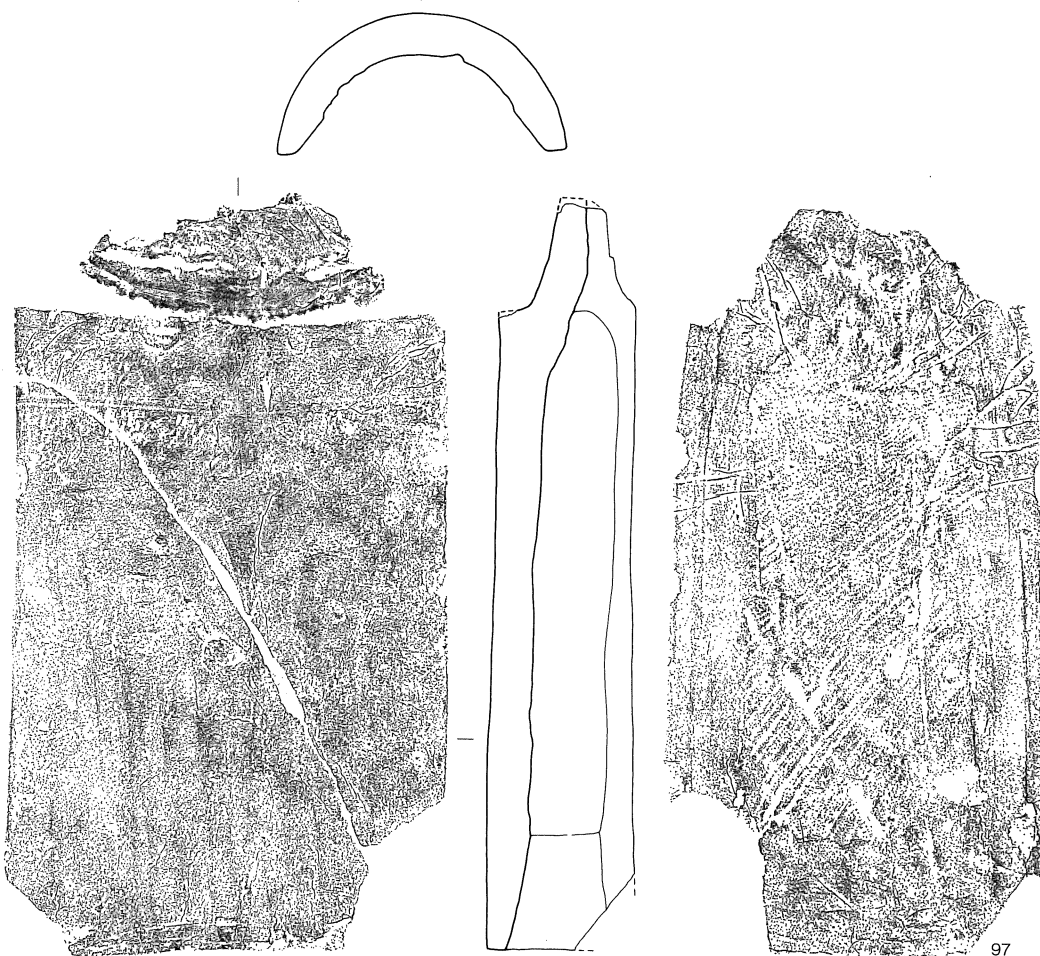
第3-209図 06-SK097出土遺物実測図⑭ (1/4)



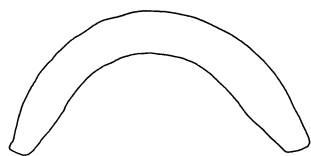
第3-210図 06-SK097出土遺物実測図⑮ (1/4)



96

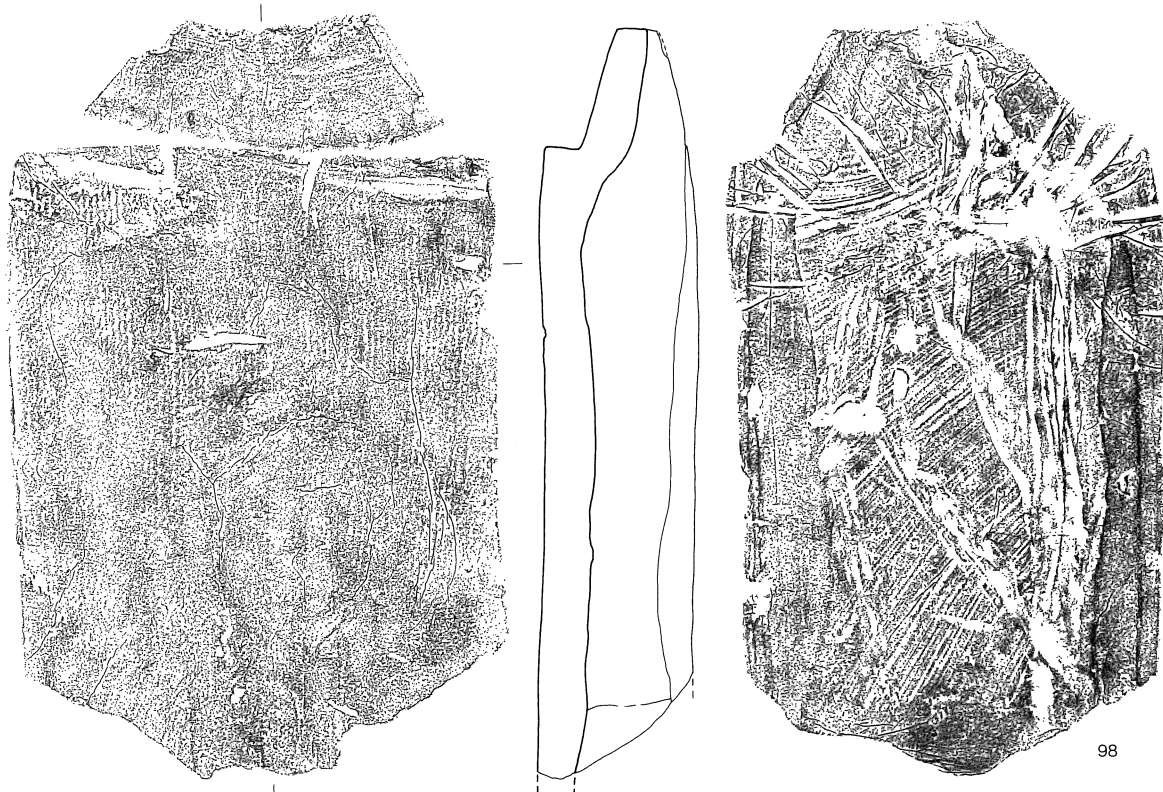


97

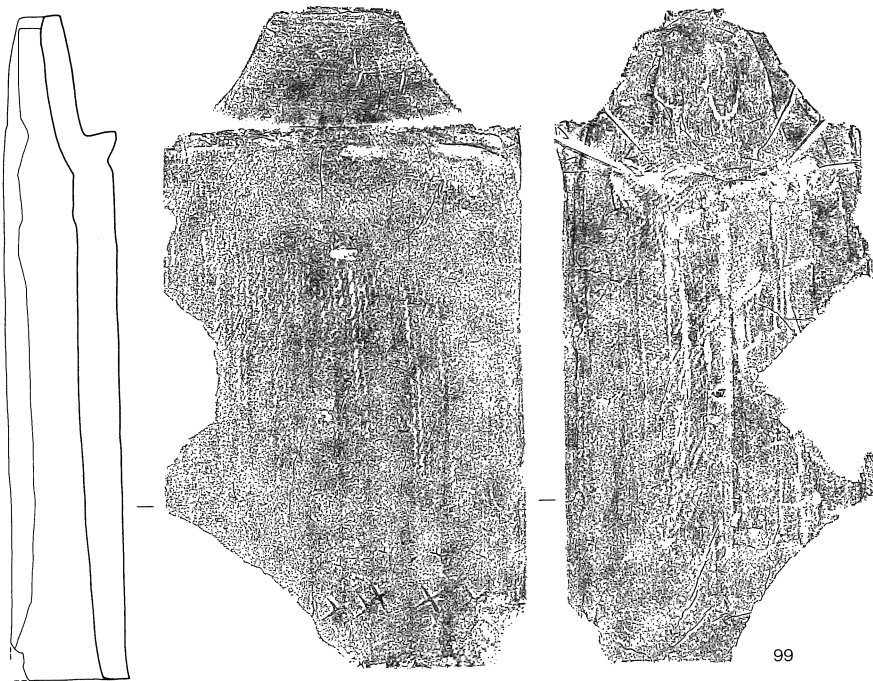
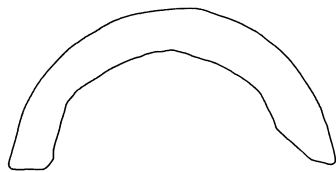


0 10cm

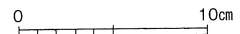
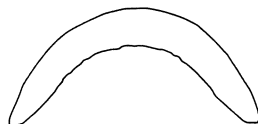
第3-211図 06-SK097出土遺物実測図⑥ (1/4)



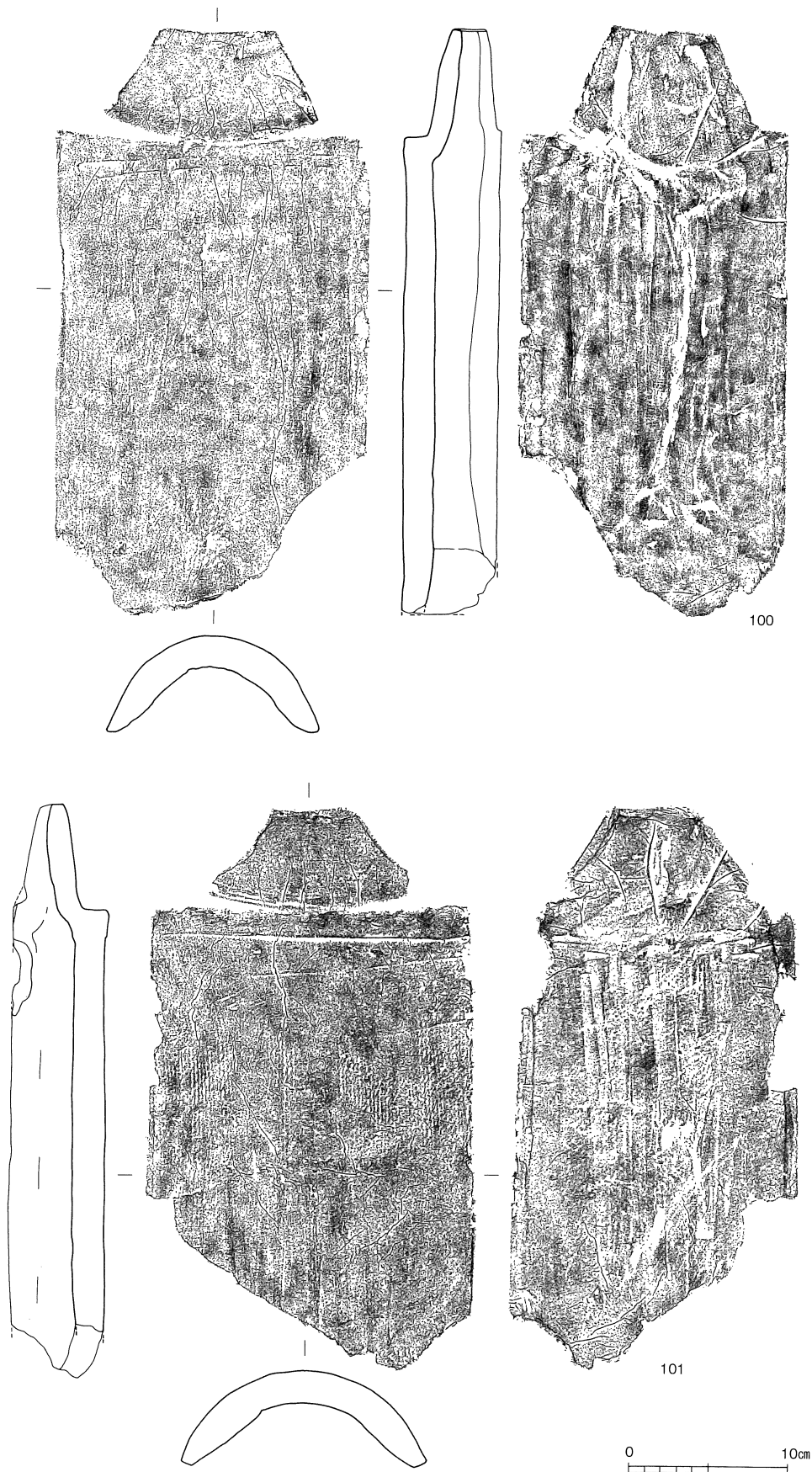
98



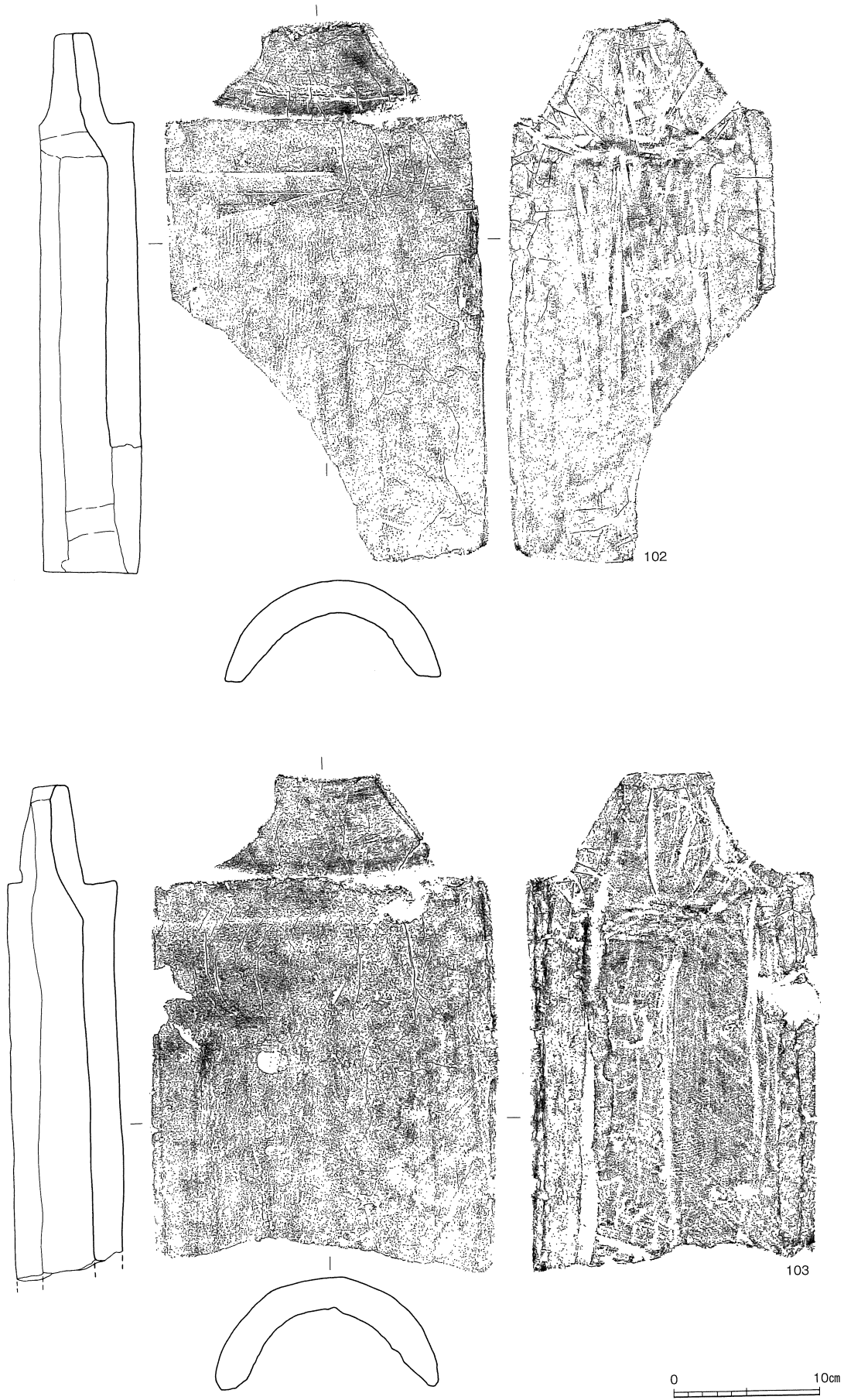
99



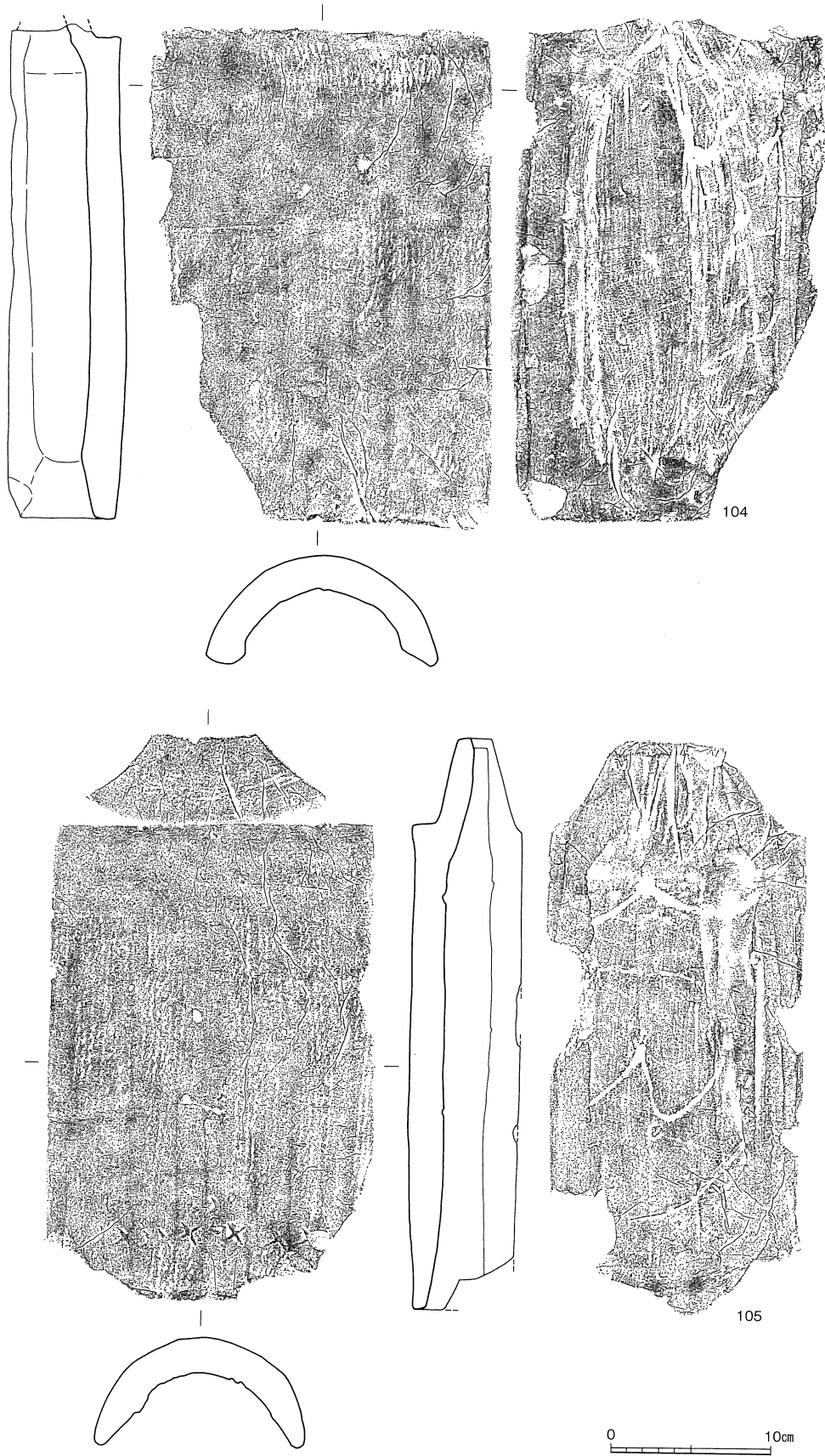
第3-212図 06-SK097出土遺物実測図⑰ (1/4)



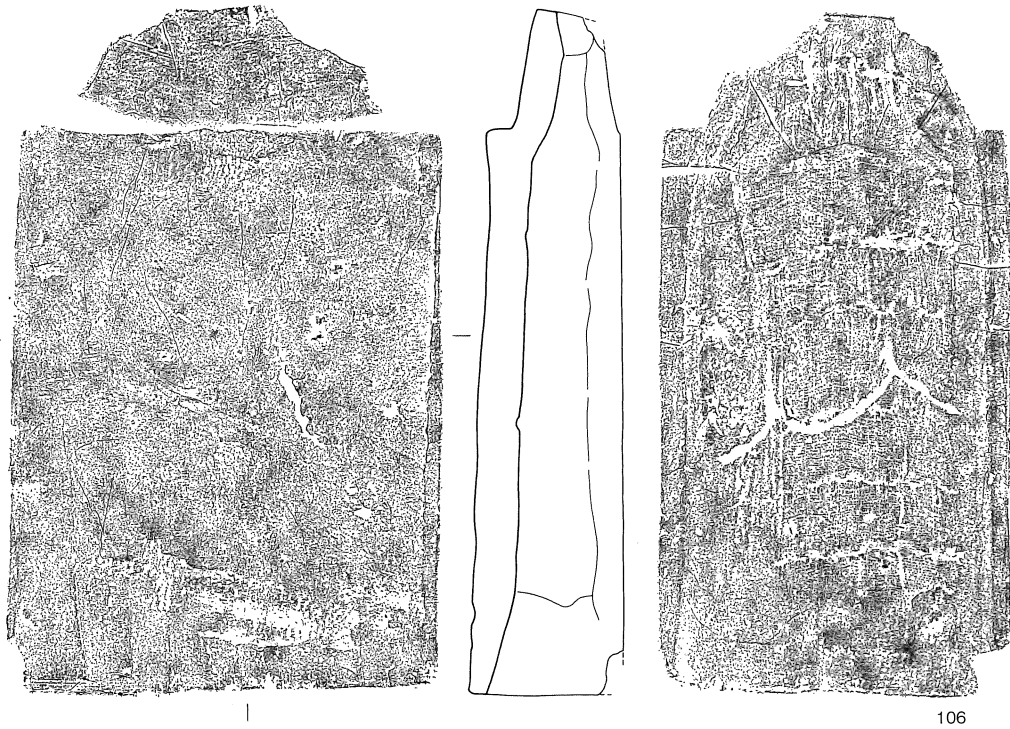
第3-213図 06-SK097出土遺物実測図® (1/4)



第3-214図 06-SK097出土遺物実測図⑱(1/4)



第3-215図 06-SK097出土遺物実測図②(1/4)



106



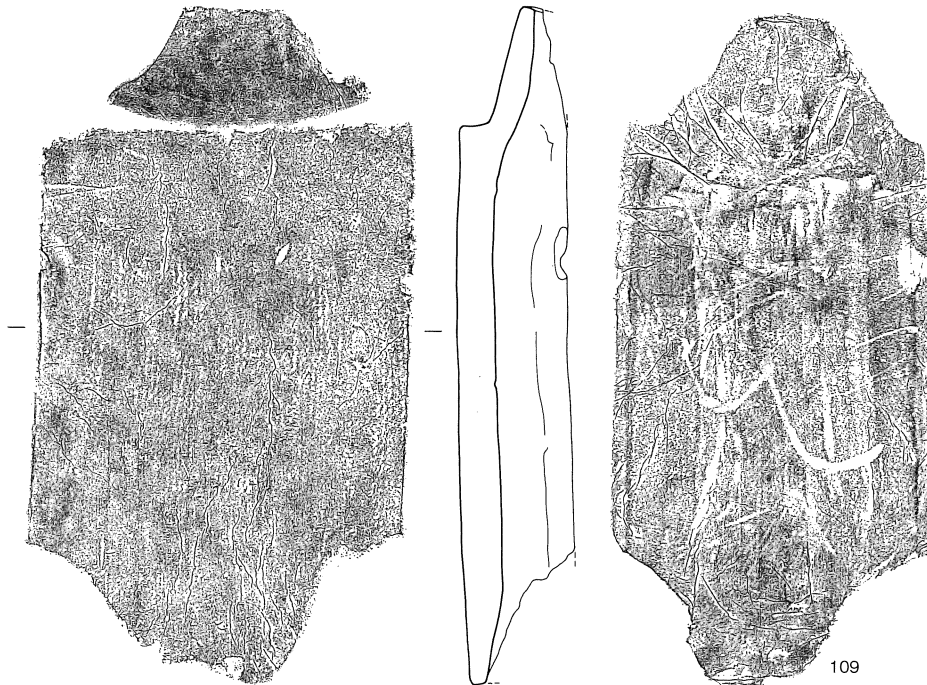
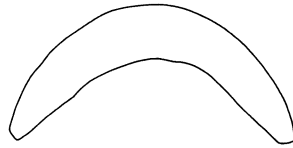
107

0 10cm

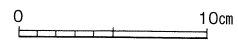
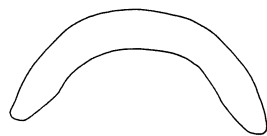
第3-216図 06-SK097出土遺物実測図㉑ (1/4)



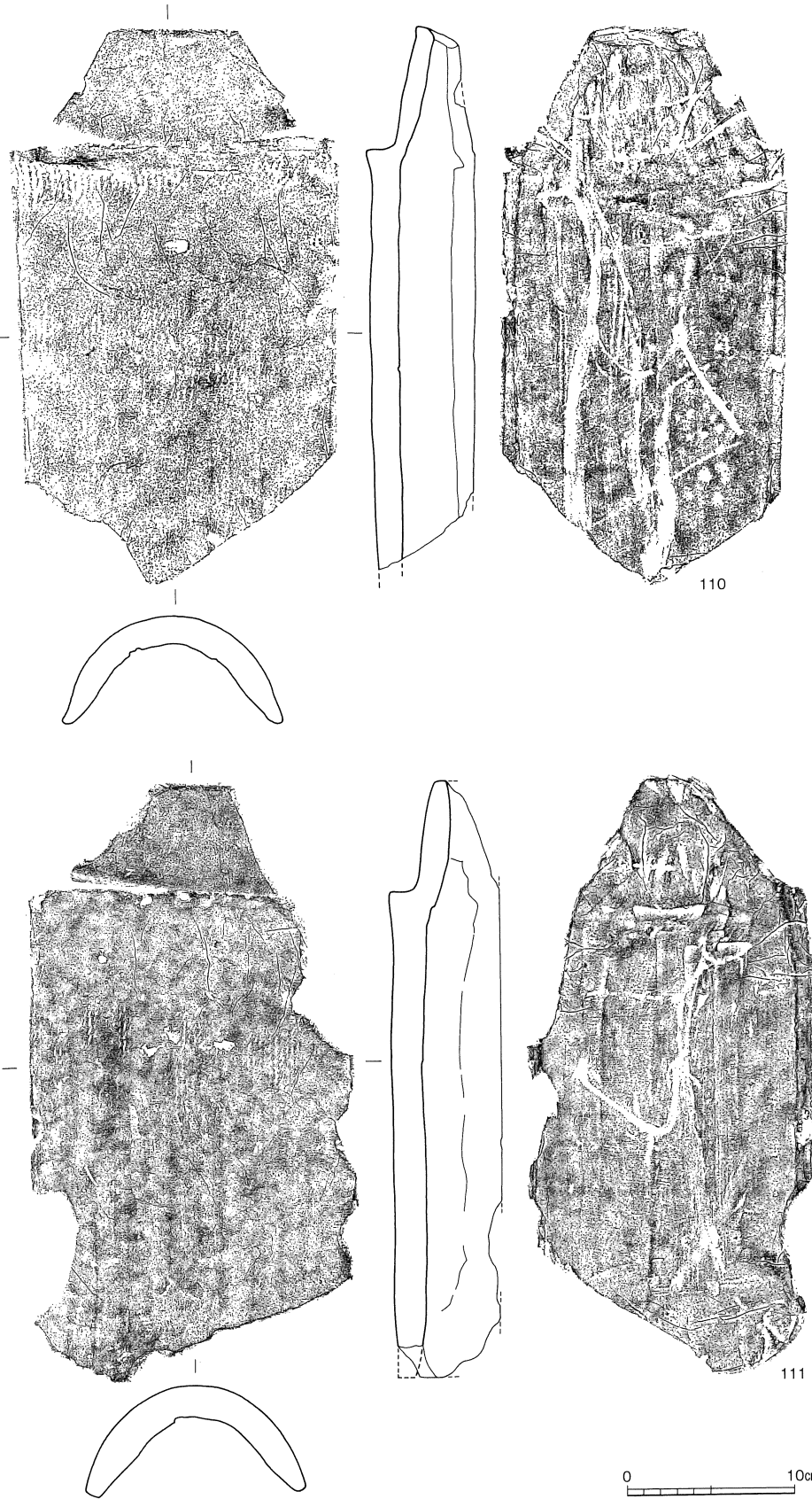
108



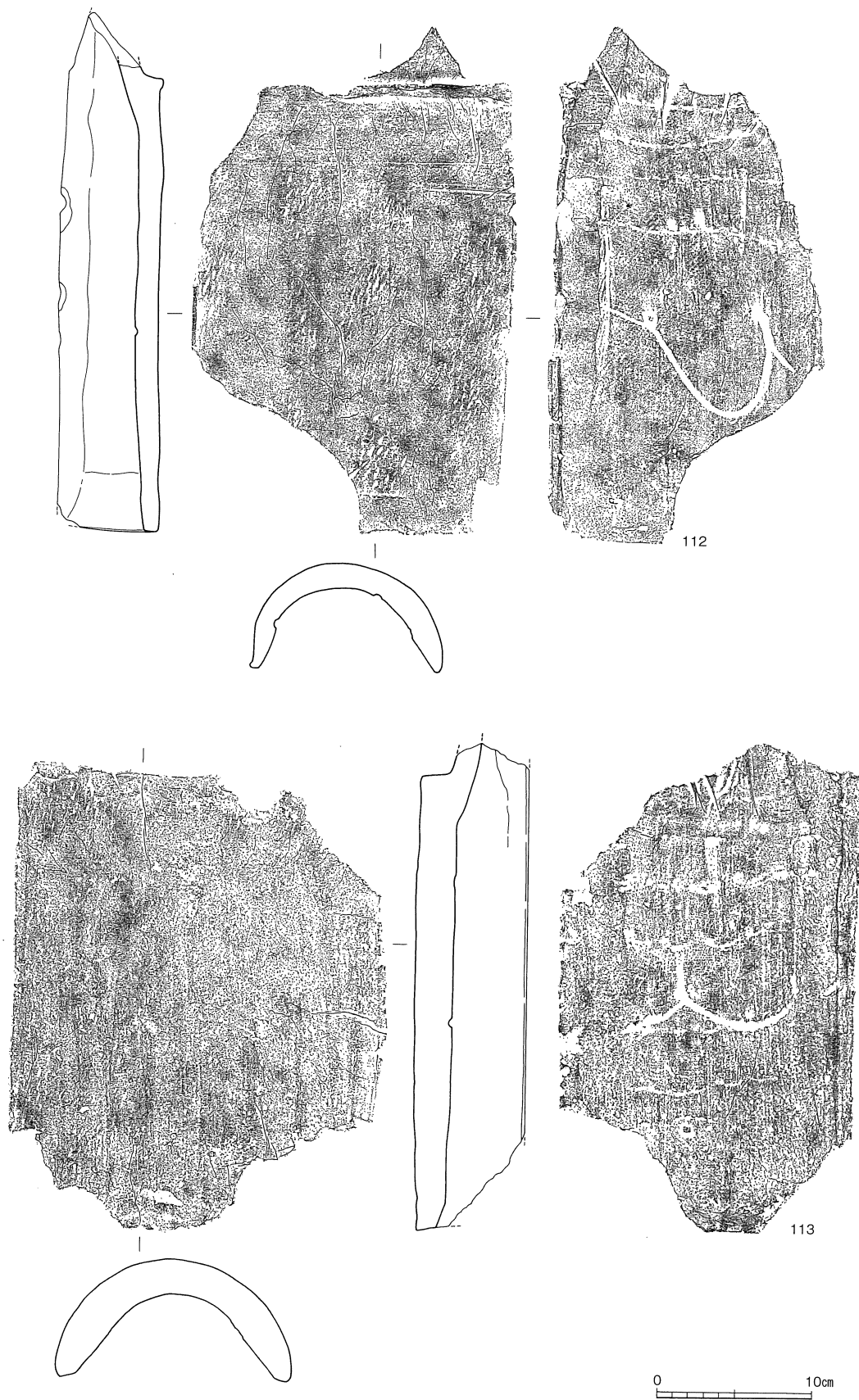
109



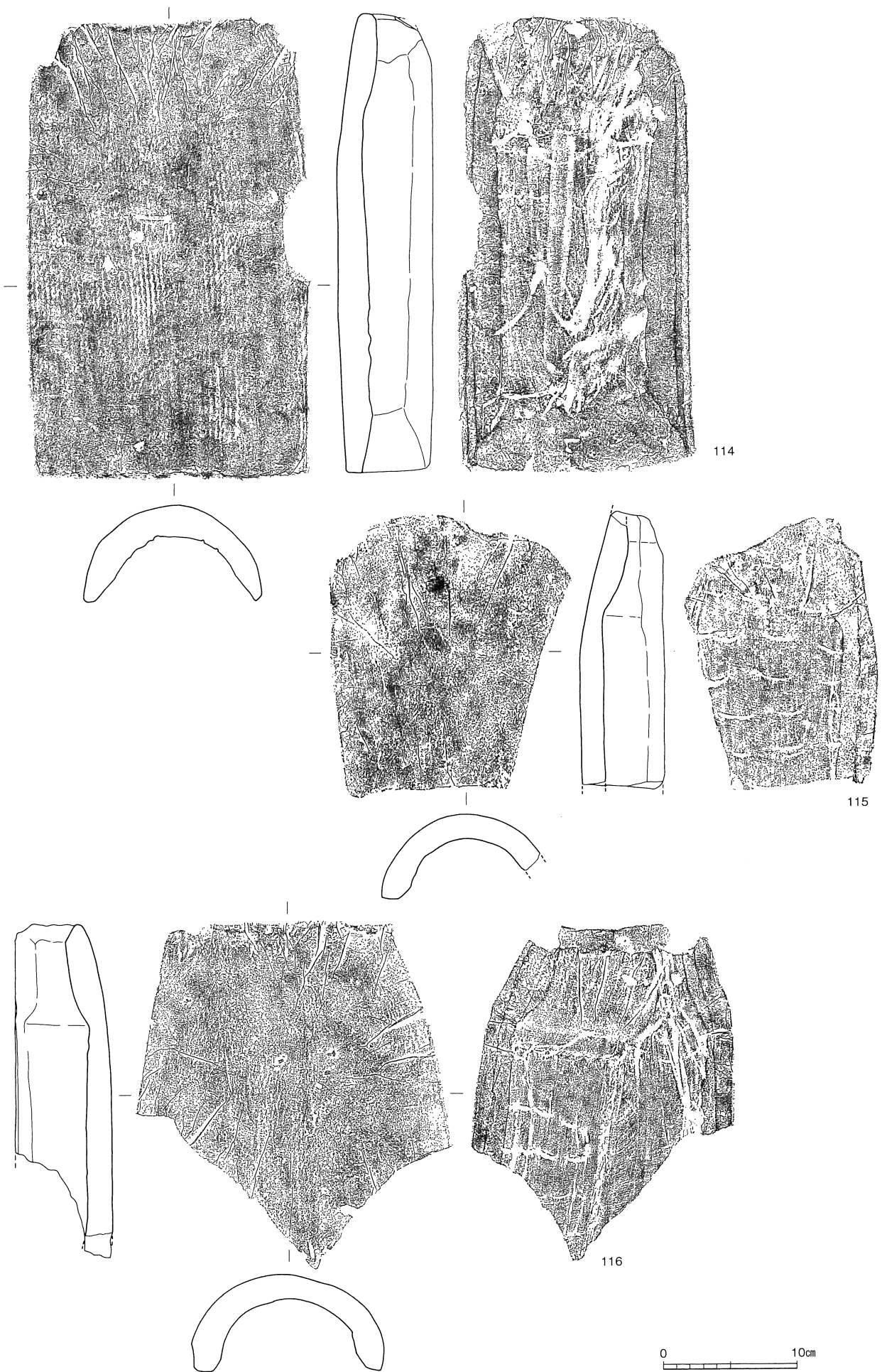
第3-217図 06-SK097出土遺物実測図② (1/4)



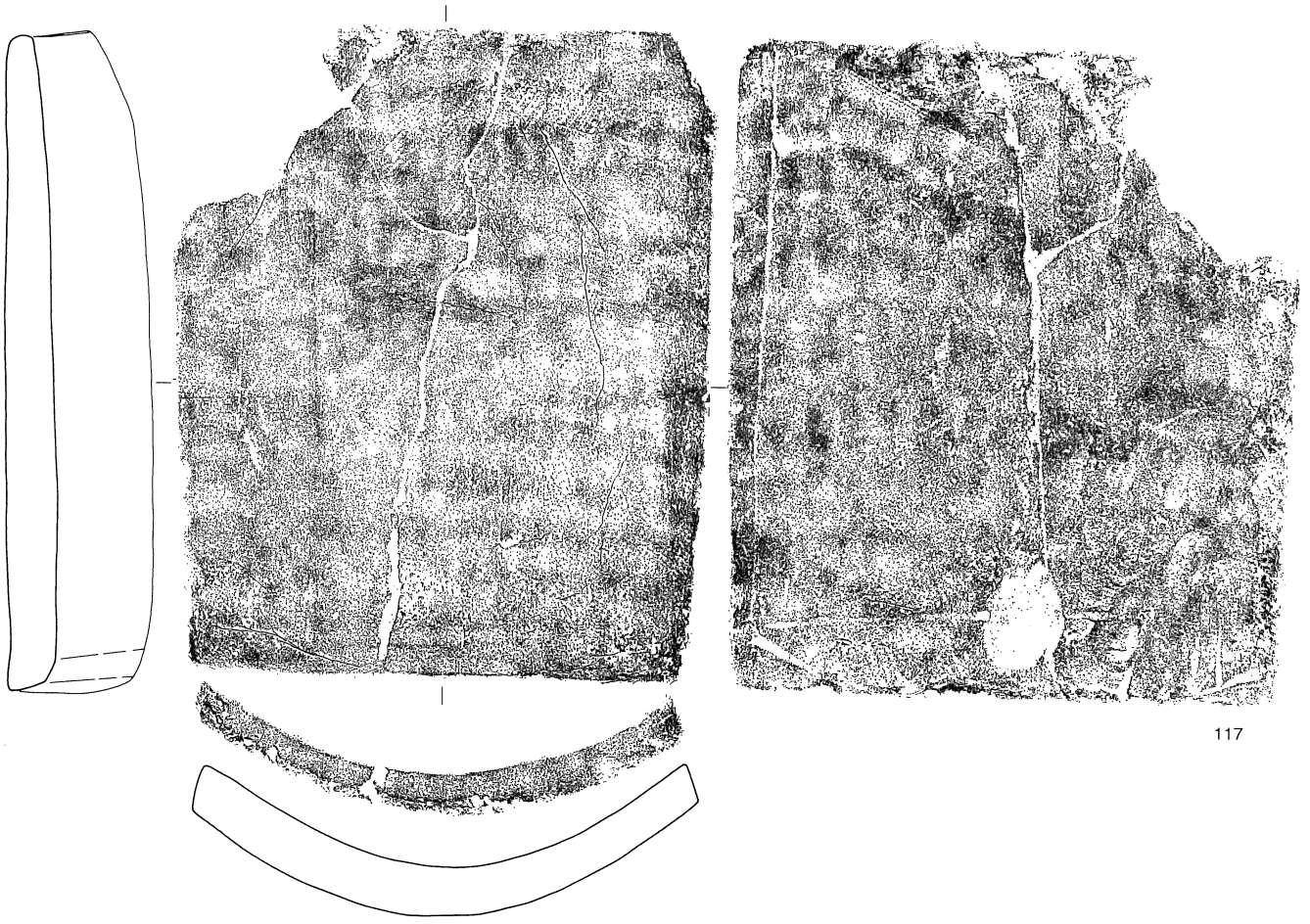
第3-218図 06-SK097出土遺物実測図㉓ (1/4)



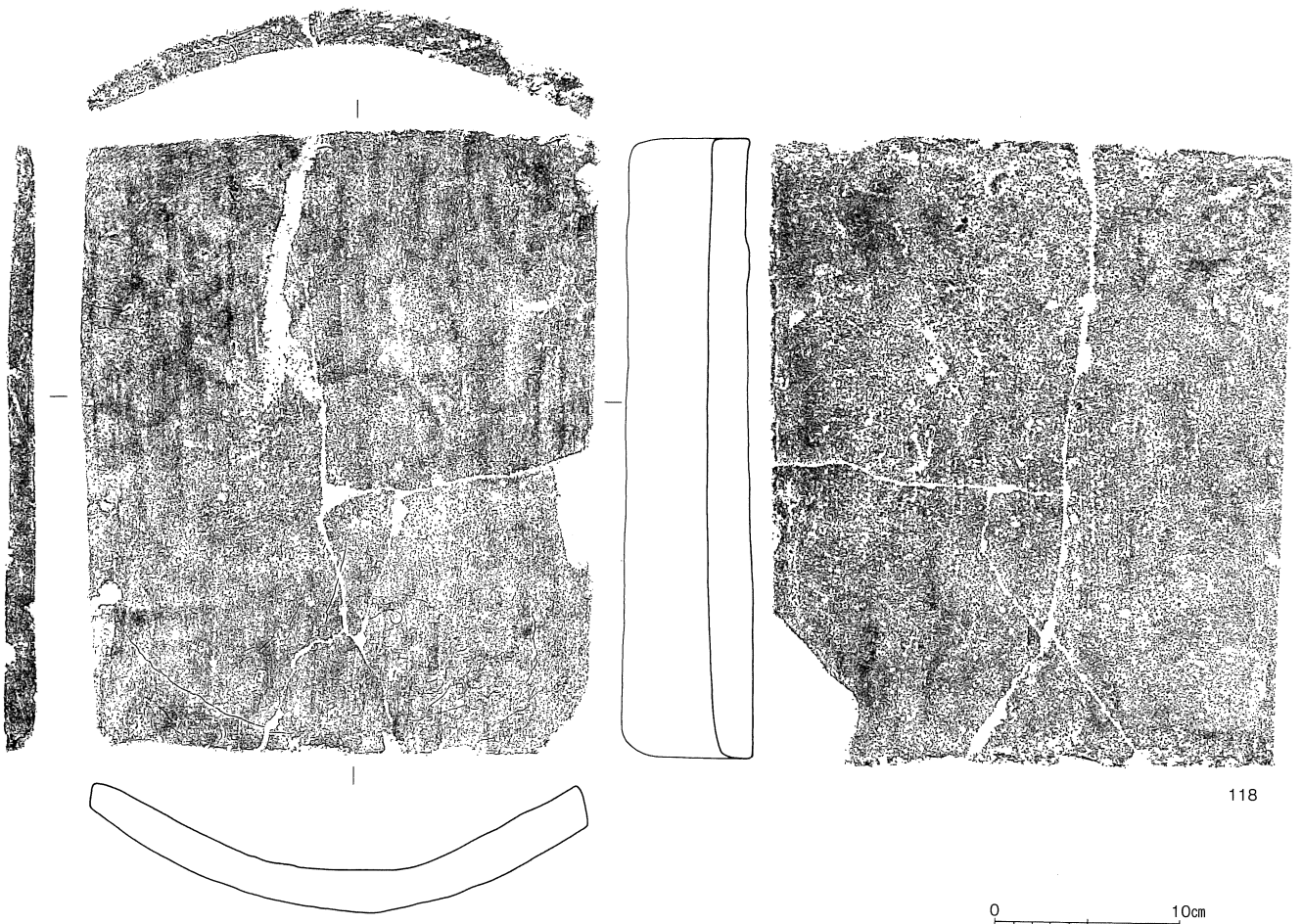
第3-219図 06-SK097出土遺物実測図㉔ (1/4)



第3-220図 06-SK097出土遺物実測図㉔(1/4)



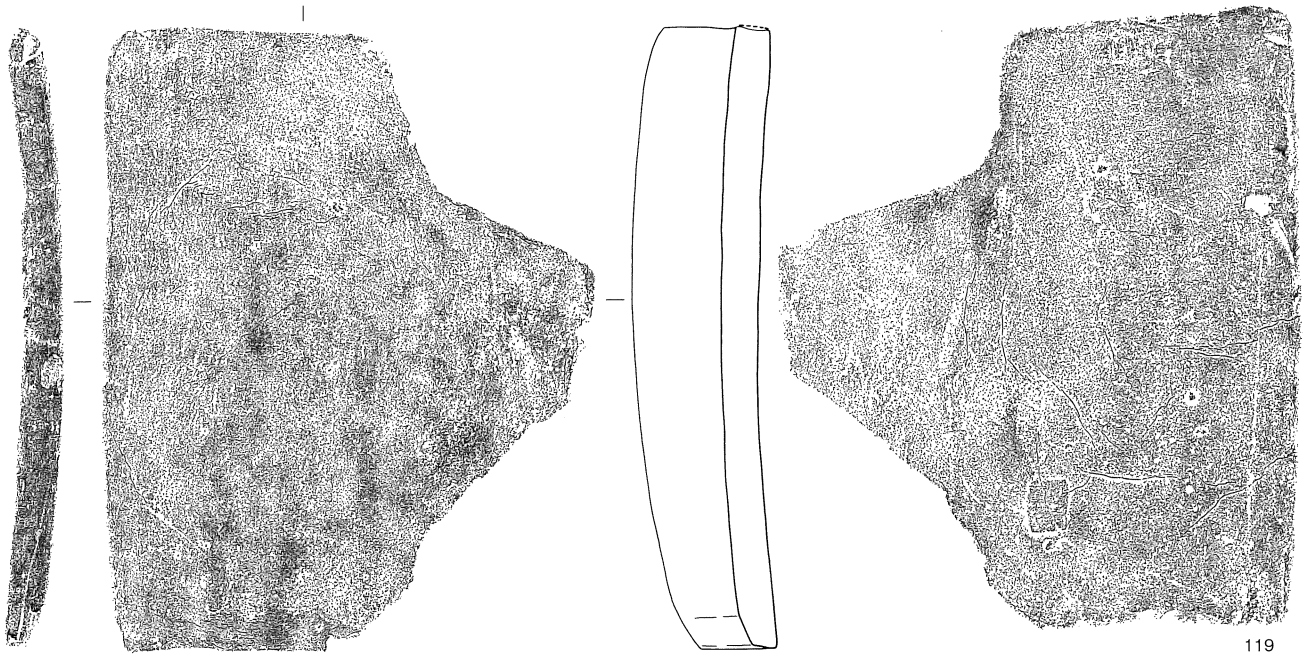
117



118

0 10cm

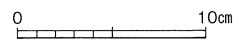
第3-221図 06-SK097出土遺物実測図㉔(1/4)
- 170 -



119



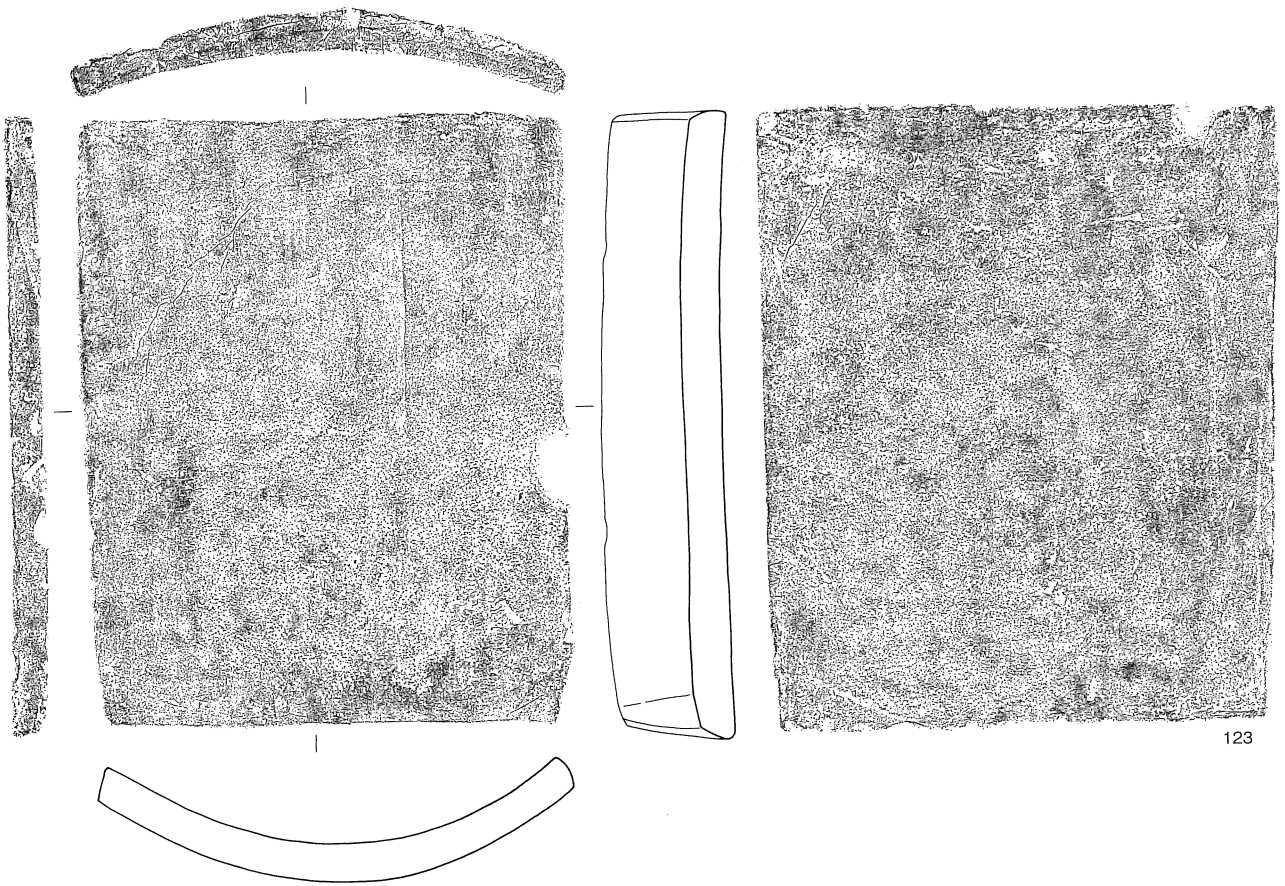
120



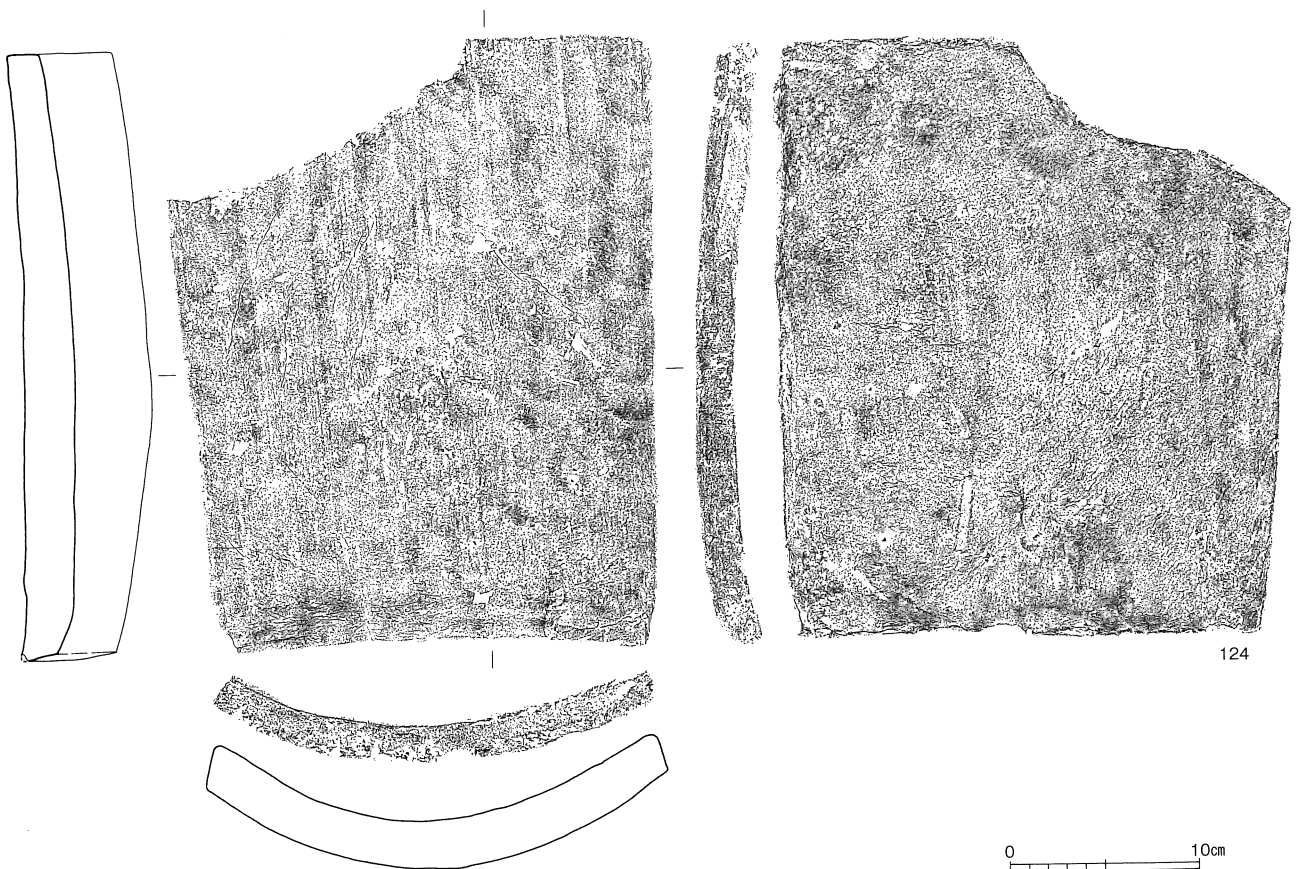
第3-222図 06-SK097出土遺物実測図㉔(1/4)



第3-223図 06-SK097出土遺物実測図㊸ (1/4)



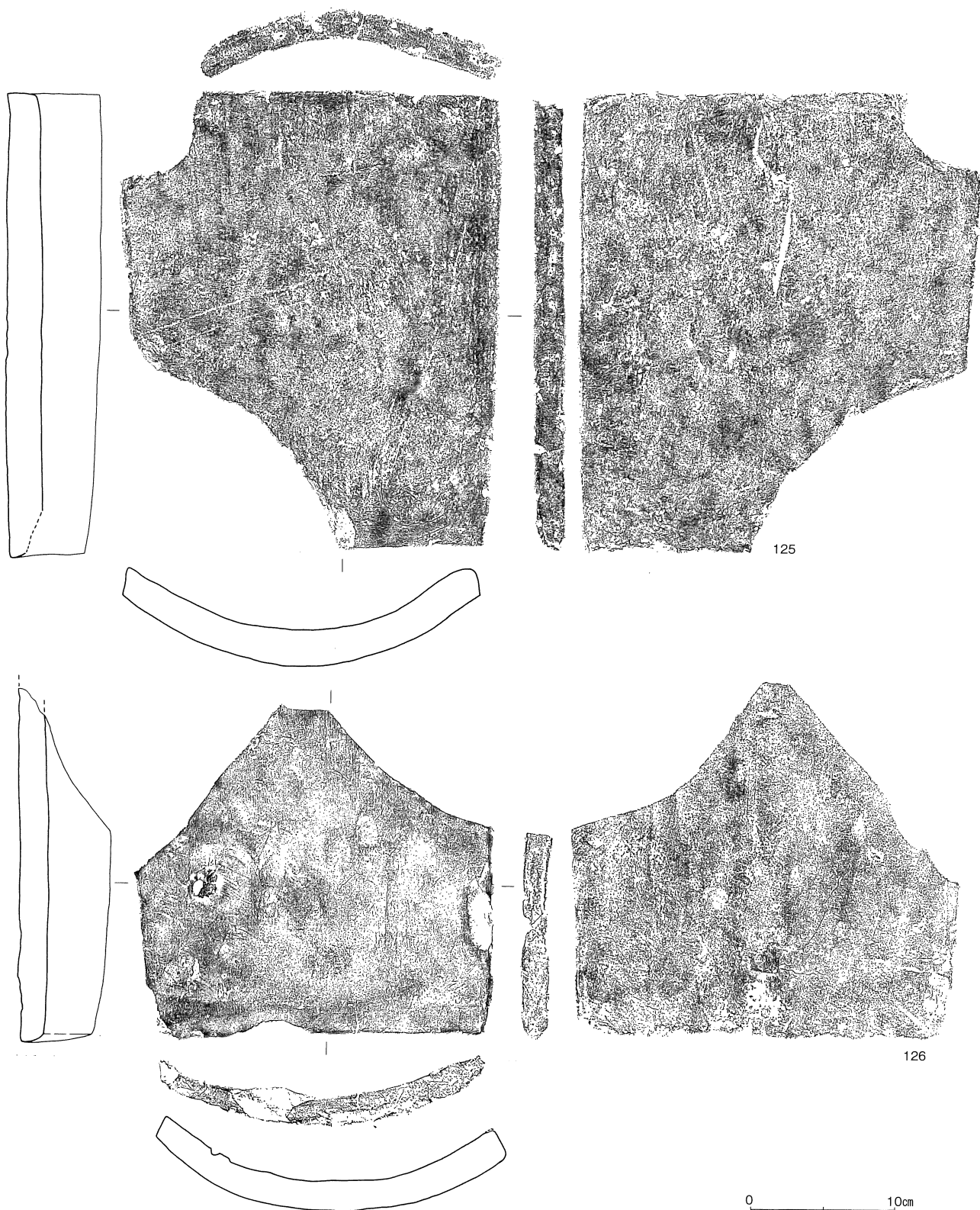
123



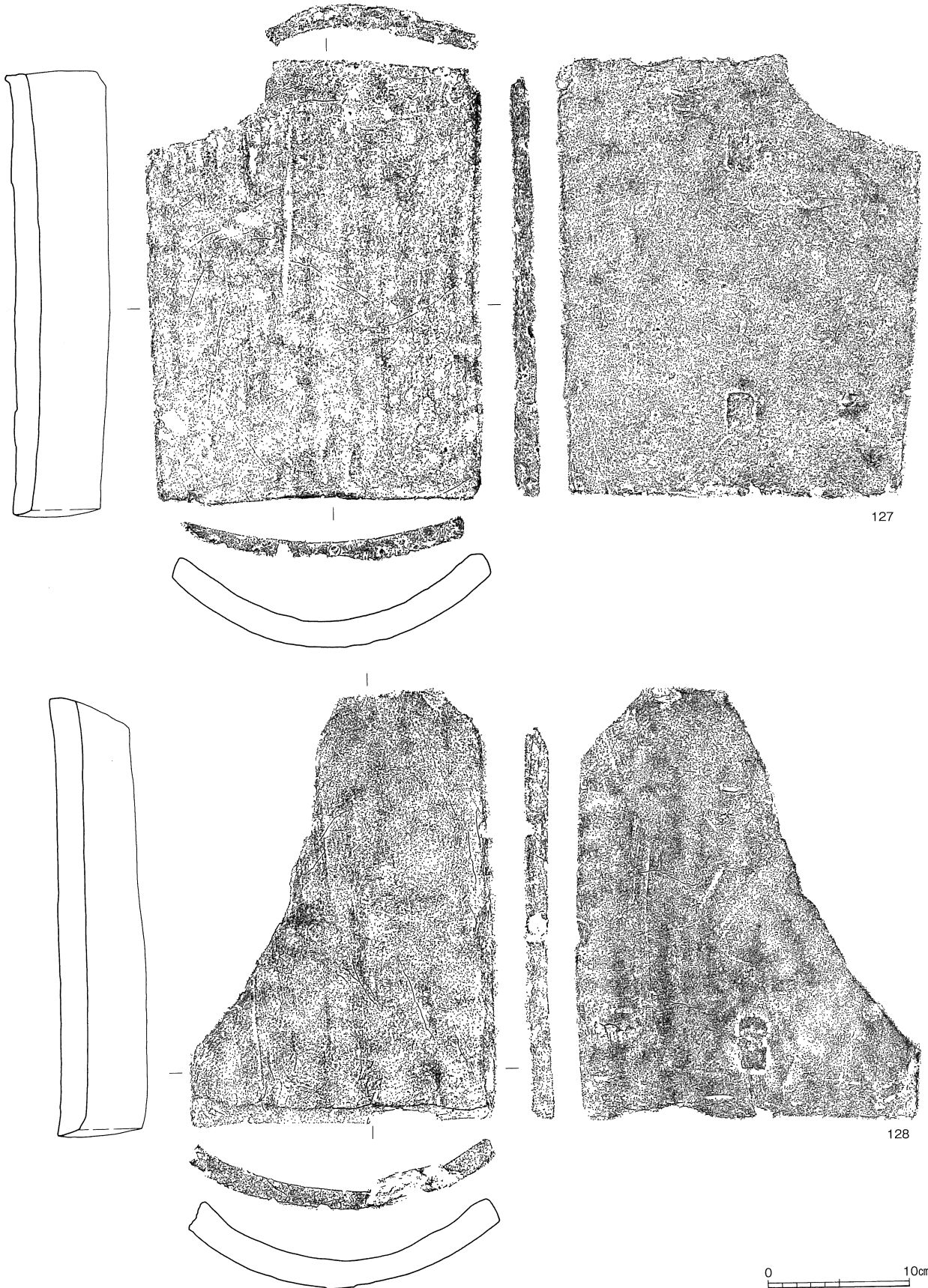
124

0 10cm

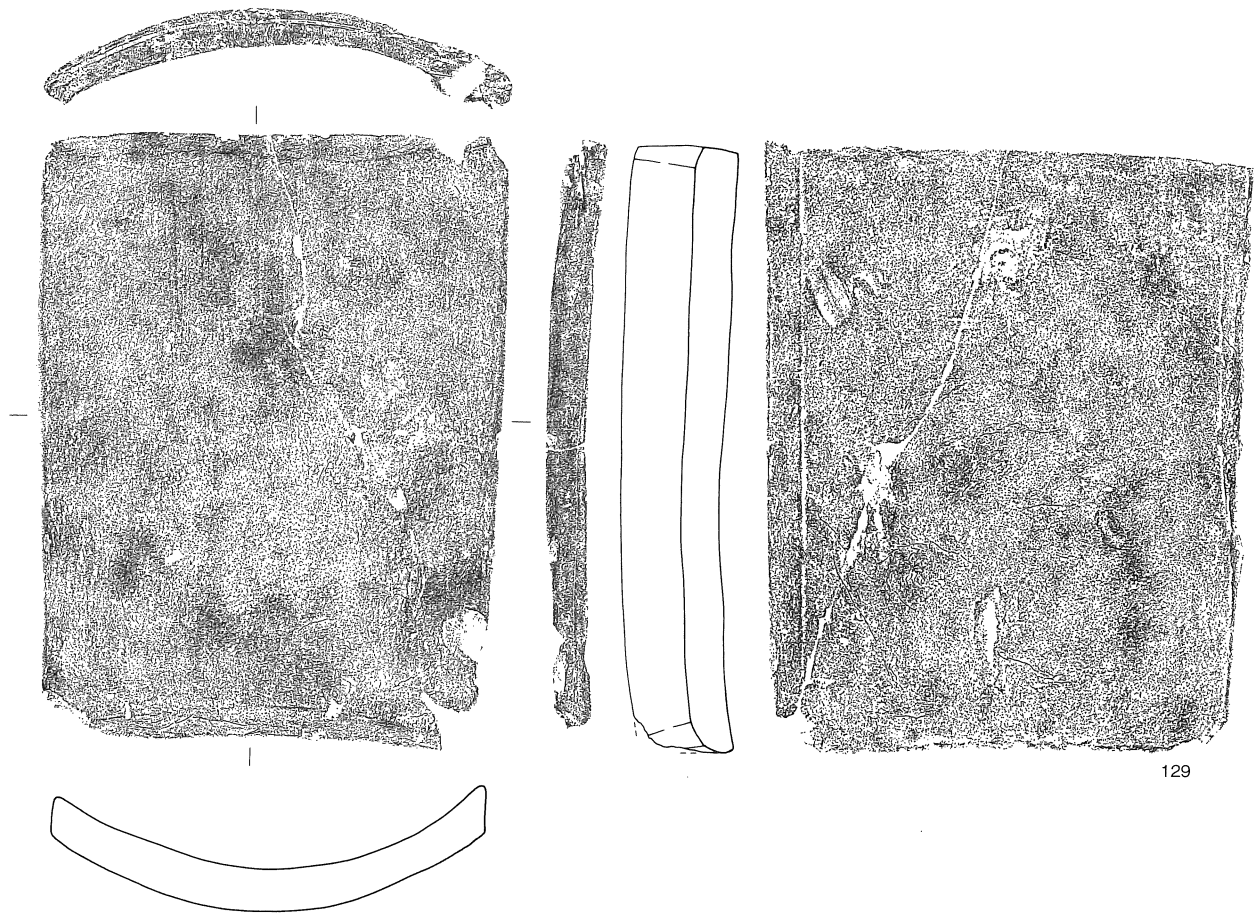
第3-224図 06-SK097出土遺物実測図㉓(1/4)



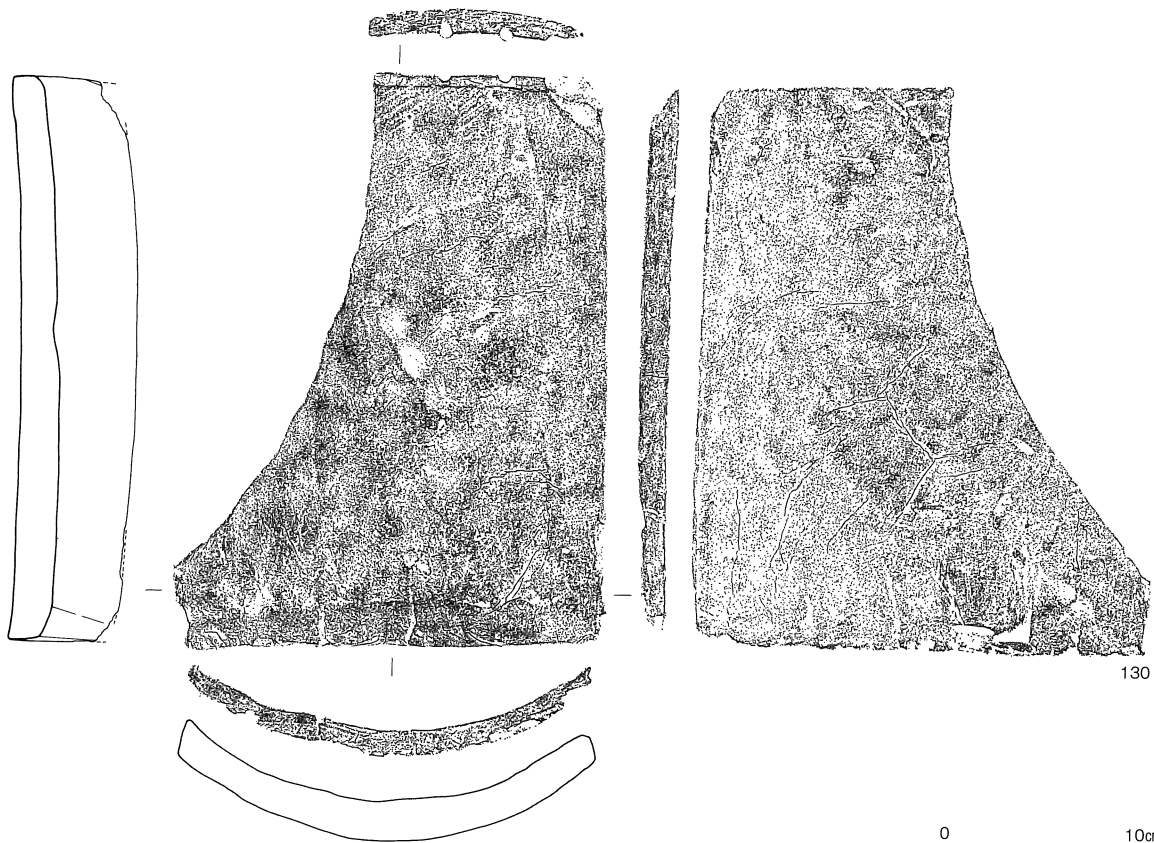
第3-225図 06-SK097出土遺物実測図㊸ (1/4)



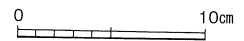
第3-226図 06-SK097出土遺物実測図③(1/4)



129



130



第3-227図 06-SK097出土遺物実測図㉔(1/4)

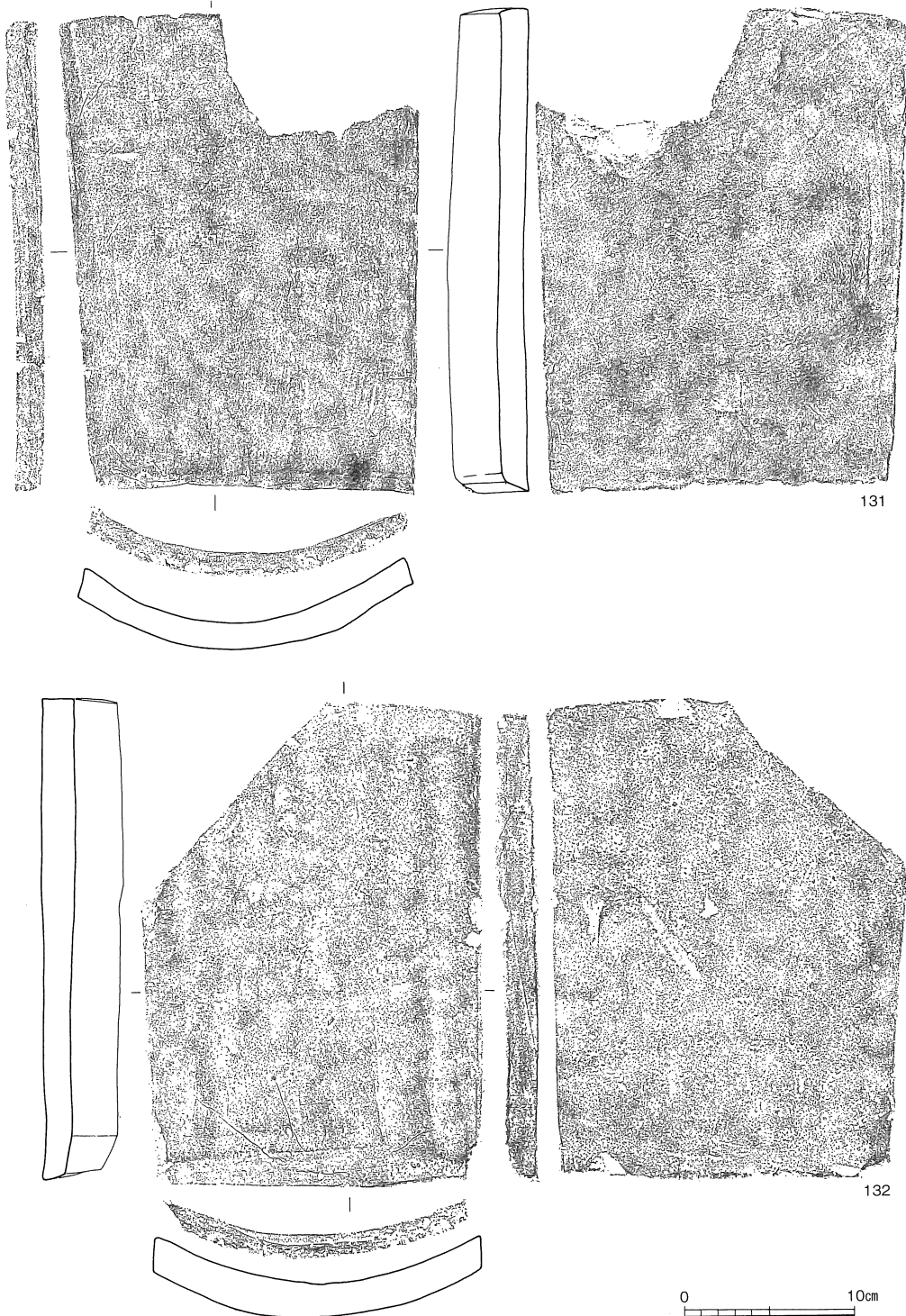
06-SK097出土遺物（第3-196～3-247図）

枢府系白磁碗

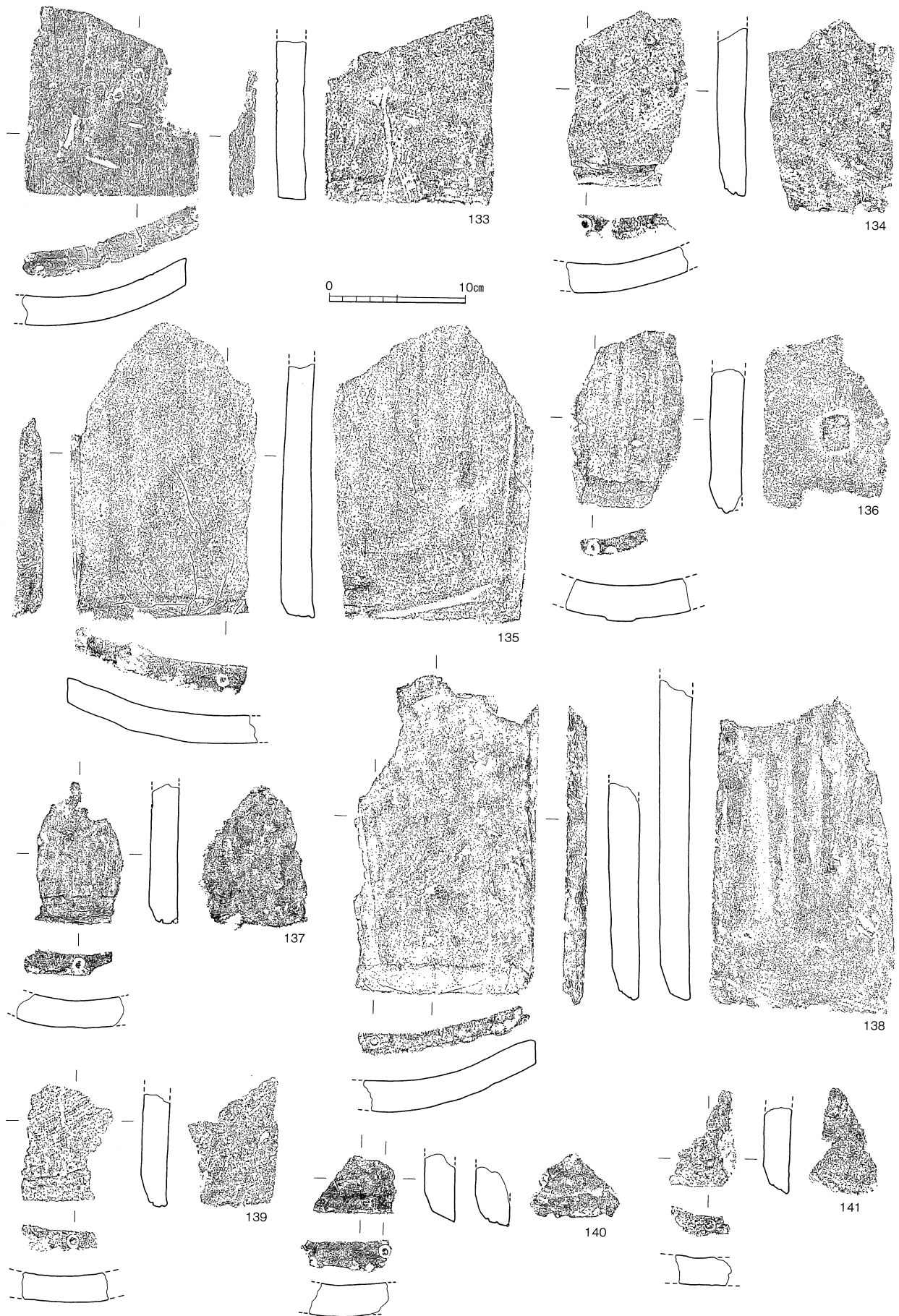
中国産天目碗
朱墨書の痕跡

茶入
尊式華瓶

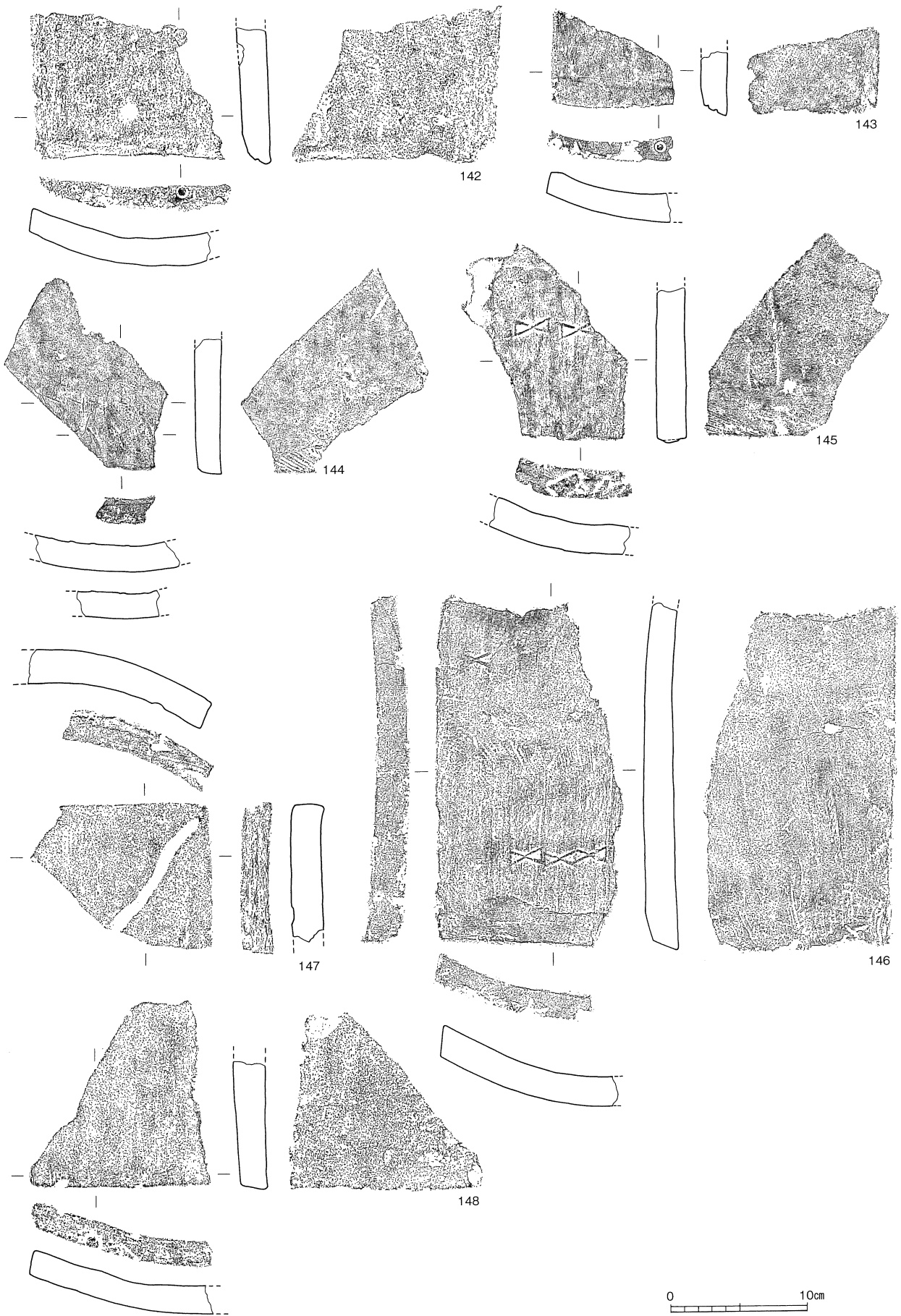
第3-196～3-231図は上層からの出土である。1は枢府系白磁碗で、見込に文様を施すが二次焼成により不鮮明である。2は青磁の盤で、外面に連弁文を施す。同一個体2点を図示した。3は中国産天目碗である。釉薬は二度掛けし、二度目の釉薬は厚く掛かる。底面には朱墨書の痕跡が残るが字は判読できない。4は施釉陶器の茶入で、器壁は極めて薄く、胴部上位に1条の沈線を施す。5は焼締陶器の壺である。中国南部産であろうか。6は古瀬戸の華瓶である。尊式華瓶とされ



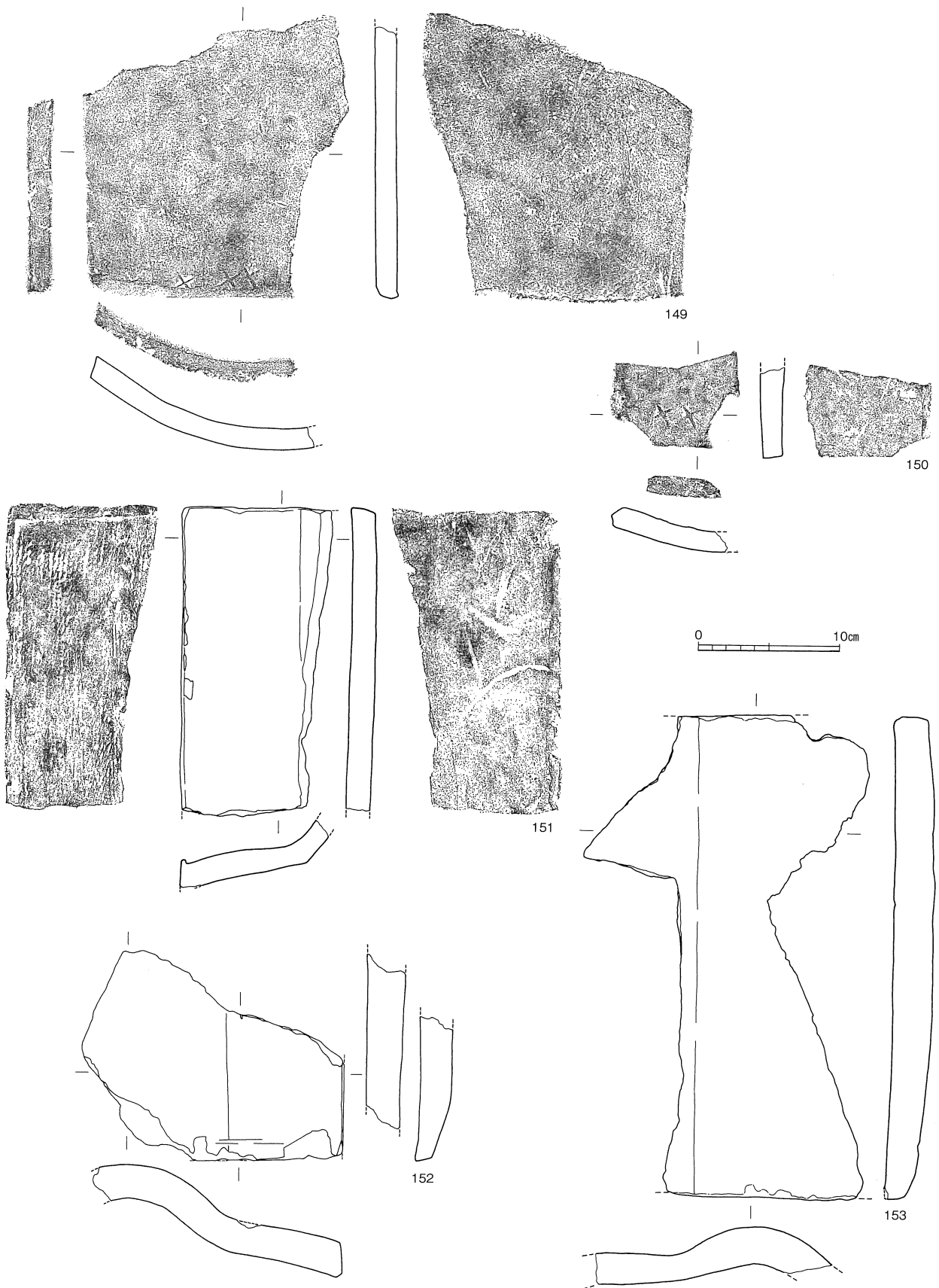
第3-228図 06-SK097出土遺物実測図㉓(1/4)



第3-229図 06-SK097出土遺物実測図㊸(1/4)



第3-230図 06-SK097出土遺物実測図㉔(1/4)



第3-231図 06-SK097出土遺物実測図㊼ (1/4)

るもので、古瀬戸編年の中期Ⅲ期（14世紀中頃）に位置づけられる。7～10は備前焼の摺鉢である。7・8は中世Ⅲa期（14世紀後半）、9・10は中世Ⅲb期（15世紀前半）に編年される。11・12は備前焼の甕である。13～18は在地の土師器小皿で、いずれも底面に回転糸切り痕が残る。19～21は土師器坏で、21は胎土に多量の金雲母を含むことから、他所からの搬入品と考えられる。22は白色胎土で薄手の大内系土師器皿である。23は土師質焼成の管状土錘である。24～54は瓦質土器で、24は風炉の可能性が高い。25～28は火鉢である。26は口縁が内湾する浅鉢形の器形で、口縁下の凸帯間に連珠文とスタンプ文を施す。28は方形を呈する。28の内面口縁下には1箇所穿孔がみられる。29は釜であろう。30～35は捏鉢で、30は外面に成形の押圧痕が残る。36～54は摺鉢である。36～47は口縁が肥厚し端部が内外両側に張り出すタイプ、48～50は口縁端部が内側に延びるタイプに分けられる。51～54は底部で、52は内面に赤色顔料が付着しており、顔料の生成に用いられた可能性がある。55・56は砥石である。57は加工痕のある赤間石で、硯の加工で生じた残滓であろう。58は石塔の部材と思われる。59～61は北宋銭で、59は至道元寶（995年初鑄）、60・61は天聖元寶（1023年初鑄）である。

多量の金雲母を含む大内系土師器皿

赤色顔料が付着加工痕のある赤間石

62～153は瓦類である。62～72は軒丸瓦で、いずれも瓦当中央に右巻きの巴文を配し、その周囲に珠文を施す。65・68は巴文の尾部が繋がり圏線状となる。珠文の数は62・64・66は19点、70は18点である。珠文の外側に区画の圏線を持つもの（62～64・66・67・69・72）と、圏線を持たないもの（65・68・70・71）がある。73～83は軒平瓦である。いずれも中心飾りの蓮華文とその両側に唐草文を施す。75・77・79は唐草文の末端が途切れている。75は被熱による赤変が著しい。80は区画線内に唐草文を施す。84～116は丸瓦である。84～98は大型のタイプで、84・85は凸面に縄目タタキ痕、凹面に布目痕が残る。86～93は凹面に湾曲の緩い多条の吊紐痕を持つ。94～96は湾曲の大きい大振りの特徴的な吊紐痕が見られ、96はコビキ痕も残る。97・98は凹面に布目とコビキ痕があり、吊紐痕は見られない。99～113はやや小ぶりの丸瓦で、99～101は凹面に布目痕が残る。102～104は凹面に布目痕と湾曲の緩い多条の吊紐痕を持つ。105～113は凹面に布目痕と、湾曲の大きい大振りの吊紐痕が残る。113は被熱により赤く変色している。114～116は玉縁部のない、いわゆる行基瓦である。114はほぼ完形で、凸面に縄目タタキ、凹面に布目と湾曲の大きい吊紐痕が残る。115・116は下半部を欠くが、凹面に布目痕と湾曲の緩い多条の吊紐痕が見られる。117～150は平瓦で、117～127は大型のもの、128～132はやや小振りのものである。120は被熱による赤変が著しい。118・119・126・127・128は凸面に成形台の痕跡と思われる方形の突起が見られる。126は1箇所凹面側から穿孔するが貫通しない。127は下端側面に円形竹管状刺突を施す。133～150は刻印を持つなどの特徴のある平瓦である。133は凹面の9箇所に円形竹管状刺突を施す。134～143は下端部側面に円形竹管状刺突を施す。144は凹面にわずかに連続する刻印が確認できる。刻印は崩れた「×」状を呈する。145・146は凹面に糸巻形の刻印を施す。147は凹面に1条の沈線を施す。148は平瓦片の破損面に鑿状工具の連続的な整形痕が残る。149・150は凹面に連続する「×」状の刻印を施す。151～153は雁振瓦で、151の凸面には縄目タタキが残る。

被熱による赤変

「×」状の刻印

行基瓦

被熱による赤変成形台の痕跡

円形竹管状刺突

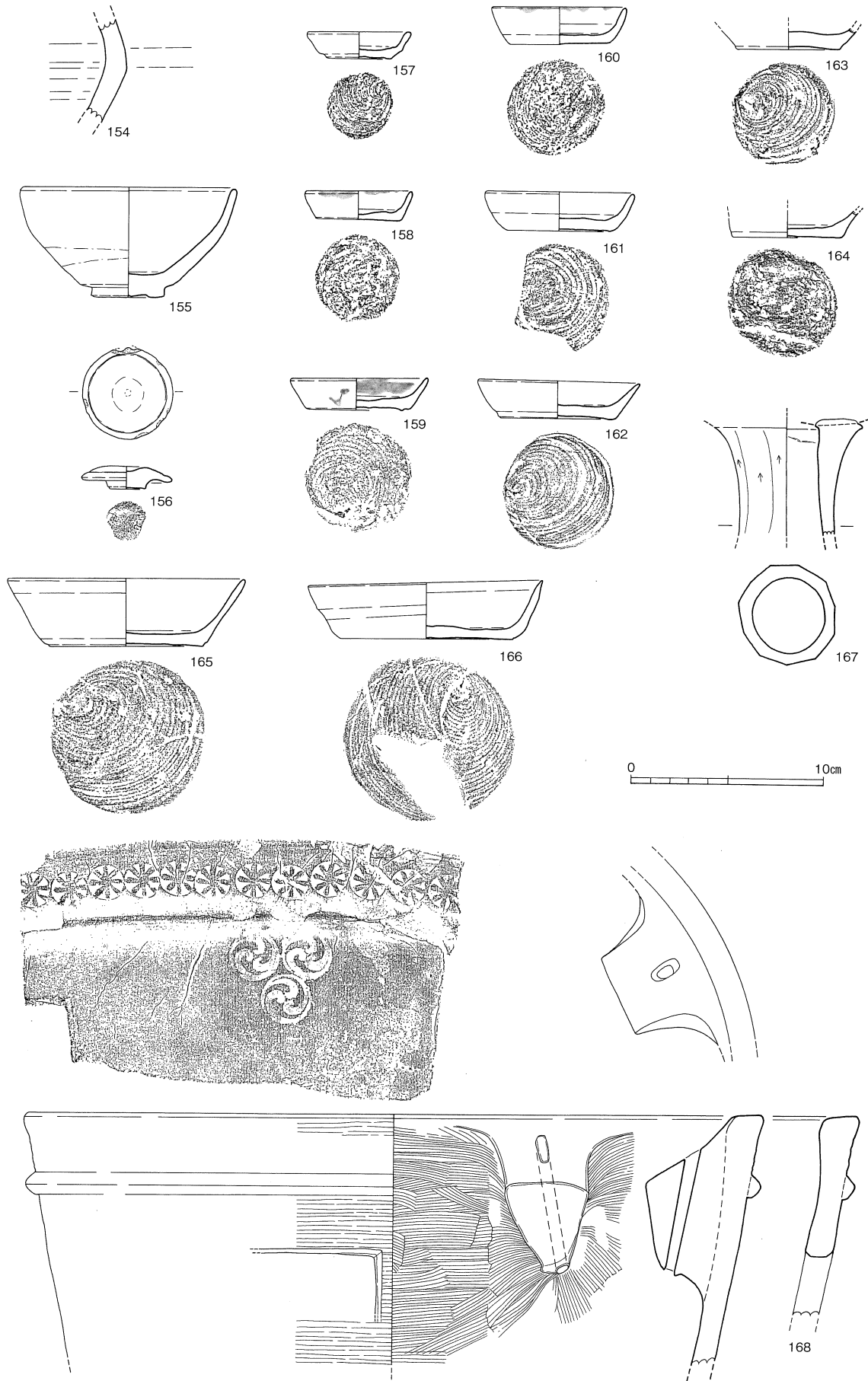
糸巻形の刻印

鑿状工具の連続的な整形痕

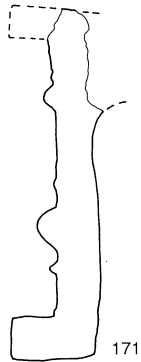
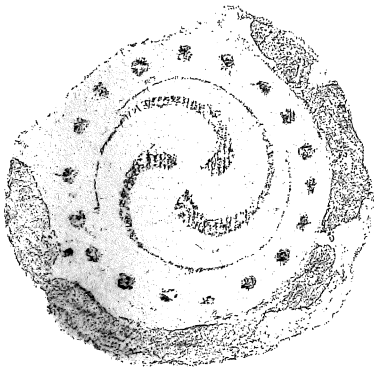
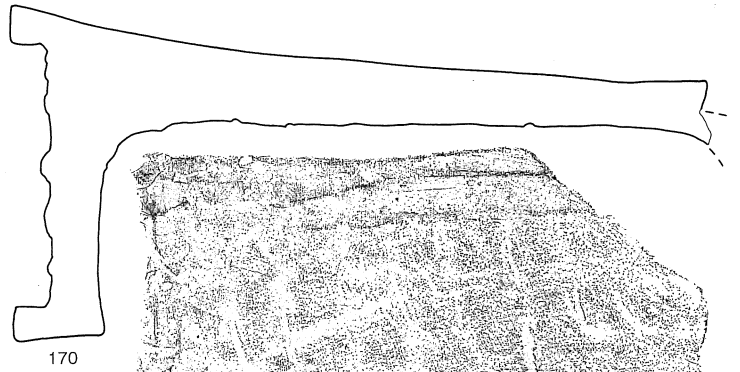
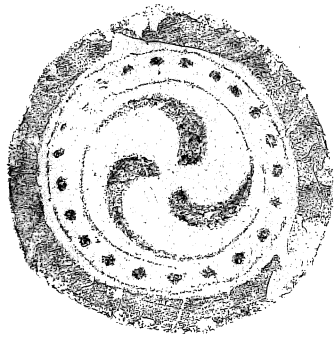
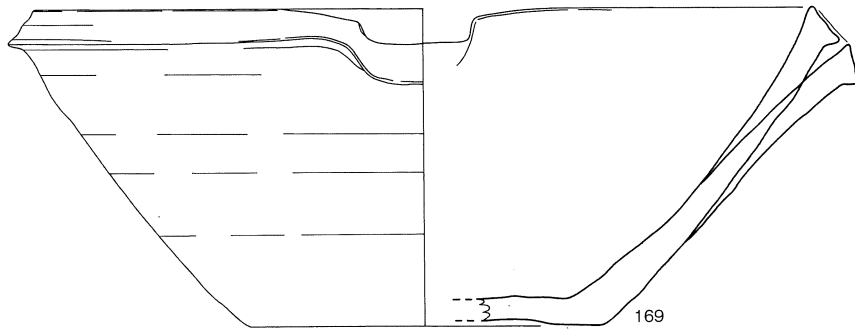
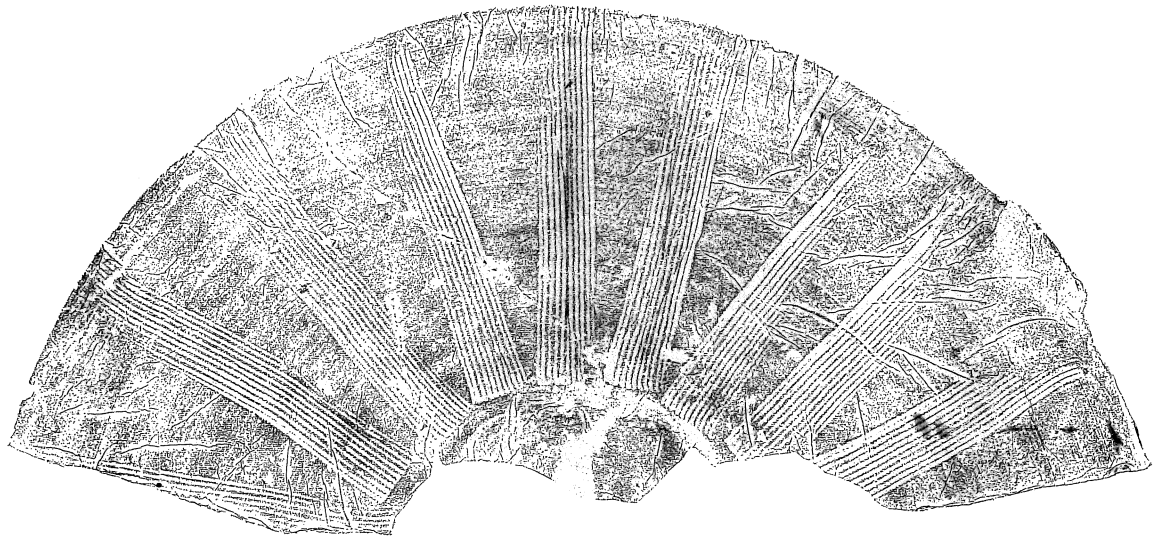
下層出土中国産天目碗

154～202は下層出土の遺物である。154は白磁の壺ないし瓶類であろう。155は中国産天目碗で、釉薬を二度掛けする。156は古瀬戸の水注の蓋である。外面に釉薬を施し、底面には糸切痕が残る。157～164は土師器小皿・小坏である。158・159・160は煤が付着する。165・166は土師器坏で、底面に回転糸切り痕が残る。167は古代の土師器高坏で、脚部はケズリで多角形を呈する。168は瓦質土器の風炉である。胴部に方形の風門を配し、内面には突起を持つ。突起部には貫通する孔を穿つ。169は備前焼摺鉢である。

170～202は瓦類である。170～173は軒丸瓦で、右巻きの巴文と珠文を施す。珠文は170・173は

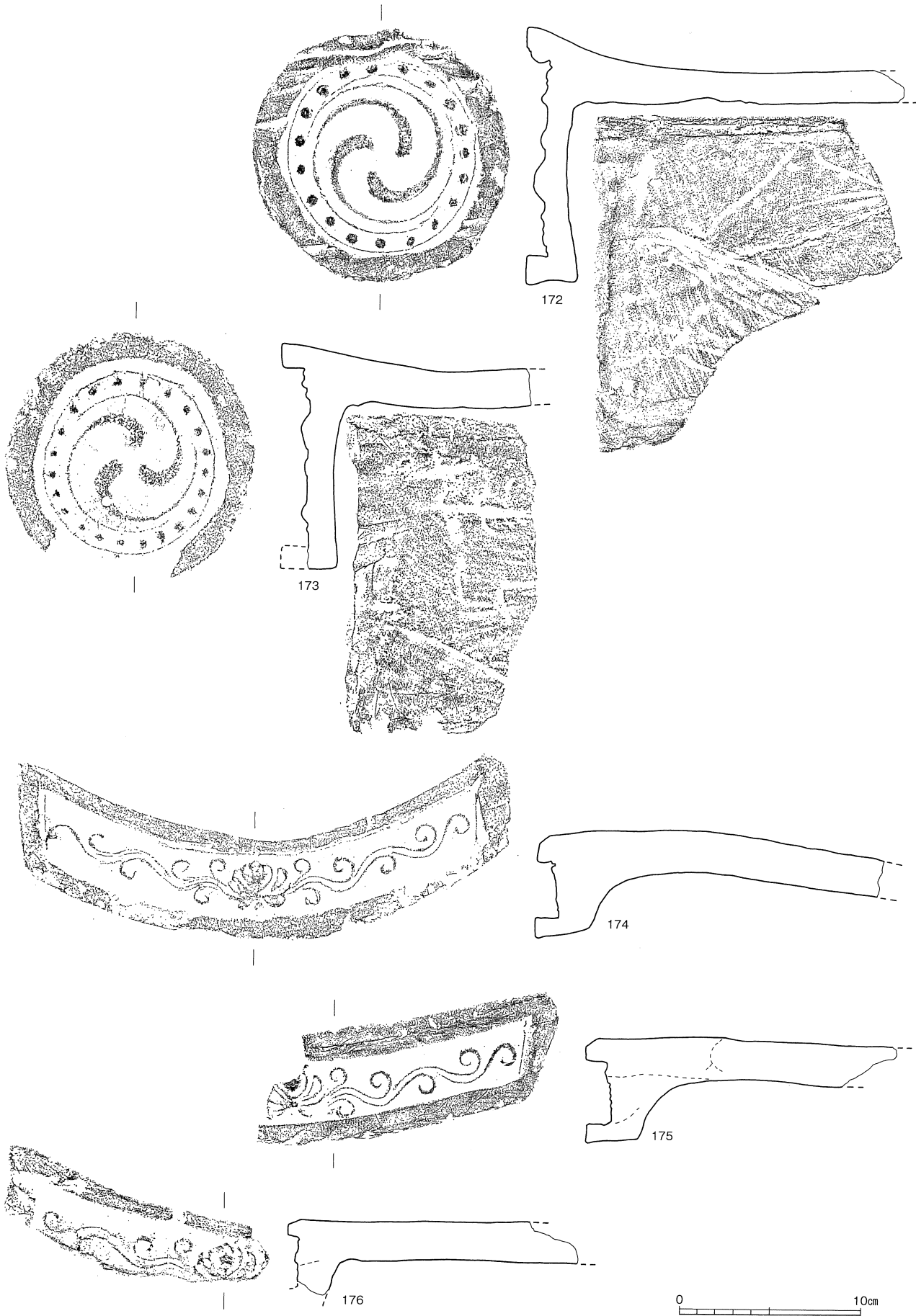


第3-232図 06-SK097下層出土遺物実測図① (1/3)



0 10cm

第3-233図 06-SK097下層出土遺物実測図② (1/3)

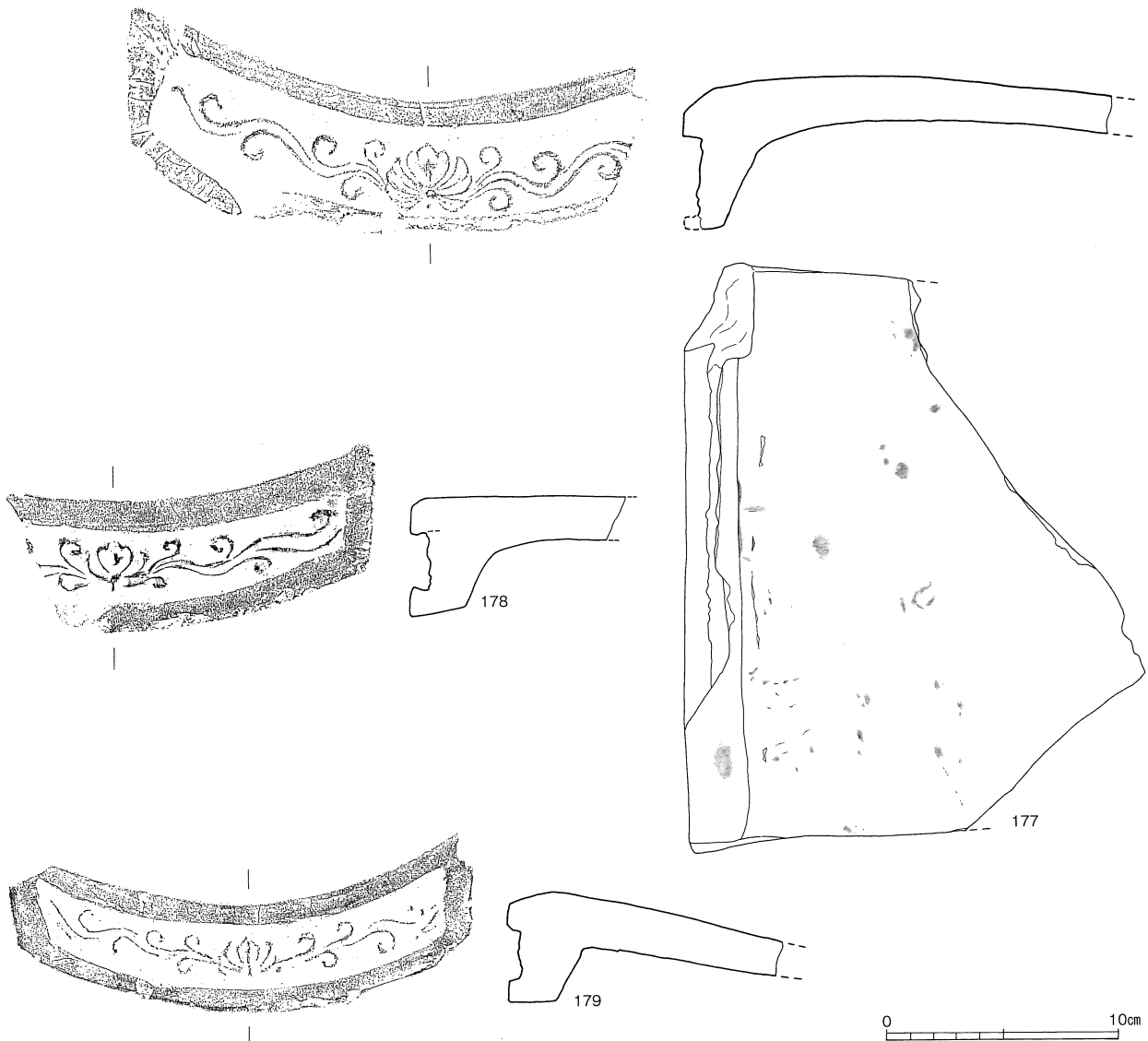


第3-234図 06-SK097下層出土遺物実測図③ (1/3)

巴部に范傷
瓦当上部に
范傷

赤色顔料の
痕跡

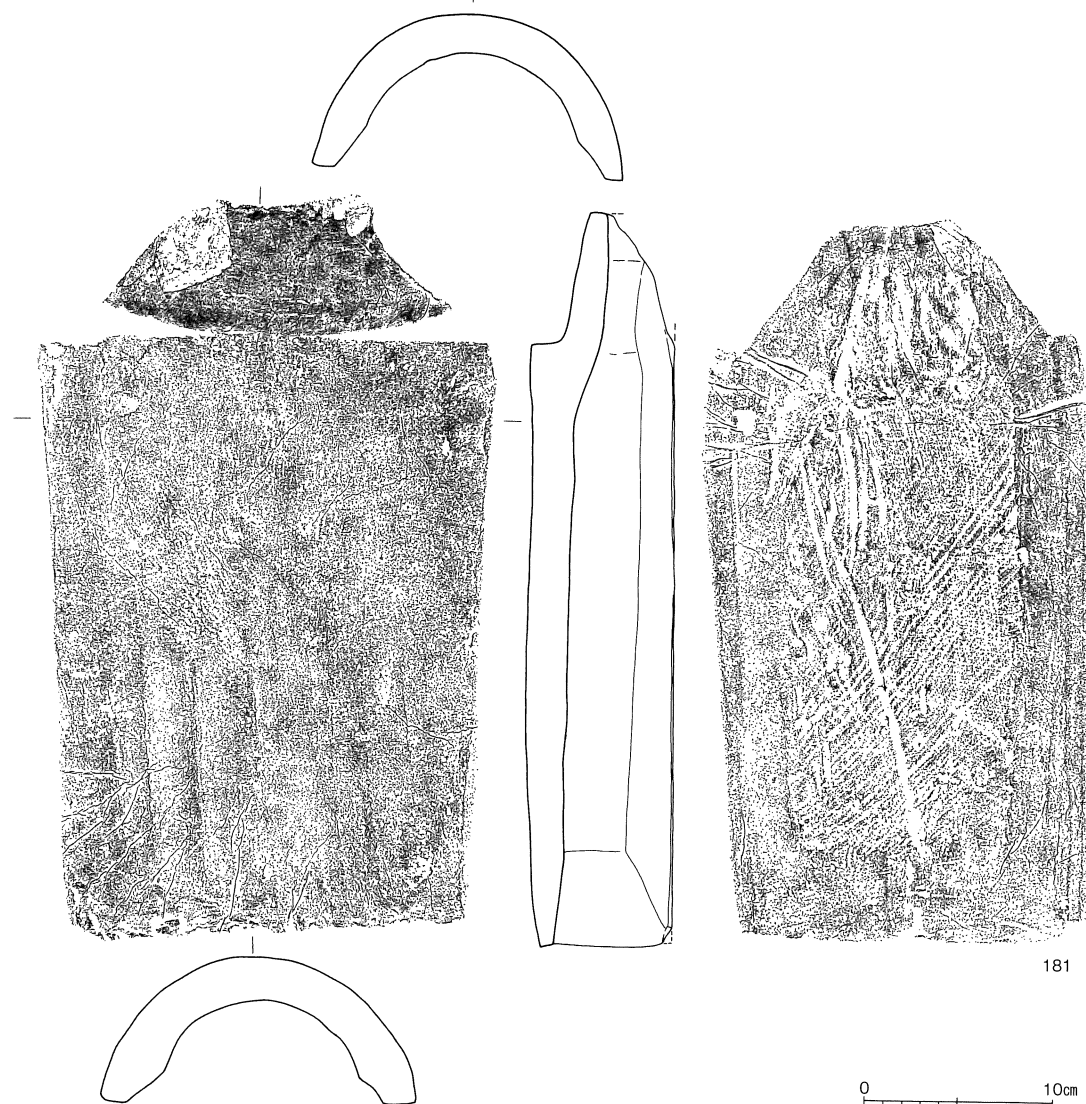
22点、172は19点、171は18点である。171は外区の圏線を持たず、巴部に范傷が残る。172は瓦当上部に范傷が認められる。170・173は被熱による赤変が著しい。174～179は軒平瓦で、瓦当面に蓮華唐草文を施す。174・176は被熱により赤変する。177は凸面に点々と赤色顔料の痕跡が認められる。178・179は唐草文の末端部が途切れている。180～195は丸瓦である。180は大型の丸瓦で、凸面に縄目タタキ、凹面に布目痕とコビキ痕、湾曲の小さい多条の吊紐痕が残る。181～191は180よりやや小さいが大型のもので、181～183は凹面に布目痕とコビキ痕が残る。184は布目痕とコビキ痕とともに湾曲の大きい吊紐痕が残る。185～191はコビキ痕がないもので、185～190は湾曲の小さい多条の吊紐痕、191は湾曲の大きい吊紐痕が残る。186・190・191は色調が赤く変色している。192～195は小振りの丸瓦である。192・193は布目痕とコビキ痕、湾曲の小さい吊紐痕が残る。194・195はコビキ痕がなく、吊紐痕は194は小さく、195は大きいタイプである。196～202は平瓦で、196～200は大型、201・202は小型のタイプである。198は被熱により赤く変色する。200は下端部に円形竹管状刺突を施す。



第3-235図 06-SK097下層出土遺物実測図④ (1/3)

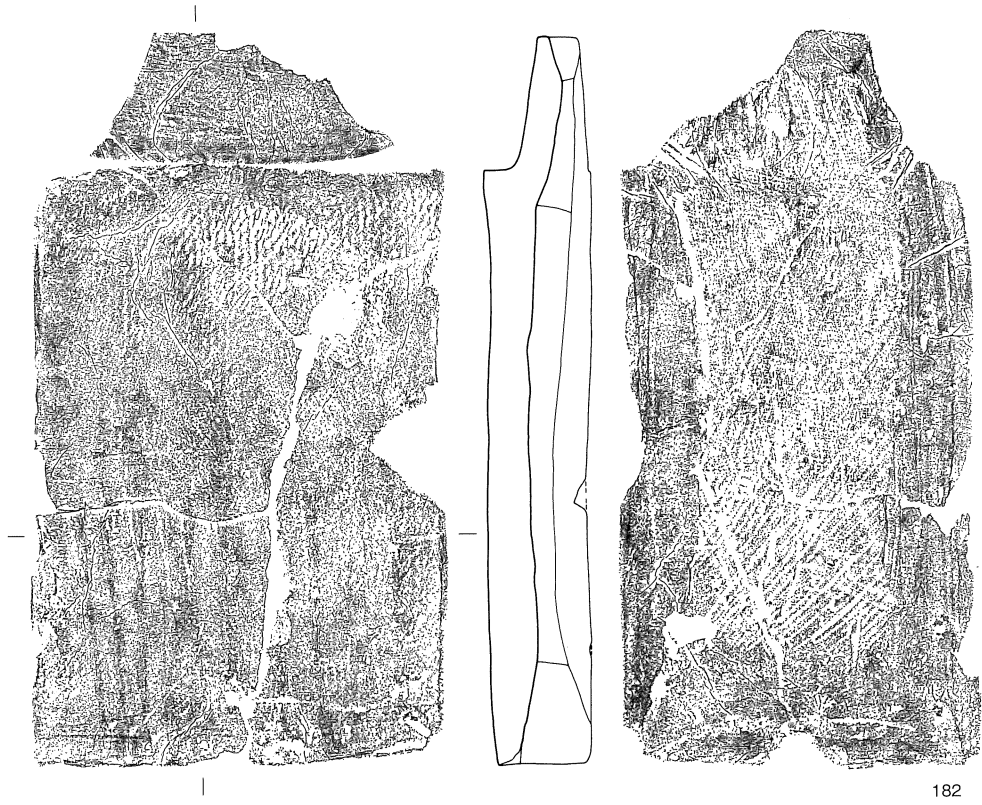


180

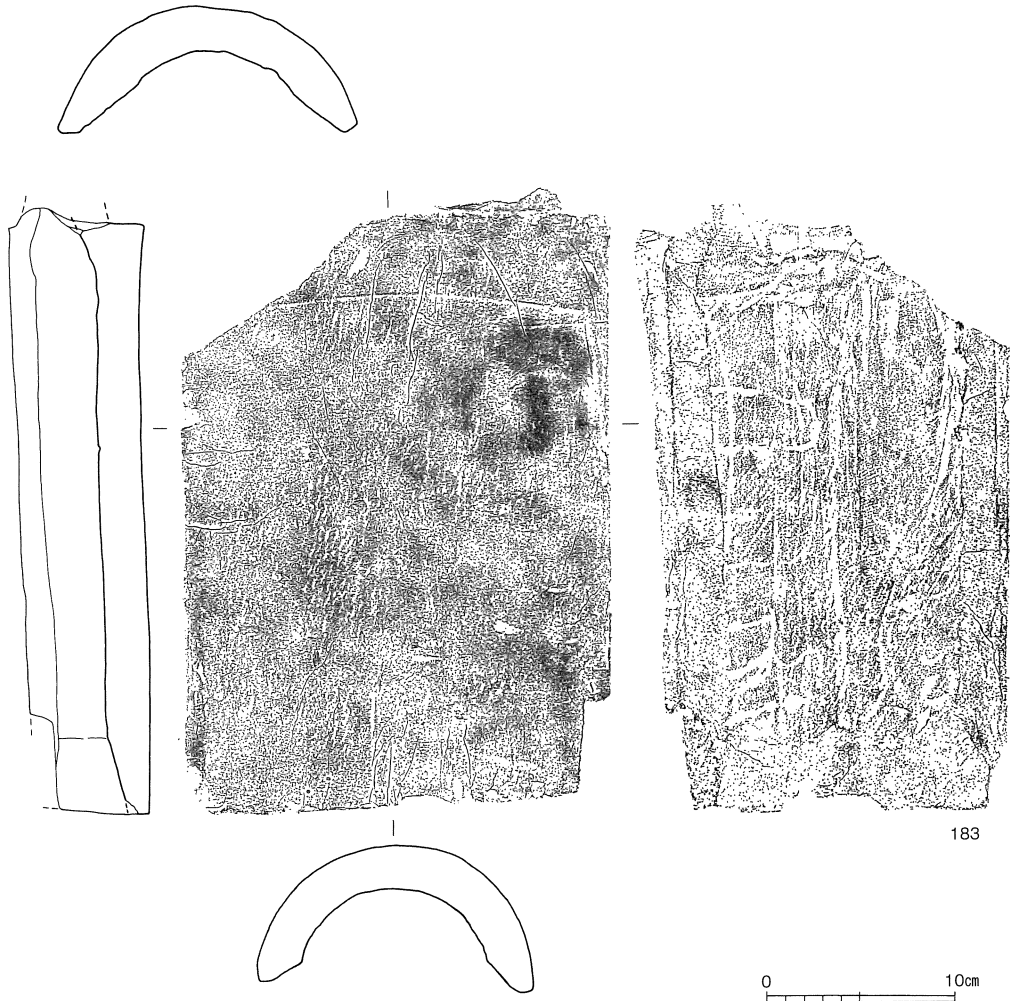


181

第3-236図 06-SK097下層出土遺物実測図⑤ (1/4)

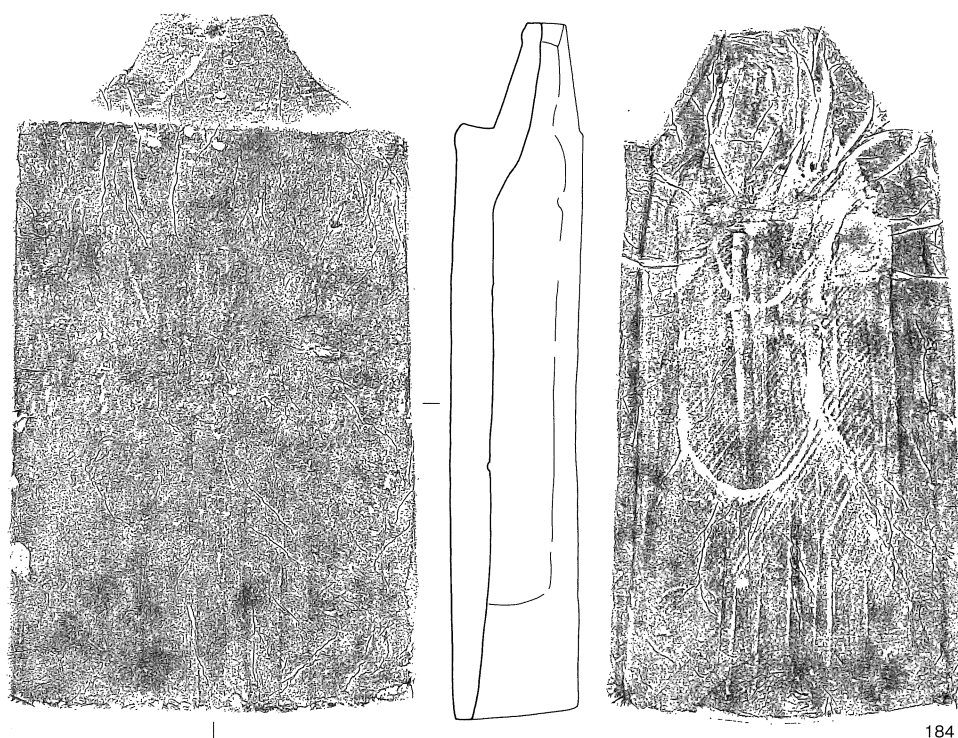


182

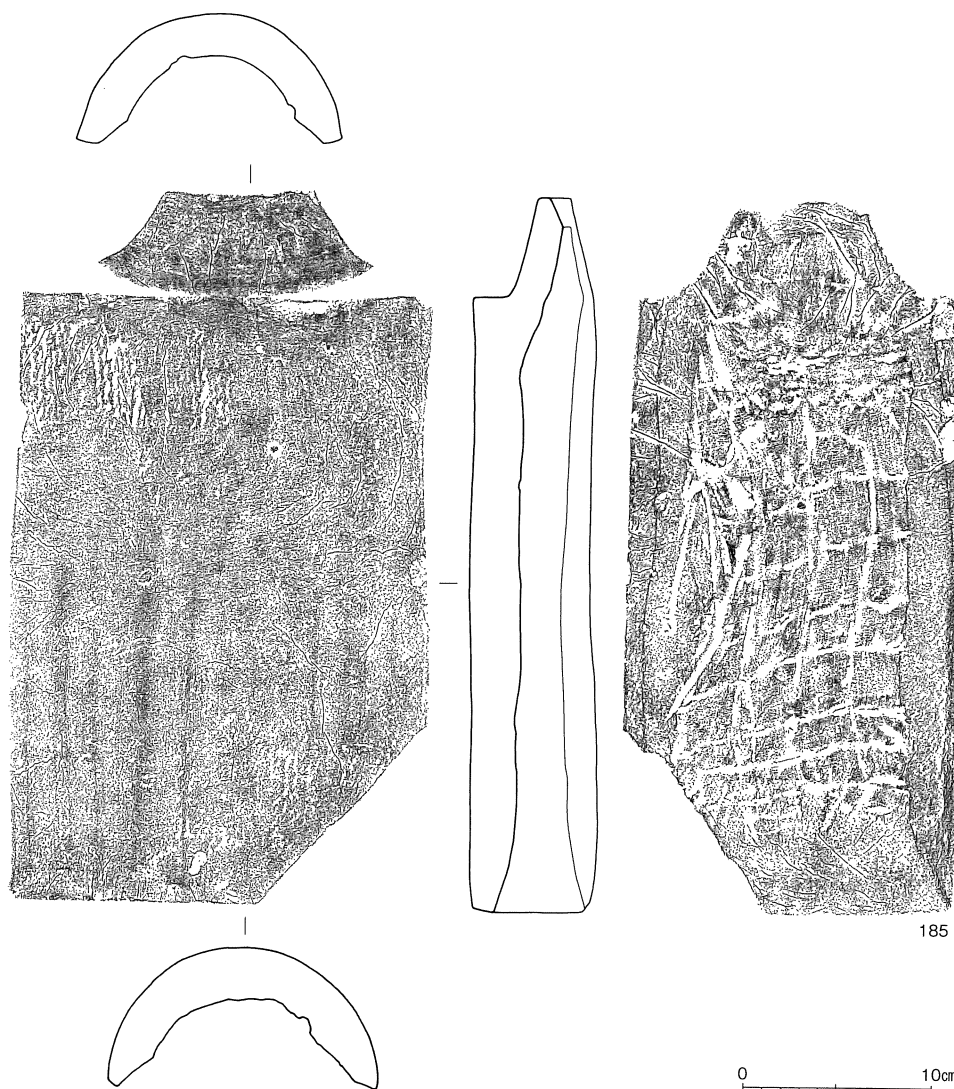


183

第3-237図 06-SK097下層出土遺物実測図⑥ (1/4)



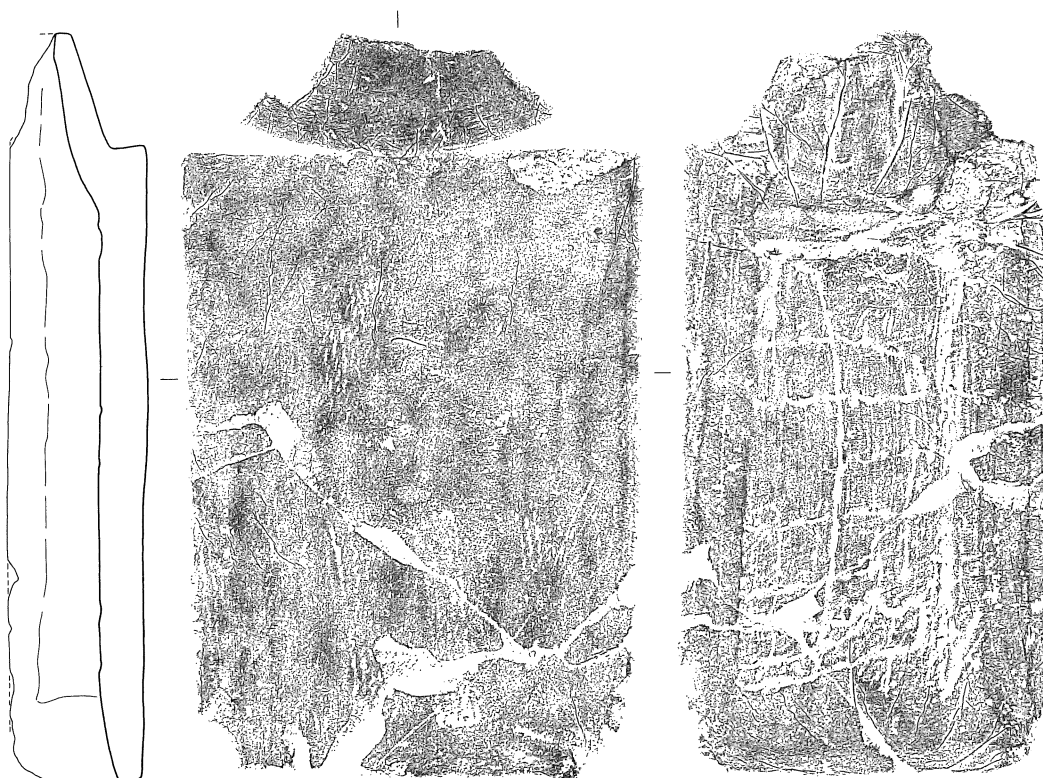
184



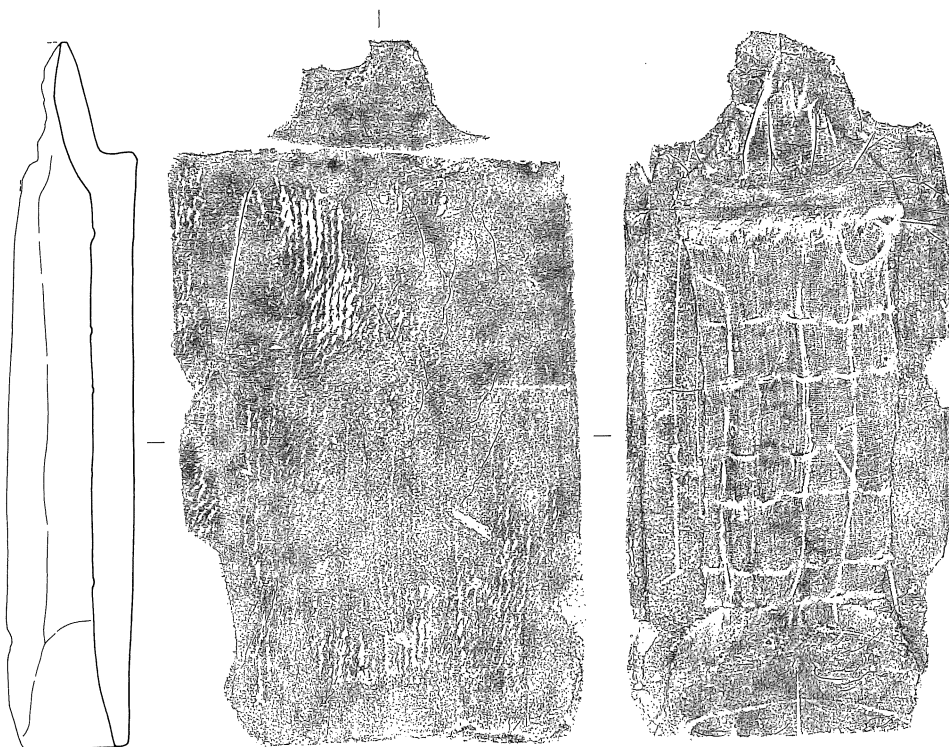
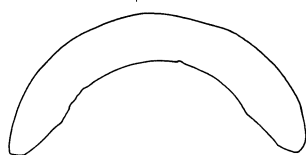
185

0 10cm

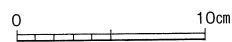
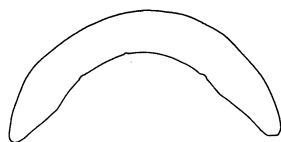
第3-238図 06-SK097下層出土遺物実測図⑦(1/4)



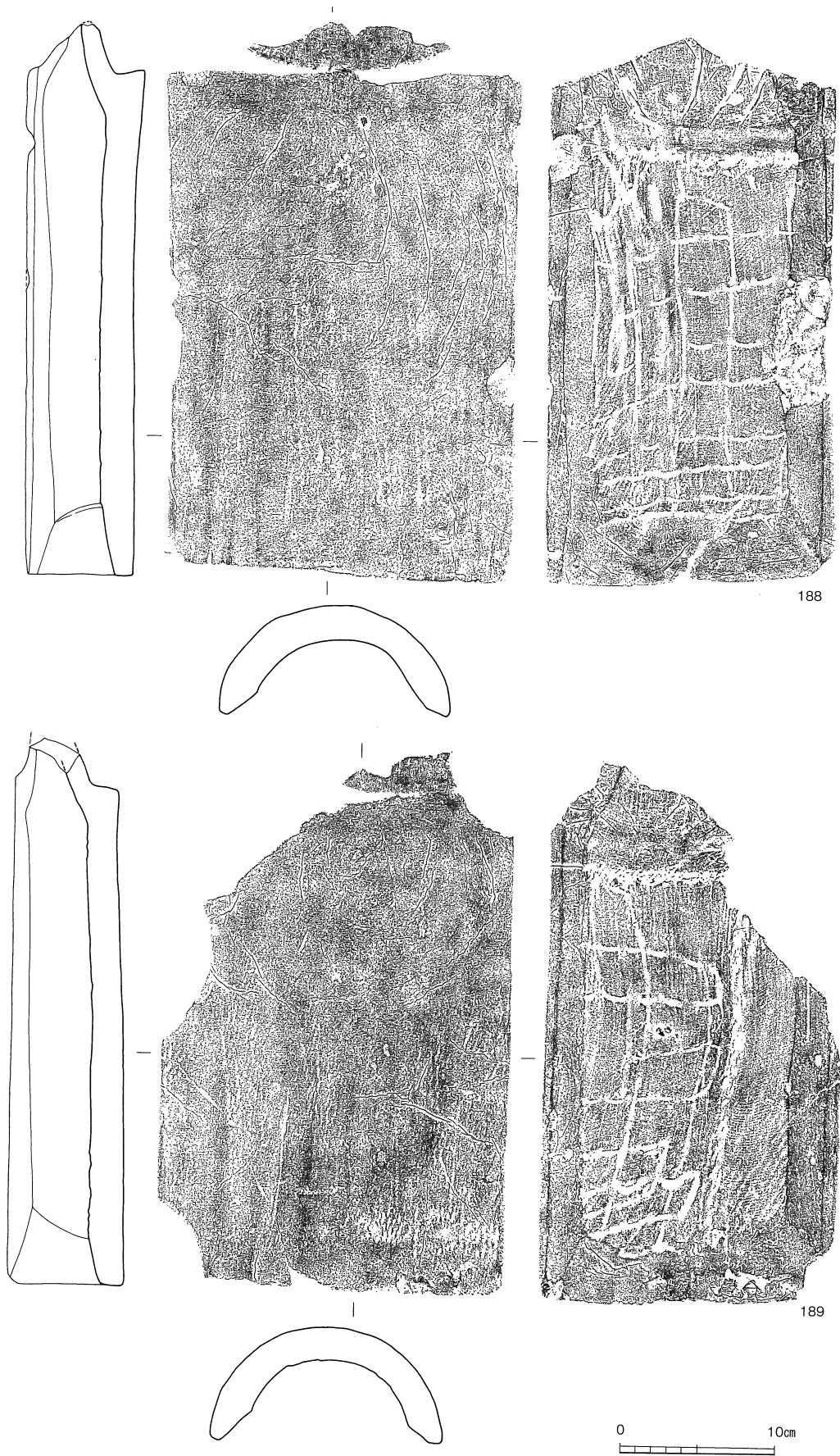
186



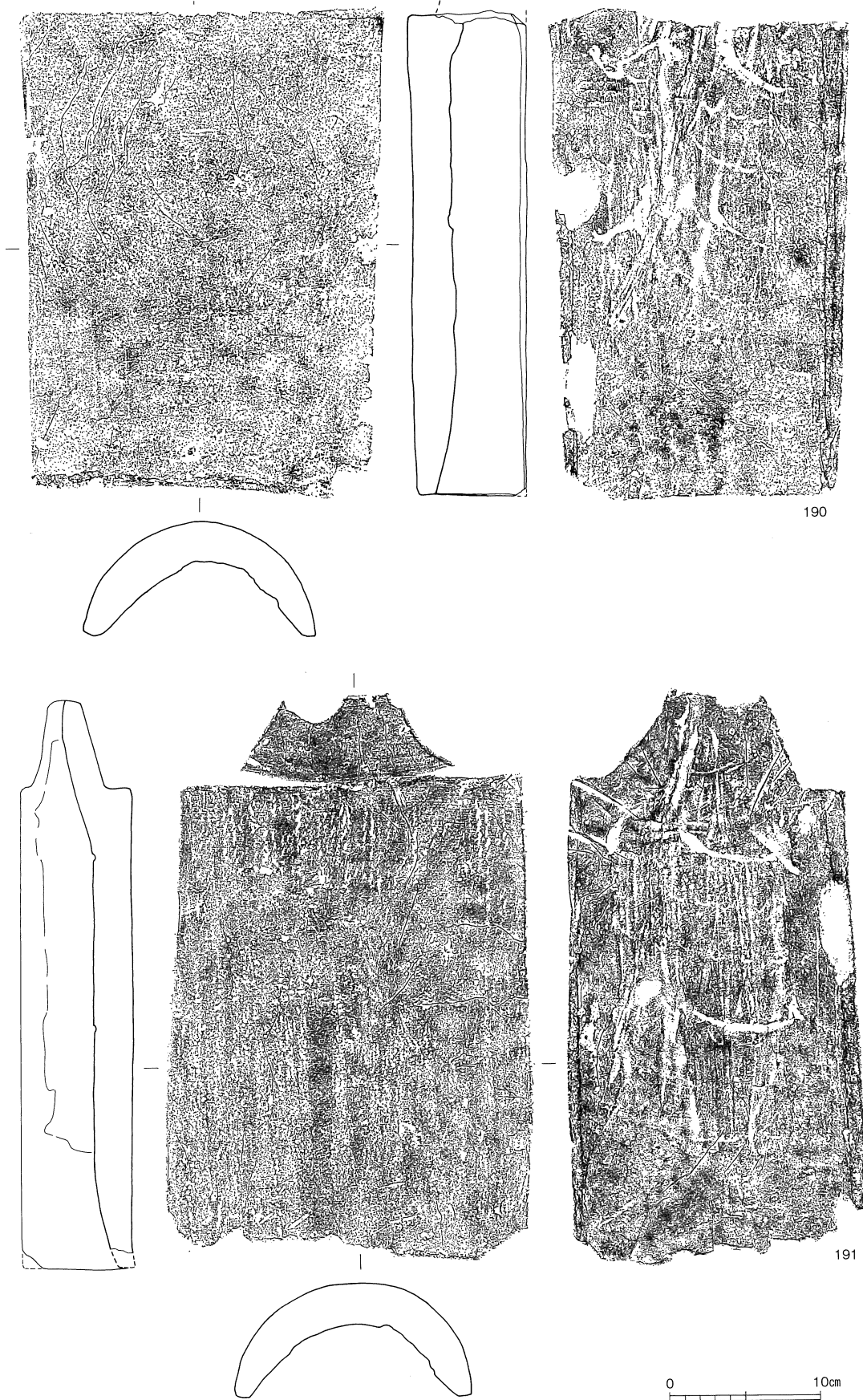
187



第3-239図 06-SK097下層出土遺物実測図⑧(1/4)



第3-240図 06-SK097下層出土遺物実測図⑨(1/4)



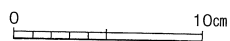
第3-241図 06-SK097下層出土遺物実測図⑩ (1/4)



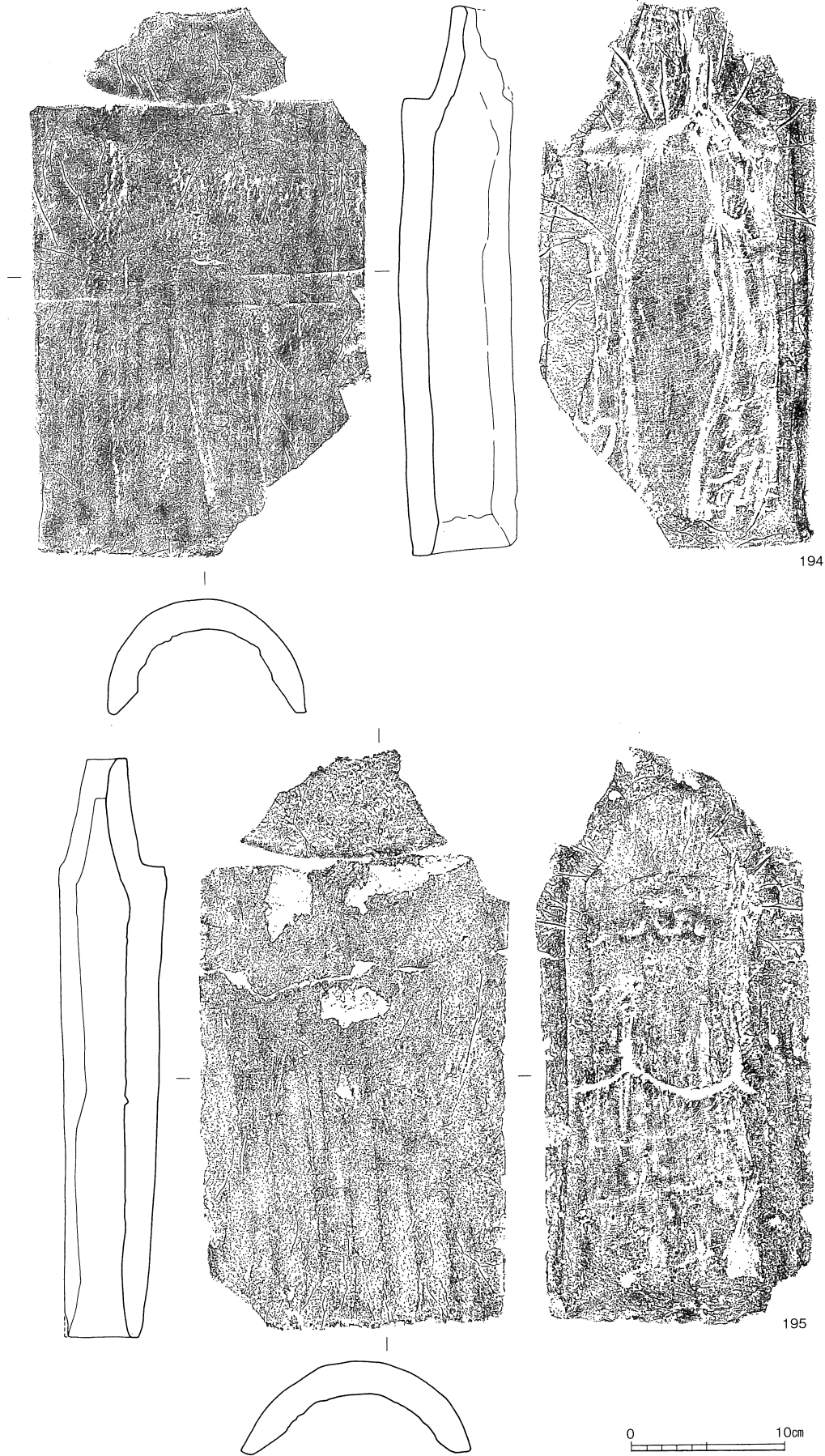
192



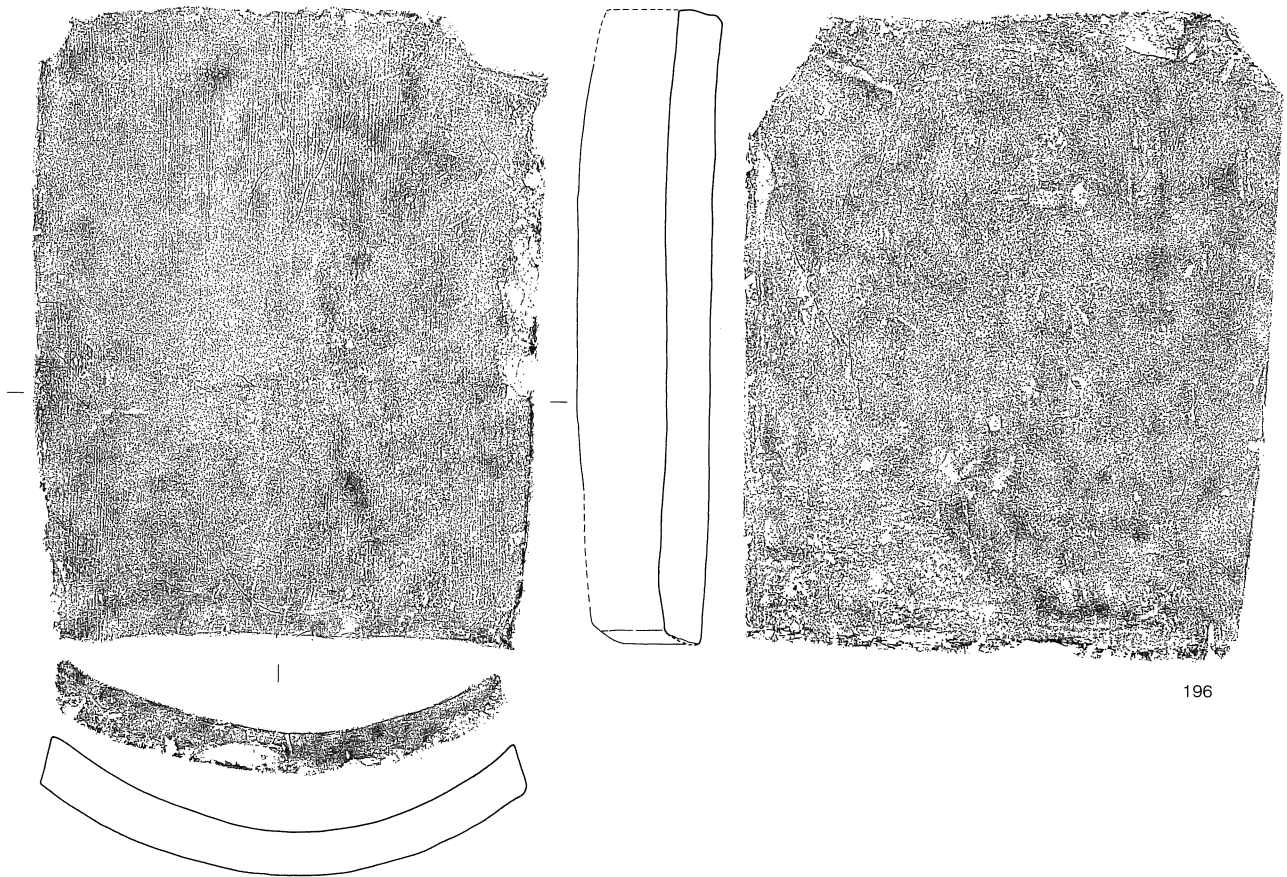
193



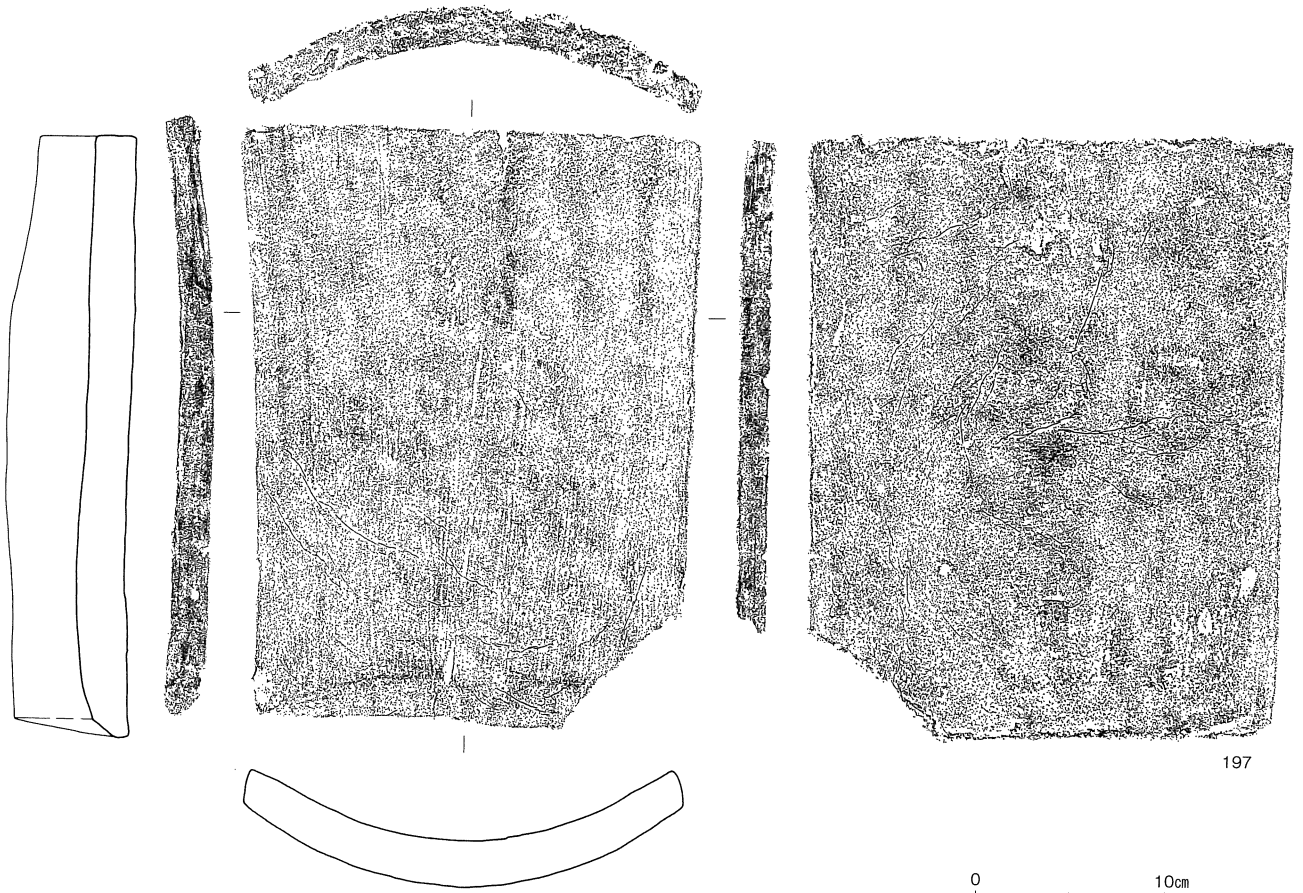
第3-242図 06-SK097下層出土遺物実測図⑪ (1/4)



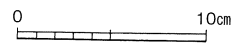
第3-243図 06-SK097下層出土遺物実測図②(1/4)



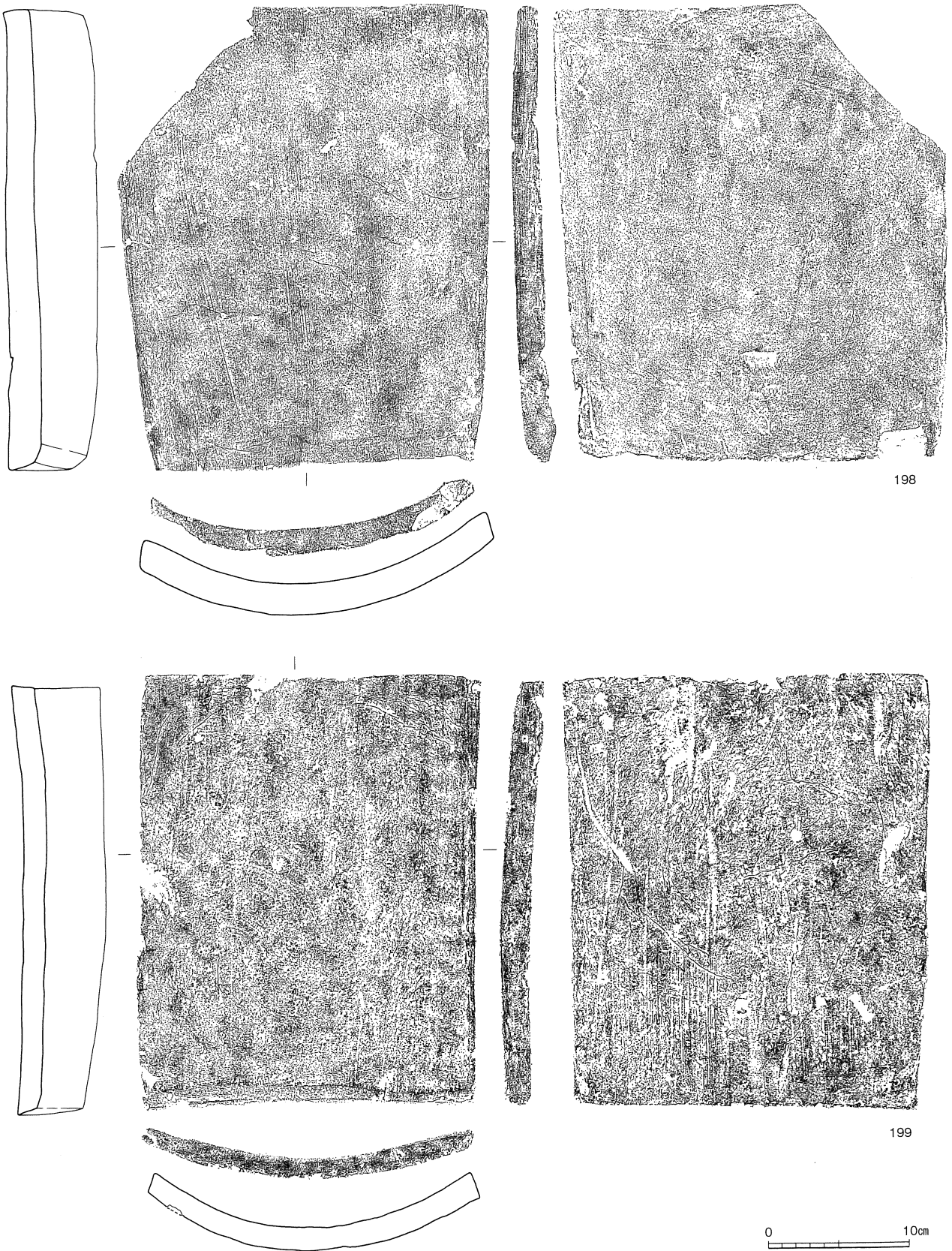
196



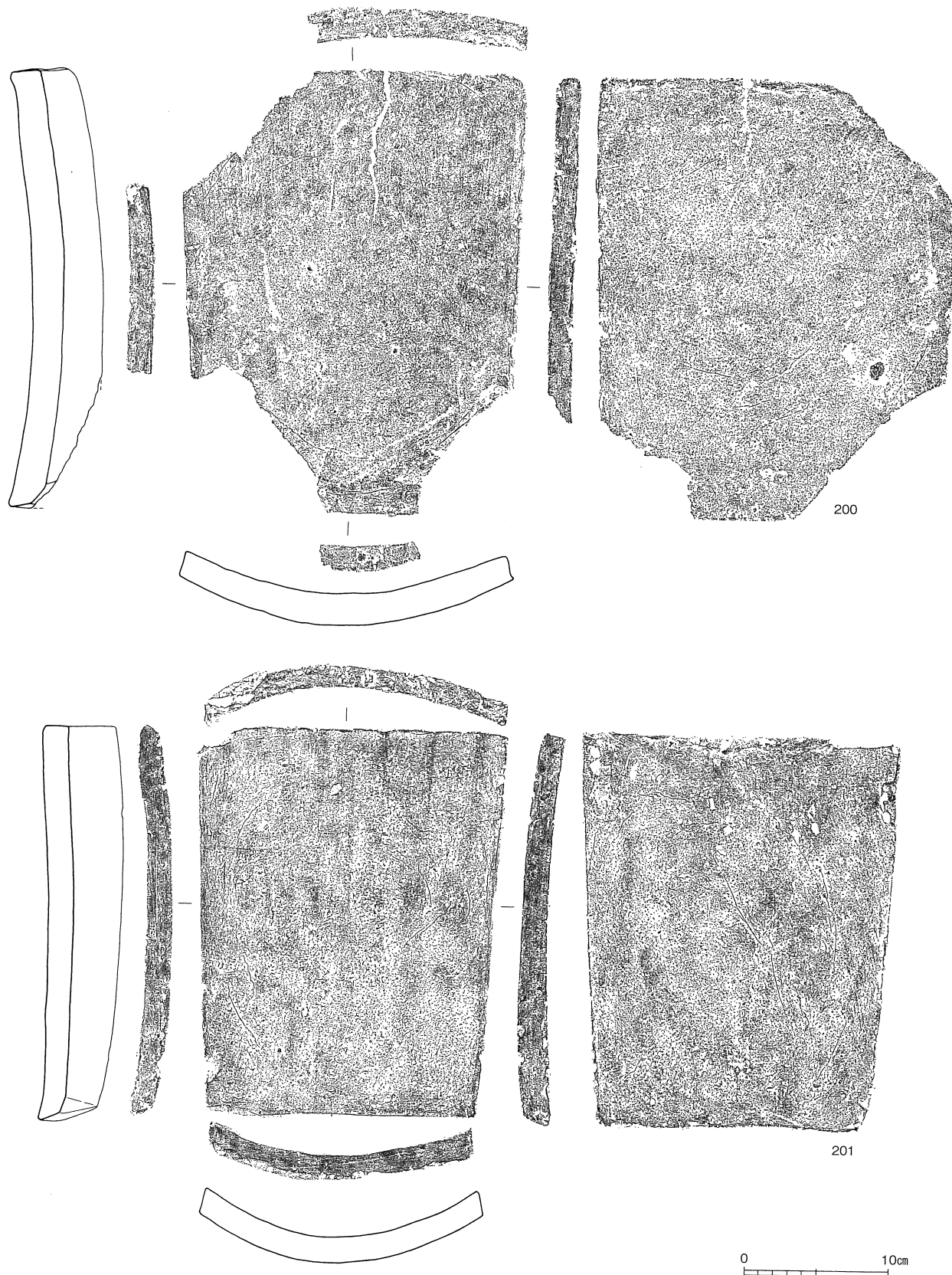
197



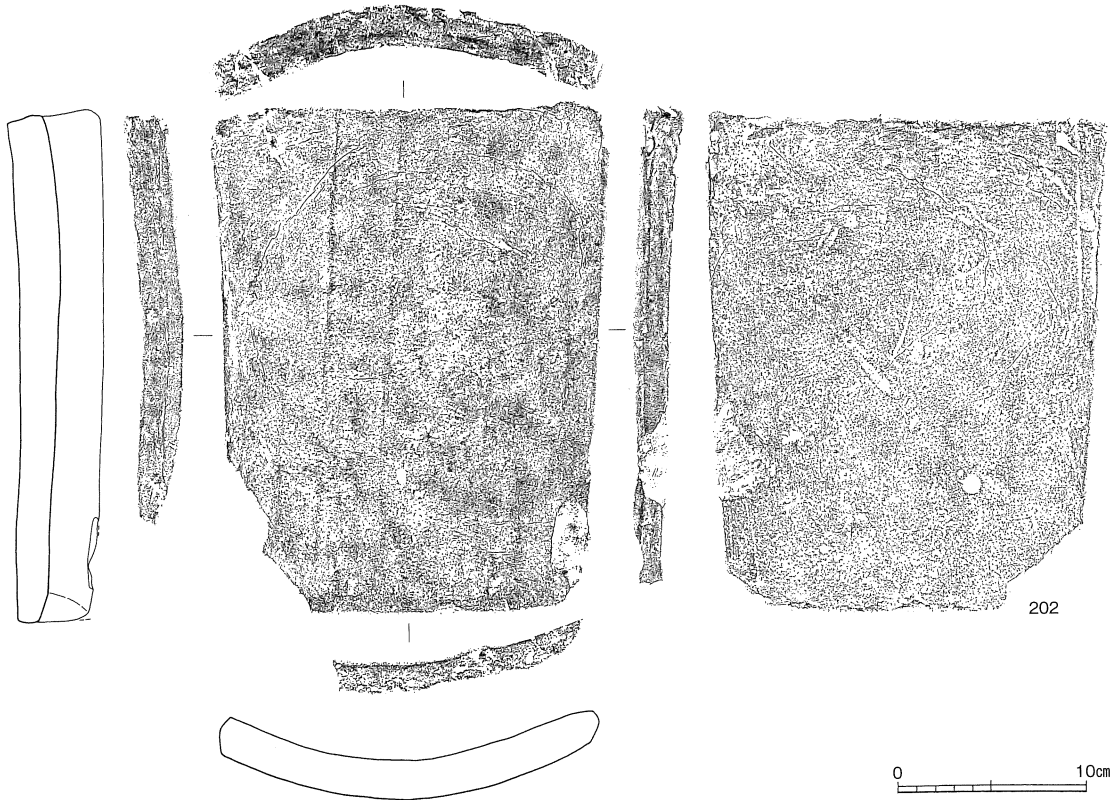
第3-244図 06-SK097下層出土遺物実測図⑬ (1/4)



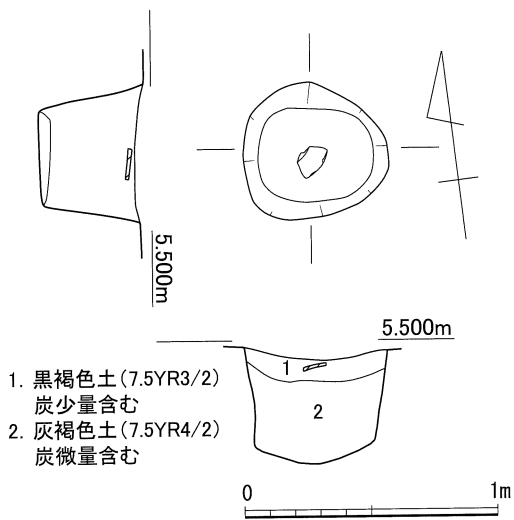
第3-245図 06-SK097下層出土遺物実測図⑭ (1/4)



第3-246図 06-SK097下層出土遺物実測図[Ⓔ] (1/4)

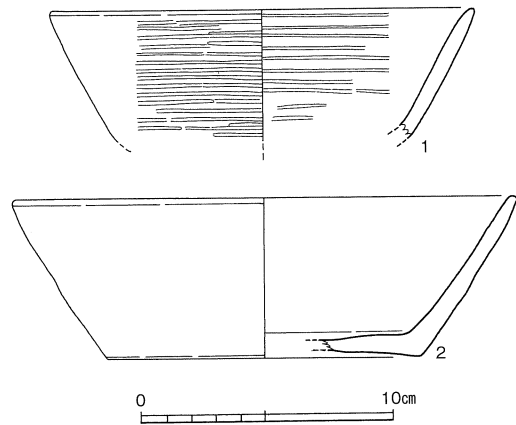


第3-247図 06-SK097下層出土遺物実測図⑥ (1/4)



- 1. 黒褐色土(7.5YR3/2)
炭少量含む
- 2. 灰褐色土(7.5YR4/2)
炭微量含む

第3-248図 06-SK120実測図 (1/30)



第3-249図 06-SK120出土遺物実測図 (1/3)

06-SK120 (第3-248図)

2区のO61グリッドで検出した土坑である。平面形状は略円形で、長径0.58m、短径0.54m、深さ0.40mを測る。埋土は2層に分層でき、いずれも炭を含む。遺物は古代の土器や中世の瓦質土器等が出土している。遺構の詳細な年代は明らかにできないが、06-SD165埋没後の遺構であり、それよりは後出する。